KAIZO

改造

八月號

1927

久米正雄著

木靴

著者の言葉

此の木靴は、吾らが愛する、シヤルル・ルイ・フイリツプの親爺が、作つたものではない。が、もとを訊せば、幾らか佛蘭西出來の匂ひが、無いとは云へない。尠くとも此の國でサボタージユといふ、一番面白い勞働運動が輸入されて、電車でさへその木靴を穿いたことがあるのだから、私がその影響を受けて、それに似たものを自ら作り、且つ悠々と穿いて歩いたとて、人は咎めはしないだらう。事實、これらの木靴は、此の一兩年の湘南の閑居で、充分怠業氣分の中に、作るともなく作つたものだ。が、元來木靴と云ふものは、さう云ふ氣持で作つた方が、面白いものが出來ると見えて、自分でも相應に氣に入つたものが、少し溜つて來たので、或ひは同好の士もあるかと思ひ、玆に賣り出して見る事にした。穿き心地はそんなに惡くない積りだ、それに、作つた時の氣持でいろ〳〵な形があるから、選り取りは自在だ。自家穿きは勿論だが、中には婦人用のもあれば、大衆向きなのさへある。形は變つて居るが、どれにも、製作者の刻印は打ち込んである積りだ。世上には、ゴム靴でなければ、此の時代に適合しないから、こんな木靴は無用だと云ふ人があるかも知れない。が、時には、まアから云ふものを穿いて見て呉れ給へ。ちよいと洒落れてゐて、ちよいとプロヴアンスの地味があつて、ちよいと古風で、ちよいと愛すべきものが無いとは限らないから。………

最新刊

◆四六判上製 三六八頁◆

定價貳圓 送料十八錢

發兌

東京市麹町區内幸町
幸ビルディング一階
振替東京八四〇二番

改造社



乳酸菌榮養飲料
CHORUS
森永
コーラス
MORINAGA CONEECTIONERY CO., LTD. TOKYO.
八百五十瓦
健康そのものを
象徴する美味さ
榮養のコーラス
八百五十瓦入
一圓五十錢

第二卷・第一號
（年四回發行）

自然科學

本號に限り
定價八拾錢・送料四錢

發行所　東京市麴町區內幸町　幸ビルデイング一階　振替東京八四〇二番　改造社

ベ・ロマシヨーフ著・昇曙夢譯

最新刊

現ソビエット露西亞の社會相を巧みに喜劇化した五幕十五場の戯曲。その痛快なる内容と、巧みな諷刺と秀れた藝術的技巧とは革命劇壇を代表する唯一の傑作と稱せらる。無産者文學、大衆藝術の一典型として我文壇にも必讀を要請すべき好個の作品也と信ず。

ソヴェート社會喜劇 空氣饅頭

四六判並製

定價壹圓二十錢

送料十八錢

「空氣饅頭」は一九二四年作者が特に革命劇場の依頼を受けて書き下した純然たるソヴエット喜劇である。革命後、特に新經濟政策實施後のロシアの社會相の暗黒面を痛烈に解剖し、喜劇化したもので、過渡期にあるロシアの矛盾した姿が鮮かに手際よく描き出されてゐる。題材は一九二三年秋に起つて内外を驚かせた國立銀行總裁瀆職事件を背景として、各種ネツプマンの陰謀、共産黨新人の活躍、新舊女性のタイプを無數に描き、激論や格闘、舞踏や宴會、新舊思想の衝突、戀愛喜劇等の波瀾や葛闘を織り交ぜ、この劇が一度上演發表さるゝや、ルナチヤルスキーを始め、凡ての劇評家は革命以來の唯一の傑作として熱狂的讃辭を惜しまなかつた。尚本書には兒童劇「羽根の生えた靴」を附す。

發兌 東京市麹町區内幸町 幸ビルディング一階 振替東京八四〇二番 改造社



淸凉美味滋强飲料
カルピス
七夕さまは
カルピス黨
わたしのおうちも
カルピス黨
花ちゃんおうちも
カルピス黨
それでみんなが
幸福だ。
カ
ル
ピ
ス

夏は何をなすべきか

夏のひと月は休むのが當りまへとされている。しかしいくたのプロ階級にあつては三日もつゞいて休めぬ人びとの數多いことも知らねばならぬ。まいにちせい一パイ勞働する人々は一合の晩酌にさへありつけぬ。まして五日や十日とまとまつて骨休みの出來ぬ身分であることも悲しい一つの存在事實だ。いまさらながら夏は何をなすべきか？のみだしはぜいたくでもつたいないかぎりである。働かぬ人は食ふことができない。働く階級がなければすべての生產は不可能である。ところが働かぬ人びとにかぎり裕福である。この夏でも有閑階級にかぎりしはうだいの馬鹿をじつくす。素朴の村々に贅澤奢侈の火をつけてあるく。淸潔純無垢の醉眼にたいはいの卵を生みつけに行く。警戒すべき夏である。それ以上に都會人には恐るべき病菌の保持者が多いことである。われらは田園へ行く人を呪ふのではない。しかし都會にそだつ人々にはたいてい人間惡のもちあはせが多いから此機において自省すべきだと思ふ。夏は田園に起臥し、ふるさとのおもひで深い山川にひたるはこよなき快事ではあるが、それより現下の問題たる支那にわたりて現實とブツつかつて出兵問題とボイコットの關係なぞを調査攻究するは趣味と實益の二つを兼ねたものである。それから日日にさびれ行く農村の生活や金融狀態を研究したらばそこに農村疲弊の實狀がまざまざと見られるであらう。三日なら三日、一ケ月なら一ケ月の休みをそれ相應に意義づけることを念としなければならぬ。一生涯を通じて勝利者となるのはただスタートの切り工合一つである。同じく書籍をよむにしても新聞雜誌のあれこれを濫讀するのは百弊あるのみ。意圖なしに精力を濫費するからすべての事業に敗れるのだ。神經衰弱になるのだ。夏はすべてを心神の鍛錬に用ふるはもちろんだが、しかしせちからい世である。何かその間に一つのしつかりしたものをつかんでもらひたい。

人は何故に貧乏するか

高畠素之

一、金が敵の世の中

人を殺すも金、生かすも金、金が敵の世の中ぢやなア……

吉右衛門の扮した梅ノ由兵衛が、肚の底から例の絞り出すやうな名調子を張りあげる。大向ふからは、待つてましたとばかり『播磨屋ア』の掛け聲がかかる。ひとしきり動揺めく間に、いまの『殺すも金、生かすも金』を口の中で繰りかへして見た。作者が南北で役者が當代の極め付き、舊主への義理や女房への人情を經緯とした一流の變態資料物だが、歌舞伎劇を單に音響學と色彩學の上から享樂し得る私は、事件の無理や内容の空疎を超越して、この對句に含まれた眞理を、今更らのやうに『成程々々』と同感したことである。

金、金、金――生きとし生ける萬人は、晝夜の別なく金の問題で大腦神經を磨滅しつつある。新聞記事を賑はす問題も、硬軟ともに直接か間接かこれに關聯してゐる。川崎造船所を生かすも金なら、失業者夫婦が三人の幼兒を殺したのも金である。下世話の諺は『地獄の沙汰も金次第』といふ。この調子では生前の苦勞を、そのまま死後にまで持ち越すのかも知れない。

人間がこれほど狂亂的に欲しがる金とは、抑もその正體は何んであるのか。金はその始め、交換の便宜のため社會的に考案された道具である。甲に取つては餘分な物だが乙に取つては不足な物を、甲に不足で乙に餘分なそれと交換するとき、物と物とを交換してゐたのでは色んな不便があるところから、物それ自體の價値を共通に表象する金

（貨幣）をつくり、彼等の欲するあらゆる物を價値の共通的表象たる金で媒介させるやうにした。これは人間社會の思ひつきな發明である。隨つて金は、人間に依つて支配さるべきものであつたが、人間の追求する價値が悉く金で代象されてゐる事實は、やがて端的に金そのものを追求するに傾かしめ、金は價値の尺度たる意味を轉じてその唯一實體たるかの如き性質が與へられ、いつの間にか人間を却つて支配するやうになつた。マンモンは斯くしてヱホバに代り、全智全能の神として人間に君臨し得たのである。

一椀の鶏の羹はもとより、一杯の芋の粥さへ、今や金なくして口にすることは出來ない。金あれば羅物や上布を飾り、金殿玉樓に贅を盡くすも隨意だが、金がなければ手拭地さへ著ることが出來ず、雨漏る四疊半にさへ寐ることが出來ない。衣食住みな金、かういふ時勢であつて見れば、金のために一錢でも二錢でも目の色をかへ、無ければ無いだけ、有れば有るだけ、お互ひに他を凌がうと狂亂するのも、淺猿しなんど嚴かなこと、まことに無理からぬ事情が認められるであらう。

されぱこそ、古來幾多の聖人傑士は、口先きだけは阿睹物などと汚穢らしく說いてゐるが、如何にして產を治むべきかを頭痛にやみ、努力、奮鬪、機敏等の積極手段はもとより、勤儉、節約、貯蓄等の消極手段に至るまで、いとも懇切に金の有りがた味を褒讃して來たのである。勿論彼等とて、必ずしも金そのものを尊貴と敎へたわけではない。しかし金のない狀態、即ち貧乏の如何に不幸にして不德なるかを說ける意味で、阿睹物的人生觀の馬脚を露出した部分も少なしとはしない。桃中軒雲右衛門はその『正宗孝子傳』に於いて、喝破して曰く『四百四病のやまひより、貧ほど辛いものはない』と。これこそ古今東西を通じての眞理である。

阿睹物でも黃金佛でも、我々の人生に取つて金の有ることは幸福であり、反對に金の無いことは不幸である。幸福を追求するのが人間の至情なら、何等の恥辱を意識することなくして『金が欲しい』と白狀すべく、そのために努力、勤勉、節約等の道德的要素を發揮し得れば、それに越した話しはない。小學校の修身教材には、これらの道德的要素をもつて殖產興業を可能ならしめた美談佳話が滿載されてゐる。彼れも人なり、我れも人なり、人と生れて我れ彼れに及ばざるはずやあらん、と緊褌一番するのも時に取つて淸涼劑とならう。だが、さういふ助言を俟つまでもなく自分の幸福は誰れでも自分が最も忠實に考へてゐる。それだけ、先人や敎師の訓話を遵奉するつもりであると否とを問はず、一様に『濡れ手で粟の四千兩』を夢みたり、『積もり積もつて塵の山』を描いたり、我れと我が身で道德的鍛錬を心がけてゐるであらう。

しかし、それにしても、世の中が餘りに世智辛らくなり過ぎたことに氣づきはしないか。『働らけど働らけど、尚ほわが暮らし樂にならざり、ぢつと手を見る』ところの石川啄木と共に、修身教材はもとより『予は如何にして……』の成功美談が、餘り荒唐無稽の繪そらごと

と見えはしないか。骨折つて足勞を儲けないまでも、いつの間にか蟻地獄に陷ちこんだ蟻の運命と同じく、次第に貧乏の深みへはまり込んで行くのを感じられはしないか。

金が世間の敵なら、どうぞ敵にめぐり合ひたい――大阪仁輪加は、頭からさういつて茶化すが、それほど世間の大多數は金に無緣な存在である。朝から晩まで、晩から朝まで、四六時ちう金の問題ばかりを考へ、如何にして儲くべきかにあらゆる精力を傾注しながら、尚ほ生活が樂になるだけの金が得られない。それのみか、かへつて釣瓶おとしに生活は苦しくなつて行く。考へてみれば、理屈にも何んにも合つた話しでないが、その理屈に合はぬところが現代生活の特徴なのである。

2. 貧乏の千姿萬態

金がないといふことと、貧乏といふこととは決して同義異語ではない。例へば金（貨幣）そのものがなくても、信用さへあれば八百屋や魚屋の臺所的取引は素より、支那の鐵鑛や印度の棉花やの商業的取引も可能である。しかし金の意味を廣義に解し、有形無形の財的價値の表象と見れば、やや『金がない』といふ概念と『貧乏』といふ概念は近接する。通俗に貧乏といへば金のない狀態、即ち必要だけの金が得られない狀態と解釋してゐるのは、その意味で必ずしも間違ひといふわけではない。

そこで今度は『必要』といふ概念を如何に決定するかが問題となる。例へば二千萬圓の財産家が三千萬圓の事業を獨力で經營しようといふ場合、差引一千萬圓は『必要』に對する不足額となるわけだが、しかし世人は彼れの貧乏を承認しないであらう。人間の慾望が無限である以上、その慾望にもとづく必要も無限に增長すべきが當然だから、いはゆる『必要』の概念にも一定の限界がなければならない。その限界は『生活に必要』なことに置かれる。

生活には肉體的生理的なものと、精神的文化的なものとの二方面がある。衣食住の問題は前者で、娛樂敎養の問題は後者に屬する。この二方面に於いての『必要』とは、抑もまた何を指すのであるか。生活を肉體の維持存續といふ絕對的意味に解すれば、人間は二千五百カロリーから三千五百カロリーの榮養價を一日に取れば十分なさうである。して見れば、文字どほりの『露命をつなぐ』ことが出來ず、普選法のいはゆる『公私の救恤』を受けなければならぬ程のものは、さう大して多く存在しないであらう。

しかし『公私の救恤』を受けないから、それで貧乏ぢやないといふ解釋も穩當を缺く。世間にはよし彼れが救恤を受けなくとも、豚の如くただ肉體的生命を維持してゐるだけの人間を貧乏人と呼ぶに躊躇しない。電氣ブランを呑み、ゴールデン・バットを喫ひ、新聞の一種や雜誌の一冊も讀み、時に劍劇の一幕ものぞく人間でも、これを貧乏人と呼びならしてゐる。單位的絕對的な貧乏人に對しては實際きはまりなき

貧乏人であるか、そんなら貧乏の標準は、比較的相對的なものと解すべきであるか。

比較的相對的といふ段になると、千萬長者に對して百萬長者は貧乏であり、月收三十圓の雇員に對して月收五十圓の書記は金持ちとならねばならない。劇場の特等席に陣取る貧乏人と、四階に辛うじて立見する金持ち――上みれば限りなし下みれば限りなし、それでも貧乏の概念は浮動してしまふ。隨つてこれを、經濟學的乃至社會學的に嚴密な檢討を下して行くなら、甲論乙駁を無際限に繰りかへすのほかなく、結局は八幡の藪知らずに陷るであらう。

そこで貧乏の定義は、ごく大まかに『人間らしい生活をするに必要な金が得られない狀態』とでもして置くのほかはない。ところが『人間らしい』といふ言葉が抑もの曲者で、文藝上のいはゆる『人間的』などと同じく主觀的に解釋するなら、これも一定の限界線がなくなつてしまふ。打水をした庭先きに下り立つて虫の音を聽く、といふやうな風流韻事はまだしも無難だが、妓樓に登り藝者末社に取り卷かれて大盡遊びをしなければ『人間らしい生活』とは思へない、などと贅をならべる奴が出ないとも限らぬ。しかしこれは、人のふり見てわがふりで、おのづからなる一定の客觀的狀態を標準とすべきである。

マルクス末流の善玉惡玉的解釋に從へば、筋肉的たると頭腦的たるとを問はず、自己の勞働力を賣つて生計するものが無產者で、地代利子等の不勞所得によつて生計するものが有產者だとある。無產者即貧乏人、有產者即金持ちとなす常識的解釋を加へれば、退職手當を復興債券にかへた古手官吏が、月額五十圓宛の利子を得て生活することが金持的であつて、頭腦勞働を唯一の收入源泉とする技師が、月額五百圓の俸給を得て生活することが貧乏的といふことになる。甚だ論理的な二元觀ではあるが、惜しいかな、事實が論理に追隨してくれない限り、彼等の人生觀はこの世に適用されない。

それやこれやを見るにつけ、貧乏か否かといふ問題はやはり、收入を中心として一定の客觀的標準線を設け、家族員の多寡や病弱者の有無等による或る程度の變通自在性を認め、然るのち『生活に必要とする金』云々の條項を適用すべきである。斷るまでもなく、この場合にいふ『金』とは、文字どほりの貨幣たる意味ではなく、あらゆる財的價値の代象としてのそれを意味する。以上以下ともこれに同じ。

3. 民の富は國の富

貧乏の意味をこれまで個人的なそれに限定して來たが、個人の集合體の單位たる國にも、同じく貧乏といふ問題が重大な關係を有たなければならない。富國强兵の理想は、東西古今の國家が例外なく掲げたところである。これはあらゆる個人の場合と同様に、消極的には如何にして國の貧乏を免かれるかの煩悶を表白してゐる。

國の貧乏は國民各個の貧乏に直接關聯する。逆說的にいへば、國民各個の富裕は國としての富裕をもたらすのである。

スミス流の國富的人生觀によれば、經濟學の目的は『一國の富と力とを增大する』ことにあるといふ。然らば、國富は如何にして可能ならしめられるか。先刻御承知のごとく、スミスは經濟上の利己心を最も自由に活動せしめることが、社會公共の福利を增進する唯一の手段だと解した。經濟上の利己心とは何であるか。各個人がそれぞれ經濟的利益を追求することである。米屋や酒屋や魚屋が、我々の家庭へ飲食を運んでくれるのは、何にも彼等が慈善心を發揮するからではない。斯くすることが彼等の利益になるから、即ち彼等の利己心を滿足させ得るからに過ぎない。我々の側からいへば、必要なものを調へてくれるのは如何にも有りがたいやうだが、それによつて彼等が利益を擧げるのだから、更めて感謝するにも當らない。かうした相互的利害關係の一致は、何等の干渉を必要とせずして社會の調和を導き、國全體としての富の增殖に結果せしめる。而も斯かる經濟的利己心は、機械器具の發見發明を奬勵し、加速度に國民的富の增加に貢獻するが故に、單り商工階級のみならず勞働階級の運命をも共に向上せしめ得る。つまりスミスとしては、貨幣を以つて秤量し得べき富の價値が人生的價値の基礎で、一國內で生產される貨物の代價を總計した金額が增大すれば、全體としての國富と同時に國福も增大すると考へたのである。

それに違ひはない。塵が積もつて山となるなら、塵が多いだけ山が大きいはずで、各個の富が全體の富を形成するのは、明白なる數學原則をおのづから示してゐる。ただスミスは、利己心の自由なる活動に全部をまかせて、外部の干渉を飽くまで頑強に拒否したが、果してそれが、國富に貢獻する唯一の方法であつたかどうかは疑はしい。が、それは兎にかく、スミスの精神を精神として發達したる近世の資本主義的生產方法が、夥しく國民的富の增殖に貢獻し、國民の物質的生活を驚ろくばかり豐富ならしめた事實は疑ふべくもない。例へば、これはいつも引き合ひに出される例だが、紡績の仕事は機械の發明以前は、一人が一時に一錘を紡ぐのほかなかつた。然るに今日の進步せる機械は、一人がよく一時に千二百錘を動かし得るといふ。この數字だけを見ても、從來に比較して千二百倍は富の生產が增加したわけで、またそれだけ、國民の物質的生活は豐富になつたと言ひ得る。『民の富は國の富』といふ重寶な論理も、如上の意味では成立し得るのである。

政友會內閣が看板とする產業立國策なるものは、むろん商工業振興策の意味なるべく、國富の增進を商工業によつて達成しようといふのであらう。今どき、國富の增進を商工業に依賴せよといふのは、まるで雨の降る日は傘をさせといふのと同じで、愚にもつかないことはこの上もない。要は如何なる商工業を、如何なる方法を以つて盛大ならしめるかに約せられる。いふまでもなく、地域的に限定された一國內は人口學的、風土學的、土壤學的等の雜多な自然條件に制約されてゐる。增大する生產品の販路と原料品の補給とは、斯くして國外に向つて開拓されなければならない。例へば英國の如き、鐵と石炭の產出に

於いて自然的に惠まれてゐた關係が、製造工業を盛大ならしめる第一の條件とはなつた。しかし、それを今日の盛大に導くためには、アジア、アメリカ、アフリカ、オーストラリア等の諸大陸に植民地乃至保護地を開拓し、この地方から原料品を仰いで加工品を捌いたがためで、製造工業と同時に海外貿易を相扶的に增大したゆゑんである。而も今や（といつたところで六七十年も前からだが）、彼等の商工業の利潤は次第に蓄積されて資本の洪水を來たし、國內に投資されて尙ほ餘分の資本は海外に投資せられた結果、製品の輸出と共に資本の輸出を旺盛ならしめ、いはゆる『日沒なき帝國』の國富は何十百倍に增加したと見られる。民の富はかくして國の富となり得たわけである。

東方侵略とか、南阿征服とか、濠洲併呑とか、彼等國民の前身には怖毛を振ふ惡辣手段の多數を發見せられる。しかしこれを客觀すれば、彼等の商才の機敏とか、堅忍の精神とか、進取の氣象とか、すべてさうした道德的要素の發揚に負ふ部分が少なくない。これに由つてこれを見る、國富は素より自然的條件に制約されるが、その一定限以上の增進は、國民の道德的要素の發揚に俟つところ多大である。勤儉貯蓄を奬勵して殖產興業を圖るといふこと、換言すれば、雨の降る日は傘をさせといふ政友會內閣の產業立國策の如きでも、如何にして國を富ましめるか、如何にして貧から國を救ふかの對策としては、頭ごなしに輕蔑してかかるばかりが能とも言へない節がある。佛國民の貯金政策なども、その有力な一例であらう。

4. 資本家でも貧乏

國富は斯くのとほり、國民の營利活動によつて增加する。しかし國富の增加は、必ずしも國民所得の平均的增加を齎しはしなかつた。スミスの樂天的人生觀によると、商工業さへ盛んになれば當の商工階級は勿論、勞働階級までそのお相伴で裕福になれる筈だつたが、事實は彼れの豫言を遙かに超越して商工階級を富ましめた割合に、勞働階級の方は總體的に大してウダツが上がらなかつたのである。

如何にして然りしか、その說明は明晚のお樂しみとするが、とにかく今日では、資本を有つ人と勞働をする人とが、截然と二つに分別したこと御覽のとほりである。資本を有つ人（資本家）は、勞働する力だけしか有たない人（勞働者）に、一定の賃銀を拂ひ一定の勞働をさせて產業を營む。これは普通の形ちであるが、もう一つ、自分では資本を有たないが、他の資本を有つ人から融通を受け、必要とする建物や機械や原料やを求め、且つ勞働者の勞働力に對し一定の賃銀を支拂つて、それで產業を營むといふ人もある。金融資本家と企業家との關係がそれで、企業家は財產を有たなくとも事業を營むことが出來る、といふことも理論上では明らかに言ひ得る。

川崎問題で被告の立場にある松方幸次郎氏は、嘗て『資本家も貧乏だ』と放言したことがある。いふまでもなく、この場合は企業家を意味してゐるが、穴勝ちパラドックスとばかりも見られない。彼等とて

相對的には貧乏人であり得る。

かうした種類の貧乏人は（變なものだが）、資本として借入れたる金に一定の利子を拂ひ尙ほ且つ一定の利潤を上げてそれを生活資料に充當する、といふ意味で一種の頭腦勞働者だといはれないこともない。杉方氏の理屈もそんなことだつたと記憶するが、假りにこの頭腦勞働者か一萬圓の融資を受け、これに對する利子を年額一千圓だけ拂ふとする。さうした場合、彼れが一千圓の純益を得るためには、彼れの事業から每年二千圓宛の利潤を擧げなければならない。もし彼れが、その事業から一文の利潤も上げ得なかつたら、利子として支拂ふべき一千圓が喰ひ込みとなり、零の狀態に對しそれだけ負がついてしまふ。また假りにまた一千圓の利潤があつたとしても、それは當然利子として入れなければならないから、依然たる吳下の舊阿蒙、早い話しが足勞を儲けたやうなものである。そこで彼れが幾らでも儲けようとするなら、少なくとも一千圓以上の利潤を上げる必要がある。そのためには機敏なる才氣も必要であらうし、經營の努力も必要であらう。けだしさうした道德的要素を缺くときは、無より以下の線に陷らなければならないからである。

商才や努力が彼れをして、首尾よく所期の二千圓を利潤に上げ得させたと假定する。しかも利子分を控除した一千圓、これは純益に相違ないから、煮て喰はうが燒いて喰はうが勝手である。といひたいが、もし彼れがこれを手品のタネに貧乏線を突破したいつもりなら、贅澤三昧に費消することは夢にも許されない。そこで一千圓をソックリ原資本に繰り入れる。一萬一千圓の資本をもつて出發した二年目の終りには、一千圓の利子を控除して二千二百圓が純益となる。三年目にはこれを原資本にまた加へ、同じことを繰りかへす六年目の終末には、最初の資本とほぼ同額に近い利潤を資本として蓄積することが出來る。玆に於いて借入金を償却し、蓄積した利潤をそのまま資本として投下するときは、四年目の終末に原資本を越ゆる利潤を收め得る。かく鼠算的に增加すれば、百萬長者たること必ずしも困難でない。などと、高柳淳之助の提灯をもつやうだが、これは若し彼れが節慾を怠つたら、といふ場合の逆を說明したもので、資本家にして尙ほ貧乏を免れんとすれば道德的の努力の必要なこと斯くのとほり、まして勞働者に於いておや、を諷したことなきにしも非ずである。

何故に貧乏するかといふ當面の問題に對し、如何にして金を儲くべきかの問題を提供するは、いささか場所錯誤の嫌ひもあらう。が、斯かる加速的なる富の集中的傾向に反比例して、如何に加速的なる社會的貧乏が相關的に作用しつつあるか、實はそれを探ねる伏線的意味を兼ねしめん老婆心に外ならない。

5. 當代の勞働貴族

自分の手に產業を經營する資力がないため、資本を有つものに對して、持ち合はせの勞働力を賣つて生活するところの勞働者は、相對的

に見て資本家より裕福なるべき筈はない。しかし、資本制生産方法のお蔭は、資本家ばかりが頂戴して勞働者がお裾わけに與からなかつた譯でもない。即ちヨリ少數の資本家の懐へばかり金が轉げこみ、ヨリ多數なる勞働者の懐から金が逃げ出したといふのではない。ただ前者の莫大なる利潤獲得にもかかはらず、後者へはその恩惠が同率に行き渡らなかつたといふに止まる。

資本制生産方法は勞働の生産率を高める。このことは、言ふまでもなく、勞働者の賃銀を高めさせる有力な條件となり得る。けだし、勞働者によつて造り出され生産物の總量が增大した以上、その分配に於いても、資本家の側に增大すると同時に、勞働者の側にも增大すべきが當然だからである。スミスが國富の增大につれ、當の資本家は素より勞働者の福祉が增大すると說いたのは、その意味から見れば單なる唐人の寐言ともいへない。ただ彼れの誤つてゐたのは、自然天然に放り出しておいても福祉が增大すると見た點である。

峻別されたる二つの社會的存在として、資本家はその利潤を增殖するため、勞働者の勞働力が絕對に必要である。これに反して、勞働者には自分とその家族の生活を維持するため、その勞働力を賃銀と交換に資本家へ提供することが絕對に必要である。必要同士の鉢合はせである以上、何づれの一つを缺いても困るわけだが、しかし『損をしない』ための必要と『餓死しない』ための必要とは、同じ必要でも必要の意味內容が甚だちがふ。一方が心理的なるに對して一方が生理的、一方が相對的なるに對して一方が絕對的、これで一匹どつかへの喧嘩には出來ようはずがない。强者と弱者とは斯くして先天的に運命づけられ、一方の征服に對する他方の服從は、餘儀ない關係として自然に形づくられるに至つた。故にもし、利己心の發動を勝手に許すとなれば、勞働生産率の騰貴によつて齎らされた全利益は、悉く强者たる資本家の手に占有され、弱者たる勞働者は、指を咬へて餓死をまつのほかなかつたであらう。ところが勞働者には、窮鼠かへつて猫を嚙むところの戰術が考案された。それは彼等の團結運動である。彼等の團結は、直接に資本家を罷業の黑手で威嚇するのみならず、諸種の勞働立法を制定せしめ、一方また消費組合等の協同組織を設立するなど、內外いろんな方法で賃銀の增收を可能ならしめ、地位の改善を可能ならしめたのである。即ちスミスの豫言した方法ではなかつたが、國民的富の增加は勞働階級の福祉にも、多少ならぬ貢獻をなし得たわけである。

マルクスの絕對的貧窮說に從へば、生産と資本の蓄積による國富の增加は、夥少數の資本貴族の手に富を集中させて、夥大數の國民を次第なる赤貧者に陷れるとのことであつた。なるほど隨所に大富豪が出現した。けれどもそれと同時に、相對的な數と所得からいつて中流階級も增加し赤貧者はむしろ却つて減少しつつある。ただ中流階級に屬する集團が、從來は小資本乃至小金持ちを以つて代表されてゐたに對し、近來はヨリ多く酬ひられる勞働者によつて代表される觀があり、その社會的性質は注目すべき價値がある。資本貴族に對するこれら勞

働貴族は、所得からいつてブルヂオアの最低部層と少しも變るところがない。

この事實は端的に、自分の勞働力を賣つて生活する勞働者と雖も、必ずしも貧乏であらねばならぬ理屈がないことを反證する。それは恰も、資本家と雖も、貧乏であり得ることの理屈と表裏してゐる。

かうした勞働貴族は如何にして出現したか。主として彼等の技術上の熟練である。然らば如何にして技術を熟練したか。生れつきの利鈍もあらうが、これも主として彼等の努力、獻身、忍耐等、お定まりの道德的要素に負ふものである。彼等にしてもし、更らに勤儉、節約、貯蓄等の道德力を發揮し得れば貧乏を免るべきは理の當然として、金持ちたることもまた差して困難としないであらう。

6. 免かれ難い貧乏

貧富の問題を中心として現代の社會事實を見れば、スミスもマルクスも、當るも當らぬも八卦なみで、嚴密に彼等の豫言が適中したといふことは出來ない。大富豪の頭數とその所得の急增、底部赤貧者の徐々なる減少、勞働貴族の漸大なる增加等、これらは彼等の豫言の當り外れを等分に表明してゐる

しかし、かうした局部的現象と別個に、或ひはそれと同時に、資本貴族と一般國民との所得は次第に開きを大にし、富豪と貧乏人との社會的運命は明瞭に分別されつつある。その意味でマルクスは、スミスに比較してヨリ正確な社會的認識を把握したといへよう。少なくとも彼れの社會的貧窮說を、一の積極的事實の表現と解釋せず、即ち勞働階級の經濟的福祉の絕對的遞下の傾向と解釋せず、資本家のそれに對する彼等の地位の相對的惡化の傾向と修正して解釋する時は、働らけど働らけど尙ほ樂にならざる一般國民の生活が、一個の必然的運命に支配されてゐることが明らかとなるであらう。マルクスはその意味で、現代に於ける貧乏の特質を摘抉したばかりでなく、その救濟に積極的な意圖を披瀝した勇者と祭り上げてよい。

筋肉的なると頭腦的なるとを問はず、勞働者（多數國民）の社會的地位の惡化は現代の資本制蓄積の傾向がもたらす當然の結果である。機械の發明による生產技術の進步は、資本のヨリ小なる部分を勞銀に轉化せしめ、そのヨリ大なる部分を生產手段に轉化せしめる。勞働者の所得たる賃銀俸給は、斯くして全社會的資本に對し次第にヨリ小なる部分を構成するが故に、たとひ勞働所得の相對的增加はあつたとしても、ヨリ大なる資本所得の增加に對する開きは、所詮かせぐに追ひつく貧乏たらざるを得ない。大廈の倒れんとするや一木を以つて支へがたし、勤勉努力等の道德的偉功もさることながら、この明白なる社會的傾向に對しては手の下しやうもない。兎と龜の競走なら、兎の晝寐に萬一の僥倖を期待されぬこともないが、汽車に乘つて寐てゐる兎には勝つべき目算を立て得ない。それほど資本家の利潤は、懷手をしてゐても轉がり込んでくるものなのである。

卑近な一例として、さつき引き合ひに出した『貧乏な企業家』の登場を望みたい。彼れは六年にして最初に借り入れた一萬圓を償却し、更らに六年間で蓄積し得た一萬圓を以つて同じ事業を開始したところ、一四年にして原資本と同額以上の利潤を蓄積することが出來た。更らに

尙ほ十年、二十年と繼續して行く時に、原資本に對する何十百倍の利潤を得るのである。そこで問題は、かうした利潤が如何にして生れたかに向けられねばならない。

資本には元來、建物や機械や原料などの如き物的條件に投ぜられるものと、賃銀として勞働者に支拂はられるものとの二部分がある。前者は暫らく別問題として、後者の資本はそれ自身に於いて價値を增殖する。なるほど、資本家は一日分の勞働力の代金として、一日分の賃銀を勞働者に支拂ふ。しかし勞働者の受けとる賃銀は、彼れが一日の勞働によつて增殖した價値に等しいものではない。勞働者の一日分の賃銀は、大小いろんな條件によつて左右されるが、結局のところ、勞働者が一日分の勞働力を造り出す費用、卽ち勞働者の一日分の生活費によつて決定される。資本家はそれだけの賃銀で勞働者を一定時間『買ひ切り』にし、その勞働力を生產上に發揮せしめる。勞働力の發揮は價値の生產であるから、或る一定時間內に、支拂つた賃銀を回收するに恰度相當した價値限點に達する。これマルクスのいはゆる『必要勞働』の概念であつて、資本家が投下賃銀を回收し、勞働者が生活費を造り出すに『必要』な『勞働』だといふのでこの名がある。若しこの限點で生產を打ち切つたら、資本家も勞働者も五分と五分、損にもならなければ得にもならない。が、根が『買ひ切り』であつてみれば、資本家としては更らに勞働者の勞働を繼續せしめるであらう。假りに全一日の勞働時間を十二時間とし、必要勞働の限點を六時間とすれば、差引六時間は資本家のための餘剩勞働であり、この時間內に造られる價値は『餘剩價値』である。資本家の收得する利潤とは、斯かる餘剩價値が具象化されたものに外ならない。

ところで社會の生產は、今もいふとほり不斷に進步發達して一瞬も停止することがない。それにつれてヨリ精密な機械、ヨリ宏大な建物、ヨリ多量な原料、ヨリ多數の勞働力を必要とする。外部との競爭に負けまいとすれば、ヨリ高大なる資本を用意しなければならない。斯くて資本家は、絕えず收得した利潤を資本として蓄積することに腐心し、反面にそれだけ、勞働者に向けらるべき賃銀部分を削減せんと苦心してゐる。一日分として必要な勞働者の生活費が、かうした『餘儀なき事情』から『必要』の程度を遞下し、次第に貧乏の暗影を濃厚にすることは否定すべくもない。

現代の貧乏は正に、働らかんとする意志はあつても働らくべき仕事がなく、働らくべき仕事があつても、必要なだけの賃銀が得られない狀態から導かれる。勤勉努力は素より彼れの貧乏を緩和するであらう。しかし、勤勉努力が資本家の利潤には確實に貢獻するとしても、それが彼れの所得の增收を、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。節慾貯蓄にしても然り、せつかくの臍繰りが隱匿社の救濟などに流用され、再び我が身に對する、、、、、、、、、、、、、、、ると聞いては、天に向つて唾でもしてゐた方が未だしも無難であらう。これ『稼ぐに追ひつく貧乏』でなくて何ぞや、などと憤慨しても始まらないほど、現代の大多數的貧乏は不可抗的な社會的必然を反映してゐるのである。

然らば貧乏は如何にして退治去るべきであるか――これは野暮に駄足をつける必要もあるまい。

認識の獨立と大學に於ける社會科學的部分

杉森孝次郎

一、大學と社會科學

學生對學校、學校對學生の問題が目下日本の社會に發達しつゝある。大學を中心として、及び大學內の社會科學的部分を中心としてその問題の發達は殊にいちじるしい。そしてこの問題は現代に於ける社會科學の方法論の未發達を直接に反映する。

物質科學の方法認識は一と先づ確設された。實驗の位置の社會的設定が即ちこれを意味する。學の方法は實驗によつて代表される。實驗の自由の有無が學の成否を決定する。物質科學の世界に於てはその自由が成長した。その結果として、物質科學そのものは發達した。社會科學の世界に於ては、しかるに、學を可能にするために最も必要なもの即ち實驗の自由がない。その結果として、社會科學の發達の現代に於ける到達は、物質科學のそれに比して、有に比された無に近い。

物質科學の世界に於ける實驗的方法――勿論これはそれの社會的自由をその歷史の初期に於て先づ必要とした――の發達は物質科學そのものの發達を無限的に促進し、自身の誕生後五百年前後にしてその母胎たる道具時代を超脫して機械時代そのものを生んだ。機械は生活を社會化する必然力だ。產業革命以來、かくして、生活は空前の能率に於て社會化した。進步的社會に於ては、その過程は今後なほいよ〳〵進むほかない。生活の既成的及び可能的社會化は道具時代が育成した單純個人主義の時代的不適化を必然的に構成する。機械時代は社會主義的個人主義を必要とする。善き制度を持つことが機械時代に於けるいかなる一人もが善く生活し、善く行動するための絕對必要的一方法だ。制度研究を中心として社會組織、社會行動、社會心理一般の研究は機械時代にとつて最も必要な一行動だ。純眞にして正當な用語法にしたがつた社會科學は勿論その研究そのものを意味する。

社會科學の發達、したがつて研究は現代に於て實に劃時代的、新紀元的一必要だ。實に、それの或程度までの成功が實現されない限り、既成の物質科學はそれの社會的價値を十分に發揮することができない。それは、その限り、社會にとつて有益的によりも有害的に、人

間にとつて解放的によりも拘束的に、自由と文化と幸福にとつて建設的によりも破壞的に作用する場合さへ必然生ずる。そればかりではない。物質科學の發達を反映する機械の發達は救世手そのものだが、發達した機械の手からしてのみ全社會の十分なる有産化及び有閑化は科學的に確實に期待しえられるのだが、その物質科學自身の現代以上的發達は、社會科學の發達を先づ實現するでなくては不可能な狀態に現にある。物質科學の發達は、社會科學の不發達ゆゑに行きづまつた。工場が失業者の發作を恐れて新機械を欣求しない現實を考察せよ。失業が恐ろしいわけは、失食が勿論困まる事だといふにある。しかしながら、失業と失食との間なる因果關係は制定法を條件とする必然であつて自然律そのものの一部ではない。法律と慣習をさへ或しかたに改定すれば、失業はしたが失食はしないといふ現實は立派に成り立つ。社會科學の不發達は制度の不發達の原因だ。制度の不發達が現代の不幸い原因だ。社會科學の發達に對する時代的、社會的必要は絶對的に確實だ。

社會に於ける大學の存在理由が、既成文化の保存だけを內容とせず、すこしでも新文化の創造を內容とするならば、その限りに於て、現代の大學は、殊にそれの社會科學研究的部分に於て、いま述べた通りの時代の必要を强烈に反映しないことはできない。その必要は大學のその部分に於て最も十分に意識化されてこそ事の當然態だと斷言することができる。最近の一傾向に屬する大學及び高等學校、專門學校等に於ける學生對學校、學校對學生的形式の不安、緊張、爭議は、勿論それの或種類、しかも最も意義多き種類を目しての話だが、ともかくもさうした社會的意義を示す。

物質科學の世界には實驗の自由がある。例へば化學の場合ならば一つの假說は實驗室内に於て客觀的に肯定または否定される。社會科學の場合に於ては、實驗室は社會そのものであり、實驗的方法は制度改廢であるほかない。しかしながら、社會そのものは社會科學者のための實驗室たることを許容しない。制度改廢は社會科學者の實驗的方法としては機會を與へられない。實に、社會科學者の假說が輿論化するか、革命を成功的に企て、遂げるかの場合を除いてはだ。

現存の制度は或假說が自身のための實驗を享樂しえたかたち、なほ享樂しつつあるかたちだ。さうするならば、進步的假說だけが實驗を享樂せず、したがつてその享樂を多少性急的に求める心理的位置がその進步的假說を中心として發達する可能が避けられないわけだ。社會科學的世界に於ける研究行動が、進步的假說が關する限り、多少制度改廢的行動を伴ふことは、單純なる學問的興味からしても決してありえないことではない。

實驗は實に、或ものをそれのすでに與へられたる環境下に觀察するにとゞまらず、進んでそれに或新環境を與へ、それがその新環境下にいかなる在りかたを示すかを見ることによつて、そのものの本質を一層完全に知ることだ。實驗をまつて、それゆゑに、研究對象物の秘藏的所有が社會的認識の內容化する。この關係は、一つの假說そのものの眞價を證明する場合にもある。

一人か、または一集團か、かれまたはかれらの社會科學的興味の世界に於て進步的意見だと自信する思想を有するならば、そしてそれが

制度改廢に關するものであるならば、單なる認識完成、認識社會化の興味からしても、その方向に多少の行動が發展することは、反省的否定力が加はらない限り必然であるし、認識以外の一層行動的な興味からしては、それは結論的には絶對的必要であるのだ。

二、學生心理と幹部心理

學生と幹部との間には年齢の差がある。學生は二十歳前後から二十五歳前後だ。幹部はその二倍前後乃至それ以上だ。多くの場合に於て、學生の關心は數年、十數年、數十年後の社會に存し、幹部的年齢者の主要興味はその半分乃至それ以下の期限内の社會に存する。

幹部的年齢者から見れば、學生はユトーピアンだ。學生から見れば幹部的年齢者には理想がない。幹部的年齢者は、主觀的には、すくなくとも健全にして優秀なる常識の所有者だ。學生は眞理と正義と創造の使徒だといふ自覺を容易に構成する。この兩者を構成要素とする一結社が大學だ。勿論、重要なる一要素として教授、講師團がある。この團體の或部分は同時に幹部團に屬する。しかし、その團體内の或部分は心的組織に於てむしろ學生に近く、あるひは幹部心理と學生心理との中間心理の所有者だ。

幹部は經營者だ。經營が要する一つのものは錢だ。官學の場合にあつては、その經營者は國家もしくはそれの直接延長的一部分だ。官學の財政は現存國家財政の一部だ。この一事情のみからしても、官學の經營者の心理が、すくなくとも經濟秩序觀が關する限り、またすくなくとも責任ある意見表示が關する限り、現制に對する根本的にして急進的な改作を必要とする種類のものでないことだけは確實だ。

私學の財源は寄附だ。月謝以外の財源を代表するものとしてはだ。現代に於ける寄附應募の優能者、有力者が現存の經濟秩序に對する根本的にして急進的な改作意見の所有者でないことは、通則的にはすくなくとも、確實だ。私學の經營者が、すくなくとも責任ある意見としては、經濟秩序に對する根本的、急進的改廢主義者でないことは、すくなくともその急進的を無條件的に意味する限り、この一事情のみからしても推斷される。基金組織、財團制度そのものがまた文字通りに資本主義の一部であることはいふまでもない。

官學にとつてもさうだが、私學にとつては殊に直接的に、卒業生の就職が一大關心を、すくなくとも現代の代表的私學が關する限り、構成する。經營者に於てこの關心は最も不可抗的だ。しかしながら、就職の市場は會社、役所、學校等に代表される。現存の經濟的、政治的等の秩序に對する急進的改廢思想の所有者をその市場が需要しない可能は十分だ。私學が現制にもとづく特典、免許狀の類を意識的に棄權いな拒否してかゝる特別のものでない限り、また卒業生の就職を一般的に全然目的のそとに置く破格のものでない限り、その經營者の心理は或程度に保守的たらざるをえない事情的必然がある。

現存の私立大學が通則的に示すやうな種類の寄附依賴制と、卒業生の就職確保意思とを一面に於て必要とする事實上の立ち場からして、その教育上の方針と具體策のみを絶對的に自由にすることは無責任だ。その經營者にむかつて、即ち、これは正當には期待すべからざることであるのだ。勿論、特典は就職を反映する一事實にほかならないし、月

謝も通則的にはさうだ。就職の資格を生じないことが最初から信ぜられてゐる學校へは、最も多くの場合、父兄が子弟を入學させない。かれらはその學費を負擔することを避けることによつてさうする。

國家直營の大學の場合にあつては、寄附問題は勿論ない、また月謝問題も絶對的ではないが、それが國家直營であるところに教育の方針と具體策に對する必然的制限がある。月謝をば、學費の全部を國家が負擔することによつて、廢用にしうるが、その場合、教育の自由は、或全く新たな國家原則を實現しない限り、かへつてます〳〵制限される。師範學校、軍人養成の學校を見よ。革命後のロシヤの學校を見よ。一とつの學校が大學でないとあるとはこの問題に差を生じない。

經營者は、官學の場合にあつては現存秩序そのものだが、それの維持者そのものだが、私學の場合にあつても、就職を必要條件とする限り、現存秩序に對する順應者であるほかない。經營者心理はこの事情を反映する、

學生は、しかるに、かれらの自然的傾向に於ては、現存秩序に對する積極的關心者ではない。新時代の創造がかれらの本能だ。この事情は社會と時代によつて緩急別を種々に示す。一つの社會が制度的改廢を根本的に、そして急進的に必要とする狀態に現に置かれてゐる場合がある。さうした場合にあつては、大學に於ける社會科學的部分の不安と緊張は必然的に發達する。學生は手數なしにその改廢にすくなくとも心理的にはほとんど專ら從事し、經營者は用心深く現制順應にすくなくとも行動的には最も主として從事する。

學生と經營者とは、この場合、聰明または品性に於ける差を示すよりも位置と事情に於ける差を示す。經營者には現制順應を必要とする事情が强大であり、學生には現制改廢をすくなくとも私議する、そして或程度まではまた公論する自由が最も厚く惠まれてゐるのだ。同じ學校の內部的關係者であり、同じ社會のそれでもあるのだが、經營者と學生とは、その同じものに對して異なるパースペクチヴを構成する。遠近、本末、輕重が兩者間に全く相反して現はれる。學生にとつては、創造されべき新時代が最も近い距離にある現實であり、經營者にとつては、それは平素は忘れられてゐる一つの贅澤物以上のものではない。學生にとつては唯一の必要なものは新時代の創造そのものであり、あるひは現制の改廢そのものであり、經營者にとつては最も肝要なことは現制順應による現制利用だ。理想が經營者にとつて一つの贅澤物以上のものでない如く、しば〳〵また一つの最も邪魔なもの以外のものでない如く、現制は學生にとつて崩壞の必然を豫示するものとしてのみ意識される。歸納的にさうされるよりも演繹的、範疇的、概念的、ア・プリオリ的、感情的にさうされる場合が決してまれでない。意識されるといふよりもむしろ片づけられると呼んだ方が妥當する場合が決してまれでないのだ。

學生の眼から見れば幹部は甚だしば〳〵官憲的權力と財的利益の傀儡以外のものでなく、經營者の眼から見れば學生の背後には「赤露の魔手」と國內の「不良左傾團」が常に指揮してゐるらしい想像さへ容易に發生する。勿論、この最後の點は私學の經營者に於てよりも、あるひは於てではなく、遠方の役人に於て最もいちじるしい。

三、認識の獨立

社會に於ける大學の存在理由は社會に於ける學問の存在理由を、全部的にではないが、反映する。社會に於ける學問の存在理由は人間性に於ける知性の位置の社會化されたものにほかならない。

日本の現代に於けるが如く、社會事情そのものが非常に緊張してゐる場合にあつては、大學に於ける社會科學的部分は必然最も意識される。認識の獨立を保護し、發達させるほかに、かゝる場合、大學の社會科學的部分が成り立つ可能はない。

認識の獨立は、現代の日本の大學に於ける社會科學的部分をサーヴイヴさせるために始めて必要なものであるのでは勿論決してない。それは社會進歩の根本原則に屬する一つのものとして常に必要なもので、即ちその進歩を目的とする見地からしては、あるのだ。

知識慾の發達と滿足は認識の獨立の根本組織だ。知識慾の發達と滿足は、それ自身に於て一つの價値の完成だが、人格體系、社會體系の全局の利益を必ず增進する。物質科學の近代に於ける發達が文化史的全般に於て正當に要請しうる功績的位置はこれを例證する。知識が有する藝術的位置が高いほどその知識の技術的能率は大きい。

そしてこれはすこしも不思議ではない。知識は行動の自覺にほかならない。知識は行動の反映であり、反省であるものにほかならない。知識慾の旺盛と熾烈は一層根本的な性能そのものの旺盛と熾烈を指標する必然的現象だと私は考へる。怒りや鬪爭本能が、それ自身に立脚するものではなく、一層根本的な、獨創的な性能を材料とするものであつて、その性能の自由が妨げられた時に始めて、その性能の自由慾に代表される當の心理的主體によつて反應的に表示される性質または狀態にほかならないが如くに、知識慾の旺盛は一層實質的な生活自體に於ける積極的傾向の旺盛を反映するものだと私は考へる。ただ、知識は怒りや鬪爭性に比して遙かに深くそれ自身の價値と他に對する價値とを持つ。進歩的社會は、かくしておのづから、人間の知性に組織的存在を與へる。社會に於ける學問の一機能的位置がこゝに發達する。大學はそれに關聯した一具體物にほかならない。知識の社會的保存、社會的進歩的保存を意識的に目的とする一方法が大學だ。それが大學の存在理由の一大要部を形成する。

社會に於ける學問の一機能的位置を認めるならば、その立ち場からしては、認識の獨立は意識的に極度に保護される必要が不可避だ。大學は、たとひ一面に於て現存社會秩序の支配下にのみ生存しうる必然は多少否定されないとしても、意識的には認識の機能的位置の完成を極度に目的とすることを至當とする。機能的位置とはなにか。それは一つのものがそのもの自身にとつては完全なる自由を意味すると同時に、他のすべてのものにとつてはそれらのもの自身の自由を構成するための一必要物である狀態にほかならない。大學をして認識の一路を無限的自由に於て追ひ進ましめよ。その事情下に、その社會の知識慾の滿足と、一層綜合的にその社會の生活全體の成長とが結果する。

認識の獨立は、學生と教師と經營者と國家と與衆とのすべてが誓約すべき進歩的社會に於ける一憲章であらねばならん。社會科學が關する限り、現代に於て、認識の獨立は極めて不完全だ。標準を高く取れ

ばなに人も多少不完全者として示されるが、社會科學の世界に於ては、すくなくとも現在の事實として、階級意識的職術のために認識の獨立が侵犯されてゐる現實がいちじるしい。最近の日本に於て、或人々は社會を、もしくは人口を、プロとブルとに分類する。そしてそれがかれら自身の自覺に於ては學術的意識に於ての行動だ。しかし、これなども、實はそれ自身極めて反學術的な一行動だ。一つの意識が學術的であるか、ないかを決定する一方法は、その意識が行動の反省としての資格をいかに十分に、または不十分に有するかを觀察するにある。プロ、ブル、階級、唯物史觀、必然、等及び等が、行動の反省としての資格に於てよりも、他の行動からの多少の機械的反映、暗示としての資格に於ていかに顯著であることか。

社會科學の可能には、現在の最も多くの既成的態度、方法そのものの世界から直接に期待されることは斷じて不可能だ。しかしながら、それは最近の新興的態度、方法そのものからしても、それが多少改正されない限り、期待されない。人についての話でなく、抽象的に態度、方法についての話として、社會科學の發達は全く新たな態度、方法を先づ必要とする。その全く新たな態度、方法の特色は認識の獨立の意識にある。

言論の自由は、それが聰明に保護され、經營されるならば、物質科學にとつて實驗が有する位置を、社會科學にとつて最も接近的に有しうると私は考へる。社會科學上の假說が發表される自由と、それに對する批評が發表される自由とが發達してゐるならば、その社會に於ては、おの〱の社會科學的假說は實驗に最も近い効果を享樂しうると私は考へる。

現代に於ては、しかしながら、學術的議論または討論が必要とする習性が、社會科學の世界に於ては發達してゐない。物質科學の世界に於ては、實驗が文字通りに可能だから議論が不純化される餘地がない。社會科學の世界に於ては、文字通りの實驗はどの途不可能だと最初から知れ切つてゐるから、純粹の學術的方法でない方法が自然に使用される可能がある。且つ、社會科學の場合にあつては、假說の目的は制度または政策の新實現にあるから、そしてその目的を達するためには多數者や有力者を動かしさへすればよい、あるひは動かすことが必要だから、わからうが、わかるまいが、とにかく贊成させるといふ行動が自然に發展しやすい。そのために、およそ當の相手たる人口に有効にうつたへるだらうと豫期されうる方法とさへあれば、物からを選ばずにその假說の信奉者は採用しがちだ。體裁をできるだけ學術的にすることに努力するが、動機は個人的または團體的、階級的利己主義、虛榮心によつて占領される可能もまれならずある。研究、愛知、愛眞は動機に於て從屬的位置へ追ひ込められ、支配的衝動は形式上、外觀上の勝利に集注する。かうなつては行動の本質が學術からはあまりに遠い。さうした動機にもとづく議論でも、知識の發達に多少貢獻する可能はあるが、もしもその社會に學術的議論の習性が發達してゐるならばの場合に比して、成績は遙かに劣る。

大學に於ては、學術的議論の習性を養成することに意識的努力を拂ふ必要がある。大學を豫想する高等學校に於ても、そのための特別の組織と制度と設備を持つことが必要だと考へることは極めて至當だ。

實は、この習性は家庭時代、幼稚園時代からして意識的に養成される社會的必要がある。

社會科學上の假說は制度改廢に直接の關係を有するがゆゑに、そして制度改廢は同一社會內の各人、各團體、各階級にむかつて必ずしも同樣の價値を持たないがゆゑに、その議論には意識的及び殊に無意識的に、個人的、團體的利己主義以外のなにものでもないものが本能、熱情、强ひてまでこしらへた理屈等の諸形に於て闖入しやすい。階級科學、團體科學、個人科學といふ種類の表現を字面通りの意義に解するならば、それはすこしもさしつかへないことだといふことができるが、しかしさうしたものが科學の名で呼ばれる資格はない。

大學そのものは學術的精神、興味、良心、態度、方法等を訓練する場所としてでなければ保存されがたい。いかに社會科學は制度改廢その他のかたちに於ての集團行動を目的とする本質のものだからといふても、相反する假說や意見が發生するたびごとに、自說の行動化を直接に爭ふならば、さうすることを豫め承認するならば、一結社、一組織としての大學は、極めて氣力なき、聰明なき、獨創なき社會に於てのほか、化石そのもの、羊群そのものの如き社會に於てのほか、決して生きのびることはできない。

大學の存在理由を肯定するものの立ち場からしては、それゆゑに、社會科學の關係範圍に於て、研究と行動との間、學術と實際との間に、以上述べた意味の識別は絕對的に必要だと斷言されるほかない。

現代の通弊は、しかしながら、大學の經營者自身に、進步的學問に對する理解と熱情と能力とがあまりに不完全であることだ。學生及び教師の世界に於ける輕信、盲熱も多少の事實として概數をあたひするが、廣義經營者の世界に於ける學問的硬化、學術的生命の喪失も深く問題とされる價値がある

印刷と交通が發達した現代に於ては、大學の必要は、殊に社會科學が關する限り、たしかに制限された。單なる知識の授受は、多くの場合に於てすくなくとも、大學を必要としないだけの外的設備はすでに發達した。社會のため、學問のためこれは實に慶ばしい。ただ、社會がその外的設備を聰明に使用する意思を生じないことが缺陷だ。

しかしながら、學術的習性を養成するための一設備としてならば、大學の存在理由は今後なほ强い。勿論、私財の有無が大學を利用する、しないを個人が決定する條件である現制は、眞の社會人的見地からして、そして眞の教育的目的にしたがつてのみそれを決定する制度に移る必要は明白だ。（七月五日）

川崎救濟問題の重點

土方成美

一

川崎救濟問題も大倉組の假差押へによつて一時打切りにならうとしてゐる形勢にある。従つて此問題に就て彼是論議するのは最早六菖十菊かも知れないが、翻つて見れば救濟問題は何等かの形で再燃しないとは限らないし、今後同様の問題が發生する可能性も極めて多いから、茲に全く感情的な見地を棄てゝ理論的に批判して見たいと思ふ。理智的な生活が人間生活の全部ではないが、合理的な感情を人間のすべてが持つやうになるまでは、我々はなるべく理性に從つて判斷するのが社會の諸般の改良を齎す上に於て適當であると考へる。

今日迄に世上の論議の重點は大藏省預金部の融資によつて救濟すべきか、乃至は責任支出によるべきかと云ふことであつた。少くとも閣議に於ける問題はそれであつたらしい。併し忌憚なく云へば此點は私にとつては寧ろ枝葉末節である。大藏省預金部の資金が零細なる小額の貯金者の金を集めたものであるから、之を以て資本家を救濟するのがわるいと云ふならば、納税者から取り立てた金を責任支出して資本家を救濟するのは倘わるいと云へるであらう。大藏省預金部の融資は内閣が直接に責任をとらないから、不當であるが、責任支出は内閣が責任をとるのであるから一應公明正大のやうにも見える。が責任をとると云ふのは如何云ふことであらう。此責を引くとか責任を負ふとか云ふ言葉は近來無雜作に使用せられるところであるが、事實は單に「責任を負ふ」とさへ云へば濟むと思つてゐるやうな場合が極めて多い。善惡は兎に角として封建時代の武士のやうに責を引いて切腹すると云ふのであれば、責任を負ふと云ふ言葉にも眞劍味がある。此頃のやうに此言葉が安直に使用せられるやうでは責任を採ると云はれても容易に安心はなり難い。

議會の責任解除がなければ責を引いて内閣總辭職をすると云ふと如何にも、はつきりしてゐるやうであるが、内閣が總辭職をしても、濟んだことは取戻しがつかない。

元來我國の豫算の如く年々剩餘金が多額に出るやうな國に於て、此責任支出を寛大に許すことは、政費の濫費を導く虞が多分にあると思ふ。責任支出が違憲であるか否かに就ては議論の餘地が多いと思ふが、濫用の傾ある我國で、常設的な預金部資金運用委員會の議を經た融資よりは倘わるいと考へる。

二

何れにしても、問題の重點は責任支出によるべきか、預金部の融資によるべきかと云ふことではなく、救濟すべきかすべからざるかと云ふことである。云ふまでもなく、今日の經濟組織は自由主義に立脚してゐる。經濟活動に於ける各人の自由選擇を認めてゐる。自由選擇を認める以上は原則として各人の經濟活動について各人が責任を負ふことを主義としなければならない。今日此自由主義經濟に對して幾多の批難攻撃があるにも拘はらず、兎も角も各自が自己の行動に對して責任を負ふ點から經濟活動に刺戟を與へると考へられてゐる。今此原則を破つて政府が救濟すると云ふことは、要するに其資本家の活動の結果に對して或程度迄、共同して社會組成員が責任を負ふことである。もとより自由主義經濟の幾多の弊害に對しては、之を統制することが許されなければならないし、又各種の社會的條件の變動によつて自由主義に制限が加へられるやうになりつゝある。併し、自由主義經濟の領域に於ては、之が原則を破つて、或資本家の行動の結果に對して、社會組成員が共同して其責に任ずるには、明白なる特殊理由がなければならない。

川崎救濟に關してかくの如き特殊理由が考えられるであらうか。先づ第一に考慮に上るのは造船業は國防上重要である。從つて國家に國防費を支出する意味であつたか、嘗ては、造船業に對して奬勵金を交付してゐたし、現に又、積極的ではないけれども、消極的に、船舶の建造又は修繕に使用する鐵鋼材、艤裝品、艤裝品部分品機關又は機關部分品であつて命令を以て指定した者には輸入税を免除してゐる。之等は國防上の理由から造船業を奬勵する趣旨に出るものと思はれるが、今回の川崎救濟案も之と同趣旨によつて辯護することが出來るであらうか。之に對しては斷じて否と答へなければならない。造船業の維持は國防上必要であるが、價格經濟に於ける採算上平時に到底成立ち難い。そこで國防費を支出する意味で之を救濟するとか、補助するとか云ふのであれば、一川崎造船所の問題ではない。全國の造船業の問題である。

三

國防上の理由から救濟を辯護することの困難なることは以上見たところであるが、川崎今日の窮狀が全く企業經營者の努力の如何ともすべからざる突發的事情乃至天災等に因するものであれば、之が救濟も強ち辯護出來ないものでもなからう。大正四年並に大正九年の二回に亘つて行はれた蠶糸救濟の如きはもとより蠶糸業が我國の輸出産業の大宗である點に基くであらうが、又一方少くとも大正四年の救濟に就ては歐洲大戰の突發、輸出杜絶と云ふ如き蠶糸業者の如何ともし難き事情に因する點が多かつたことは救濟に多少の根據を與へたであらう。川崎に於ても大正九年の恐慌の影響が今日に及んで來た點も多々あるであらうし、大正九年蠶糸業の窮狀と類似の點がないではない。此點は詳細に今日に到れる事情を研究してからでなければ正確なる斷案を下すことは困難であるが、恐らく全く不可抗力によつて今日に立ち到つたと結論するのは困難であらう。

此事は又企業者の企業經營能力の問題と關係を有する點である。川崎造船所が官營工場の拂下を受けて今日に到るまで我國の造船業、就いて各般の方面に貢獻した點の多大なることは何人も否定しないであらう。併し私有財産主義によつて、各人に財物の自由なる管理を托するのは、一應之が最も有效なる財物の管理方法であると前提してゐるからであらう。（事實上そうであるかないかは各人の判斷によつて異

るに相違ないか）此制度の下に於ては特殊な不可抗力に基かない限り、損失をしたものは、利益をあげてゐる者に對して、一應企業の經營能力に於て劣ると見なければならない。何となれば損失を來すのは賣れない者を作つたと云ふことであり、賣れないものはいらないものであると云ふことであるから、損失をするのは人のいらない物社會の要求しない者を作り過ぎたか乃至は高く作つたと云ふことである。勿論今日の社會の需要が人々の正當なる欲求を代表してゐるとは一概に云へない、つまらない、倫理的に見て排斥すべきものでもよく賣れるものがあるが、今日價格經濟の組織を採つてゐる限り、一應は以上の如く見る外はない。戰時中急に起つた造船所等に比して過去の效績が大であると云ふ點を見たらば、救濟の理由も立ちさうであるけれども、最近迄一割配當を持續してゐた點なぞは健實なやり口とは到底見えないし過去の效績を見ると云ふことになれば救濟の範圍は極めて廣汎に亘つて遂に自由主義の原則を破壞するに到りはしないかと思ふ。

四

損失の原因から見ても是非共救濟すべきであると云ふ根據は立ち難いと思ふが、然らば其影響から見て如何であらうか。如何に救濟の理由が薄弱であつても、影響より見て到底棄て置けないと云ふ場合がないとは云へない。往年の蠶糸救濟の如きは蓋し此例であらうし、大正三年米價の崩落に際して米價調節を行つたのも其影響の重大なる點より出でたものと見ることが出來る。尤も農業は平常に於ても天候に左右せられる點が多く、其豐凶は天候に因する所が極めて重大であるから、自由主義經濟の行はれることは、工業等に比して迥に狹小とも見られる。

川崎破綻の影響は往年の蠶糸業の悲境の影響と同日に論ずべきものであらうか。川崎救濟が十五銀行の救濟と密接なる關係を有してゐることは明であるが、之が救濟不救濟が直ちに我國民經濟の休戚に關すると云ふ理由で救濟を辯護するのも困難であらうと思はれる。

最後に今日川崎造船所に從業する多數の職工の失業問題から見て如何であらうか。之によつて職を失ふ人々は眞に同情すべきであり、政府としても出來る限りの對策を講じなければならないであらうが、之あるがために特に救濟しなければならないと云ふ理由は立つまい。川崎造船所の失業問題も矢張り他の一般失業問題と同樣に考慮すべきであらう。

問題解決の目標は要するに今日存在する川崎の造船所の設備と、之によつて養成せられた職工の技術とを今後成るべく最も有效に利用するには如何にすればよいかと云ふことゝ、此責任を何人に負擔せしめるのがよいかと云ふことにある。

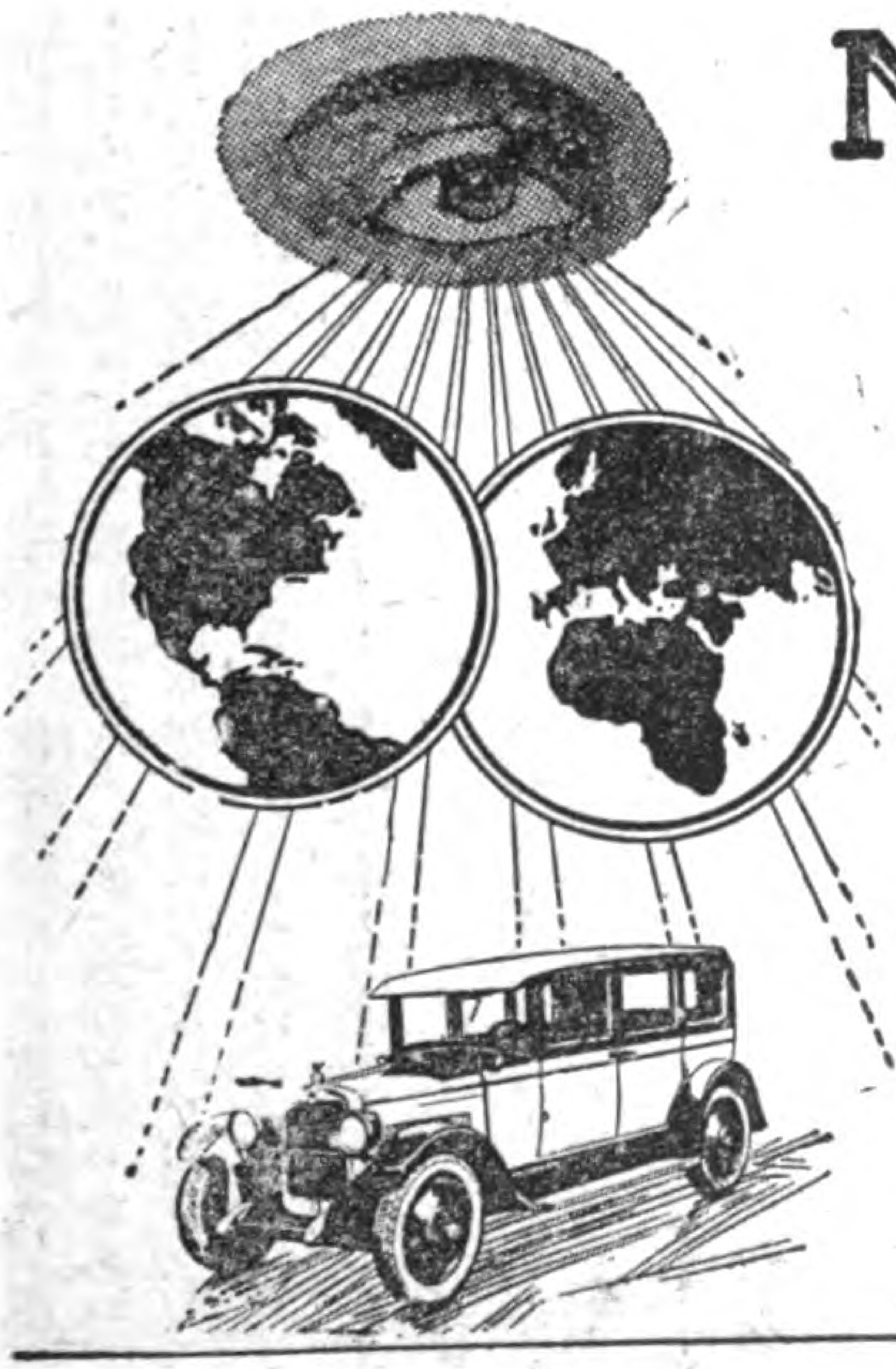
若し造船業が全體として企業としては成立ち難くしかも國防上是非共維持しなければならないならば、造船業に對する補助は問題となり得る。しかも之は一川崎造船所だけの問題ではない、造船業全體として考慮せらるべきことであらう。

更に進んで造船業が民間企業として成立ち難いとなれば之を官業にすべきか、それとも官業の不便に鑑みて民業として存置すべきかの問題も起るわけである。民業として存置し之に補助金を支給するならば、補助會社の收支について相當嚴重な監督を加へなければならないのは當然のことであらう。今回の三千萬圓の融資案のやうに大倉組の假差押、國際汽船の興銀に對する債務の問題から直ちに救濟を一時打切らなければならないやうな、粗漫な態度では補助も問題にはなるまい。

五

以上各種の見地から論じて見たが、一川崎を切り離して救濟する理由は之を發見することが困難であると思ふ。尤も三千萬圓の融資で事實上川崎の事業の基礎が確立する見込があるならば、問題は案外簡單であるかも知れないけれども、然らずと見られるところに困難なる問題が伏在するのであらう。

終りに今回の銀行破綻、川崎の窮狀問題等に關聯して世上では重役の私財提供と云ふことが問題になつてゐる。もとより重役が進んで道義上私財を提供し、債權者も亦之を受諾するならば問題はないが、世間が重役に私財提供を強要するが如きは、有限責任の主義で經營せられてゐる株式會社企業の本旨に反することはないであらうか。かくの如き重役の私財をあてにして取引すると云ふが如きは自ら今日の經濟取引の合理化に對して妨げあることゝ思はれる。恰も、自己の經濟活動の結果は各自が責任を負ふと云ふ主義によつて政府の救濟も容易に是認出來ないと同様に始めから責任の範圍を限定して活動したのに、破綻に際しては其範圍を超えて責任を負はしめると云ふことは理屈が通らない。自分が大株主になつてゐる會社が窮狀にあるにかゝはらず提供し得る私財を多分に持つてゐるのは如何にして起つたかと云ふことに問題がある。蛸配當の問題もあるし、好況時に今少し戰時利得税其他の形で租税として提供せしむべきであつたとも云へやう。更にかくの如き事態を引起す有限責任主義の企業經營は根本的に改正を要すべき點を藏してゐるとも云へるであらう。併し一應有限責任の前提によつて行はれたことに對して、外部から私財提供を強要するのは當を得ないのではなからうか。



生活苦と心中

山川均

二十三日には、久しく職にはなれた薄幸の男が三人の子供を殺し、夫婦で心中を企てた悲慘な出來事があつた。すると翌日は、これもまた同じような、『傾きかけた家運の挽回を計つて能はず、遂に橫道に足を踏みいれ、妻子三人を慘殺して行くへをくらました』といふ慘劇が行はれた。同じような出來事が二日つゞいて起こつたといふことが、この出來事の印象を、非常に大きくしたにちがひない。しかし考へてみると、生活苦のために自分を殺し、妻子を殺すといふ出來事は、外國ではどうだか知らぬが、日本にはちつとも珍らしくない。これと同じ出來事は、ほとんどザラにあると云つてもよい位であつて、そのやり方、その型から云へば、最もありふれた型なのである。そこで若し目先きの新しいものだけに重要な問題となる資格があるものだとすれば、この出來事などは、いま更ら取り上げて問題とするに足る問題ではないのである。

それにも拘らずこの出來事が、人々に異常な印象を與へ、人々をいま更らのように思はせたのは、先きにも云つた通りに、同じような出來事がつゞけ樣に起こつたことにもよるが、それと同時に、經濟界の不景氣はいよく\どん底に達し、深刻な生活の不安が暗闇のように擴がつてゐる今日、人々は無意識の間にも、この出來事をかような背景のうちに篏めこんで眺めたからであつた。

わが國の資本主義經濟の基礎は、過般の金融恐慌によつて、搖り固められた。これは大戰後から引つゞいた謂ゆる經濟界の整理の行程が一大跳躍をもつて進行したものであつた。この整理こそ、資本主義經濟が生きながらへようとする努力であつて、またこの努力が相當の效果を擧げ得たことを意味してゐる。この整理の行程——卽ち資本主義經濟が安定と復興とに向つて進む行程——は、同時に、、氣が深刻する行程なのである。經濟界の整理を徹底させるといふことは、、、氣を徹底させることである。、、、、、、、、、多くの勞働者や俸給生活者に失職する。多くの小企業家や小商人は沒落する。大工業主や大商人さへも無殘に淘汰され、より大きな資本の力の下に屈伏する。

かように資本主義經濟の立て直ほしのためには、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

しかし江戸川邊の夫婦心中と長崎町の妻子殺しが、どの範圍とどの程度まで、この行程の直接の犧牲であつたかといふことは、何人にも分らない。現にこれと同じ悲慘な出來事は、必ずしも今に限つたことではない。生活苦から來た或はもつと悲慘な出來事は、好景氣の時代

にさへもしば〳〵あつた。そこで今度の出來事を、最近における不景氣の徹底と生活不安の深刻化とに、その直接の結果としてことさらに結びつけてみる必要はない。問題は、この慘劇が、最近における不景氣と生活不安との深刻化が生んだ直接の結果であり、從つてまたその指標であるといふ事にあるのではなくて、多くの人々をして、無意識の間に、この二つの事柄を結びつけて考へさせ、その一方を他方の背景として眺めさせるこの心理狀態とその社會的條件とに、重要な意味があるのではあるまいか。

○

今日も心中、昨日も妻子殺しと新聞で書き立てられると、いまにも日本人の半分くらゐが心中してしまひさうだが、よくしたものでこの種の異常な出來事は、或る精神狀態にある人々に特別な刺戟を與へ、眼前の生活の苦惱から遁がれようとして出口を求めてゐる人々に有力な暗示を與へるとみえ、一種の流行性を持つてゐることは爭はれぬが、雜誌の値下げや一圓本の流行するやうには流行せぬ。それにも拘らず實際には、これらの慘劇に現はれた生活苦以上の生活苦の下に壓迫せられてゐる人は無數にある。そこで多くの人々は、この種の行動の全責任を、社會的な條件に求めないで、その人の特質――修養だとか心掛けだとか――に求めがちである。生活苦からの殺人だとか、生活苦からの夫婦心中だとかいふ時には、これらの行動の原因が生活苦といふ社會的な條件にあることを暗に認めてゐるのであるが、しかし直ぐその次の瞬間には、この生活苦の原因はこれを社會的な事情と條件とに歸しないで、その人の才能や心掛けに歸し、社會的な負債を棒引きにするのである。

人間は或る一定の條件の下におけば、これに反應して必ず或る一定の行動をする。しかし假りに二人の人を、精密に同じ條件の下においたとしても、精密に同じやうな反應を精密に同じ度合にするわけではない。そこで個人の特質といふ要素が計算に這入つて來る。それ〴〵の個人の特質――生理上、精神上の――の方を一定したものとして見れば、或る一定の社會的條件が、これらの個人にいろ〳〵の反應をいろ〳〵の度合でなさしめることになり、社會的條件の方を一定したものとして考へれば、これらの個人のそれ〴〵の特質が、いろ〳〵の反應をいろ〳〵の度合でやらせることになる。不景氣の深刻化が、すべての人に三人の子供を殺させるわけではない。しかし三人の子供を殺させたのは、不景氣の深刻化であるといふことも、それに劣らぬほどの事實である。

生活苦の重みは或る特質を備へた人々に、三人の子供を殺させる。しかしそのうちの或る人は、この重みが十貫目に達したときに子供の頸にバンドを卷きつけるが、或る人は十二貫三百目に達した時に、はじめてその用意をする。しかし他の特質をもつた人々は、子供を殺す代りに盜棒をする。さらにもう少し違つた特質をもち、なほその上に少しばかり違つた條件の下におかれた人は、拔け道を見附けて立身出世をする。

ところが日本には、生活苦の壓迫に、死をもつて反應する場合が、目立つて多いやうに思はれる。生活苦ばかりでなく、いろ〳〵の問題を死によつて解決しようとする傾向は、日本人の特質のやうに思はれる。自分が志願して死ぬのはまだしもとして、道づれに妻や子供を殺すのが、ほとんどお極まりの型になつてゐる。これは日本人の誇りとしてゐる國民性といふもの〻うちには、一定の條件の下におかれると死といふ方法で反應する性質が多分にあることを意味してゐる。しか

し吾々が國民性と呼んでゐるものの、九分九厘までは、自然的な產物ではなくて社會的の產物である。そこで日本の社會には、ある條件に對する人々の反應に死といふ形を取らしめるやうな條件が多分にある、といふことになるのである。

獨りで勝手に死んだらよささうなものを、殘された妻子の行末までも案じて一緒に片づけておく。いかにも親切なやり方ではあるが、この親切は極端な家長主義に根ざした親切であつて、この習慣は、疑ひもなく家族制度によつて養はれたものである。家族の君主たる男子が、死にぎわに一切の所有物――妻や子供――を當然に處分するといふ意味で、夫は妻に殉死を要求する、妻は尤もなことゝして、夫唱婦隨の有終の美を濟すのであつて、これはたしかに我が國の家族制度の神髓を發揮したものにちがひない。

一たい、何事によらず死によつて解決し、死によつて淸算をつけようとすることが、封建時代の遺習にほかならぬ。主君に對する忠義も死によつてする、面目ないことの申譯も死によつてする、借金の云ひ譯も死によつてする、困難な問題の解決も死によつてする、責任の回避も死によつてする、寃罪の控訴も死によつてする、愛情の表現も死によつてする――金貨が經濟上の普遍的な支拂ひ手段であるやうに、死はいかなる負債と支拂ひにも通用する社會的道德的の貨幣と認められてゐる。經濟上の普遍的支拂ひ手段が濫發せられるやうに、死が社會的道德的な貨幣として、一切の支拂ひに通用するからには、勢ひ濫發せられざるを得ぬ。死にさへすれば、どのやうな申譯にもなる、といふことは、まかり間違へば死ぬるといふ覺さへきまつてゐれば、何をしようと仕度い放題だ、と云ふことを意味してゐる。それは丁度、現金を懷に入れてさへゐれば、何を買はうと買ひたい放題だといふのと同じである。ブルジョア時代の理想が金貨であるやうに、封建時代の理想は死であつた。そこで命を鴻毛の輕きに比するのが封建時代の道德の極致であつて、自分の命のついでに他人の命までも鴻毛の輕きに比するのは、當今もなほ、日本人の目ざましい特色だと云つてよい。

今日は、銀座街頭をモダン・ボーイやモダン・ガールと名づける生物の一新變種が步るいてゐるといふ一千九百二十七年のブルジョア時代の全盛期であるが、ちようど丸ビルの七階と和田倉門とが好個の對照をしてゐるやうに、あらゆる教育機關では、命を鴻毛の輕きに比し、これを一切の淸算方法支拂手段とする封建時代そのまゝの思想が、いろ〳〵の形で敎へこまれてゐるのである。和洋折衷が大和民族の誇りとする新文化の形態でもあるやうに、ブルジョア思想と封建思想との抱合が、この新しい日本を支配する思想であり、反動化した資本主義と封建勢力の遺物との合體が、この新しい日本を支配する勢力なのである。資本主義の日本は金貨本位の國だと云はれてゐるが、その實は金貨と自殺――封建時代の普遍的支拂手段――との兩本位の國であつて、この貨幣制度がつゞいてゐるうちは、そして人々の財布に金貨がます〳〵拂底する以上は、金貨の代りに自殺、心中、女房殺し、子殺し、で支拂ひを濟まさうとするものが、いよ〳〵もつて多くなることは間違ひない。

唯物史觀經濟史出立點の再吟味（其四）

――『古代共産制度』に關する若干の考證と祖述――

福田德三

新ライン新聞の廢刊は、ドイツ殊にプロイセンに於ける反動時代・反革命時代の到來を告ぐる第一鐘であつた。これより以後、社會主義運動に對するプロイセン政府の甚しき壓迫は加はり、而して、それは一八五四年に至つて絶頂に達した。『共産者同盟』は、先づ二派に分裂し、つゞいて、マルクス・エンゲルス派は、全く解散し、兩人は、政治運動の舞臺から、暫く身を引くことを餘儀なくされた。エンゲルスは、不本意ながら、再び身を實業に投ずることとなり、マルクスは、極貧の内に、紐育トリビユーン新聞の通信原稿料とエンゲルスの時々

（二十四）

『賃銀勞働と資本』を、一八四九年四月四日以來掲げ出した新ライン新聞は、其翌月五月十九日を以て廢刊した。此れは、單に新聞其ものに取ての出來事たるに止まらない。それは、マルクスとエンゲルスとにとつて、甚だ意味深い出來事となつた。何となれば、兩人とも、此事ありしによつて、全く異なる環境に身を置くべく餘儀せられるに至つたから。

の仕送りと丈けを當てにして、倫敦の大英博物館の讀書室に立籠ることとなつた。

倫敦に於ける極端なる貧乏生活は、マルクスの發展にとつては、最も意味の深い時期であつた。此期間に於て、彼は、其深さに於いても、其廣さに於いても、大陸生活が、到底彼れに與へ得なかつたであらうところの、驚く可き進歩を爲したのである。天はいたづら者である。若しも、一八四九年以來の反動到來することなく、新ライン新聞が依然として、續刊せられ、『共産者同盟』が存續してゐたとするならば、私は臆測する、マルクスは、獨逸人たり、ラインランド人たる其の『子供の靴』を、かくは、容易くは、脱ぎ去り得なかつたのではなからうか。個人的に見て、斯く苦しみと悩みと多き倫敦生活を經過したればこそ、彼は、能く其大を成し得たのではあるまいかと。

私は、今、マルクスを傳しつゝあるものでないから、此邊の消息について冗言を費すことを敢てしない。唯、私の當面の吟味について、マルクスの倫敦生活が重要の關係を有つと考へられる旨を述べれば足りる。倫敦生活が、マルクスの考へ方を、深さに於いても、廣さに於いても、進めたればこそ、『共産宣言』、『賃銀勞働と資本』に於いて見出されなかつた『アジア的』が、『唯物史觀公式』に於いて採り入れられるに至つたので、此の『アジア的』の有無は、決して、單なる偶然の事柄でなく、それは、廣さと深さとの稍ゝ著しい差異を意味するものと見るべきであると考へられる。其然る所以を考ふること、これが、私の所謂第二段の吟味である。

若しも、マルクスの唯物史觀が、一八四五年前後、又は、一八四八―九年に於ける彼の發言を以て最終の仕上げを終つてゐるものとするならば、私の此第二段の吟味なるものは、殆んど無用に屬すと云はなければなるまい。而して『アジア的』の有無は、極めて輕微なる一些事として、打捨て置かるべきであらう。然るに、其反對に、それが重要なる意義を有つべく考へられるといふは、マルクスの唯物史觀は、一八四九年から一八五七―九年に至る間に於いて、更らに『仕上げ』過程を經過したものたるを認めんと欲するからである。かくて、私の此第二段の吟味は、唯物史觀成立の考究にとつて、必ずしも閑葛藤を打出するものではあるまいかと思ふ。唯だ、憾むべきは、先覺學者の研究の就て據るべきもの皆無なるの一事である。近刊リアサノフ『マルクスとエンゲルス』亦此について何の所見もない。

——七月二日接到の『社會問題研究』第八十一册二五頁以下に於いて河上博士は、『唯物史觀と經濟理論との混同——その著しき例としての福本和夫氏』と題する一節を掲げてゐられる。其中に云ふ。『マルクスの經濟學は、現代の資本主義社會の經濟學であり、彼れの唯物史觀は、過去の社會諸形態の推移に關する史觀である。兩者の同一視すべからざることは、以上述べ來つた如くである。しかるに、我々は、この兩者が、福本和夫氏により、殆んど數ふべからざる程度に混同されつゝあるを見る』二九頁『けれども、人間生活のあらゆる形態に對

する總ての理解の出發點が、近代有產者社會に對する理解にあるとしても、後者が、すなはち、前者なのではなく、近代有產者社會といふ特定の社會形態を研究することが、同時に、人間生活のあらゆる諸形態を研究することになるのではない。だから、マルクスは、『人間の解剖は、猿の解剖に對する一つの鍵であるブルヂョア經濟學は、古代、等、等の經濟學に鍵を提供する』といふと同時に、すぐそれに引續いて、『だが、すべての歷史的差異を混同し、すべての社會諸形態に、ブルヂョア的形態を見るところの經濟學者の樣式においてではない』と注意してゐる。しかるに、福本氏は、この注意を、全く看過されたかに、私には見ゆる』(三三〇・一頁)　私は、博士の福本氏說評の當否を今考ふるつもりを有たぬ。唯だ右の一節に於ける博士說其のものには、全く贊同する。何となれば、其は事理元より當然であるから。

博士又た云ふ。『エンゲルスが「二つの偉大なる發見」となせるものゝ一つたる唯物史觀の發見は、少くとも一八四五年以前の年代に屬するといふことである。(中略)しかるに、經濟學に關するマルクスの著作は、何れも、之れより後の年代に屬する。すなはち、『哲學の貧困』は一八四七年に、『賃勞働と資本』は一八四九年に、更らに、『經濟學批判』に至つては、一八五九年に始めて公けにされたものである。これによつて見れば、唯物史觀は、經濟學研究の結果生まれたものに相違ないけれども、しかし、マルクスが『一旦これを得てからは』、結果はすなはち前提となることにより、それは、彼れの『研究に導きの絲として役立つた』ものであり、かゝる導きの絲により、彼の經濟學批判は、今日吾々の見るが如き成果を收め得たのである。(中略)かくて、氏(福本)にとつては、經濟學批判が完成されなければ、唯物史觀は完成されず、また、經濟學批判は、事實完成されざりしがゆへに、唯物史觀もまた完成されずに終つたかの如くに見ゆるのである』(中略)すなはち、氏にとつては、マルクスの經濟學批判が完成されなかつたといふことから、『唯物史觀が遂に未完成品として後代に殘された』理由を『十分汲みとることができる』のである。氏にとつては、唯物史觀は、これから『建設』さるべきものなのである。そして、斯る建設を、氏は、恐らく、その著(略)において試みたといふのであらう。』と。(三三四・六頁)　唯物史觀完成、不完成の討論には、私は、今加入しない。唯だ博士が、右文中「發見」と云はれるのは、決して『完成』といふ意味に解すべきものではあるまいと思ふ。若し、左樣でなく、發見とは、やがて完成の意なりとするならば、私が、玆に試みる第二段の吟味は、全然徒勞に屬する。而して、『アジア的』の有無の如きは、何れでも差支ないこととなる。此詮索に今まで誰人も――私の知り得る限り――指を染めるもののなかつたのは、發見即完成と云ふ解釋が正しいが爲めであるかも知れない。私の以下に述ぶるところが、此解釋の萬全ならざることを示めすことが出來るとしたならば、それ丈けでも、私は無用の勞を役したと云ふ謗を免れ得ようか。

(二十五)

一八四九年六月末、マルクスは倫敦に居を構へた。翌一八五〇年一の重要なる出來事が起つて、ヨーロッパ人の注意は著しくアジアの方面に向けられた。狹い環境から脫け出て、世界の中心に、世界第一の書館に、身を寄せて學究生活を營み始めたマルクスの眼界は、自ら廣くならざるを得なかつたらうと思はれる。其廣くなつた眼界に『アジア的』が鮮かに其影を映ずべく、此出來事は、甚だ意味あるものであつた。其れは、他事でない、支那に於ける長髮賊の亂これである。

一八五〇年洪秀全は廣西の諸城を陷れた。翌一八五一年、彼は自ら稱するに『太平王』を以てした。ヨーロッパ人は即ちこれによつて、此亂を太平の革命と呼んだ。ヨーロッパに於ける一八四九年來の反革命に氣を腐らしつゝあつたマルクスは、爭で此出來事に對して、雲煙過眼なることが出來よう。彼は、殆んど幼友達の戀人に對するが如き愛着を、長髮賊に寄せた。其と共に、彼の思索の眞只中に、『アジア的』は俄然として、重要なる地位を獲得するに至つたものと考へられる。

彼は、宣教師にして支那學者たる獨逸人グュッラフの著によつて、支那事情を學んだ。彼は一八五〇年一月の『インテルナチョナーレ・レヴュー』へ寄せた文に於いて、左の如く記したことは、リアサノフ氏の報ずるところである。

『支那の社會主義が、ヨーロッパの社會主義に於けるは、恰かも、支那の哲學が、ヘーゲル哲學に於けるが如くであるかも知れぬ。しかし、世界の最古にして最不易・不拔の帝國たる支那が、英吉利ブルヂオアの作り出した綿絲によつて、八年ならずして、社會變革の前宵にまで持ち來たされたといふことは、一の欣ぶべき事實たるを失はぬ。此變革は、文明に對し、最も顯著な結果を齎らし來るに相違ない。我ヨーロッパの反動者流が、そのまさに上らんとするアジア經由の亡命行に於て、支那の長城にまで到着するとき、原始的反動と原始的保守主義との巢窟へ導く可き城門に到着するとき、誰か知らん、彼等は、其處に次のような扁額を見出さずとは。

支那共和國。
自由。平等。同胞。

『マルクス・エンゲルス・ラサルレ遺ゝ集』第三卷四四五頁。

長髮賊が餘りに時勢に先つて發生したのか、マルクスが餘りに先見の明があり過ぎたのか、兎に角、一八五〇年に外れた豫言は、一九二七年には當り過ぎるほど當つてゐる。

南京が洪秀全の手に落ちたのは、一八五三年三月のことである。其の六月十四日、紐育トリビユーン新聞に、マルクスは『支那に於ける及びヨーロッパに於ける革命』といふ一文を寄せてゐる。

リアサノフ氏は、右文を獨譯して『マルキシズムの旗の下』第一年度三七〇頁以下に掲げた其の解說文中に記して云ふ『恰かも、此時ヨーロッパ

に於いては、反動が凱歌を奏してゐた。共產者同盟は解散した。マジニ及び其の徒黨が企てたミラノの一揆（一八五三年二月）は、失敗を以て終局した。マルクスは、これを以つて、まさに近づきつゝある危機の前兆なりとして、これを歡迎した。從つて、彼は、また、更らに多く、極東に於ける革命運動の蹶起を歡迎したのである。神經硬化したヨーロッパと、今までは一切の運動を缺いてゐたが、今や流動すべく始めた支那との對照は、誰が目にも昭然たるものとなつた。帝位や祭壇を顚覆したばかりの文明ヨーロッパは、今やアメリカ舶來の流行たる『狐苦狸様』に熱中してゐた。マルクスは、後に、此時のことに想到して、『資本論』に書いて云ふ。「人は思ひ出す。すべて他の世界が靜止してゐるように見へたとき、支那と卓子とは踊り始めた——恰かも、他の踊り出すを促がすが如くに」と。此句は、『資本論』第一卷民衆版三五頁脚註（二五）にあり。

さて、マルクスは、右文に於て云ふ。

『人類の運動を左右する諸原則について熟考した甚だ深刻な、さりながら空想に富める一思想家は、自然を支配する諸秘密の一として、自ら『兩極端接觸の法則』と稱ふるものを主張するを常とした。『極端は互に相觸れる』といふ世間流布の諺は、彼の見解に從へば、人生のすべての範圍に於ける、一の大なる而して有力なる眞理、哲學者がこれを無視し得ざるは、天文學者がケプラーの諸法則又はニュートンの大發見に於けるが如き、一の公理であると。

『兩極端接觸』は、兎かく普遍妥當的な原則たりとするも、又に、たらずとするも、我々は、支那に於ける革命が、文明世界に及ぼすべく見ゆるところの作用に於いて、一の甚だ適切な實例を認むるのである。ヨーロッパに於ける、次の民衆蜂起、共和的自由、節約な政府を求むる運動は、恐らく、他の如何なる現存の政治的原因——露國の脅威、及びこれに伴ふ一の全歐戰爭の蓋然性すら——にも勝りて、ヨーロッパの對脚地たる中華帝國に於いて、現に演ぜられつゝある出來事によつて左右せらるべしといふは、甚だ珍奇な而して逆說的主張と聞ゆるかも知れない。しかし、實際の事情を注意深く考察するとき、これは、決して逆說たらざるを知る。

最近十年間、支那に起り、而して、今や、一の力強い革命にまで凝結した慢性的動亂の社會的原因は、如何なるものであらうとも、また、これが、如何なる宗教的・宮廷的・若くは、國民的形態を取るに至るであらうとも、此の破裂に、最終の機運を與へたものは、疑ひもなく、支那に、其の麻痺劑——阿片と名くるところの——を强制した英吉利の大砲であつたのである。英吉利の武器の前には、滿洲朝廷の威嚴は、脆き火絨の如くに崩れ去つた。中華帝國萬古不易の迷信的信念は覆された。文明世界から、野蠻的仙人的に支那を隔絕してゐた紐は斷たれた。而して、それ以來、カリフォルニア及オーストラリアの金によつて、甚だ迅速に發達

した外國貿易は、自由な進路を得た。それと同時に、支那帝國の命の汁たる銀貨は、英領印度へ流れ去るべく始めた。

（略）此の直接の經濟的結果以外に、阿片密輸入に伴ふ賄賂の公行は、南方諸州に於ける支那官憲を墮落せしめた。皇帝は、支那全土の父と崇められてゐたと共に、地方の官憲は、其地方の父と認められてゐた。此の家長的權威は、莫大なる國家機關を保持する、唯一の道德的結帶であつた。しかるに、それは、今や、阿片の密輸入を幇助するによつて尠からぬ役得を着服する官吏の腐敗によつて、漸く解け弛み始めた。

（中　略）

これらすべての解體的原因は、相集つて、支那の財政・風俗・產業及び政治的機構に作用しつゝあつたが、一八四〇年に至つて、皇帝の權威を全く打破し、中華帝國をして、地上の世界と接觸すべく餘儀なからしむるに至つた英吉利の巨砲によつて、其全開展の域に達した。完全なる鎖國こそ、古き支那を維持する主要條件であつたのである。此の孤立が、英國の媒介によつて、强制的に終りを告げてからは、其の解體は、恰かも、仙人的に、密封された棺中のミイラが、外の空氣に觸れて解體すると同じ確さを以つて、進行した。さて、かく、英國が、支那に於いて革命を喚起した以上、玆に起り來る問題は、此革命が、英國に、而して、英國を通して、ヨーロッパ全體に、如何なる反作用を及ぼすであらうか、これである。此問題に答ふることは、必ずしも難事ではない。

（中　略）

かくの如き事情の下に於いて、英吉利の貿易が、其の規則的な循環の大部分を、既に經過し終つたことに顧みて、我々は、確かに、次のことを豫言し得る。支那の革命は、現在の產業制度の火藥樽に投ずるに、火光を以てする所以であつて、而して、久しい以前から準備せられつゝある一般的危機の爆發を惹起し、其の危機に、外國にも行き渡り、而して、最も近い將來に於いて、大陸に於ける政治的諸革命によつて伴はれるであらうと。

（中　略）

十八世紀の初め以來、ヨーロッパに於いては、眞面目な革命は、何れも、一の商業及金融恐慌によつて、先たれざるものはない。一七八九年の革命然り、一八四八年の革命も亦然り。我々は、支配的諸權力と其臣下との間に於ける、國家と社會との間に於ける將たまた、各異れる諸階級の間に於ける衝突の、日に日に、より脅威的となりつゝある兆候を見るのみならず、更らに、現存諸權力相互の間に於ける衝突が、今や、漸くにして、劍が鞘を脱せねばならなくなり、支配者たちの最終判定が、發言權を持つべき局面に達してゐる。（略）

戰爭も、革命も、それが、ヨーロッパを襲ふのは、いづれも、一の一般的商業及產業恐慌に續くであらう。而して、其の襲來の合

國は常の如く、世界市場に於けるヨーロッパ產業の代表者たる英國によつて、與へられるに相違ない。』

以上『マルキシズムの旗の下』弟一年度三七八頁——三八五頁より摘譯。

マルクスの豫言は、如何にも早過ぎた。しかし、早過ぎた以外に見出さるべき謬見は存せぬと思ふ、支配者たちの最終判定（ウルチマ・ラチオ）は一八五〇年代には來なかつたが、一九一八年には、間違なく到來したではないか。

マルクスの洞察は、他人の爲めによりも、彼自らの爲めに、大なる意義を有つものとなつたと思はれる。彼は、長髮賊の亂に促されて、其視野を著しく擴大した。擴大された視野の彼方には、今まで、彼が殆んど思ひ及んでゐなかつた一の新しいファクトルが、儼として立つてゐた。其れは、即ち『アジア的』と名けらるべきものそれであつた。『アジア的』は、今や、兩極相接の理によつて、彼のヂアレクチックの巾に徐々に、取り入れらるるに至つたものではあるまいか。さらば、其取り入れの過程は、果して如何なるものであつたらうか。

（二十六）

私は、玆に、リアサノフ氏の暗示に追從して、先づ、逆に、『資本論』第三卷『商人資本に關する歷史的事實』の章から、次の一節を拔き來るを便と見る。——譯文は高畠君の改譯本に從ふ。——

『十六世紀中、また一部的には、十七世紀に及んでも、商業の突然的な擴大と新たなる世界市場の創生とは、舊生產方法の滅亡と資本制生產方法の隆興との上に、壓倒的な影響を及ぼしたのであるが、これは寧ろ既成の資本制生產方法の基礎上に行はれたものである。世界市場それ自身が、資本制生產方法の基礎を成してゐるのである。が、他方に又、不斷に擴大されるところの規模を以つて生產しようとする資本制生產方法の內在的必然は、世界市場を不斷に擴大せしめる刺戟となるものであつて、この場合には、商業が產業を革命するのではなく、寧ろ產業が商業を絕えず革命することになる譯である。商業上の支配は、今や、大產業の條件が、多かれ少かれ、優勢となつてゐるといふ事實に伴はれる。例へば、イギリスとオランダとを比較せよ。オランダが支配的の商業國民として滅亡するに至つた歷史は、これ卽ち、商業資本が產業資本の下に從屬するに至つた歷史である。資本制前期的の國民的生產方法に於ける內部的の堅固と組織とが、商業の分解的作用に對して如何なる障碍を呈するかは、イギリスの對インド及び支那通商の上に、適切に示されてゐるところである。インド及び支那に於ける生產方法の廣大な基礎は、小農業と家庭的工業との合成に依つて與へられるものであるが、インドでは更らに、土地共有に基く村落共同體といふ形態が加へられる。尤もこれは、支那に於ても原始的の形態であつたのである。インドで

は、イギリス人は支配者及び土地所有者として、此等の小さき經濟的共同體を破壞するため、彼等の直接の政治的權力と經濟的權力とを同時に利用した。彼等の商業はインドの生產方法に革命的の影響を及ぼしてゐるのであるが、それは彼等が廉價な商品を以つて、農工業生產の斯かる合一の太初的な組成部分たる紡績業及び機織業を破壞し、かくして、此等の共同體を分解せしめるといふことに外ならない。而もこの分解作用でさへ、極めて徐々と達成されたに過ぎないのである。支那に於いては、猶ほ更らさうであつた。蓋し、玆では、直接の政治的權力を利用し得なかつたからである。農工業の直接の結合から生じて來るところの、費用や時間についての大なる節約が玆では、大工業の生產物に對して、極めて頑强な反抗を與へる。蓋し、大工業に依つて供給される生產物の價格中には、商業の到る處に穿通されてゐる流通行程の上の空費も含まれることになるからである。他方に、ロシアの商業は、イギリスの商業とは異なりアジア的生產の經濟的基礎に手を觸れることがない。（エンゲルス註。ロシアが、國內市場と隣接アジア市場とに專ら支持されるところのそれ自身の資本制生產を展開せしめようとする痙攣的な努力をなすに至つて以來、以上本文に說くところの事實も、亦變化し始めた。）

以上『資本論』第三卷第一册　三一七―八頁。
高畠氏改譯本第三ノ上　四一一―三頁

『兩極相接』の理によつて、マルクスの思想中に取り入れられた『アジア的』は、其の『支那論』に顯はるゝところでは、未だ甚だ漠然たるものであつた。唯だ、ヨーロッパの革命に對する『狐苦狸樸』であつたに過ぎない。而して、彼は、其の『狐苦狸樸』の作用を、餘りに短兵急に眺めた。しかし、一度『アジア的』を捉へたマルクスは、其れを何時迄も、漠然場裏に放擲しては置かなかつた。彼は、恐らく、其時以來絕へず、支那の經濟事情に注意を拂つたらうと思はれる。唯だ不幸にして、彼れの筆によつて、其結果の傳へられたものが一つも――私の知り得た限りに於いて――存してゐない。リアサノフ氏（前揭書三七四頁）は、一八六二年七月七日の『プレッセ』から簡單な一句をあげて居る。其れによれば、マルクスは、明かに、長髮賊の亂に對する見解を變へてゐる。

其變化を、最もよく示めすものは、右に引いた『資本論』第三卷の一節である。即ち、彼は、『アジア的生產の經濟的基礎』の容易に拔くべからざるものなるを、明かに認めるに至つてゐるのである。『支那論』に於いては、『經濟的』は未だ正面的に觀られてゐない。マルクスは、ヨーロッパの立場から支那を眺めた。而して、其の甚しき樂觀を形づくつた。アジアを槪觀すること多くなるにつけ、樂觀は、思索によつて置き換へられた。彼は、『經濟學批判』緖論（四二―四三頁。本誌六月號五三頁に引くところの）に於いて、『ブルヂオア經濟學も、ブルヂオア社會の自己批判が始まるや否や、始めて、封建的・古代的・東洋社會を理解し得るやうになつた』

と云つてゐるが、其れは、一面、彼自らの進展の跡を物語つてゐるものであらうと思はれる。即ち、此句を言ひ換へて『私は、ブルヂオア經濟學について、ブルヂオア社會其ものの批判をなすや否や、始めて、東洋社會を理解し得るようになつた』とすることも出來るように考へられる。彼は『資本論』第三卷の右引用の一節に、自ら脚註してゐる。曰く、『失敗に終り、而して遂に馬鹿げた(實行に於ては破廉恥的な)經濟的實驗の歴史を、何等かの民族の歴史について求むるとならば、印度に於ける英國人の經濟は、それを供する。ベンガルに於いては、彼等は、英吉利流の大なる土地所有のカリカトールを、東南印度に於いては、過小土地所有のカリカトールを創設し(譯者註、我邦の『小農創設』の熟字借用)、西北に於いては、土地共有に基く印度の經濟的共同體を、力の及ぶ限り、(傳來の共同體)其れ自らのカリカトールに變造した。』と。(第三卷第一册三一八頁。脚註五〇、高畠氏譯本同上四一三頁脚註(五十一)。茲の高畠氏譯は、少し改正を要すと思ふ、よつて、試みに若干、改めて置いた。)

英吉利の印度土地政策を斯く罵倒するマルクスは、『アジア的』について、彼自ら速斷に過ぎてゐた過去を懺悔しつゝあるものではあるまいか。但し、これは、私に於いての極めて大膽なる忖度たるにすぎないこと勿論である。ロシアが手を觸れることなかつた『アジア的生產の經濟的基礎』に手を觸れた――而も亂暴に――英吉利は、東洋社會を理解せざるも甚しい過を犯したものに相違ない。しかし、長髪賊の亂を逸早くも、『孤苦理悽』の動き出したと見たマルクスも、其時には、未だ東洋社會を、十分には、理解してゐなかつたのではなからうか。

(二十七)

しかし、私の斯く云ふは、マルクスの支那觀――それには、『經濟的』は殆んど其跡を示してゐないところの――のみについてである。印度については、事態甚だ異る。マルクスは、初めからの英吉利の印度政策の徹底的批判者であつた。彼の印度論は、彼の支那論とは、到底日を同ふして談ずべきものではない。彼の印度研究は、支那研究よりも數段の上にあるものである。而して、彼は、支那に對するより更らに數倍の注意を、印度に對して拂つてゐたことは、疑ふべくもない。それは、彼が倫敦に住んで居、而して、當時印度問題は、英國に於ける大問題であつた爲めもあらう。また、研究材料の遙かに豐富であつた爲めもあらう。兎に角、彼の印度論は、決して簡單に取扱ひ去るべきものではない。其内容から見ても、更らに、其れが、『アジア的』『東洋社會』『アジア的生產の經濟的基礎』の解釋に於ける重要さから見ても。否、『資本論』にまで降り來るとき、我々は、マルクスが『アジア的』と『印度的』とを、殆んど同義語として使用してゐるを見出すことは、私の前段若干の引用の明かに示めすが如くであるのである。

從つて、私の吟味は、其焼點を、マルクスの印度に關する若干の跋

言に集中せねばならぬこととなるのである

私は、此の吟味を、先づ、前段既に言及して置いたところの（本誌六月號（其二）四二頁以下）一八五三年六月十日起稿の『印度に於ける英吉利の支配』から始める。

マルクスは、先づ云ふ。

『英吉利人が、ヒンドスタンの上に急呪し出した窮狀は、ヒンドスタンが從來被つた一切のものに比べて、根本的に異るものであり、而して、限りなくより深い作用を持つものであるは、一の疑を容れないところである。但し、私が、斯くいふは、すべてのアジア人に强課せられた英吉利東印度會社のヨーロッパ的專制政治（略）のことではない。これは、決して、ひとり、英吉利の植民地支配にのみ限られた特色ではない、和蘭の其れの一模倣たるに過ぎないのである。英吉利東印度會社の所爲を示めすには、ジアヴアの英吉利總督（筆者註。此人後に海峽植民地の開拓者、つづいて同總督となる。今も、新嘉坡には、其の記念碑あり、其名を冠する圖書館あり、海峽植民地の大恩人と崇めらる。）サー・スタンフオード・ラッフルスが昔しの和蘭東印度會社について云つた文の旨を、文字通りに繰返しさへすれば十分に足りる。（引照略す。）（筆者註、此引照は、ラッフルス一代の名著として知られる『ジアヴア史』第二版第一巻一六八頁にあり）

すべての市民戰、侵略、征服、飢饉は、ヒンドタスンに續發して、其作用は、甚だ顯著に、複雜に、迅速に、而して、滅亡的に見へるけれども、其等は、實は唯だ表面に觸れるにすぎない。これに反し、英國は、印度の社會秩序の全骨組みを破壞し去り、今日まで、何等の再生の兆候だも、これを見るを得ないのである。猶き世界はこれを失ひ、代るべき新世界を與へられざるヒンドウ人の窮狀は、實に悲慘極る姿を呈してゐる。而して、英吉利人によつて支配せられる今日のヒンドスタンは、其の全過去の一切の古い傳統からも、歷史からも、全く切り放たれてゐるのである。』（『マルキズムの旗の下』第一年度三八六頁）

マルクスは、また、云ふ。

『農業の壓迫と閉却とは、甚だ惡いことのようには、見へるけれども、これは、決して、英吉利の侵入者によつて惹き起された印度の社會秩序崩壞の最近の原因と看做すべきものではない――若しも、それが、全く異つた意義を有つ諸々の事情、全アジア世界の歷史の記錄に於ける一の新現象によつて、伴はれてゐなかつたのならば。

印度の過去の政治圖は、如何に、變化多きものであつたとしても、其の社會秩序は、最古の時代から十九世紀の初十年に至るま

では、何等の變化を見なかつたのである。（略）英吉利の侵入者等は、印度の手織機を打ちこわし、其の紡ぎ車を寸斷した。かくて、英吉利は、印度の木綿製品をヨーロッパの市場から驅逐し去つた。』同上三八七頁。

支那については、唯だ其の政治的方面を見て、而して、英吉利の巨砲の威力を最大の動因とし、其の巨砲から打出す砲彈は、かへつて、ヨーロッパの反革命者流の上に落下し來る外ないことを考へて、これを歡迎したマルクスは、印度については、斯くも著しく異つた見方をしてゐたのである。其れは、卽ち、彼れが、印度の社會秩序破壞の『經濟的』を十分に看破してゐたからに相違ない。冗言を費やすことを許さるゝならば、彼は、明かに、其の唯物史觀の照魔鏡に、英吉利の印度政策を映ぜしめつゝあつたのである。

（二十八）

私は、前段六月號（其二）五三頁以下に於いて云つて置いた。『マルクスが、「アジア的」といふのは、遊牧民族の孤立散團式共有ではなく、家族乃至種族團體の共有形態のことであり、而して、マルクスは、それを、原始的形態、原始發生的形態と見るものであることは、疑を容れないと思ふ。卽ち（略）『資本論』第一卷の『彼の原始古代的なる小さきインドの共産體』と全然同一の意味を有つものと解すべきが如くである。右「經濟學批評」緒論中の數節と照合して見る可き文獻は、（略）マルクスの『印度論』及『經濟學批評』の本文第九頁の脚註である。前者に於いては、マルクスは、『共有』といふ文字は、明記しては居らぬが、インドの村落制度を論じてゐるので、其處には、次の如く云つてゐる』と。

今、私は、其文について、更らに、立入つて吟味して見なければならないのである。よつて重複を厭はず、玆に、再び其文を引く。

『二つの事情、卽ち、一方には、インド人は、總べての東洋民族と同樣に、農業及商業の土臺たる大仕掛な公共（土木）事業の經理を、中央政府に、全然委ねてゐると云ふ事實。他方には、此の農業、此の商業は、全國に彌つて散在し、農業的及手工業的勞働は、家庭內に結合せられるによつて、唯だ小なる諸々の中心に綜合せられてゐるといふ事實、――此等二つの事情は、考へ得る限りの昔以來、一の特殊な社會制度、卽ち、所謂村落制度を產み出した。』『マルクス主義の旗の下』第一年度三八八頁

私は、今私の吟味に方つて、輕からぬ重要を持つところの、右引用の續句を、更らに、玆に追加せねばならぬ。曰く、

『而して、此制度によつて、此等の小なる諸中心の各々は、其の獨立の組織と、其の固有の生命とを得てゐたのである。今、此制度

の特殊な性質については、印度事情に關する英國下院の一の古い官府報告から取つた記述によつて、其一斑を窺ふことが出來る』

同上頁

かくて、玆に、マルクスが、印度の村落制度の記述の標本として右文にあげたところの『英國下院の一の古い官府報告』なるものが、重要なる關係を有つこととなる。私は『マルクスは、「共有」といふ文字は、明記しては居らぬが』と言つて置いた。唯だ一八五七年の『緒論』中の數節と合せ考へて、マルクスが『アジア的』と云ふのは、家族乃至種族團體の共有形態のことであり、而して、彼は、これを、原始的形態と見たものであるは、疑を容れないと思ふと言つた。私は、また言つた。『リアサノフ氏が、右『經濟學批評』の脚註の意が、マルクスによつて、一八五三年に於いて、既に已に道破されてゐるといふマルクス其文の個所とは（略）インド村落制に關する部分であらう。然し、其處にも、又た右文中何れの場所にも、共有制に就いては、マルクスは、明かには、一言も云つてゐない。唯だ、彼の意を付度して考へて見れば、共有村落制のことを眼中に置いて居ただらうとは云ひ得る。然し、其れには、多少の附加的解釋を要する。』（本誌六月號四三頁。）と。而して、私は其の附加的解釋を後段に試みる所存であつた。而して、其れは、無論右云ふ官府報告なるものを尋ね出しての後でなければならぬと考へてゐた。

ところが、私が右一節を認めたとき、マルクスの出典たる其の『英國下院の一の古い官府報告』なるものを元より見ることが出來ず、否、其れは、何れの年の何の報告のことであるかすらも、これを知ることが出來なかつた。何となれば、マルクスは、其出典を全く示して居らないから。爾來、私は、力の及ぶ限り、其れを探索して見た。而して、其結果は零であつた。若しも、今より一年の前其事に氣が付いてゐたならば、私は、左まで徒勞を費やさずして濟んだであらう。何となれば、私は、大英博物館と呼應の間に暫時の滯在を爲してゐたから。然るに、東京へ歸つて來た後氣が付いたのでは何んにもならない。私は私の迂闊を幾たびか自ら嘲つた。

ところが、其後、私は——鬼神の加護によつてといふのは大げさであらうが、自分は、殆んど其樣に感じた——幸にして、其原文を見出した。而して、私は、マルクスの言ひ廻しの巧妙なのに惑はされてゐたものなるを見出した。何となれば、マルクスは、『一の官府報告』と云つて居るのでなく、『一の古い官府報告から取つた記述』と云つてゐるのである。果然、マルクスは、一の官府報告から取つたのではない、一の官府報告から取つた記述から、更らに、孫引で取つたのであつた。私は官府報告ばかり見がけて居たから、其れは、東京に居ては迚も見られないと極めて仕舞つたのである。私は、早まつた。『から取つた記述』の一添語が、私の鈍い眼に意味あるものとして映じ出したのは、私に鬼神の加護と感ぜしむる或る偶然事であつたのである。

かくて、マルクスの出典を知り得た私は、右所引の前段の一節に於いて、マルクスは、『共有制度』を眼中に置いてゐたものだと思ふといふ私の忖度を述べた一條は、全然妄斷であつたことを見出したのである。同時に、私の妄斷に示唆を與へたリアサノフ氏の言に對しては、論とは正反對に、私は、著しい疑惑の眼を張らなければならぬことを悟つたのである。——私は、私の此小論文の大要なりとも、何れは、西洋語を以つて認めて、彼地の先覺の教を乞ふつもりである。就中、リアサノフ氏には、私の負ふところ大であるだけ、必ず氏の叱正を乞はうと思つてゐる。——

（二十九）

さて、マルクスが『一の古い官府報告から取つた記述』といふものは、實は、我々が、日本に居ても容易に見得る、而して マルクスが、『資本論』に引用してゐるとして、私が前段（本誌六月號（其二）四九頁。）にかゝげて說いたところのラツフルスの著『ジアヴア史』中にのせてあるのである。

今左に、マルクスの引用を、リアサノフ氏獨譯のまゝと、次に、ラツフルス書中の引用とを相並べて掲げて見る。——かくするは、マルクスの『對グリユーン』や、河上博士のバラノフスキー・福田對照文の眞似をするつもりでは毛頭ない。——

Unter dem Banner des Marxismus. I. Jahrg. 19‥6. S. 383-38?.

"Ein Dorf ist, geographisch betrachtet, ein Landstück, das einige hundert oder tausend Acres von Acker- und Brachland umfasst. In politischer Hinsicht ähnelt es einer Stadtgemeinde. Sein Beamten- und Angestelltenstab wird wie folgt gekennzeichnet: Der Potail oder das Haupt der Gemeinde, der im allgemeinen den Dorfangenheiten vorsteht, Streitigkeiten der Einwohner schlichtet, den Polizeidienst beaufsichtigt und die Steuern in seinem Dorfe einzieht, eine Obliegenheit, für die ihn sein persönlicher Einfluss und seine genaue Vertrautheit mit der Lage und den Angelegenheiten der Bevölkerung am geeignetsten macht. Der Kurnum beaufsichtigt die Bodenbestellung und registriert alles, was damit zusammenhängt. Es folgen der Tallier und der Todie. Die Aufgabe des ersteren besteht in Beschaffung von Informationen über Verbrechen und Vergehen, sowie in Eskortierung und Schutz von Personen, die von einem Dorfe zum anderen reisen; das Wirkungsbereich des letzteren scheint sich dagegen mehr auf das Dorf selbst zu beschränken: seine Funktion besteht unter anderem im Schutze der Ernte und in der Mithilfe beim Abschätzen derselben. Der Grenzmann bewacht die Dorfgrenze, erteilt auch in Zweifelsfällen Aufschluss über deren Verlauf, der Aufseher

der Wasserbehälter und Wasserleitungen verteilt das Wasser für die Landwirtschaft, der Brahmane besorgt den Gottesdienst des Dorfes, der Schulmeister lehrt die Dorfkinder das Lesen und Schreiben im Sand, endlich der Kalenderbrahmane oder Astrologe usw. Diese Beamten und Funktionäre bilden im allgemeinen den Verwaltungsapparat des Dorfes. In manchen Teilen des Landes ist jedoch dieser Apparat nicht so differenziert, da mehrere der geschilderten Obliegenheiten und Funktionen in einer Person vereinigt werden. In anderen Teilen überschreitet er dagegen die erwähnte Beamtenzahl." Unter dieser einfachen Form der Gemeindeverwaltung lebten die Einwohner seit unvordenklichen Zeiten. Die Grenzen der Dörfer wurden nur selten geändert, und obwohl die Dörfer selbst zuweilen durch Krieg, Hungersnot oder Krankheit in Mitleidenschaft gezogen oder gar zerstört wurden, blieben die Namen, die Grenzen, die Interessen ja selbst die Familien Jahrhunderte hindurch dieselben. Die Einwohner kümmerten sich weder um den Zusammenbruch noch um die Aufteilung von Königreichen. Blieb ihr Dorf unversehrt, so kümmerte es sie nicht, unter wessen Macht es geraten war bzw. welchem Herrscher es untertan war. Seine innere Wirtschaft blieb von alledem unberührt. Der Potail verblieb auch weiter das Haupt der Gemeinde und übte unbekümmert seine Funktion als Dorfschulze oder Ortsvorsteher und Steuerbeamter des Dorfes aus.

Raffles' History of Java. 2. E. 1830. vol. I. pp. 317-319.

Such appears to have been the internal regulation of these villages; and it seems to have been framed according to the ancient usage of the island, the similarity of which to that of Western India has been adduced as a strong instance of one common origin. *

* With the exception, perhaps, of the right of election, which I have not seen noticed in any account of Continental India, the constitution of the Java village has a striking resemblance to that of the Hindus, according to the following statement in the Fifth Report of the House of Commons on Indian Affairs. "A village, geographically considered, is a tract of
" country comprising some hundreds or thousands of acres
" of arable and waste lands; politically viewed, it resembles
" a corporation or township. Its proper establishment of offi-
" cers and servants consists of the following descriptions:

" the Potail or head inhabitant, who has generally the super-
" intendance of the affairs of the village, settles the disputes
" of the inhabitants, attends to the police, and performs the
" duty of collecting the revenues within his village, a duty
" which his personal influence and minute acquaintance with
" the situation and concerns of the people render him the
" best qualified to discharge. The Kurnum, who keeps the
" accounts of cultivation, and registers every thing connected
" with it. The Tallier and Totie, the duty of the former ap-
" pearing to consist in a wider and more enlarged sphere of
" action, in gaining information of crimes and offences, and
" in escorting and protecting persons travelling from one
" village to another; the province of the latter appearing to
" be more immediatly confined to the village, consisting
" among other duties in guarding the crops and assisting in
" measuring them. The boundary man, who preserves the
" limits of the village, or gives evidence respecting them in
" cases of dispute. The superintendant of tanks and water-
" courses, distributes the water therefrom for the purposes
" of agriculture. The Bramin, who performes the village
" worship. The schoolmaster, who is seen teaching the child-
" ren in a village to read and write in the sand. The calen-
" dar Bramin or astrologer, &c.

" These officers and servants generally constitute the establish-
" ment of a village; but in some parts of the country it is
" of less extent, some of the duties and functions above
" described being united in the same person: in others it
" exceeds the number of individuals which have been descri-
" bed.

" Under this simple form of municipal government, the
" inhabitants of the country have lived from time immemo-
" rial. The boundaries of the villages have been but seldom
" altered; and though the villages themselves have been
" sometimes injured, and even desolated by war, famine, and
" disease, the same name, the same limits, the same interests,
" and even the same families, have continued for ages,
" The inhabitants give themselves no trouble about the brea-
" king up and division of kingdoms; while the village re-
" mains entire, they care not to what power it is transferred,
" or to what sovereign it devolves; its internal economy
" remains unchanged. The Potail is still the head inhabitant,
" and still acts as the petty judge and magistrate, and collec-

"for or wider of the village."

マルクスに對する剽竊呼はりは、今日に至るも其跡を絶たない。チエルケゾフから始めて、ラブリオラ、ラムスに至るものについては、カウフキーの解嘲文が最終の決定を與へたと言はれてゐる。これについては、三田學會雜誌に、小泉教授門下の平井新氏が詳細な紹介を試みて居られると云ふことを聞いた。但し、私は、不幸にして、洋行中、其文を見ない。ゾムバルトのマルクス種本明しも餘り贊成者を見出してゐない。マルクス自らグリユーンに對しては、こつ酷く、また外の人に對しても詰らないことで屢々剽竊呼りをしてゐる。剽竊指摘は、一時の興味としては堪へ難い試惑を供するものと見へる。其の反對に剽竊呼はり、甚しきは泥棒呼はりをされるのは、決して心持のいゝものでないことは、河上博士及博士門下の方々から度々其見舞を受けた私の十二分に體驗してゐるところである。從つて、私は、今、茲に業々しく、マルクスに對して剽竊呼はりをしようといふ存念は、些もこれを有つてゐない。唯事實有りの儘を、其證文によつてあげるに止める。

紐育トリビユーン新聞を今見ることを得ない私は、其責任がマルクス彼自らにあるか、又はリアサノフ氏にあるかを判定する便を持たぬものであるが、假りに、リアサノフ氏の獨譯が原文通りであるものと推定するときは、ラツフルスが引用標を明かに附してゐる句を、マルクスは、ラツフルスから孫引しつゝ、而もこれを自分の文句としてゐること、右對照文の『此の單純なる形態の下に於いて』以下が、明かにこれを示してゐる。しかし、それは、一八五三年の右『印度論』に於いてのことである。マルクスは同じく此句を『資本論』第一卷（ハムブルグ版では三二三頁、民衆版では三〇五頁）に引いてゐて、而して其註には、明かにラツフルス著『ジアヴア史』の出所をあげてゐる。但し、マルクスは、此書の一八一七年版第二卷二八五頁としてゐる。私は此版を見る便を有たぬ。私の今見つゝあるのは、一八三〇年刊の其第二版であつて、其版には、此句は、右示した通り第二卷には全く見出されず、第一卷の三一八－九頁にある。第一版と第二版とは、左樣にも差異のあるものか否か、私はむしろこれを怪かる。而して、第二版は一八三〇年に既に刊行されてゐるのである。之れは、マルクスの印度論起草に先つ二十三年前に屬する。マルクスが此版によらずして、わざ〳〵第一版を引いた理由は、私には分らない。

剽竊云々は兎に角、孫引と燒直しの事實は、かくして、私には、明白なるかのように見へる。しかし、左樣なことを業々しく鬼の首を取つたように指摘するつもりを少しも持たぬ私が、わざ〳〵此事を茲に是非記さねばならぬのは、其事自らの爲めではない。それが、私の當面の吟味に輕からぬ關係を有つてゐるからである。然らば、其れは何事の謂であるか。

（三十）

事は少し錯綜してゐる。私は、出來るだけ簡明に、これを、記錄して見よう。これは、私の吟味に取つて、殊に私の盲斷を訂すについて、よく〳〵讀者に理解して置いて頂く必要があるから。

私は前段(本誌六月號十二頁)に云つたことを三度玆に繰返さねばならぬ。『リアサノフ氏は、其(右『印度論』の)解説に於いて、マルクスの此文を注意して讀むときは、彼が、一八五〇年代に於いて、即ち、サー・ヘンリー・サムナー・メーン(一八六一年『古代法』刊行)及其門弟等の諸著作の顯はるゝより久しい以前に於いて、彼が、其の『經濟學批評』中の一脚註中に於いて明言したことを、既に已に確信してゐたことを知り得るのであると云つてゐる。其の脚註とは、右書前掲版第九頁にある次のものを指して云ふのである。(脚註文略す)リアサノフ氏が、右『經濟學批評』の脚註の趣意が、マルクスによつて、一八五三年に於いて、既に已に道破されてゐるといふマルクス文の其個所とは、恐らく(略)インド村落制に關する部分であらう。然し、其處にも、又右文中何れの場所にも、共有制に就いては、マルクスは、明かには、一言も言つてゐない。唯だ、彼の意を忖度して考へて見れば、共有村落制のことを眼中に置いてゐただらうとは云ひ得る。然し、其れには、多少の附加的解釋を要する』(以上二度引く)『ソコデ——でであらう——リアサノフ氏は、其部分に脚註して、『資本論』第一卷(ハムブルグ版一九一四年)の第三二二及三二三頁を參照せよとしてある』『一八六七年刊の『資本論』第一卷に、マルクスがインドの共有制について云つたことは、既に一八五三年に於いて、判然と彼の看究めて居たところであること、リアサノフ氏の主張する如くであるならば、私は、私の當面の吟味について、力強い支持を授けられたことになるを喜ばざるを得ないのである。而して、資本論第一卷中に於いて、マルクスが、共有制について、記したところのものが、何れも、由來久しいものたることが確められるのである。』

右言の第一段はこれを撤回せねばならぬことは、既に言つた。其の第二段については、私の言は精密であつたのである。何となれば、私が既に言つて置いた通り、マルクスは、共有制度のことは一言も云つて居らないのみならず、今、私が見出したマルクスの藍本たるラッフルスの書は、共有制度に何の關係なく、右官府報告を引用したものたるのみならず、彼は、ジァヴァには、共有、共產の事實存せざることを、明かに斷言してゐるものであるから。

先づ、ラッフルスの言ふ所を聞かねばならぬ。マルクスの援引した右一句は、村落の組織 Village Constitution (Vol. I. p. 175) のみに關するのである。而して、其の記述は『司法行政』Administration of Justice (Vol. I. pp. 309—327) の中に、これを見出すのであつて、土地所有、一般所有制度のことには何の關するところはないのである。土地所有制度のことは、ラッフルスは、別に『土地所有制度』Tenures of land (Vol. I. pp. 151—181) の項において詳述してゐる。而して、其

證には、最も明白な言葉を以つて、共有制度の全然ジァヷァに存せざることを記述してゐるのである。」

其證文を左に示さう。(紙面節約の爲め原文のみを掲ぐ。)

Thus the Ryot, the Zemindar, and the Sovereign, had each his pretensions to the character of the landholder. After much cautious inquiry and deliberate discussion on the part of our Indian government, the claims of the Zemindars rather perhaps from considerations of policy than a clear conviction of their superior right, were preferred. In Java, however, except in the cases of a few alienated lands and in the *Simda* districts,......no such pretensions are heard of as those which were advocated on the part of the Zemindars of western India; although inquiries to ascertain the equitable and legitimate rights of all classes of people, were known to be in progress, and a plan was declared to be in contemplation for their permanent adjustment. From every inquiry that was instituted under the British government, and every fact that was presented to the view of its officers, it appeared that, in the greatest part of the island, in the eastern and middle districts, and in short in those provinces where rent to any considerable amount was attainable, there existed no prietary right between that of the sovereign and that of the cultivator, that the government was the only landholder. Vol. I. pp. 151-2

——筆者語右一句をマルクスは、一八五三年六月十四日付、エンゲルス宛書翰中に、孫引してゐる。本誌六月號五六頁——

To this general principle of Javan law and usage that the government is the only landholder there are exceptions as I mentioned before, in some districts of the island.........And among them, Private property in the soil is generally established............p. 153

Thus stands the question with regard to the proprietary right to the soil in Java; but it is of more consequence in an agricultural point of view, and consequently more to my present purpose, to inquire how that right is generally exercised, than in whom it resides. Though the cultivator had no legal title to his hands, there might still be such a prevalent usage in favour of his perpetual occupancy, as would secure him in the enjoyment of his possession, and enable him to reap the fruits of his industry equally with the protection of his positive law.

But unfortunately for the prosperity of the people, this was

far from being generally the case. The cultivator had little security for continued occupancy, but the power, on his part, of enduring unlimited oppression without removing from under it, or the interest of his immediate superior in retaining a useful slave; and as he could not expect to reap in safety the fruits of his industry, beyond the bare supply of his necessities, he carried that industryno farther than his necessities demanded. Vol. I. pp. 159-160

The land allotted to each separate cultivator is managed by himself exclusively; and the practice of labouring in common, which is usual among the inhabitants of the same village on continental India, is here unknown. Every one, generally speaking, has his own field, his own plough, his own buffaloes or oxen; prepares his farm with his own hand, or the assistance of his family at seed-time, and reaps it by the same means at harvest. Vol. I. pp. 163.

以上によつて、少くとも、ラツフルスに據るジアヴアには、土地共有の事實も、共同耕作の事實も、寸毫もこれを見出すことを得ざること、而して、ラツフルスのジアヴア村落制と印度村落制との類似性に關する引照は、土地共有制度には、何等の關係もないものであること、斷じて疑を容るゝ餘地はないのである。

(三十一)

リアサノフ氏は、一八五三年とは十四年を距つる一八六七年刊行の『資本論』第一卷から、わざ〳〵『彼の原始古代的なる、小さき、インドの共產體』云々の一節を、此村落制度記述の參照として、其脚註中にあげ乍ら、マルクスの記述が、ラツフルスからの孫引と而して燒直しなることについては、何等の脚註をも添へて居らぬ。綿密周到を以て、現今マルクス學の眞正の意味に於ける——然らざるものは内外共に澤山あるが——第一人者を以て聞ゆる氏としては、これは甚だ奇とすべきところである。脚註すべからざることが脚註され、必ず脚註されねばならぬ——私は確く信ずる——ことが脚註されぬ。思ふに、氏は、マルクスは、確かに、共有、共產の村落制のことを意味したものであるとの豫斷に、餘りに强く支配せられて、文獻的精密を犠牲とし、却つて文獻的不穩當事を敢てするに到つたものではあるまいか。左様でないならば、『彼の原始古代的なる、小さきインドの共產體』は、マルクスの當該記事の參照文としては、餘りに突飛的にかけ離れてゐることは、氏に於いて、疾くに氣付くべかりし筈である。

私は、此の異例——之れが、リアサノフ氏でないならば、異例とは云へない。マルクス盲信家の多數に於いては、却つて、其れは、常例

と云ひ得るかも知れないが——の依つて來るところを知るべく、若干の考慮を致した。而して、其結果、之れは、一の Schönheitsfehler 日本語で云へば、ひいきの引倒しの一例ではあるまいかと云ふことに思ひ到つたのである。

其のひいきの引倒しとは何を云ふか。

其れは、私が前段ラッフルス・マルクス對照文中の『此の簡單なる形態の下に』以下に添記して置いた、ことこれである。

『此の簡單なる形態の下に』以下のラッフルスからの孫引句は、一八五三年の『印度論』にも資本論第一卷にも、同樣に見出される。唯だ、『印度論』に於いては——リアサノフ氏の譯を忠實なるものと假定すれば——之れは、マルクス自らの文句となつて居る。河上博士が嘗て私に惠まれた語を拜借すれば、之れは疑ひもなく、『無斷借用』の一例である。資本論に於いては、一二語を略したのと、from time immemorial と云ふ立派な原文の英文を since time immemorial と云ふむしろ拙い英文に書き改め——書き損じて？——たのとを除いては、原文通りにあげて、而してチャント其出所が明記されてゐる。——但し其のあげ方に疑あることは、前に云つた——。若しも、『印度論』に於けるマルクスが、本當に『一の古い官府報告』から其文を得來つたものならば、此句も、其中にあるのであるから、當然其報告を出典としてあぐるか、若くは、ラッフルスより引くとあぐるか、又は、少くとも引用標を附けるべき筈である。然るに、事實は、彼は、其の官府報告から取つたのでないことは、『資本論』に於いて、孫引の元たるラッフルスをあげてゐるによつて明かである。ラッフルスを見ずして、『資本論』のみを見る讀者は、其れは、ラッフルスの言だと思ふに相違ない。事實は然らずラッフルスも亦引用してゐるにすぎない。原文は、即ち右の官府報告であることは、ラッフルスは、チャントこれを示してゐるのである。即ち、同一の官府報告中の一句は、『印度論』に於いては、マルクス自らの文句となつて居り、『資本論』に於いては、其れは、ラッフルスの文句となつてゐるのである。原文の筆者は、定めてマゴツくことであらう。若しも、これがマルクスの論敵の爲すところであつたならば、其人は、マルクスによつて、最上級の罵辭をあびせかけられることを覺悟せねばなるまいと考へられる。

ところが、滑稽は、これから起る。

リアサノフ氏は、『印度論』に於いて、マルクスの句たるものが、『資本論』に於いて、ラッフルスの句となつて居ることから、推理の力を發動せしめて、彼の印度論の村落制の記述は、『資本論』第一卷の『原始古代的なる、小さき、インドの共產體』に係るものと斷定するに至つたものと考へられる。何となれば、其外には、兩記事を結び付くべき連鎖は、一も存しないから。すなはち、マルクスの孫引法の巧妙はリアサノフ氏を一の錯覺に導き入れて、ソコに見えざる連鎖を發見せしめたのであらう。否、マルクスの其れが詐いたのではない。リア

サノフ氏のマルクスに對する無限の信仰が、文献的の一噴飯事に於いてすら、遂、最上級の解釋法を發動せしめた。其結果、リアサノフ氏は、其自ら作り出した錯覺の陷穽に落ち込んだのではあるまいか。

兎にも角にも、文献的の一『ミスグリッフ』が、リアサノフ氏によつて、其れは、サー・ヘンリー・サムナー・メーンを嘲るに足るべきマルクスの卓見の一證左にまで引上げられたことは、疑ないといつてよからう。

孫引が子引となり、又は、其れが剽窃となつたと云ふことの如きは、私にとつては、何れでも構はないことである。唯だ、一の文句が十四年を隔てゝ二つの異つた形態の下に顯はれてゐるといふことが、共有制度の認否について、斯くも、重大な役目を爲したといふことは、私は、私の吟味に於いて、看過し得ないのである。

マルクスは存生中、極めて惠まれざる生活を送つた。我々は、一念此事に到る毎に、むしろ天を恨まざるを得ざるのである。之れに反し、死後のマルクスは、特惠者中の最特惠者となつた。其名は、ヤハの名よりも崇められ、其言はヤハの言よりも信ぜらる。唯其の一『ミスグリッフ』さへも、斯くまで重要視すべきものなることを知つたのは、リアサノフ氏の賜と感ぜざるを得ぬ。而して、其れが、私の當面の吟味に、淺からざる關係を有つことを知り得たことを、一の奇緣と思ふ。

然し、これは、未だ印度共有制の本體に入らざる前の出來事である。其の本體に入るとき、ラッフルスはキアムブルによりて代位せられて、更らに、一層込入つた場面を展開し來るのである。私は、此小論文既に讀者の倦怠を招きたることを恐る。私は、出來る丈け、簡單に、私の吟味を進行せしめねばならぬ。

(以下嗣出)

七月七日夜追記。今朝の新聞廣告で、小林良正氏譯『マルクスの支那印度論』(希望閣刊)の發刊を知り、急ぎ一本を求めて見た。譯は、原文からでなく、リアサノフ氏からの重譯であるが、誠に立派に出來てゐる。但し處々改正の望ましいところがある。殘念な事には、私の議論した箇所には(へ、四五一頁)引用標が附してない。また、東洋で誰知らぬものない英國總督がラフレスと云ふドイツ人らしい名になつてゐる。

前號分正誤表

頁	行	誤	正
二七 下段	七	態。の	態の。
三一 〃	二	聽いて	聽いて見
三三 上段	一五	次ぐて	次ぐで
三四 下段	一一	美事なものて	美事なもので
三六 下段	一〇	一九、二、五年	一九二五年
三七 下段	四	文献	文献』
〃 〃	一〇	チューリング	『チューリング』
三九 下段	四	ドイチッエ	ドイッチエ
四一 上段	四	凡てば	凡ては

四三	下段	一三	海上	海上商
四四	上段	八	批	批評
五〇	下段	一五	ふ。は	ふ。私は
五一	〃	二一	私有財制産	私有財産制
五九	上段	一三	τὸν	τὸν ἐμὸν
〃	下段	六	νουέω σὸ	νουέω σε
六四	上段	一二	文字	文字
〃	下段	四	Gran	Grans
〃	〃	八	S ine	seine
〃	〃	二〇	19 5	1925
六五	上段	三	18 8	1848
六五	上段	一八	Au. 20	Auf. 1920
〃	下段	二	D r	Der
〃	〃	八	Jahr ang	Jahrgang
〃	〃	一七	Bind	I Band
〃	〃	一八	mi ère	misère
〃	〃	一八	a	à
〃	〃	一九	misére	misère
六六	上段	三	Pütltmanns'	Püttmanns'
〃	〃	五	bls	bis
〃	〃	七	Chennnd	chen und
〃	〃	九	Complétes…édition	Completes…édition
〃	〃	一七・八	misére	misère
〃	〃	二一	Biel feld	Bielefeld

左翼帝國主義理論の自殺

—猪俣其他左翼理論家諸君の駁論の駁論—

高橋龜吉

一、猪俣氏一派の駁論の構へ方

四月號の「太陽」及び「社會科學」に出した私の二つの論文、「日本資本主義の帝國主義的地位」並に「末期に於ける帝國主義の變質」に對し、今月號（六月號）の諸雜誌に於て、猪俣津南雄氏（改造）、佐野學氏（マルクス主義）、野呂榮太郎氏（太陽）、成瀨光雄氏（大衆五月號）の錚々たる左翼理論家の諸君が、轡を揃へてその駁論を發表せられた。

この問題が、斯く、諸君によつて大問題にまで取扱はれたことは、問題の提出者として先づ何よりも光榮とする所である。而して、私が此の問題を提出した目的の一半は、之によつて已に達せられたわけである

然るに、いま諸氏の駁論を見るに、何れも問題の急所に觸れたものなく、全く見當違の點をホジクリ返されてゐる憾が多大である。これでは、私の提出した問題の趣旨が、少しも理解せられてゐないやうである。之れ、玆に私が、改めて諸氏の駁論を更に駁論せざるを得ざるに至つたわけである。

しかし、いま私に與へられた紙面には限りがある。四氏の所論全體に亘つて、之を駁論する余地がない。そこで、こゝには先づ、猪俣氏其他の左翼理論家諸君が、私に對する駁論の構へとして、最有効であるとして撰擇せられ、これに最も力を集中せられたと見られる、その方法論的方面に對する諸氏の駁論に對する駁論を試みる。が、その方法としては、四氏の駁論の中でも、最も方法論的理論の多い、而してその理論の比較的まとまつてゐる猪俣津南雄氏の「資本主義日本の帝

國主義」（「改造」六月號所載）を、主たる對象として批判することにし、佐野氏、野呂氏の所論にも言及するであらう。而して、猪俣、佐野、野呂三氏の實證的方面其他の理論に對する駁論の駁論は、別に之を八月號の「太陽」誌上に於て、改めて批判することゝする。以上二つの駁論に依つて、現れる成績氏に對しても、間接乍ら併せて解答することが出來るであらう。

猪俣津南雄氏は、理論家の多い我が左翼陣營の中に於ても、「帝國主義」に對する造詣の最も深い學者として著名である。現に、帝國主義に關する著書論文の量に於ては、猪俣氏のそれになるものが最も多いと云つても、恐らく過言ではなからう。又、坊間傳ふるところに依ると、今度、左翼側から私の小論に對して駁論せられるについては、左翼陣營の理論家諸君が會合して研究せられ、而して、誰れがその駁論の擔任者になるかと云ふことも、色々詮衡せられて、猪俣氏が其の任に當られたと云ふ。眞僞は無論保證の限りではないが、しかし、後にも示すやうに、左翼理論家諸君の私に對する駁論が、不思議にも、皆な同じ構へであると云ふことと、右の噂とを思ひ合はすと、必ずしも火のない所に烟の上つたことでもないかのやうに、考へられないでもない。

何れにせよ、猪俣氏の本誌六月號に現はれた私への駁論「資本主義日本の帝國主義」は、大體にいまの我が左翼理論を代表する駁論であると見て、差支へないかのやうに考へられる。このことは又、例へば、左翼陣營の一理論家として知られてゐる東大助教授大森義太郎氏が、去る五月三十日の「東京日日新聞」紙上に於て、「氏の（高橋の）理論は、その經濟的方面に於ては猪俣津南雄氏（「改造」六月號）によつて……完全に、徹底的に批評し去られた」と云はれてゐることからも、さうと推想せしめるのである。

斯様なわけで、いま猪俣氏の駁論は、單なる氏一個の研究論文ではなくして、我が無産階級左翼運動の理論として、多分に實踐的意義を持つてゐる。こゝに、猪俣氏の駁論に對し、我が無産階級運動は、假借なき批判を要求せざるを得ないのである。以下私の猪俣氏（佐野、野呂兩氏に對してもさうであるが、）に對する駁論が、行文の綾に紛れて、甚だしく禮を失する場合があらうとも、右の如き意味に於て、何卒寬容せられんことを、豫め執筆者諸氏に御願ひする。

猪俣氏の駁論は、本誌の宗字に於て尙ほ二十四頁を示す堂々たる大論文であつて、その內容も可なり多岐に亘つてゐる。が、しかし、いまその中の方法論的方面に於て問題となる要點を摑めば、結局次の數項に歸するやうに考へる。

一、帝國主義とは一の世界的「範疇」であり、世界的規模に對してのみ與へられた概念である。その世界のみを測る尺度を以て、高橋はいま日本を測らんとしてゐるのであるから、テンデ問題の提起の仕方が間違つてゐる。から云ふ「氏の（高橋の）方法上の誤謬——それが過失であれ、故意であれ——はまことに致命的である。かゝる誤謬に出發する議論から引出される如何なる結論でもが、みな誤謬であると結論することはたやすい」（「改造」六月號猪俣氏の駁論六五頁）とされ、就中この點に對し多大の力を用ひられ、この一節のみで勝負を決せんとするの槪を示されてゐる。

二、歴史的に日本の帝國主義的地位を檢討するに當り、猪俣氏の見解と私の理解との間に「帝國主義」の概念に齟齬があつて、その何れの概念が、與へられた問題から見て、正しきかを檢討せねばならない。

三、日本は、一個のプチ・帝國主義國である。と云ふ私の結論に對し、氏等は色々と反駁せられてゐるが、しかし、いま氏一派と私の主張の別れる所を見るに、問題は論點の不一致にある。何れの論點が正しきかを先づ見定めなくてはならない。

四、猪俣氏は、「高橋氏の思考に於ける根本的欠陥の一つは、資本主義が資本主義として、階級が階級として把握せられてゐないことにある」(「改造」八一頁)と、從つて、諸多の矛盾と對立とがぼかされ、まやかされてゐるとされ、日本の現實的政策を論ずるに當り、何ものにも制約せられざる資本主義乃至帝國主義理論の適用を主張せられる。然るに、いま私は逆に、斯くの如き場合に、斯くの如く考へることが、氏等の「根本的缺陷」の最大なるものであると主張する。その何れが正しいか。

五、私が、現在の日本に於ては、人口問題が無産階級を驅りて解放戰爭にまで至らしむべき可能性あるを主張せるに對し、猪俣氏は極めてナイブなペダン的態度を以て、斯くの如きは、人口問題のマルキスト的把握に全然欠けてゐることに歸因するものであつて、始めから人口問題に對する取扱方を全然間違へてゐるとせられる。然るに、私は依然として然らずと云ふ。その何れの見解が正しいか。

其他の猪俣氏の所論の主なる點は、生産の集積、獨占、資本の輸出、金融資本の成立等、レーニンの云ふ所の帝國主義の特徴の最初の三つについて、理論的にも實證的にも論ぜられてゐるが、この點は、先にも言及したやうに、紙面の制限上八月號の「太陽」に於て批評するつもりである。

扨て、以上に於けるが如き猪俣氏の(而して氏に由つて代表せられる左翼理論家諸君の)堂々たる大駁論に由つて、遂にその誤謬を暴露せられるに至つたものは、果して私の論旨であるか、將又、猪俣氏自身(及び氏の代表せられる左翼理論家諸君)の論旨であるか。以下、私は、間もなく之を讀者の前に展開するであらう。

× × ×

以下に於ける論述の便宜のために、猪俣氏の「改造」六月號の駁論「資本主義日本の帝國主義」を引用する場合には、單に「猪俣氏曰く」と稱し、其他の同氏の論文より引用する場合には、その出所を特記するであらう。野呂氏の所論は全部「太陽」六月號の「プチ・帝國主義批判」によるもの故、別に出所を斷らない。又、私の主張は、全部「太陽」四月號の拙稿「日本資本主義の帝國主義的地位」乃至は「社會科學」四月號の拙稿「末期に於ける帝國主義の變質」に由るもの(因に右二論文は其他の論文と共に、「左翼運動の理論的崩壞」なる一冊子として、白揚社より最近出版された。)であつて、他の私の論策乃至著者より引用するやうな場合には、別に其の出所を特記するであらう。

二、所謂帝國主義「世界範疇」論のコケ嚇し

問題となつた「太陽」四月號の私の小論は、後ちに示すやうな書き出しに始まつてゐる。猪俣氏のみでなく、野呂、成瀬諸氏の何れもが、不思議にも皆一致して、恰かも、鬼の首でも取つた如く喜び勇んで、高橋征伐に凱歌を擧げ得たとせられてゐる所の最も「理論的（？）」駁論、即ち所謂帝國主義世界範疇論なる途方もないコケ嚇しは、私のその書き出しの數句を主としてその手品の種にしてゐられる。であるから、念のために之れを次に反覆しておく次第である。

『帝國主義國としての日本資本主義の地位は果して如何なるものであるか、と云ふことを玆にいま私が特に問題にするには、尠くとも二つの大きな理由がある。

第一に、云ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義」は、之をそのまま、日本資本主義に當嵌めることが出來るかどうか。若し當嵌め得るとして、その程度如何。と云ふ問題の解答如何によつて、我が無産階級運動の綱領、政策、戰術と云ふが如きものは少からず左右せらるべきである。にも拘らず、これ等の點が、これ迄ハッキリと研究せられてゐないかのやうに思はれること。

第二に、若しも、被帝國主義國と帝國主義國との間に、無産階級運動の色彩に差がありとするならば（而して後述する如く、この間には多大の差がある）、日本の無産階級運動は、果して帝國主義國としての立場に於て進むべきか、將又、被帝國主義國としての立場に於て進むべきか、尠くとも寧ろ被帝國主義國と利害を一にするプチ・帝國主義國として進むべきか、と云ふことが、此際我が無産階級運動上重大問題である。にも拘らず、この點が殆んど研究せられることなくして、我無産階級運動は、少くともその理論の根據としては、漫然と帝國主義國としての立場に於て進みつゝあるかの如く看取せられること。（「太陽」二一―三頁）。

而して、こゝに私が特に斷つて、「云ふ所の資本主義最後の段階としての帝國主義は、之をそのまゝ、日本の資本主義に當嵌め得るかどうか」と問ふた意味は、世俗には、單に、領土の侵略をなしてゐさへすれば帝國主義國と稱するが、しかし、「資本主義最後の段階としての帝國主義」と云はれる場合の帝國主義は、特殊の意味を持つた外國の搾取であつて、單なる領土の侵略ではない。斯樣な特殊の意味に於て、日本は果して帝國主義國と云ひ得るか否か、それを問はんとしたものに外ならない。このことは、こゝに引用した私の論文の一節を玩味せられるだけでも分るが、更に私の論文全體を通讀せられば、更によく誰にもハッキリと分ることである。

私の右の如き問題の提起に對して、猪俣氏は駁論せられる、『玆に「最後の段階」なる言葉で特性づけられた「資本主義」は、斷じて一國の資本主義を意味せず、資本主義一般を、資本主義一般としての世界資本主義を、意味する。氏（高橋）にして若し、氏（高橋）の據らんとするレーニンを讀むに際し、初等的な理解をだに有たれたならば、……氏のなせるが如く問題を提起することは初めから不可能であつたであらう。』と。この點につき、野呂氏は、更に、手嚴しく鋭鋒な

（と氏の目に錯覺した所の）理論を大上段に振りかざされる。曰く、『氏（高橋）は、帝國主義を以て、全然一國的に孤立的な範疇として理解してゐられるもの丶如くである。それでは、如何に「日本資本主義の研究」や「日本經濟の解剖」や、「資本主義末期の研究」をやられた所で、失禮ながら、「日本資本主義の帝國主義的地位」とかも、無產階級運動の眞の戰術、戰略も御解りにならぬ事と思ふ。帝國主義とは、一の世界的範疇であり、國際政治過程である。……帝國主義の特徵に關する氏のか丶る孤立的排他的理解こそ、氏をして所謂「プチ・帝國主義」なる[illegible]的範疇を獨創せしめた所以であらう。』と。この故に氏等に由ると、私の論文は、テンデなつてゐないのだそうである。猪俣氏は、之を次の言葉で言表せられる。『以上において明かにされた、氏（高橋）の方法上の誤謬——それが過失であれ、故意であれ——はまことに致命的である。か丶る誤謬に出發する議論から引用される如何なる結論でもが、みな、誤謬であると結論するのはたやすい』と。

以上に由つて容易に看取出來るやうに、我が猪俣氏其の他の左翼理論家諸君が、帝國主義「世界範疇」論を、いかに「話し合つた」やうに、一致して之を重視してゐられるかゞ分る。

然るに、私を以て見るに、猪俣氏が私の論文を反駁するに、先づ斯様なスキダラケの構へに全力を入れて來られたことが不思議千萬である。最初は、氏等の力瘤の入れ方が余りに大きいので、マサカこんなクダラないものに、さう迄力瘤を入れる筈がないと再三讀み返して見たが、矢張りクダラない駁論の起し方であることに見違ひはない。しかし、我が猪俣氏其他が、それ程までに顔を赤くして力瘤を入れてゐられることであるから、以下少しこの點につき檢討して見るであらう。

猪俣氏その他の所謂帝國主義「世界範疇」論は、後に示すやうに、論理の矛盾に滿ちたもので、氏自身之を切り抜けるのに、大變御苦心してゐられる跡を歴然と看取出來る程のものであり、從つて、其の論旨を掴むに、少なからず骨が折れるものであるが、要するに、「資本主義最後の段階としての帝國主義」と云ふ概念は、世界規模にのみ當嵌め得る尺度であつて、日本と云ふが如き一國に當嵌め得る尺度ではない、と云ふにあるらしい。然るに、私は、日本は帝國主義國であるか否か、と云ふ問題を提起して、その帝國主義國であるか、ないかを測る尺度を、レーニンの云ふ「資本主義最後の段階としての帝國主義」の尺度に求めてゐる。それが頭から間違つてゐると云ふに在るらしい。例へば、猪俣氏は云はれる『此の定義（レーニンの與へた）の對象たる帝國主義が、「一國の帝國主義」ではなく、謂はゞ「世界的規模に於ける帝國主義」であり、其の意味の帝國主義があはす所の一定發展段階の「資本主義」は、當然に、資本主義一般、世界體系としての資本主義であつて、個々の國家組織の枠内にある個々の資本主義であり得ない……』

かくの如き、猪俣氏其他の左翼理論家の帝國主義論の把握が、氏等をして、如何に混迷に疲らしめ、如何にタワイもない愚論に陥らしめてゐるかは、之を後に詳細に示すつもりであるが、しかし、斯くの如く帝國主義を把握することが、全然の間違であることは、氏に次のことを反問するだけで十分だ。現に猪俣氏及び左翼理論家諸君は、日本

が帝國主義國であることを旺んに主張せられてゐる。そこで氏等に御尋ねするが、一體、日本が帝國主義國であるか否かと云ふことは、氏等は、如何なる尺度、乃至は準繩に照して、左樣に御判斷なさるのであるか。その尺度を御示し願ひたい。

氏は、「改造」六月號に於て、レーニンの云ふ帝國主義は世界規模にのみ適用し得る尺度であつて、一國に適用し得る尺度ではないと云はれながら、他方に於て頻りに苦しい言ひわけをなし、汗みどろになり乍ら、しかし、結局に於て、日本が帝國主義國であることを證明するには、やれ、生產の集積がどうの、獨占がどうの、資本の輸出がどうの、金融資本がどうのと、レーニンの擧げた(それも別に述べるが如く錯覺してゐられるが)資本主義最後の段階としての帝國主義の特徴を尺度にして測られてゐるではないか。それ以外の尺度で測つたと(「改造」の論文には示されてゐないが)仰言るならば、一つそれを示して戴きたい。

思ふに、氏及其他左翼理論家諸君の「帝國主義世界籠略」論の誤謬の根因は、本來帝國主義なる概念は、種々なる對立關係を豫想して成立するところの關係概念に屬するものなるにも拘らず、氏等は、ナイーヴにも之を單獨に成立する絶對概念と誤認したところに在る。例へば、若し私が、地球は圓いと云ふ命題に對し、その圓いと云ふ尺度を直ちに日本に當て嵌めんと試み、而して、「日本は圓くはないぞ」と云つたとしたならば、確かに猪俣氏其他の帝國主義「世界籠略」論のコケ嚇しは御迷論ではなくて、正論であり、斯く云つた高橋は確かに頭がどうかしてゐる。

然るに、猪俣氏其他の左翼理論家諸君に對しては、甚だ御氣毒に耐へないが、「資本主義最後の段階」と云ふ言葉に由つて特性づけられた帝國主義と云ふ概念は、左樣な種類の概念ではなくて、例へば、學校と云つたやうな種類に屬するものである。學校と云ふ定義は、いかにも生徒と教師が一體となつたものに與へられたものであつて、教師や生徒に離れ〱に孤立して與へられたものではない。去り乍ら、然らば、學校と云ふ概念に於て、如何なる位地のものが教師であり、如何なる位地のものが生徒であるかを測定するには、學校と云ふ定義に與へられた尺度を以て測る外に之を知る方法はないのである。いま、私が、日本は果して帝國主義國(資本主義最後の段階と云ふ言葉によつて特性づけられた所の)であるか否かと云ふ問題を提出して、その如何をレーニンの與へた「資本主義最後の段階としての帝國主義」の特徴に求めたことは、少しも「當て嵌め得べからざる尺度を當嵌めた」のではない。

然るに、それが、不思議にも、我が猪俣氏其の他の左翼理論家諸君には、「當嵌むべからざるものも當嵌めた」と云ふことになるのだらうである。その故に、私の立場は全部誤謬だと云ふことになるのだらうである。斯の如き氏等のスバラシイ錯覺は、そも〱何處から生れたものであるか。私はそれを次で項を改めて檢討するつもりであるが、その前、一寸息抜きに、氏等の云ふ帝國主義世界籠略論が、全然間違つてゐる當然の結果として、氏等の理論が、このため如何に混亂に陷らざるを得なかつたか、その悲喜劇を氏の論文自らをして一幕演ぜしむるであらう。

猪俣氏に眞面目腐つて謂はれる「世界的規模における帝國主義にあつてさへ、さうであるとしたら、一國の帝國主義について更に別個の定義を要すべきことは余りに明白である……」（「改造」七五頁）、又謂はれる、「資本主義をして帝國主義たらしめてゐる諸特徴が、資本主義世界體系の諸特徴であればこそ、國際的トラストに由る世界分配や、強國間の世界分割が主要特徴として擧げられる。實にそれらは單一の資本主義國の特徴としては、言葉としても始めから意味をなさないものではないか」（「改造」六四頁）。

こゝに、讀者の先づお目を止められんことは、猪俣氏にあつては、世界規模の帝國主義の外に、一國の帝國主義があるのださうである。而して、氏に由ると、日本が帝國主義國か否かを測るには、その一國の帝國主義の定義に由らねばならないことになるらしい。所で氏は、その舌の乾はかない裡に、資本主義をして帝國主義たらしめてゐる諸特徴は世界體系的のものであつて、單一の資本主義國の特徴としては、言葉としても意味をなさないと教へられる。それで、猪俣氏の頭には矛盾も何にもなくして、分つてゐるらしいが、私に一すも分らない。皆さん、猪俣氏の仰言る意味が御分りになりますか。

猪俣氏の「一國の帝國主義」論は、更にすばらしい大發見を含んでゐる。一體、私どもの理解する所に由ると、帝國主義と云ふ概念は、必ずや、搾取してゐる資本主義國と、搾取せられてゐる國との尠くとも二ヶ國を必要とする。だから、一國の帝國主義だなどゝ云ふことは、生徒と云ふことを考へずして先生と云ふ概念を作つたり、夫と云ふことを考へることなくして妻と云ふ定義を考へたり、一人の夫婦と云ふが如きことを言つたりするのと同じ誤謬に外ならぬ。然るに、いま、我が猪俣氏の帝國主義論に於ては、一國の帝國主義があるのださうである。（混同してはいけない、猪俣氏の云はれるのは、一國の帝國主義國ではなくして、一國の帝國主義である。その國と云ふ字の覺字でないことは、氏の論文の前後の意味から（改造六月號七五頁上段）確かである）而して、その定義を（即ち一國の帝國主義に對する）、何でも猪俣氏は、いま一生懸命に考へてゐられるか、乃至は己にチャンと持つてゐられるらしい口吻だ。而して、氏によると、日本が帝國主義國であるか否かは、その定義に由つて測らねばならないわけである。さうかと思ふと、氏はまた、先にも言つたやうに、帝國主義は世界的規模に於けるそれだと主張せられる。更にまた氏は、日本が帝國主義國であるか否かを測るに、「日本人は日本人らしく、すくなくとも一應は、問題を東洋に限るべきであらう」（改造七八頁）と述べて、東洋と云ふ規模に於て、日本が帝國主義國であるか否かの尺度を求めようとしてゐられる。即ち、猪俣氏によると、帝國主義には、世界的規模のもの、東洋的規模のもの、一國の規模のもの、と三つも種類があることになる。斯くて、猪俣氏其一派の左翼理論家諸君の偉大は、そのユニックな帝國主義論の故に、二國規模のもの、三國規模のもの……、歐州規模のもの……と幾十かの帝國主義の概念を自由に製造し出す大發見をなされた所にある。

なる程、これでは、その有せられる帝國主義の尺度に幾十、幾百かの異つた種類のものがあるが故に、而して御都合のよい時に、勝手に都合のよい種類の尺度を持ち出されて來るが故に、氏及その一派の左

翼理論家諸君と、「日本が果して帝國主義國なりや否や」と議論して見た所で、諸君の仰言る意味が、瓢簞鯰で、捕捉出來ないわけである。斯の如くにして、氏等は勇敢にも、自ら、科學の埒外に御自身の理論を弊履の如く放り出される。

私を以て見るに、斯の如く、氏一派の左翼理論家諸君が悲喜劇を演ずべく余儀なくせられた根因は、氏の云ふ「世界規模」の帝國主義議論、野呂氏の云ふ帝國主義「世界範疇論」の把握の誤謬から必然的に發生した、一つのヂレンマに外ならない。

尙ついで乍ら、氏に於ては、帝國主義のみが國際的現象（その外に一國の帝國主義といふ素晴らしい大發見をしてゐられること已述の通りであるが）であつて、資本主義はさうでなく、「單一の資本主義國」（改造六月號六四頁下段）が歴史的に存在してゐたかの如く認められてゐる。しかし乍ら、例へば一八四八年に書かれた有名な共產黨宣言を御覧になつても分るし、其他資本主義に關する「初歩的」（この御言葉は猪俣氏から私に誤り贈られたもの故、いま御返上致す）なものを御覧になり、又は御覧にならずとも御考へになれば分るやうに、歴史的には、資本主義そのものが已に國際的な存在であり、時代であり、特徴である。然らざれば、マルクスの有名な「萬國の勞働者結合せよ」はテンデ意味をなさないではないか。斯く、資本主義は單一孤立的に存在し、帝國主義のみは世界的に存在す、と云ふが如く區別してゐられることも、氏及びその一派の理論家の帝國主義に對する理解が五里霧中にある一因をなしてゐると思はれる。

氏に由ると、斯の如く出發點を誤り、方法論上の誤謬を犯したものは、それが過失であれ、故意であれ、まことに致命的であつて「かゝる誤謬に出發する議論から引出される如何なる結論でも、みな誤謬であると結論することはたやす」く、更に野呂氏によると、「失禮ながら、日本資本主義の帝國主義的地位とかも、無產階級の眞の戰術、戰略も御解りにならぬ」のださうである。左翼の理論家諸君、それで御異議はないでしようね！

三、全體と部分との關係

若しも、第三インターナショナルの大會か乃至はその本部に於て云ふ所の帝國主義論を基礎にし、世界的戰略が議せられる場合に於て私が飛び出し、「しかし日本は未だ帝國主義國としての段階にまで達してゐない……」と云つたとしたならば、而して其際、我が猪俣氏其他が、『日本が帝國主義國であるかどうかを此際問題とするはテンデ間違つてゐる。問題は世界的に見て帝國主義の段階に在るか否かだ』と駁論せられたとしたならば、それは確かに正しい。しかし、さうした、第三インターナショナルの大會などに於ける議論を、そのまゝ「直譯」せられて、日本と云ふ一國に於ける無產階級運動の戰術を議する場合に持ち出されるとしたならば、それは頭から間違つてゐる。而して、私が「太陽」に於て問題とした點は、改めて云ふまでもなく日本の無產階級運動の戰術を決定する客觀條件としての日本資本主義の現段階の檢討である。

いかにも、部分は全體としての方針に左右せられる。しかし、全體の方針を決定するものは、各部分に於ける客觀條件の結果に由るもの

であり、各部分に於ける戰術は皆一樣であると云ふわけではなく、それ〲、その國々の客觀條件の如何に由つて、その受持つべき戰陣は異ならざるを得ない。斯樣に、各國それ〲、その客觀條件に應じてそれに適合する戰術を立て戰陣を構へる場合に於て、全體としての目的、方針、戰術、と云つたものに多かれ少かれ左右せらるべきことは云ふ迄もないが、しかし又、その全體としての目的、方針、戰術は更にまた各國それ〲の客觀條件に由つて多かれ少かれ影響せられる。玆に世界全體としての大勢を見定める必要のあると共に、各國それぞれの特殊事情を研究せねばならない理由がある。

いま、「資本主義最後の段階と云ふ言葉で特性づけられた帝國主義」論は、私の理解するところによれば、以上に於けるが如き意味の全體としての理論であり、戰術であり、方針である。さり乍ら、それを、いまその全體の部分である日本に適用せんとする場合には、先づ日本そのものの特殊事情を研究せねばならない。

然るに、謂ふ所の帝國主義時代に於て、或る一國の特殊事情を研究するとは、要するに、第一には、その一國が、謂ふ所の「帝國主義の段階」に於て、如何なる位地を占め、如何なる構成分子となり、如何なる役目を演じてゐるかを檢討することに外ならない筈である。之をいま少し具體的に云へば、その一國が搾取してゐる位地(所謂帝國主義國)にあるか、乃至は搾取せられてゐる位地(所謂植民地又は半植民地其他の被壓迫國)にあるかを究めることである。而して、その搾取せられてゐるか、乃至は搾取してゐるかを定むる標準は、云ふまでもなく世界標準であつて、猪俣氏が謂はれる如く、之を勝手に或は東洋標準にしたり、或は日本對支那と云ふが如き二ヶ國標準にしたりしてはならない。何となれば、いまわれ〲の問題としてゐることは、猪俣氏其他が切りに主張せられてゐる如く(しかしその的は少々外れてゐるが)世界全體としての無產階級的運動の一環としての日本を研究の對象としてゐるのであつて、之を或は東洋だけに切り離したり、或は日本と支那だけに孤立せしめたりして考へてゐるのではないからである。斯樣にして、氏がその駁論に於て占められた原告の位地は何時しか被告の位地に轉倒してゐる。卽ち、いま、私は、逆に、氏等に向つて、『そも〲、日本を取扱ふに、之を世界の一環として取扱はず、之を世界から勝手に切り離し、孤立せしめて立論してゐるのは、私ではなくて、却つて猪俣氏其他の左翼理論家諸君であるではないか。』と攻擊してゐる位地に自己を見出すのだ。讀者は、何れが日本を世界から切離してものを云つてゐるかを、容易に看取せられるであらう。

或る一國の特殊事情を研究する第二の視點は、一國內に於ける敵陣の形勢と味方の狀勢とである。而して、是等のバランスを度るものとしては、或はその國經濟の現狀、政治の情勢、無產階級及資本家階級の自覺、團結等色々の客觀條件の外に、更に、インターナショナルの客觀條件をも考慮に入れるべきや云ふ迄もない。

然らば、以上の如き、その國々の特殊事情の位地を、全體としての關連に於て、如何にして測量するかと云ふに、その尺度は、謂ふ所の「資本主義最後の段階としての帝國主義」に含意する特徵に之を求める外はないのである。而して、私が、その尺度の一部分として借用したレーニンの帝國主義の五特徵は、「經濟的」分野に於けるそれであ

つた。猪俣氏其他の左翼理論家諸君が、鬼の首でも取つたかの様に、躁喜びせられて、この一點だけで高橋の云ふ帝國主義論はナツテゐないとせられたものは、即ち、私が、以上の如き尺度で持つて、日本が果して帝國主義國であるか否かを測らうとしたそのことに對してゞあつた。が、この點に關する見解の孰れが正しきかは、玆に改めて云ふ迄もなく、讀者の已に容易に看取せられた所であらう。而して、コンナ中學を卒業したばかりの高等學校の生徒のやる論理學の初歩的討論會の如き、タワイもないことを、この上更に問題とすることは、已に讀者の著しく倦怠を感ぜられる所であらうと拜察する。

が、しかし、我が左翼理論家諸君には、噛んで含めないと、自分勝手に飛んだ解釋をせられて、全く思ひもかけぬ言ひ掛りをせられる嫌がないではない。甚だ御迷惑ながらいま暫くの御辛棒を御願ひする。

「最後の段階」なる言葉によつて特性づけられた意味に於ける帝國主義國で、日本は果してあるか否か、之を測るに、高橋は「世界規模」のもののみを測るべき尺度を以て、「日本」を測らうとするの錯誤に陷つてゐる。と斯様に、猪俣氏其他の如き「明敏」なる左翼理論家諸君をして尚ほ錯覺に陷らしめた所の魔術の主はそも／＼何であつたかと云ふに、不思議にもそれは、外ならぬレーニン（猪俣氏其他が宗教にまで祭り上げた所の）の云ふ帝國主義の經濟的五大特徴そのものであつた。いま讀者の便宜のため、それを玆に、再錄することが、說明上都合がよい。

一、生產及び資本の集積が非常に高き程度に達し、經濟生活を決定する獨占の生じたこと。

二、銀行資本と產業資本の融合、金融寡頭政治――この「金融資本」を基礎として――の發生。

三、商品輸出に代つて、資本輸出が大いなる意義を持つて來たこと。

四、資本家の國際的團結が生れ、世界を分割せること。

五、資本主義強國間の世界の領土的分割が終結したと見得ること。

猪俣氏によると、右の五特徴の中、（四）及（五）は『資本主義世界體系の諸特徴』であつて、『單一の資本主義國の特徴としては、言葉としても始めから意味をなさない』ものださうである。若しも、之を高橋の云ふが如く日本に當嵌めやうとすれば、『日本の資本主義に於て世界の領土的分割が終結したりするやうな』荒唐無稽なことに、ならざるを得ないではないかと、鼻高々と勇敢にも（但し盲目蛇に怖ぢざるが如き）嘲笑せられることになるのださうである。それ故に、氏等左翼理論家諸君の「明敏」なる頭腦によると、レーニンの云ふ帝國主義の主特徴は「世界規模」にのみ對するもので或る一國の尺度となり得るものでない、と云ふが如き素晴しい結論になるのださうである。

が、氏等の糠喜びが余りにも度外れであるの故に、私としては洵に御氣毒で申上げ惡いことであるが、しかし斯様な論理の運び方は、卒直に申上げると、全然間違つてゐるのである。而してその間違つてゐることを說明するには、大した勞を必要とせない。唯だ一言、「然らば、（レーニンが帝國主義に與へた特徴は世界規模のそれにのみ當嵌め得るものだと主張せられるならば、）レーニンの擧げた、（一）（二）及（三）の特徴（それは氏等が故意か過失か、奧深く隱匿せられてゐる！）

も世界規模にのみ當嵌め得るもので、一國に當嵌むべからざる尺度だと仰言るのですか」?!、と反問するだけで澤山だ。而して、若し氏等の論法により氏等の主張を生かして行くと、レーニンの第三の特徴は「世界の資本主義に於て、「恐らく火星か水星かの世界に對する」商品輸出に代つて、資本の輸出が大いなる意義を持つに至つた、と云ふが如き破天荒な結論になる譯だ。云ふ迄もなく、斯の如きは、猪俣氏等の云ふ帝國主義世界範疇論の誤謬を語る外、何等の意味をもなさないものである。

顧るに猪俣氏は、レーニンが右の五特徴を擧げた場合に「……一切の定義は總じてたゞ限られた相對的な意義しかない。といふことを忘れずに……」（傍點猪俣氏）と云つたことを强調して私に敎へられてゐられる（私がそれを恰かも無視してゐるかの如き口吻を以て）。猪俣氏等の帝國主義世界範疇論の陷つた謬根は、レーニンの右の定義に對する注意を、實は、氏等自身、口で云ひながら實際には全然之を應用するの能力がなかつたことにある。例へば、いま氏等が私への駁論に於て、輕卒にも討ち取つたと糠喜びされた鬼の首、即ちレーニンの擧げた第四、第五の國際的特徴は、氏等が口先でのみしきりに主張するやうに、之を「相對的」な意味にとり、次に示す如く解釋すれば、容易に之を或る一國に當嵌め得るではないか。而して、定義の相對性を强調せられる氏等に於ては、之に對し何等の御異議はない筈である。

第四、「資本家の國際的團結が生れ世界を分割せること」

この相對的意味、「その國の資本家が國際的團結をなして世界を分割してゐるか否か。その程度如何。又は、資本家の國際的團結のためにその國が如何に分割せられてゐるか否か。その程度如何。等々。」

第五、「資本主義强國間の世界の領土的分割が終結したこと。」

この相對的意味、「資本主義强國間の世界の領土的分割が終結したと云ふことに對し、その國は果して如何なる位地を占めてゐるか。即ち、その國は他國の領土を如何に分割してゐるか否か、又は資本主義强國のために自國の領土を分割せられてゐるか否か、乃至は他國の世界領土の分割の終結狀態が如何なる意義をその國に持つてゐるか、等々。」

斯くの如く、私は、レーニンの定義を「相對的」意義に解すればこそ（しかし猪俣氏の素晴しい語學の造詣に由ると、私がさうしたことは何でも「誤譯」してゐるのださうである?!）私は、私の「太陽」四月號の論文に於て、レーニンの「第四」の特徴を日本に當嵌める場合には、「これについては、日本の資本家は殆んど、その資本家の國際團結による世界の分割の埒外に取り殘されてゐる」と述べ、第五に對しては『……（之れは）專ら世界的事實を指摘してゐるのである。この點については、從つてここに問題は起らないわけであるが、この小論の立場から問題となる點は、その「分割」の狀態である。が、これについては第五節で別に述べるつもりである』と明記してゐる。（傍點は新に高橋加ふ）

然るに、不思議千萬にも、猪俣氏にも野呂氏にも、第五に於て「この小論の立場から、問題となる點は、その分割の狀態である……」と

私が明記してゐることが讀めずして、途方もない的外れな勇敢なタンカを切つて私に喰つて掛られる。例へば野呂氏は云ふ、『氏が(高橋が)特に第五の帝國主義的特徴」のみを指して、これは「專ら世界的事實を指摘してゐるので、この點については、從つて、こゝに問題は起らないわけである」と、云はれるからには、氏は帝國主義を以て、全然一國的に孤立的な範疇として理解してゐられるものゝ如くである。それでは……失禮ながら、日本資本主義の帝國主義地位とかも、無產階級運動の眞の戰術戰略も御解りにならぬ事と思ふ』(太陽二四頁)と猪俣氏は野呂氏よりも更に巧妙に、私の右の記述から「……が、この小論の立場から問題となる點は、その分割の狀態である……」と云ふ一句を、全く讀者の眼から隱匿せられて、(しかも氏は「これほど公正を重んずる私」と自稱せられてゐるから、左樣に自稱し得ない人々の私の論文に對する駁論に就いての公正振りがドンなに隱匿や虛構やスリ換へに滿ちてゐるかも大凡想像せられるであらう)、私が、いかにも適用すべからざる尺度を以て度らうとしたヂレンマに陷り、「この點について、從つて、こゝには問題は起らないわけである」と逃げ口上を云つたかの如く文意をスリ換へてゐられる。さうして、氏は云はれる「西諺の一つとは少し違ふが、最后に笑はせられる者は、最もよく笑ふ」と。だが、その西諺まがひの此の言が果して誰れに贈られた文句であるかは、讀者諸君の最もよく知られる所であらう。

云ふ迄もなく、私が「こゝには問題は起らない」と申したわけは、「資本主義強國間の世界の領土的分割が終結した」と云ふことは、公知の事實であつて、いま更ら、果して然るや否やと云ふが如き問題は起らないと云つた意味である。現に、私は、このレーニンの第五の特徵を問題としてゐないどころか、已に引用した拙文中にある如く、「第五節で別に述べる」ことを約束し、その第五節で、約八頁(全體の論文が三十二頁であつたからその四分の一の多量を割いて)を費やして之を詳論してゐる。この量は、實にレーニンの擧げた五つの特徵の中の、他の四つの特徵について論じた頁數に匹敵するの多量である。

猪俣氏其他の左翼理論家諸君が、それを以て私の論文の「致命的」誤謬でありとせられ、私に、無產階級の戰術を理解する資格なしとせられ「かゝる誤謬に出發する議論から引出される如何なる結論でもが、みな、誤謬であると結論することはたやすい」とせられる、所謂帝國主義定義の世界規模論、乃至は帝國主義世界範疇の正體は、要するに以上の如く、タワイもない御迷論であつた。而して、斯の如き、御迷論に出發する、その他の理論が、更に、輪に輪をかけた御迷論に歸結すべきは、「たやすく」結論し得られるわけであること、猪俣氏自身が、こゝだけに於ては、「公正」至極にも指摘せられる通りである。

四、日本の帝國主義的地位檢討に於ける氏の根本的誤謬

日本は果して、謂ふ所の帝國主義國としての位地に在りや否や、と云ふ問題を私が提起したわけは、云ふ迄もなく通俗に謂はれてゐる意味の「帝國主義」の概念に於てゞはなく、「資本主義最後の段階」と云ふ言葉で特性づけられた所の、帝國主義國としての意味に於てである。然るに、實際に於ては、單なる領土擴張欲一般に與へられた「帝

國主義」と、さうでなく、「資本主義最後の段階」と云ふ言葉で特性づけられた意味に於ける「帝國主義」とが少からず混同せられてゐる。いま、我が猪俣氏其他の左翼理論家諸君が以て、日露戰爭當時已に、日本は「帝國主義國」であつたと主張せられる所の論點に於ても亦、右の二者を少からず混同してゐられる。

先づ、猪俣氏自身に、氏の日頃云はれる帝國主義が如何なる意味のものであるかを語らしめよう（社會問題講座第十卷「帝國主義論」猪俣氏）『現代の帝國主義は、一口に言へば「金融資本」の政策として理解せらる。金融資本の政策とは云つても、金融資本が追求する諸政策の一つ、乃至は偶然的なそれの意味ではなくして、金融資本が金融資本である限り追求せずにはをられない政策であり、同時にまた金融資本にとつて唯一可能なる政策の意味である』。氏は又、去る四月の社會科學に於ける「帝國主義の理論と沒落の過程」なる氏の長論文に於て云はれる『領土的膨脹の爲めの戰爭――それは昔からあつた。が、今やそれが、かつては平和主義の體現をもつて任じさへしたブルジョア的秩序の、發展乃至存續の爲めの不可缺手段となつてゐること、そのことに特殊の意義が見出されねばならぬ』（同書三八頁）と。

いま、斯の如き意味の「帝國主義」論に於て、日本が果して帝國主義國としての地位を占むるか否かを檢討するに當つては、第一にその國の資本主義が、非常に高度な生產の集積をなし、その上に獨占が生れ、金融資本が成立する迄に發展してゐるか否か、而して、斯の如き資本主義の發展に隨伴する矛盾――利潤率の低下に迫られて、之を克服するには、その獨占的地域の膨脹を必至とし、そのためには帝國主義戰爭をやる以外にその金融資本の發展乃至存續を圖る途はない事情に、迫られてゐるか、否かを調べる必要がある。而して、此の點に關する日本の現在の位地については、私は寧ろ否定的であり、（即ちプチ帝國主義國以上でないと云ふ言葉を用ひてゐる。猪俣氏其他の左翼理論家諸君は全然肯定的である。が、この現狀に關する氏等の駁論を玆に批判することは、専ら實證的部分に局するので、先にも御斷りせし如く、紙面の制限上、これを八月號の「太陽」に讓らざるを得ない。が氏等の實證が、如何に羊の群を兵隊と錯覺して、勇敢にも之に突擊するドン・キホーテそのものであるかは、氏の就中最も大膽な確信を持つて示されてゐる次の一事が、私の間もなく示すやうに、丸で唐人の譫言であることによつて最も典型的に立證せられるであらう。

猪俣氏は極めて大膽に、如何にも大確信あるかの如くに斷言せられる『高橋氏は、日本には五人以下の小工場が多いと言はれる（私の原句は「日本現時の生產に於ては、常時五人以下の職工を使用する部面が尙ほ尠からずある」とあるを猪俣氏が斯く要約せられたものである。）いかにもさうした工場の數は多い。しかし一工場の勞働者數が五人以下と云ふ少數である以上、かゝる過小工場勞働者の總數は知れたもので、之を加算しても、前揭の百分比に幾何の變化も生じないことは、必要あれば私の何時でも立證し得る所である』と。だが、氏は、私を反駁するに最も有效であるべきその立證を「必要あれば私の何時でも立證し得る所である」と見榮を切られただけで、そのまゝ、ソッド逃げられてゐる。然るに、いま大正九年の國勢調査に基き概算すると、氏が我勞働者の六〇%は百人以上（を使用する）工場に在ると示され、

五人以下のそれを入れるも「幾何の變化も生じない」と斷言せられる、その百分比は、五人以上の工場以外の者までも加算すると、實にその半數の三〇％―四となるものである――（詳はしくは八月の太陽誌上に示す）

しかし、猪俣氏等の議論は、單に現狀のみでなく、遠く日露戰爭まで遡つて、あの戰爭をこゝに云ふ意味の「、、、、」戰爭だとせられ、當時の日本は已に、「、、、、」としてあの戰ひをやつたと主張せられ、そのことによつて、日本は帝國主義國なりと實證し得られたかの如く主張せられてゐる。而して、この論陣に於ける氏の日本帝國主義國論に於ては、氏はその日頃祖述せられる科學的な「帝國主義論」を弊履の如く捨てられて、通俗的な「帝國主義論」に容易に墮落せられてゐる。

氏は云はれる『日清戰爭當時の日本に於て、已に支配的な生産樣式をとりつゝあつた資本主義は、特殊の自然的、社會的、歷史的條件の下に、日露戰爭までにかなりに高度の發展段階に達してゐた。……當時に於ける、全體としての帝國主義のエポックの成立を前提し、更に老大なる×××支那並に朝鮮への近接と、武力に於ける相對的優越とを前提とする時、かゝる新興資本主義國を帝國主義國たらしむべき一切の條件は已にそこにあつた。日露戰爭は、、、、、、であり、、、等、々、はその××であつた。』と。（改造七七頁）

氏は先づ、「瀕死の恐れでもあるかのやうに」（此の言も、氏が私に見當違ひにも下さつたものであるから、いま氏の必要に際して返上致す）日清戰爭が果して帝國主義戰爭であつたか否かに對して（而して、、が帝國主義戰爭の産物で果してあつたか否かに對して、）沈默を守られる。しかし、氏が批判の對象とせられた私の論文は次の如くではなかつたか。

『いかにも、日本は朝鮮、台灣、南滿洲、と云つた植民地を有してゐる。が、この、、は必しも、今日左翼の云ふ所の「帝國主義」を意味しない。何となれば、（猪俣氏等と共にレーニンの帝國主義を祖述してゐる）パヴロギッチ氏は、『ヨーロッパに於ける資本主義發達の最初の段階は、「國民戰爭」を以てその特徵とした、國民的大國家――生產力が更に發達し、資本主義が益々生長するために充分な廣さと餘裕とを與へ得る丈けの輪廓を有する巨大な國家形態――の形式こそ、この國民戰爭の目的であり、結果であつた」と謂ひ、而して夫のアルサス、ローレンを獨逸が獲つた普佛戰爭（一八七一年）もその國民戰爭であるとしてゐる。『然るに、日本の、日清、日露、兩戰爭、並に之につぐ朝鮮の併合等は、全く、日本自身の獨立のための戰爭であり、日本國家が、當時に於ける歐米の併合から免かれて、獨立國としての鞏固な、「國家の統一」を期せんが爲めの努力であつた。……要するに、日露戰爭までに於ける日本の領土侵略は、ビスマルクがアルサス、ローレンを佛蘭西から奪取したと同じ意味に於ける「國家統一運動」であつて、今日云ふ所の帝國主義運動の範疇に入るべきものではない」

然るに、氏に由ると、例の曖昧極るものゝ云ひ方で以て、所謂「帝國主義」のエポックに於て發生した戰爭は、皆、「帝國主義戰爭」であつて、その戰爭のバックをなす交戰國の經濟事情は問ふに及ばざるかの如くであり、又さうでもなくて、矢張り、その戰爭のバックをなすそ

の國の經濟事情を直視せねばならないかの如く色々と當時の日本の經濟狀態を述べられてゐる。が、云ふ迄もなく、氏の帝國主義理論（前に引用した）からは、その戰爭をなした經濟的バツクが重大でなくてはならない。そこで、先づ、試に氏が、當時の日本に『帝國主義國たらしむべき一切の條件は已にそこにあつた』と言はれる、當時の日本の經濟事情を一瞥して、氏の現實の把握が如何に破天荒に「正確」であるかを御目にかける。

明治三十一年十月の第三回農商工高等會議議事速記錄によると、當時の總理大臣大隈重信氏は、その會の委員に對し次の如く述べてゐる。『……戰爭後の條約によつて、居留地が蘇州、杭州……などに擴まつて參りまして、其他上海、天津、廈門、漢口、と云ふが如き所には日本に專屬の居留地を拵へました。……にも拘らず總て商業は發達しない、專屬居留地に日本人が住つて家を建てる者があるかと云ふと、さう云ふ者はなくして、どうも草が多く、……或る居留地の如きは領事丈で外に日本人がゐないと云ふのは甚だ遺憾なる譯であります…………』斯くて、政府は、委員會に對し、如何にして清國に於ける我が居留地を開發すべきかを諮問した。然るに、當時の委員會は（實業家の代表者がその大部分）之に答申して次の如く云つて居る。『清國新開港に得たる我が居留地の本邦商人の店舖を開く者稀少なるは、今日の形勢に於て不得已の結果なり。抑々國力内に充實して餘裕外に暢ぶ、是れ、自然の氣數にして、商業の海外に擴ふこと亦此數に外ならず。今や内地の事業を振興するに外資を要するの時に當り、多くの商人をして資本を外に用ひ、新に事業を居留地に興さしめんこと頗る難きを見る。……』と。

從つて、猪俣氏の御講義に由ると、帝國主義戰爭とは、資本主義の發達が國内に於て包み切れるだけは已に發達しつくして、その發展存續のためには、何を措いても、外國に暢びねばならない資本主義の必然に根ざして戰ふことであらねばならぬ。斯の如き帝國主義論を主張せられながら、以上に引用せるが如き日清、日露戰爭前後の日本の經濟事情に基き、如何にして、日露戰爭を帝國主義戰爭だとする氏の結論が引出し得られるであらうか。この樣な藝當は、恐らく氏及其の一派の左翼理論家諸君のみ獨占する專賣であつて、他に之を求める事は出來ないのである。

尤も私は右の事實の故に、當時の日本に、帝國主義國たらんとする野望のあつたことを少しも否定してはゐない。このことは猪俣氏が拙文を引用せられてゐる通りである。が、それは、要するに一個の希望であつて、そのため、日本が帝國主義國に現實になつたわけでもなく又、帝國主義國として戰爭をしたことでもなく、乃至は帝國主義國として戰爭をなさんと企てたことでもない』それは恰かも勞働者が大金持になるつもりで、ブルジョアー意識にとりつかれた所で、それ故にその勞働者の階級的地位が、ブルジョア階級に現實になつたわけではなくて、依然、彼れは勞働者階級に屬すると同じ意味である。

然るに、氏に於ては、右の意味が呑込めないと見えて、『市場の商品に對する單なる慾望の所有者と、それに對する現實の購買力の所有者との區別』等と云ふが如き全然見當違ひの議論をわざ／＼氏の「國民經濟學の造詣深き」所から持つて來られる。已に、賢明なる讀者の君

取せられてゐる如く、而して、私の繰返し述べてゐる如く、問題の重點は、植民地を取つたか取らないかではなくて、その取るに至つた衝動そのもの、その經濟的バックそのものにあるのだ。氏は、氏自身に帝國主義について講義せられてゐる意味を解せられないで、小僧が御經でも讀むように、機械の如く論文の再生產をやつてゐられるらしい。現に、氏は、帝國主義戰爭の特質を論ぜられるに、植民地を持つか否かには重點を置かれずして、『領土的膨脹の爲めの戰爭――それは昔からあつた。が、今やそれが……ブルジョア的秩序の發展乃至存續のための不可缺手段となつてゐること、――そのことに特殊の意義が見出されねばならぬ』（社會科學四月特輯三八頁）と云はれてゐるではないか。

　單に植民地を有すると云ふことがその國の帝國主義國たることを少しも立證しないと云ふことを證明するには更に、氏が宗教的信仰をさへ持たれてゐるかの如きレーニンの次の一句を玆に引用することが、氏等に對しては最も效果があるであらう。（白楊社版レーニン著作集第二卷一一四頁）『政治的獨立を保つてゐる點で、金融的外交從屬の多少異つた形態をなすものはホルトガルである。ホルトガルは獨立の主權國である。然し事實に於ては、スペイン繼承戰爭以來、二百年以上も、イギリスの保護國となつてゐる。』

　然るに、そのホルトガルは、次の如く、その本國に比し領土に於て約二十倍近く人口に於て約一倍半の大植民地を有してゐる。試みに之を日本及その植民地と對比せよ。而して、尙ほ植民地を『取つたか取らぬかが』猪俣氏の「浩澣深き國民經濟學」上問題となるならば、それは私に喰つてかゝれる勇氣を持つて、氏の師事せられるレーニンに喰つてかゝられるがよい。氏は死せるレーニンをして私に答へしめられるスバラシイ手腕（不幸にしてそれは全然見當外れであつたけれども）を有してゐられるのだから……。

ホルトガル本國及植民地

	面積	人口	調査年次
ホルトガル本國	方里 五、九六二	人 六、〇三二、九九一	一九二〇年
同上植民地計	一三五、〇七三	八、八三八、〇〇九	一九一〇―一九年
合計	一四一、〇三五	一四、八七〇、〇〇〇	
植民地內譯			
ゴア	三九二	六〇五、三九六	一九一九年
チモル	一、二三一	三七七、八一五	一九一六年
マカオ	〇、六	七四、八六六	一九一五年
ダマオ及ヂユー	二八	三二、七〇〇	一九一〇年
アンゴラ	八一、三八三	四、二二〇、〇〇〇	一九一五年
モザンピーク	四九、三四七	三、一二〇、〇〇〇	一九一五年
蘭領ギネア	二、三七五	二八九、〇〇〇	一九二三年
ケープベルト諸國	二七五	一五六、二一一	一九一七年
セントトーマス及プリンチープ島	六一	五八、九〇七	一九一五年

（參照）日本本國及植民地

	面積	人口	調査年次
日本の本國	方里 二四、七一九	人 五九、七三六、八二三	一九二五年

同上植民地	一九、五六四	二四、八三一、九五一	同上
合計	四四、〇八三	八四、三六八、七七三	同上

（備考）日本植民地とは朝鮮、台灣、樺太、關東州、南洋、委任統治區域の合計である。

野呂氏にあつては、私の以上の如き理論は、更に〳〵全く猫に小判と見えて、私が、『斯樣なわけで、日本が果して帝國主義國であるか否かは、單に、日本が多少の領土を侵略してゐると云ふ點から見るわけには行かない。それは、更に別の標準から檢討さるべきである』と主張せるに對し、『何と云ふ詭辯！　何と云ふ血迷ひ！　何と云ふ遁辭だ！』と素晴しいタンカを切られる。が、何故に詭辯であり、血迷ひであり、遁辭であるかは一言も說明せられない。斯の如きは、恰かも、理論に敗けた破落戸(ゴロツキ)が、尻をまくつてタンカを切り出したと云ふ以上に、何等の意味をも持つてゐないではないか。理論鬪爭をしようとするだけの健氣な心を少しでもは持ち合はせてゐられるからには、氏と氏の代表せられたる左翼理論の名譽のために、いま少し堂々の論陣を張つて來られたらどうだ。

五、プチ・帝國主義國論に於ける問題の所在

猪俣氏野呂氏其他の左翼理論家諸君が、問題の焦點とせられてゐる私の「プチ・帝國主義國論」は、主として、「太陽」の拙稿第五節より結論せられてゐる。而して、この第五節こそは、先にも述べたやうに、猪俣氏其他の解釋に由ると、之を日本に當嵌めれば、「日本の資本主義に於て世界の領土的分割が終結」すると言ふが如き荒唐無稽に終る外なきレーニンの帝國主義第五の特徵に基く檢討である。しかし、猪俣氏等の如く、之をその「言葉」に捕はれて、當て嵌めて見たのではなく、「定義の相對的」意義に從ひ、日本にあて嵌め、日本の帝國主義國としての地位を調べたものである。だから、我が猪俣氏其他の左翼理論家諸君には、私のプチ・帝國主義國論が如何なる論點から生れ、如何なる視點に立つてゐるかが始めから分つてゐなかつたらしい。從つて私のプチ・帝國主義國論を氏等が檢討せられるに方り、之を如何なる準繩で檢査し、批評すべきかの「尺度」を全然見失つてゐられる。であるから、私のプチ・帝國主義國論に對する氏等の反駁と來ては、就中、全くの混亂そのもの以外の何ものでもない。

然るに、私に與へられた紙面は、已に殆んど使ひ果してゐる。從つて、私はいま一々、具體的にその「混亂」の狀を御目にかける余裕を持たないが、しかし、その方法論上の「混亂」を玆に指摘するだけで、猪俣氏其他の駁論が、如何に「混亂」そのものであるかを、讀者は容易に想見せられ得るであらう。

第一に私のプチ・帝國主義國論は、世界資本主義の一環としての日本の地位を指してゐるのである。即ち無產階級が、世界資本主義を倒す戰ひに於て、日本の無產階級としては、その戰ひの如何なる陣地を受持つことが、世界の全體の目的から云ひ、日本自體の特殊事情から考へて、最も有効であるべきかを論じたものである。帝國主義は「世界規模」だとか、「世界範疇」だとか、と切りに大上段な言ひ掛りをさ

れたり、「世界資本主義と切り離して」日本を取扱つてはならないと金切聲で絶叫せられたりする猪俣氏其他の左翼理論家諸君としては、私の右の立論の足場に對して、よも、御異議はないでせうね。

然るに、不思議にも、猪俣氏は私のプチ・帝國主義國論を駁し、日本が帝國主義國であることを主張せられるに、「東洋規模」に於て、問題を檢討すべきだと主張せられる。氏は云ふ『高橋氏は、極東の資本主義日本の强弱大小をはかる「尺度」を全世界に求めらる。そして一群の重要商品の生產高と、諸國の面積と人口とを記述し、比較することによつて、問題を、商業地理の水準にまで引上げられた。しかし、吾々の問題は、それよりはもつとづゝましやかな、ヨリ具體的な、特殊な、しかもダイナミツクなものではなかつたか。……「日本人は日本人らしく」すくなくとも一應は、問題を東洋に限るべきであらう。』斯くて、氏は、東洋に於ける日本に位地を諄々として說かれる。しかし乍ら、斯くの如き駁論の仕方は、論理學上云ふ所の ignoratio elenchi 即ち論點不知の一大錯誤に陷つてゐるものであつて、假りにその實證する所が正しいとしても（事實はその實證せられてゐることも間違つてゐるが）何等駁論としての價値なきものである。斯くの如く論點を勝手に移動さす所の駁論の仕方は、例へば、私が日本全體としての立場から自作農は被搾取階級に屬する、と云つたのに對し、いやそんなことはない、問題を「もつとづゝましやかな、ヨリ具體的な」我が一村に限つて見よ、彼は我々の中で最も富裕なものの一人ではないか、彼は現に雇人を搾取してゐるではないか、一反の田を小作に出してゐるではないか、と云ふが如くに駁論するの愚と全く同一である。斯様な「論點不知」の御議論を、假令百頁御書きになつても、甚だ御苦勞千萬ながら、私のプチ・帝國主義國論には、一指も觸れてゐないのである。しかし、猪俣氏が、それにも御構ひなく、ドン・キホーテ振りを御發揮になる事は、そしてそのことによつて、マスターベーションの快味を味はれると云ふことならば、それに對しては、無論私は少しの抗議をもなす資格を持つてゐないし、又、抗議をしようとも思はぬ。

第二に、私のプチ・帝國主義國論は、已にそのプチ・帝國主義國だと云ふ言葉によつて明かな如く、日本に全々「帝國主義國」的要素が無いと云ふのではない。世界的に見て、日本は「最後の段階」といふ言葉で特性づけられた意味の帝國主義的搾取を營つてゐる國の方により大なる利害の一致を見出す地位にあるか、又は能動的に搾取をしてゐる國の方により大なる利害の一致を見出すかと云ふ、相對的な地位について、ものを言つてゐるのである。從つて、私のプチ・帝國主義國論に對する駁論は、帝國主義世界に於ける、日本の相對的地位について、駁論せられて來るのでなくては、方法としても、意味としてもナンヂなつてゐないわけだ。然るに、我が猪俣氏其他の左翼理論家諸君は、私のプチ・帝國主義國論を駁するに、日本の有する帝國主義的要素を、世界との相關的地位について論ぜられることなく、之れを或は孤立的にか、或は東洋的にか、に取扱はれてゐる。而して御目出度くも、氏等の駁論が玆に成立したと錯覺せられてゐる。云ふまでもなく、斯くの如きは問題の性質を全然理解せられてゐないものと言はねばならぬ。

例へば、斯くの如き駁論の方法から出發せば、支那が南洋其他に多大の資本の輸出をなしてゐるの一事を以て、支那を帝國主義國だと主張し、ポルトガルが少からぬ植民地を領有するの一事を擧げて之を帝國主義國（レーニンはポルトガルを英國の金融的外交從屬國となつてゐると指摘せしこと已述の如し）だと云ふの理論が生れる筈だ。或又、小作人は現に時々農業勞働者を雇つてゐる、農産物の賣買に於て商業的搾取を行つてゐると云ふが如き、小作人の「資本家的要素」を探し出し、拾ひ擧げて之を資本家階級に屬せしむることも出來るわけだ。

猪俣氏自身が謂はれる通り『大と小、强と弱は、ノア洪水の大昔から相對的で』ある。だからこそ、いま、その大小、强弱を問題とするに當つては、其の大小、强弱を決定する基準を第一に定めねばならない。然るに、氏及び其他の左翼理論家諸君は、その基準は先づ何れに置くべきかをも究めずして、勇敢にも五里霧中の理論の中に飛び出されて、無暗矢鱈とその竹光を振り廻はされる。而して何の手答へのないのを漸く發見せられるや、『だが、大と小、强と弱は、ノア洪水の大昔から相對的であつた』と云ふが如き、活辯もどきの科白により問題を水掛論にまで變造して、幕を閉ぢようとしてゐられる。しかし、問題は云ふ迄もなく氏が變造せんとせられる如く、水掛論ではない。斯く見ゆるのは、氏が問題の視座を見定める用意も採られず（乃至はそれを見定める必要をも自覺せられずして、）無我無中で竹光を振り廻はされた當然の歸結にして、「已れはいま何處に向つて進んでゐるのだ?」と自問自答してゐられることを曝露してゐられるものである。重ねて、御苦勞千萬だと云はざるを得ない。

第三に、私のプチ・帝國主義國論に、野呂氏が愛國的な憤激を以て叫ばれるやうに、『苟も三大强國の一として自他共に許す』日本を指して植民地や半植民地國だと云つたのでは無論ない。大ブルジョアーに對するプチ・ブルジョアーの如き位地にあると述べたものであること、現に猪俣氏の引用（改造六一頁）せられてゐる通りである。然るに、『これほど公正を重んずる私』と自稱せられる猪俣氏は、私の右の論旨を次の如くに變裝さして、讀者の前に、恥しげもなく、出してゐられる。曰く『右によつて明かであらうやうに、高橋君の企圖は、日本帝國を弱小國に、帝國民を被壓迫民族に仕立てあげつゝ、氏の最近の二論文をば、此の弱小國を愛せざるかの如き不屆きの「左翼」に對する挑戰狀たらしめやうとするものである。』と。斯の如き言ひ掛りは、例へば、小商工業者や中小農者を指して、小ブルショア階級に屬すと云つたことを以て、高橋は、小商工業者や中小農者をプロレタリヤなりと云つたと誣ひ、以て、自已の立場を有利に轉廻せんとするの卑劣極る論法だ。と云はれて何の辯解があり得るか。いま少し男らしく堂々と論陣を張つて來られてはどうである。

だが、實は、猪俣氏に於ては、斯樣な卑怯極る小細工をやらなくては、私のプチ・帝國主義國論を眞正面から駁し得ない傷を脛に持つてゐられる。それは、問題になつた私の二論文と時を同ふして發表せられた氏の長論文「帝國主義の理論と沒落の過程」に於て、次の如く明言してゐられることである（社會科學四月號三九頁）

「しかるに、帝國主義時代の世界資本主義を、それの構成諸單位としての個々の『國民經濟』の方面から考察すると、世界資本主義は少

くとも三群に大別し得る異質の諸單位から成ることが知れる。（一）帝國主義的に能働的原動的なもの、（二）被動的なもの、（三）中間的乃至派生的なもの。第一群は、代表的な金融資本主義國及びこれに準ずるもの、第二群は植民地または半植民地化されつゝある一國民經濟」群で、最後の中間群は、それ自身金融資本主義の段階に達してはゐないが、第一群の帝國主義的攻勢の影響の下に、反作用的に自衞上もしくは對抗上帝國主義的政策をとる。例へば日本は、日清戰爭前後から既に第三群に屬し、レーニンの謂はゆる Militaristischer Imperialismus（軍主的もしくは軍閥的帝國主義）なる言葉をもつて特徴づけ得る政策の實行者であつたが、内的轉形によつて今や第一群に屬さんとしてをる。』（傍點高橋）

氏に反問する。氏の云ふ第三群とは果して何ものであるか、用語の差異及び分類の基準の異同等、多かれ少かれ意味の相違は無理あるが、結局それが、私の分類に於けるプチ・帝國主義國に準當するのではないか。尠くとも、私が、日本を第三群だと云つたことが、何故に第二群だと云つたことにならざるを得ないのだ。のみならず氏は、日本を以て、『今や第一群に屬さんとしてをる』（傍點高橋）と曖昧極まるものゝ云ひ方をなしてをられるが、しかし、斯の如き言ひ方は、云ふ迄もなく、論理上日本は未だ第一群に屬してゐないことである。然るに氏は私に對する駁論に於ては、恰かも、日本が第一群に確定的に屬してゐるかの如きものの云ひ方をなしてゐられる。甚だ失禮な云ひ方ながら、氏よ、人の理論を駁論せられる前に、先づ自分の論文を徹底的に駁論せられたがよからう。

六、日本に於ける社會型態の複雜性を見逃せる書生論

猪俣氏其他の左翼理論家諸君が陥れる最も致命的な方法論理的誤謬のいま一つは、日本の無產階級運動の政策、綱領、戰術と云ふが如き具體的な、實踐的な問題を研究する場合、之を御目出度くも、抽象的マルクス理論の學生討論會と全然混同してゐられることに在る。例へば猪俣氏は傲然と私に敎へられる（改造八一頁）『高橋氏の思考に於ける根本的欠陥の一つは、資本主義が資本主義として、階級が階級として把握されてゐないこと、從つて、諸多の矛盾と對立とがぼかされ、まやかされてゐることにある』と。（傍點高橋）斯くて、氏に由ると、いま、われ〳〵が日本と云ふ具體的な客觀條件の下に於て、無產階級運動の實踐的政策論を研究する場合に於て尙ほ、抽象的に、概念的に單純化された資本主義論や、帝國主義理論を、何ものにも制約せられずに、之をその理論のまゝに發展さすべきである、然らざるものは、誤謬だと云ふことになるらしい。事實、猪俣氏其他に於ける所論の到處に於て、斯樣な素朴な純理論や、概念主義か、何ものにも制肘せられることなくして、天馬空を行くの慨を以て描き出されてゐる。中にも野呂氏は最も之を典型的に、簡結に言表せられて、與へられた紙數の制限を超過して困つてゐる私に格好の援兵を出して與れられる。即ち、私が、日本に於ては、『國民生產の過半を占むる（その勞働量から云つて）農產品は、周知の如き小農制、小規模であつて、こゝには殆んど大規模生產と云ふことはない。この點‥‥日本は英米獨等の帝國

主義國と先づ著しく事情を異にしてゐる』と云つたことに對し、野呂氏は『……だが、生産及び資本の集積程度を見るために、農業を例にとるなどは、資本主義經濟の特質の何たるかを知らざるものゝなすことである』（太陽十頁）と見栄を切られてゐる。

改めて云ふまでもなく、今、われ〳〵は、現にあるがまゝの、日本全體の社會をその研究の對象としてゐるのである。その中から、「資本主義」的形態のみを抽出して、純粹な資本主義社會に於ける現象を研究の對象としてゐるのではない。然るに、氏等の理論から云へば、日本の特殊事情を研究するとは、單に、その資本主義理論、帝國主義理論から見て、日本の「資本主義形態」――あるがまゝの全體の社會から特に抽出されたところの社會型態――が、如何なる段階にまで發展したかを調べればよいことになる。即ち、氏等に於て關心せられることは、單に資本主義枠内のみの現象だけであつて、資本主義枠內以外にある社會、即ち農業其他が、日本全體に對して占むる位置、それが全體としての我が無産階級運動を如何に制約し、そのため、所謂、プロレタリア運動の正型が、如何に歪曲せられざるを得ざるかの根本的重大問題は、氏等に於ては、全然問題とならないのである。玆に氏等左翼理論家諸君の致命的誤謬がある。玆に我が左翼運動の戰術が、實戰上常に失敗を繰返して猫の目の如く、「方向轉換」をやらざるを得ない根因がある。

更に、猪俣氏等左翼理論家諸君が素朴な純理論の亡者になつてゐられることを示す著例の一つとして、私の人口過剩問題に對する猪俣氏の駁論の仕方を引用することが、その問題の重要さから云つても、その駁論の純理論的素朴さの赤裸々なる點から云つても、此際、最も適切であらう。氏に由ると、日本現在の人口過剩と云ふ現象は、次の如き資本主義生産の矛盾論一つで、極めて簡單に片附け得られるのである。曰く、『資本主義生産の常則として、資本の蓄積乃至集積は、それが勞働生産力の發展を齎らす限り、不可避的に資本構成の高度化を來たし、從つて、利潤の低落に伴はれる。此の事態は同時にまた、一方では過剩資本の、一方では過剩人口の增大となつて現はれる』。而して、氏は、儼然として云ふ『氏（高橋）において、全く缺けてゐるところの人口問題のマルキスト的把握のためには、私は幸にも河上博士の近著「人口問題批判」を推薦する便宜をもつ。……で、誰れが今まで「非科學的にも」人口問題のワナにかゝりつゝあるのか！』と。

斯の如き素朴な書生論を氏が臆面もなく堂々と發表せられる所から見ると、氏のナイヴな頭には、抽象され、單純化されて、出來上つた「資本主義理論」や「帝國主義論」や、「階級鬪爭論」が、直ちに、そのまゝ、實在の社會と見へるものらしい。然るに、氏等に對しては或は極めて意外のことかも知れないが、現に世の中に實在する社會に於ては、マルクスなどの、資本主義理論や、帝國主義理論に現はれてゐるが如き、單純な資本主義國もなければ、帝國主義國も無論ない。斯の如きことは、この種の實際問題に初歩的な關心を持つ誰れでもが、常に心得てゐることである。それは、恰も、水は H_2O より成ると云ふことは、學理上の眞理であるけれども、しかし、現在實在してる水に、斯の如き純粹のものは、決してないと云ふ、分り切つたことを他の言葉で云つたのに過ぎない。

現に、レーニンは、露國の所謂、新經濟政策の意義と其の條件を論ずる場合に於て、露國の社會型態が、五つの種類から講成せらるゝことを指摘し、その政策を採る場合に之を重視してゐることは、著名な事實ではないか。(白揚社版レーニン著作集第一卷六——七頁)、翻つて、日本現在の社會型態について云へば、それは少からず複雜した型態よりなり、決して、資本主義理論に現はれてゐるが如き、資本主義制度より成る單一な社會型態ではない。このことは、例へば、日本の職業別人口構成の過半が、未だ封建的遺制の桎梏から脱し切れぬ農業であると云ふ事を一顧するだけで、直ちに分る筈だ。(尙ほこの點については、先月號(七月)の「太陽」の拙稿に於て詳述しておいたから玆に、之を繰返すことを避ける。)

扨て、マルクスの謂ふ人口論は、云ふまでもなく、「資本主義制度」の枠内に於けるそれを取扱つたものである。このことは、先に引用した猪俣氏の言葉に由つても分るし、又氏が推賞せられる河上博士の論文に於て『かくて總資本の增殖につれて促進さるゝところの總資本そのものゝ增殖よりも、より急速に促進さるゝところの、可變的な資本成分の相對的な減少、すなはち、勞働市場における勞働に對する資本の需要の相對的な減少は、他面において、可變資本の增加よりも常に、より急激なる勞働者人口の絕對的增加と見ゆるのである。』とあることによつても明かである。斯樣な論法は、之を資本主義の枠内のみについて云ふ限り一先づ正しい。(尤も私としてはそれに對しても已に一の疑問を發表してゐること後述の如し)

しかし乍ら、先にも云へる如く、我が國の社會型態は、單純なる資本主義型態より構成せられず、多分に封建的制度を包含する農業人口が過半である。この種の制度に於ては、卽ち、資本主義枠外に於ては、人口過剩問題は、尠くとも猪俣氏や、又猪俣氏が玆に引張り出されて、迷惑を感じてゐられるであらう所の河上博士の御考へのやうに、マルクスの人口論では解釋は出來ない。現に農業に於ける資本の最要部は耕地であるが、この耕地の擴大が多大であると云ふの故に、日本の農業制度において、いま、過剩人口が生ずると云ふが如きことは、全く考へ得られないことであり、反對に、いま、我が農村は、その耕地の過少なるの故に、人口過剩に陷つてゐるのである。而して、いま日本に於て、人口過剩問題に最も苦しんでゐる社會層は、資本主義枠内を代表する都市に於てよりも、資本主義枠外を代表する農村に於てゞある。

なる程、之を工、鑛業のプロレタリアに限つて云へば、猪俣氏が盲信せられるマルクスの理論は正しいかも知れぬ(實は必しも正しくはないこと後述の如し)が、我が農村の小作人其他の資本主義枠外の無産階級が現に當面してゐる人口問題に對しては、マルクスの資本主義枠内に於ける人口理論は、さう手輕に當て嵌らないのである。尤も、資本主義の發展期乃至全盛期に於ては、資本主義制度の作用及びそれに對する信頼が、最も壓倒的であるの故に、資本主義枠外の諸問題までも、資本主義的に理解して、その對策を立てることを、或る場合には許し得る。去り乍ら、已に、資本主義がその盛期を過ぎ、資本主義枠外の民衆が、資本主義に對する從來の信仰を失へる今日に於て、斯の如き書生論を振り廻されることは、譬へば、爆裂彈の何ものである

かを解せざるものに、爆裂彈をイヂクラスと同じく、危險この上もないことである。

猪俣氏其他の左翼理論家諸君の『思考における根本缺陷の一つは』（此の用語も氏が誤り、私に下さつたものである故、いま、氏の必要に際して返上す）理論を理論として把握せないことだ。即ち、それは抽象せられ、單純化された一の概念構成に過ぎずして、實在する所の社會は、常に、多かれ少かれ、他の要素を含有してゐるものだと云ふ理解の全然缺けてゐることである。さればこそ、氏等に於ては、原書一冊讀みさへすれば、それで直ちに、實在を把握し得たかの如く錯覺せられるのである。さればこそ、又私に向つて、ペダン的にも、お前の云ふことは、丸で、マルクスや其他の敎ふる理論の如くなつてゐない（實在する社會が單純な資本主義制度でなく、多くの介在物を包含してゐるから、さうならざるを得ないのだと云ふことには少しも御氣がつかれずに）と云ふが如きことを、平氣で、謂ひ得られるのである。さうして御氣の毒至極にも、斯の如き言ひ掛りをされることが、如何に、自己の頭の未熟を吹聽するものであるかを、少しも御存じないのである。

氏は又、マルクスの人口論を、そのまゝ盲信せられて、極めて高飛車な、ものゝ云ひ方をされてゐる。（改造七九——八〇頁）しかし乍ら、私は已に、拙著「資本主義末期の研究」六八頁に於て、極めて粗笨な言表の仕方ではあつたが、一の資本主義國が、マルクスの云ふが如く、資本の增殖の故にでなく、資源の衰弱乃至滅滅の故に、行詰るべき事實を指摘して、我が左翼理論家に對してその解答を促してゐる。而してその一例として、英國の炭坑資源の衰弱（相對的にも絕對的にも）日本のそれ等を擧げてゐる。斯かる場合、從來、炭坑に從事せる人口は、他に捌け口のない限り、（而して、日本の海外移民は多く制限せられてゐる）人口過剩の問題が起るは當然なるわけではないか。氏にして若し、僅かばかりの學究的良心を有せられるならば、此際單にマルクスの人口論を引用することに由つて、私を駁論し得たと粉飾せられる前に、先づ、この點について堂々と解答せられるべきであつた。

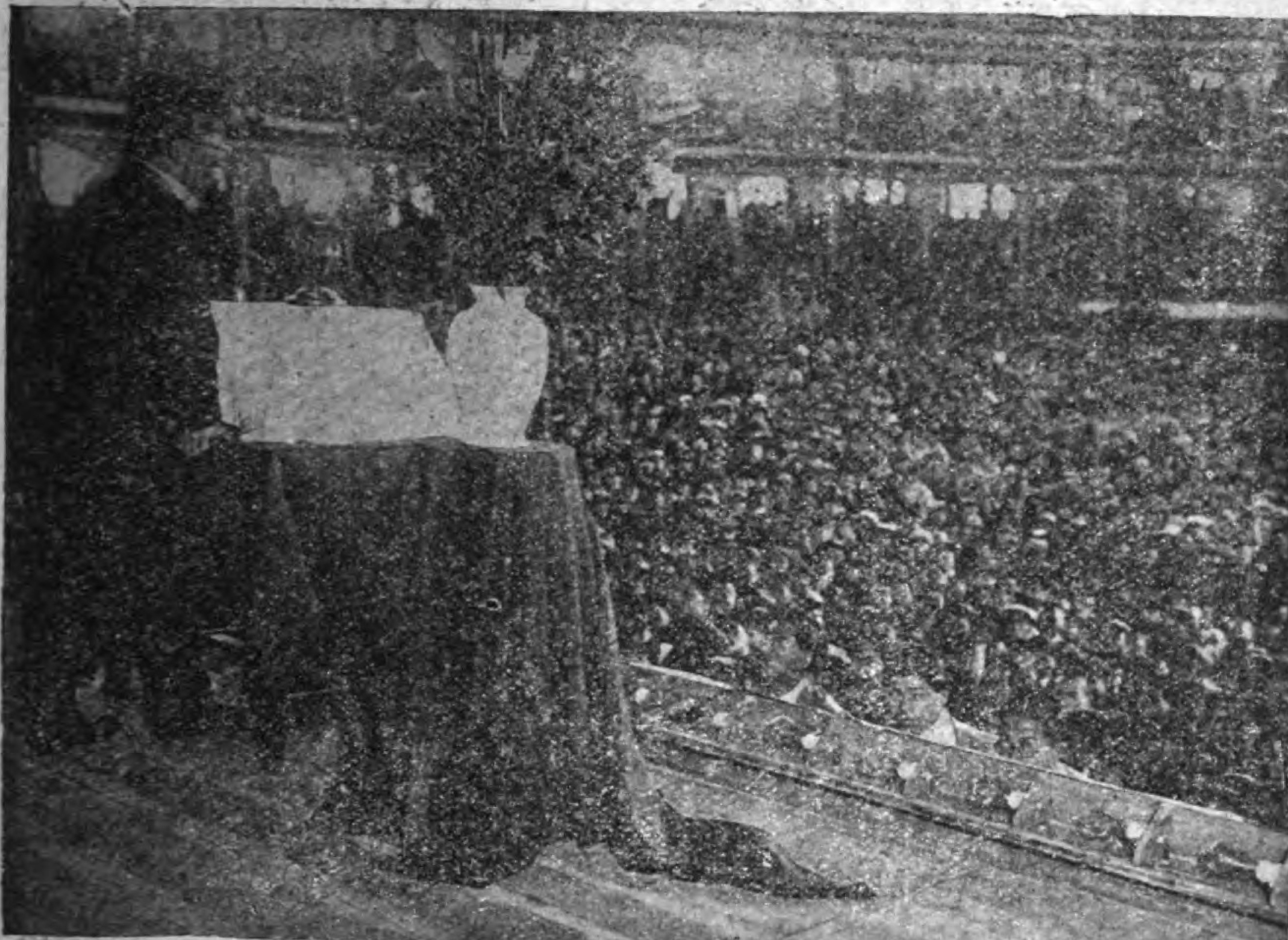
以上に由つて、讀者の容易に看取せられるであらう如く、猪俣氏其他の諸君の御議論は、要するに、一個の極めてナイーヴな學生討論會級以上の何ものでもない。唯だ、學生の討論會と異る唯一の點は、學生の討論會に於ては、只管に、眞理を追求せんとする純眞な心がその主潮をなしてゐるに反し、氏等の御議論に於ては、ペダン的な外被を着た、虛構とスリ換へと、罵詈と惡態とが、全論を通じて惡ドク流れてゐると云ふことである。

× × × ×

以上に述べた所は、猪俣氏其他が私のプチ・帝國主義國論に駁論せられた方法論的部分に屬するものの中、就中主なる點に關するものであつて、氏等の駁論の全部に亘るものではない。而して殘れる理論的方面、及びこの小論に於て全く手を觸れなかつた實證的方面に對する氏等の駁論が、如何に典型的なドン・キホーテそのものであるかは改めて今月（八月）號の「太陽」誌上に於て讀者の前に展開するであらう。

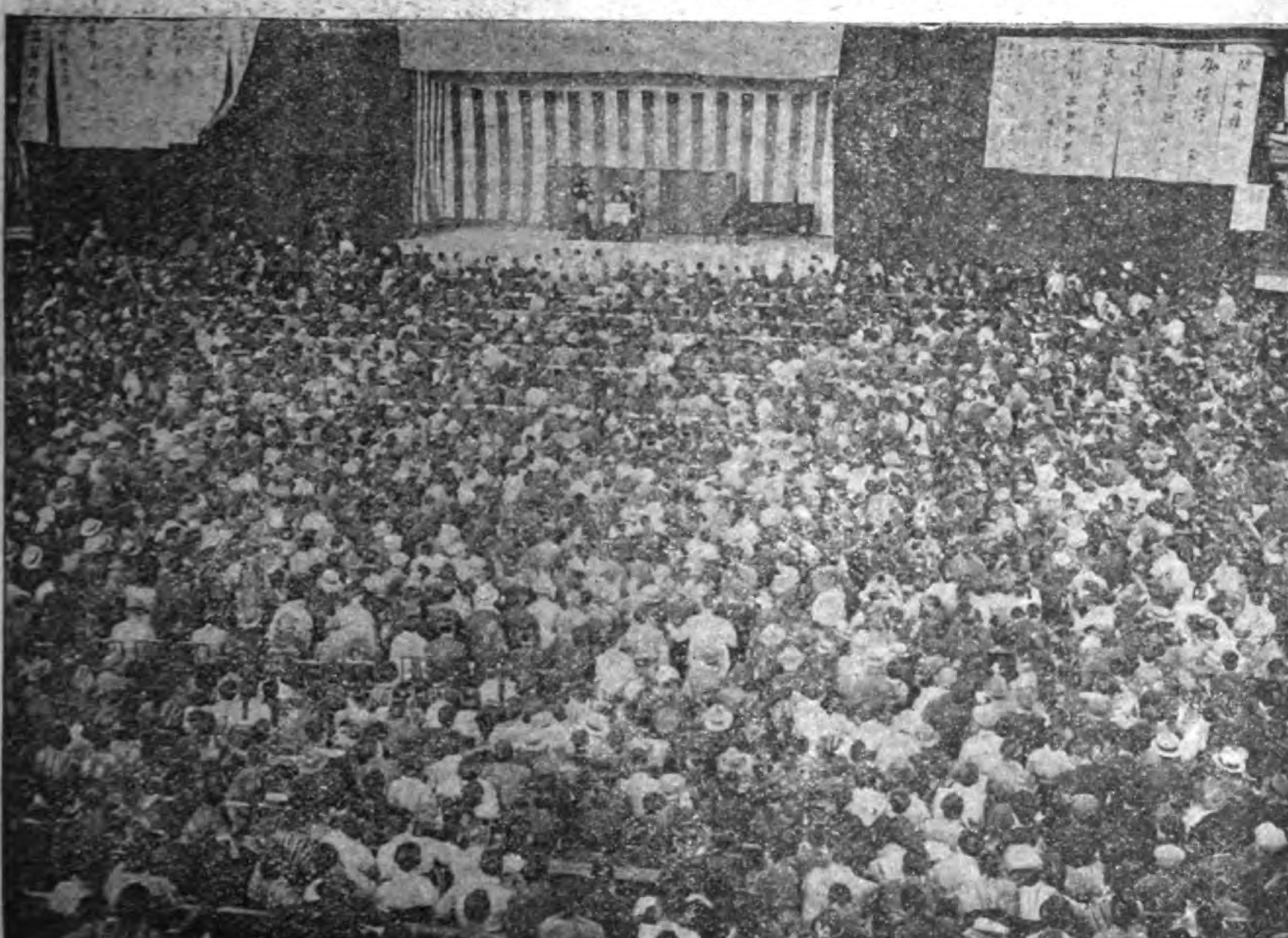
が、讀者は已に、以上の論述のみに由つても、猪俣氏其他の左翼理論家諸君の駁論が、結局、如何なるものを曝露するために役立つたかを、容易に御認めになることが出來るであらう。

左翼の帝國主義理論（日本を帝國主義國と主張する基礎をなす）の自殺！　と云ふことを證明すること以外に、氏等の駁論は果して何の役に立つたか。妄評多謝。（六月五日）



日本に於て最も多く聴衆が集つた改造社主催文藝講演會の盛況

(我社は五月三十日東京國技館に於て文藝講演會を開催した。當日會衆實に三萬五千人、實に我國開闢以來の盛大な集合であつた。)



禁煙を志て未だ禁煙せざるは何故か？

永年の喫煙家も忽ち禁煙家となれる

簡易な禁煙方法を知らぬからだ

驚くべき「カロット」の効力

煙草が如何に體に害を及ぼすかは百も承知の事であるから別に此處にくどくと書立る必要もない、而し煙草をやめて損をしたと云ふ人はないが煙草を癈めた爲體重が増し長生をしたと云ふ事は儘耳にする事實である、しかし煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない。所が、玆に面白い一つの禁煙方法がある。「カロツト」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に温雅な香氣と忘れ難き清凉な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまづくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此効力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら乾度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロツトを試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。

カロット（凡百日分）

ベークライト製パイプ付 金貳圓五十錢（カロツト味一瓶）（きらひ液一瓶）

サツク入象牙製パイプ付 金參圓五十錢（カロツト味一瓶）（きらひ液一瓶）

（送料各内地十八錢 京朝樺四十五錢）

（代金引替内地卅錢 臺灣樺五十五錢）

東京大森不入斗八二八 振東五二一九壹番

發賣元 榮川堂

東京京橋區瀧山町十三

一手販賣 **天下堂**

振替東京七〇六八

改造社新刊書

吉田絃二郎著

最新刊

旅人 四六判上製 定價一圓八十錢 送料二十錢

▲運命の秋 定價二圓 送料二十錢

▲一人歩む 定價一圓八十錢 送料二十二錢

▲芭蕉 定價一圓六十錢 送料十八錢

▲父 定價一圓九十錢 送料二十錢

谷崎潤一郎著

縮刷 **愛すればこそ** 冊 **愛なき人々** 四六判並製 定價一圓 送料十六錢

▲痴人の愛 定價二圓 送料二十二錢

▲赤い屋根 定價二圓 送料二十二錢

▲長篇小說 鮫人 定價二圓 送料二十錢

▲新選谷崎潤一郎集 定價五圓五十錢 送料內二十七錢

高畠素之著

改譯 **資本論解說** 四六判並製 定價一圓 送料十六錢

▲社會主義社會學 定價一圓 送料十六錢

▲社會主義と進化論 定價一圓 送料十六錢

▲マルキシズムと國家主義 定價一圓 送料十六錢

志賀直哉著 **山科の記憶** 四六判上製 定價一圓五十錢 送料二十錢

室生犀星著 **庭をつくる人** 四六判上製 定價二圓 送料二十二錢

中河與一著 **恐ろしき私** 四六判上製 定價一圓八十錢 送料二十錢

長尾正人譯 **遺傳學概論** 四六判上製 定價一圓八十錢 送料二十錢

高柳賢三著 **現代法律思想の研究** 菊判上製 定價四圓五十錢 送料二十七錢

東北大學教授 武内義雄著 **老子の研究** 菊判上製 定價三圓五十錢 送料二十七錢

改造社出版圖書目錄

（昭和二年七月現在）

著（譯）者名	書名	型 頁數	定價 送料（円）
法學博士 穗積重遠著	離婚制度の研究	菊上 九四〇頁内	一〇・〇〇 内・三六
河西太一郎著	農業問題研究	四六上 四三三	二・三〇 ・二二
帝大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	四六上 四二〇	二・五〇 ・二〇
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	菊上 四三二	三・二〇 ・二八
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	菊上 三四〇	二・六〇 ・二六
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	菊上 二九六	二・五〇 ・二四
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本財政史	菊上 三一六	二・五〇 ・二四
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	四六上 三六〇	二・三〇 ・二二
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	四六上 三四四	二・〇〇 ・二〇
法學博士 河田嗣郎著	社會問題綱要	菊上 内 六四四	四・五〇 ・二七
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	四六上 三九八	二・五〇 ・二二
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	四六上 三五三	二・〇〇 ・二〇
帝大助教 平野義太郎著	法律における階級鬪爭	菊上 三四一	二・五〇 ・二六
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	四六上 三二八	一・五〇 ・一八
農學博士 小野武夫著	日本農民史語彙	四六上 四九三	三・五〇 ・二二

著（譯）者名	書名	型 頁數	定價 送料（円）
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	四六上 四一八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	噓の效用	四六上 四五四	二・六〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	四六上 四二二	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	勞働法研究	四六上 五七六	三・〇〇 ・二四
法學博士 堀江歸一著	國際經濟總論	菊上 四一七	三・三〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	増補改訂 國際經濟と國民經濟	菊上 三四二	二・五〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	四六上 三九四	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（上卷）	菊上 三八四	三・〇〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（下卷）	菊上 五一二	四・〇〇 ・三〇
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册一）	菊上 五一六	三・五〇 ・二四
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册二）生產要因	菊上 四〇〇	三・〇〇 ・二四
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册三）需要・供給・價値の一般關係	菊上 四九八	三・五〇 ・二八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册四）國民所得の分配	菊上 五五〇	三・七〇 ・二八
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	菊上 三八四	二・八〇 ・二四
慶大教授 野村兼太郎著	近世商業史	菊上 三五四	三・〇〇 ・二六
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	四六上 二三三	一・五〇 ・一八

トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	四六上 一九八	二・〇〇	・二〇
ブハーリン原著 富士辰馬・横田千元譯	唯物史觀	四六上 六三〇	三・五〇	・二八
ブハーリン著 富士辰馬譯	世界經濟論	四六上 三五六	二・〇〇	・二〇
ニコライ・レーニン著 茂森唯士譯	レーニニズム	四六並 二二四	一・二〇	・一六
ヂーシノヴィエフ外 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	四六並 一六四	・九〇	・一四
持地六三郎著	日本植民地經濟論	菊上 五一〇	二・八〇	・三〇
佛國藏相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	四六並 二四〇	一・三〇	・一六
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	四六並 六〇	・三〇	・〇二
森戸辰男著	學生と政治	四六並 六〇	・三五	・〇二
森戸辰男著	思想闘爭史上に於ける社會科學運動の重要性	四六並 七二	・三五	・〇四
森戸辰男著	思想と闘爭	四六上 三八六	二・〇〇	・二〇
ウンターマン著 森喜一譯	哲學思想の史的考察	菊上 一四二	二・〇〇	・一〇
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無産階級の哲學	四六上 三八六	二・五〇	・二二
高橋龜吉著	資本主義末期の研究	四六上 五三二	二・五〇	・二四
渡邊一郎著	勞働問題原理	四六上 三五〇	二・〇〇	・一〇
高畠素之著	マルキシズムと國家主義	四六並 二一八	一・〇〇	・一八
アーサー・レウヰス著 高畠素之譯	改訂社會主義社會學	四六並 二四八	一・〇〇	・一六
高畠素之著	社會主義と進化論	四六並 二七三	一・〇〇	・一八
カウツキイ著 高畠素之譯	改譯資本論解説	四六並 五一八	一・八〇	・一八
口田康信著	國家思想の研究	四六上 三四四	二・〇〇	・三〇
早大教授 大山郁夫著	現代日本の政治過程	四六上 三五四	二・五〇	・三〇
法學士 森莊三郎著	法制講話	四六上 四三四	二・五〇	・三〇
文學博士 朝永三十郎著	カントの平和論	四六上 二四六	一・五〇	・一八
大阪内務部事務官 三宅司法書記官著	増補普通選擧法要綱	菊半截 二七六	・八〇	・一六
帝大教授 田中耕太郎著	法と宗教と社會生活	四六上 四〇八	二・五〇	・三〇
帝大助教授 廣濱嘉雄著	私法學序説	菊上 四六〇	三・〇〇	・二六
京大教授 末川博著	ソヴィエトロシアの民法と勞働法	四六上 四一二	二・五〇	・三三
法學士 高柳賢三著	現代法律思想の研究	菊上 八二〇	四・五〇	・二七
文學博士 松本亦太郎著	心理學講話	四六上 五四六	四・二〇	・二六
文學博士 松本亦太郎著	智能心理學	菊上 一〇四〇	九・〇〇	・三六
文學博士 桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	四六上 五二六	三・五〇	・二四
文學博士 米田庄太郎著	文化哲學叢書第一篇 リッケルトの歷史哲學	四六上 品切	四・七〇	・二六
板垣鷹穂著	文化哲學叢書第二篇 新カント派の歷史哲學	四六上 二一八	一・五〇	・一八
京大教授 恒藤恭著	文化哲學叢書第三篇 ジムメルの經濟哲學	四六上 品切	三・〇〇	・二〇
廣島高師教授 勝部謙造著	文化哲學叢書第四篇 ディルタイの哲學	四六上 三一五	二・〇〇	・二〇
京大教授 植田壽藏著	藝術哲學	菊上 三四四	二・七〇	・二四
廣島高師教授 清原貞雄著	日本道德論	菊上 六〇四	四・五〇	・三〇
廣島高師教授 長田新著	現代教育哲學の根本問題	菊上 三一二	三・〇〇	・二四

賀川豊彦著	生存競爭の哲學	四六上	三六〇	二・〇〇	・二〇
帝大教授 武内義雄著	老子の研究	菊上	五一三	三・五〇	・二八
佐藤繁彦著	體驗宗教の研究	四六上	三三八	二・〇〇	・二〇
スティルネル著 辻潤譯	自我經	四六上	六六八	二・八〇	・二二
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六上	二三四	一・五〇	・一八
東洋大學教授 關寛之著	學校兒童心理學	四六上	四七二	二・七〇	・二二
エム・シー・コールダイ著 長尾正人譯	遺傳學概論	四六	三〇八	一・八〇	・二〇
松崎實編	校註 切支丹鮮血遺書	四六上	六六二	三・五〇	・二八
有島武郎著	愛する人々へ	四六上	五〇四	三・〇〇	・二四
吉江喬松著	近代文明と藝術	四六上	三三四	二・〇〇	・二〇
里見弴著	文藝管見	四六上	一九八	一・二〇	・一六
文學博士 厨川白村著	苦悶の象徴	四六上	二一四	一・八〇	・二〇
文學博士 厨川白村著	近代の戀愛觀	四六上	三七〇	二・五〇	・二〇
昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	四六上	七八六	四・八〇	・四〇
帝大教授 阿部次郎著	學藝論鈔	四六上	四一三	二・二〇	・二〇
帝大教授 阿部次郎著	北郊雜記	菊半上	五〇三	一・九〇	・一八
帝大教授 村岡典嗣著	吉利支丹文學抄	菊上	三六二	三・九〇	・二六
武者小路實篤著	文學に志す人に	四六上	一六六	一・三〇	・一八
京大助教授 太宰施門著	ロマンチック時代	四六上	二六八	二・二〇	・一八
理學博士 石原純著	戀愛價値論	四六上	二八三	一・六〇	・一八
親佛文學會編	ゆかり	四六上	四四八	三・五〇 特六・〇〇	・二〇
文學博士 高野辰之著	日本演劇の研究	菊上	四一二	四・〇〇	・三〇
菊池寛著	文藝當座帳	四六上	二六四	一・五〇	・一八
正宗白鳥著	文藝評論	四六上	三七二	一・八〇	・二〇
齋藤茂吉著	現代代表自選歌集 朝の螢	四六上	一三四	一・三〇	・一八
島木赤彦著	現代代表自選歌集 十年	四六上	一四〇	一・六〇	・一八
古泉千樫著	現代代表自選歌集 川のほとり	四六上	一八八	一・八〇	・一八
中村憲吉著	現代代表自選歌集 松の芽	四六上	一八〇	一・八〇	・二〇
釋迢空著	現代代表自選歌集 海やまのあひだ	四六上	二六六	一・八〇	・二二
木下利玄著	現代代表自選歌集 立春	四六上	一七六	一・八〇	・二〇
與謝野晶子著	現代代表自選歌集 人間往來	四六上	一七三	一・八〇	・二〇
前田夕暮著	現代代表自選歌集 原生林	四六上	二〇四	一・八〇	・二〇
土岐哀果著	現代代表自選歌集 空を仰ぐ	四六上	一九六	一・八〇	・二〇
若山牧水著	現代代表自選歌集 野原の郭公	四六上	二一〇	一・八〇	・二〇
窪田空穗著	現代代表自選歌集 槻の木	四六上	一九一	一・八〇	・二〇
倉田百三著	超克	四六上	三九二	二・二〇	・二〇
賀川豊彦著	星より星への通路	四六上	三七八	二・〇〇	・二〇
若山牧水著	樹木とその葉	四六上	三六七	二・〇〇	・二二

長谷川如是閑著	改造社隨筆叢書第一篇 犬・猫・人間	四六並 四〇三	一・八〇 ・二六
堺利彥著	改造社隨筆叢書第二篇 野外劇の一幕	四六並 二五八	一・五〇 ・一六
中澤臨川著	改造社隨筆叢書第三篇 嵐の前	四六上 二三四	一・五〇 ・一六
高濱虛子著	改造社隨筆叢書第四篇 朝の庭	四六並 三〇六	一・七〇 ・一六
武者小路實篤著	改造社隨筆叢書第五篇 筆のむくまゝ	四六並 三〇四	一・二〇 ・一四
河東碧梧桐著	改造社隨筆叢書第六篇 二重生活	四六並 二二〇	一・二〇 ・一二
文學博士 新村出著	南蠻更紗	四六上 三九八	二・六〇 ・二三
野口米次郎著	先驅者の言葉	四六上 三二〇	一・八〇 ・一二
野口米次郎著	坐る人間の評論	四六上 三一六	二・〇〇 ・一八
富田溪仙 下店靜市編	溪仙八十一話	菊上 三四	三・〇〇 ・二二
岸田國士著	言葉・言葉・言葉	四六上 二四八	一・八〇 ・一二
文學博士 幸田露伴著	幽秘記	菊上 三三八	二・八〇 ・二三
文學博士 幸田露伴著	龍姿蛇姿	四六上 三三三	二・八〇 ・二三
醫學博士 土肥慶藏著	鶚軒游戲	四六上 四〇六	四・〇〇 ・二三
文學博士 瀧精一著	文人畫概論	菊上 品切	二・〇〇 ・二六
板垣鷹穗著	美術史論集 表現と背景	菊上 一九八	四・八〇 ・二三
岸田劉生著	圖畫教育論	菊上 三二八	三・五〇 ・二二
矢代幸雄著	太陽を慕ふ者	四六上 二二四	一・七〇 ・一八
醫學博士 木下杢太郎著	支那南北記	四六上 五八六	三・八〇 ・二〇
改造社編	大正大震火災誌	四六倍 八〇四	一五・〇〇 內・四五
ビシャラ・ナヘス著 高[illegible]毅譯	ツタンカーメンの生涯と時代	四六上 一六三	一・八〇 ・一六
村松梢風著	近世名匠列傳	四六上 三六六	二・五〇 ・二〇
山川均著	改版 レーニンとトロツキー	四六上 二六八	一・五〇 ・一八
大杉榮著	自敍傳	四六並 三三四	二・〇〇 ・一八
文學博士 幸田露伴著	蒲生氏鄉 平將門	菊上 二六六	二・〇〇 ・三〇
文學博士 幸田露伴著	賴朝・爲朝	菊上 二五八	二・〇〇 ・二〇
柳澤健著	ジャン・ジョレス	四六上 二三三	一・五〇 ・一八
堺利彥著	堺利彥傳	四六上 三四四	一・九〇 ・二〇
野口源三郎著	オリンピアへの旅	四六上 四四八	二・五〇 ・二〇
芥川龍之介著	支那游記	四六上 二七六	二・〇〇 ・二〇
數川豐彥著	雲水遍路	四六上 三五六	三・〇〇 ・二六
[illegible] 河合榮治郎著	在歐通信	四六上 三三三	二・〇〇 ・一八
[illegible] 共著	アインスタイン全集 全四冊	菊上	各五・〇〇 各冊・二六
理學博士 桑木彧雄著	物理學と認識	四六上 二三四	一・五〇 ・一八
佐藤充 庄司彥六 共著	近代物理學概觀	菊上 二三四	四・〇〇 ・三〇
中澤臨川著	電子說から見た世界	四六上 品切	一・八〇 ・一八
佐藤春夫著	童話 ピノチオ	四六上 二九六	一・八〇 ・一八
關寛之著	學校兒童心理學	四六上 四二二	二・七〇 ・二〇

民衆夏季大學日程

『現代日本文學全集』會員の御厚情と御聲援に應へ、また豫ねて我社が平常抱懷する藝術の徹底的民衆化運動の一端として、今夏を期して「民衆夏季大學」を開設することは、既に各位の諒知せられてゐることゝ思はれるが、愈々左記の場所と日程に依つて、之れが開催の御通告を爲し得ることは我等の欣快に堪へぬ所である。此の企畫は、我等に取つては固より窮極の運動の一端にも過ぎないのであるが、之に對する熱意と努力は全社の全精力を集中するも尚足らざるを覺ゆる。我等は、斷るまでもなく職業的夏季大學業者ではない、併し我等の熱意と努力は、此の文化計畫に對しても十分の效果を擧げ得る自信を持つてゐる。奮つて各位の御聽講を待つ所以である。

聽講資格

『現代日本文學全集』の會員に限る。

但し場所と日時は制限あるに付き、希望者は七月二十日迄希望地を記して本社の「夏季大學係」まで御申込下さい。若し希望者多數にて到底會員の希望を容るゝ能はざるときは、抽籤にて人員を整理致しますが、此の點は豫め御諒承下さい。また聽講者には『聽講券』を發行致します。

聽講料

無料にて聽講出來ます。

各地の日程

東京
- 場所　東京市外國立大學都市
- 日時　八月一日より六日迄、毎日午前八時より
- 講師　長谷川如是閑氏　福田德三氏　小宮豐隆氏　菊池寛氏　末弘嚴太郎氏　武者小路實篤氏　（その他）

北海道
- 場所　札幌
- 日時　八月八日より十三日迄、毎日午前八時より
- 講師　吉田絃二郎氏　吉江喬松氏　杉森孝次郎氏　久米正雄氏　佐々木信綱氏

信越
- 場所　新潟
- 日時　八月四日より八月九日迄、毎日午前八時より
- 講師　里見弴氏　久保田万太郎氏　藤井健治郎氏　吉澤義則氏　高須芳次郎氏

關西
- 場所　和歌山縣高野山
- 日時　八月十三日より十八日迄、毎日午前八時より
- 講師　阿部次郎氏　高濱虚子氏　片上伸氏　新村出氏　野口米次郎氏　林久男氏　佐藤春夫氏　成瀬濟氏

九州
- 場所　長崎縣溫泉岳
- 日時　八月十七日より二十二日迄、毎日午前八時より
- 講師　阿部次郎氏　小宮豐隆氏　芥川龍之介氏（交渉中）　藤森成吉氏　德川[illegible]郎氏

日本周游

洞爺行

里見弴

明治四十二年の夏、舊くから父、武が開墾させてゐた北海道狩太の農場に、今は共に亡き父と長兄武郎とに從つて、私も弟の行郎とが、そこの事務所と稱する狹い家で一週間あまりも過ごした時のことだ。父と兄とは、何を調べるのか、毎日脚絆がけで、朝から夕方まで廣い農場のなかを歩き廻つてゐた。私と弟とは、碌すッぽものも出來てゐない畑と、その間に點在する小作人の堀立小屋とのほかには、駄菓子屋一軒ない僻地に、相手になつて遊んでくれてもなく、全く日暮らしに困つてゐた。で、兄に勸められて、或る日、十里あまり隔てた洞爺湖まで遊びに行つた。その折の紀行を、舊い手帳のなかに探し出すことが出來たから、あまりくだ〱しいところは省くとしても、故意と文章もそのまゝに、本誌に需められるところの、夏の旅行記の責をふさぐことにする。

八月二十四日、行郎に起されたのは丁度六時、すぐ仕度をし、飯を食ふ時分には、前夜舊宿まで賴みに行つて、置いて貰つた馬が來た。霧の深い朝で、四五間さきは見えなかつた。父や兄に別れを告げて馬上の人となつたのは七時。余の馬は、行郎のに比べるといくらか丈も高く、多少馬らしかつたが、それにしてもだらしのない農馬たるを失はない。少し胴ッ腹を蹴ると、ものを摘みあげる態に、ヒトッところでばかり跳ねあがつてギァロップを踏む。振り返ると、馬には初てと云つてもいゝ行郎も、へんに眞面目くさつた顏でトコ〱ついて來る。然し、濃い霧を分けて行く氣持は惡くない。一時間ほどして、やつと霧が霽れると、今度は急に暑い日光が直射して來た。並木なんてしやれたものは、もとよりあらう筈もなく、赤土の曠野へぢり〱と燒きつける。二日ほど前まで降つてゐたゝめ、所々泥濘はあつたが、それでも塵埃のたゝないのが大助かりだ。ガン〱照りつける陽の下

にゐるといふものは、どうかするといやに淋しい。ゴーリキの「ふさきの虫」の粉屋のチホンが町に出て行く時の氣持などを思ひ出す。

　風がない、木がない、たゞギラ／＼した夏の日光だけだ。二匹の瘦馬が、低く首を垂れてコツ／＼と凸凹道を拾ふやうに進む。――この世の景色とも思へない。

　十時半幌狩別に着く。哀な旅舍の前に馬を繫ぎ、茶を飲んで休むうち、四十分もしたと思ふと、もう馬丁が着いて來た。五里の道で、人と馬とが、僅かそればかりの差で到着するのをもつてみても、吾々の馬がどんなものだかといふことがわかる。それからの二里は、わりに平坦だつたので、ひとッ飛びに十一時半にはもう留壽都の太田といふ宿屋と驛遞とを兼ねたうちに着いた。こゝから馬を乘り換へる約束ゆゑまた休んで馬丁を待つ。緣側に日のあたつてゐる具合、裏の畑から靜かな運搬の響が傳はつて來る具合、小さな白い蝶が舞ひ込んで來る具合、丁度內地の六月頃の旅を思はせる。

　中食を終つた頃、馬丁が來て馬の代四圓を請求した。余は二頭で二圓のつもりでゐたのだが、いま聞けば一頭二圓づゝだと云ふ。宿の亭主が帳場からこれを聞いて、大に憤慨し、なんのために道廳から補助をしてまで驛遞を置いてゐるのか、みんな旅客の便を圖るためだ、だから警察でもちやんと賃金表を拵へてゐるんぢやアないか、など＼吾々に代つて大に辯じてくれたが、馬丁は馬丁で、昨夜事務所の人が來た時にも、この忙しい時分に一圓やそこらで一日馬を使はれては合はないから、と斷つたのだが、是非と云ふから、ぢア二圓なら行つてあげやうと云ひ、それでもいゝからと云ふ譯だつたので來た、と頑張る。そんならそれでいゝが、實は吾々もいくらも金は貰つて來てゐないので、事務所に取りに行つてくれと賴むと、それもこつちで貰ふ約束になつてゐるのだから、となか／＼聽いてくれない。止むなく四圓拂つたが、亭主はそばから、後日のために受取をとつて置けと勸める。さう云ふと、印を持つて來てゐないからとかなんとか、たうとう埒かなかつた。

　今度の馬の片ッぽの奴は、種馬たさうで、五尺一寸もあるなか／＼堂々たるトロッターだ。余は恐れをなして、それに行郎を乘せる。チヨナンと、足が馬の腹の半分までもさがつてゐない。一町も行かないうちに、鞍が高くてやりきれないから代つてくれと云ふ。乘り變へて二里ほど行つたところで、茶店の婆さんに近道を敎はり、はいつて行つてみると、細い道で而も急な坂ばかり多く、おまけに虻がたかるので馬はのべつに首や尾を振り、後足で蹴あげるやうなまねをする。くそ婆アひでえ道を敎へやアがつた、と腹が立つて來て、少し平なところへ出るといきなり馳けさせた。すると、うしろから、おゝい、英ちやーん、待つてくれよ！、と、情ない聲で呼ぶので、振り返ると、行郎が落馬して、恨めしさうにこつちを見てゐた。それでも、この道で、見たい／＼と思つてゐたアイヌの女に始めて行き逢ふことが出來た。女房さんとみえて、眉の間、口の周りに文身があつたので、すぐわかつたが、然し年の頃など見當がつかなかつた。

　山鼻を一つ廻ると、いきなり眼下に、白く光る湖が見えた。やア、來た來た！と、吾々は思はず歡呼の聲をあげる。急な坂をおりると、そこがもう向洞爺だつた。

三橋といふ宿の表二階、中の島に對した座敷に通るなり、上着をぬいで、いきなり二人ともゴロッと寢轉んで了つた。三時頃だつたらう。宿の浴衣に着換へて、村を一周りして歸つてみると、馬丁は馬を連れて歸るために來てゐたが、頼んで置いた荷物は忘れて了つたと云ふ。然し今夜のテイソウで届ける、と云つた。テイソウとはなんのことだか分らなかつたが、別にさう急いで要るものもはつてゐないので、さうか、と云つて二階へあがる。

夕方、游ぐ。水は、湖とは思はれないほどあつたかゝつた。不凍湖だといふし、幾分か温泉の氣味があるのだらう、と思ふ。少し遠くへ游ぎ出して下を見ると、眞青で底が知れない。前に聞いてゐた話で、この湖を測量に來た人が、百幾尋とかの糸をおろしてみたが、少しも手答へがないので氣味が惡くなり、糸を抛りッぱなしにして逃げ歸つた、といふやうなことを思ひ出すと、急に可怕くなつて、こつちも大急ぎで岸へ匍ひあがる。

宿で、しようことなしに出鱈目の碁や將棊をさしてゐると、おもてで、いきなりガタ／＼ン、ピシヤンといふ騒ぎ。見ると、門柱、――と云つても、たゞ自然木を二本ッ立てたゞけのものだが、それに繋いであつた荷馬車の馬が、何に驚いたのか荒れ出して、駈け出す拍子に車が柱にひつかゝつて、馬もろともに横ッ倒しにひつくり返つたのだつた。積んでゐた樽でも毀れたとみえて、何かジヤア／＼こぼれてゐた。

晩飯を食ひごろ／＼してゐたが、五日ぐらゐの月が出たので、少し散歩をして來やうと、九時頃から出かけた。門のところまで來ると、プン／＼酒の匂ひがしてゐた。さては先刻のは酒樽だつたかと、なんだかへんに可笑しくなる。

渚を行くと、遠くに松明の火がチラ／＼水に映つてゐる。なんだらうと思つて行つてみると、女房さんや娘たち、女ばかりで、脛まで水にはいつて海老をすくつてゐるのだつた。聲をかけ、何か訊いてみても、たゞ笑つてゐるばかりで誰も答へやうとはしない。てれてゐると、何か早口に、こつちの上足でもとつたやうなことを云つたとみえて、みんなが一度にどつと笑ひ聲をあげた。諸國から入り込んだ雜民どもだけに、へんに人が惡いなと思ひ、いやな氣がした。なかには十にもならないほどの子供も混り、みんな二人一組になつてやつてゐる。四角ばつた網でしやくつてゐる方が大抵年かさで、背なかに白樺の皮をたくさん背負つてゐる。もう一人の合棒が、木の枝の先を割つたのに白樺の皮を挾み、それが松明だ。燃え盡しかゝると、かゞんでゐる背なかからぬき取つて挾み加へる。この役は、獲物を入れる桶を浮べ、細で引ッ張つて行く。こつちの話をうまくうけてくれるやうなら、ちよつと道具を借りてやつてみたいくらゐに思つてゐたのだが、何を云はれたのか解らないが兎に角嘲笑されたので、そのまゝまた渚づたいに引き返す。天心の月、湖上の銀波、遠くでチラ／＼する松明の火、なかなかよかつた。

宿に歸つてから、テツイウの意味を訊いたら、遞送で、つまり郵便屋さんのことだつた。それが、十一時頃、こつちが寢て了つてから荷物を持つて來てくれた。

七時起床。今日も日本晴。楊子、齒磨、手拭を持つて湖畔に出て行き、水浴をする。湖面を、滑るやうに朝靄が遠退いて行く。

尻が痛いのと、金が足りさうもないため今日は留壽都まで歩いて出る。小さな町に馬鹿に料理屋が多く、なかに思君亭などゝ看板をあげたのもある。入口の片側が大抵格子の出窓になつてゐて、汚らしい鏡の裏が、三四面づゝ立かけてあるのが見える。一軒のうちでは、大形の浴衣を着た女が五六人、横座になつたり、寢轉んだり、後手にのけ反つたりして、何やら笑ひ興じてゐる樣が窺はれた。話に聞いてゐる、ごけといふものだらう。

前日の宿でまた晝飯を食ふ。亭主が出て來て、昨日の二圓一件を巡査に申告して置いたから、いづれ本署から貴方の方へ何か云つて來るかも知れないが、たゞ二圓づゝ拂つたと云つて置けばいゝ、などゝ、尚前日の餘憤去りがてに喋り立てゝゐた。

馬は昨日のと同じ奴だつた。あらかた道が乾いて、今日は塵埃がえらい。行郎は、一度おつことされた馬を嫌ひ、種馬に乘り、先に立つてポカ〳〵と、だいぶん調子よく乘りこなして行く。馴れてか、炎天もさして苦にならず、五時、無事狩太の事務所に歸り着く。父や兄はまだ歸つてゐなかつた。

北陸の旅

吉田絃二郎

五月二十四日。雨。

京阪の旅からかへつて來て中二日、旅の行李もそのまゝに朝八時上野を立つ。

大宮、鴻の巣、熊谷の驛々も雨のなかに見る。麥のみすく〳〵と伸びて、二三丁離れたるばかりの森も村も雨に煙りて旅人の心を誘ふ。妙義の岩山から落ちてゐる瀧を霧のなかに見、さらに谿深く霧の間に間に川の漂ふを眺めるのは碓氷を越ゆる旅人にとりて情趣ふかきものである。

このあたりから谿に老鶯の聲を聽く。

碓氷の新緑の雨に濡れたるながめは恐らく秋の紅葉にもまさつてゐるであらう。汽車の窓をあけ放して氷のやうな山の霧を感ずる。

輕井澤に着いたころから雨が止んだ。輕井澤から沓掛の間は去年の夏毎日のやうに歩いたところである。汽車に沿ふて懷かしい道を見出す。

沓掛の驛を汽車がすでに動き出してからであつた、星の温泉の若主人がプラットフォームの砂利の上を飛んで追ふて來るのを見た。「氣の毒なことをした」と思つたので、窓から首を出して「歸りに立ち寄ります」といつたまゝ窓をしめた。

東京を立つ前に、わたくしは「北國の旅に出る序に或ひはちよつと立ち寄るかも知れませぬ。尤もいよく\立ち寄るやうでしたら電報を打ちます。」といふ葉書を出して置いた。朝の間は雨が降つてゐたので、わたくしは沓掛に下りることを斷念して電報を打たなかつた。ところが沓掛の溫泉宿では朝からすでに三度自働車を出してステーションに來てゐたといふことを後で知つた。

汽車は追分驛にちかづいて行つた。わざく\ステーションまで出迎へてくれたのをそのまゝ通り過ぎてしまうことが心苦しくてたまらなかつたので、「歸りに」とはいつたが、急に思ひ立つて追分に下りてしまつた。

霧のやうな雨がプラットフオームの砂利を濡らしてゐた。

わたくしは驛の人に「自働車か俥はないでせうか」とたづねて見たが、その附近には一臺の自働車も俥もないといふことであつた。荷物さへなければ一里ばかりの道をあともどりして歩くだけだと思つたが、行李があるのでそれもならず、「電話もない」といふ。沓掛へかへる汽車を待つとなれば日が暮れてしまふ。

わたくしが困り切つてゐるのを見た驛の人たちは、鐵道電話をつかつて沓掛の驛からさらに溫泉場まで傳へてもらうことにしてくれた。追分驛の人たちの親切で、わたくしは三十分ばかりの後には星の溫泉の若主人が運轉した自働車に載ることができた。それにしてもわたくしは高原の小ひさな追分驛であたへられた驛の人々の親切さをしみじみとうれしく思ふ。

追分の町は沓掛の町よりもさらに寂びれた古宿である。くづれかけた倉の壁に沿ふて山櫻がさかりである。八重はまだ蕾が堅い。

桃や杏子の花がさかりである。

落葉松の新芽はいかにも柔かである。かゞやくといつたのでは感じが堅過ぎる。手を觸れたらついえさうな柔かさである。

落葉松の森のなかには雉が鳴き、みやま鳥が啼いてゐた。

去年の夏中わたくしたちの家の水を汲んでくれてゐた若い男が沓掛の町を歩いてゐるのを自働車のなかから見た。日が暮れかゝつてゐたので先方は氣付かないで通りすぎてしまつた。淺間は雲につゝまれてゐて見えなかつた。

「お珍らしいでせう」といつて宿の人が火燵を持つて來てくれた。わたくしはいつたい火燵きらひで、どんな寒い冬でも火燵へはいつたことはない。しかし五月末の信濃の山の馳走だと思へばうれしくなつて、火燵の上に膝を置いて箸を持ちながら瀨の音を聽く。水鷄はまだ鳴かぬ。

七月二十五日。晴。山はまだすつかり冬枯れの姿である。淺間はすつかり晴れてゐる。雪がまだ殘つてゐる。

東の山にも西の山にも杜鵑が啼き、雉が鳴く。八ヶ嶽の姿が尊いほどに落葉松の若葉を越して拜まれる。

沓掛からの汽車のなかでわたくしは一人の若い人に逢つた。「母をつれて善光寺へゆくのです」といふ。わたくしは母といふものを持つてゐるその旅人をうらやましいと思つた。

昨日追分驛で電話をかけてくれた若い驛の人を、小諸のプラットフオームで見た。わたくしたちは窓越しに笑ひながら默つた。

「今日はこゝの驛員が一人風を引いたので手傳ひにやつて來たんです」といつてゐた。

「御機嫌よう！」わたくしたちは舊知のやうな懷しい言葉を交はしつつ別れた。

千曲川は青葉の溪谷を穿ち、古城のほとりをめぐり悠々として善光寺平に入り犀川と合ふ。川中島のあたりたゞ柿の葉がかゞやき、桑の葉がかゞやく。

信濃の人たちは峻しい岩山の上の上までも桑畑を切り拓いてゐる。麓の赤松の林のなかによき寺を見、よき墓を見る。

母をつれた幸福な若い旅人は默禮して長野驛で下りて行つた。

ところ／＼にアカシヤの白い雪のやうな花を見る。或る小學校の窓にアカシヤの花につゝまれてゐた。授業が始まつてゐるのであらう。校庭の壺はたゞアカシヤの花のみ薰つてゐた。

一茶の故郷柏原ではながいこと汽車がとまつてゐた。曾遊の地である。丸山の丘、寺、緩勾配の北國街道……わたくしの記憶にのこされてゐるまゝである。雨上りの川のほとりには子供たちが釣を垂れてゐた。一茶の子供時代を思ふ。

柏原の町はづれに小學校がある。子供たちが多勢町の方へかへつてゆく。どれどの子が一茶に似たか、たづねて見たいやうな氣もする。

妙高も、黒姫も、飯綱もまだ眞冬である。雪は麓ちかくまで眞白である。

道は越後路にかゝる。白樺の新芽とともに幹の雪白の色がいかにも柔かい感じをあたへる。あだかも搾れ立ての牛乳といつた感じである。どこの驛であつたか國境ちかきあたりに林檎の花の咲いてゐるのを見た。

田口、關山を越ゆるころはこの冬のあの恐ろしい雪の噂を思ひ出す。そこには恐ろしい冬から救はれた人々がぼんやりと道のわきに立つて汽車をながめてゐた。

越後に入れば人々も家畜も、雪から雪の間の比較的短い太陽の光りを惜しむものゝやうに日が暮るゝまで休む暇もなきまでに、雪をいただいた山を脊にして土を耕してゐる。日本海は煙つて見えなかつた。

直江津を出て汽車は日本海に沿ふて走る。間もなく濱の鐵道に沿ふて幾里もの間防砂林がつゞいてゐるのも、南の海岸を見馴れてゐる者には珍らしい。到るところ濱の松林は冬の濱の砂に赤く焦けてゐる。凄まじい吹雪にとざされた北の國の人たちの冬の生活を想ふ。

鯨波あたりの濱の景色は旅人の疲れたる眼にはうれしきものである。たゞ山の木の雪に傷められ、日本海の雲の低迷するが何となくわびしい。山にはにはとこと桐の花が多い。

日暮れて長岡に入る。豫想外に賑かな町である。暗い空の下に明るい町を見出すのはかへつてわびしい旅の思ひを感ずる。

廿六日。晴。長岡の驛を南に昔の士族町らしいあたりを通りぬくれば一面の田である。道は一直線に山の方へ走る。

悠久山といふ。藩主牧野氏の廟所。今は市の遊園地である。老杉古松鬱蒼たる靜境。彌彦山、出雲崎等を丘に立ちて眺める。なつかしき名である。長岡の平原をへだてゝ山は思ふことあるがごとく鎭る。

河合繼之助や祖國の難に殉じた長岡藩の少年勇士たちの物語りをあはれに聴く。
「雪はこの櫻山の櫻を埋めてしまひますよ。こゝいらの木はみなスキイの下になつてしまうのですよ」と案内のM氏は語つてゐた。
　このあたりの岡といふ岡、畑といふ畑には桐の花が咲いてゐる。昨日直江津から長岡への途中で、わたくしは廣い川のほとりに一つの小ひさな町を見出した。町のうしろには繁つた小山があり、小山にも川のほとりにも桐の花が一面に咲いてゐたことを思ひ出した。日が暮れかゝつてゐた。桐の花に暮れてゆく北國の町は何となくさびしいものである。
　長岡を出ると間もなく平野はひらけて一面の耕作地である。葦があり、沼があり、苗を積んだ小舟が泛かぶ。
　遠い山にはまだ雪がつもつてゐる。
「すこし山にはいるとまだ里でも一尺ぐらゐ雪がつもつてゐて田が植えられない」といふ話をきいた。
　新潟の驛を下りて萬代橋をわたる。信濃川の水は濁つてゐる。いかにも大きな川である。日本の川としては大まか過ぎるほど大まかな感じをあたへる。廣い河口にはすでに日本海の暗い空が低く垂れてゐて、憾いほどに荒海の波頭がかゞやいては消える。
　葦の間を白帆が走つてゐる。汽船も浮かんでゐる。まことに長い木橋である。雨の日に廣重に描かすべき橋である。
　二三年後には川の幅は狹められ、鐵橋に架け替へられるといふことであるが、惜しいやうな氣もする。

町の人にみちびかれて公園を見、信濃川に沿ふて歩む。漫々たる水はうれしきものである。
　新潟は水の町である。縱横に區られたる幾條の堀割がある。新潟は柳の町である。いたるところ嫋々たる柳絲が輕風にもてあそばれてゐる。
　海に近く花街がある。ずつと以前の博多の柳町といつた感じの町である。そこを通りぬけて間もなく濱に出る。小高い砂丘である。新潟の町、信濃川、さらに遠く蒼然たる出羽境の山を眺める。
　日本海の波は數十歩の下に荒れてゐる。いかにも美しい海の色である。
　佐渡の島が波の上に夢のやうに浮かんでゐる。
「奥の細道」に記された鼠の關といふのはどこいらであらう。北方のはるかなる雲の下の山をそれと想像しつゝ芭蕉の旅を偲ぶ。
　芭蕉が出羽の方から鼠の關を越えて「北陸の雲に望む」だころはまだ新潟は名もないたゞの船着き場であつたであらう。
　越中國「一ふりの關」で一つ家に寢たといふ女のことを書くにも芭蕉は「越後國新潟と云所の遊女なりし」としてゐる。
　夜、町の劇場にての諧和會のかへりを宿まで歩く。「雪のなかにとざされてゐることが多いので春になつて雪が解けたとなるとみんな戸外へ戸外へ飛び出すのです」と語つた人があつたが、いかにもさうらしい。
　東京の縁日を想はせるほどの夜店が柳の並木の下で開かれてゐる。若い人たちが幸福さうに街をうづめて春の夜を樂しんでゐる。植木を

賣る男たちが殊に多い。

北國の夜の空は星明りも暗い。

廿七日。晴。朝六時の汽車で新潟を立つ。

直江津で汽車を乘りかゆれば、道はしば〳〵左手に險しい山を控へ、右手は斷崖に沿ふて辛うじて道一筋を通はすほどの難所にかゝる。波はつねに崖下を洗つてゐる。

漁村から漁村へとつゞく。わたくしは糸魚川のやゝ手前で見た一つの漁村を今にもはつきりと記臆してゐる。その漁村全體が轟々たる岩山に獅嚙みついた一塊の集團となつてゐる形である。だから軒から軒へ並んでゐるやうな平地の漁村とはちがつて、一つの屋根がそのうしろの一段高いところにある家の土間につゞくといつた恰好である。日本海の暗い波に臨んだ險しい岩山を攀づべき石磴のかはりに、段々と重ねて漁家を並べ立てたといふ形である。暗い日本海を背景に文字通りに林のやうに網が干されてゐる。

わたくしが驚いたのはその漁村全體をつゝんでゐる色彩の寂しさであつた。家の羽目板、庇、こけら葺きの屋根、柱すべてが、恐らく日本海の潮にさらされた關係であらうが、あだかも死人の家を聯想させる灰色につゝまれてゐる。

やゝすゝけた白色といふのでもない、まつたくの灰色でもない。無氣味なほどのわびしい色である。

もしこの世界のどこかに死の町、死の海濱、死の空といふものがあるとしたら、恐らくあの北の海の漁村を聯想させるであらう。

死の漁村では人々は濱に出て網を繕つてゐた。漁夫の子供たちが三人濱の岩の上で溜り水を掻い出してゐた。

裏の山には淡紅のにはとこの花が咲いてゐた。

わたくしは糸魚川で汽車を下りて相馬御風氏を訪ねることにした。

×

御風氏の家は驛できくとすぐわかつた。濱から捕つて來たばかりの魚を糶つてゐる市場の聲がすぐちかくから響いて來た。

「還元録」一冊を遺して糸魚川に歸つて行つた氏の當時の心持ちをわたくしははじめてしみ〴〵と聽いた。わたくしたちの話はほとんど島村抱月先生のことに終始した。あのやさしい、寂しい抱月先生の眼、あのわびしいスキートな抱月先生の聲がわたくしの頭によみがへつて來るのであつた。

わたくしはさらに冬の恐ろしい雪の話をきいた。まる一週間晝となく夜となく窓を埋め、屋根を埋めた恐ろしい雪のなかに生死の境に直面してゐた人たちの生活について聽いた。一月ばかり前までは深い雪のなかにとざされてゐたであらう庭の木が太陽のかがやきにあこがれて伸びに伸びてゐるのを見た。雪の解けた濱に嬉戯してゐる雪國の子供たちとともに涙ぐましい心を喚ぶ。北陸街道は糸魚川を東から西に貫いて海から出てゝまた海に入る形になつてゐる。古い町を通り過ぎて切り岸のやうに突つ立つた海岸をかすかに絲のやうに走つてはやがて越中境の山に入り、潮煙のたかにかくれてゆく北陸の道は秋のごとくわびしい。

川のほとりにアカシヤの花が咲いてゐた。雪の山がすぐ町のうしろに聳えてゐる。

その日はまつたく不思議な日であつた。

わたくしは糸魚川のステーションで三十年振りに小學時代の友人にめぐり逢つた。

友人は黒部川の水電につとめてゐたのであつた。わたくしはかつてその友人と逢つて見たいために幾度か心當りの人たちに手紙を出して見たが、つひに目的を果さなかつたことがあつた。それが偶然にも北國の小驛でめぐり逢ふといふことはいかにも不思議な因緣である。偶然の出來事だといつてしまへばそれまでのことであるが、實際人生には人間の智慧以上のものがある。友人のことを考へながら幾つかのトンネルをくゞり、幾つかの漁村を過ぐ。

親不知は鐵のごとき懸崖の直ちに日本海の荒浪のなかに落ちなんとしてゐるところである。日本アルプスの尾根が忽然として北の荒波に洗はれたといふ形をなしてゐる。そこにはつひに一條の徑をも切り拓かるべきゆるやかな地積を見出すことはできない。隧道を出でゝ青き海を見出す刹那にさらに次の隧道に入る。白帆の點々たるを白雲の下に望む。

親不知を通り過ぎ白砂やゝ深く海に入るやうな地勢の村を見出す。青く繁つた山に抱かれた寒村である。山は海に突き出て岬をなしてゐる。岬には三四段の畑が耕されてあり、枝振りの面白い赤松が潮風を浴びてゐる。北陸街道はその繁つた青い山の裾をめぐつて岬を横切りやがて親不知の險にかゝつてゐる。この青い山の裾をめぐる街道を挾んでたえ〴〵に軒をならべてゐる寒村が市振の關である。芭蕉の「一家に遊女もねたり萩と月」の跡である。山には山藤かゝり、畑には桐の花が咲いてゐた。

さらに小さな驛一つ二つ過ぎて間もなく汽車は黒部川にかゝる。雪の山のながめはます〳〵展がつて來る。皚々たる北アルプスの雪の山脈は南の半天を劃つてゐる。

山はやゝ遠ざかり、平野がひらけて來る。海もまたやゝへだゝりて、松の並木のいたゞきを越えて日本海の波をながめるやうになる。濱千鳥が群をなして早苗田の上を飛んでゐる。

越中あたりの風習であらう。ちやうど田植ころであつたが、かしこにもこゝにも若い娘たちが十人くらゐづゝ一かたまりになつて田を植ゑてゐる姿がまことに美しい。赤い襷を懸け、赤い模樣の帶を締め、友禪か何かの眞つ赤な襦袢の裾をかゝげてゐる。田を植ゑるころになれば若い娘や花嫁たちはわざ〳〵縮緬を裁つて田植の衣裳をこしらへるといふ話を聽いた。

長い間雪と荒海の音に脅かされつゞけてゐる北の國の人たちにとつては、夏の初めの草苗取りといふことはむしろなつかしい年中行事の一つなのであらうか。すくなくとも最も神聖な行事の一つであるにちがひない。

美しい草苗取りの女たちの直ぐ上の空を低く千鳥は鳴きつれてゐる。

富山の驛に下り、長い橋をわたつて舊城内の講演會場へゆく。城の石垣のあたりには散つたばかりの櫻が繁つてゐる。

ふたゝび長い橋をわたつて金澤へ向ふ。

神通川は幅の廣い、水量のゆたかな川である。水もきはめて美し

い。神通川をへだてゝ富山の町を見るころは日はすでに暮れてしまつた。

窓をあけて眺めたが、たゞ黝い山のみ。旅の疲れを覺ゆ。

くりから峠を見ようと思つて幾度か窓の外をながめたが、窓に迫つた山のみ黑くして山の形も見わけがたい。星のみまたゝく。

金澤の町に入つてはじめて北國の都らしい心を見出す。

廿八日。晴。兼六公園の菖蒲はやゝまだ早いが、盛りのころを偲ぶ。河北潟を東に望み、西に雪の山を眺む。

「あか〱と日はつれなくも秋の風」の碑は老楓の蔭に苔むす。

廿九日。晴。金澤より二里犀川の河口に金石港がある。錢屋五兵衞の宅址をとゞむ。金澤の町を出外れたあたりから金石まで松の並木がつゞく。

「金石から金澤のお城まで小判を敷きつめるから罪をゆるしてもらひたい」と錢屋五兵衞がいつたと傳へられてゐる道であらう。道の兩側には栗の花が咲いてゐる。

松並木から別れて田圃の中を五六丁も行つたところに尼寺がある。案内を乞ふと六十ばかりの尼さんが出て來て堂のなかに導いてくれた。五兵衞の木像がある。上下姿に小刀を帶してゐる。紋は橘をつけてゐる。

當時十八歲であつた小間使某が五兵衞一家の人々の冥福を祈るために世を捨てた尼寺である。三四年前九十四歲で世を去つたといふことであつた。

金石の町に入つて最初要藏が貰はれてゐたといふ家の孫にあたる人に逢つて見た。要藏といふ男は五兵衞の魂をそつくり受け繼いだ膽者であつた。

五兵衞の墓は最初金澤にあつたものを後乞うて金石の墓に合葬したといふことである。いかにも質素なものである。これがあの剛腹にして富王侯を凌いだ錢五の墓であるかと訝かるゝほどのものである。

わたくしは金石の港にも行つて見た。年々犀川の河口は淺くなるばかりで、今では少し大きな和船すら荷役をするに困難なくらゐである。

岸にもやはれた船からは七八人の男たちが材木を荷揚げしてゐた。繪を畫いてゐる一人の若い男をめぐつて五六人の男たちが立つてゐた。すぐその傍には一人の大きな男が破れかけた椅子に凭りかゝつたまゝ眠つてゐた。ゴルキイの夜の宿にでも出て來さうな姿の男である。

それらの男たちや、河口の船の上を白い翅の海鳥の群が靜かに飛んでゐた。

河北潟へゆく途中でわたくしたちは砂丘の一本松を見た。青い海原からは約一二丁も離れた場所である。かなり大きな松である。要藏が磔せられた松である。六七人の番頭たちはその松の下で打首になつたのである。

あたり一面に眞つ白な砂丘を掩うてアカシヤの花が咲いてゐた。まことに美い香が濃をこめて漂つてゐた。

河北潟は葦が繁つてゐた。

金澤の町の落ちつける。金澤の人々の朴々としてホスピタルな心をうれしく思ふ。宿を出て自動車が見えなくなつた時、宿の女たちはさらに町の角を走つて來て別れを惜しんでくれた。

福井の町は舊城の石垣と、その美しい城をめぐる濠の水をうれしいと思つてながめた。

城をめぐる水を埋めることがどこの町でも行はれてゐるやうであるが、まことに惜しいことである。

一つの町の美はその町の人々の魂をどれほど美しくしてゆくかといふことを忘れたくない。

旅人にとつて一つの美しい城を見出すことはどれほどのなぐさめであるか知れない。どれほど深いなつかしさをその町に對して抱かせるものであるか知れない。

たゞ一本の木、一莖の草もわれ〲はみだりにその町から破壞してはならぬ。

福井の町は北の庄の哀史を想ふ時そゞろに旅人の心を打つ。

暮れゆく雪の山の上になほかすかなる夕燒の空がためらうてゐた。

旅人は靜かに暮れゆく山に思ひを寄す。

あはれなり雪はら〲と越の春 —一九二七・七—

山陽山陰旅記

有島生馬

五月十八日の朝、京都から歸京した母や妻に驛頭で挨拶し、入れ違ひに東京を立ち、夕七時京都を通過、岡山に着いたのは恰度、夜中の十二時だつた。プラツトホームは電燈明かに、人稀。乘降の旅客も極めて少く森閑としてゐる。東京驛へ見送りの改造社の人達の話では新聞社や、派出員へ電報で通知して置くからとのことだつたので、勿論宿の心配などもせず、出迎を期待してゐたのに、それらしい人影すら見えない。京都驛で道中用にと云つて贈られた月桂冠の一升罎を小脇にかゝへて途方にくれたが、それでも十分許り無駄に待つてみた。車夫の云ふがまゝに三好野花壇と云ふ旅館へ引張られて行く。旅行案内の廣告欄にも出てゐた家だから、大して間違ひはあるまいと思つてゐたのに、玄關を這入るとがらんとした、明家のやうな宿屋で、人の住んでゐる氣配がしない。化物屋敷へつれ込まれたのかと疑はれるほどである。風呂も大いだけが取柄で暗く薄氣味が惡い。馬鹿に筋骨のたくましい三助が流してくれたが、顏や白髮の容子ではどうしても

七十位の老爺にしか見えない。でも餘り肉付が若々しいので、羨望を感じながら年を訊いてみたら、まだ五十にもならないとの返事に驚いたのである。少しぬけてゐるやうだつたから、多分頭だけ年とつて、肉體は若いまゝに殘つてゐる人なのであらう。不思議な人である。

朝になつてみたら東京驛で後からと云つて別れた新居格さんと、改造社の高平さんがそこへ來て泊つてゐたことが知れた。それで初めて車夫の案内も甚だ適宜だつた譯になつた。食膳に上る魚類の味が既に東京のものとはまるで違つて甘い。原來なぜ今度の講演旅行を特に山陽山陰を選んだかといへば、未知の地方であることが第一の原因ではあつたにせよ、恥かしながら食物の甘いといふことも確かに誘惑の一つになつた。私の舌はあまつたるい料理には堪へられない。寧ろ鹽と味噌でも與へられた方がましである。

岡山には三十一萬石舊城下の面影が殘つてゐて、新開地とは趣を異にするものがある。例へば旭川の上流から引いた掘割の水量は十分であるし、その岸にある一つの切石でも堂々としてゐる。古い建物の前の樹木でも年をとつて趣がある。

市には畜産博があつたゝめに、後樂園は雜沓してゐた。然し天下に喧傳されたほどいゝ庭園とは思はれない。平らたくつて明る過ぎて、今日の所謂運動場みたやうな感である。曲水の宴を張つた小亭は同志と共に一日の清遊を擅にしたい氣がする所であつた。

裏門つゞきに烏城へ渡しがあつて、そこで淸い豐かな旭川の迂廻する趣と、天主閣の高く聳えるのが樹間に望まれる樣は雅趣がある。記念のため渡船場の上で小スケッチをする。老若男女の群集が引きも切らず渡船で往復してゐる。渡船といふものが既に今日では古風になりつゝあるので、自ら嘗つて城主等がそこを渡つて城内と別莊との間を往來した昔の夢が私の空想をそゝつた。なぜか大名の生活といへば一種特別な感を人に起させる。なぜだらう。その生活の實際は主觀的に苦痛であり、囚獄中のそれに似たものといふ想像は誰れにでもつくのであるが、客觀的に吾々はそれを地上で得られる最も完全に近い自由で飽滿な生活であると假想してみるからでないか。もし亦さう浪漫的に假想することでもが許されないならば、大名生活の價値は外にない譯にもなる。天國のあるないは別問題として、あるといふ假想の許されるのが宗教の面白味で、それと似たものである。故に過ぎ去つた小王國の專制君主制度はいつ迄か吾々の利己主義になんとなく一種の憧憬を殘すのである。今後はどうしたつて誰れももう大名にはなれないから益々浪漫化され、空想化され、地上生活の豐滿な縮圖としてそれが眺められるのであらう。備前燒、熊野染、吉備團子の並ぶ町と、新建築、新商店の並ぶ町とを通り拔ける。

××座に於ける講演會は滿員の盛況であつた。私はその頃やつと鑄造の出來上つた許りの藤村詩碑の由來から、小諸と藤村の關係に就いて話した。聽衆の中から講演を依賴せんとする高等學校の學生等と原田安治氏一族の人々とが樂屋に私を尋ねて來た。安治氏は武一君の父君で、妻の遠緣にあたつてゐる、近頃では自分までラケットを握るといふ元氣な人である。伴はれて町へ出、休息し、その令孃達の所望でダンシングホオルで、眞似ばかりお相手をする。岡山などは云ふに足らないが、京阪に於けるダンスの流行は想像以上である。

東京から着いた夜半の汽車に乘り、廣島に向ふ。乘遲れ常習であるといふ新居さんは初日二日と乘りおくれる。これでは先々が案じられると噂してゐたが、それ以來乘り遲れたことは一度もなかつた。恐らく新レコードを作つた旅なのであらう。

昨夜劇場內の惡い空氣と、夜汽車の睡眠不足とが咽喉をひどく痛めたので、專門醫の治療を受け、煙草もやめ直ぐ治す。晝から市內を一見する。

大田川の三角洲に立つ廣島市中には四派に岐れた六七本の河が流貫してゐて、樣々な河岸の形と橋の趣きとを作つてゐる。さうして悠揚迫らざる周圍の遠山がいゝ具合に取圍んでゐる。中國第一の大都會といふだけあつて、銀行、諸會社巍然と聳え、震災前の橫濱市などより遙かに殷富繁盛を極めてゐるやうに見える。實際私が想像してゐた以上の立派な都市で、東京の中央集權的な誇も大阪以西では餘り通用しない感がする。

淺野侯の西湖を模した縮景園、又は泉邸は隔日に公開してゐる。幸ひ私もそれを一覽することが出來た。後樂園の一萬何千坪に比して、こゝは僅か三千坪の小園に過ぎないが、造園術としては遙かに技巧的なもので、日本庭園の一規範たるべきであらう。洪園の基調をなす支那趣味には當時の經營を思はせるものが多い。かゝる意味で學問と藝術の關係を考へるのも中々面白いに相違ない。池に架けられた圓い石橋をスケッチ板に收めて歸る。途上至る所にアカシヤのやうな白い花が澤山咲いてゐて、風に隨つて遠くまで翩翩と飛ぶ有樣は、漢詩にある三月陽春花飛ぶの狀を忍ばせてゐた。この夜の講演は文學と美術の關係といふやうなことであつたと記憶する。よく話が纏らなかつたから、聽衆は退屈したらう。

二十一日は宮島へ參詣した。宮島は廣北二里半許りの小島嶼であるが、その大さと廣島對岸連山との關係がよく均衡を得た惠まれた自然の一つである。淸盛の審美眼はこの地を相したゞけで、旣に非凡でないと思はれるのに、嚴島神社の構造に至つては益々その優雅、その濶達、その獨創に感服させられたのである。海中の大鳥居に對して廓明火燒前を玄關とし、左右整均を保ちつゝ、大宮客神社の各殿が開展され、百四十八間の長さに亙る迴廊がそれを連結してゐる。迴廊は屈曲前後して、種々變化に富んだ眺望を一歩ごとに更にしてゐる。この嚴島神社の建築は奈良のそれのやうに壯嚴な支那趣味でもなければ、京都のそれのやうに幽玄な佛敎趣味でもない。その代り實に日本的である。平明、簡素、輕快、單純、こんな言葉で表はさるべき美しさを大膽に表現してゐる。當社一つが殘されてゐることは、平語一卷よりも更らに雄辯に平安朝文化を物語るに足るものであらう。

神社の背景をなす紅葉谷公園は旣に當時からの公園であつたと看做すならば、日本に於ける最も古い公園の一つと云はねばならぬのであらう。豐公の築いた千疊敷及び五重塔は海中に浮ぶ社殿に比べると、いかにも間に合せ仕事である。壯大といふだけで何等の含蓄もない。然も今日ではその企圖の壯大も壯大とは云へない。岩惣は一流の料亭であり、形勝の位置を占めてゐる。要するに宮島見物は半日では物足らない。せめて一二泊して何千といふ內外の燈籠に火の入れられる壯觀

を眺めたいと窃かに願つたのである。

この夜は吳市の講演會へ臨み、廣島へ歸つて尙ほ一泊した。演題は藝術の進化といふやうなことであつた。藝術の優劣と進歩といふことは自ら二つに分けて考ふべき筈のものである。

二十二日は夕方下關へ着いた。關門日々の連中は甚だ要領よく吾々を歡迎してくれたし、旅中唯一のホテル泊りも變化があつてよかつた。高平君のみは豫約を重んじて、川卯旅館へ投宿したが、宿では氏の厚意を喜んで、宿賃は要らないとまで云つた相である。「蝙蝠の如く後日物語」といふ演題で、小說「蝙蝠の如く」の主人公增井氏が羅馬からアルコオル中毒で逐放され、歸朝して次第に墮落し、行衛不明になるまでの經路を物語つた。少しも議論はない、唯の噺なので、反つて聽衆には受けがよかつたやうである。どうも藝術上の議論などは一般が聞いても面白くないのが當然らしい。

翌二十三日は下關から小郡を經て松江まで十三時間の汽車旅行である。私は肥厚性鼻炎のため若葉の頃はいつも頭が重く、徒らに居睡り許りしてゐる。この病の不快は同病者でなければ分らないが、僅かな煙草の烟にも嚔をし洟を出し、實に辛いものである。それに窓外の景色は一向面白くなく、驛亭はどこも同じやうに貧小單調、列車は惡し、喰物はなし、曇り蒸暑く閉口した。新居君と高平君とは前日急拵への將棊で勝負を爭ひ夢中になつてゐた。活動寫眞班の連中も京阪から引續き月餘の長旅になるので倦怠し始めてゐる。然し松江へ着けばもう峠を越したものといふ心持でゐる。本社から屢々到着する「奮闘を祈む」の電報でせめて慰められたりしてゐた。

憧れて來た宍道湖を大橋の上から夕暮の光に見た。極めて平らな水である。皆美館に投宿。里見が志賀と來てゐたといふ宿かと思つたりする。民間飛行機二台直ぐ近くに着水してゐて、見物人が小舟で往來してゐる。又白魚の漁船が四五艘さでを上げたり下げたりしてゐる。

翌朝美保關へ行かうか、大社へ行かうか迷つた末、大社詣に決したのは失策であつた。汽車の出るまで小泉八雲先生の舊居を訪ね、先生のいゝ家主であつた根岸氏から懇ろに懷舊談を聞くことを得た。富豪の住んでゐた所などはいかに宏壯でも、主人がゐなくなると、後に殘るものは建物と廣い土地の外になんにもなくなつて終ふものだが、あゝいふ人々のゐた住ひはいつまでたつても、そこにその人の何物かが殘り、働いてゐるやうな心持がされるものである。これは古今東西の差別なく同じ感のするものとみえる。鹽見繩手の堀の前にある小さな舊旗本屋敷の中で、先生の生活や、逸話や、作品とそこにあるものとの關係や、に就いて聞かされた深い印象は今度の旅行中の最も忘れ難い樂しい記憶である。委しく先生舊居の事を書く餘白のないのは殘念な氣がする。

それに反して大社は意外な失望を私に與へた所だつた。私は大國主命の偉業を空想して行つて、その機因を摑む何物にも出逢はないで空しく歸つて來た。建御雷命と天の鳥船の命とが天照大神の使節として伊那佐の小濱に着し、十握の劍を引拔きつゝ、逆しまに突きたて、その鋒尖に上つてどつかと胡座し、國避の諾否を迫つたといふ光景は日本神話中にあつて最も劇的なシインであるのであらうが、その伊那佐の濱も今日では全く興ざめな、小さな地形だ。空想の出雲

の首府の方がどの位雄大だつたか知れない。私は大社詣をしたことを悔ゐた。かの神無月に八百八十の神々が集つて神議を凝しますといふ祠も、不潔な路傍に建つてゐて、小村のポンプ小屋の類でしかない。但し大社に残つてゐるものは民間の素朴な敬神の心かも知れない。これは素通りだけした私には何んとも云へないが、さうした印象は受けて來た。

その夜講演のあとで、因伯時報の人々から安來節と鰌すくいとを振舞はれた。誠に鰌の味である。鰌以上ではない。鰻ですらもなかつた。

翌朝明星社中の三島良忠、小林重久君等の案内で不昧公の別墅であつた菅田庵を訪ひ、有澤氏の薄茶に招ばれた。庵の位置もよく、茶の味も甚だよし。轉じて三島氏所藏の不昧公の書畫幅など一覽、鳥取市へ講演の時間に間に逢ふやうに着く。

翌二十六日鳥取高等農業學校の講堂で一時間許り話をした。この講堂が出來た時、最初の講演をしたのが亡兄だつたといふ因緣からである。兄のことを少し話しかけたが、どうしても話すことが出來ず、學生は水を打つたやうに森として終ふし、遂に五六分立往生をして終つて、やつと話頭を替へることが出來た。兄が鳥取から大社の方へ來たのは亡くなつた年の四月のことである。鳥取の温泉で主人が靈帳を持つて來たから、何心なく開いてみると兄の　深林人不知　明月來相照の二句が書いてあつた。で前の二句を書き添へて一絕をなした。

夕方鳥取から二時間米子へ後戻りして、羅馬の話といふのを今度の講演の打切りに、其夜私は一足先に京都へ向つた。新居さんの一行は尚ほ講演旅行を續けて、奈良から紀州路へ廻るのであつた。汽車が米子を立つて、鳥取を通過したのは十時過ぎであつたが、學生等は花束などを持つて驛へ來てゐてくれた。さうしてそれは亡くなつた先生が作られた校歌だからと云つて、プラットホオム中鳴り響くやうな大聲でそれを歌つてくれた。いゝ學生等である。山田玄太郎校長は有德の聞高い人だから、流石にそこの校風も目立つて氣持のいゝものであつた。

(二、七、四)

旅五日

—(北陸をめぐつて)—

三宅やす子

五月廿六日夕、上野驛から富山に向ふ。其頃上總御宿を立つて歸京した許り、遽しく支度をとゝのへて、旅程に上つた。

車中偶然永井柳太郎氏と同車し、氏の知人中村氏も共に就寢迄話して、らくに時間を消し、其上、北陸附近の豫備知識を得た。

この線の寢臺車は一つしか無く、狹くて、動搖がひどい。汽車が輕井澤附近らしい闇の中をのぼつてゆく時は、頭がガンとなるほど、變な揺れ方で、息苦しかつた。

やがてよく眠つて、眼をさました頃、五時にはまだ間があつたが、窓掛を上げると、洗ひあげたような品のいゝ藍色の海の中に、小さな岩がいくつも並んで、まるで繪葉書の中を汽車が走つて居るようだ。點々と見える雪國らしい屋根の小さな家もいゝ。こゝらがきつと「親不知」なのだらうと、寢過さなかつた事をうれしく思ふ。

富山に着くと富山日報社員數人に迎へられ富山館で憩んだ。宿はお城の濠を緣側の前に、庭の池のように眺められる位置で、椽の椅子に腰かけて居ると、外の人通りもよく見える。宿の主人は土地の名物男とか、飛行機好きの逸話持ちとか、そんな事はあとで聞いた話だが、肥つた老主人、よく廊下を歩きまはつて、電話を受けたりして居る。

「佐藤さん？　どんな方ですか――まだお見えになりませんが――今女の人が一人見えましたが……」

女中に床をとつて貰つて晝前までねむり、そして話の覺書を作つた。講演會の前の一睡は山海の珍味よりも尊い。だが晝の膳の毛の生えた蟹もおいしかつた。

宿の近くに賑やかな町がある。ひとりで外を歩いて見る。いきなりすれ違つた人の「はでな着物やな」とさゝやく聲をきく。着物は旅着で目に立つものではなかつたのに――私は傘でかくれるやうにして歩いた。

一體に婦人が質素な落ちついたなりをして居る處だつた。洋傘の色や形でそんな事を思つた。店に入つて單足袋をたづねると、「四五年前から、これを皆さんに願つてますから」と云つて、女主人が袷足袋を包んでくれる。小間物屋といふ店が見當らず、雜貨店で紅を買ふ。筍百匁三錢の札や、肉屋の前の豚肉ありといふはり紙などは私に旅に出た氣持をふかめさせる。

改造社の人と打合せ、午後日報社の人と同乘、町を一まはりする。途中、全集のビラをまくので、子供たちが双手をひろげて寄つて來る、立山の連峰は雪を頂いて、雲の切れ間から、其端麗な姿をあらはす。立山は人にたとへたらカトランのやうな容子がある。

此邊一帶、麥畑がない。昨日御宿からの途上、黄ばんだ麥許り見て來た眼が

「どうして麥がないんでせう」と問はせる。

米が大きな産高で、土地を荒さないために麥は一切作らないといふ說明をきいて、さつき食べた米粒が越後でたべたものよりもふくらんで居たことなど思ひ出す。神通川はきれいだつた。長い橋を渡つて、山を開いた呉羽公園とインクラインを眺め、其まゝ停車場に向ふ。近松さん、改造社の比嘉氏と着される、同社の栗林氏は疲れたやうな顏を窓から現して、「どうぞよろしく、吉田先生は糸魚川の相馬さんに寄られました、私は金澤に先發します」

講演會の「四時」といふのは富山時間だといふ話だつたが、四時前に

殆んど滿員だといふ。
「大變な歡迎なんです、花輪をあげたいなんて話でね」と日報社員の話。花輪はいゝな、と元氣づく。

會場に行つて見たら、新聞社や書店から寄贈の花輪が七つ八つ壇上に並んで居て美しかつた。中に一つ、「解剖台」同人として特に講演者の連名に贈られたものがあつた。

滿員で歸つてゆく人が多いのはどうかならないものか、と思つた。場所は縣會議事堂、かたい建物だつたが、聽衆は、よくうけいれられるといふ氣持で、大變話しよかつた。夜座談會の催があるといふ、折角いはれて斷るのは、私の氣持には不本意だつたが、まだあとに話す日が續いて居るのに、今から疲れて了つては、といふ用心が先にたつてしまふ。九州各地の講演を終つて、其日金澤の宿から富山へ見えた佐藤春夫氏最後に講演され、座談會へも出席されることになつて、近松、吉田兩氏と私は早い汽車で金澤へ立つてしまつた。

富山が最後の時間だつたら、も少しゆつくりしたかつた。今は螢烏賊の季節で海一面に美しいものだといふ。それに、どうかすると蜃氣樓も此頃見られる時だときいて、かなり心が殘つてゐる。鱒の鮨の美味なのも忘れない事の一つ。

金澤で再び永井氏と同じ宿に泊り合せた。氏は翌朝出發され、私は一行のお話の座を、一寸ぬけて旅に立つ前に少し許り書き殘した原稿をかきかけたが氣が散つて一つもかけない。卓上から頼信紙を一枚とつて、東京へ斷りの電報を打つ。其間に、山中や山代溫泉の話がはづんで居たらしい。明日は福井に泊らずに山代に行かうか、とか福井から即夜歸京しようとか、歸りの途の皆さんの相談を、きゝながら、私もどうやつて早く、其上らくに歸れるかとしきりに考へる。

會場の劇場の入口は、やはり開會の定刻にすぐ締切られた。外に大勢人が立つて居るので「もつと二階には入れさうなのに」と言つたら、「あの位でないと二階が落ちます」といはれて、びつくりして默る。

其夜は建物のせいか、少し野次がとんで落付かなかつた。

金澤に來て、金澤邊の特別の氣風がはつきりしてゐる事を感じさせられる。讀書などによつて、すぐに影響され、變化してゆかない一種の氣風である。これはいゝとか惡いとか云ふ事ではない。宴會の翌日、北國新聞の主催で、座談會の小集があつたが、其時の來會者の話などを聽いても、やはりそんな氣がした。

金澤邊の男子に割に多い頰骨の邊の特徴を、私は日本男子的に女性を愛する象徴のように感じる。婦人を或點まで愛し、要求も持ち、つまり相當に認めて居乍ら、對等には考へられないで男性の優越感を失はないところ、婦人に對して歐米風の型だけでも眞似るのは恥に思ひさうなところ、此處許りに限つたことはないのだけれど、多少、よく知つて居るだけに、そんな感じがするのかも知れない。

佐藤さんに誘はれて、「つば甚」の金澤料理を味ふことが出來た。おいしいと思つた。大阪の料理より、線が太くて、彈力のある味だつた。

公園は想像して居たよりもよかつた。水を自在に使つて、自然の水の音をきかせたところ、これが殿樣の御隱居所だつたと聞けば、凡そ其他の豪奢が推して知られる。犀川の上流から、こゝへ水を引いて、に

この公園の眺めを作つた人は、生かしておいては危險だといふので殺されてしまひ、僅に其子が加増を受けたなど、今の代には考へられない話である。

金澤は森の町、又水道のない町、米を作るために水道を得られないのだといふ。町には大勢人が歩いてゐて、富山より、づつと服裝が明るい。私は金澤で京都に似たところに屢々出あつた。

少し許りの閑を見て、私は町はづれの野田山といふところに行つた。そこに祖母姑――私が三年起居を共にした――の墓並びに其代々前の人々の墓所がある。覺えて居たつもりの墓番の名を、胴忘れしてしまつて、どこか管理所をと尋ねる、此邊軒並に管理所だといふ。其一軒に入つて花を購ひ、帳面を調べて下さいと云ふと、「生憎おやぢさんが今留守で」

去らうとした私のために、花をくれたおかみさんは通り合せた少し腰の曲つた爺さんを呼んで訊いてくれる。

「お前、お知りんか」

「それは、高い山のてつぺんやがな」

爺さんの言葉に取つき處が出來て、

「知つてるなら、案内して下さいな」

と無理にたのむ。

「えらひ解り難い處や」

爺さんは先に立つて、づんく上る。蟬の聲がしきりにする。

「あれが鳴き出すと、はや、腰がだるうなるがや」

「まだ中々？」

「中々や――えらい道やで――あぶないかな。」

「お爺さんは、どこのお墓でも知つてるの？」

「そんなこたないのや――やかましいいゝがだけ知つとるがや――ミヤケいふのは、東京から、誰やらお詣りにおいでたやろ――あんたはお初めてけ」

お爺さんはよくしやべる。私はいつまで上つてもきりがないので歩き疲れる。

時々振り返つて下を見ると市中の眺望が展けて、氣持のよいこと、高い樹を渡る風が爽やかに身にしむ。

「こゝやろ」爺さんは急に立ち留つた。

「どれ？」

爺さんは旨くとぼけた。

「ミヤケいふのはこれやないかね」

此男は字が讀めないのだつたか、それなら飛んだものに隨いて來たと思つた。すると爺さんは聲を出して字を讀んだ。

「ミヤザキ、やつたな、これは――そんならこつちのがやろ」

淺野某の墓、

「――これや――これも中々やかましいがや――――これは土藏おやつたたやろ――わしが穴を掘つたんや――」

もう澤山――私は其上一歩もあるけなかつた。抱えて來た六つの花束を、そこら中に一つ宛配つて、あてもなく遠くの方を遙拜した。

（此男は初めから出鱈目にのぼつて來たんだらうか、途中でわからな

くなつて、ごまかしたんだらうか、怒れもしない、此男に又随いて歩かなければ、下へ降りる途のわからない、私の姿が滑稽になつた）

爺さんは心附を懐にしまつて

「――墓番へはもう寄らんでえゝやろ」

と云つた。そして

「御両親は達者でおいでるか」と云つた。

「えゝ」と景氣よく云つた。

「お子さんはおいでるか」

と同じやうな間にはもう答へないでやつた。

腰に下げて居る爺さんの鎌はにぶく光つてゐた。私はすべりさうになつて無言に下りて行つた。つゝじが眞盛りに足もとに咲いて居た。

・

廿九日、其夜福井の會が最終の日である。金澤から近松氏は朝福井に、佐藤氏は山代に、吉田氏は海岸に、私は途中金澤より四つ目の驛美川町に下車して知人を訪ね、それ〴〵別に途をとつた。美川は錢屋五兵衛以來、北海道に船通ひをした海員達の住んだところで、蛤貝に一杯位の酒粕を大きな鮭一尾と交換してもうけた話は今でも老人達の繰り返す話題の由、此所の海はあまり洗つてすりへつて居るのださうである。それは昔海員達が家に歸ると退屈で、船の生活のように掃除許りして居たためだといふ。柱も天井も磨いて光つて居る町だといふ。白山は頂が雲に包まれてよく見えなかつた。

美川から乘つた汽車には吉田さんが乘つて居られた。海岸の砂丘の美しかつた事、アカシヤの花の咲いてゐた事など話される。途中から佐藤さんが乘車される。話して居るうちにすぐ福井に着いてしまふ。

福井は少し前に一度來た事がある。落ちついた町である。旅館名和屋は其時に知つて居る。部屋も其時の川に添ふた杉のさし出た二階、美しい主婦に相變らず笑顔で迎へられ、疲れた旅のよい慰ひだつた。

會場は宿のすぐ近くの市議事堂。會衆は男子が多かつた。よく笑ひよく拍手されるので氣持がいゝ。笑ふと誰だかシッとやるので、話してる私が可笑しくなつて困つた。

其夜をすませてほつとしてしまつた。翌日金澤發の夜行をまつために佐藤氏夫妻の滯在地山代温泉に一泊、氣がゆるんで時計を巻かなかつたと見え、朝になつて時計のとまつたのを知らずに、靜かな山あひの宿の、氣の落つく鏡天井をぼんやり床の中で眺めて居た。

宇都宮・水戸旅行

犬養健

一

五月二十三日。
身體の都合で講演は東京、または東京近邊の土地にして貰ふ。
午近く、十一時の上野發急行で宇都宮に向ふ。窓外の風景はやはりまじりつけのない武藏野の地方色で、高崎までの沿線とほとんど同じい。つまり一面の麥畑、柔かい森、雜木林、小川といふやうな配置である。單線路のことゝて、時どき青葉の枝が窓へすれすれに尖を伸ばして搖れて行くのが樂しい。
　宇都宮といふのはもつと遠いところかと思つた。二時間半で着く。着くと、僕の二三間先きを一見桑港か布哇歸りと云つたやうな紳士が二人、ハイカラな長細いスートケイスをさげて改札口に行く。さてその紳士が改札口で宿屋の番頭らしい男と何ごとかを語らひ、突然僕の方を振り向いて帽子を脫いだところを見ると、寫眞で見たことのある田中純氏だつた。もう一人の青年は國木田虎雄氏だ。先刻の勝手につくりあげた想像をおもひ、恐縮とはかういふ事のために出來てゐる熟語だらうと考へる。田中氏の話だと上野驛で改造社の古木君が僕を搜してゐた由。僕の乘つた車は座席を細かく仕切つてゐる種類ものだつたので——尤も、景色を見ながら講演の筋を考へるために故意とそれを選んだのだが——萬事の行違ひかくの如し。
　宇都宮の白木屋といふ旅館の奧座敷は、鄙びて野暮なところがあり、氣に入つた。部屋そのものは大したことがないが、南向きに隣り家の倉と、田舍風に趣味をつけて拙く鋏を入れた植込みがあつて心が落着く。こゝならば仕事も出來る。
　それから湯殿には「名物釣天井由來記一册何十錢」と貼り紙がしてある。——若葉時に田舍へ來たものである。
　宇都宮の夜の往來は川床のやうだ。廣くて眞直で、暗い。宮桝座といふ劇場で四十分ほど喋つて外へ出るや、他の辯士たちの三尺横を歩きながら、僕はやはり東京にあこがれた。或ひは山にあこがれた。此處は大都會でも山でもない。それ故に不思議に佗しい。
　聽衆は四五百に過ぎなかつたが、滿員といへば滿員で感じのいゝ人達だつた。(谷崎精二氏が最初に喋つてすぐに東京に歸る)。芝居小屋特有のゴミ〱した樂屋で待つ間、二三年前風邪を押して總選擧のために田舍を步く老父に附いて行つた旅行を憶ひ出した。その時もやはり此處と同じ退屈な樂屋番、同じ無氣味に捨て置かれた[illegible]、同じ嫌惡をそゝる不潔な厠があつた。
　僕は閉口して晝は外の遠いれんげ畑、夜は外の蛙の聲ばかりに注意を向けてゐた。——
　夜更けて田中氏と國木田氏は大いにバッカスの祭壇に仕へる。それから改造社の芥川氏は、これはまた四十秒か五十秒と經たぬうちに(と、翌朝當人から說明されたのだが)ほとんど唱ふやうに鼾をかく。すべて原始的情趣に富んだ夜だつた、と云つていゝのだらう。

二

五月二十四日。
汽車の都合がわるいので小山まで自動車をとばすことにする。宇都

宮から九里の間、平たい道の左右は殘らず麥畑だ。天候は晴れやかであり、絶えず眼の前に展がる麥畑の表面は芝生のやうに念入りに人工的で、新らしい庭球の毬を投げ捨てたならば意外に高く彈みさうだ。なぜかういふ想像をするかと言へば、田中氏と國木田氏は水戸でテニスをするためにラケットを六七本携帶で歩いてゐるからである。(最初に見た長細いカバンがそのラケットの容れものであつた)。――自動車が三十哩の速力を出すと、追ひ越されて行く何台かの乘合自動車の速力が、比較關係で稚拙であり、急に愛らしい。過度に青いものばかりのなかで、貨物自動車の黒と牛の茶褐とのふた色が物珍らしく目立つ。

小山から、友部、友部から水戸線。筑波山は上野驛にあるビラの案內圖のとほりの形だつた。しかし眞晝の風の豐富な車臺のなかで、われわれは地方廻りの乘客らしく筑波の話はせずに、テニスの話をする。

三

水戸は確かにわるくない。地方色が濃い。依然として侍邸の町だ。少くとも依然として古い侍邸を寛大にそのふところに許してゐる町だ。僕等の仲間では、さし當り瀧井(孝作)君に見せたら喜ぶだらう。

われわれの泊つた宿は舊の城に近い。城の跡には草が生え、われわれの車が通るとき、日雇の女達が一番低い底で藻をさらふやうに、それを刈つてゐた。そして白つぽい乾草の匂が一瞬間過ぎ去つた。

晝食を終へて、田中氏の豫定どほり水戸高等學校へ行つてテニスをする――そのお相伴を承る。學校は郊外でやはり畑の眞中にある。僕が嘗て生活したとほりの樣式の寄宿舍の一室へ入つて、運動シャツを借りる。僕のテニスはほとんど四五年振りだ。フオアハンドストロークの手が縮まつてボールと身體との間隔が不安定だと警告され、田中氏からコオチを受ける。田中氏のテニスは球への meet の垢ぬけのした輕快なテニスだ。感服する。國木田氏はまた英領植民地の事業家のやうに毎日必らずテニスの時間を持つた人であり、さらに改造社の芥川氏は、どうして、日本軟球協會の幹事である。この場合僕だけが門外漢で、掌に豆の出來る頃、反射の强い運動場の隅でぼんやり休息する。

その制帽のかたちと同じやうに、どこの高等學校の寄宿舍も同じ事である。野球部、陸上競技部、ラグビイ蹴球部の日課的練習。その多少可笑しい物々しさ。それといゝ對照になる物臭なひとりひとりの散歩家。浴室への廊下の妙に騷々しい足音。便所からの唱歌の聲。――僕は八年前の自分の生活が不意にその儘眼の前に持ち來されたやうな幻想を感じた。これは寄宿生活を長くやつた者でなくては分らない感情なのだらう。

四時半。兎も角も汗で閉口する。その汗ばんだシャツの儘でさきへ宿屋へ歸れば、先刻僕の座つてゐた布團のうへでヨネ野口氏がひとり古い武士町の屋根のつらなりを眺めてゐる。――

四

五月の夕方、宿屋の横手の女學校の櫻並木に僕は「天狗の巣」といふ植物病を二つ見つけた。諧謔の時間を待つ二階の欄干から手持不沙

汰に見つけたのだ。宿驛の前通りの、明治十年代の堅氣な支體のなかから、娘さんがひとり芍藥の花束を下げて出て行つた。して見ると其處は活花の師匠かも知れない。灯がともつて、何か艶な心もちがした。

講演は公會堂だ。五十分近く喋る。聽衆は千五六百であらう。左半分の床に高等學校の生徒があぐらをかき、右半分には教師附添で女學校――あの植物病にとりつかれた櫻並木を塀に持つた女學校の生徒が、行儀よく揃つてゐる。壇から見おろして、ちよつと活動小屋の男女類別の席を聯想する。

講演のあと、水高の人々十人ほどゝ茶を飲み、寄宿舍に泊りませんか、歡迎ストオムをしてあげませうなど云はれ、田中氏が代表といふ格で辭退してくれる。ストオムはまあ學校の「ブロッケン山」の祭だ。それにわれ〳〵の關節はさう激動に堪えるといふ方ではないし、辭退したのは敬遠したに近い。

庭球部主將だといふ山田氏、夜の水戸市の大通りを案内してくれる。しかしその運動部の主將が、田中氏の質問によつて旗亭の横町を教へるやいなや、羞むだ挨拶をして早足に引返へした様子には、長いこと塀つゞきの暗のなかで僕は微笑んだ。これも寄宿生活をした者にだけ特に敏感に分る心理なのだらう。――

この夜も田中氏と國木田氏、パッカスに仕へる。但し明朝水高でテニスの試合をするために、泡なす盃を今宵は控へ控へ愛してゐた。僕は相變らずパッカスに仕へる兩氏へお相伴として仕へ、結局パッカスに對して陪臣でしかあり得なかつた。

明日が晴れなりで深夜一時、僕の部屋の布團をどけて兩氏が僕のためにテニスの根本的なコオチをしてくれる。そしてつまるところ、僕には運動家的素質が案外豐富だといふ事にしてくれる。その眞僞は、この夏に甥や姪を相手にでもテニスをして見なければ分らない。

五

五月二十五日。

六時に眼が覺めて裏に鶯を聞く。女中に何處かで飼つてゐるのかと聞けば、野生だといふ。もう半月ほど毎朝聞くのだといふ。

僕は、昨年水戸に遊んだ老父から光圀公の隱居所の書齋と庭について、當時細かく、土産話に說明されたので、いま同じ水戸へ來てそれを觀て歸らないのは、その話をいかにも冷淡に聞き流したやうで可哀想だと思ひ、朝食のパンをかゝへて常盤公園へ出かける。街の店々の前は掃かれたばかりだし、電車は學校通ひの生徒に占められてゐる。電車の終點から公園までの閑靜な往來にも、やはり侍邸らしいものがあちこち殘つてゐる。植込みの深い茅ぶき屋根の住居から、女學生が格子を開けて、「行つてまゐります」といふ挨拶が僕に聞えた。

「行つてまゐります」――何か新鮮だ。東京でも朝早く歩けばやはり女學生がかう云ふのだらうといふ事を、物珍しく考へる。

町はづれの常盤公園は鐵道線路のほとりの丘の上にある。結局そこは常盤公園である。大ざつぱで庭園の風格を持たない。烈公の建てた好文亭も、ちよつと洒落れた大旗亭、わるく云へば伊藤博文時代の臨

遊會の會場といふ趣きで、部屋部屋に松の盆栽など物々しく置くと似合ふ方である。茶室も僕の理解出來るかぎりでは一向つまらない。たゞ南方の沼への眺望が佳いだけである。二階へ行くと一つ面白いものがある。それは階下からの食膳運搬機だ。當時は市ぢうの噂の種になつたらうと思ふ。立札に An Elevator と敎へてある。――廊下をひとめぐりして、烈公御居間としるしてある疊のうへでパンとチーズを食べながら、滿沼の蛙の聲をしばらく聽いた。蛙の聲は何か追憶の氣持をそゝる。いま追憶の對象のさし當つてない筈なのに。――（歸京後父に聞くと、例の書齋は西山、水戸から五里ほどの西山にあるのだつた。西山を念頭に置かなかつたのは稍滑稽だ。寢不足もあつて、ことさら愚になつてゐたのだらう。）

その日、四年ぶりに紐育から歸る義姉を迎へるために、九時半の汽車で歸京にきめる。起きたての田中、國木田兩氏玄關まで送つて下さる。汽車では、昨夜宿屋の別々だつた木村毅氏と一所になる。但し木村氏は千葉で喋べるので我孫子で乘り換へる。取手、我孫子、柏、といふ驛の順である。我孫子の初夏の松原はことに懷しかつた。武者さんの日あたりのいゝ家、志賀さんの古風な頑丈なつくりの家を思ひ出す。

六

南千住の驛まで着くと、急に埠頭の天洋丸のペンキの匂、機關の音、せからしい聲、浮いた塵埃、なぞを一どきに想像する。あまり褒めた話ではないが、僕はまだ若いし、「姉さん」なぞといふ久しぶりの發音は自分でもさういふ氣持がわるくないのだ。それに、義姉は初産の、まだ形をなさない赤ん坊をかゝへて足もとを殊更注意しながら假梯子をおりて來る筈なのだ。――（以上六月二十三日旅行前に走り書きする。）

南國情景

高須芳次郎

久しい以前から一度九州に遊んで、鹿兒島にゐる舊友と會し、琥珀色の酒を飲みながら、一夜しんみりと語りたいといふことは、私の念願の一つであつた。が、いろいろの事情のために、のびのびになつてゐたのが、偶然、最近、改造社主催の九州講演行脚に加はつたところから、漸く望みをはたすことが出來た。九州一巡の印象は素より短い文章のうちに書きつくすことが出來ないので、玆には或思ひ出の糸にすがつて不圖、胸に浮んだ二三を記さう。

○

櫻島に遊んで

鹿兒島の舊友Y君が先年、東京へ來たとき、私は江戸川べりの旗亭橋本へ案内して、晩春の微風にゆらぐ青い柳の葉を眺めながら、南國情調について心ゆく迄話し合つた。その時、Y君は櫻島の美しさを述べて、

「君が鹿兒島へ來られたら、第一に櫻島へ案内しよう。國自慢をするのではないが、確かに君の詩興を惹くに充分である。」

と云つた。それ以來、私は鹿兒島の友を思ふ毎に櫻島を思ひ、櫻島の光景を胸に描くと、冷泉爲村が「月雪のみるめのみかは櫻島、浪の花さく夕べ明ぼの」の歌を連想しないでをられなかつた。月夜の詩美、雪の日の佳麗のみではなく、ほのぼのと明けゆく曉天に新裝して立つ櫻島、薄紫の靄が漂ふ夕に紅ゐの殘照を浴びた島の姿も中々捨て難いといふことが、爲村の歌によつて知ることが出來ると同時に私の櫻島に對する憧憬の情は一段の濃かさを加へたのである。

ところが、私は今度偶然、夢裡にも忘れなかつた櫻島を親しく見ることが出來て多年の渴望を滿たした。丁度、新綠の色が爽かに滿天滿地を染める頃であつた丈に、その感興も亦深かつたのである。どちらかと云ふと、私は錦江灣、輕舟の上から、ぢつと櫻島を遠望するのが好きだ。友人佐藤春夫君や『鹿兒島朝日』の人たちと舟中の人となつて、眞正面の彼方に天鵞絨に包れた色をして天女のやうに柔かく微笑しつゝ佇立む櫻島の姿を仰いだ時、私は何ともいへぬなつかし味を感じた。

それは風の靜かな遊漁の日であつたが、時々、雲が思ひ出したやうにぱつと明るくなると、櫻島の色彩も亦それにつれて微妙に變化し浮動した。光線の具合によつてカメレオンのやうにいろいろその裝ひを變へてゆく櫻島は遠望にふさはしい。かの女（櫻島）の存在は、どの位、錦江灣の風致を引立てゝゐるか知れない。私は鹿兒島の美の中心を爲すものは櫻島だと思ふ。全く櫻島あつての鹿兒島だといつてもよい位である。

私達の舟が快く海の上を氣輕な鷗のやうにすべつてゆく時、曾て文久三年、イギリスの軍艦が生麥事件の復讐に攻めよせた跡や、大西鄕が月照と一緒に海中へ身を投げた悲しいロマンスなどが、いろいろに思ひ出された。また一方には、薩摩富士の名ある開聞嶽が雄々しくそゝり立つて灣上に畫龍點睛の趣を添へてゐるのを見て快かつた。

舟が櫻島へ着くと、私等先づ先年噴火した跡を見ようと思つて、小高い坂をごろごろした石に躓いたりして登つたが、間もなく一面に海に沿うて、灰色の熔岩がいくつもいくつも鋸狀や凹凸狀をして、次ぎから次ぎへ聳え立つてゐるのを見た。それは丁度、造化神が戲れに人間を驚かさうとして、岩の上に丸で思ひもよらぬ彫刻を自由にしたやうに思はれる。この光景を見て、佐藤春夫君は夫人を顧み、「月夜に此處へくると必度よいよ、あの熔岩の色彩が一段と青い月光と調和して面白からう。」と云つたが、私はいかにも詩人らしい見方だと思つた。

それから私等は晝食を喫するために丘上にある一旗亭に立寄つた。そこへゆくには、いくつかの石段をのぼるのであるが、いろいろの草

木が青々と茂つてゐる邊に瀟洒な扉のある入口があつて、その傍らにある小さい噴泉が銀線のやうな水をあげ、澄み切つた小池の中には澤山の金魚が靜かに泳いでゐた。

女中に導かれて室へ通ると、錦江灣が一望の下にひろがつて、遙かに開聞嶽やその他の島々、山々をも見ることが出來た。此處で鹿兒島名物の燒酎をすこしばかり飲んだが、風味の上にロオカル・カラアがあるので何となく親み易く、いつか陶然として醉つた。

聞くところによると、櫻島には立派な果樹園を作つてゐるものがあつて、そこの果實は南國の暖氣によつて成長し、黄金の珠のやうな枇杷を始め、鮮麗な果實が地上の樂園を飾るかのやうに出來てゐるといふことである。私はさうしたところで仙郷らしい氣分にひたりたいと思つたが、時間がないので割愛して了つた。

江南竹禮讃

自然の美と人工の美、それを巧みに取り入れてあるのは、磯に於ける島津邸の庭である。私は九州へ出かけるとき、第一に熊本の水前寺公園のことを思ひ浮べたが、磯の島津邸の庭については一向知らなかつた。それで私は熊本に着くと、すぐに水前寺へ出かけて見たのである。が、それは私の期待に副はない憾みがないでもなかつた。

水前寺公園は相當に廣いが、池に沿うてゐる丘や木石の風致には、自然味に乏しいところがあつた。いづれかといふと、餘りに人工をつくした爲めに、何となく、せせこましい感じがしてならなかつた。唯私の氣に入つたのは、園内から湧き出る水の淸冽なことである。さうした水を湛えた小川の畔に若楓が目ざむるやうな綠の色をひたし、の群が、すいすいと玉のやうな白砂の上に影を落して、浮動するかの如く游いでゐる趣は確かにすがすがしかつた。

が、全體の上から見て、水前寺公園に稍失望した私は、他にもつと自然味の勝つた庭園を見たいと思つた。さうした望みは、鹿兒島に入るに及んで、漸く滿されたのである。先づ舊友Y君が私の宿へ尋ねて來たとき、名所として特に南洲の遺跡について話したが、更に櫻島見物と共に忘れてならぬのは磯の島津邸の庭と尙古集成館であることを敎へてくれた。

けれども私はその風致について詳しく聞かなかつたので、やはり、水前寺式のものではなからうかとも想像した。いづれかといふと、私は餘り期待をかけなかつたのである。ところが、櫻島からの歸途、佐藤君と共にはじめて島津邸の庭を見ることが出來たとき、私は覺えず、「これはよい、素敵だ。」と叫ばないでをられなかつた。それほど、私は深い詩感に打たれたのである。

私が第一に共鳴したのは、あの雄大な錦江灣の眺め、美しい櫻島の姿を庭中の景として取り入れるよう工夫されてゐたことである。躑躅の紅ゐ、菖蒲の紫、珠玉のやうな白砂、淸澄な小池に臨んだ瀟洒たる茶亭、さうしたところは、いかにも人工美をつくしてゐるが、而も自然の風致を損しないよう、鷹揚に工夫せられてある。

それから勾配のゆるい坂を登つて、江南竹の林があるところへゆくと、支那情調の豐かな竹——單純な黄か靑かの一色に塗抹されてゐるやうで、その質、色彩の複雜さを見せてゐる竹が幾百本となく人を厭

するやうに、すくすくと伸びた姿を示しつゝあるのには、いかにも南國の庭らしい感じがしたのである。

一體、私は竹が好きだ。三竿の翠竹が風にそよいで、枝頭に白い月光を浴びた翠靄趣味は堪らなくゆかしい。けれども竹の趣致といふ上では、江南竹に及ぶものがない丈に、他の竹叢よりも、私はより多く江南竹の林に詩興を深めざるを得ない。それに四邊の空氣のしめやかさ、光線の幽かな柔か味、さうしたところに、西洋に求められぬ純東洋趣味が横溢してゐるのを見た。

私らが出かけたときは、空がうす曇つてゐて、しんみりした空氣に浸ることが出來たが、糸のやうな細い雨が靜かに降る日、銀色の波うつ月夜などは殊によからうと思ふ。かの翠緑の竹の葉をすべり落つる雨の雫、しとしと囁くやうに注ぐ雨の音樂、さうした趣が江南竹にふさはしく、その味が身に沁みようと思ふ。また白靄を欺くばかりの月夜に、多くの竹が風にさらさらと鳴つて、新しく描かれたばかりに見ゆる竹影が婆娑として、ゆれつ、もつれつする具合も捨て難い。私はさういふことを考へ乍ら、ぢつと江南竹の林を仰いだ。佐藤君も亦ぢつと竹の色に見入つてゐた。

間もなく、私らは江南竹の林を離れて、元來た道を靜かに辿つた。細い銀糸のやうな雨が音もなく砂の上に降つて、眼前に見ゆる櫻島の姿はほのかに烟つてゐた。海は眠るやうに咽び、一寸、その靜かさは湖水のやうに見えたが、その廣々した趣は、島津家の庭と一つになつて眼界濶大氣も心も、躍り上るやうに晴々した。

かうして庭をめぐつてゐるうちに、私は庭の周圍に連亙してゐる小山の一木一樹にも、充分手入がしてあることを知つた。が、それは人目にわからぬよう、自然の趣を保つて、すこしも、こせ付いた跡がない。さういふことは、造庭術にくらい私に少しもわからぬが、私の直感には、どうもさう思はれてならなかつたのである。それほど、全體が何の無理もなしに統一せられて、南國特有の色彩の鮮明な奇花芳草と共に私らを強く引付けた。

それから程經て、私らは尚古集成館へ赴いたが、その時、急に雨がばらばらして來て、私の麥藁帽にぽつりと注ぐ音を立てた。私はその際、やはり、今一度、あの好きな江南竹の林を見たいと思つた。

東北・北海道・新潟

芥川龍之介

上野—東海道線の汽車に乗るのは何でもない。が、東北本線の汽車に乗るのは何か僕を意氣地のない感傷主義者に變らせてしまふ。そ

れは嘘僕のゐる田端を——一度僕のあとにして來た田端をもう一度汽車の通る踏切である。これは誰にでもあることかしら？

仙臺——病院の廊下を押して來る、大きい氷を積んだ手車。その又氷に窓の外の木の芽や牛も映つてゐる。尤も幾分か歪んだまま。

盛岡——停車場はカアキイ色の服を着た青年何とか所の人々に一ぱいになつてゐる。おまけに外はどしや降りになつてゐる。僕等の言葉は通用しても、彼等の言葉はもうはつきりはしない。何と云ふもの寂しさ。……

又——僕等の宿の三階には疲れ切つた女中が一人、ぐつたり椅子によりかかつたまま、芽吹いた柳などを眺めてゐる。生暖かい風にでも溶けなれば善いが、……

津輕海峽——もう少し船にでも醉はなければ、折角ここへ來た甲斐もありはしない。

函館——僕等は煤煙の中をくぐり、それから干し魚の匂を嗅ぎ、最後にもう暮れかかつた櫻桃の花の中へ辿り着いた。つまり君、「天路歴程」だね。……

又——「櫻もまだ咲いてゐますね。空の色も何だか變つてゐる、…「ちよつと甕のぞきと云ふ色だわね。」

札幌——クリストは上に、大學生は下に、……「すすき野」と云ふ遊廓はどこですか？

又——あの植物園全體へどろりとマヨネエズをかけてしまへ。（獨白。——「里見君、野菜だけはうまいでせう。」

又——孔雀は丁度キヤンデイイの樣に藍色の銀紙に包まれてゐる。

又——有島武郎氏はポケツトの中にいつも北海道の地圖を持つてゐる。

旭川——この聯隊のラツパはしつ切りなしに同じ言葉を繰り返してゐる。——「冬は零下三十五度になります。」

又——アイヌの女は谷に似てゐる。だんだん暮れかかつて來る山の火登に。

石狩平原——雪解けの中にしだるゝ柳かな。

小樽——起重機は海を吊り上げようとしてゐる。定めしホツキ貝の

多い海を。

青森——公會堂は海と話してゐる。白じらと壁を聳ば立ててゐるものの、內心は海を恐れながら。

又——もう十分早かつたら、林檎の花の咲いた中にほのぼのと鮭を食つてゐたものを。

羽越線の汽車中——「改造社の宣傳班と別る。………」

あはれ、あはれ、旅びとは
いつかはこころやすらはん。
垣ほを見れば「山吹や
笠にさすべき枝のなり。」

新潟——明治時代の東京はここの柳の並み木だの木橋だのに殘つてゐる。まだどこかに北清事件の石版刷りの畫位は賣つてゐるかも知れない。………

又——午もはやするめ燒かせよ藤の花

新潟高等學校——誰かこの中原悌次郎氏のブロンズの「若者」に惚れるものはゐないか？　この「若者」は未だに生きてゐるぞ。

信越線の汽車中——新潟の藝者らしい女が一人、電燈の光の中に卷煙草をすつてゐる。卵の殼に似た顏をしながら。

上野——黄金虫よりも多いタクシイはいつか僕を現實主義者にしてゐる。（昭和二、六、二十一）

北の國の春を趁うて

片岡鐵兵

出發

私の旅程は急に青森方面と決まつて、即日出發した五月十九日上野發の夜汽車。寢台が賣切れなので翌日の午後まで十八時間、私は殆ど眠らないで汽車の震動に身體を任せたのである。でも、同行の秋田雨雀さんと偶然同じ車室であつたのは助かつた。

「どうも、色々事情があつてね」と秋田さんは私の顔を見ると羞かむやうに云はれる。

「好いでせう。別に僕たちの講演の中に全集宣傳を織込むわけぢやないのですから」

この機會に文藝普及の講演をやりに行くのにすぎない。汽車中は奥羽地方に殘るアイヌ族の血統などに就て、雨雀さんから、いろ〳〵伺つた。

仙台をすぎて夜があけると、私にとつては始めての線路とて、汽車が通過する驛ごとの、驛名札を、問題の「右から」平假名文字で讀んで行つた――はなまき、いちのへ、さんのへ、のべち――まるで子供のやうに嬉しい。

青森・淺蟲

午後四時、青森着。東奥日報の皆さんのお出迎えを忝うし、支店に小憩。

私はひどく疲れて居るので、温泉で今宵はぐつすり眠りたいと云ふ氣持ちが頻りに動いた。それで自動車をよんで貰つて、すぐ淺蟲温泉へ走つた。三十分で、淺蟲東奥館に乗りつけた。あまり疲勞が激しいので、湯にすぐ浸ることは差し控へる。五月も二十日だといふのに、空氣がひえて居る。早速火鉢の火を運んで來た女中が、「寒いねい」と尻上りの言葉で挨拶した。あゝ、はる〴〵と來たものかなと、ひとりでに溜息が出た。

部屋から眺める青森灣は、氷の色から、その灣を抱へた岬の山の線まで、かねて想像して居た通りの風色である。實に美しい水の色である。冷たいプルシアン・ブリュウといつた感じだ。岬の山の線もどこかエキゾチックに想はれる。

でも、矢張り眠れなかつた。夜中に腹が立つて起き上つて、翌日の講演のプランを書き留めて居ると、急に眠けがさして來た。

翌日はおそく起床、湯に浸ると全く疲勞を忘れた。湯殿から廊下を戻つて來ると、なまめかしい女がニコ〳〵して立つて居る。

「ホ、ウ。君は何て名？」

「浪代と云ひます」

うち藝妓だなと思ふ。遊びに來たまへと云つて部屋に歸つて居ると、やがて廊下から、もぢ〳〵しながら入つて來た。三十分も對談して居ると青森から電話で早く歸れと云ふ。トランクからモオニングを出して、着換へるなり旅館を飛び出した。

青森の陣屋に行つて見ると、秋田さんの部屋は人で一杯だ。北海道の講演をすませて來た芥川さん、改造社の比嘉さん、箕輪さん、それに地方の有志諸氏。青森から少しはなれた所で、自作農をやりながら農民運動を指導して居られるA氏夫妻が秋田さんを訪れて一座にあつた。お話を伺つて居るうちに、スッカリ尊敬してしまふ。氏のやうな生活こそ、本當の生活だと羨ましくなる。田園生活の詩的讃美ではなく、他の意味に於てだ。

青森の講演會では、芥川さんも引張り出されて一席やられた。

講演後、有志の茶話會に臨む。何とか云ふロシア風の喫茶店だ。一群の若い女性が、席上につらなつた。その歸り路、私は彼女たちから

「見合ひ結婚」の可否に就て論議を持ち込まれ「ほんとは戀愛結婚の方が好いんです」と答へておいた。彼女たちは、青森の女性は活潑で、フレッシュで、丁度青森灣の水の色のやうに氣持ちが好い。不斷に智識を求め、この人生の中からモラリテを捜して居る若い婦人の一群は、青森の名にふさはしい新鮮な魅力である。午後十一時青森發。山形に向ふ。芥川さんもこの汽車で、一路新潟を志して行かれた。

山形の山

秋田で早朝寢臺車を捨て、山形行列車に乘り換へたゝめ、この日も睡眠不足だ。山形の宿屋は後藤又兵衞といふ恐しい主人。實にのんびりと眠つたやうな街だ。それに周圍の山の形、色、それが想像して居たとほりの南畫式で、美しい。墨繪、それも薄墨の効果しづかな景色である。

街の素人劇團のわかい人々の歡迎宴が、講演後、松葉といふうちで開かれた。浦山氏、青山氏など、元氣な若人である。そのあとで高等學校の岡部氏の好意で山形美人を見せて貰つた。觀月といふ家できかされたおばこぶし。

秋田へ逆戻り

翌早朝、又もや睡眠不足のまゝに秋田へ戻つた。

石垣のない城あとに草ふかく、秋田は蕗の強大な生活力の脉打つ都である。ひろい街通りの、ところ／＼に巨大な石造ビルヂングが蟠居する。かと思ふと、目抜きの場所に、封建時代そのまゝのしもた屋が、不經濟な軒を張つて居る。宿は小林旅館。

秋田蕗と一緒に有名な魁新聞が後援で、講演會は千數百名の聽衆をあつめた。聽衆のみんなが知識的で、何を云つても安心だといふ氣持ちだつた。その癖、自分の講演はひどく不出來で、恥しかつた。

秋田魁の松井君、それから歸省中の今野賢三君などに逢ふ。翌二十四日は一日講演は休業(?)二十五日に長岡市へ着けば好い。そこで二十四日、雨雀さんたちが長岡へ向け出發されたあと、悠然と起床し、今野、松井二氏につれられて土崎港に行つた。この港には金子洋文君が歸省して居るのである。

北國の港はこの五月の下旬に、「三千世界花一時にひらく」盛觀で、砂原の砂を踏んで山の上の公園に行つて見ると、街中の人々が、重詰辨當を林間にひらいて、中央のグランドで開催の各學校聯合運動會を聲援して居る。正に一年の書き入れ日で、まことに良き日に行き合はせたものだと感謝した。

憂鬱な春の港の空はうすく濁つて、沖に浪たかく、雄物川は白く光つて居る。

帆。帆。ひくい砂丘のかげの帆柱。

雨が俄かに、行樂の山の上を細い銀線で張つた——金子君の好意で、土崎美人を見せて貰ふ。千成など。なほ新思潮同人佐藤三郎氏や古野君らも來り會した。

長岡・新潟

二十五日正午ごろ、長岡市に着いた。改造社の栗林君が箕輪君と交

着で來て居た。

大野屋旅館の玄關で、私は光る何物かに行當つたやうな氣持ちで、一人の若い婦人に會釋した。部屋には先着の雨雀さんがニコ〳〵して居られる。先刻の婦人がお茶を持つて來た。「この方は」と雨雀さんが紹介される。この旅館のお孃さんである。

やがて近松秋江氏、吉田絃二郎氏夫妻なども到着される。長岡、新潟はこれらの先輩を加へた講演會なのである。

長岡時事の中川社長の案内で、私はひとり信濃川の畔を漫歩した。この町では雁木といふものが、舖石路に特殊な軒を形造つて居るのと、立派な公會堂とで飾られて居る。それから、並木路の鈴蘭がたの街燈。これは神戸の元町通りと同じ街燈だが、蒼々とした並木と一緒に道路の上をのぞいて居るだけ、神戸のよりも一層すゞしく、冷やかな感じだ。

翌日、秋田さんと一緒の汽車で新潟に立つた。大野孃と、そのお友だちと、都合四人、汽車は二時間で新潟驛についた。

「おや。タガヒニ――互ひにつて、何でせう」

プラツトフオムの屋根裏から吊された札を讀んで私は笑つた。右讀みの習慣は、左讀みに書かれた驛名「ニヒガタ」を斯く讀ませたのだつた。

大野屋支店に着く早々、新潟の各書店主諸氏の案内で市中見物。やがて海岸の砂丘に至る。濱の茶屋の三階で、お茶を飲む。佐渡ヶ島が眼前にうすがんで居る。浪はいと暗く立騒いで居る。そして砂丘は蜒々とセンチメタルにつゞいて居る。

秋田さんは、曾つてありし日の有島さんとこの砂丘を踏まれた由。

曾つて友と歩いたこの砂丘――

いつまでも〳〵歩いて居たいこの砂丘――

秋田さんの此の呟きは、宿に歸つての色紙揮毫の材料である。吉田さん夫妻、近松さん、みんなこの砂丘の上から見はるかす佐渡の島に旅情そゞろなる物があるやうだつた。

大野孃も一緒だつたのだが、彼女が何かの用事で階下に行くと、この濱茶屋の女中さんたち三人に取りかこまれて、

「あなたが片岡さんですか」と訊かれたと云ふ。

「それは光榮です」と私は云つたが、私も吉田さんのやうに、家内をつれて來ても好かつたと、すこしばかり家郷のことを思ひ出した。

講演會は實に好い聽衆で千餘。

翌日、秋田さんと私と、東朝支局の松永君と、それから大野孃と、イタリア軒のバアに行つた。前夜、三十八度ちかい發熱で、講演も中途半端でよした私とて、名物のなべ茶屋も、有名な新潟美人も見なかつたので、せめて美人繪ハガキでも見て行かうと、繪ハガキ屋の店頭など覗いたが、一枚も買つたわけではない。加島屋の、さん孃と云ふのが男女藏に似て、新潟の代表的美人だと思つたゞけ。

新潟は流石に北國の大都會だ。サイレン塔など旅客を脅すに十分である。

宿の小さなお孃さん、今年七つのむつちやんと云ふのが、私を讃めて呉れたので、新潟が益々感じが好く、三時すぎの汽車で立つ時は、このむつちやんと、大野孃と、私との三人だつた。むつちやんは、長

岡の本店へあそびに行くのである。長岡驛で、二人に左樣なら！　汽車の窓から見ると、遠ざかり行くプラットフォムに、小さなむつちやんが、だん／＼、だん／＼小さく、小さくなつて行つた……

附記。この行を終へて一ケ月もせぬうち、今度は菊池、横光、川端、池谷の諸氏と一緒に秋田、山形、新潟に行つたゝめ再會のよろこびを頒つた人數知れず。然し、青森から新潟に至る旅程で、私のポケットとには玆に芳名をあげ得ない百枚に近い名刺が溜つたがそれらの人々又いつ會ふであらう。旅のあとのこの感傷は、何かひろ／＼とした展開性をもつところの、ひとつの力として私の内に殘るのである。諸氏に感謝します。

講演旅行雜感

谷崎精二

私が講演をして廻つたのは甲府、松本、長野、前橋、宇都宮の五個所である。改造社からは始め九州地方へと云ふ依賴で、九州へはまだ一度も行つた事が無く、其れに鹿兒島市の近くの川內と云ふ處には私の學生時分の親友の墓があるので、是非一度墓參をしたい希望もあり、九州の方へ行きたい氣はあつたのだが、往復二週間もかゝるので、いろ／＼の都合で其方は斷り、甲信各地へ赴く事になつた。宇都宮を除いて他は皆一度行つた事のある土地だが、松本と前橋は素通りしたゞけ、甲府と長野は十數年前一泊した事があるだけで、土地の樣子はさつぱりわかつて居なかつた。

私と一緒に講演をしたのは、宇伏、上司、前田河、葉山、野口、池谷、田中、犬養、國木田の諸氏であるが、前記五個處の講演を通したのは私だけで、宇伏氏は甲府だけ、上司氏は松本と長野、野口氏は長野だけ、池谷氏は松本、長野、前橋、田中、犬養、國木田三氏は前橋、宇都宮二個所で、私と落合つて講演會に臨まれた。從つて私は第一夜は甲府の旅館で宇伏氏と一室に眠り、第二夜は淺間溫泉で上司氏と同宿し、第三夜は別所溫泉で池谷氏と床を並べると云つた有樣で、而かも宇伏、池谷兩氏は初對面であり、何だか氣が落着かなかつた。

一體私は生來の話下手で、坐談ならいくらでも喋るが、高い處に立つて多數の聽衆を相手に講演をする事は甚だ不得手である。殊に學校で學生を相手に喋るのと違つて、公開講演會となると聽衆の年齡、境遇、教養がそれ／＼違つて居るのだから、何處に標準を置いて喋つていゝか見當がつかない。（これは私ばかりでなく、講演者の誰でもが感

ずる困難に逢ひないか。)數年前止むを得ない義理から水戸市へ講演に出かけて劇場の舞臺に立つたが、上間の最前列に孫を伴つた三人連れの六十近いお婆さんが坐つて居るのを見てうんざりして喋る氣が無くなつてしまつた。勿論私は孫を連れたお婆さんを輕蔑する氣は少しも無い。だが私が其の日話さうとした事はお婆さんの生活に何の交渉も無い事を感じたのだ。誰にもわかる樣に、而かも有意義な文藝講演が出來たらそれこそ申分無いが、これはちよいと難かしい事だらう。私一個としては場當りの通俗的な事を喋つて滿場の喝采を博するより、千人の中の唯一人にでもいゝから眞の感銘――文學乃至人生に對する熱意の高揚を――與ふる事が望ましいが、どの文藝講演會でも、主催者の本旨は必ずしもさうでないかも知れない。

私は自分が教鞭を執つて居る學校の文藝講演會の司會者として、文壇の諸氏を招いて度々講演をして貰つた。聽衆は全部學生なので、皆靜肅に聽いて居たし、講演者も話が樂らしかつた。話が途切れて、講演者が演壇で暫く立往生をして居る時でも、聽衆は穩かに次ぎの話の緒が引出されるのを待つて居た。

だが普通の公開講演會ではさうは行かない。或る講演會で(今度の改造社講演會ではない。)講演者がちよいと言葉に詰まつて默り込んだ時、『もう降りたらどうです』と聽衆の中から聲を掛けた者があつた。場馴れない私は、今度の講演で話の繼穗を見失ふ事を最も怖れて居た。其の爲めにいつもせか〳〵話し續けて、後で云ひ落したと思ふ事が大分あつた。それから聽衆に興味が無いだらうと思ふと、わざと云はないでしまつたことがあつた。

野口米次郎氏が講演會を無料で催すのは良くないと云ふ事を最近何處かで書いて居られたが、私も同感である。入場者の資格に制限を附する――つまり金を拂つても聞きに行きたいといふ熱心な讀者を集める――といふ意味で、今後は是非相當の入場料を取つて欲しい。五十錢の會費を取つて、入場者に『改造』を一册づゝ贈ると云ふ事にしたら、雜誌の宣傳にもなつて良いと思ふが、其れから會場もなるべくなら芝居小屋でなく、公會堂の樣な處が良い。芝居小屋だと聽衆が芝居を見る氣で足を投げ出したり、帽子を冠つたりして居て、感じが惡い。各地で司會者になる土地の新聞社の人たちが聽衆に脫帽を要求してくれてもいゝと思ふ。

第一夜の講演會は甲府の櫻座と云ふ劇場で催された。前夜寢不足の上に、第一夜なので何となく氣が落着かず、私は豫定より短かく、二十分位喋つて引下つた。翌朝宗伏氏と別れ、甲府を立つて松本へ行き、上司、前田河、葉山、池谷諸氏と落合つた。此處は聽衆も眞面目で、熱心であり、會場も公會堂であつた爲めか、私には一番喋り良かつた。其の晩は上司氏と一緒に淺間溫泉で一泊し、翌日一緒に長野へ行つた。長野の講演會は松本で落合つた諸氏の外に野口米次郎氏が加はり、なか〳〵賑かだつた。此處でも聽衆はかなり熱心だつた。

其の晩私は池谷氏を誘つて別所溫泉へ赴いた。別所では花屋と云ふ旅館を私は知つて居るので、花屋へ行きたかつたが、池谷氏は柏屋が馴染で、柏屋へ行きたいと云ふので、同氏の意見に從つた。どちらも

大した違はないが、私には花屋の方が萬事綺麗な樣に思ふ。柏屋で紡績の溫袍を出されたのは閉口した。但し宿料は非常に安かつた。

前橋、宇都宮も相當な成績だつた。(結局甲府の講演會が比較的一番淋しかつた樣に思はれる。これは講演者が私と室伏氏と、唯二人だけだつた爲めかも知れない。)何と云ふ川だか、前橋市の中央を流れる水量の豐かな、野趣に富んだ川に蛎船が一艘浮んで居るのが、劇場へ行く途中眼に着いた。蛎は時節外れだが、蛎船は珍らしいので、暇があつたら彼處で一杯やりたいと思つたが、到頭行けなかつた。

高崎發の終列車に間に合ふ爲めに、前橋で講演を終へてから大急ぎで高崎驛へと走らせた自働車の中で、夜の闇に閉された窓外の田園風物を眺めながら一人味はつた淋しい、空ろな氣分も忘れられない。人生は煙だと叫んだイワン・ツルゲーネフの作中の人物の言葉を眞似れば、其れは人生は唯あわたゞしさだと云つた感慨に近い。

四國斷片記

富田碎花

四國へ、雨の瀬戸内海を尾道から渡る——

幾日か晴れつゞいた後の雨は、殊に夜明け方から降り出した。それは、乾燥し切つた空氣を吸ひ慣れた鼻孔にめづらしく快い濕潤を送るのだつた。夜汽車からすぐに乘りついだ船は百五六十噸そこそこだつたが、殆んど搖れない、月並の云ひ方ではあるが油を湛へたうへを辷つてゆく感觸である。五月もやつと二十日過ぎであるといふのに、船窓に迫る島々のよく耕された丘の斜面の麥はすつかり黄ばんでゐた。もう收穫も近いのであらう。不手際に淹れられてあつても香だけはやけに强烈な麥芽製珈琲を嗅ぎながら、さうした微雨のなかの景色を眺めることは隨分と遠く旅して來た感じを、稍々エクゾテイシズムをさへ添へ加へて覺えさせるのだつた。さう云へば、確に聞くには聞いたのだつたが、名も忘れてしまつたが、この邊の何處かの島では、碇泊した船に、腰卷一枚になつてみづから櫓を押して漕ぎ寄つて來る一夜妻が、昔のままの風習を傳へてゐるといふ。

ボツ、ボウ——と、絞り出すやうな汽笛にウトウトとなつてゐた假睡の夢を醒まされればもう今治に來たのだ。朝が早いからでもあらうか、船着場らしい混雜はまだ見せもせぬ靜かな港の町の狹い街衢を行く。

そこの港の町ではアカシアの白い花が盛りだつた。殊にそのうちでも忘れ難かつたのは、棧橋から程近い、神社のお旅所か何かを他處に

移した址らしい小さい廣場のある前の、一軒の青物屋の店頭に、とぼけたやうに立つて强い匂ひを四邊にこぼしてゐた一本であつた。それは雨上りの後の眩しい太陽の光を浴びてゐた。またそこまで行く途中の潮入り川の端には、蘆花氏の『黑い目、茶色の目』に出て來るといふ有名な今治の基督教會があつた。その小建築は可なり古びもついてゐた、下手に修繕をして塗り立てた痕跡がややそれを卑しくして見せもしたが、然し、小さいながらに鐘をのせた尖塔の姿などはいかにも物語のなかの實在らしく思はせるに充分だつた。

×

昨夜、講演會の皮切で、いよ〳〵旅巡業？の始りだ。それにつけても今治の會場はとても素張しい受容力を有つてはゐたが、豫期しない子供軍の襲撃に全く手も足も出ず閉口した。今夜は會場の整理を嚴重に……など片上老が濱本太夫元をしきりに退治つけてゐる。車窓の風景は概ね海に沿つて走るので、清澄な海氣が快く肺が痛くなるまで吸ふに委せる。漁村らしいものがあれば、濃い五月の潮の光を漲り溢れさせてゐる海を背景に、きつと節句の幟が勇ましく風に流れて翩飜いてゐる、定紋打つた旗印や、吹流しや、鯉幟の染料が思ひ切つて大膽に、强く、明るいのも印象を鮮かにさせた。

汽車が海岸を離れるやうになつて稍々少時すると、平原の遠方にポツカリと際立つた一塊の丘陵が目に入つて來る、あれが天守閣のある松山の城だなと思ふ途端に、『松山や秋より高き天守閣』の子規の句が浮んで來る、今はその季節の秋ではないけれど。氣がつくと私達の列車に並行して輕便鐵道が素晴しく勢ひ込んで走つてゐる、窓からはいづれも屈托の無い朗かな笑顔がのぞいてゐる。

『停車場はすぐ知れた。切符も譯なく買つた。乘り込んで見るとマツチ箱のやうな汽車だ。ごろごろと五分許り動いたと思つたら、もう降りなければならない。道理で切符が安いと思つた。たつた三錢である。』――『坊チャン』に出て來る汽車があれだ。ぶうといふ汽船の笛に今更らしい旅愁を覺えながら、漕ぎ寄つた艀の船頭の素ッ裸の赤褌に目を丸くし、氣の利かない港まちの鼻垂れ小僧や、宿屋の女中共を輕蔑しながら『坊チャン』が勢ひよく飛び込んだ汽車があれだ！ そんなことを考へてゐると、自分が今度の旅に出るまへ見に行つた春陽會展覽會に出てゐた岡本一平君描くところの漱石先生一代記が、も一度ハッキリ思ひ出せて來た。一體この輕便鐵道といふ代物、頗る愛嬌のあるものだ。旅行者は誰れでも感ずることだらうと思ふが、國有鐵道が何かの謂はば幹線と云つたやうな一寸した大きな驛などへ、何處か街道筋から外れて存在しつつ發達を遂げてゐる町などから接續してゐる、そして地方的には隨分と重要な役目を果してゐるこの小存在？は、そしてそれが、いきり立つて走つてゐるのを見たりすることは、運動會で競走をする小學生の邪氣の無い一心不亂の顔つきを思ひ出させて愉快至極のものである。

近頃新しく開通した國鐵の松山驛から、躑躅の葉の青々とした濠をめぐらした城のある丘の麓をめぐつて、一目散に六十錢均一の自動車は道後に飛ぶ。何はともあれ温泉で一浴びと揃つて出かける。内湯の設備が無いのは不便とか何とかいふ勿れ、ブラリと手拭を下げて共同浴槽まで出かけるのはまた情趣豐かなものがある、然し此處のなどは少

し發達し過ぎて、便利が好過ぎて、都會に住んでゐて町なかの錢湯へ行く感じだが。而かも眞晝間と來ては話にも何もならぬこと夥しい。到るところ『坊チャン』の亡靈に脅かされる。目に入るもの、聞くもの『坊チャン』を連想せざるを得ないのは尠からず恐縮する。私たちの宿の鮒屋別館は坂の中途にあつた。その登道の入口の池に菖蒲の紫なのが眞盛りで、何處からか聞こえて來る氣倦い三味線とこんがらかつて湯後の快く疲れた感覺に訪れて來て妙に忘れられないものにした。

講演會場は劇場だつた。司會者は海南新聞の中保主筆だつたが、何處かで見覺えのある人のやうな氣がしてならぬ、が、どうしても思ひ出せない、後で判明つたが、その話し振りや物靜かな態度が東北大學にゐる新明正道君と關西學院にゐる松澤兼人君をつきまぜたやうな人だつた、それで見覺えがある氣がしたのだつた。片上老が舞臺裏の薄暗いところで例の低音で、丸窗して詰め寄つてゐる高等學校の生徒二三を相手に切りと何か說き聞かせてゐる、結局『まア今のところは落ついて折角學校のことを勉强したまへ、そのうちどうせ大學に行かれるやうになるだらうから、そしたら私の云はうとすることもハツキリ理解される時が來ると思ひます……』といふやうなことを。

細田氏を煽動して、高等學校の生徒諸君に案內して貰つて大街道の横町の古本屋を漁る。格別の獲物無し。十時半、講演會が終つて再び外へ出た。タクシーを探すのに困つてゐたら電車通りの角の菓子屋の娘さんが電話で呼び寄せて吳れた。

夜中の一時頃、町はづれの夕飯を濟ませてからたつた一人で、も一度、溫泉に浸りに出かけた、湯の町もさすがに寢靜まつてゐた、何處かの宿屋から廣い方の浴槽には人が二人ばかりゐただけだつた。『山嵐』がのぞいてゐたかも知れぬ。

×

丸龜——

宿は町端れの土器川に臨んだ、と云へば素敵に聞こえるが、廣い川原には僅かの水が流れてゐるだけだつた、然し、その川原へ二三人の女が來て、腰卷一つになつてその洗つた着衣の乾くのを唄などうたひながら待つてゐたなどは情趣深い點景だつた。そして讃岐富士を欄干に凭れて見ることのできる家だつた。栴檀の老樹があつて薄紫の花をつけてゐた。噫、そのせんだんの花！ その花にまつはる插話こそはこの旅の最終まで怨靈のやうに憑き纏つて我々を惱まし通したのだつた。理由？ 神だけが知る？ それとこの宿の女中？ の菊池寬君の禮讃も惱まされたものの一つだつた。

講演會は相變らず滿員札止めの盛況。市の紀念公會堂が會場だつた。控室で話をしてゐる間に大須賀市長が家兄の友人であることが判明つて奇遇を喜んだ。

×

前日の長い退屈な汽車にひきかへてこの日は丸龜と高松との間を文字通りの一擧手一投足の勞であつた。

栗林公園はよかつた、若葉には少し時期が過ぎたけれど。それは岡山の後樂園よりもづつと規模は大きいし、程遠からぬところには瀨內絕勝の一つである屋島を控へてもゐるし、かてて加へて琴平もさう遠

くは無い、遊覧都市として實に優越な位置を占めてゐる。また讃豫線が松山まで直通した今日となつては、鐵路によつての讃岐は勿論、遠く伊豫にかけての瀬戸内海に面した各地の咽喉の要衝にも當ることとなつた譯である。市況もどこか活氣横溢と云つた風が直感された。

今夜の會場は大和座といふ劇場。とても素晴しい景氣である。然し聽衆は頗る洗練されてゐて静粛である、婦人の多いのも豫想外だ、第一その熱心なのは好感が持てた。司會者は四國民報の遠山營業部長。同氏は當年の文學青年とあつてよく我々の氣持ちも諒解してゐて呉れたし、宣傳その他の事務的方面も頗る圓滑に行つてゐたらしい。可笑しかつたのは濱本改造社員『宣言』と號して大いにメエトルを上げるべく舞臺裏で枚を啣んで納まつてゐると、遠山氏の開會の挨拶なるものがドンドン脱線？して、改造社の領分にまで遠慮なく切り込んで來たので、味噌を持ち出す餘地が無くスッカリ面喰はされたことである、代つて演壇に立つてから如何拾收したかは天機洩らすべからずだが、しきりに頭を掻いてゐた様子は飛んだ景物だつた。

辻梅旅館のお菊さん、とても澄まし込んでゐて取つけさうも無い様子なので連中大いに恐れをなしたが、何ァに判明つて見れば氣の利いた粋な人とあつて忽ち名譽恢復。

×

高松から徳島へ――この日は仲々の強行軍をやらなくてはならない、讃岐と阿波を海岸線に沿つてつなぐ讃岐街道を五時間以上自働車で駛走するのだつた。屋島の附近にさしかかると運轉手君しきりと遠くの樹木や、近くの石を指して歴史を語つて呉れる。途中でタイヤがパンクしたので修繕する間をみんな車から降りて松並木に腰を下して一服やる。姿の見えなくなつた片上老が何處からか木苺と金柑をアップして來る。危く人格問題を惹起するところだつたが、それぞれ配分にあづかつた獲物の野趣横溢の味ひに忽ち豹變して口を極めてその直接行動を讃美する。この邊、津田の松原と云つたと思ふが、美事な松原である。場所に近くありさへしたら舞子あたりと覇を競へるであらう。この海岸線にはづつと小豆島の山容が見え續く。引田村の怪し氣な休み茶屋で、かみさんから立てつゞけにまくし立てられてみんな胄を脱いでしまつたのは大笑ひだつた。誰れかが近所の海で漁れた蟹を晝飯の副食物に大丼山盛平げたのには驚歎した。

阿讃國境の大坂越は素晴しい絶景を脚下にしながら漸次にジクザク路を登りつめるのだつた。時としては夢のやうな小汽船が浮いてゐたりするのを俯瞰しながら。

橋錢を徴收する吉野川の橋を二つほど渡れば、やがて徳島の市街へはもう近い、車は砂煙を濛々と後に殘して墓地に桑畑のなかの街道を突破する。だが市に入つてからもその一部である佐古の町は隨分と長かつた。

一先づ旅宿に落ついて一風呂浴びてゐると、ポーン、パリ、パリといふ花火の音だ。愈々講演會を始めるといふ合圖だと聞かされて度膽を拔く。つづいてポーン、パリ、パリ。ポーン、パリ、パリ！

この夜の會こそ物凄い極みだつた。翌朝新聞が報じたやうに、徳島空前の盛況、大衆五千潮の如く會場に押寄す！　多少の誇張はあつたにしても雪崩を打つて殺倒する聽衆を一たい如何整理するかと一時は

ただ呆れるばかりだつた。會場は千秋閣といふ舊城内の美しい公園に建てられた縣廳直屬の集會場がそれに當てられた。檜徳島毎日記者の司會振りは水際立つて鮮かだつた、眞に感謝に價する美事な手腕を發揮された。ともすれば混亂に陷らうとする屋外までも溢れた大聽衆を引締めて無事我々をして最後まで云はんとするところを云はしめて貰へたのは何としても有難いことだつた。然し、私自身としてはこれまで大切にいたはつて來た咽喉を遂々その夜の講演で害ねてしまつた、ことほど蠻聲を張り上げるのを要したのだつた！　鼻下に怪し氣な髯を貯へた坂本徳毎社會部長は始終默々として而かも心ゆくばかりの滿足の微笑を湛へて居られたやうだ、氏は知名の俳人である、泌々とその俳話を傾聽するの機會を得なかつたのはいかにも殘念であつた。會が全く終つたのは既う十二時を過ぎてゐたであらう。我々のために設けられた招宴に列席はしたものの疲勞し切つた我々は口を利くのも臆劫になつてゐた。申譯の無いことだつたと赧顏に耐へない。

×

折角招せられた鳴門見物も辭退して、早朝、高徳線の列車に搭じて阿波池田に向ふ、汽車は吉野川のヴアレイを走る。

好奇的かつ不純な阿波池田宿泊の動機を一蹴して一路直ちに自働車で高知に向ふことに決する。午後三時池田發。吉野川を渡船で越す白地では、もう數日すると東洋一と稱せられる吊橋の開通式が行はれるといふ。この處女のやうに靜かな流れも一たん増水に際會すれば水勢が急で橋脚を押し流すので現在まで重要な國道の幹線の一つでありながら渡船の不便を忍んでゐた。ひた走りに走る自働車の速力は眩惑を感じさせるほどだ。大步危では乏しい時間を割いて時に扁舟を艤して、飛沫に濡れながら濃藍色の流を下つた。若者ならぬ遊茶を淹れて、わざ〳〵携へ來たつた徳島名物の燒餅を頰張りながらの名所見物は、文字通りの淸遊に非ずして何ぞの感があつた。この邊、事々物々すべて私にとつては思ひ出の種ならぬは無い、それは幾年か前、たつた一人でルツク・サツクを背にして徒步土佐へと向つたことがあつたが故である。

土佐に入つて、根曳峠の頂上から遙かに眺めることが出來た太平洋！　やうやく迫らうとしてゐた夕の光のなかにくつきりと劃されてゐた壯大なその水平線！　高知の市街から三里距つた領石で、ハイヤのフオードを捨て、高知新聞社差廻しの乘心地の快適なビウイツクに移る。高知中島編輯長その他同社々員諸氏の出迎を受け、車を列ねて薄暮の坦々たる大道を急ぐ。このあたり水田はすべて植付が終つてゐた。その道路には栴檀の片側並木が美事に續いてゐた、歌あり——

こゝしかるきたやま越えて來しみちの
並木の花はせんだんの花。

——これは後で、同地で乞はれるまゝに短册に書き殘したうちの一首。

その夜、また〳〵疲勞も屁の河童で、懲りもせずに高知新聞社招宴とあつて、中島高橋兩氏に案内せられて得月酒樓に赴く。こゝはとても大きな料亭で、間誤つくと迷兒になりさう。何處となく漂つて來る潮の香をいとほしみながら三味線音樂隊員の「よさこい節」を聽く、旅人をして否應なしに海岸情緒に引き入れてしまふ。細田氏、端唄か

何かの遊いところを小出しにして片鱗を示す― 蛟龍稍々雲を得たるの感あり。

翌夜、即ち五月三十一日には愈々四國班最後の講演會である。高知土陽新聞社の後援で、會場は市公會堂。例によつて滿員。委員の責任は大過なく果した。これで我々も榮光燦たる賞讃？を殘して失業者となつた次第、些か悲壯感が湧かぬでもない。この夜、心ばかりの解散式を行つた後、各自、漫遊旅行勝手たるべしと離れかと云ひ出したが、流石に連日連夜の慣れない勞働にみんな疲勞し切つてしまつて、默々と旅宿城西館に引上げて豚の如くに眠りを貪つてしまつた。明日の室戸岬行のことなど考へながら。

西國紀行

川端康成

京都

朝着いた衣笠貞之助氏の宅に、上海土産の素晴しい麻雀、近くそして眞正面に見える大文字山の「大」の字。大文字のともる夜はよからうと云ふと、火を焚く人が見えて興ざめるとの衣笠氏の答へ。ここは淨土寺馬場である。

同行池谷信三郎の希望により、衣笠氏の案內で撮影所巡り。下加茂、日活、マキノ。四條や新京極や菊水でも映畫の人に澤山會ふ。菊水と云へば去年の五月、前田孤泉君と三階で飯を食つた時、東山の新綠が窓に映つてゐた。これは爽かに驚きであつた。「京都と云へば君、四條通りを歩いてゐてふと頭を上げると、目の前に山があるのだからね。」と、僕は東京の誰彼に云つたものだ。四條通りの東山と、去年下加茂の撮影所の窓から眺めた葵祭の行列と、ただすの森のただす國から見た青磁色の朝空と、これが僕の近頃の京都の印象の點睛である。

去年はただす國に「狂つた一頁」主演の井上正夫氏と十日程隣室で泊つてゐた。今年も六月一日から南座へ出演してゐるので、片岡鐵兵、池谷、衣笠氏等と樂屋へ訪ねたが、「親友」なんて云ふ喜劇を一幕見せられて、せつかく「平將門」なんかを上演した後だのにと、寂しくなつた。大阪で僕の從弟に聞いた話だが、井上氏は大阪の青年紳士達の社交俱樂部に招待された席上、「澤田正二郎君は昇る朝日でありますが、私は沈む夕日であります。云々」と挨拶をし、流石の大阪人に聲を呑ませたさうだ。

鐵兵に落ち合つたのは、改造社の講演のお役目がすんで、池谷と僕

とか京都へ引き返してからだ。木屋町の横を池谷と圓タクで走つてゐると呼び止めるのは義弟草間實のためにユニバアサル對阪妻騒動の渦中へ乘込んで來た今東光である。奇遇である。久しぶりで今東光の勇壯な活陣の話を聞いた。四人に衣笠氏と木村普門氏が加はつて、圓山公園の左阿彌と云ふ家で飯を食つた。織田時代から由緒ある茶寮らしく、公園形勝の地に臨んでゐる。

僕の友人の別れた妻が新京極のダンスホオル、ロオヤルに出てゐると太秦の撮影所で聞いたので、池谷と行つてみたが、彼女は一月程前に止めてそこにはゐず、四條通りでひよつくり會つた。マキノへ入社してゐる由。ダンスホオルには異國的に瘦せた花形の踊子がゐたが、僕達が大阪の堂ビルホテルへ泊りに行くと、戀人かの某君を連れて來た彼女とはからずも七階までエレヴエタアに同乘させられたのは、旅である。

鴨川べりの手摺から生駒のケエブルカアの電燈が星のかたまりのやうに見える。四條大橋際の仁丹は餘りに大きい。しかし、京都では廣告燈の明滅や廻轉を法度してゐるさうだ。廣告燈まで殺じたとて、夜の京都が美しくなるか。

僕達三人、京都を去りぎはにするが屋で豆平糖、八ッ橋、都の花なぞそれぐ\東京の家や人へ送つて、殊勝なものである。

大阪

京都から京阪電車。池谷は圓タクの堵列と本みやけの牛肉とにしきりに感心してゐる。五月末から六月初めのことゆゑ、關西の旅行どこへ行つても、じゆんさいの浮いたお椀、鮎、さ茸の土瓶汁、茄子や唐茄子なぞのはしり物。つる源と云ふ家の天ぷらがうまいと池谷が菊池寛氏から聞いてきたので、自働車で幾ら搜しても分らぬ。分らぬはずだ、關東煮小便たんごの露路なんだ。

講演すんでから二度目に來た時、蒲生の從兄の家に一晩泊る。東京の從姉が偶然來てゐたし、八幡の從妹がちやうどお産に歸つてゐたし、從兄の妻の弟さんまで來るし、女學校へ通つてゐる從妹もゐるし、久しぶりで血のつながつてゐることの親しさを感じた。お產するところを見せてやると從兄が戯れてゐたが、その夜は産れなかつた。叔父が生きてゐた頃の蘭虫の養魚場は跡方もなく、新しい鷄舍には今流行の小鳥が二百羽ばかり居る。千圓すると云ふブリユウ何とかのセキセイインコを見てもさつぱり分らない。八ッになる男の子が一日僕にまつはりついてゐる。この子は毎日その日の新來者にばかり興味を持つモダンボーイである。

もう一人、島の内に店を持つた從弟を訪ねると、彼は奇術師のやうな大阪商人になりつつあつた。

大阪毎日の渡邊均氏、朝日の太田梶郎氏なぞの盡力で、鐵兵の新著「綱の上の少女」の會を江商ビルで開いた。神戸へ來た三宅やす子氏も來會。女學生は二人。

毎日新聞で山崎斌君に松竹座で正岡いるる君に會ふ。松竹座は音樂部長の松本四郎君に殘る隈なく案內して貰ひ、「ヴアリエテ」を見せて貰ふ。中學の舊友久田實治君にも會ふ。

奈良

奈良には瀧井孝作君がゐる。瀧井君とは東京大の前に大阪で會つて、天王寺の電氣食堂へ行き、道頓堀から天神橋まで歩いて以來會はないのだが、それでも先輩と言ふより實に親しい友人の一人と云ふ氣が始終あるのは、彼の不思議さである。今度も會ふ。外に舟木重雄氏、木村庄三郎氏。公園の中の家へ行き、池谷の麻雀僕の碁で朝になる。初夏の奈良公園の曉は鹿の影もなく、新緑の薄煙が地を這つて、足を洗はれる爽かさである。しかし、ホテルの玄關の戸が閉つてゐて、池谷と二人で途方に暮れる。通りかかつた男を幾ら呼んでも答へがない。つんぼの火夫である。早起きのコックにコック場から入れて貰ふ。

奈良ホテルは、金張りの階段と云ひ、裝飾燈と云ひ、廊下の紅い絨毯と云ひ、いづれも俗惡な毛唐の日本支那ぐちやぐちや趣味に迎合してゐる。

奈良は都大路で鹿に出會ふ。京都四條で東山を見る驚きと同じである。また、遊里のじめじめ暗い露路裏の塵溜からむくりと鹿が立ち上る。

津

奈良から津、木津、笠置、伊賀上野、柘植なぞ、沿線の山に感じがあつたが、津の感じは一生にもう一度來ることがあるかどうかと云ふ以外に浮んで來ない。本屋の小僧さんに街を案内して貰つたが、どこまで歩いてもぱつとした所へ出ず、都會人の池谷を退屈させ疲らせたに過ぎなかつた。

四日市の福山順一氏が、岡さうの海老の鬼から燒を食ふためにだけでも津へ來る價値があるなぞと、しきりに煽動するものだから、池谷と行つてみたが、海老はなく新鮮なあわびがあつた。

女は京都の流れを汲んだ美しさ。

桑名

同じく福山順一氏や佐藤昌胤氏の煽動で、津で講演をすませると一行直ちに桑名に向ふ。舟津屋。宿帳に田中義一、長田幹彦、その他有名な名前澤山。

桑名は掛けつらねた歌行燈に港の帆船が寫るやうな町。町全體が遊廓のやうな感じ。伊豆の下田は船着場的遊里として名高いが、南國にもかかはらず町が暗くて陰慘だ。桑名は行燈の明るさながら明るい。古い小唄の節奏が町を流れてゐる。

高須梅溪老人まですつかり町が氣に入つて、扇子をぽんぽんと綺麗な手つきで投げては拾ひ拾つては投げながら、時雨蛤で飲む。「その手は桑名の燒蛤」と云ふ文句を、僕なんか何千遍となく碁打ちから聞かされてゐるが、今は燒蛤、桑名にはないさうだ。名物とか何とか云ふ按摩がしきりに窓の下を通り、言葉だけ色情狂じみた名物中の名物男はとても激越だ。

翌る朝、對岸の佐藤氏とその家に泊つてゐた福山氏が船で迎へに來て川遊びをする。行々子の巣を見る。

桑名の殿樣。

岐阜

講演會の時間に後れるので、大垣驛から自動車で急ぐ。途中岐阜郊外の名物の雨傘を作る家の多い加納町を注意してゐたが、通つたか通らないかも分らぬうちに玉井屋旅館に着いてしまふ。加納町は小説「篝火」に書いた思ひでがある。岐阜は京都に似てゐるが、玉井屋は京都の晝もほの暗い商家に似てゐる。

五月三十日。下鵜飼で八時。だから講演を八時にすませ、僕一人長良川へ急ぐ。長良橋を渡り、北詰の鐘秀館へ行く。「篝火」に書いた鵜飼の篝火を見たのも、矢張り鐘秀館の二階だつた。關東地方ではまだ禁獵中なのに、實にみごとな鮎を食ふ。

直ぐ金華山の蔭に篝火が燃え出す。その篝火を六艘の鵜飼船に分ける。火の柱が六本流れて來る。舊作「篝火」に僕はかう書いてゐる。

「篝火は早瀨を私達の心の灯を急ぐやうに近づいて、もう黑い船の形が見え初める焔のゆらめきが見え初める、鵜匠が、中鵜使ひが、そして舟人が見える。楫で舷を叩き勵ます舟夫が聞える。松明の燃えさかる音が聞える。舟は瀨に從つて私達の宿の川岸へ流れ寄つて來る。舟足の早いこと。私達は篝火の中に立つてゐる。舷で黑い鵜が輕慢な羽ばたきをしてゐる。ついと流れるもの、潛るもの、浮び上るもの、鵜飼の右手で嘴を開かれ鮎を吐くもの、水の上は黑い身輕な魔物の祭のやうで、一舟に十六羽ゐると云ふ鵜のどれを見てゐればいいか分らない。鵜匠は舳先に立つて十二羽の鵜の手繩を巧みに捌いてゐる。舳先の篝火は水を燒いて、宿の二階から鮎が見えると思はせる。そして私は篝火をあかあかと抱いてゐる。」

今日も同じである。公園の名和昆虫館にも思ひ出があるが、そこの名和氏はこの間死んだと新聞で見た。

宿に歸れば高須氏一人。二人で出かける。高須氏、柳ケ瀨の賑かさに驚く。グラアス、グラアス、聰明なる虛無の美はしさ。

和歌山

食堂のある南海電車は一寸珍らしい。高須氏電車に羽織を忘れ、僕拾ふ。これで二度目だ。和歌山市は天主閣へ上らないと百萬石の城下町が感じられないとのことだが、僕が上らなかつたせゐか、公園で馬の銅像を一つ見たくらゐのもの。

新和歌の浦、望海樓。紀伊の姿を眺め、旅情しきりに動く。田邊節を聞き、箕島から御坊を通つて田邊、そこから遊覽船で白濱と湯崎の温泉へ行つた、二三年前を思ひ出す。現に熊野通ひの汽船が目の前に浮んでゐるのだ。

翌る朝、ボオトで曳き網を見物した歸り、池谷ざぶんと海に飛び込む。高須芳次郎、新居格兩氏に別れ、池谷と改造の芥川氏と僕と驛へ行き途中紀三井寺に詣でる。西國三十三番の札所。御詠歌二番。

古里をはるばるここに紀三井寺
花の都も近くなるらん。

神戸

片岡鐵兵の舊友、又新新聞の岡成志氏に伴はれ三人で行くと、奧屋氏夫妻が出迎へてくれる。晩飯を御馳走になり、元町を歩き、大野屋に泊る。翌る日、岡氏、奧屋、山下、池田夫人、長尾嬢なぞが平和樓で、鐵兵の「綱の上の少女」出版祝賀會を開いてくれた。

オリエンタルホテルのお茶の時間に行く。

以上、五月二十五日より六月七日まで。

東京。

七月四日。オリエンタルホテル全燒の新聞記事。

階下では女が二人、西國三十三番の御詠歌を歌つてゐる。

ふだらくや岸うつ波はみ熊野の
那智の御山に響く瀧つ瀬

古里をはるばるここに紀三井寺
花の都も近くなるらん。

父母の惠みも深き粉川寺
佛の誓ひたのもしのみや

み山路やひばら松原分け行けば
まきの御寺に駒ぞ勇める。

…………

僕の古里は三十三番の札所勝尾寺に近いから、これらの御詠歌は古里の子守歌であつた。村の人々が十疊敷に一ぱいの大きい珠數を廻してゐる姿が目に浮び、思ひ出に胸がつまつて來るのである。

北陸紀行

近松秋江

五月の廿四日の朝上野を八時二十分に立つて越後から加賀越前の方にいつた。改造社の依頼で講演旅行に出掛けたのだ。講演は、廿五日越後の長岡を口切りにして、新潟、富山、金澤、福井といふことであつたから、近年旅行は隨分臆劫になつてゐるのであつても、時候が丁度好い時分なので、五六日の旅に出てみる氣になつた。

廿五日の晩までに長岡に行けばいゝので廿四日は途中の赤倉温泉に一泊してみた。その先の直江津までは、八九年前に京都の方から歸京する時に、米原から北陸に廻はつて、信濃路を經て來たので、越後の西の方だけは汽車の窓から見て知つてゐるが、越後の本場は今度が初

めてであつた。

その日朝家を出ようとすると、曇つた空からぽつり／＼雨滴が落ちて來た。北武藏、埼玉の平蕪から上州の野に行くと、丁度穗を擡いた靑い麥の野に、本降りになつた雨が白く降りそゝいでゐるのも一興であつた。

高崎を過ぎてから、煙雨の中に妙義の奇峰が見えて來た。松井田から横川を經て輕井澤に至る間の新緑は、雨に洗はれて一層の鮮美を增した。その時雨は降り止んでゐたが、深い溪谷から奔騰する雲霧が巍峨たる峻峰の綠に絡つて這ひ昇るのが、宛然一幅の活畫圖でつた。

輕井澤は、私は、汽車から眺めた外は知らない。多くの人の膾炙して往くところであるから、勿論避暑地として好い土地に相違あるまいが、汽車から見たゞけでは、平凡な處のやうである。尤も日夕淺間山を仰ぐのは惡くもあるまい。それから信濃路の平原は、これも亦た平山凡水である。

長野ではもう五時を過ぎてゐた。そこまで來ると、今朝東京上野を出る時乘つてゐた客は、いつしか悉く降りてしまつて、自分一人になつてしまつた。雨は一時止んでゐるが、まだ本當に止んだといふのではなく、川中島の平野に淡蒼い靄が立ち罩めて、桑麥の綠とゝもに一抹に融けてゐる。長い一日の車行に日はやうやく暮れかけて來た。長野を過ぎてからも今夜一泊の豫定地赤倉に行く下車驛田口まではまだ四つ五つの小驛があつた。しかし信越の國境に入つて行くと四邊の景色も自から平凡でなかつたが、それとゝもに、山間僻地の農家の籬落を過ぎて行く時私は、何ともいへない佗しい感情が胸に湧いて來るのを覺えた。かういふところにも生活はあるのだと思つた。

昔の北國街道と不離不即の分水嶺を分けて、やがて汽車は柏原に出て來た。四邊の土地もやゝ開けて、人煙も豐かになつて來た。それから田口に行く間に、左方の高地に電燈が都會地の一角のごとく明く點つてゐるのが望まれた。それは、赤倉から溫泉を引いて、近年開けた妙高溫泉であつた。私は、こゝに泊つてもいゝなあと思つたが、やつぱり赤倉まで上つて行くことにした。

田口から自動車で一里半ばかりを登つていつた。

その夜は曇つてゐたが、宿の者は明日は晴れますといつてゐた。果して翌朝は軒端に射し込む朝暉と小鳥の聲に早く眼を覺まし、起つて南面の雨戸を推すと、なるほど眺望は廣濶壯大である。旅舍の背後に妙高、神名、やゝ離れて黑姬、飯綱の諸峰が斑白の殘雪を被つて峙立してゐる。暫くの間その雄大な朝の眺望に私は寢衣のまゝ窓に凭つて、浩然の氣を養つてゐた。それから溫泉に一浴して、朝食を濟まし、繪葉書などを購き、番頭や女中の案內でそこらの別莊地を散步した。遠くの溪の底で、閑古鳥がカッポウカッポウと鳴いてゐるのが、一層山中の靜けさを增すのであつた。

赤倉はたしかに好い處であるが、惜しいかな樹木が少い。夏季にはもつと綠蔭が欲しいものである。

その正午田口驛を發車する汽車に乘つて越後の長岡に向つた。高田、直江津は一度汽車に乘つたことがある。直江津から先は全く初めての旅行であつた。直江津を出て、犀潟、潟町、柿崎、鉢崎、靑海

川、鯨波はその名稱の表すとほり、直に日本海の波に瀕し、汽車は殆ど海波に沈まんとするかの如くトンネルの中に入つてゆくのである。折柄五月の末のことゝて、さしもの雪國も、初夏の日がまぶしく車窓に照りつけた。私は昨日からの車行の疲勞で睡眠不足を覺え、乘客の少い車室に横臥してゐたが、初めて行く沿道の風景眼に新しく、折々頭を擡げて窓外に眼を放つた。冬季は波の荒いので聞えてゐる處であるが、今は、その冬季の荒れるといふのが嘘かと思ふやうに波が穩かである。太平洋に面する東海岸にも、こんなに波の靜かな處はない。私は興津や熱海や、その他湘南の海岸をよく知つてゐるが、とても、このわたりの今見て通る海岸のやうに波の靜かな處はない。これならば、赤ン坊でも海水浴が出來ると思ひながら、見てゐた。

長岡から一つ手前の來迎寺といふ停車場の附近で、はじめて、信濃川の鐵橋を渡つた。信濃川の汪洋とした長流は、越後の平野と互に地質地勢上原因結果となつて出來てゐるのである。信濃川は此の膨饒なる平野をうねり〳〵つて、やがて新潟に至つて日本海に注ぎ入つてゐる。

その晩は長岡で講演することになつてゐるのであるが、改造社員をはじめ、他の連中はどうしてゐるか、兎に角自分は一人で長岡に行きさへすればいゝのだと思つて、同驛に下車し、今朝赤倉の旅舍で、長岡でも新潟でも大野屋といふ旅館が好いと聞いたので、ステーションから俥にトランクを載せ、自分は徒歩して市街を歩いていつた。すると、驛から、わづかに二三丁も行かぬ左側に、地方の市にしては立派な公會堂が建つてゐて、その正面階上に改造社の赤地に白文字をそめ出した幔幕を張つて今晩六時講演の廣告を出してある。「よし〳〵。」と、心にうなづきつゝ大野屋旅館に至り、投宿し、トランクを運んでくれた男衆に、「改造社の人は來てゐないか。」と訊くと、「お見えになつてゐます。」といふので、やつと、迷い兒のやうな氣持から解放された。別室にゐた改造社員栗林、比嘉の二君、それから東奧地方を講演の歸途北陸に廻つて來た秋田、片岡の二君と相會することを得て、愉快であつた。而して此の北陸地方の講演を、私と共に始終一貫する任を帶びてゐる吉田絃二郎氏は今晩六時に來着の電報を途中から打つてよ越したといふことであつた。

その晩講演が果てゝから、公會堂の喫茶室で、長岡市書肆の主催で、吾々の爲に歡迎の意をかねた談話會が開かれたが自分は疲勞してゐたので、御免を蒙り、自分の講演を濟ますと早速旅館にかへり就寢したが、どうも旅づかれで熟睡出來なかつた。

翌日も幸に好晴であつた。●——此度の旅行で最も惠まれたのは、始終晴天つゞきであつたことだ。昨夜は十分な睡眠は得られなかつたにしても、これから新潟までの車行はわづかに二時間で、そして、はじめて見る新潟へ行くといふので、私の旅行氣分は大いに新しくなつて來た。今日は吉田絃二郎氏夫妻、改造社の栗林、比嘉二君も同行である。秋田片岡の二君は朝寢坊のことゝて夕方までに行くといつて、まだ夜半の夢であるのを後に殘して吾々は先發した。

長岡から新潟まで、越後平野の中心地を行くに別段の奇趣妙景もない。たゞ遠く煙霞の中に彌彦山の翠微が見えてゐる。かくて新潟に着いたのが十二時一寸前。驛から直ちに自動車で信濃川に架した長い木

橋を渡り、いよ〳〵新潟市に入つた。旅館は長岡の大野屋の支店で、居心地は悪くなかつた。私は晝餐後、疲勞を醫するために按摩を呼んで二時間ばかり暫休みをした。吉田君、秋田君、片岡君などは新潟の書店の人達に案內せられて先つき市の見物に出掛けた。私は暫らく休息してゐるうちに、疲勞もやゝ回復したので、あとから出掛けた。海岸の砂丘の上に出ると、遠く日本海が一眸に入つて、左方の波の彼方に佐渡の島が巨軀を横へてゐるのが霞の向うに見えてゐる。あゝこれが佐渡の島かと、吉田君等と、芭蕉の荒波や佐渡に横ふ天の河の話などをしつゝ、日本海の穏かなる波を眺め、それから又一同二台の自動車に乘つて、信濃河口の方を廻つてみた。遠く砂洲が海に入つてゐる方に白帆が水の上を滑つてゆくのが見えてゐる。その又彼方、天の方に高く、殘雪を頂いた山脈が連亘してゐるのが見渡される。岩代から羽前の方の國境の山であらう。

新潟は一寸東京の本所深川の二區を一市にしたといつたやうな處である。信濃川の三角州に立つた、所謂新しい潟の市である。此の行生憎、音に名高い雪國の美人を見ることが出來なかつたが、市の地勢は砂州に位して、河海の水と市が殆ど水平に立つてゐるやうなところに一つの水郷としての興味がないことはないが、あんまり豫想し期待してゐたほどの土地ではなかつた。

その翌朝は五時前に眼を醒ました。廿七日は六時五分發の汽車で一路越中の富山まで行くのである。時間にして約十時間乘らなければならぬ。途中の長岡で私は正宗の二合瓶を買ひ、冷酒を甞めつゝ、どうかして眠らうとしたが、容易に眠られない。直江津で汽車を乘換へ、辨當を使つて、日本海の波を肴に又冷酒をなめつゝ行つた。

糸魚川で吉田君も下車して相馬御風氏を訪問するといふので、自分もそのつもりでゐたが疲れてゐると、今晩富山に着いて、一番はじめに前座をつとめ、それから直ぐに金澤に行つて泊ることに豫定を變更したので、相馬君を訪ふことは自分は中止し、そして糸魚川から僅に一時間午睡の間に過ぎてしまつた。

富山に着き、富山館といふ旅館に到ると、そこには三宅やす女史が來合せてゐた。暫時休息して舊城趾門の公園にある縣會議事堂の講演會場に至り、私は眞先きに講演をした。今日の講演は、自分でも、前日來に比し樂に出來たやうな氣がした。一つは會場のせいもあつたかも知れぬ。

それが濟むと、二番目の三宅やす女史の濟むのを待ち、同行してその晩直に金澤に向つた。三席をつとめた吉田君も同じ汽車の間に合ひ、三人同行金澤に向つた。最後に今日から同行に加はつた佐藤春夫君が殘つた。富山市の新聞社から送られた名物の鱒のすしを開いて辨當をつかひながら、それから二時間ばかりで金澤に到着するのである。越中は有名なる米の產地であるだけに、夜の車窓から見渡したゞけでも美田が遠く開けてゐる。まだ宵のことゝて、田野から吹き送つて來る微風が窓に流れこんで、すが〳〵しい。それとゝもに田面で鳴く蛙の聲も何となく懐しいやうな情趣をそゝつた。

金澤に着いたのが夜の九時。それから、私と三宅女史とは、佐藤春夫氏の泊つてゐる源圓といふ旅館に投宿した。吉田君は今日富山市を通り越して既に金澤に先着してゐる妻君と別の旅館に赴いた。源圓は、

金澤ごのみの調度など仰山に飾つてある旅館であつたが、夕飯の料理と、夜具などの粗惡なのには少々驚いた。

翌日廿八日は一日暇があつたが、金澤は八九年前一度來たことがあるので、それ以上委しく見ようとするには、金澤を、もつとよく知つた人に案内してもらはなければつまらないので、自分は、晝間そこらを、いたづらに散歩して、九谷燒の安物などを買つたりして歸つた。晩の講演會は汚い劇場であつたりなどしたゝめか、私にはうまく出來なかつた。講演が濟んでから佐藤春夫君の案内でつば甚といふ料理屋へいつて夕飯の御馳走になつた。一寸金澤の風味の一端を味はつたやうにおもつた。

翌日廿九日は福井まで又二時間半ばかり汽車に乘つた。福井の奈波屋といふ旅館は川の畔に臨んで涼風を入れる處であつた。そこでも私は前座をつとめた。そこから直ぐ近處の縣會議事堂であつたが、五回の講演で今日が最もよく出來たと思つた。

その夜直ちに米原に出で、そこから東海道の幹線に乘つて翌朝熱海へ歸着のことに決定し、金澤市を立つ前に寢臺車を申込んでゐたところ、幸にして米原を午前十二時三十五分に發車する急行車に寢臺があつたので、講演をおはり夕飯をしたゝめてから福井を發車し、四時間ばかりにして米原に到着し、直ちに東海道急行の寢臺車に入ると、一睡の中にもう函嶺を越してゐた。(六月十七日記す)

アルプス連峯の輝き

吉江喬松

アルプス連峯の輝かしい姿を一望におさめ得るのは、伊太利のトリノから汽車で、佛蘭西の國境へ向つて行く時であらう。我々が通過した五月中旬の爽快な空の下に、アルプスの連峯は、雪白の姿をほとんど全地平線上に浮ばせて、たゞトリノへ向ふ一角の空を殘すばかり、この日を奪ふやうな輝かしい圓形の直徑線上を、汽車はその連峯の中心をめがけて走りに走るのであつた。

巨大な無蓋圓形劇場の眞中を走つてゐるやうな、華さと、晴々しさとを感じながら、しかもサアカスの中央へ追ひ出された馬が、その觀衆の視線に怯えて狂ふやうに、純白な巨人等の聯立し、瞰視してゐる中を走る汽車は、急いで、この默々として立つ無數の白衣の巨人等の冷たい瞰視の眼を脫がれやうとするものゝ如く走りに走りつゞけてゐた。

うるんだ輝きを持つ伊太利の空も、この北部山岳地帶へ來ては、さすがに紫紺色を濃厚に加へて、それがこの輝かしい大弧線の絕端の上

へ落ちる時は匂ほやかなほのめきとなつて、空そのものが地上の最高處と溶け合つて、光とも匂ひともつかぬ、一種のおぼろとなつて蒼茫としてはてしなく廣がつてゐるのである。

嚴肅な、透明な、輝かしい、そして一切が淨化せられた、しかも無限の一方に連續してゐる氣分、これはまたユングフラウなぞの頂上に立つた時の感じなぞとは異つた。一種のやすらかさの伴つた、人界の中にゐながらにして感ぜらるゝ壯美の境地である。

スタンダアルは幼年時から眺めやつてゐた佛蘭西アルプのなつかしい姿を離れて、伊太利へはいつた時、初めてアルプの壯嚴に打たれたといつてゐるが、少くも全體としてアルプスの連嶺を、その輝しい姿に於て眺め得らるゝのは伊太利の方面からである。トルストイが青年時に、カオカサスへの初めての旅に向つた時、草原の果て、地平線上につぎ／＼に現はれて來る山岳の姿を遠望した時、その都度嘆美の叫びを擧げずにはゐられなかつた心理過程もほゞ想像の出來ることである。

山岳征服者等の悦びは、その遠望せらるゝ山岳の美に、その山岳の空際に描き出す力あるしかも柔かき空線に籠められてゐる。無限の動力が一時的に靜止してゐる一種不思議な魅力に引きつけられるのであるが、彼等は更に、その無限の魅力を持つ空線の一端に自分の身を置いて、自分等の身をも同じくこの自然が彫みいだす大群像の一部となしたい要求に驅らるゝのである。

ロダンの彫像の如何なる部分を見ても、我々はやはりこの大自然の彫みいだす山岳を構成する各部分、各線の美を見出すと同じやうに、我々はまたこの大自然の原型藝術の中に、我々人類の巨匠の創造し出す、無數の變化を一層擴大したる形に於て認むるのである。そしてその自然の藝術と同じ形態に身を整へ、同じ呼吸に氣分を諧調せんことを要求する。スタンダアルやトルストイの山岳を望んでの絶呼はつまり、その瞬間に於ける自然と人間との呼吸の一致を無意識に發露せしめたものである。

私は所謂日本アルプスと呼ばるゝ連峯の大觀をおさめ得るのは、ちようど歐羅巴アルプスを伊太利の方面から眺めると同じやうに、信濃の方面から眺むるのではなくして、むしろ裏面と思はるゝ越中の方面からして、しかも海上を能登から越中へ向ふ船の甲板上から眺むるのが最も壯觀であると信じてゐる。

海國日本の連嶺は、他日飛行機上から瞰下する折があれば知らぬこと、今日までは信濃の中央、松本市の東部なぞの山々から眺めやるのが大觀をおさめ得る最も好適な場所であらう。「たて廻はす雪の高根の銀屛風、なかに墨繪の松本の里」といふ歌が何人の作であるか、かつて少年時代に松本市の古老からきかされた事を覺えてゐるが、德川期の或る時代の人の即興賞景をうたひだしたものであらう。そしてこれはおそらく今日の所謂日本アルプスなるものが、その名に於て呼ばれざる時代に、その雪の高峯として、一望に美的鑑賞眼にはいつた最初の表現であらうと思はるゝ。この賞景は、そして、松本市の東部の山山から、眼下に松本市を見おろして、更にその背景をなす飛驒山脈一體を眺めやつて、詠じ出したものであらう。

けれど、能登の海上からの眺望は、この連嶺を眞正面に眺めやるとか、或は多少でも俯瞰するとかいふのではなく、遠く一種の島山の如くに仰ぎ見る大景である。我日本の中央を横斷する臀骨を一望に仰視する壯觀である。日本を暫くでも離れて遠い國へ行つてゐるものが、若し日本全體を一の輿圖として、夢の中に思ひ浮べるものがありとすれば、それは必ず、紺青の夜の海に銀灰色をなして浮び上る島山の姿であらう。そしてその連山の麓には、同じく銀波の寄せて碎くる遠い音を耳にするであらう。――我々が能登の海から仰ぎ見る日本アルプスの連嶺は、まさにこの夢裡に浮ぶ日本そのものゝ如き大景である。

佛蘭西の方面から見たアルプ、即ちドオフイネの奥に、半天を劃する如く聳え立つベルドオヌの美觀は、終生忘ることの出來ないなつかしいものである。私はこの美觀を仰ぎながら二回の夏休みを送つたイゼエル河の岸の、グルノオブル市の爽やかな夏を今も常に思ひいだす。

ベルドオヌの美しさは、全く見ざる人には想像が出來ぬであらう。アルプ・フランセエは瑞西の首都ベルヌの市廳の前から眺めやる如き、連山の頂の並立ではない。殆ど全身を臆するところはなく人に示してゐながら、しかも孤立した高山の寂しい姿ではない。無限の深さと、無限の連續とを横には示しながら、同時に空際から地上にいたるまで、縱面の立體美を展開しておしむところがない。

朝日を受けて、瑞西の連嶺は恭しくも微笑する。艷冶たる風貌である。スタンダアルはこの連嶺を女性らしいと考へ、伊太利に入つて初めて、男性アルプを見たといふのであるが、實際、山嶺の雄姿を示すのはこのベルドオヌである。純白の雪冠をいたゞいた美女の氣高さと優しさ、永久處女の美と魅力、ちようど、十四世紀以後の、即ちルネエサンス期の聖母像の姿態に、我々は一種のコケットリイを見出すが如きものである。

連綠の野がこの山嶺の麓につゞいてゐる。しかしそれは大方白楊の林である。その間をうねりうねつて、イゼエルの河が流れ、この河の岸には、果しなくコクリコの眞紅の花が咲きつゞいてゐる。燕の群の飛來することの多いのも、ニクドオフイネの野に於けるが如きを私は見たことがない。無數の魚鱗の流動する如く、一群また一群と、飜揚に、迅急に、ベルドオヌの全面を掠めるやうにして、白楊の森の上から、イゼエル河の流れを越えて、襲ふが如くグルノオブル市の上へと密集し、散飛する。あはたゞしき空中飛翔者の生の營みのこれほど鮮かな、生々した姿は他處では多く見られない。この羽族の飛來に占領せらるゝ空中へ、むせかへる如き香氣を散じてたちのぼるのは、全市を埋むるばかりに繁茂して、咲きいづる菩提樹の花である。この香氣は燕群の羽叩きにつれて、空中に動波をおこし、いかなる屋根裏に午睡をむさぼる人々の窓にまで侵入せずにはおかないのである。

大きな鏡面へ呼吸をふきかけた如く、もしこの鏡面が一時曇りを生ずる如く、その呼吸の曇は、菩提樹の香氣と、燕群の飛來とであり、そしてその巨大な鏡面は、つまりグルノオブル市を遠から瞰下するベルドオヌの眞白い連嶺である。

八月の末日に、殆ど年例の如く、この連嶺は、一日か二日か全く雲

に包まれて姿を見せず、溫度は俄に降下して、外套を求めたいほどのことがある。これは夏のたゞ中に示される一種の警告である。山地の慌しき秋の近よりを地上の人々へ告知するのである。常に微笑をたたへてゐたベルドオヌは、俄かに雪の新装を改めて、老ひたる處女の氣むづかしさを示すやうになるのである。

　月夜のベルドオヌの遠望は、決して輝く日の午前に見るが如き、艶容を見とめることは出來ない。暗默として、中央まで埋め立つその雄姿は、喪に服したる聖女の威權をたもつて、おのづと頭を下げずにはゐられない。

　モンブランの遠望は、リヨン市のフウルヴイエルの丘の上から、遥かに遠く、まつたくかすかな物影の如く眺めるのでは、物たらない。瑞西の湖畔から見るのは、あまりに鮮かで、紺紫色の空と對照した純白色はまた凄いほどの美しさだ。久しく眺めやつてゐるに耐えられないくらゐである。オオト・サボアの山の上から、東南の山あひに髣髴しく眺むる姿が、私には最も忘られぬものである。これもまた或一夏の休みを送つたサボアの谿谷にての忘られぬ思ひ出である。

　樅や杉の深いサボアの谿合ひでは、日曜日の休息を何人でも山上でとることにしてゐる。それ等の深林を出抜けて、草山まで登ると、放牧の羊や牛が、頸につけた鈴を鳴らしながら、草を嚙んでゐる。羊の群はまつたく夏日の空にむく／＼湧き出づる雲のやうに、下から仰ぐ山の中腹に浮動してゐる。番犬がそれらの群の前後左右を吠えながらかけまわつてゐる。その中に立つ牧人等は、これも中世紀以來の傳說的な姿をしてゐるのである。

　草山の奥には、佛蘭西と瑞西との國境を劃する石標が寂しく立つてゐるばかり、此處にはやかましい關稅吏の姿も見られない。從つて、山越えに煙草その他の密輸入を企てるものが時々現はれると村人は話してゐた。

　その草山から不圖東南の空を眺めやると、重なり合ふてゐる山々の奥に、際やかな眞白い連峯が屹然として、群を拔いて立つてゐるのを見つけた。白扇をさかしまにしたといふのではない。まさしく白扇を開いたやうな形にひろがつて、空際に立つて人の注視をまともに受くる覺悟をしてゐるやうな、我から呼びかけてその存在を知らしめてゐるからである。

　實際、この山は思はぬ方面に姿を現はして、常に人の注意を呼んでゐたにも關らず、その山の美觀は、長く長く地上の人々の意識には映じなかつた。ひとりこの山に限らない、山岳の美なぞは近代人の發見である。アメリカの新大陸の發見なぞよりは遥かに遲れて後の發見である。

　天際に開く白芙蓉の巨大な輝きは、午後の日が次第に傾くにつれてふるへるごとく、その花の色を徐々に變じて行くのである。微かな紅は、薄紫に變り行き、やがてまた餘山の頂きに閃めく落光を、一身に反映集注せしめつゝ、更に淡紅色に甦り、この色を最後までとゞめて、彼女ひとりのみが、他の山々の暗灰色にひれ伏す夕闇の上に、消えずに殘つてゐるのである。

　この夕闇に消え殘るモンブランの淡紅色をいつまでも倦かずに眺め

入つてゐる人は、おそらくサボアの山中の牧人ぐらゐなものであらう。下の方の谿合の村々では、コック・ゴオロワを尖頂につけた古寺の鐘樓から休息を告げるアンヂュリュスの鐘の音は最早や先刻から鳴りひゞいてゐる。牧獸を呼ぶ角笛のひゞきも、山の中腹から谺して來る。この傳說の角笛のひゞきは下の暗い森の中へと山上の人を追ひこまずには置かないのである。森の下からは、更に谿川の響が目醒めたものゝ如く全山に鳴り渡り、溪流の岸邊の農家からは火光がきらめき、村の中央にある噴泉を汲まんとて、集つて來るサボア少女等の賑やかな笑ひ聲も聞こえて來るのである。

私は日本アルプス連峯のなかの穗高嶽をのみいつも眺むるやうな土地に生れて、幼年時から西方に輝くこの雪白の山を仰ぎ見ない日とてはなかつたのである。若しこの一列の峻峰が西方を劃してゐなかつたならば、まつたく取りえのない落莫たる土地であつたであらうと今も思つてゐる。

けれど今でこそ穗高嶽といへば何人一人、少なくも名を知らぬ人もないこの名峯も、私の少年時なぞは、何といふ山なのやらそれこそ何人一人知つてゐる人もなかつた。村の田溝の小徑を小學校へ通つて行く時、秋の日の晴れた輝しい朝であつたと覺えてゐるが、先きに立つて行く學校の先生に、後方から呼びかけて、あの美しい山は何といふ山と訊ねたことを思ひ出す。すると、その先生は、ちよつとその方へ眼をやりはしたが、「名なんか無えずら」といつて、それきり何も敎えて吳れなかつた寂しさが、今でも時々思ひ出される。

朝、西方の雨戸を開けると、地上の何よりも眞先きに光りを受けて、その劒の如く屹立つてゐる頂が胸を射るやうに輝いてゐるあの山、巨きな水晶の結晶體を見るやうなあの山々、おそらく、あの山の眺めらるゝ限りの里に人となつた者ならば何人でも、この幼時からの印象は終生忘られないものであらう。

何人一人名も敎えてくれないので、せめて何事でも知つてゐる學校の先生にも訊いたらと思つたのであらう。併し學校で敎えない事を訊いては惡いのかと思ふやうなはにかみもないではなかつたらうが、ちようど好い機會とでも思つたのか、私は田の間の小徑で先生へ訊いて見たのであつたらう。しかもその頃、學校では信濃全國の地圖を黑板へかゝげて、山々や河の名やその處在を敎えてゐた事もあつたやうに覺えてゐる。

けれど、眼前に見る美しい山は、つひに名のない山にすぎないのかと思ふと、一種の寂しさが湧いた。それに勿論先生が敎えてくれない寂しさはいふまでもなかつた。つひ此頃までも、私はその幼年時から眺めてゐた美しい山と、著名な穗高嶽とが同じものであるといふ事に氣づかずにゐた。その迂遠さを自分で笑ふとともに、その當時の幼心の寂しさは今でも忘れられぬ。

鐵壁の如くに飛驒境を固めてゐる連嶺の中に、たゞそれのみが高く聳えてゐる穗高の群峯は、颯爽たる姿といふよりは、峻險そのものゝ如くになつて屹立してゐる。別に群山を瞰下してゐるとは感ぜられないが、一段高き處に、一段遠き處に、離れて立つてゐるといふ感じである。モンブランの如きなつかしさ、ユングフラウの如きにほやかさ、

ペルドオヌの如き妖艶さではなく、孤高群立の峻嚴さである。それだけ穗高を仰ぎ見るには、眞夏の日よりも、寧ろ高原地の秋の澄み切つた、峻烈な氣候の始まらんとする頃に於てするのが自然である。

地上には霜が白く、山頂には新らしき雪冠が加はへらるゝ頃、桔梗が原の一端に立つて仰ぎ見る穗高の氣高さは、全身にしみ渡る精氣のほとばしりである。ダヴインチの天才の閃きでなくして、ミケランヂエロの精英の噴出である。

再遊長崎

佐藤春夫

東京より車窓の一日寢台の二夜、一直線に長崎に入る。おぼろに見覺えある町は朝日に照されてゐる。十五年曾遊の地である。宿に落ちつくか落ちつかぬうちに、渡邊庫輔より電話。入浴してゐると、その間に同君が一友人とともに來訪。市中を見物させてやらうといふ。

十五年前の記憶を、僕は思ひ浮ぶがままに語る——冬の朝まだき、車にも乘らずに輕いカバン一つぶらさげて停車場より出て、少し眞直ぐに歩き、間もなく左に折れ、堀割に沿うて行くうちに支那風の石の反橋があるのを見つけ、それを渡ると、石壘ある町幅狹き坂道。それが古風に床しい。と、右側にふと一軒の宿屋を見つけた。玄關先きの絨毯の模樣、圓卓の上に大きな瓶に花を盛つた形、また軒先に吊されて冬の朝日を浴びた白い鸚鵡——「新渡の鸚鵡不言」の風情、こころなしか打ち見たところ何となく長崎らしく、それにさほど上等らしくないのが先づ手ごろと、そこに投宿した。暮の二十七日に着いたと思ふ。宿には當時の僕と同じ年ごろの——二十二三のふたりの青年が、隣室にゐて、それが夜ふけまで勉強でもしてゐるらしい。時々、試驗々々といふやうな言葉も聞へる。宿の主人の話で後に解つたが、高級海員の受驗のために來てゐた青年たちである。朝夕は天主の寺の鐘聲が程近くひびいた。溫いつもりで來たのに、その冬はこの土地が特別に寒い冬だとかで、雪が何寸かも積つた。でも日向はさすがに溫で、障子をあけて日向ぼつこをしてゐると、裏の低い家の屋根で猫がしばしば交尾してゐた。受驗の青年たちはそれをうるさがつて、炭の片を投げては猫を追つぱらつてゐた。二週間ほどの滯在の間に、僕は知人も案内も知識もなく、ただ足にまかせてそこら中は歩いた。が何が何だか少しも知らない。旅の愁の間に長崎といふ題の長篇を六十行ほど作つたが、ものにならないでやぶいて仕舞つた。僕は島原へも行つた。天草に渡らうと思つて、しかし金がなくなつたし氣も荒

れてゐたので果さなかつた……。その時、僕が泊つた宿屋のあつた町の名？　何とか言つた。忘れてしまつた。山にごく近い町だつたが。

渡邊君は、もう一度、僕の記憶を確めて、多分それは五島町とか備後町とかいふあたりだらうと見當をつけてくれる。さう言はれると何だか、本備後町とかいつたやうに思ひ出す。渡邊君は言ふ——もし果してその邊なら、それは古い町で、長崎のうちでも昔の面影を割合に留めてゐるあたりだ。ぼるとがる人などが住んだ邊りの長崎、じやがたら文時代の長崎なのだ。一たい、長崎といふ町は海の方から開けて來たのぢやない。山の方からだから。

渡邊君はいろ〳〵說明してくれる。渡邊君は、ただ土地の人といふだけではなく、歷史的長崎の通人、いや學者といふべき人物なることは知る人ぞ知る。彼は我々の今泊つてゐるこの宿屋は高島秋帆の邸のあとだと敎へてくれる。

彼の案內で町へ出る。町のなかにある二三十級もあらうかと思へる石段。廣場。さては呉服屋雜貨店の並んだ通。みんな僕には覺えがある。昔知つてゐるだけに一層珍らしいやうな氣持だ。支那寺へ行く。そこも知つてゐた。ここの第一門（？）の高いところにある板の部分が壞れて落ちかかつてゐる。既に落ちてしまつて修繕したところもある。今落ちさうになつてゐるのは一枚の板だが、それには白木蓮と色褪せた紅の鸚哥とが粉彩されてある。あれが落ちて來たら拾つて家へ持つて歸つて額にしたらいいと思ふ。僕は首の痛くなるほどその板片を見上げてゐた。ここには美しい天上聖母像がある。小柄な人間よりもう一まはり小さいほどの大きな人形である。この女神は裸身にすると女のしるしの形が出來てゐるといふ說があるのだが、何しろ、この人形神に着がへをさせるのは重大な秘密のうちに行はれるので、好事の渡邊君も確める方法はないさうである。このお寺の住職に聞いてみるけれども、そんなものは無いやうにいふ。それでもどうも昔からさう聞いてゐるのだから、無ければならないやうな氣がするさうである。いかにも、顏も美しくまた服裝も華やかに着飾つてゐるのだから、さういふものも具はつてゐてもいいやうな氣もする。しかしそんな事はあまり氣に病んでゐると神罰可到。用愼々々。澄江堂の再遊長崎の句に

唐寺の玉卷芭蕉太りけり

とあるが、いかにも庭の隅に芭蕉はある。しかし問題にならぬほど小さい。太りけりどころではない。澄江堂のこの巧妙な句は、架空事か、でなければ、もうあまり太りすぎて代がかはつたのだらうと思へる。ここの高い方の門の下から低い門の屋根越しに見た町の景色は、そぞろに僕の繪ごころをそそる。

丸山の裏の路を通つて高島秋帆の別莊のあとを見に行く。所謂院の間である。今日の土地の人のハタ（凧のこと）を上げる日だといふので、山頂に群れてゐる人々や、晴れ渡つた空に飛んでゐる菱形のハタなどが、この見晴のいいところからよく見える。ここを下りて出櫻の街の間を行く。堀割のあるところへ出る。その橋の上から、渡邊君はそのあたりの眺めを愛してゐるといふ。さる人の話ではベニスといふところは、ちやうどこういふ場所だとの事。汚い堀割だが、汚い詩趣を僕も甚だ認める。小鳥や動物のある店を二軒ひやかして見る。

い。東京よりも一ヶ月以前早い夏だ。町のなかで一つの人力車に行き合ふ。車上の人は車夫から町の說明をしてもらつてゐる。僕同樣の旅人なのだと思つてよく見ると、同じ講演に出る高須芳次郎君だつた。ところどころで異國の水兵を見かけると思つたら、港にはどこかの軍艦が來てゐた。

宿で晝飯を食つてまた出かける。木の聯を欲しいと思つてゐるので骨董屋を步いて見たけれども見つからない。どこの店へ行つても主人が留守で何もわからぬといふ。聞けば今日どこかで大きな入札があるので、店の主人たちはみんなその方へ行かけたのだと。一軒の家で、ロココ風の少年少女がたはむれにキスしてゐる額を見つける。値段がわからない。また一軒の家では古い時計の文字板を見つける。これも値段がわからない。渡邊君が主人が歸つたころにも一度聞きに行つてくれるといふ。僕は、すつかり長崎が氣に入つて、半年ばかりこの土地で住んでみたくなつた。渡邊君もそれをすすめる。夫婦ならば、物價がやすいから、五十圓で暮せるといふ。全くいつか一冬ここで暮したいものだ。

講演の最中に、聽衆のなかに僕の顏を眺め眺め、持參の辨當をつかひ出した人があつた。芝居小屋だつたからであらうが、少々こちらで面くらつた。後で聞けば、ここは非常に遊樂の氣分に滿ちたところで芝居などの時には、初めから終りまで殆んど見物せずに舞臺を背にして酒食してゐて、時々、思ひ出したやうに義理にうしろ向きで拍手をする由。してみると辨當をつかひながらも、ともかくも僕の顏を見てゐてくれただけ敬意を表してくれたに違ひない。

夜は旗亭偕花園の主人が皆を招待してくれるといふ。それまでの間の夕方、渡邊氏の親戚の松尾氏の別莊へ苺を食べに行かうと彼が誘つてくれるままに會場から直ぐ行かける。同行の妻が苺が好きで、長崎の苺が實においしいと言つて垂涎してゐるからである。松尾氏の別莊は彥山の麓にある。青葉。潺湲たる水。それから後園の苺畑、また花園。蛙聲。團月が山に登つた。思ひがけない淸閑である。家の主は高等學校の學生といふまだ若い人で、その兄妹や從兄弟たち、幼い人たちまで加はつて寫眞をとらうといふ。斬つて新らしい李子の花、石竹の花をたくさんもらつても、それを生けたまま明日はもう別の土地へ立たなければならぬのも、慌しい用務を持つた旅のあはれの一つである。

無産階級文學の分裂と兩派の主張

組織にあらはれた『老藝』の本質

中野重治

月曜日(六月二七日)に我々(直接には鹿地と中野)はある公開討論會の席上で老藝(年老いた「勞農藝術家聯盟」)の理論的並びに組織的源泉田口憲一、林房雄兩君の見解を巨細にわたつて聞き得る光榮を有した。これはまことに得安からぬ好機會であつた。我々すべてが老藝の本質を眼のあたりに見、老藝の本質がその組織論(?)において兩理論家により口づから語られるのを深い感動を以て聞いたのであつた。こゝで私はその稀しい組織を紹介し、それに對する私の意見をごく簡單に加へて置かうと思ふ。およそ鬪爭の理論は組織の理論であり、その組織を見て我々はその組織による鬪爭の眞の性質を見ることが出來るのだから、そして特に組織の問題を摘み出して取り扱ふことは、こゝに與へられたこんなに少々の紙面のためにも至極便宜な處置であるだらうから。若し展開される敍述が問題を隅々まで明かにしないとすれば、それは私の考察の否定よりも、こゝに與へられた紙面の狹隘性よりも、幾らかむしろ、老藝の理論(?)そのものゝ曖昧性と無限の論理循環性とのためである。それにしても私は、問題の所在と、それの老藝による間違つた解決と、從つてそれが解決でなくて胡魔化しであり、階級的粉飾であり、その粉飾による露命をつなぐための頭隱して尻隱さぬ氣の毒な目論見に過ぎないことゝは、一應明かにし得ようかと考へる。

さて、

「我々は問題を具體的に進めよう」、と老藝理論家は起つて言ふ(當日の速記錄による。因みに黨とは勞働農民黨を指すのであり傍點は私自身による)。

「我々は技術者のみで組織されて居り、彼らは技術者非技術者つきまぜて組織されて居る。」

「我々は黨の指令による技術の提供以外に進んで政治鬪爭に參加する。具體的に言へば、被壓迫人民層中特に藝術家群を政治的に動員するために、黨の提唱にかゝる政治的大衆的組織體、例へば今度の檢閱

制度改正期成同盟の如きに積極的に參加する。だが彼ら（日本プロレタリア藝術聯盟）は、技術の提供を認めて藝術行動もやれば、藝術に關する一切の鬪爭の口火を切ると稱してプロ藝への大衆組織運動即ち政治行動もやる。」

「かゝる混合型を清算して統一ある運動をするためには、運動の主體がその混合型を清算しなければならない。」

　かくて我々は我々の組織の構成員をマルキシスト技術家に限り、また特に一ヶ月の候補期間を置くのである。」

「元來鬪爭にはそれ〴〵の分野があり、それに應じてそれ〴〵の鬪爭の主體（青年同盟、婦人同盟、對支非干渉同盟等々）があり、それらの主體はそれの分野で鬪爭し、それら全鬪爭の總體的鬪爭は黨に一任するのである。然るにプロ藝は、前述の如きその混合型性の故に、黨の役割を自分自身の上に押しつけるのである。」

　何とその綱領草案に「ぴつたり合致して居る」ことか。何と「具體的な問題の進め方」であることか。何と見事な現象の十把一からげ的束ね方であることか。それはそのやうな明瞭さの故に往々俗耳に入り易くさへある。（討論終結後ある人の評して「老藝と黨とのかくの如き關係はじつに明瞭だ！」と言つた言葉の意味は、新諷刺文學の提唱者林房雄君の理解からは恐らく獨立して居たことであつたらう。老藝と黨とのかくの如き關係がどんな關係であるかは後程明かになる。）

　一體彼ら老藝理論家の言ふ混合型とは何を指して言ふのであらうか？

　これに對して彼らは再び次のやうに明快に說明するのである。

「技術者と非技術者とが雜居して居ることは政治行動と藝術行動とを同一主體が同時にやることを指して言ふのである」

　即ち、鬪爭の主體の構成員の全部技術者でないことが、そしてその主體の鬪爭する鬪爭の顯現形態が二つあるひは二つ以上あることが、「運動の混合型なのである。特定の運動の特定の性質に名づけられた混合型といふ規定をば、老藝理論家は、いつの間にか人知れずこつそりと、運動の顯現形態が二つあるひは二つ以上あるといふ外觀の上にそれ自身十方遍照的にどこにでもあて嵌まる特性（どこにでもあて嵌まる特性！）の上に、そんなものゝ上に押しかぶせて了つたのである。そこでは混合型なる規定の歴史性が無殘に抹殺されて居る。そして運動の混合型とは、二つあるひは二つ以上の顯現形態を持つ運動が、それら諸形態を統一的に裏づける基本的理論を持つことなしに、それを持ち得ないまゝに、「さうしたもの」としての自分自身を押し進めなければならなかつた時代の運動、從つて二つあるひは二つ以上の運動の顯現形態が、その間に何の連絡もなく排他的にのみ考へられ、それが一つの統一ある基本的理論の具體的なあらはれであるかないか、あらねばならないかどうか、あり得るか否か、が全然考察されることなしに、二面あるひは三面を持つたまゝずる〴〵べつたりに押し進められた時代、更にそれが特定の客觀的情勢に迫られて必然であつた時代、さうした時代の運動のさうした特質に附された歴史性ある規定であることを、わが老藝理論家はてんで知らないのである。「運動のあらはれた形が二つあるから混合型だ、これを我々は清算しなければならない」と言ふ何とも無邪氣な彼らの獨斷は、實は彼らのかうした根本的無知に淵源するのである。從つて彼らは、かやうな物の見方の

清算こそが、過去の運動の「混合型清算」のための第一條件であつたこと、及び老藝理論家ならぬ我々はさうした「見方の清算」を一應なし終へて、運動混合型の實踐的清算を『具體的闘爭展開の道の上に、一歩一歩進めて居ることを全然御存知ないのである。

以上のことがまぎらし難く明かとなつた時、さすがの老藝理論家諸君も、彼らの規定が根本的に誤つて居たことを承認しないわけには行かなかつた。

かくて問題は一通り決着が着いた。今頃かうした「混合型の清算」を持ち出して、その清算實踐のために「マルキシスト技術家」を掻き集めて出來上つた老藝がどんな組織體であるか、より正確に言へばどんな組織體でもあり得ないかは、物を老藝流に考へない人々に取つてはすでに片づいた問題である。

だが問題を老藝の組織そのもの丶考察に進めよう（討論は事實またそのやうに進行した。）

林君の言葉によれば三〇數名のマルキシスト技術家の集團、我々の見る所によれば注文に應じて技術を提供する小使の溜り（この我々の命名を林君は誇りを以て受け入れた。林君の言明によれば、老藝の面々が黨の雜用を承る小使たるに甘んじ得るのは實に彼らが階級意識あるマルキシストであるためださうである）は、技術的注文に應じるかたはら、黨の提唱する檢閲制度改正期成同盟等々に參加することによつて、その點老藝諸君の所謂ブルジョア作家群よりも幾らかより積極的であらう（あらうと欲する）ことによつて、自分自身を他の藝術家群から大衆に區別しようとするのである。上からの注文に下から應じ、上から提唱された組織に下から參加することにより、換言すれば、一切の「提出された闘爭」に自分自身を一枚差し加へることによつて、彼らの所謂「プロレタリア藝術運動の特殊の任務」その公開聲明書に言ひ擧げられた「無產階級運動の闘爭目的に、最も有効且最も適應的な、而して凡ゆる左翼的運動に合流し得る、眞に階級的な、戰闘的な、鐵の如き而して柔軟性に富む組織及び指導理論の下に結成されたる藝術運動の猛起」何かの猛起であらうが何の猛起かさつぱり分らぬ）を圖らうと言ふのである。そのための闘爭の主體の組織が、「上から提出された闘爭」に自分自身を「一枚差し加へる」三〇有餘名のマルキシスト技術者の「强固な結成」なのである。

一體彼らは黨を、彼らの「わが勞働農民黨」を何と考へて居るのか？我々の政黨とは我々の意志の、民衆の意志の政治的表現ではないか？民衆の意志の政治的表現である黨が存在し闘爭しつ丶ある時、「『種蒔く人』以來」「我がプロレタリア藝術運動に寄與し來つた」文藝戰線がその機關紙となつたところの老藝が、マルキシストの一團が、「提出された闘爭」に自分自身を一枚差し加へることによつて、「燦然たる過去の歷史の上に、さらに光輝ある榮譽を加へて行く」ことは何を意味するか？さうした彼らの方向は何を意味するか？さうした闘爭（？）のための彼らの組織は何を意味するか？

自分自身進んで闘爭することをせず、黨を空非の青空に押し上げて民衆の意志の政治的表現として黨の本質を抹殺し、しかも「提出された闘爭に參加する」ことを以て自らマルキシストであると誇る張子の虎の一摑み。それは闘爭でもなければ組織でもない。それは勞農黨支

持の最後の頼みの綱にすがりついて居るみじめなぼろ切れの一塊りである。（改造七月號所載靑野季吉氏の時評に現れた勞農日勞兩黨に對する靑野式兩刀遣ひを人々は注視すべきである。そこに現れた、したり顏、忠告顏、親切ごかしを以ての批評の觀點こそ、老藝の面々をして勞農黨にすがりつかしめて居る哲學的根據である。）

上からの提出、下からの參加、黨と老藝とのマルクス的交互關係は實にかくの如く、すこし極りが惡い位明瞭なのである。

聞く所によれば「種蒔く人」以來一〇年の歲月が流れたと言ふ、一〇年の歲月は彼らエセマルキシストの假面を剝ぎ、之に「老藝」の名を冠して日に激化する階級戰線から放逐しようとするまでに至つた。かゝる組織、追隨的反動的ブロックの克服が今は明かに、わがプロレタリアート自身の問題として明かな形で浮び上らうとして居る。

然り而して、一〇年の後（その間に彼らは彼らなりに戰つて來た）、かくの如き一蓮托生的沒落を彼らに齎したものこそ、彼らの認識方法のブルジョア的誤謬であり、かゝるブルジョア的誤謬を彼らに齎したものこそ、彼ら自身の闘爭の回避、非闘爭性、彼らに闘爭回避の理由づけを許容するに至つた運動の進展そのものであつたのである。

對立の根據

佐々木孝丸

私は直截に我々勞農藝術家聯盟の理論と、彼等日本プロレタリア藝術聯盟の幹部諸君の理論との、對立の根據を示さう。

彼等に依れば「問題はブルジョア藝術は如何なる過程を過程することによつて、眞實に揚棄され得るか」である。そしてそれの「究明」が彼等をして全無產階級的政治闘爭へ合流させる。即ち「ブルジョア藝術は、それを發生せしむる社會的基礎を持ちブルジョアジーは自らそれを、階級支配の武器たらしむる以上、ブルジョア藝術に對する闘爭は藝術と云ふ狹隘なる過程に止まるを得ない。換言すれば對立物の眞實なる揚棄は、その對立を可能ならしむる社會的基礎の揚棄によつて終らなければならない。かくて、藝術の批判は、社會批判、政治批判にならなければならない。プロレタリア藝術運動が、その狹隘性を揚棄して、全無產階級的政治闘爭へ合流し得る條件は正に玆に求めなければならない」（雜誌プロレタリア藝術七月號谷一君「沒落者をして沒落せしめよ」此の見解を谷君よりももうと廻りくどく、そして赤裸々に述べてゐるものに改造六月號久板榮二郎君「プロレタリア文藝運動とは何をすることか」がある）

彼等の雜澁なマルクス主義的修辭にも係はらず、彼等の正體は、偏へにブルジョア藝術を揚棄するためにのみ全無產階級的政治鬪爭へ合流せんとするものである。彼等に取つては、無產階級の解放は、從つて資本主義社會の揚棄は「問題」ではないのであつて、只ブルジョア藝術を揚棄するためにのみ資本主義社會の揚棄が「問題」となり、そして其の手段としてのみ全無產階級的政治鬪爭への合流が彼等の藝術至上主義によつて可決されるのである。何人が之をプロレタリアートの藝術運動と言ひ得るか。無產者階級の階級利益の主張の上にではなく、單なるアンチ・ブルジョア藝術家の自己主張の運動、これは決してプロレタリアートそれ自身の藝術運動ではない。

か〻る彼等の階級性――小ブルジョア性特有の主觀主義が事毎に運動の發展を阻害する。試みに彼等の金科玉條とする藝術運動理論――彼等が杖とも柱とも賴むたつた一つの藝術運動理論である所謂「進軍ラッパ主義」なるものを取り上げてみやう。讀者は暫く此の「進軍ラッパ」の發明者、鹿地亘君の言葉に耳を借され度い。

鹿地君は言ふ「一切は歷史的使命といふ實踐的レンズに集中されねばならぬ――中略――此處に一點に集中され得可き藝術的効果とは何を指すか。現時に於いて敎化でないことは既に明らかにされてゐる。然らば政治的暴露？專制的政治勢力の壓迫の生々しい發現を把へて、此を暴露し、而も此を媒介として具體的行動へと大衆を組織することそれが藝術によつて成し得られるか、果してそれが爲し得られるか。否、斷じてそれは不可能である。若しか〻るものとして藝術を使用せんと試みるならば、暴露そのものは全く其の眞實性を消失し、間接的となり、而も最も尖端的な藝術の煽動的性質は、鈍くされ、歪められ全然無力なる、武器ならざる武器となり終るであらう。

然らば藝術といふ一つの技術が武器たり得る如何なる場合が殘されるか。藝術が持つ最も尖銳なる力は何處に發見されるか。既に繰り返し言つた如くに、それは只その最も尖端的な感動的性質にある。それは煽動である。それは行進曲である。それは進軍ラッパである。重り行く彈壓に困憊し、疲勞したる鬪士への鼓舞者であり、灼熱したる鬪爭に血を湧かしめる應援歌であり、決定的行爲への決意を固からしむる刺戟劑である――(辻馬車三月號、「如何なる觀點に立つ可きか」)

壯哉！その「意志」とその言葉の。「重り行く彈壓に困憊し、疲勞したる鬪士への鼓舞者であり、灼熱したる鬪爭に血を湧かしめる應援歌であり、決定的行爲への決意を固からしむる刺戟劑」であれ、と鹿地君は號令される。誰がそれに反對しよう。だが我々は鹿地君の此の勇ましき言葉に煽動されて胸を躍らせる前に、此の言葉の出て來た故郷を尋ね當て〻、それから再び此の言葉の內容を吟味してみねばならない。何故なら、人は惡煽動屋（デマゴグ）の出鱈目な言葉をも往々眞實なものとして受け取ることがあるから。

讀者は鹿地君の文章を讀み終ると同時に直ぐ斯う考へられたに違ひない。此の「進軍ラッパ」の故郷は物質的事實ではなくて鹿地君の「頭の中」であると。口に唯物辯證法を稱へながら、しかも鹿地君の方法は雜駁なる常識の論理學である。鹿地君自身の言葉を借りれば、「一九二七年」の物質的事實の分析から初めやうとはせずに、政治的暴露の定義を捻り廻してみたり、藝術一般を裏や表から眺め廻してみたりし

て、それで運動の具體的方策を發見し得ると考へてゐる唯物辯證法論者。斯る唯物辯證法論者であるが故に、それ故に鹿地君は重大なものを忘れてゐる。今日の日本に於ては、基本的なプロレタリアートとブルジョアジーとの對立が、專制勢力と全被壓迫層との對立によつて特色づけられてゐるといふことを。而も日本のプロレタリアートは今あらゆる被壓迫層と共同戰線を張り、プロレタリアート自身が先頭隊となつて專制勢力との抗爭を爲す可く餘儀なくされ、そして自覺的にそれをやつてゐる。此の時に於いてプロレタリヤ藝術運動の任務は「重り行く彈壓に困憊し、疲勞したる鬪士への鼓舞者であり、灼熱したる鬪爭に血を湧かしむる應援歌であり、決定的行爲への決意を固からしむる刺戟劑である」ばかりではなく、眠れる中間層を、しかも階級的立場を持たざるが故により多く藝術の下に蝟集す可く決定されてゐる中間層を叩き起さねばならぬ。例へば曾つてヘンリツク、イプセンが「人形の家」によつて歐洲に於ける婦人問題の火蓋を切つたやうに。

此の重大なことを忘れたといふこと、それ自身が問題ではない。此の重大なことを忘れるやうな彼等プロレタリア藝術聯盟の幹部諸君が問題なのである。極端な觀念的傾向——藝術に對する固定した考へ方と、公式的な政治鬪爭主義との機械的野合、これが彼等の正體なのである。從つて口やかましくしやべりながらも彼等には「重り行く彈壓に困憊し、疲勞したる鬪士への鼓舞者であり、灼熱したる鬪爭に血を湧かしむる應援歌であり、決定的行爲への決意を固からしめる刺戟劑」たり得るまでに日本の無產者藝術運動を發展せしむることも不可能であらう。如何に彼等が彼等自身の觀念論を隱蔽するために——「文化批判」と隣人であることをゴマカスために「文化批判」排撃の決議をしようとも、存在するものを隱し了することは出來ない。見よ！六月號改造所載久板榮二郎君の「プロレタリア文藝運動は何を爲すことか」の末節の「文化批判」に關する數行を。久板君によれば「文化批判」は「方向轉換の前段的要件を未だ戰ひ取らない」ことを自覺してゐるが故に「理論鬪爭こそ當面の問題であるとなして」ゐるのであつて、それは「誠に喜ばしいことである」のである。

「喜ばしい」同志に對して何故ボイコツトの決議をしたか？「文化批判」と同一視されることの苦しさの故に。何故「文化批判」と同一視される危險があるのか？同一視される根據を彼等が有つてゐるから。

要するに彼等の藝術に對する理解は骨の髓までブルジョア的であるにも拘らず、これに似而非マルクス主義の外裝を施すことによつて、彼等の小ブルジョア的革命意識を觀念的に滿足させてゐるに過ぎないそれ故にこそ彼等は、運動の任務と機能を把握し得ず、徒らに頭數だけを掻き集めることによつて强力な運動をなし得ると信じてゐるのである。其處から彼等の誤つた組織——現鬪爭段階に於て、妨害にこそなれ何等の役に立たない非階級的非鬪爭的組織——が釀し出される。

我が勞農藝術家聯盟の組織及び運動方針の詳細に就いては、聯盟パンフレツト第一輯及び文藝戰線先月號及び今月號所載の諸論文を見られたい。

ソヴェート戲曲と「空氣饅頭」

メイエルホリド座舞臺監督
ゲ・ガウズネル

一九一九年、フセワロード・メイエルホリドは自分の劇場に、ウラヂーミル・マヤコーフスキーの戲曲『ミステリヤ・ブッフ』を上演した。これによつて彼はロシア戲曲界に一新紀元を開いたのである。それまではチエーホフやトルストイやレオニード・アンドレーエフを模倣した戲曲ばかり書かれてゐた。これ等の作家の戲曲は日本に於いて充分に聞こえてゐる。此等の劇の主人公は殆んど悉べて知識階級で、大抵、椅子に坐つて人道問題に就いて論議してゐる。此うした「會話」劇が革命前までは悉べての劇場で上演されて居たのである。ところが革命が起つてから民衆の興味が變つて、舞臺の上で高尚なお上品會話をきくのが退屈になつて來た。そして嵐のやうな時代の經驗を反映した劇と時代に適應した樣式とを要求し出した。マヤコーフスキーの『ミステリヤ、ブッフ』は則ち此の種の劇で、明瞭なポスター式でグロテスク的で、嵐のやうに力學的で、テンポと動きと大膽さとに充ち滿ちてゐる。此の樣式は其の當時のロシアの實生活に適合したのである。劇の内容も革命のことや、過去との鬪ひや、當時人心を惱ましたすべての事に就いて語られてゐる。隨つてメイエルホリド劇場に於けるマヤコーフスキーの『ミステリヤ、ブッフ』の演出は素晴しい成功を收めた。この時からソヴエート戲曲の第一期、即ちポスター式、サーカス式な火のやうな宣傳劇の時代が始まつたのである。この時代に於ける優れたものとしては『ミステステリヤ、ブッフ』の外に、セルゲイ、ツレチヤーコフの『大地は逆立つ』がある。

この時代は一九二二年までつゞいた。

やがて革命の最初の嵐が鎭まつた。新經濟政策が實施された。ソヴエート、ロシアに於ける實生活の事情が變り、從つて民衆の嗜好と興味が變つた。そして初期に於ける宣傳劇は民衆を滿足させることが出來なくなり、直ちに舞臺から葬られた。しかし此れに代り得る新しい戲曲は暫くはなかつた。

其の時いはゆるソヴエート劇の「監督時代」が始まつた。

舞臺監督はクラシック作家の戲曲を現代に適合するやうに現代化し

て上演した。當時モスクワに於いては「昨日あなたは何んな芝居を見ましたか？」と訊ねる代りに、「昨日あなたは何監督のどんな演出を見ましたか？」と訊ねてゐた。同一の戯曲が四・五ヶ所の劇場で上演された。しかし何の劇場でも其の劇の內容や演出をすつかり變へて上演した。例へば、一九二三年、有名なロシア劇作家オストロフスキーの戯曲「森」をすつかり現代的に改作してメイエルホリドは上演したが、更にメイエルホリドの弟子エンゼンシユテインは、オストロフスキーの戯曲『どんな賢者にも拔けた處がある』を改作して、登場人物にポアンカレーやカーゾンやミリユウコフの身なりをさせて、このクラシツクの戯曲を政治的に時事問題化したのである。

すべて此の種の改作の結果として戯曲に對する興味が一時なくなつた。ソヴエート劇作家の手から新様式で書かれた個々の戯曲が現はれたには現はれたが、然し何人も此れに興味をもたなかつた。此の時代のソヴエート劇界に全權をふるつた舞臺監督の魅力が餘りに大きかつたのである。此は實にソヴエート戯曲界の危機であつた。此の舞臺監督の專横を挫くには極めて天才的な力強い戯曲が現はれねばれならなかつた。例へばソヴエート戯曲の第一期の最初に於ける『ミステリイ、ブッフ』の如く、ソヴエート戯曲の第二期を開始すべき天才的な戯曲で、其の當時未だハツキリ意識されなかつた公衆の希望に答へるやうな戯曲の出現を待つて初めて、監督の專横を抑へつける事が出來た。そして事實此の種の戯曲が間もなく現はれたのである。それは最近昇曙夢氏が飜譯されたボリス・ロマショーフの『空氣饅頭』であつた。

『空氣饅頭』は有名な舞臺監督の演出としてでなく、戯曲それ自身として大成功を博した處の最初の新しい戯曲であつた。事實ロシアに於ける『空氣饅頭』の成功は此れ迄に見たことのない素晴しいものであつた。其の上演期間及び上演回數から言つても、モスクワ劇壇のレコードを破つたものである。此の戯曲を上演した革命座の觀衆席は、常に滿員で、何時行つて見ても立錐の餘地すらなかつた。其の後、此の戯曲は全ソヴエート聯邦內の各劇場に於て上演され、モスクワ同様の成功を博した。此の戯曲を中心とした到る處に公衆の討論會や講演會が開催されたのもロシヤ劇壇に於ける初めての記錄であつた。作者は其時まで世の中に知られない、極めて謙虚な新聞雜誌上の劇評家であつたといふ事が、又多大の興味を惹いた。然るに『空氣饅頭』の上演後、ロマショーフの名は一躍全ロシア中に響き、ソヴエート戯曲界の第一流の作家として世間的にも文壇的にも確實に承認された。

然らば『空氣饅頭』のかゝる成功の原因は何處にあつたか？と言ふに、それには少しくソヴエートロシアの新しい社會相に就いて述べなければならぬ。即ち新經濟政策後、一九二二年より一九二四年に到る期間に於て、ロシアには新しい實生活の事情が構成されたのである。此の期間に實生活と社會的關係の新しい形式が始まり、其れにつれて新しい型の人間や新しい氣風が現れて來た。此れが所謂ニエップと名付けられる新經濟政策の實施時代であつた。此の新政策に依つてそれまで禁じられて居た個人商業を新たに許可した結果、多數の相場

師や投機商や詐欺師やペテン師などの騎士達が諸方から出て來て、それ等が黨を作り群をなしてニエップの濁つた水の中を盛んに潜つたのである。此の種の新しい惡徒の氣風は諷刺と諧謔のためには最も豐富なる材料であつた。彼等はルーブルの爲めには自分の母を賣り渡したり、或は祖母を抵當に入れたりする事を何とも思はない人々であつた。此の新しいブルジュアは以前の正直な商人社會とは何等の共通點を持たない人達で、何方かと言へば世界大戰後に於けるベルリンの「シーベル」や、パリーの「ヌオ・リシエイ」や、日本の「成金」などと同じく、悉べての人達から憎まれてゐた。ロマショーフが其の戯曲に於いて此の「ニエップ・マン」(新興ブルジュア階級)を嘲笑したと言ふ事が先づ第一に空氣饅頭の成功した主なる原因の一つであつた。觀客は戯曲中の人物の中に自分達のよく知り拔いてゐる人々を見拔いて、上演の度毎に、大聲を發して彼等の名を呼んだものである。戯曲には全篇を通じて各觀客が自分の周圍に實際見たところの生きたソヴェートの實生活が泉のやうに湧き立つてゐる。然かも此の實生活が輝かしいユーモアの鋭い發火に依つて、ハッキリと照し出されてゐる。例へば寫眞師が動いてゐる人間を撮影する時、マグネシユームを燃やして其の發火の際に、動いてゐる瞬間の人々をカメラに收めると同じやうに、『空氣頭饅』に於いてはロマショーフのマグネシユームのやうな鋭い頓智の發火によつて、ソヴェート社會の現實が其の動いてゐる儘に、不意に生々と把握されてゐる。此の現實に對する忠實さと、其の模倣を許さない優れたユーモアとは公衆の間に『空氣頭饅』が成功を博した根本原因であつた。

次に藝術方面に於ける『空氣饅頭』の成功の原因は、それが新しい戯曲作法(ドラマツールギー)の要求に應じて書かれた最初のソヴェート戯曲であると言ふ點に含まれてゐる。此の新戯曲論の原理は、ソヴェート劇壇の舞臺監督時代に研究されたのであるが、それがいよいよ天才ロマショーフによつて實際に完成されたのである。メイエルホリドはオストローフスキーの『森』を改作した時、それからそれと互ひに交替して行く短い明るい、力學的な多くの場面を取り入れて、それに依つて映畫のやうに急速度のテンポを有する戯曲の新しい典型(タイプ)と新しい形式とを創造したが、ロマショーフは更に此の新しい形式に新しい內容を盛つたのである。

『空氣饅頭』の成功した第三の原因は、ロマショーフが新しいものを利用し考へ出すと同時に、ロシア諷刺戯曲の善い傳統、ゴーゴリやスホーウオ・カブイリンの傳統を復興したと言ふ事にある。ロマショーフの言葉の持つ潤澤さと明快さ、彼の豐富な語彙と輝かしい對話とは、この二人の偉大なロシア諷刺家の言葉の明快さに少しも讓らない。『空氣饅頭』に描れた多數の人物は、その時事性と現代性とにも拘らず、ゴーゴリとスホウオ・カブイリンの描いた人物の子孫であることに我々は氣附く。ロマショーフに嘲笑された惡黨は、恰もゴーゴリやスホウオ・カブイリンに嘲笑された惡黨の血つづきの孫でもあるが如くに。かくの如くしてロマショーフは、それ迄不毛の地に發芽して來たソヴェート戯曲をロシヤのクラシック戯曲の根源と結合させたのであ

る。此の點に、公衆や新聞雜誌や專門批評家から其の偉大なる價値を認められたロマショーフの偉大なる功績がある。

革命座に於ける『空氣饅頭』の演出は、メイエルホリドの高弟で、有名な舞臺監督のグリツピチに依つて指導された。主役セミョン・ラークを演じたのは有名な俳優オルロフである。彼は此の役に於いて現代的惡黨や詐欺師の素晴しい忘れる事の出來ない性格相貌を創造したと云はれてゐる。かやうにして『空氣饅頭』は現代ソヴエート生活の諷刺劇の一體系を開いたと言ふ點から言つても文藝史上不朽の名作である。

『空氣饅頭』によつて始められた諷刺劇の體系中、これに續いて有名な、また立派な戯曲はメイエルホリド座で上演されたニコライ・エルドマンの『マンダート』（拘引狀）である。作者は此の戯曲に於いて、革命の爲めに驚かされ、何ぞその周圍に起つてゐるかを理解しない或る商人一家の生活を鋭く嘲笑してゐる。戯曲中の人物は、女コックを皇后と思つたり、又は斯々の人間が斯々の家に住んでゐるといふ警察の保證を、誰でも拘引することの出來る拘引狀だと思つてゐる。そして此等の破產した商人達は改革の陰謀を企て、ソヴエート政權を顚覆しやうと試みてゐるが、其の結果は返つて彼等の皇后だと思つたのが唯の女コックであり、拘引狀が唯の保證に過ぎないと云ふことが判つて、彼等の陰謀は虻蜂取らずに終つたと云ふ筋である。

藝表座ではソアイコの戯曲『エウグラフの冒險』が上演されたが、此れは幻想的な理髮師の事を取扱つたものである。彼は現代に於いてロマンチックな情緒や理想などをしきりに捜し求めてゐるが、それが見出されないので遂に首を吊つて自殺をとげる。同じく藝術座に上演された戯曲には、ミハイル・ブルガーコフの『ゾイキンの住宅』がある。これは革命後、窮迫のどん底に陷つて、淪落の果ては自分の家を淫賣の巢窟にあてゝ口を糊してゐる元の貴族達の落ぶれた生活を描いたもので、其の中には犯罪的なモスクワの氣風がまざ／＼と暴露されてある。ザ・モスクヴオレツキー劇場にはニコライ・レルニエルの戯曲『人民委員の兄弟』が上演された。これは田舍の町へやつて來て、人民委員の兄弟だと名乘つてゐる一人の冒險家の事を書いたものである。田舍の官吏達はそれが騙(かた)りであることを察し得ずに、この惡黨を尊敬してその化けの皮が現はれるまでは、彼に金を貸したり、手厚く待遇したりしてゐる。この戯曲の主點は要するに愚昧な地方の實生活を揶揄しやうとしたものらしい。諷刺劇を專門的に演じてゐる劇場にはモスクワ寫劇座がある。其の上演目錄中大成功を見たものは、時事問題を取扱つた『ある見地からのモスクワ』で、田舍の人達がモスクワへ上京して、其處で見聞した一切のものに驚いてゐる樣子が面白お可笑しく描かれてある。

ベロツエルコーフスキイの戯曲『嵐』は、革命の年、一九一七年から一九二四年に至る國內戰時代に材を執つた戯曲の體系を開いたものである。一九二六年に此の戯曲が上演された時には、國內戰時代は既

にロシアに取つては過去の歴史となつてゐた。從つて六年前に起つた事件を取扱つて此の戯曲は歴史的戯曲と稱せられる。然し此の戯曲は事件に對する忠實さと、劇中人物のフオトグラフイツクな確實性とによつて非常な成功を收めた。國内戰時代に於ける戰爭の目擊者達は言つた『嵐』は書かれた戯曲でなく、歴史を復活した實生活そのものであると。此の戯曲はムグスプス座で上演された。此の系統に屬する戯曲の中で更に成功を見たものに、藝術座に上演されたブルガコーフの『白衞軍』と、小劇場に上演されたツリヨフネフの『リユボーウイ・ヤロワーヤ』とがある。前者は白軍のために占領され、赤軍によつて包圍されたキエフの事件を描いたもので、後者はそれと反對に赤軍のために占領され白軍のために包圍された、或る南方の町に於ける事件を取扱つたものである。

其他大成功を博した戯曲にはアレキセイ・トルストイの『皇后の陰謀』がある。これは帝政時代に材を取つた戯曲の體系を開いたものである。帝政時代の古記錄を公開したといふ事が、此の種の戯曲に大なる材料を與へた。此の傾向の戯曲の中には、まだムグスプス座で上演されたシヤポワレンコの『千八百八十一年』と、コルシユ座で上演されたアレキセイ、トルストイの『アゼフ』とを擧げなければならない。然し何と言つても今日では現代生活の中でも特に新經濟政策以後の社會相に觸れた戯曲が、例へば『空氣饅頭』のやうな作が、非常に歡迎され、また大きな成功を收めてゐる。此の種の戯曲で尙ほ興味のあるものにはグラドコフの有名な小説を脚色した『セメント』がある。最後に一言兒童劇に就いて附け加へて置くが、最近モスクワ兒童劇場で上演されて異常な注意を喚起した兒童劇には、アウスレンデルの『コーリカ・ストウピン』（昇氏譯『羽の生えた靴』）があるこれは現代ソヴエート社會の大問題となつてゐる不良少年のことをテーマに取つたもので、兒童劇中の傑作に數へられてゐる。以前は兒童劇と言へば單にお伽噺を取扱つたものに過ぎなかつたが、今では兒童劇の中にさへも現代精神が如何に深く浸潤してゐるかと云ふ事が此の戯曲によつて分る。

ソヴエート戯曲界は以上述べたやうに、其の舞臺が大きく、内容が多種多樣で、理想と意想とに富み、新形式の探究に滿ち〳〵てゐる。そして一瞬間も同じ場所に止らずに絶へず進歩を見せてゐる。ソヴエート戯曲界には、まだチエーホフと「櫻の園」とは現はれないが、旣に、其れに劣らないロマショーフと『空氣饅頭』とを持つて居る。これは世界に對するソヴエート戯曲の誇りであり、同時に又、今日戯曲の作法が如何に進歩してゐるかと言ふことを示す確實な證據である今後はロマショーフの如き新しいチエーホフやトルストイが續々として出現するであらう。（完）

世界最近の無政府主義運動

石川三四郎

一

昨年來歐米諸國の自由主義者を憤激せしめた事件が幾つもある。其多くは露のボルシエビキ政府、伊のファスシスト政府、西班牙獨裁政府等の下に殘忍なる迫害を受けてゐる、、者の犧牲である。然るに、それにも增して世界の公憤の的となつた事件が北米合衆國資本主義に依て行はれた。それは一九二〇年六月以來、米國マサチユセット州の監獄に投ぜられてゐる伊太利無政府主義鬪士サツコ及びヴアンゼツチの死刑宣告事件である。七年以來未決の儘で徒らに幽閉せられてゐた兩人は明白に無實の罪と一般に見做されるに係はらず、此七月には電氣椅子の上に据へられるであらう、と言ふことになつた。世界各國の自由主義者は一齊に憤激して、抗議の示威運動を開始した。佛國C・G・T・は米國勞働聯盟に打電して共抗議に加はらんことを申出で、一方アムステルダムの國際勞働組合にも打電して國際的示威運動開始を要求した。米國のI・W・W・及び無政府主義者等は總同盟罷業を提唱して、當局を威嚇してゐる。國際社會主義聯盟にても理事ド・ブルツケールの名を以てマサチユセット州政府に抗議の電報を發した。又、佛國に於ける諸種傾向の文學者、新聞記者達を網羅した多數の連署を以て一大抗議が提出された。其署名の中には、ノアイユ伯爵夫人あり、アカデミ・フランセエズのモオリス・ドネエあり、アカデミ・ゴンクウルのロニ・エーネあり、ロマン・ロオランあり、ピエル・ハンプあり、ジヨルジ・デユアメルあり、ボルシエビキのアンリ・バルビユスあり、先達而日本に來た詩人ビルドラツクあり、といふ有樣だ。日本でも先日、黑色聯盟の連中が數十人『サツコとヴアンゼツチとを解放せよ』と叫んで米國大使館に押かけ、警察隊と衝突した。其事を無知な日本字新聞は默殺したが、アドバタイザア紙は二段に亘つて大々的に報道した。

抑も此サツコ及びヴアンゼツチ事件といふのは、如何なる事件であるか。一九二〇年にアンドレア・サルセド及びロベルト・エリアといふ二人の伊太利青年が同盟罷業煽動の件を以て捕縛せられた。そして其中のサルセドは同年五月三日パアク・ロオドの裁判所の十七階から落ちて自殺した。此事件は非常な感動を社會に惹起した。そこでサツコとヴアンゼツチとはブロクトン住民の一大集會を計畫した。然るに彼等は其集會を開く前に又捕縛されて了つた。彼等が、の如き資本主義權力階級の爪牙にかゝつた歴史は是れから始まる。最初彼等は單

に其革命的行動に對して訴追を受けたのであつた。然るに間も無く、或る會社の支拂人を殺害して一萬八千弗の金を掠奪したといふ嫌疑をかけられた。豫審十三ヶ月の後、公判はデッドハムに開かれ、陪審組織の下に審理された。そして兩人は此殺人事件には全然無關係である事が證明された。ボストン駐在伊太利領事を始め、八十四人の證人は總て被告の答へを證據立てるのであつた。然るに唯一人の賣笑婦の證言が彼等の嫌疑を實質化するといふので、八十四人の證言は無視されることになつた。即ち一九二一年十一月一日死刑の宣告が下された。それは、忽ちにして一般の自由主義者の憤激を醸成した。サッコとヴアンゼッチも獄中にあつて交はる代はるハンガア・ストライキを斷行して五年間戰つて來た。ボストンの高等法院は遂に其判決の修正の爲に審理を行はねばならぬ事に至つた。是れで彼等は釋放されるものと誰も考えた。然るに其豫期は裏切られて、高等法院はデッドハム裁判所の判決を承認するに至つたのである。

二

更に一つの無政府主義鬪士に係る一事件が佛國の思想界を沸騰してゐる。それはアルゼンチンのアナキストにして西班牙のプリモ・デ・リベラに反抗運動を起したアスカソ、デュルチ、ジョベエル三人に對する佛國ブルジョア裁判所の態度である。流石のブルジョア政府も輿論の沸騰を怖れて其政治犯人を直接プリモ・デ・リベラの政府に引渡すことは出來ないで躊躇してゐたが、此程それをアルゼンチンに送ることに内定したと傳へられる。其爲に『ル・コチヂアン』紙でも、『ルウヴル』紙でも、『ル・ポピュレエル』でも、『リュマニテ』でも、何れも筆を揃へて其れを攻擊し始めた。『人權同盟』の人々も幾度か集會を催して抗議する樣になつた。果して如何に成り行くか、今日まで筆者に達した通信には未だ確定されてゐない。

三

西班牙のプリモ・デ・リベラよりも其道の先輩である雲助の樣なムソリニの國で痛ましい無智の迫害を受けつゝも、青年自由主義者を鼓舞して戰ひを續けて來たアナキストの老雄エリコ・マラテスタは先頃遂にムソの奴隷警察の捕縛する處となつたが、世界各國輿論の攻擊甚しきに堪えかねてか、到頭釋放することとなつた。併し釋放といふことも其れは社會に對する僞善な表面ばかりの胡麻化しで、實は青年アナキスト等の活動を牽制する爲に、人質として其住宅に看守して置くに過ぎない。彼が三年以來發行してゐた『Pensieroe Volonta』は昨年十一月に禁止され、其主幹チュルチは第一番に投獄され、老マラテスタが聖ギョバンニ町に建てた電機商店はファシストの爲に破壞された。マラテスタが最近瑞西の諸友に送つた手紙の中に次の樣な言葉がある。

『小生は三週間の間、腰痛の爲に病床に居た。そして今は全く回復した。併し回復しないものがある。それは何時も變はらず、嚴重な警察の看守が付いてゐる事だ。晝と言はず、夜と言はず、警察の犬は小生の門を守つてゐる。彼等は恥ちも遠慮もせず、却て率直に、斷じて見失つてはならぬ、といふ嚴命を受けてゐることを公言する。

小生が外出せぬ時は、先方から戸を叩いてやつて來て、小生の在否を探る。小生が外出すると何處へでも尾いて來る。小生の家に來訪した者、又は道で出會つたものは、必ず一度は捕へられて身分證明を取られる。云々』

彼の現狀は此書面によつて略ぼ察し得やう。佛國無政府主義新聞『種蒔く人』は先頃マラテスタ號を發行して、彼を紀念し稱揚してゐる。八十餘歲の老雄が最後まで無産者と自由との爲に身を捧げて戰ふ樣は實に、、しいものがある。歐洲大戰が勃發するや、クロポトキン始め、チエルケソフも、ルクリユも、グラアヴも、獨の軍國主義を打倒すべしと唱へたのであるが、マラテスタだけは獨り戰友達に背いて、斷然『戰爭は非なり』と主張して故國伊太利が其戰爭に參加することを防止しやうと努力した。五十餘年以來の無政府主義闘士としての彼の姿は、實に、、、、、、、、、、ムソリニの暗い影の上に照り反つて居る。

四

歐洲大戰後、世界の無政府主義は可なり多くの思想家を喪つてゐる。就中、クロポトキン、チエルケソフの如きは其最も有名な人々である。此外非マルクス主義經濟學者として有名なクリスチヤン・コルネリセンは、其大著『經濟學』の完成に沒頭して再び論壇に姿を現はさず。ジヤン・グラアヴまた昔日の奮鬪なく、恬淡無慾なポオル・ルクリユはドルドオンの溪流に閑寂を享樂して再び街頭に現はれず、僅かにルドルフ・ロツカアや、マツクス・ネツトラウや、セバスチヤン・フオールの諸老が潑溂たる知識的活動を續けてゐるに過ぎない。ルドルフ・ロツカアがレニンや露國ボルシエビキに對する峻嚴なる批判は、世界の思想家を動かすこと多大であつた。革命の麒麟兒バクニンの友として、世界各國語にバクニン傳を書いた人として、無政府主義者間に其名を知られた維納のマツクス・ネツトラウ博士の著作は、此頃漸く世に出される樣になつて來た。ネツトラウ博士の友人ルクリユは筆者が佛國在住中、其バクニン傳の原稿を筆者に寄贈せんことを告げられしが、何時、何處にて果つべきか自分にても分らない漂浪者たりし筆者は、其貴重なる原稿を所持することの大なる冒險なることを思つて謝絶した。世の變遷とは言ひながら、當時は尚ほ之を印刷し得るの可能性が存在しなかつたのに、今日は其れが漸く日の光りに浴することが出來るやうになつたのである。近時ネツトラウの著作が順次に世に出されるのを聞いて、筆者は嬉しくてならない。美音の所有者、熱烈なる雄辯家として同志間に重きをなしてゐた佛のセバスチヤン・フオールは、自ら週刊『ル・リベルテール』紙發行の責任を負ひ、目下『無政府主義アンシクロペデイ』の編纂に從事してゐる。彼は大戰中、マラテスタと同樣に非戰論を唱へ、屢々投獄の憂目をも見てゐた。老雄尚ほ往昔の意氣を保つて現時佛國との無政府主義運動に革命の元氣を吹込んで止まない。

五

是より此か歐米諸國に於ける無政府主義運動の樣を瞥見しやう。先づ佛國から始める。前記セバスチヤン、フオールが佛國無政府主義間

盟の機關紙『ル・リベルテール』に據て活動してゐる事は、同國に於ける運動の最も重要なる事實である。昔の『レ・タン・ヌウボオ』の一派は大戰終末の頃から二派に分れ、ジヤン・グラアヴは孤立の姿にて、時々リイヴレツトの様なものを單獨にて發行してゐる。クロポトキン逝いて後は、老グラアブも猿が木から落ちた觀あり、青年無政府主義者等は大てい彼を去つてチエルケソフ、コルネリセン、ピエロオ、ベルトラン、ポオル・ルクリユ等の老同志をきゆう合して一團體を造るに至つた。近時『Plus loin』といふ月刊誌を發行して宣傳に努力してゐるが、頗る高踏的であつて、實際には餘り振はない。同誌發行責任者は多分ドクトル、ピエロオであらう。ピエロオは純非政治主義であつて、ルクリユは些か個人主義的色調を帶びてゐる。是等のグルウプの外にオルレアンに於て『L'en De Hors』(局外)を發行してゐる個人主義者アルマンを中心とする一團體がある。多少色彩を異にするが併し之と類似の傾向を持つたものに、アンドレ・コロメの『L'Insurgé』やカンにて發行される『Le Semeur』の一派がある。

佛蘭西無政府主義運動は西班牙や伊太利の革命家達の亡命し來れる結果、特殊な新生面を開きつゝある。又、是等隣國の活動によつて多大の刺激を受けてゐる。カスタニア及びボノミンの行動、ペトルラの死等によつて如何ばかり深い感動を與へられたことであらう。巴里に於ける國際的團體が近時諸種の出版によつて教育、宣傳に努力してゐることは特筆すべきである。『Tempra』『Action』等の諸雑誌の外に、西班牙語、伊太利語、波蘭語等の書籍やパンフレツトを數多く發行してゐる。そして彼等は社會的の一書店を有し、廣くインタナシヨナルの聯絡を司つてゐる。

佛國に於ける西班牙亡命者等は週刊雑誌『Tiempos Nuevos』月刊『Accion』を有して猛烈な宣傳を持續してゐる。伊太利無政府主義者は些か無益な論戰に精力を浪費してゐる觀もあるが、併し隨分多くの定期出版を佛國に於て持續してゐる。例へば『Il Monito』『Cima』『Veglia』『Tempra』等の諸雑誌は即ち其最たるものである。伊、西、兩國の革命家等は佛國警察の爲に酷く妨害されるにも係はらず、各本國に於ける社會戰の犠牲となつて投獄された人々の爲に熱心な活動を續けてゐる。現在に於ては、獨裁制下に苦しむ諸國の政治的亡命者が最も多數に集まつてゐるのは佛國だと稱せられる。ウクライナの農民を結合して大活動を演じたるマフノ等も巴里に亡命してゐる。目下佛國に住居する露西亞アナルシスト等は『Dielo Trudu』といふ月刊雑誌を發行してゐる。

六

西班牙に於ては、彼の無政府主義者の殉難者フランシスコ・フエレルの郷里たるバルセロナが常に叛逆運動の中心になつてゐる。併し、惡漢プリモ・デ・ソベラの爲に『El Productor』『Vida Sindical』等の週刊雑誌は禁止され、餘す所は唯だ月刊『Revista Blanca』を存するのみとなつた。ギヨンの『Solidaridad Obrera』も亦、遂に發禁の厄に遭つた。文豪イバニエスが遂に故國を亡命するに至つたのも亦已を得ないことである。こうした暴虐なる獨裁制の爲に西班牙の諸監獄は政治犯人を以て充滿してゐるとの事である。そして其社會戰爭の犠牲

となつて目下獄中に酷遇されてゐるものが實に一萬二千餘人に達してゐるといふ。こうした暗黑社會にある西班牙勞働階級中の元氣ある人人は、自ら佛國に逃れて故鄕の改造の爲に努力してゐる。惡首相プリモ・デ・リベラを狙擊して十年間禁錮の宣告を受けたるドミンゴ・マサチ・トレントの行動は近年に現はれたる西班牙アナキスト運動中に最も光輝を放つたものである。

七

伊太利に於ける自由主義の生活が全然インポッシブルの狀態にあることは既に世間周知の通りである。昨年九月十一日羅馬に於てジノ・ルセッチが行へる、又、十月三十日にボロナに於て、アンテオ・ザンボンが行へる、ムッソリニ狙擊の件は、此ファスシストの國に最後に殘つてゐた無政府主義運動を粉碎して了つた。そして週刊の『Fode』も『Libero Accordo』も、皆禁止されて了つた。老雄マラテスタが上記の如き境遇に投ぜられたのも其結果である。惡魔の手先ファスシストの元に、六年來暗雲に閉された伊太利は是れで再び曙の……を見ることが出來ぬであらうか。否、否、………轉じて、世界の獨裁制が曉天の星の如く消失するの時も、遠くはあるまい。强權に對する自由の戰は、………………………つゝある。

八

、、、スカンヂナヴア諸國に於て、如何に革命的サンヂカリスト運動が發達しつゝあるかを。大日刊新聞『Arletura』や、其他の革命的サンヂカリスト團體の機關紙や、或は週刊『Brand』等に於て、瑞典に於ける無政府主義の思想が、、、、、、、、、、、あるか。諾威に於ても、之に伴つて思想の開拓が行はれてゐる。ブランドの記者アルバート・エンセンの飜譯によつて、クロポトキン全集が出版されるに見ても、如何に此種の思想が讀書界に歡迎されるかゞ、想察されるであらう。

獨逸に於ける無政府主義の宣傳と擁護とは、革命的勞働團體たる『獨逸自由勞働同盟』(F・A・U・D・)や、特殊な無政府主義團體たる『無政府共產主義聯盟』やエルンスト・フリイドリヒを中心とする個人主義者のグルウプに依つて行はれてゐる。但し此最後の團體は伯林に於て其機關紙『Die Schwarge Fahne』を發行してゐるが、其實際上の勢力は殆ど無といつて可いとのことである。F・A・U・Dとアナルコ・サンヂカリスト・青年聯盟との間には親密なる關係が維持せられ・同青年聯盟は其機關紙として月刊『JungeAnarchisten』を有し、F・A・U・D・の方は宏大なる出版所を有して週間『Der Syndikalist』を發行してゐる。若し夫れ無政府共產主義聯盟に至つては、『Der Frei Albiter』に依て、大いに宣傳に努めてゐる。サンヂカリストのインタナショナルたる『國際勞働者協會』の本部が伯林に置かれ、前記の『デア・シンヂカリスト』の同志をして其事務を執らしめてゐることは世間周知の事實であらう。

墺太利に於けるアナキスト運動は『Bund der herrschaftlosen Sozialisten』の活動に於て代表される。此團體に於て最も顯著な人物は週刊『Erkenntnis und Befreiung』の發行者たるピエール・ラムスであ

る。彼は同誌を維納に於て發行しながら、昨年は其著『Die Irrlehren des Marxismus』を再版した。此の主張の中心はマルクス主義に反對する無政府主義の議論にある。マックス・ネットウは維納に住居するが墺太利の無政府主義運動には直接關係しない様に見える。

九

和蘭に於けるアナキストの運動は頗る活氣に富んで居るのであるが、餘りに多派に分裂してゐる爲に、活動の割には効果が揚らない。和蘭に於けるアナキスト運動中最も著名な人物はランシンクであるが、彼を中心とする團體も少數なもので、そして他のアナキスト諸團體と必ずしも調和しない。宗教的無政府共產主義から、『Alarm』紙を中心とする個人主義者團體に至るまで、種々雜多な傾向と流派とが存在する。從つて其機關雜誌も數多く存在する。其中著名なものを擧げれば『De Vrije Socialist』『De Sindikalist』『Arbeiter De Moker』等があり、此外に國際非軍備主義協會本部の機關たる『De Wapens Neder』がある。和蘭に於けるアナキスト運動が如何に……びてゐるかが、察せられるであらう。

葡萄牙は矢張り軍閥の獨裁が宣言された國であるが、其れにも關はらず、有力なアナキスト運動が持續される。オポルトに於ける週刊『A Comuna』の外に、リスボンに於ける『O Anarquista』南方葡國に於ける『Aurora Social』等の機關紙が發行されてゐる。同國C・G・T・團體は日刊新聞『A Batalha』を有して其宣傳及び指導の機關としてゐる。アナキストの運動が……極めてゐる様が見えるであらう。

一〇

露西亞は自由主義の鬼門に當ること、伊太利と好一對である。同國に於けるアナキスト運動としては雜誌『Golos Truda』の一團が存在することを記するに止めねばならぬ。大多數のアナキスト闘士は共產黨の爲に虐殺され、殘つたものは北部、中部、南部等のソヴィエット監獄中に呻吟してゐる、との事である。本年のメエデエに際し、米國アナキスト團體の機關誌『The Road to freedom』は、サッコとヴンゼッチとを救ふ爲に米國勞働者は總同盟罷業を斷行せよとアッピールし、其れと同時に、アレキサンダー・バークマンの國際プロレタリアに訴ふるの檄を擬し、露國に於ける革命闘士の獄中に於ける殘虐なる苛責を報じてゐる。英國に於いては月刊の小雜誌『Freedom』を中心とした一團體の存在すること以外に記すべき事實は無いであらう。同誌は昨年十月にて創立滿四十年に達した。誌友たりしクロポトキンや、チエルケソフ等を喪ひたる同誌は些か寂寥の感なきを得ない。

一一

一九二三年に伯林に於て創立されたアナルコ・サンヂカリストの國際勞働者協會は昨年の大會を見合せて、特に巴里に於て事務委員會を催した。此會合に於て、佛國に於けるアナルコ・サンヂカリスト運動及び非軍備主義宣傳に關する一決定が行はれた。そして其結果として巴

里に於て月刊『La Voix du Travail』が發行される事になつた。其プロパガンダの中心人物としては、ピエル・ベナールを始め、ボルジ・シヤピロ等が數へられる。佛國に於けるアナルコ・サンヂカリストの機關紙としては、別に『Le Combat Syndicaliste』ガリオン市にて發行されてゐる。

二

以上の外、南米及びバルカン諸國に於ける盛んなアナキスト運動を記すべきであるが、紙數に限りがあれば之を略し、此に直ちに筆を轉じて些か支那及び日本に就いて書く。

革命支那の現在に於ては、共産黨と軍閥との鬪爭以外には何も無い樣に見えるが、それは外觀に過ぎない。南京の革命政府内に文教の事を總攬してゐる李石曾等は、此革命團體の一部の思想的代表を成すものと見ることが出來やう。李石曾は久しく佛國にあつてプルウドンの思想に育まれた人、歸國して北京大學の教授となつてゐたが、今度の革命軍が起されるに及んで南方國民黨に與みすることになつたのである。彼が週刊『革命』に掲げる論文は、共産派に對する理論鬪爭の最も強力なるもので、是れなかりせば、蔣介石の軍も到底民望を集めることは容易ではなかつたであらう。南京政府に於ける李石曾の地位は、日本ならば文部大臣といふ所である。彼は其思想に於て無政府主義者であるが、可なりの妥協性と粘着力とに富んで居るので、一般國民黨及び蔣介石等とも協同して大いに爲すあらんとして居る。併し問題は是からである。今の處にては共産黨一派を驅逐する爲に、思想の相違などに顧念せば、互に他を利用しやうとしてゐる觀が無いではない。此思想上の兩極端が果して何時まで一致して行けるか、其れが問題である。共産黨が一掃された後に於て、無政府主義者等の地位は危險を感ずる樣なことは無いか。李君は筆者が佛國漂浪中、遠い田舍の隠れ家まで來訪してくれた人、其他國民系革命家中には多くの有力なアナキストが飛躍してゐるが、筆者が佛國在住中に屢々來往した當時の青年達が多數である。希くは空しく軍閥の餌にならぬ樣に忍耐と周慮とを以て努力劃策せられんことを。

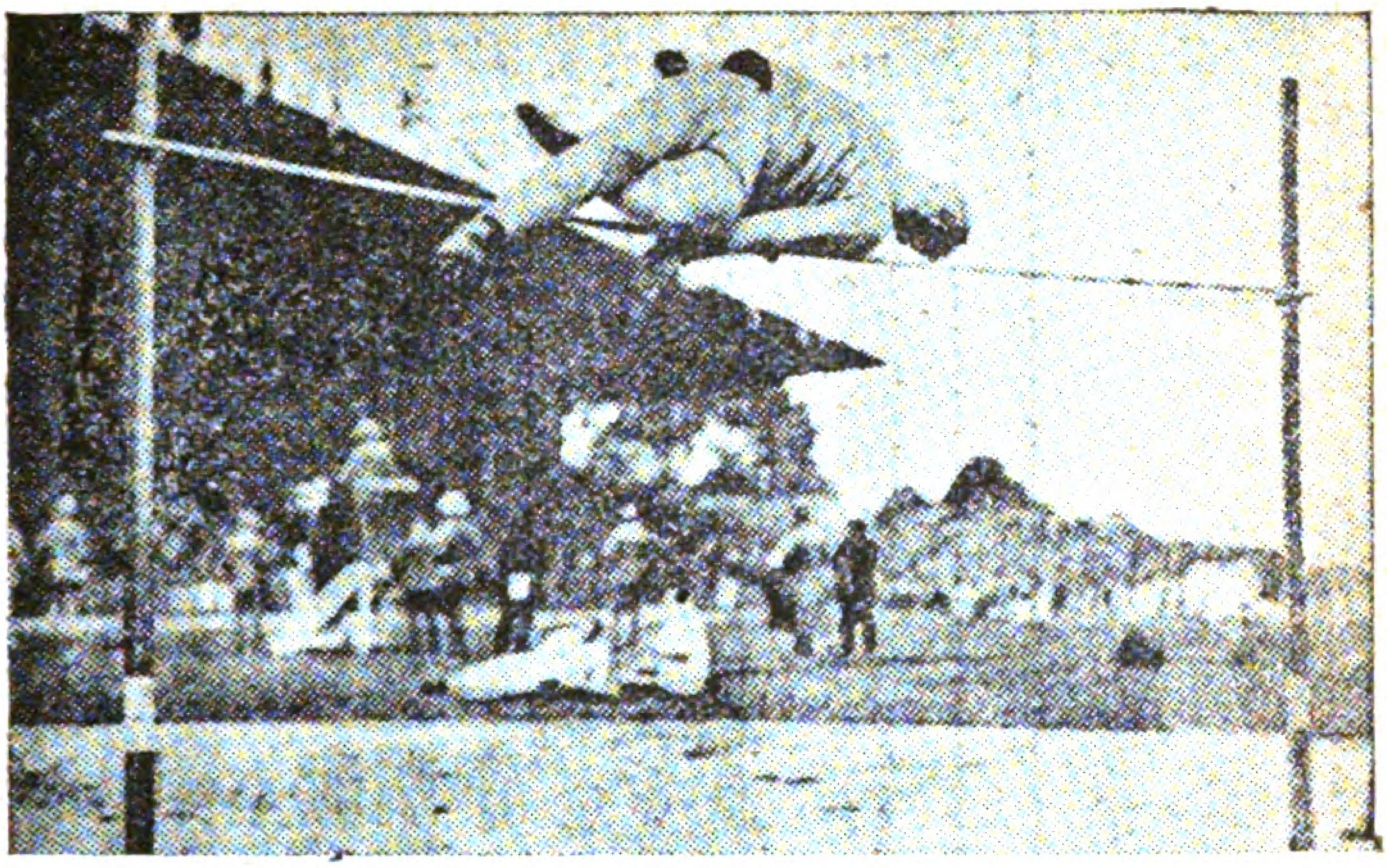
三

次は日本のアナキスト運動である。日本の事は餘りに筆者に接近してゐるのと、筆を控へねばならぬ事實が少くないから、唯だ表面の事だけを記して此稿を終る。大震災以後、日本のアナ系の運動、サンヂカリスト運動は沈衰したと、一般には見られてゐる。そうも云へやう。けれども筆者の見る所では、此反動時代に於て、……………………思はれない、浮調子の芝居氣たつぷりの行動が姿を潜めて、……………………事實を見たならば、恐らく何人と言ども……………『黑色聯盟』に屬する數十の青年アナキスト團體が、北は北海道、樺太から、南は九州、臺灣に至るまで、……………………、……………………、敵も味方も……せざるを得ないであらう。先般の銀座街頭破壊事件の如きは、……………………。此黑色聯盟と歩調を同じくする勞働

組合に全國勞働組合自由聯合會がある。總そ日本の勞働組合にして純勞働者を以て組織されたものは此一團體を措いて他には存在しない。總同盟でも評議會でも、何れも知識階級の踏臺になつてゐるに過ぎないが、此自由聯合だけは純勞働者の鞏固な團結であり、又、其主義主張も截然明白にアナルコ・サンヂカリズムを表示してゐる。日本に於て眞に勞働階級の…………は、唯此一團體あるのみである。其數から言へば、總同盟や評議會に及ばないが、それでも全國各地の諸種の組合を併せて…………………居る。黒色聯盟の人々でも、自由聯合の人達でも、聯盟員は…………、屑がない。茲に此運動の强味がある。機關紙には『黒色青年』『自由聯合』『勞働運動』『小作人』其他枚擧に遑なきほど種々な定期刊行物がある。アナ系の文藝青年によつて發行される『文藝解放』の如きも亦茲に記して置かねばならない。第一號を出したのみにて跡を絶したる研究雜誌『リベルテール』は尙ほ必ず發行を繼續するとゝのことである。…………。

日本の無政府主義社會は……、…………………………。…、……………………………。

——一九二七・七・三・——



走高跳の第一人者オスボーンの模範的跳躍振り

走高跳の勇者オスボーン

織田幹雄

世界オリムピックも明年に迫つて來て居る。

日本選手の進むべき狙ひ所は本年の世界の競技界を見れば大體見込みを立てる事が出來るであらうが其の前に現在迄の成績に依つてオリムピックに活躍すべき選手を豫想して見るのも面白い事だと思ふ。

オリムピックに於て果して此等の人が優勝するかどうかは測知る所ではないけれども現在世界の第一人である人をあげて見ると。

まづ走高跳では前回の優勝者オスボーンをまづ第一人者と見て差支へないだらう。

其他に米國にはハッカード。バーグキング等が居るけれども此等の選手が確實に一米九八以上を跳ぶかどうか疑問である。若し此等の中で確實性を有する者が有ればオスボーンとの爭覇は見物とならう!。

いづれにしても米國選手の手に歸する事は疑ない。

走巾跳に於ても走高跳と同樣米國は確實に優勝者を出すであらう!。世界レコードホールダーのハッバードが元氣であればまづ勝利は彼のものと見て間違ない。

歐洲でも七米四〇以上を跳ぶ人は多數あるけれども 到底米國の堅壘を 抜く事は出來まい。

米國インターカレッヂの五等迄が二十四呎を越えて居る實狀では。

次にホップは米國が餘り振はない關係から優勝者も豫想が出來兼ぬる最も興味有るものである。

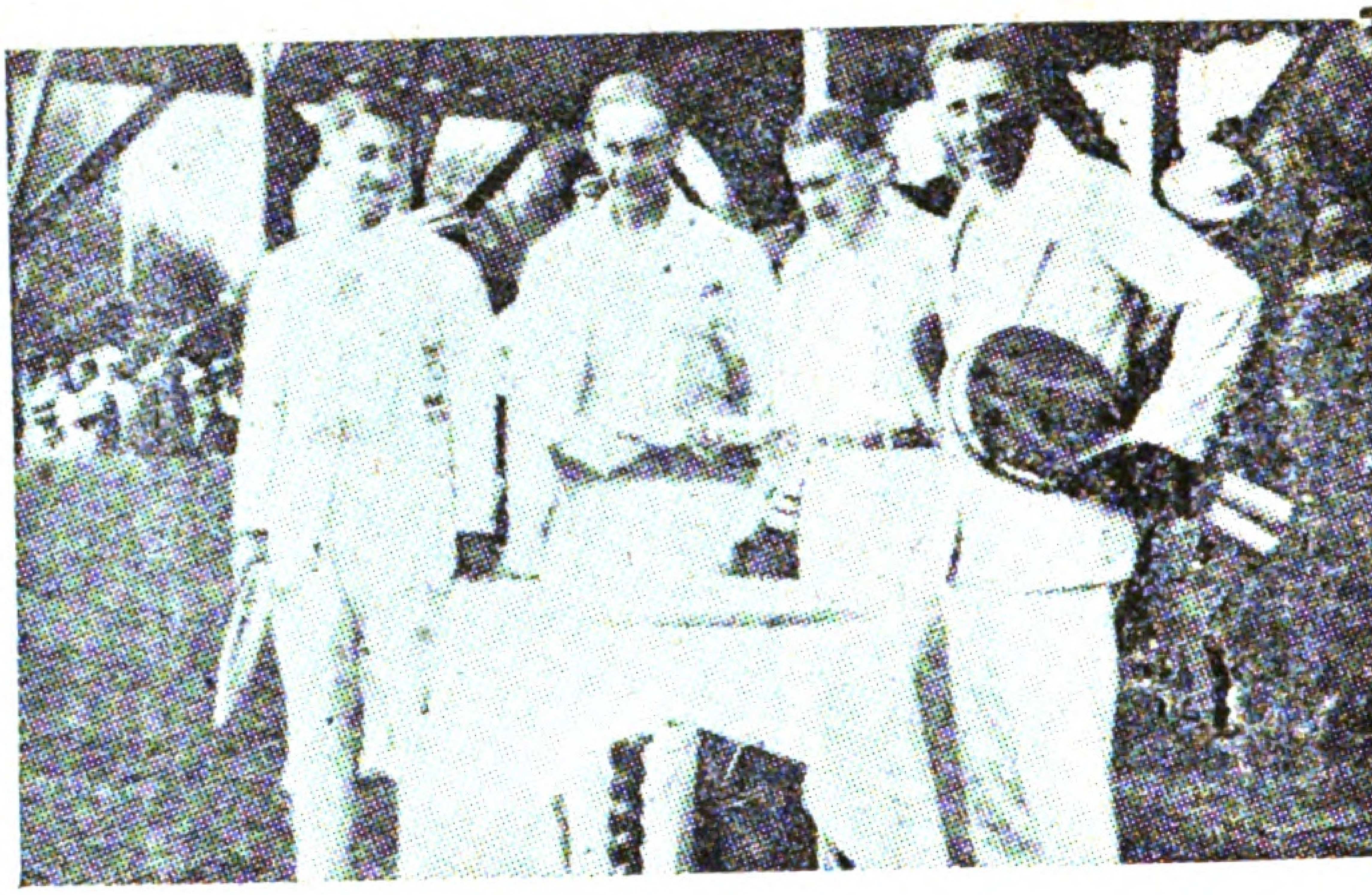
昨年の成績から見ればアルゼンチンのブルネットが確實に十五米を越えて居るから現在では彼の優勝を思はせる。然しフインランドから案外な選手が飛出さないとも限らない。前回の優勝者であり世界レコードホールダーのウインターが近頃振はないがブルネットの現在の記錄なら元氣さへ出て來れば抜き得るから再び彼が跳出すかも知れぬ。歐洲(フインランド瑞典を除く)は未だ〳〵問題にならぬ。昨年米國に十五米を跳んだ選手があるけれども確實性を有するものではないらしい。

兎に角豫想が難しいだけ日本に取つては狙ひ所かも知れぬ。

ポールではホッフが引いた爲めに再び米國のものとなる事は疑ない。米國インターカレッヂに於て十四呎を跳んで世界記錄を作つたカールが現在では第一に置かれるけれども前回優勝者のバーネスも殆んど互角の成績を現はして居るから豫測し難い。

オリムピック記錄を破り米國選手の優勝は問題あるまい。日本の現狀を世界に比較して見やうと考へるのは餘りに愚であるけれども此の跳躍技には不思議に或るチャンスが與へられて居る樣に思はれる。

我々は其のチャンスを掴る事に依つてのみ世界的に名を成す事が出來るであらう——。



向つて左よりラコスト（佛）ボロトラ（佛）リチャーヅ（米）ウイリアムス（米）

ルネ・ラコスト

福田雅之助

ラコストが昨年全米の選手權を得た事は、彼がテニス界の第一人者である事を普く世界に宣傳した。彼のテニスは澄んだ水晶の玉の様な域に達したのである。此處に到る迄の彼の苦心は、實に感激に値するものがある。彼の父は或る自動車會社の重役であるとか、母は又ルネの大なる擁護者の一人である。父の諒解と母の熱愛が彼の偉大を生んだ。彼は毎午後缺かさずダルソンヴアールに就いて、コート上に於ける全ゆるボールを、一ツ〳〵に就いて滿足に打てるまで練習する事を怠らなかつた。そして又プラクテイスボードは彼の親しい友であつた。又彼は科學的に理論的にテニスを解剖する一方自分が接したプレイヤーの特徴、缺點及如何にしてその人に對するかの解答を書したメモを持つて居るとの事である。決して彼は天才と云ふべき素質を持つたプレイヤーではない。否天才は全て努力である通り、彼のテニスの圓熟も亦彼の根強い根氣と熱心が爲した術である。

ラコストはイングリッシュ・グリップである。彼のテニスの唯一の特徴とも云ふべき事は、ストロークの結晶的正確さにある。寧ろ受動的と云ふべきであるがペイスを持つた彼のストロークは機械的正確さを持つてコートの全ゆる處にプレイスされる。彼のテニスは一ツとしてコダわつた處がなく滑かで自由である。ストロークに最も大切な全身體の調和が良く取れて居る。彼の目は鋭く彼の足は速かである。マッチに際して物に動ぜぬ修養が彼のテニスの外觀を覆ふて居るけれど、その體内に漲る血潮は潑剌たる青年の元氣と、ファイテングスピリットに燃へて居る。今行はれつゝあるウキンブルドン、將に來らんとするデヴイスカップに如何に活躍するか、世界のファンの等しく知らんとする處である。十八歳にしてフランスの選手權を二十二歳にして全米の選手權を得たラコストのテニスは世界驚異である。

野球界の世界的選手

タイ・カッブ氏

三宅大輔



一體野球界で、世界一の强チームを考へて見ろと云はれても、選抜するのは非常に困難だ。

たとへ世界第一の强チームだと考へ得られるものを作つて、其余つた人々で、又別のチームを作り、此兩者を仕合さして見て、前者の方が必ず勝つとは斷言出來ないと思ふ。それ程多くの大家がある。角力のように一人々々仕合を爲し得るものなれば、太刀山なり栃木山を他の一人々々と仕合さして、一番勝つたものを、第一人者と大體云へると思ふ、然し野球のように、チームとしての强味を、勘定に入れる技術的の勞働者は、云ひかへれば總合藝術だ、劇と同様にも考へられる、團十郎と菊五郎と、どつちが日本一だと聞かれても、何をやればどつちが日本一だとしか答へ得ないと同じに、野球で誰が一番上手だと云ふ事になると、投手なら誰、捕手なら誰と云ふより外はない、こう云ふ分業的の第一人者は人々の見方によつても異つて來るものだ。

タイ、カッブは十八才の時から世界に名を爲した、そして四十何才の今日迄少しも衰へて居ない、彼の打撃率盗壘數、安打數のレコードは、從來幾多の雜誌に發表されてあるから、私は今更云ふ必要を感じない、只今後とても、彼のレコードを破り得るものは、出まいと思つて居る。カッブとはどんな人かと、一言を以つて云へば、全身が神經とスプリングで出來て居るような人だ、そして牛のような耐久性を持つて居る。私は自分の理想にしたい人とか、好ききらいの點から云へば、エディー、コリンスの方が好きだ、(カッブをきらいではない)、然し一般的に第一人者として見る時には、カッブを選ぶのに躊躇しない、もしも私が米國球界のマネジャーの一人であつて、そして誰でも同じ給料で雇へるなら、特別な事情のない限り、私はカッブを第一に雇ふだらう、何となれば、彼は私のチームの爲めに、一番働くだらうと思へるからだ。

七大政黨立會演說傍聽記

井村秀治

　第五十二議會劈頭にあらはれた所謂三黨首妥協の醜態なる場面及びそれによつて野黨與黨一致により齎らされた十七億圓といふ莫大な豫算の鵜呑み等に――かくして當然議會を解散し一千萬新有權者の民意を問ひ、その一般國民の意嚮により眞實に公平なる政策を遂行すべきに拘らず、若槻内閣及び、それを續る既成政黨は、新興勢力擡頭の恐怖と大ブルジョア擁護のために眞に唾棄すべき野合妥協の一幕を演ずることによつて、完全に民衆の利害を蹂躙し、希望を粉碎した。かくして民衆の既成政黨に對し、從つて議會に對する憤激は最高潮に達し、議會召集を契機として一部特權階級のみにより選出されたる議會を即時解散し普選即行により民衆の意志を議會に反映せしめよと云ふスローガンの下に所謂「議會解散請願運動」なるものに、凡ゆる政府の壓迫、干渉にも拘はらず、大衆の支持を得て猛然として勃發した。

　かくして完全に民衆奴隷化の機關と化した、第五十二議會の閉會、震災手形法案の勅令發布、台灣銀行整理、大金融恐慌の襲來、第五十三臨時議會の召集、台銀救濟のための七億圓の支出可決等々によつて、民衆の利害は完膚なきまでに蹂躙され、既成政黨の不信、虛僞、術數は白晝の下にその正體を暴露するに至つたのである。

　かゝる一般的形勢のもとに、東京地方に於ける新聞、雜誌、通信の記者を以て組織されたる東京記者聯盟によつて、來年の普選實施を直前にして果して如何なる政黨が眞實に民衆の利害を代表するものであるやの具體的事實を示す目的を以て、去る六月十七日午後六時より青山會館に於て、七大政黨代表演說會が開催されたのである。

× ×

　何しろ有産無産の政黨の代表が入り亂れての言論戰であり、且つ又この四五年來嘗てない試みでもあつたため、開館前、既に會場を眼がけて押し寄せる群衆は物凄いほど多かつた。熱心な人々は既に開館前五時間位前から三々五々つめかけて來たと云ふ。

　會館の人も「こんなことは近年ないことだ」とほくくしてゐた。定刻一時間前の午后五時、早くも會館前の廣場は群衆を以て埋められた。「早く開けろ」「開けろ」といふ聲が、潮のやうにひゞいて來る。やがて定刻一時間前に、大衆の要求によつてサツト扉が開かれる。市電の女車掌會社員職工、サラリーメン自由勞働者等の眞黑な波はまたたくまに會場一杯にスシ詰めとなる。しかも、入場者はひきもきらない。延々長蛇の列は、會場より四五丁も離れた電車道にまであふれる

と云ふ盛況だ。此日所轄署では非常に狼狽し、混亂を豫想して三四百人に近い正服巡査を總動員してあご紐嚴めしく嚴重に警戒する一方場外に溢れた群衆を追ひ返すために、會場を中心とした四方八方の通路に腕のやうな繩を引つ張り廻すと云ふ有樣。

「警官横暴！」「入れさせろ」「いくら云つても駄目だ、早くかへれかへれ」「畜生！ 糊だ〳〵」互ひに罵詈する聲がまるで蜂の巣をつゝいたやうだ。刻々に溢れてゆく群衆の力に壓されて、警戒線の薄い部分がどつと崩れる。「ウアー〳〵」といふ大衆の進出、警官との衝突、會場内に於ける各坐席に殆んど一人位づつの警官の配置等々と相俟つて、場の内外の殺氣だつた光景は強に物凄いほどだ。

× ×

定刻午後六時、記者聯盟書記長木下晉市氏は滿場の喝采を浴びつゝ登壇し「普選實施を直前にして、朝野七大政黨が一堂に會し、各々自黨を代表して演說をなすが如きは、近年稀に見る所の偉觀である、蓋し何等の政黨的色彩なき記者聯盟に於てのみ、かくの如きことはよくなし得る所と確く信じてゐます。又今日は早くよりかくも多數諸君の御來會を得たことは非常に感謝に堪えません。就中、數千の群衆が滿員のため止むなく歸られたことに、かへす〴〵も遺憾である」旨を明快に述べて降壇す。

つゞいて、今日晴れの舞臺の先陣を承つて政友會の原惣兵衞氏登壇す、開口一番「我黨は」と云ふや否や「喧嘩惣兵衞」「しつかりやれ」の野次がひゞき、會場の空氣はいやに熱狂してゆく、原氏が先づ對支政策に端を發し爲政家は先づ國策樹立の前提として、支那の無量富源に注目せざるを得ざることを說き（帝國主義者と云ふものあり）進んで、田中內閣の對支出兵に言及し「日本は支那を唯一の我が植民地であると云ふ見地より出兵した」と述べるや、怒罵讒詰場を壓し「支那は植民地ではないぞ」「內政干涉を止めろ」等々一般聽衆の憤激は高調に達し、如何に對支出兵が日本民衆の反感を買つてゐるものであるかを如實に示した。原氏は尙ほも執拗に對支出兵を理論づけるために「憲政會內閣のやうに對支非干涉主義をとれば、我が植民地は刻々に危險に瀕するから之を默止する譯にはゆかぬ」と辯解するや「軍閥の走狗だまれ」「軍國主義的侵略だ」等々の辛辣なる野次飛び浮行議場のかけひきに慣れたる原氏も呆然として立つてゐるのみ。かくて氏は徹頭徹尾、聽衆の憤激の內に滿場を論じ、國民革命運動を論じ、盛んにその帝國主義的本質を發揮したが、場內の喧騷のために一語も我々にきゝとれなかつたことは、如何に田中內閣が民衆に反感を持たれてゐるかの最もよい例證ではなかつたであらうか。

かくて氏は對外問題を打切り、更につゞいて對內問題に及び、貴族院改革を論じ、既成政黨論に入り「現在は既成政黨打破の聲が高いやうだが、私はドイツやフランスの如き政狀の安定せざる國ならば兎も角、日本國家の如き政局の安定せる國にありては、既成政黨は寧ろ打破すべきに非ずして、之を改革さへすればよいと思ふ」と既成政治家一流の獨斷論を述べ「故に既成政黨打破を叫ぶ新興勢力は先づ政局を安定せしめるだけの實力を作れ」と横道に逸れるや「反動ひつこめ」「實力は出來てるんだ」「要するに手前達が邪魔なのだ」等々騷然たる內に、原氏は更に聽衆のより強い憤瀕を買ひつゝ圓々しくも機密費

問題を論じ、稅制整理に說き及び「憲政會は十七億の莫大なる豫算を以てして、僅々三千萬圓の稅制整理しかしてゐず、庶民階級の利害を何等はかりしことなし」と云ふや、再び聽衆の爆發的野次を惹き起し、「庶民階級とは何だ」「侮蔑するな」「馬鹿野郞」「憲政會も政友會も皆んな俺達の敵なんだぞ」等場内は喧々囂々、收拾すべからざる狀態に置かれ、さしもの原氏も自己の不利を察し蒼惶として壇を下る「ざまを見ろ」「惣兵衞額の油汗はどうしたッ」等の罵聲を浴びつつ、彼は完全に大ブルジョアの番犬たることを、民衆に指摘され、批難され、叱咤され、しほ〳〵として姿を消した。

× ×

原氏の後を受けて日本勞農黨幹部河野密氏が倭軀を壇上に運ぶ。日勞黨と云へば昨年十二月勞農黨が右翼ファシスト幹部の脫退により分裂した時、眞に階級的成長を遂げつゝあつた勞農大衆の勞農黨への復歸進出を防ぎとめて、大衆を永久に日和見主義の埒内に閉した有名な非戰鬪的組合幹部の蟠居する無産政黨だ。河野氏は先づ、現在の既成政黨の腐敗墮落第五十二議會に於ける三黨首のタラヒマハシ、而して、それよりもより多く民衆を壓迫し搾取した所の臨時議會に於ける大ブルジョア擁護の七億萬圓の即決可決等を曝露したまではよかつたが、一度び「既成政黨のかかる腐敗墮落從つて帝國主義支配下に於ける民衆の不平不滿を綜合して生れたものが我が日勞黨である」といふや、場内に鼎を覆したやうに、急に喧々騷々の巷と化した。「民衆の不平を代表して何時戰つたか」「日勞幹部の無能」「大衆の成長を拒むやつを葬れ」「分裂策動者！　何を吐かす」等の憤激の聲が次ぎから次へと湧いて出た、五分十分、漸くにして場内の靜まるを待ち、方向を轉じ「我が黨は、現在の如き資本の攻勢の激烈なる時に於ては、あらゆる時、あらゆる場所に於て、無産階級の大同團結をはかるため他の無産政黨との共同戰線を張りつゝあり、又將來もはらんと努力するものである」と述べるや否や、場内は再び殺氣立ち「共同戰線の破壞者、何を吐かす」「無能無力な指導者よ」「頭と頭との共同戰線を一蹴せよ」等等の猛烈なる野次瀕發し、文字通りの立往生をつゞけ乍ら、しかも勇敢にシャベリつゞけてゐるが、一向聞き取れず場内の喧騷と聽衆の河野氏への憤激にクライマックスに達したかの如くである。かくてあはれ河野氏も亦、聽衆の支持を失ひ、怒罵の中に降壇した。河野氏は——從つて又日勞黨幹部は今や大衆の成長性の故に、ます〳〵動的となり、と同時に大衆にます〳〵自己の歷史的使命的意識に眼ざめ、組合主義より脫却する日も遠くないことがつく〴〵感ぜられた。

× ×

秋和氏——從つて勞働農民黨が如何に大衆の熱意と支持を受けてゐるものかを如實に、それを示してゐなかつたか。

かくて悠々、秋和氏は壇上に進む——その時聽衆は林の如く靜まる。

秋和氏は彼獨特の語調を以て、「政治は大衆の要求を滿し、大衆の生活を保證するものでなくてはならぬ」と云ふや、「左樣だ」といふ聲に和して拍手がどつと起る「然らば大衆——勞働階級は、今何を欲してゐるか」と聽衆に訴へて、勞農黨の具體的なスローガンを揭げると、聽衆は熱狂する。「農村に於ける百姓は何を欲してゐるか、家屋稅、自轉車稅の廢止を要求してゐるのではないか」（大拍手）

「更に市民諸君は何を欲してゐるか？　物價騰貴に絕對反對を表明し、惡稅の廢止を要求してゐる。家賃の値下を要求してゐるではないか、——大拍手——（勞農黨が一番正しいと大呼するものがある。）「婦人は何を欲してゐるか？　選擧權の擴張を要求してゐる。「學生は、學園の自由を、——「更に可憐なる女工は、何を欲してゐるか？外出の自由、夜勤の廢止を要求してゐる」

秋和君の一語一句に拍手の波は寄せ返る。耳を壓する熱烈なる支持の聲、かくて辯士と聽衆は凝つて一團となり、完全なる意識的統一が行はれた。秋和君の眼は爛々と燃え、「更に全民衆は、小數軍閥、特權階級の支那出兵に對して絕對的に反對してゐる。全民衆は今日の特權階級のみの議會を信頼せず、普選即行を熱烈に要求してゐる。かゝる民衆の熱烈なる要求に對し、他の如何なる政黨も、何等の具體的な政策をたてゝない。」と云ひ、今までの辯士は、過去のことを羅列したに過ぎないが、勞農黨は、全民衆の要求を、意志を代表して、飽く迄も迫害に抗爭して來た事實を述べれば、聽衆は愈々熱狂する。かくて、財界變動、モラトリウムの影響から頻出する勞働者の馘首に對する全國的な工場代表者會議を「吾黨は積極的に支持してゐる」と云へば、聽衆は拍手を以つて應へる。更に「農民の生活權を迫害する立入禁止に反對する示威運動を鳥取縣を始め全國的に開始してゐる。又、借家人同盟を全國的に組織し、吾黨は何れも積極的に援助してゐる。」とて、沼津に於ける又龜戶に於ける居住權獲得の鬪爭の事實を述べ、又、無產階級の立場から猛然として支配階級に肉迫してゐる婦人運動への積極的支持、と、六回に亘る議會解散請願運動には、絕えず民衆の陣頭に立つて戰つてゐる。

凡そ、勞農黨以外に、かくの如く全民衆の要求を代表し、その陣頭に立つて戰つてゐる政黨があるか。と、勞農黨の本質を明にし、更に僞無產政黨たる民衆、日勞兩黨へは幾度か共動戰線を提議しても之を裏切つた事實を暴露すれば聽衆は、熱狂の極度に達す。「民衆黨幹部は、支那に行つて何をしたか？——、日勞黨の幹部は今や、大衆を指導する能力を失つてゐる。——眞に民衆の味方となつて眞實に戰ふ者は、吾勞農黨のみではないか」と大呼し、政黨の政策は、具體的に大衆の要求を代表し、從つて、全民衆の全要求が吾黨の政策となつてゐるのであるとて、黨の綱領を讀みあげて、聽衆を飽くまでも熱狂さす。

旣成政黨は、財界安定を口にすれども、現實は盡く、これを裏切つて居るとて、盛んに暴露する。そして、勞農黨の綱領、政策の具體的な說明をなし、凡ゆる項目に亘つて、聽衆は、醉へるが如く、秋和君の——從つて勞農黨の下に完全に聽衆は、組織されたかの如き觀を呈した。

最后に、「吾黨の政策は、かくの如く具體的だ。諸君の公正なる批判を仰ぐ次第である……」とて、降壇する。

×　×　×

勞農黨の秋和氏の嗄れるやうな演說の後を受けて民政黨の加藤鯛一氏が壇上に步を運んだ。彼は一般聽衆に無產政黨の演說が大歡迎を受けたのを目擊したゝめか、開口一番、「私は日勞黨勞農黨諸君には最も敬意を拂ふものである」と、御愛嬌たつぷりなことを云ふや、「デマゴ

ーグ」「嘘つけ」「三黨首妥協元兇を葬れ」等と大聲にて叱咤するものあり、場内は次第に白熱化してゆく。而して「我黨は議會政治を承認し、無産階級を水平線に引き上げ、國民を平等にする見地より八千萬國民を代表して生れた」と述べるや、聽衆の憤激を極度に捲き起し、「無産階級は金塊ではないぞ」「警官！　惡煽動屋を取締れ」と激昂の叫びは場内を壓した。かくて機を見るに敏な彼は、一轉して「從來の法律は徒らに無産者に對する取締り嚴にして資本家に對する取締が全然ない」と聽衆のお提灯を持つや「しかり〳〵」「煽動がうまいぞ」と拍手喝采を博したことは、如何に彼が聽衆の意を知るに敏なる政治家（？）たることを示した。この勢ひを得て、彼は、「今日の樞密院は、陸海軍の古手が蟠居するに過ぎない」とか「三黨首妥協の醜惡に自己の非を悟つて生れたのが民政黨である」とか云つて盛んに大向をやんやと云はせた。つゞいてお定まりの黨費公開の問題に及び「黨費の大部分は選擧費に使はれるのだ」と云ふや「そんな巨額を選擧費に使つてどうするんだ」「投票一票につき何圓で買つた？」等の針のやうな野次が飛ぶ。再び元に還つて、民政黨立黨の主旨を述べ「我々はたゞ單に無産階級のみでなく、有産無産兩方を込めた全國民の政黨だ」と云ふや再び場内は喧々騷々の巷と化し、「エライぞ」「御用學者にそつくりだ」等々流石の彼も暫し口を噤まざるを得ない破目に陷つた、かくて、彼は最後に對支問題を論じ「我々は諸君と同じく對支出兵には絶對反對だ」と自己の後暗さを隱して、聽衆に阿諛追從しつゝ降壇した。かくて彼は初めより終りまで、自己の眞の姿を隱し民衆に媚び、へつらつた、と云ふよりも、聽衆の昂然たる意氣と勢力の前に屈服した演説を續けたと云ふ方が適評であらう。

×　　×

ついで實業同志會長武藤山治氏登壇す。開會よりの緊張し切つた空氣に晒されたものの、聽衆には少しの疲勞の色さへ見えない。武藤氏は徹頭徹尾、一實業家として、一産業資本家としての彼自身の立場よりする所の反政府的演説をつゞけた。日本の資本主義が今や自らを金融資本と絶對專制政治の組合たる國家資本主義トラストの成熟にまで形成しつゝある時、産業資本家の勢力が金融資本の壓力下に如何に無力であり、如何に慘めな弱者であるかを最もよく現はした。彼は日本の現在の經濟組織が如何に、金融資本の統制下にある『國家』により獨斷され、獨占せられつゝあり、あらゆる資本が資本家の手先たる政府により制覇されつゝあるものかを一々數字をあげて説明し現在の政府により自由に流用されて居るところの、「國有鐵道の五億圓、郵便貯金の十二億圓は總て我々の負擔によつてのみ維持出來るのである。故に我々は、この政府萬能主義を倒しさへすれば、我々は總て一人殘らず資本家になれる」と云ふや、「デマゴーグ」「政府を倒して、手前がその後釜に坐りたいんだらう」「無産大衆はだまされないぞ」等々の野次により場内は急に活氣づく、武藤氏は可成興奮の態にてその温柔な瞳を神經質に瞬かせ乍ら「無産大衆とか無産階級とかいふ言葉が現在流行つてゐるが、私は元來、階級を認めない。私は有産階級とか無産階級とか云つて、階級爭鬪を激成せしめるやうな言葉を好まない。むしろ、これを善人階級、惡人階級と訂正すべきだ」と脱線するや、「正體曝露」「第二世賀川豐彦」「線香臭いぞ」「民衆はそんなおとりに引つか

からないぞ」等と場内はしばし騒然。かくて彼も又、満場の怒罵の内に、聴衆の憤激のつぶてに堪えかねて降壇した。比較的小ブルジョア的な政策を掲げてゐる實業同志會が、民衆によつて、指彈されたことは、民衆の政治的自覺の急速なる成長を物語るに充分であつた。

× ×

かくて、當日の聴衆に、非常な興味を持たれた宮崎龍介氏が社會民衆黨を代表して登壇した。演壇に登るや否や、「いよッ背の君！」「白蓮どうしたッ」「色男ッ」「民衆の裏切り者」等々の野次が盛んに飛び、暫くは演壇に立往生するの止むなきに陥つた。かくて、宮崎氏は民衆黨の政策、並に實際的行動を演説すると思ひの外、彼は先づ、對支問題をとらへ、民衆黨が支那國民革命運動の裏切者蔣介石と結んで、支那四億の民族解放運動を壓迫し日本帝國主義の露拂ひをなしたる悪むべき行爲を隠蔽し、反對に盛んに蔣介石の非階級的態度を稱揚し、同時に、支那の被抑壓民族に對し絶大なる同情と援助とを與へてゐる勞農ロシアの政策を徹底的に痛撃するや「帝國主義の番犬」「陰謀本部の特使」「民衆の最悪の敵」「民衆黨を葬れ」等々の野次續出し、司會者の制止もきかず聴衆は殺氣立ち、遂に二三の檢束者を出すと云ふ騒ぎ。宮崎氏更にひるまず、「我が民衆黨は七千萬勤勞階級の利益のため今後益々積極的に努力するであらう」と語を結ぶや「勤勞大衆を欺瞞するな」「勤勞階級の假面をはぎとれ」「勤勞階級を反動に賣るな」……聴衆の憤激は中々收まらない。私の隣りの一人は「支那問題も面白いが、しかし最も重要な民衆黨の政策をのべなかつたのはおかしい」と不平を盛んに述べ立ててゐた。宮崎氏は何故に、自黨の政策を堂々と述べなかつたか？　それは場内の空氣を推しはかり、必らずや常に糊塗逡巡、何等積極的な活動をなさざる民衆黨の指導精神並に政策が一般聴衆の反感と嘲笑を買ふことを恐れたがためではなかつたらうか？　無産政黨の名を僣稱し、勤勞大衆なる美名の下に、一千萬大衆を支配階級の反動豫備軍に編成せしめるための生きたる諸々の事實を前にして、如何に勇敢なる宮崎氏も以て大衆の審判に供するの勇氣がなかつたが爲めか？

× ×

この日の演説會の最後を飾るべく、革新黨領袖清瀬一郎氏登壇す。清瀬氏は實に巧みなるジェスチュアーを以て第五十二議會の醜悪なる場面の暴露、機密費問題、黨費問題等々を論じ立て、從つて革新黨成立の根據を、既成政黨打破、黨費公開、この行詰れる資本主義社會を變革するに漸次議會主義によりて達成せんと述ぶるや、漸く聴衆の興味を失し、席を外す者多く、中に「人道主義者」「議會主義者」等の野次を飛ばす者があつたが、場内の空氣至つて平々凡々、何れも、清瀬氏、從つて、革新黨の持つ小ブルジョア的傾向に對し、冷淡と默殺を以て迎へたことは、一般大衆が無意識的或ひは意識的に、眞に彼等のもつ所の熾烈なる要求不滿を眞に支持し、代表する所のものが、既成政黨並に小ブルジョア政黨に非ざることをハッキリ知つてゐたがためではなかつたらうか？

かくして清瀬氏は、熱心に革新黨の政綱政策等につき、一々辯じ立てたが、「笛吹けども踊らず」で、當に聴衆の一人として筆者は、厚い同情の念を禁じ得なかつた。既成政黨と無産政黨の中間にはさまつてゐ

ぼそい存在をつゞけてゐる革新黨——それは階級的對立鬪爭の激化せる現在に於て果して如何なる方向へと轉換せんとしつゝあるや？　英國の自由黨が矢張り時代の進むにつれ、次第にその本來の姿を失つて遂に支配階級の番犬に化しつゝある際、東西相比較して、その辿らんとする方向も稍々その軌を一にするものではあるまいか。

× ×

かくて午後十時十分、未曾有の大成功を以て演說會は閉ぢられた。朝野七大政黨の正體は初めて暴露され、如何なる政黨が眞に民衆のために勇敢に戰つてくれるものであるかも實にハツキリした。絕大なる感銘を受けつゝ二千の聽衆はどつと場外にあふれ出る。と不意に頭上にビラの洪水が襲ふ。

手にとつて見ると對支非干涉全國同盟の發した「張作霖を倒せ」「出兵絕對反對」のスローガンが「出兵反對週間」と書かれた橫組みの下に列擧され、それが私にはぐつと心臟をえぐるやうな强い感じを與へた。前方の群集が急にわい／＼ざわめき出した。と見ると、勇敢にビラを撒いたらしい婦人が四五人、眞白な制服を着た巡査に扼されて檢束されてゆく。とそれをとりかへさうとする群集、警官の橫暴を叫ぶ群集——騷ぎは仲々靜まらない。

空には夏の夜の星が冴え／＼と光つてゐた

一九二七、六、二五、

將來如何なる仕事が起り、又如何なる仕事が發展の餘地あるか

吳文炳

日本に將來如何なる仕事が新規に起るか、又如何なる仕事が將來發展の餘地あるかは頗る興味ある問題であるのみならず同時に極めて愼重に考へらるべき問題であらねばならぬ。今前者に屬するものとしては證券投資の民衆化を目的とする事業、後者に屬するものとしては信託事業、電氣事業の如きものが何人からも首肯せらるべき仕事であらう。今日電氣事業は重要工業の一に列し確固たる步調を以て進展しつゝあり、その所要增加固定資金は米國に於ても金融界の大部分を占むるに至つた。日本でも電燈、電力の供給業電氣鐵道業を營む會社の數は約八百足らずあり公稱資本金二十八億に達してゐる。電氣事業が日本の事業界就中工業界に重要な地位を占めてゐることは偶然ではない。

加之今日電力、電鐵、電燈事業は何れも確實な固定財產を持ち營業に付ては特權を有して居り三者共公共的性質を持つて居り其の需要は我國經濟の發達人口の增加に伴つて年々增加する性質のものである。

電氣事業は頗る巨額の固定資本を持つてゐる、殊に大規模の會社に於ては建設資金の大部分を社債並に借入金に依て支辯してゐる。斯くの如き關係の必然的結果として電氣事業の業態如何が直に株式社債の相場と密接の關係を持つことは當然であり、證券市場の問題は直接關係がある。現に電氣事業法第十六條の二は拂込資本金の二倍迄の社債を發行し得ることゝなつてゐる。蓋し電氣事業の現狀を見るに電力の需要は年と共に著しく此の供給の圓滑を期するためには大發電所の建設を要し每年數億圓の資本を投じなければならぬのに其の資金の調達が困難である。而して此儘に放置するは事業の發達を阻碍する虞れがあるので此急に應ずるための一策として以上の如き改正案が立案されたのである。

斯くの如く電氣事業の發達と證券市場とは密接の關係があり隨て證券市場の健全な發達は電氣事業促進の要素であるのに從來日本では證券市場の發達も不充分であり、民衆の證券投資に關する理解が甚だ幼稚な程度である結果、金錢を銀行に預けて運用して貰ひ其の利息を

家計に當てるといふやうな遣り方で銀行預金は全く投資物件と思はるゝにさへ至つたのである。隨て今後經濟界が發達し投資家の經濟智識が發達するに伴つて、證券投資の觀念が發達してくる。さうなると現在の定期預金や金錢信託などは或る部分迄證券投資に流出すべき運命を持つてゐるのであるが、偖て何時になつたらさう謂ふ時代が來るのか。

按ふに近時經濟界が漸次發達するに伴ひ企業の形態も著しく大規模となつた。從て企業資金の需要も増大するに至つた。然し乍ら之と同時に資本主義經濟組織の極端なる發達は投資問題に著しき復雜さと困難とを齎した結果、一般有資家は投資すべき證券の多數なるに眩惑され更にまた一般經濟事情の復雜化や株式市場の絕へざる動搖、金融界の浮沈、消長等に付て適當な判斷を下すことが出來なくなつたのである。斯くて現代は昔日と異なり所謂投資の民衆化時代ともいふべき時であるにも拘らず、世人の大部分は唯資金の安全を計るに汲々として有利に投資することを得ずにゐるか、然らざれば何等の定見もなく單純な思惑に基いて、知り乍ら危險なる投機に走つて資金を喪ふのである。

而してこの投資の複雜化と之に伴ふ困難とが實に證券投資の民衆化を目的とする事業創設の原因を成すものである。

證券の民衆化は將來必ず來るべき現象であると共に證券投資代行を在來の證券業者銀行、信託會社などの行り口と全く異なつた方法に於て行ふ事業者の出現することは最早時の問題に過ぎない。

現今米國財界新興の花形に投資信託なるものがある。其の實體を一言すれば民衆のための投資代行に盡きる。而して、その專行する處は零細なる資金を廣く一般社會に求めて大資本とし投資に伴ふ危險分散と收益の平均と加ふるに資金の安全とを圖る目的の許に活動する科學的投資代行である。斯くて一方に資金の保全を保證して投資能力の不充分なる一般投資家のための保護者たると同時に、他方に內外證券の所有と處分とに依て產業に對する間接の援助を與へ、證券の民衆化に努めるもので資本主義經濟組織の許に發生せる理想的投資機關たるに耻ぢざるものである。

然らば斯くの如き證券投資は如何なる形式に於て行はるゝや、今之を說明するに先だち投資の必然的の危險性と之が對策とに付て述べてみる。

投資が必然的に危險を伴ふものであるといふことは投資が利益を得るための一種の冒險である點から觀て當然と謂へる。而して投資に伴ふ危險としては（一）信用に關するもの（二）資金の價値の變動に依る危險（三）不可抗力に依る危險（四）經濟界の變遷に基く危險（五）市價の變動に依る危險等がある。

（１）投資に付て最も重要なことは投資の相手方並に投資物の信用如何である。卽ち證券投資に於ては發行會社の經歷、資產狀態、收益力、事業に關する經驗の厚薄、生產能率の大小、事業自らの性質、確實性の大小に從て證券の信用に差異を生じ、隨て投資の危險に大小を生ずる。而して此等信用の調査に付て投資信託は分析審査方法の合理的なる點に於て、更に又其の判斷が投資に關する專門家の協力に依て下さるゝ點に於て遙かに優れてゐる。けれども信用判定の基礎は過

去の實績を表はす數字であるから時に省略や粉飾や又欺瞞さへあり得る。隨て專門的審査に依る判定も時に失敗なきを保し難い。斯くの如き危險に對する唯一の防禦方法は危險分散の目的を以てする所謂分散投資である。

(II)資金の價値變動に基く投資の危險に付ては最近少數の識者が之を唱導するに過ぎない。

一般投資家は之に關して全く風馬牛である。

然し乍ら財界の好況、不況に伴つて貨幣價値換言すれば資金の購買力の增減を來たすことは顯著なる事實である。之に對する策としては資金の一部を貨幣價値の增加に依て好影響を受くる證券に他の一部を貨幣價値の減少に依て好影響を受くる證券に分割投下し、斯くて資金の購買力の變動に依る危險を巧みに調節する外はない。而して通貨の收縮其他財界の不況に基く貨幣價値の增加に依て好影響を受くるものは利息、優先配當の如き固定利益の附いた債券及優先株である。反之、事業熱の横溢通貨の膨張に基く貨幣價値の減少に依て好影響を受くるものは浮動的な配當の附いた普通株である。故に債券と普通株とに對して適當なる割合に於て資金を投ずることは最も賢明な策である。

(III)不可抗力に依る投資の危險に付ては天變地異、戰亂其他を想像し得る。而して此種の危險に付ては財產に對する損害保險の制度があつて補塡の途は講ぜらるゝも之とても絕對的效用あるものと謂ふことを得ない。關東震災に依る東京橫濱兩市の全滅の如き、世界戰爭に依る歐洲主要都市の經濟的混亂の如きに至つては到底保險會社の補塡の及ばざる處である。

斯くの如き危險に對する策としては資金の徹底的分散投下に依て被つた損害を他の被害なき資金に分割轉嫁して災害の程度を出來得る限り減ずるの外はない。

(IV)經濟界の變遷に基く危險の原因としては事業經營の改良、流行の變遷、新發見、新發明、法律の改正、風俗習慣の推移等をあげ得る。而して此種の危險の中には到底豫測を許さゞるものもある。斯くの如き危險に依る資金の損害を平均するには分散投下が最も適當してゐる。

(V)市價の變動に依る危險に付て述べると證券の市價は絕へず上下してゐる。此の波動の上に巧みに投資の船を操縦することは即ち投資家の手腕であつて最近財界バロメーターの研究が米國に盛んになつたのは此の市價の變動に乘じて投資の利益を大ならしめんとする目的に出づるものである。此の財界先見學の研究が果して其の效を奏するか否かは尙多少の時日を要する問題であるが、分散投下の方法に依て絕へず證券を有利に處分することに依て資金の回轉度數を大ならしめ、收益率に於ても亦比較的良好なる成績を收め得ることは確實である。

歐洲戰爭後米國の經濟狀態は一變した。歷史は常に繰返すと謂ふが、ナポレオン戰爭後百年にして起つた歐洲戰爭は米國をして往昔の英國の地位を得るに至らしめた。豐富なる資金を以て世界產業市場に臨まんとする際、同一事情の許に嘗て英國に生じた投資信託制度が此國に輸入されたことは寧ろ奇とすべきである。戰後に於ける米國經濟界の中心勢力の移動は目醒い程である。戰爭前に於ては公債、社債、株式等を發行する場合には普通極めて少數の大資本家が之を引受くるを常とした。然るに今日にては斯くの如き必要はなくなり信用ある事業な

らば、證券は發行と同時に一般民衆に依て引受を完了する有樣で米國の大企業は逐日一般民衆との關係を密接にしつゝある。

斯くの如き證券の民衆化の原因は、戰後米國の富の一方に增加すると共に、多數小資本家が續出したことゝ、他方に歐洲戰亂中自由公債の賣出に依て國民の中に廣く證券投資の觀念を扶殖せることゝである。而も此等小資本家の手に在る資金は今や證券投資會社の手を通じて續々海外に投下されつゝあつて、日本の如きへも既に手が屆いてゐる。玆で注意すべきことは、近世經濟界の發達に伴ふ會社經營の複雜化と、證券に對する調査研究が到底常人の企及し得ない程度迄進んでゐることである。更にまた證券市價の變動が證券市場に於ける所謂玄人筋の策動若くは特殊の經濟事情に基因すること多く、證券所有者にとつては完備せる機關を通じて之が確保に努めざる以上、到底損失を免るゝことを得ざる程度迄經濟界が發達したことである。

然るに投資信託は此等の總ての條件を完全に具へてゐる。即ちその根本方針として、(I)證券並に發行會社の分析調査、(II)株式投資と債券投資との併用、(III)證券投資における償還期の調整等に關して徹底的調査をしてゐる。(I)の分析調査に付てはまづ投資せんとする證券と發行會社の條件、內容、とその過去將來に付て分析と綜合とによる投資價値を算出して投資の可否を決定するので其の嚴選振りは市場に取引されてゐる數千種の證券中の八割五分を篩にかけ殘りの一割五分の中より更に選擇して六百種位の證券に投資してゐる如き、又その選擇の條件が三十餘種の標準に依つてゐる如き投資のための調査が徹底的であること、(II)投資物としての株式及債券に付ては二者の割合を如何に定むべきか其等に付ては會社の特質、當時の財界の狀態に依るは勿論であるが、大體に於て債券は株券に比べて信用の點で優れて居ること、と償還期を異にする債券に投資することに依つて資金の回轉度數の增加と有利な運用とが出來る理由から資金の約七割を債券に三割を株券に投ずるのが適當とされてゐる。而して債券と株券との市價の騰落は大體反對の傾向を持つてゐるから株式市價の低落に乘じて之を買入れその昂騰を待て債券に轉じ以て利益の實現を圖るべきである。而も此の不斷の投資物の變換は之に依て利益の實現を圖り得ると同時に事業の變遷により生ずる投資の危險を防ぐことが出來る。經濟界は常に進步や發達の階程に在るから、投資も亦之に追隨してその目的物を變換せねばならぬ。而して證券投資會社は絕へず證券市場の大勢を監視し悲觀賣込の時に證券を買入れ之を樂觀買進みの時に賣放つと共に一方內外證券市場に於ける證券の値開きを利用して所謂鞘取りを爲し以て有利にして確實なる資金の運用を爲し得る地位に在るものと謂ふことを得るのである。最後に今次の大戰が米國をして一躍債權國家たらしむると同時に他の諸外國が其の商工業の經營に付て餘裕なく結局米國に其の資金の供給を仰がざるを得ざるに至りしことを看過すべからざることである。

然らば米國に發生しつゝある投資信託の形式は如何なるものなりやと謂ふに米國に起りし數種の投資信託は大體次の如き二種の形式に分類することを得るのである。一は投資信託會社に於て新證券を發行するものであり他の一は單純なる出資の方法に依る投資有價證券の共同所有の方法に從ふものである。詳說すれば前者の場合に於ては會社は

普通株式又は社債を發行することに依て資金を蒐集するものにして隨て實質的に觀る時は、會社が所有する證券は畢竟此等の株主又は社債權者の所有物ではあるが形式的には會社が此等資金の受託者として多數株主又は社債券者の爲めに、證券投資の方法に依て之を運用する衝に當るものである。反之後者の場合に於ては組合は出資を證する爲めの信託證書を發行して斯くて蒐集したる資金を以て、證券投資を營むのである。斯くの如く前者は株式會社組織に依り、後者は組合組織に依る結果、出資者が其の信託關係より脫退する場合に於ても、前者の場合に於ては株式又は社債を自由に他人に賣渡すに反し、後者の場合に於ては時價を以て其の持分を組合に賣渡し、又は信託證書を以て其の出資に相當する時價の證券を受取る方法に依つてゐるのである。

次に斯くして得た資金を以て出來得る限り多種類の證券を買入れるのである。即ちその投資範圍は全世界に、またあらゆる種類の企業に或は證券としては國債、地方債、社債優先株普通株等總ての形式に亘つて投資に伴ふ危險の徹底的輕減を期してゐる。のみならず投資すべき證券の實質を充分に撰擇して株主、社債所持人等資金の供給者の利益の保護に努めてゐる。更に普通株に對しては頗る有利な配當を與へるので其の財源は(I)他の投資方法に依るが如き危險を冒さずして得らるゝ比較的高率の收益(II)社債の發行に依て得た資金の運用による利益(III)所有證券の處分に依る賣買益等である。

斯くの如く證券投資會社は群小有資家の手中に在る零碎な資金を蒐めて之を國內及國外の事業に投下運用するのであるから勢ひ資金の潤澤な國に先づ生ずるのは自然である。此點から觀ても最近迄世界一の債權國であつた英國が此の制度の發祥地であつたことは偶然と謂はねばならぬ。

證券投資會社を說くに就て先づ之と混同され易い信託會社との區別を明かにする必要がある。信託會社と謂ふのは所謂財界の百貨店の別名を以て呼ばるゝ財務の代行機關であつて特に米國の信託會社は一般に銀行業務、保護預り其他の受託業務、代理業務、證券引受及發行業務並に投資に關する代行業務を取扱つてゐる。

然るに證券投資會社は此の最後の投資業務を專業とするもので唯英國從來の投資信託會社中には偶右に述べたやうな他業を附隨業務として取扱ふものゝあることを認め得るが其の主要業務が證券投資業務に在ることが此の會社の特徵である。又此の新興の證券投資會社と比較さるべきものに國立及州立銀行、貯蓄銀行、保險會社並に持株會社等があるが、此等のものは證券投資會社が共同投資と所有證券の運用とを主要業務とするに比べて全く性質を異にせる他の業務を目的とし、其の行ふ處の證券の買入の如きも持株會社の場合を除いては皆剩餘資金の運用のためにするものであり、其れが本來の目的ではない。

斯くの如く證券投資會社の意義は理論上明確に定めることは出來るが唯財務會社又は發起會社と比較すると實質上確然たる限界を認めることは却々困難である。その理由は二者共株式及社債の發行に依て資金を集め之を他の企業の證券に投下し運用する點に於て全く同一だからである。併し、證券投資會社に於ては此等の投資證券より受ける配當、利息と證券の賣買に依る資金の運用益とを得ることが本來の目的

であり、努めて特殊の證券に多額の資金を投下して其の事業に對して密接の關係や重大な責任關係を生ずることを避けるのである。反之財務會社の方は投下する證券を狹い範圍に限り關係事業に對しては直接支配者の地位に立つものであり、隨て其の收益としては證券の引受發行に依る利鞘とか、關係事業の發展に依る配當の增加等が見込まれてゐる。要するに此の二者の相異する處は投資證券を通じて生ずる事業との關係が粗密に在るといふより外はない。

米國の證券投資會社は最近の設立にかゝるものが多く其の數の如きも十數個に過ぎないので資本金額の如きも二三のものを除いては小規模のものである。

尚最近に特に外國事業會社の株式、社債等に對する投資を目的とする財務會社が續出して米國の資金の海外輸出に力を盡してゐる。又從來米國内の事業特に水道とか瓦斯とかいふ如き公益事業に投資してきた多くの財務會社、持株會社、發起會社等は米國財界の發達に極めて重要な役目を果たしつゝある。

證券投資會社が斯くの如く一般の遊資を以て堅實な投資を爲すために證券の賣買をする結果內外證券市場に對して種々の有力な影響を及ぼすことは否定出來ない。而して之がためには（一）まづ證券投資會社は其の資金を利殖するために適當な證券を買入れ（二）市場の好況に依る證券市價の昂騰を利用して之を賣放ち（三）更に次で來るところの市場の不況に伴れて實價以下に低落した證券を買漁り比較的高率の配當、利息を得ると同時に賣買に依て尠からぬ利鞘を得るのである。而して證券市場に於ける大手としての證券投資會社の賣買は證券の實價と市價との開きを少くさせ、進んで市場に於ける一般證券市價の變動を調節する點に於ても重要な作用を爲すのである。彼の一般證券投資家や投機者流の行動は全く證券投資會社の反對に出るものであり、彼等は市價の昂騰に乘じて買煽り而してその低落に脅へて之を投出して資金の損失を招くのが常である。

證券投資會社は時々其の株主に對して證券に對する調査報告書を示して各自の投資に資し間接に證券市場の穩健なる發達を助長してゐる。隨て證券投資會社の證券市場に於ける一擧一動は、投資に關する好個の標準として一般社會の注目を喚起する點に於て、證券の作用並に證券市場に尠からざる貢獻を爲してゐる。又實質優良なる新會社の發行する株式の引受を爲すことに依て新事業の健全なる發展に干與する。

證券投資會社が一般小資本家より零碎な資金を蒐集して大規模の投資を爲すものであることは以上に述べた處で分る。即ち證券投資會社の強味は所謂塵積つて山となる諺その儘である。斯くて個々の力を以ては到底持つことの出來ないやうな高價な證券でも、投資信託の方法で證券投資會社の手を通じて容易に之を所有することを得るのであるから、此の制度を利用すれば有利な投資も必ずしも從來の如く一部の有力な資本家にのみ壟斷されるが如きことはない。而して此の意味に於て現代は投資の民衆化時代と謂ふことが出來る。按ふに此種の事業は軈て米國財界の中心勢力を構成すべき運命を持つばかりでなく近き將來に於て必らず我國にも輸入され利用される日があることを確信する。

地妖 ((5))

三上於菟吉
木村荘八 畫

お濟百目鬼に逢ふ事

百目鬼用人馬場壯平は、主人の屋敷中に貰つてゐる小屋の一間で、蒸し暑い夕方を、ぐつたりと考込でゐた。彼は今日は病氣と稱して勤めを休んでゐる。顔いろの惡さ、目の濁りなぞを見ると、ほんたうに病氣のやうでもあるが、實は病氣よりも、もつとひどい難儀に心を緊めつけられてゐるのだつた。

當時飛ぶ鳥も落すやうな威勢の主人の名を肩に來て、廓、辰巳、岡場所と、ところ嫌はず伸してあるく面白さに、この二年あまり夜毎存分に茶屋酒にはらわたを腐れさせて、いつか空けた大穴が、今はもう二千兩にも近かつた。去年の師走は、それでもまだ彌縫の方途もついた。だが、この七月の淸算期に臨んで、主家の帳簿尻を、今はどうシメククることもなり兼ねてゐるのだつた。

町人だとて、武家だとて、一家經濟の整理は大事だ。おまけに主人玄蕃は、左まで格式の高くない家柄からお旗奉行とまで成り上つた人間だけに、武道、商道の猛者であると同時に、怖ろしく細かしいところにまで鋭どい注意の行き渡る人物。ふだんは萬事用人にまかせツきりだが、いざといふ場合には假借のない目が、どんな細部にも用捨なく屆くのだ。

壯平は記憶してゐる。マザ／＼と記憶してゐる。此の前に彼の位置にあつた大川吉左衞門といふ男が、屋敷建て増しの節、請負業者から若干の賄賂を私したといふことが發覺すると、女房子がある身の上にも拘はらず、小屋まで主人がわざ／＼出向いての詰腹だ。その小屋がこの壯平の現に棲む家。

蒸し暑い、じつとしてゐてもネバッこい汗が、全身にベト／＼湧いて來るやうな夕方、端居して庭の黑い繁をみつめながら、壯平はゾッと背すじから水をかけられたやうな戰慄を感じた。大川吉左衞門に取つて代つた、人から出身を羨まれた自分も、やがてその二の舞ではあるまいか。まだ灯のはひらぬ、あの次の間で——そこで腹を切らされた吉左衞門が、薄闇の中から、ニタリ／＼と嗤つてゐはしまい

か。

壯平は吐息をついた。糊塗の手段はもはや盡きてゐる。どんな緣故の深い町人どもにも、この上の用金は言ひつけることが出來ぬまでになつてゐる。そこどころか、現在今日も、彼奴等の方から、かなり手きびしく返金を求めて來たところも二三軒ある位だ。

もう今日は七月十日、帳面引き合せ改めは明日の正午に迫つてゐる。勘定方の中には自分がお覺えの目出度いのに猜みを持つてゐる人間も居る筈だ。無遠慮に突込んで來るに相違ない。それが主人の耳にはいつて、あの鋭どい目で、ジロリ一瞥されたが最後だ。

——いつそ、逐電してしまはうか。獨り身を幸に、行衞をくらましてしまはうか。

だが、無賴、浪々の生活は、死よりもはげしい惱みであることを、壯平は知りすぎてゐる。玄蕃に取り入つて拾はれるまでの、あの艱難を繰り返へすことは、壯平には忍べない氣がした。おまけに昨今、人にも羨まれる程、我儘な、僭上な生活を經驗してゐる身では、困乏が一倍つらいことに思はれる。その上、逐電して見たとて、江戸に足をとゞめることは出來ない。見出され次第、倍増しの重科に宛て行はれるであらう。

せめて、懇意な辻左司馬でも、賴みになる人間なら——ところが、かやつ——かやつこそ油蟲にすぎぬ。一緒に甘味を吸ふときだけは信友だが、苦い匂ひがすこしでもすれば、何の遠慮もなく逃げ出すだらう。いや〳〵、ことに依ると、玄蕃への忠勤だてに、知らせずに濟む祕事まで密告しかねぬ奴だ。かやつ、ことさら、この頃は、何かにつけて自分を壓迫しようとする。たとへばお淸の前なぞでも、いやに旗本風を吹かせをつて！——小ッ旗本の癖に！

——お淸——

お淸の名を、壯平は胸にうかべた時、突然、フツト、目を見据へるやうにした。

窮すれば通ずといふやうな言葉は、滿更の尤もらしい出鱈目でもない。何かに依つて行き詰つた道を打開しよう、自分を救ふ手段を見出さうと焦つてゐた彼に、お淸の名は奇怪な暗示をあたへた。

玄蕃は、あの脂切つた、太々しい健康と慾望とを、五十を越して青春者よりも根強く持ちこたへてゐる玄蕃は、夫人と愛妾とを、あまりに慾情の牲にしすぎた結果、二人に煩はれて、そして今無聊になやんでゐた。玄蕃程のその道の猛者が、味の淡い腰元小姓のみで滿足してゐるはずもない。現に、いつぞやも、よき筋のものがあれば、妾がほしいといふやうなそゞろごとを言つてゐたではないか。

——お淸、お淸、お淸！

さうだ、あの女こそ、この場合、この上ない道具だ。

壯平はお淸に對して、左司馬よりも激しい戀慕を抱いてゐた。しかし彼は、身分なり男前なりが、自分に勝つてゐる左司馬と、いかに彼女を張り合つて見たところが、どつちにか落ちるものなら、向ふに落

ちるだらうといふ分別はついてゐたのである。それだけ一層執着もつのッてはゐたものの、どうせ自分のものにすることが出來ないとして見れば——ことにこのやうな危急の場合、今更、いろ戀を言つてゐるひまはないのだ。

掴み當てたのが、浮木か、藁しべか、まだわからぬ。しかし、溺れかかつた壯平には手段を選んではゐられなかつた。ツト、立ち上ると、着更へをすまし、すぐに庭づたへに、百目鬼の館の裏手にかかる。

× × × ×

どう、玄蕃を說きすゝめたか、その日の宵の口には、壯平は主人玄蕃を、もう大河端の料亭に引き出してゐた。わざと辻左司馬にも迎への使を走しらせたので、彼もすぐあとから驅けつけた。

大河に臨んだ廣間に輝やかしく涼しい銀燭をつらねさせて、正面には百目鬼玄蕃、灯かげをうつしながら滿々と流れる夜の河にこゝろよげに瞳をあそばせてゐる。

「このあたりも久しぶりじやが、相變らず涼しげな眺めだな。辻、貴公なぞ、まだ盛んな年で、大分この土地へも足繁くまゐる由だが、羨ましいよ。は、は、は。餘程よい目的でも出來たと見えるな？」

左司馬はかくせぬ微笑で、

「さう盛んにまゐるわけでもムらぬが、此の土地に美妓が多いは事實。なう、馬場。」

馬場壯平、左司馬が、何人を指して美妓といふかはよく知つてゐる。

——ふん、さもわが者でもあるやうに——が、今に見ろ、お濟は俺の傀儡になつて、貴さまを袖にするにきまつてゐるわ。相手が百目鬼では少し齒が立つまい——

「さればさ、今宵見えるお濟なぞ、まづその道のお目利の殿さまだとて瑕をお見つけにはなれまいよ。先ほどもさう申し上げたのだが——」

「ウム、その濟とやら、早う見たいものじやな。」

「もう追付けまゐるでございませう。さ、殿さま、おすごし遊ばして——」

と、めつきり艶な女あるじが、自ら酌を取つてすすめるところへ、やがてえりすぐつた藝妓どもが、だん〳〵に着到だ。

一ばん、おくれてお濟。

白い肌に紺ぽい透矢をしんなりと着て、薄茶の博多帶。すらりとした立すがたを見せてはひつて來て、謹んだ聲で挨拶をする。

「殿、これが濟で——」

と、壯平がひき合はせる。

お濟は「殿」といふ言葉が、壯平の唇から洩れたのを、かすかに耳に止めると、ハッと仰いで、キッと正面の客を見た。年配、帷子の襟の家定紋、これこそ仇敵の百目鬼かも知れぬ。

—(妖 地)—



お淸は眉根さへサツと蒼ざめさせて、さてはと見据えたのだつたが、美人の一瞥、相手はそれを媚びをふくんだ優睨みとも取つたものだ。

「ウム、聽いたにまさる美しさだな。さあ、進め、盃を取らさう。」

と、玄蕃は赤ら顏の、鋭どい目を細める。

「さ、殿があゝ仰せだ、遠慮なく頂け。」

と、壯平が傍らから。

お淸は待ちに待つた夜がとうたう來たのを知つた。胸が怒りと呪ひとに引き緊められて、戰慄が全身を走しり流れたが、彼女は急かぬ。急くにはあまりに深い憎みだ。膝をすすめて、盃をうけると、いさぎよく開ける。酒は熱鐵の熔液のやうに、ジリ〱と咽喉をこがして行くのだつた。

「御返盃——」

じつと、ながし目に見るひと目——これこそ彼女の第一の挑戰だが、相手は氣がつくはずもない。

「ウム、酌げ。」

と、玄蕃はうつとりと眺めて、

「そちはこゝで酌をしてをれ。さあ、辻、馬場、すごせ、にぎはしくやるがよい。」

やがて絃歌のこゑが湧いて、凉しげな銀扇と舞ぎぬがひるがへる。

壯平はいつものやうには醉はなかつた。彼は左司馬がお淸を玄蕃に引きつけられてしまつて不平滿々としてゐるのにも目もくれなかつた。彼には仕事がある。多情淫蕩な玄蕃を、お淸の力で今夜こゝに引き留めさせ、明日の帳面合せをうやむやの中に過してしまひたいばかりだ。明日がすぎてしまへば、もう半年の餘裕がある。そのうちには、帳簿の糊塗はどうにもなるであらう。その上、うまく玄蕃にお淸を押し付けてしまへば、その功績で、一倍覺えが目出度くなる。

彼は神速に計劃を實行しやうとした。內儀をはじめ藝者どもは、あとからあとから玄蕃の盃を充して行つた。

豪酒な玄蕃だが、壯平豫期の通り、お淸の艶色に胸を焦がしはじめたので、醉ひも倍增した。

とくと、その情勢を見すますと、壯平は、玄蕃に近づいて、何か耳うちをする。玄蕃がニタリとうなづく。

さて、これからが大役だ。

と、壯平は、計、半ば成つたのを信じつつも自分につぶやいた。鬼神のやうな玄蕃にしろ、彼を色で動かすのはまづたやすい。この土地で男まさりでメキ〱賣り出してゐるこの新參妓——この女が、うまく人形になつてくれゝばよいが——

壯平は淺ましい男ではあるが、人間の氣持が、往々、左様に動かし難いのを知つてゐる。ことさらある種の女性の氣持は、最もうごかし難いものなのを知つてゐる。更に、かうした世界には、常人の測り知られぬ、迷信的なまでに、狂信的なまでに頑な貞潔感が存在するの

を知つてゐる。結局、それは一種の受難苦だ。最も困難な立場にあるものが、その困難をしのぎ抜からうとする狂熱だ。それに對しては、いかなる手段も無効だ。

だが、いつもなら二の足を踏んで躊躇してもゐられやうが、この場合は特別だつた。どうしても、この玉をうまく使はなければ、自分の一身が破滅なのだ。どうにもしてお清を口說き落さねばならぬ。それが、自分に取つて生死のわけ目といふてもよろしい。それに相手は、高々、女だ——黃金で行かぬ場合には、どうにも方法はある。暴虐な手段さへいとはねば——

その當時は、大河の遊山ぶねの船頭に、二分つかませれば、淫らな秘密の口どめに足り、一兩つかませれば、彼等は場合によつては、、、、、、役に、、、、したものだ。

壯平は別間に立つて、お清を女中に呼んで來させた。

いそ〳〵と、何氣なく、お清はすんなりとしたすがたではいつて來る。

「まあ、すはれ。」

「あい。」

大人しく、膝をつく。

壯平は吐息をした。

——ああ、美しい女だ。こんな場合でなければ、相手が女房だとて、オメ〳〵渡すものか。

だが、仕方がない、彼はじつとお清をみつめた。

「淸、今日お連れ申した方を知つてゐるか？」

ヤラリと、明眸がきらめいたが、すぐに微笑に變つて、

「さあ——」

「わからないか？　あれが、わしの主人の百目鬼玄蕃どのだ。」

その名を、お淸は自分で言ひたくなかつたのだ——相手に言はせたかつたのだ——自分で言ふたなら、語韻のふるへに、心の秘密をさとられるかと思つたのだ。

「まあ、あの方が——」

「ウム、名高い百目鬼どのだ。で、な、淸。」

と、壯平は媚るやうにのぞき込んで、

「殿さまがな、そなたに一目で惚れ込んだのだよ。殿さまは、もうそなたを、ほかの者へは渡さぬと言はれるのだ。」

ゾツと、不思議な身震ひが——憎みと歡びとが、惡熱のやうに身うちを走しるのを感じながら、お淸は嬌笑した。

「まあ、御冗談——私なんぞを！」

「ところが、ちつとも冗談じやあないのだよ——」

と壯平は切言した。

「本當なのだ。それに、あの人と來ては、旗本仲間でも名代の性急な仁だ、一度言ひ出したからには、すぐ望みを遂げねば承知をなさらぬ方だ。で、なア、淸、まことに申し憎いのだが、何とか今夜、わしの

顔を立てゝくれまいか――」
壮平はビクついてゐた。お清から真向微塵にヤラれはしまいか。ピンと刎ねつけられはしまいか！
案外に、お清は背を釣り上げるやうなことはしなかつた。却つて、うなだれて、じつと案じうなだれるのだつた。
壮平はホッとした。これはすでに三分の望みがあるのを示す。
「な、そなたに取つても、決して為めに悪しい人ではない。わしや左司馬とは――」
と、苦笑して、
「わしや左司馬とは大分違ふ。そなたにも一生のためだ――まあ、あとはあととしてどうにも話はつく。今夜だけでも、わしの顔を立ててくれるがよい。何人にも秘密で、わしが一暇をはからう程に――」
じつと、うなだれてゐたお清は、吐息をした。
「そりやあ、私も、身分の高いお方の御贔屓をうければ、どんなにか有難いのですけれど――今、ちよいとワケがあつて、若し話がこんがらかつて、先さまに御迷惑でもかかるといけないと思ふものですから――」
「とは、また、どんな仔細で？」
と、壮平は膝をすゝめる。
お清はぐつたりと、頸を襟にさし入れて、
「ねえ、馬場さん、あなただから、何もかも恥ちもお話いたしますけれど――」
「ウム。」
「私、この土地へ出る時に、いろ〳〵世話になつた人がゐるものですから――そしてその人が、大変乱暴な人なので――ほんたうに何かにつけて、私も困つてしまつてゐるのでございますよ。」
「ほう、その客は武士か、町人か？」
ジロリと壮平は見下す。
「そんな人柄の人ならいいのでござんすが、ちよいと申し上げにくいやうな――」
「何渡世じや。火消人足、岡ッ引のたぐいでもあるのか――」
「それが船頭衆なのですよ。」
「ふうむ――船乗。」
冷たく壮平は笑つた。
「そのやうな男なら、そなたがその者につかれてゐるのが迷惑なら、わしの力で何とでも致してつかはす。わしにまかせて、安心してゐるがよい。」
「でも、大変お酒の上の悪い人で――今夜もうちにゐるのですけれど――」
壮平はちよいと思案して、
「よろしい。案じるな。」
「でも、全く乱暴な人ですから、もし殿さま方に間違でもあると、

「私、どうしたらよいかわからなくなります。」
「安心してをれよ。今夜これから、わしがその者に逢つてやる――恰度、そなたの宅にゐるとは折がよい。ナニ、高々船乘。氣支ふには及ばぬぞ。そなたは、殿の取り持ちをたのむ。」
お濟は妹のためには怨人の敵源太船頭を、いつかはこの百目鬼二天を使つて仕末させてやらうと考へてゐたのだつた。池屋一家は、姉妹力を合はせれば、地獄の底まで引きずり落してやることが出來るであらう。しかし、油斷のない、腕ぶしの強い源太船頭、これだけは自分に思ひを寄せてゐる侍どもをケシかけてどうにもさせてしまふのが最上だ。このやうな者を相手に、姉妹のいづれかが、人殺しの罪に落ちるのも無駄な氣がしてゐた。
出逢ひ次第、面倒を起させてやらうと、かね〴〵船頭の方へも、壯平、左司馬が、たえず自分を挑んで苦しめるやうなことは吹つ込んである。しかし、こんなに早く、萬事が進まうとは思はなかつた。そして何よりも、今夜、日頃恨み通してゐる百目鬼玄蕃に出逢ひ、しかも、かやつが、たちまち自分に思ひをかけようとは！
「でも、馬場さん、一たい、あの人に逢つて、どんな話をなさらうと云ふの？」
「以來、そなたの身の上に、故障を申さぬやう一札を取つてまゐる。」
壯平はあせつてゐる。今夜どうにもしてこの女の側へ玄蕃を引きつけて置かねばならぬ。そのためには、手段をえらんでゐるゆとりはないのだ。
お濟も玄蕃の心を今宵の中に摑んでしまはねばならぬのだ。當時威勢の強い百目鬼のことゆゑ、どんなすじの女が、黄金と權力とに媚びて、彼の心を囚としてしまはぬものでもない。
めい〴〵に、暗い企てをいだく男女は言葉をつがつて袂を分つた。

× × ×

それから半時ばかりして、玄蕃が酒宴を開いてゐる、金八樓といふ大きな旗亭裏の暗い棧橋に、船頭に導かれて來た一人の男――
それは今では裏河岸のお濟の家に入りびたつてゐる、源太だつた。源太は池屋平助のために濟吉殺しの惡事を働いてから、言ふままの大金を引き出す蔓が出來たので、このごろは水上の勤めも怠り、絹物ぐるみの榮耀榮華をつくしてゐるのだ。
「おお、船はどこにまつてゐるのだね？」
と、ほろ醉ひ機嫌。
勾配のはやさうな、いなせな若い衆は棧橋を指さして、
「あれがあつしの舟ですよ。大方もう姐さんは、待ち兼ねてゐなさるでせう。」
トン〴〵と棧橋を踏んで、二人は船へ。下げてあつた簾を上げると、源太はびつくりしたやうに――
「おや、御免なさい。おい、若い衆、こりや違ふぜ。お武家さまだ。」

「おお、そちが大方源太とやらじやな。淸の亭主じやな？　まあ、はいれ。」

「へえ、いかにも淸の何ですが――」

「淸はもう先きに向ふ島へまゐつた。わしがあとに殘つて待ちをつたのじやよ。何も懸念することはない。さる大身の方がの――おい、若い者、舟を出せ。」

と、命じて、語るは壯平。

「さる大身の方がな、淸をつれて川向ふへ涼みに行かれたで、そちにも是非盃をつかはしたいといふ仰せじや。まあ行つてお近かづきになるがよい。お近かづきになつて置いて、決して損なことではない。」

「へえ〳〵。ですが――」

と、源太船頭は狐につままれたやうに、薄氣味惡げだ。

「ですが、そりやああんまり恐れ入りやす。何しろ、こんな無態な浴衣がけで――なアに、淸の奴が、舟ですゞみてえから、すぐ出て來いと言つたと聽いたので飛び出してまゐりましたが、そんなことゝ知りやあ、あんまり失禮だからおことわり申すのでしたが――旦那方も、ちと御醉興が――」

「いや、そのやうなことは氣に致すな、いづれも粹な方々ぢや。」

と、壯平は言つたが、船がだん〳〵河岸をはなれて、もはや滿々として暗黑な河心に出たのを眺めると、

「おお、朧風がすゞしいの。船頭、舟を止めろ。少しこの涼風をむさぼりたい。」

ピタリ〳〵と、舷を黑い水が打つて、あたりはしいんとしてゐる。捨てて來た河岸の方だけがほんのりとした紅燈の影をひたしてゐる。「時に源太、貴さまに折入つて話があるのだが――」

源太船頭、前後の容子がいぶかしいので、さてはと思ひ當ることがあるやうに油斷のない鋭どい目で――

「お話とは、一たい、どんなことでございます？」

「このやうな川中で、異に思ふかも知れぬが、他人に聽かれては面白らないこと――實はワザと、そちをこゝまで連れ出したのじや。」

「へえ、それは御念の入つた――で、何よりも、あなた樣は、どなたでおいでなさるんですね？」

「わしはさる大身の方の用人じや。で、その方申されるには、淸とやら言ふ女子、すぐれて美目もよく氣性も氣に入つた。かれを妾として引取り度いが、貴さまといふ男がある由――如何ともして、話をつけてまゐれとのことなのぢや。」

「ふうむ。で、お淸の奴あ、承知したのでごぜいやすか？」

と、源太は見上げる。

「貴さまには申し惜いが、淸は早速の承引で、貴さま承諾次第、根引かれやうといふわけじや。」

「そりやあ、旦那、いやでござんす。」

源太は、嗄枯れた、野太い調子でズバリといふ。

「そりやあ、旦那、駄目ですよ。お清の奴あ、ハナからわしを何と思つてゐたか知らねえが、さう言つちやあ何ですが、大身さまさへ惚れる程の女、わしは生命がけで惚れてゐるのですから、まあ、あなたにも、手を退いて頂きてえね。」

「もつともだ、あまり突際のことではあるし、さういふのももつともだが——しかし、こちらも武士、言ひ出してこのまゝ手を退くこともならぬ——ナ、わしの顔も立てゝ、この五十兩金——」

と、ふところから取り出した金包——

「これで、まあ、穩便にしてくれまいか。」

源太船頭は冷たく笑つて、

「旦那、そいつあいけねえ。この源太が、生ッ白い岡氣の若旦那だとか、通番頭だとかいふんなら、それで話もつくか知れねえが、板子一枚下は地獄の、荒い渡世の男なんだ。ね、いかに二本差しのあなた方にでも、さういふ風にあしらはれては、仲間へ顔向けも出來なくなるから——まあ、これだけは勘辨しておくんなさい。」

「それだからこそ、わざ〳〵聽く耳のない水の上まで出て來たのだ。誰れも深いわけを知る人もない。貴さまにしても、心の動いた女なぞに、いつまで未練を持つてゐても仕方があるまい。さあ、この金を取れ！」

と、封金を、源太の膝の上に投げた。

源太はパッと投げ返へして、

「旦那、いかにさむれえと船乗でも、金を叩きつけるなあ、ひどうがすぜ。」

「黙れ！」

馬場壯平、待つてゐたのだ。大刀をタッと引きつけると、ぐいと目を剝いた。

「これだけ事を分けて申すに——侍が一たん言ひ出したことを、その方づれにはばまれてなるか。」

屋根舟の中、ぐいと身を沈めて睨めつける。

源太は身をかはさうとしたが、壯平は人物はどうでも居合の名人。

サッと血しぶきが次の瞬間にはあたりを染めた。

× × × × ×

間もなく、金八樓の廣間にあらはれた壯平、お清に耳打ちをした。

「何もかも濟んでしまつた。安心せい。」

（つづく）

凡愚列傳

長谷川如是閑

『クジ六』の軍功

『わしの親父の手柄話を聞かせやうか。』と北國生れの老人が、何度でも話す咄はかうだ。

岡部十左衞門といふのがその老人の親父の名であつたが、『クジ六』といふ綽名で一層よく通つてゐた。總じていやに圖體の大きい田舍侍のうちでも、十左衞門は殊に並外づれで、鯨尺で六尺あるだらうなど〻同僚にからかわれたのが、クジ六といふ綽名の由來であつた。それが大髻の髷を頭に戴いてゐるので、それまで入れると何尺あるか、家の中を歩くに始終頭を下げてゐねばならなかつた。さうすると先方が見へぬといふので、しまひには斜めに首を曲げて歩いた。それが癖になつて、往來を歩く時にも、始終考へ事でもしてゐるやうに首をかしげてゐたが、實は何事も考へてゐない男であつた。

細い短い刀は彼れの身體に釣り合はないと皆にいはれて、天秤棒のやうな奴をぶち込んで、家に傳づた鐵扇で、餘り大きいので誰れも持つたことがなく、戸棚の隅に赤錆になつてゐたのを持ち出して、右の手に斜に構へ、それについてゐる、手垢で色もわからなくなつた、大きい總のついた太紐を左の手に鷲掴みにして、肩を搖すつて歩いた。少し離れて見ると、恐ろしく强よ相で、傍へもよれない恰好だが、近づいてよく見ると、何處かぬけた所があつて、赤子も決して怖がらない。嘗つて江戸に居た時、その姿で町を歩いたら、向ふから來る武士は、遠くから彼れの姿を見て大抵横町へ外れてしまつたが、彼れの尻にはいつも大勢の子供がぞろ〱くつついて來るので弱らせられたといつてゐた。

クジ六でも何うかすると身體の半分位の勇氣を出すこともあるといふ話だ。國の年中行事の練武多といふ祭には、町や村同士で、若者が戰爭の眞似事をやるのだが、往々それが眞物以上になつて、槍や刀をも持ち出して死傷者を出すことも珍らしくない。嘗つてそんなことのあつた時に、クジ六の十左衞門はさういふ場合、殊に危險視されてゐる拔身の大太刀を擔いで出かけた。他ではヒヤ〱したが、それは、彼れがそれで人を斬ることを恐れたのではない、そんなものを持ち廻る

と、揃つて敵方に誘はれて、後ろから槍で突き通されることがあるので、それを皆は心配したのであつた。が彼れは無事に歸つた。さうしてよう〳〵不平をいつた。皆は盛に棒ちぎれで毆り合ひをやつてゐるのに、彼れのもつてゐるのは抜身であるために、誰れを毆るわけにも行かず、それをぶら下げてまご〳〵してゐたゞけで、誠につまらない練武多であつたといふのである。

尤も撃劍では彼れに敵するものはなかつた。その癖仕合で勝つことは滅多になかつた。相手の參るのは、彼れの恐ろしい腕力で所謂はず叩かれるのに閉口するのであつた。上手の相手は始めの二三合で勝負をつけてしまうからいゝが、それほどの腕のない相手は、彼れと立ち合つたあとは大抵床についた。槍の稽古では、とう〳〵元の身體にならないやうな病人を何人かこしらへた。

『武藝は稽古でさへ人に難儀をかけるから、俺はあまりやらんことにしてゐる。』仕合に敗けるたびに彼はさういつて辯解した。

無論無藝大食ではあつたが、たゞ一つ隱し藝をもつてゐた。それは江戸で覺へて來た相撲甚句を出鱈目に踊ることであつた。酒を飲むとよくそれをやつたが、足拍子の代りに座敷の天井を掌で叩くのが得意であつた。成程こればかりは眞似手がなかつた。

所がクジ六にも武士の運命がめぐつて來た。その頃擇捉にオロシャ人が乘り込んだといふので、今までの松前藩の手當では手薄だといふことになり、幕府の役人が一隊の軍兵を率ゐて擇捉に出向くことゝなつたが、その隊は十左衞門の藩と隣藩とから、屈強の侍を募つてそれを組織することゝなつた。十左衞門のクジ六は、その恰好から、とても此選に洩れる譯に行かなかつた。さうしてその恰好によつて、同勢二百五十人の筆頭になつて擇捉の紗那に押し渡つた。

行つて見ると、オロシャの宣教師がたつた一人ゐて、天主堂を建てて村民を集めて說教をしてゐるだけであつたので、そのオロシャの坊主を追ひ拂つて、その寺を打ち壞はした。同勢は張合ひぬけがしたが、十左衞門は、船の中からずつと高くなつてゐた心臟の鼓動が大分靜かになつたことを感じた。

すると、それから二三年經つた歲の春の末に、山にはまだ雪の消へぬ頃、突然、オロシャの軍艦二三艘が沖合に現はれて、そのうちの一艘は、紗那の港に碇を下ろして、一隊の兵士を上陸させて、食物を徵發した上に、漁小屋の番人一人を人質にとつて行つた。

村のものが騷ぎ立てたので十左衞門等の一隊も出陣の覺悟をきめたが、その時の隊長は、幕府の役人、戸田亦太夫、關谷茂八郎の兩人で、これは流石に落付き拂つて一同を鎭めて凝と形勢を窺つた。

ところが翌朝になつて、いきなりオロシャの軍艦が一發の大砲を放つた。村民達は愈〻戰爭が始まつたと逃げ惑ひ、十左衞門の一隊は出陣の用意を整へたが、戸田亦太夫は一同に向つて、萬國々法と申す夷人どもの掟では、軍艦で他國の港に着いた時には、挨拶として大筒を放つのが禮儀ぢやとある。只今の發砲も必定それに相違あるまい。彼等夷どもの所存がたゞ薪水を求めるに過ぎぬに於ては、それに應ずるのがわが國法でもある。と諭して、番卒の一人に白旗をもたせて濱邊に遣はして、オロシャの軍艦に、その存意を問はせた。流石は江戸の侍である、われ〳〵無學にして、危うく、辭儀をいたして居る夷人

の頭に砲をうちこむとこであつた、と十左衞門等一同は感服した。

そこで戸田、關谷の兩隊長は、二百五十人の同勢を從へて、本陣に陣取つて、番卒の復命をまち構へてゐた。その時、又もやオロシヤの軍艦から一發ぶつ放した。ところが、今度は、その砲彈が一同の陣取つてゐるすぐ傍の砂地に落ちて、凄まじい土煙をあげて炸裂した。

一同は頭の上に雷が落ちたほどに驚ろかされて、夕立のやうな土砂を浴びて大地にへたばつてしまつた。

流石は江戸の侍の戸田も關谷も、クジ六等と一列にへたばつたが、戸田亦太夫は眞先きに頭をあげた――と思つて、四方を見廻はすと、何の事だ、同僚關谷をはじめ二百五十人の同勢は、何處へ失せたかあたりには人子一人も見へず、たゞ陣笠、鞋、握り飯包の類がそこらに取散らされ、鐵砲さへも少からず置き去りにされてゐた。その中で感心なのは亦太夫の從卒二人、泰然として主人の傍に座つてゐた。

流石は江戸の侍の從者だつた、のではなく腰がぬけてゐたのだ。

亦大夫は怒心頭に發したが、ふと考へ直した、剛勇の田舍侍どもは、隊長の命令を待たずに、オロシヤの軍艦めがけて押し寄せたのではなからうか。果して然らば、それをも知らず最後に頭を上げたのは、死んでも及ばぬ此身の不覺であつたと齒がみをしやうとしたが、それにしては鐵砲を忘れて行つたものがかう澤山あるのは訝かしいと亦考へ直した。

亦大夫は半信半疑で、濱邊をさして驅け出したが、何處を見渡しても剛勇な田舍侍の一隊は見當らず、却つて遙か後ろにそれらしい姿が見へると思つたら、それは彼れの從卒二人が殊勝にも、ひよろ〳〵と主人のあとを追ひかけて來たのであつた。

兵隊に逃げられた隊長が、腰のぬけた兵卒二人を率ゐてまご〳〵してゐるうちに、オロシヤの軍艦の陸戰隊に出會つて忽ち包圍されてしまつた。向ふは五六十人の武裝した一隊、こちらは隊長一人に、鐵砲こそもつて居れ、それを杖の代りに突いてゐねば立ちも歩きもならぬ兵隊二人、といふ編制では、いかにも日本軍と雖も戰爭は出來ない。

亦大夫は辛うじて血路を開いて逃げ終せたが、併し從卒二人の運命は不憫ながら、敵に委ねる外はなかつた。

亦大夫は命から〴〵有朋山に逃げ込んだ。すると何うだ。剛勇な北國侍二百五十人の一隊は、關谷を眞中にして、青い顏をして、その山腹に堅くなつてゐた。

それを見た亦大夫は烈火の如くに憤つて、今しがた落ちたオロシヤの砲彈のやうな聲で怒鳴りつけた。

『公等は苟くも北門の鎖鑰警備といふ大役を承つて遙々此地に參りながら、このざまは何事である。紗那はもはや敵の手に渡つた。この擇捉をおめ〳〵とオロシヤの夷どもに奪はれて、何の面さげて内地へ歸れると思ふか。これより直ちに引返して夷どもと一戰し、紗那をわが手に取り戻さねば……』

『先づ〳〵お愼りなされ、戸田氏』と關谷は猛り立つ戸田の言葉を遮つた。

『何がお愼れなされだ、』と戸田は血眼で詰めよせた。

『オロシヤの軍艦にはあのやうな恐ろしい大筒があるではござらぬか。』

關谷はさつき浴びた砂で眞白になつた頭を振つた。
『大筒が恐ろしくて戰が出來るか。此方には日本武士の魂がござるぞ。』
『魂はあつても彈がなくては戰は出來まい。』
關谷はうそぶいた。戸田は臀をふるはせた。
『紗那には鐵砲庫も煙硝庫もあり、それを取戻せば、一月や二月の籠城は何でもござらぬ。』
『はて解りのわるい。それを取り戻す前の話ではござらぬか。』
關谷は益落ちつき拂ふ。戸田は益喚き立てる。
『敵は僅か四五十人、こちらは二百五十人、彬ちぎれでも驅けちらすに雑作のないこと。無くてならぬは彈ではなくて勇氣でござるぞ。』
『その勇氣で當座の敵は驅けちらしても、オロシヤの船はまた內保にも得撫にも居りますのぢや。それが皆只今のやうな大筒の筒先をそろへて打ち放したら、勇氣だけでは防ぎがとれまい。』
『えゝつべこべと申すことがござるか、いざとなれば日本刀で斬つて斬つて斬りまくり、一同斬り死にをいたすまでのことではないか。』
『ハテ蟷螂が斧と申す諺は、轍に隟かれて死んでしまうがよいと申すことでござつたか。』
『何と申される。今一遍申してごらうじろ。』
戸田は血相變へて關谷を睨んだ。戸田はその時、關谷が更らにぐづぐづ云つたら、先づ血祭にその場で斬つてすてるつもりであつた。
二人の諍ひを見てゐた連中は、それと知つて青くなつた。中には急にあてもなく驅け出して、それきり姿を見せないものもあつた。

そこへ飛び出したのが、六尺僅かの十左衞門即ちクシ六であつた。彼れは、戸田に向つて頻りに頭を下げてから、何か關谷にくどくと說いた。が關谷には彼れが何をいつてゐるのか少しもわからなかつた。それは言葉が奧州訛りであつたゝめではなく、たゞわくと上顎下顎をかち合はせて、時々變な音を鼻から吹き出すに過ぎないからであつた。

が要するに、彼れの意味は、此の際は戸田隊長の言葉に從つては何うだといふのであるらしいことだけは、彼のヂエスチユアーで、辛うじて關谷にもわかつた。その時の十左衞門の泣き出し相な顏を見れば、誰れにでもそれだけのことはわかる。

十左衞門は戸田のいふ通り直ちにオロシヤと一戰を試みたかつた譯では決してなく、性來、喧嘩と蛙の大嫌ひな彼れは、後が戰爭にならうと何にならうと、とにかく目前の喧嘩を已めて貰ひたかつた。戰爭は無論喧嘩よりもわるいが、まだ目前に出て來ないので我慢も出來た。

その上彼れは、こゝで關谷が戸田に殺されては大變だと思つた。先刻砲彈に見舞はれた時にも、死んだやうにへたばつてゐる一同に、直ちに避難を命じたのは關谷であつた。もしあの時戸田が眞先きに頭を上げたら、一同は濱邊へ追ひやられてオロシヤの砲彈の餌食にされたであらう。今後危難の場合に、關谷がゐないで、戸田が居るのでは、二百五十人は飛んだ目に遭はねばならぬ。いつそ二人とも死んでくれゝば、一同は落武者になるか乞食になるか泥棒になるかすれば濟むのだが、戸田だけ生きて居られては、そのうちのどれにもなれずに、恐らく擇捉の土になる外は無さ相だ。そのことは二人の諍ひを見てゐた一

同の等しく心配したことであつた。

そこへ飛び出して、とにかくも二人を宥めたのは、いつも塗身をかついで皆の毆り合ひをハラ〳〵しながら見物してゐるだけのクジ六の態度としては大出來であつた。皆もあとから戰爭が來るであらうことは忘れて、十左衞門の仲裁をよろこんだ。

で關谷は澁々戸田のいふことに服して、一戰を試みる議に賛成した。戸田は無論、そのことにいて二百五十人の同意を求めやうとはしなかつた。戸田は一同に諮れば續々新規の關谷が現れることを恐れたのだが、戸田の今の見幕を見せられては、そんな勇氣のあるものは一人もゐなかつた。で戸田は一刻も猶豫すれば敵は我が武器庫を掠奪するに相違ないから、その前に奇襲を試みねばならぬと、一同に向つて直ちに進發の用意を命じた。

その命令を聽いて、隅の方にゐた二三人がばら〳〵と驅け出した。

『未だ早い』と同僚が呼び留ると、『鐵砲を取つて來る。』といつて、跡をも見ずに走つて行つた。『俺も鐵砲を』と又二三人が驅け出した。

『こゝを動くものは打つた斬るぞ!』

戸田の雷のやうな聲が響き渡つたので、それきり驅け出すものはなかつた。が誰れいふとなく、

『腹がへつては戰は出來ぬ。』

そんなことをいひ出して、皆がや〳〵とざわめき出した。それをきいて關谷は一同に云つた。

『さうだ、どうせ討死だ。先づ最後の兵糧を使はふ。』

『そんな暇はない。』と戸田は拒んだが、もう握飯を出して喰ひ始めたものもある。戸田もまさか、握飯を食ふものを打ッた斬る譯にも行かないので躊躇してゐるうちに、一同はぞろ〳〵と水のある窪地に下りて兵糧を使ひ出した。

握り飯よりも命の大事な連中は、大抵本陣に兵糧を置き去りにして來たが、第一に兵糧を使ふことを主張したのはその連中だつた。で關谷の命令で、同僚の、命よりも大事な握飯を分配された。

關谷と十左衞門とは兵糧を使ひながらくつゝき合つて頻りに何かこそ〳〵と話してゐたが、やがて關谷は戸田を促がして形勢を展望すべく二人連れ立つて出かけた。

二人の姿が見へなくなつた頃、十左衞門はいきなり立ち上つて一同に向つて怒鳴つた。

『さあ皆討死の用意はよいか。』

戸田と關谷は路もない山腹を登つて行つた。

『内保の方から敵の來る樣子はござらぬだらうか?』

關谷は立ち止つてさういつた。戸田は内保の方と覺しい方角を見たが、樹立に遮られて何も見へなかつた。その時、關谷は叫んだ。

『あれ内保の方に當つて怪しい煙が見える。』

『大方漁村の煙でござらう。』

『いや〳〵火でも放つたのではあるまいか。』

『貴殿は臆病風に襲はれてゐるので、尾花も幽靈でござる。』

『これは怪しからん。然らば身共が上に登つて見屆けて來る。』

『いや身共が見屆けて來る。貴殿はこゝでお待ちなされ。』

戸田は、關谷が何をいふかと思つたが、とにかく遠望のきくところ

まで登つて見た。なるほど西の方に煙が棚曳いて見へる。然しそれは内保に居るオロシヤの軍艦の煙らしい。無論、敵軍の寄せて來るやうな氣はひも見へぬ。案の條、臆病者の見た幽靈だつた、下らぬことに手間取つたわい。とぶつ／＼いひながら、前の所に下りて來て見ると、關谷の姿は見へなかつた。臆病神め、今度は紗那の方を見に行つたに相違ない、何のかのと手間を取らせる男だわい、と戸田は山腹を匝つて、紗那方面の見へる所へ來たが、關谷は何處にも居なかつた。

戸田は大聲で關谷の名を呼んで見たが、谺が答へるのみであつた。まゝよ、自分だけ引返して、同勢を率いて進發しやう、臆病神を撒いてしまつた方が結局此方の仕合せだと、戸田は大急ぎで引返したが、何處を何う迷ひ込んだものか、一同の居る所が何うしても見つからぬ。焦ら／＼して山腹を登つたり降つたりしてゐるうちに、そこらに夥しい足跡のあるのを發見した。同勢が兵糧を使つた所だが、戸田は何度もそこを通りながら氣が付かなかつたのだ。

『さては關谷め、臆病を装つて、此の方を置き去りにして、一人ぬけ駆けの功名を計り居つたな。古狸めに一杯くわされたわい。』

戸田は歯がみをして口惜しがつたが、まださう遠くは行くまい。すぐと追ひついて、關谷に一泡吹かせてくれやうと、戸田はうろたへながら驅け出した。

戸田は濕地をころぶやうに驅け上つて、元來た道に出ると、鼻の先きの樹の枝に一枚の紙片がひら／＼してゐた。何かの合圖かと、引剝いで見ると、恐ろしい惡筆でかう書いてあつた。

『無謀之戰は貴殿江御一任可申、我等一同從是任意退散可致候也以上。』

戸田はそれを讀むなり全身の血が一時に頭に上つて、どつかと尻餅をついてしまつた。

彼れはついた尻餅を上げもやらず、其場で腹割切つて死んでしまつた。

有萠山の山腹に『戸田亦太夫藤原常保墓文化四年丁卯五月朔日』と刻さんだ小さい石塔のある所が、亦太夫の尻餅をついた地點であつた。

『わしの親爺』の手柄談を話す老人は、その終りにきつと、彼れの親爺が、死ぬまでそれを云つて自慢してゐたといふ文句をつけ加へるのだ。

『俺は二百五十人の日本人と何人かのオロシヤ人の命を救けた。』

哲學的保險勸誘人

『先刻の御話しでは、ナトウラリッヒ・アインステルグといふのは、存在といふことが「我」と「非我」との對立となつてゐる時に、「我」を超越した時空的事實を我が認識し、體驗する態度であるが、それをその普遍性に於て抽象してその本質を求めるのが所謂アイデチッヒ・レデュクチオンだといふやうに承りましたが、さうして所謂トランセンデンタール・レデュクチオンといふ方は、この超越的存在としての「非我」と「我」との對立といふ現實的存在から一切のファック

チッヒなるものを排除するといふのですが、そのアインクラムメルングするといふのが、どうもよく呑込めないのですが、私どもの考へでは、存在といふものはそれ自體意識のインテンチオナリテートに規定されるもので、存在といふ時には、既に必ずアインクラムメルングしてゐるのではあるまいかと思はれるのです。只今のお話しではアインクラムメルングは、抽象でもなく、否定でもなく、たゞ中止だといふやうなお話でしたが、それならば、ナトウラリツヒ・アインステルングの常識的乃至科學的レデュクチオンに於ても、意識のインテンチオナリテートといふものが同じやうに働いてゐるもの、やうに考へられますが、今のその、現象學的レデュクチオンでございますが、そのトランセンデンダールのレデュクチオンで超越的存在の本質がアインクラムメルングされると申しますのは……』

　そんな風なことを、頗る敬虔な態度で質問してゐる男を、若いプロフエッサーは興味をもつて見つめない譯に行かなかつた。

　温泉場の夏期大學といへば講師も聽講者も主催者も、刷物に麗々しく列べられてゐる哲學、法學、教育學、政治、宗教、經濟、外交、文學といふやうな盛り澤山の科目の外の入浴を最も重要科目としてゐるに定まつてゐるので、K博士も、こんな熱心な聽講者に出喰はしたことはめつたになかつた。午前の講義でお互ひにいゝ加減大汗をかいた上に、折角一風呂浴びていゝ氣持で風を入れてゐるところに、かういふ念の入つたお客は餘り下さらないが、何しろ甚だ温和な風采の紳士で、フエノメノロギーが何うであらうとトランセンデンダールが何うであらうと一向構ひ相もない年輩をしてゐながら、こんな遊び場に來て、藝者に自慢の長唄を聞かせることの代りに、生若いプロフエッサーをつらまへて、たつた今聽いた『それは存在のある一定の特殊性に於て存在する存在が、その存在をその特殊性に於ける一定の存在として存在せしめてゐる存在である』といふやうな文句を、頻りと腋の下の汗をふき／＼鸚鵡返しにくり返してゐるのは誠に殊勝な話である。

　プロフエッサーもつひそれにほだされて、頻りに相手になつてゐた。無論、その男の知識は、そこらの雜誌の論文などを丸呑みにしてゐる程度らしいが、それにしても最新の術語などをよく覺へ込んで、その使方もあんまり間違はずにすら／＼暗誦の出來るだけでも感心である。

　こんな感心な紳士は一體何を職業にしてゐるのかと聽いて見たら、名刺にかいてあるといふので、それを見ると野川某といふ名前の側に、有名なD生命保險會社の名が七號で入つてゐた。でKはいつた。

『會社などに勤めてゐてよく勉强されることですな。』

紳士は甚だ恐縮して、

『いや毎日數字ばかりいぢくつて居りますので頭が乾からびてしまつて、何んだかから、腦髓が輕石のやうになつて行くやうな氣が致します。學生時代には、大膽不敵にも學問で立つつもりか何かで、柄にない勉强などもやりましたやうな譯で、然し生活のために中途で方針を變へねばならぬことゝなつて、それも空想に終つてしまつて、御覽の通りの御恥かしい始末ですが、責めてかういふ所へでも參つて、先生方の御講義をうかゞつてゐるうちには何うにかなるだらうなどゝ考へ

ることもありますが、いや決して何うにもなる氣支ひはありません、アッハッハッハ。』

と重役のやうな聲で笑つた。

『さうですか。』K博士もそゞろに同情して『夏期大學なんて元來いゝ加減なものだが、君のやうな眞面目な人が一人でもゐれば決して無意義ではないです。東京へ歸つたら又質問になり何なり出掛けて來たまへ、何分僕も忙しいが、時間さへあれば何時でも會つてあげるから。』

『ありがたうございます。御言葉に甘へて、ちよい〳〵伺はせていただきたいと存じます。今日までも、御論文などを拜見して、何うかしてお目にかゝつて御話をうかゞひたいと存じて居りましたが、突然伺ふのも失禮と存じて御遠慮申して居りましたやうな譯で……』

『いやちつとも構はんです。』

K博士は頗る好機嫌でさういつた。

Kが東京へ歸つたあとには、入れ代りに法學博士のS教授がその同じ座敷に收まつた。

『先刻の御講演は非常に六かしい御話をわれ〳〵にもよく合點の行くやうに話して戴いて、實に面白ろく……と申しては失禮ですが、全く愉快に拜聽いたしました事で……』

といつて丁寧に一つ御辭儀をしたのは、S教授の座敷を訪づれた聽講者の一人であつた。

『それは何うも……』

Sは萬更ら惡い氣持もしなかつた。

『權利といふ觀念のことについてはいろ〳〵拜見もし伺ひもいたしますが、どうもよく納得が參りませんでしたが。御講演を拜聽して何分まだよくわかつたとは申しあげられませんが――とにかく見當だけはついたやうな氣がいたしましたので、大變何うも……』

さうはいふものゝ、態々その禮をいひに來たとも思はれず、多分何か質問でもあるのではないかとS博士は察したので、

『それはよかつた。然し不審の點でもあればどし〳〵質問してくれたまへ、決して遠慮はいらんですよ。』

果してその男は、又更めて一つ御辭儀をして、遠慮深い口吻でいひ出した。

『僕はその……、法の觀念に權利の思想の必要であるのは、ある人格の絶對的な意思の優越に基くのではなく、社會的生存の條件として個人々々の特有の地位を基礎づけるためにその個人の各に與へられる保障としてゞあるといふやうな御說で……?』

『さうです。』

『でその權利は、もと〳〵個人同士の社會的共存の條件であるから、自づからその條件によつて制限される。だから絶對優越の權利といふものはない、權利は即ち制限された力だといふやうな意味で……?』

『さうです。』

『然し御說によると權利といふものは法の性質に固有のもの、言ひかへれば、法そのものを構成するものゝやうに承りましたが、すると權利を制限するといふものはそれは法ではないので……?』

『さうです。權利を制限するは社會の協働的性質ですな。』

『さう致しますと、社會が權利を制限し、法はそれを認めるといふこ

とになりますので？』

『つまりさうです。』

『さう致しますと、法は法を構成する權利を、社會から制限され、その制限された權利を法が認めるといふことになるやうですが、さうしますと、權利は法を構成するものか、法によつて認められるものか、法によつて與へられるものか、その邊が何うも少しわかりかねますので……』

そんな風にはいつてゐるが、それは決して、Sに感じの惡い詰問とは聽へないで、臆病な學生が、全く問題を持て餘して怖わ〳〵質問するやうな態度なので、Sも氣持よくそれに應じて、諄々と說明してやつた。

一時間餘りも話した末に、何れ東京の御宅へも伺はしていたゞいて、職業上の法律問題についても、御高見を伺ひたい、といふので、Sも快くそれを承知した。一體何をしてゐる男か知らと思つて名刺を見たら、野川といふD生命保險會社の社員であつた。

『私はこれで法律の方をやるつもりで學生時代に司法官試驗の準備などもいたしましたのですが、中途で學資がつゞかなくなつて早くから只今の會社に入りました。』

といろ〳〵身の上話しまでして、Sからビールの御馳走になつて歸つて行つた。

S博士の引あげたあとは、賣れつ子の文士のYが入れ代つた。

『實は先生、私は先生のものが大好きで……と申してはすみませんが、全く先生の愛讀者なんです。何といふ標題でしたか、先生の早い頃の御作で、葉山といふ青年が意味のわからない自殺をするといふのがありましたですね。あれの一節を私は殆んど暗誦してゐましたのです。今ぢやすつかり忘れましたが、でも所々覺えてゐますよ。「堪へ切れない憎しみなんてそんなものはありやしない。そんなもので俺は死ぬんぢやない。人は何といふか知らないが、俺を死なせるのは愛だ。誰れだつて憎んで死ぬものはない。みんな愛して死ぬのだ。愛さないで何うして死ねるものか。だから俺は嬉しいのだ。……」何うです、覺えてゐるでせう。「葉山は歩るいてゐるのぢやない、大地をかきむしつてゐるのだ。」なんてとこもありましたつけね。「でもわたしいいわ。私の冷めたい唇に、このやうに溫い柔い生き〳〵した肉がふれてゐる。」あれは違ひましたかな。何しろ先生の新しい作が出ると友達を集めて私が朗讀したりしましてね。その頃は若くもあつたが隨分熱狂したものでした。』

そんなことをベラ〳〵とYの前で饒舌つてゐるのは、先刻Yの講演で、たつた一人だけ拍手した男である。

そんなことをいつてゐるかと思ふと、

『先刻の先生の御話の、藝術に於けるアプリオリテイーは、本質的心意の形態である云々といふ御說は、私も半分ほど――はちと大きいが――ぼんやり考へてゐたんですが、どうもあゝはつきり伺ふと目が覺めたやうな氣がします。實は先生、私その閑暇で、何うも甚だ素人臭いものですが少しばかり書いたものがあるのですが、御ひまな時――もおありにならんでせうけれど、一つ見て戴きたいのですが、東京へ歸つてからもつて上つてよろしいでせうか。いゝ年をして子供らしい

やうですが、文學にかけては今もまだ全く子供でして、先生のものなどを拜見して、今でも二三日ぼんやり考へ込んでしまふことなんかあるんです。可愛いでせう。』

Y自身も隨分そんなのを相手に饒舌り出したらまけない方なので、これをきつかけに、二人は久しぶりで會つた友達同士のやうに夜半まで飮みながら話した。

Yは翌朝遲く起きた時に、あの男は一體何をしてゐる男だらうと思つて置いて行つた名刺を見ると野川といふD生命保險會社員であつた。

それから二三ケ月經つうちにD保險會社の被保險人名簿のうちにK文學博士、S法學博士、Y文士等の名が加へられた。それ限り野川は、Kの所へもSのところへもYのところへも顏を出さないやうになつた。彼れは、彼れの哲學、法學、文學等の研究に於て新らしい先生を求めてゐるに相違ない。

七度び生れてアイスクリームを賣る

イタリーの解放者ガリバルヂが千噸餘りの小さな汽船コンモンウエルスの平らの船長になつてイギリスを訪れた時に、ロシヤの亡命者のアレキサンダー・ヘルツエンは、彼れの偉大な朋友を一日、ロンドン郊外のテディングトンの彼れの假寓に招待した。

ガリバルヂとヘルツェンとの乘つた馬車がテデイングトンのヘルツエンの家に近づくと、町の貧しい人達の群は馬車を取圍んで『ガリバルヂ萬歲』を叫んだ。子供を抱へた一人の妻君は、ガルバルヂの上着に接吻して、その子を彼れの目の前に差し上げて涙を流した。

ガリバルヂはこの貧しい人々の群に襲はれて、まるで自分の家族に取卷かれてゐるやうに彼れ等の手を取つたり、一々お辭儀をしたりして、戶口に達するのは容易なことではなかつた。漸く家の中に入ると、群集はまた更めて喚聲をあげた。ガリバルヂは再び戶口に出て、兩の掌を胸にあてゝ右左に頭を下げた。

『彼れは確かに軍人の頭領ではない。彼れは決して將軍ではない。彼れ自身、自分は決して軍人ではなく、たゞの人間だ、自分の國の荒らされるのを防ぐために武器をとつたまでだ、十字軍を起すことを說いて、自分がその先頭に立つて、いつでも自分の魂とわが子の魂とを人民の爲めに差出し、痛擊を與へもすれば受けもして、敵を根絕やしにし、自分の骨を灰にして風に吹き散らされる覺悟をもつてゐるまでだ、といつたのは、神々しい質實を語つてゐるものだ。しかもさうしたあとでは、彼れ自からの勝利なんぞはからりと忘れて、血に汚れたその刀を鞘ごと海の底に投げ込むばかりだ、といつてゐるのもその通りだ。』とヘルツエンは二人乘つた馬車の中で考へた『遠いイギリスの田舍の貧しい人達さへ彼れがそういふ人であることをよく知つてゐる。さればこそ、この通り彼等は彼れを見て熱狂するのだ。』

ヘルツエンの家では、ガリバルヂは、漁師の子と生れた彼れを解放の鬪士に導いた、彼れの先輩のマッツィニに久しぶりで會つて、互にその後の希望と不幸とを語り合つた。

食卓では、先づマッツィニが、立つてガリバルヂのために乾盃の辭をのべた。

『私は、こゝに今、私達の愛するすべてのものと私達がそれに向つて鬪ひつゝあるすべてのものゝために乾杯する。

民衆の自由のために。

民衆の結合のために。

此時に於て、それらの大理想の生ける姿として屹立してゐる此の人のために、即ち

ギウセッペ・ガリバルヂのために。

不幸なる、神聖なる、勇敢なるポーランド、彼女の子等はこの一年の間、自由のために默々として戰ひ、默々とし死につゝあつたポーランドのために。

若きロシヤ、『土地と自由と』の旗幟の下に、ポーランドに兄弟の手をさしのべ、彼女の平等と獨立とを認めて、ロシヤ帝國の記臆を塗りつぶすであらうところの若きロシヤのために、

ロシヤの人々、わが友ヘルツエンと共にロシヤの發達のために力の限りを盡しつゝあるロシヤの人々のために。

此れ等の理想のために鬪ひ且つ死する力を我等に與へる義務の宗教のために！』

ガリバルヂは次ぎに、立つてマッツィニのために乾盃の辭を述べた。

『私は、久しい前に成し遂げねばならぬことを、今日漸く、やらうとしてゐます。今こゝに居れる方々のうちには、私の郷國のために、又一般の自由のために、最大の仕事をされた方が居られます。私がまだ青年で、夢のやうなあこがれに驅られた頃、私は自分の後見であるべき人を探がし求めました、まるで渇いてゐるものが水を求めるやうに……私はその人を見出しました。世の中の人々が悉く眠つてゐた時に、その人だけは覺めてゐました。彼れは私の友達となつてくれました、さうして、いつまでも、いつまでも、私の友達でゐてくれました。その人に於ては、郷土と自由とに對する愛の聖火は決して燃へ鈍ることはありませんでした。その人とは即ちギウセッペ・マッツィニであります—— 私は、私の友人であり先生である彼れのために乾杯いたします。』

それをいつたガリバルヂの、胸の底からしみ出るやうなその辭をきき、bienveillance といふフランス語でいふ外にいひやうがないとヘルツエンのいつたその顏色を見て、食卓に列んだ二十余名の人々は、拍手もせずに默り泣いた。

一同はやがて廊下に出て、ガリバルヂはそこにゐる多くの人々に接した。その時、一人の年とつたイタリイ人があたふたとガリバルヂの前に現はれて、彼れの着物を引張つて泣き出した。

彼れは、ロンドンの街頭でアイスクリームをうつてゐる憐れな年よりであるが、久しい前に、イタリーを逭はれた亡命者の一人であつた。

『私はもう死んでもいゝ。私はもう死んでもいゝ。私はあの方にお會ひすることが出來た。私はあの方にお會ひすることが出來た。』

老人は泣きじやくりながらそれを繰り返へした。

ガリバルヂは、老人を兩手で抱へて、涙にぬれた彼の頰に接吻した。老人は、彼れの昔の冒險を、賞賛くやうな口調でガリバルヂに話

つて、終ひにさういつた。

『さてこれで私はもう安心して死ねますがや。あなた様は、國のため、私達のために、何うぞ長生きをして下さいませ。私が今度生れ代つて來るまできつと生きてゐて下さいませ。』

さういつて老人は、ガルバルヂの手をとつて幾度か接吻して、泣きながら出て行つた。

かういふ目には一度ならず出會つて隨分馴れつ子になつてゐる筈のガリバルヂも、この老人には面喰つたらしく、ぐつたりと長椅子に腰を落してぼんやりしてゐた。その周圍を婦人達がとりまいて、讃美と同情の視線で彼れを射すくめた。

痛ましい陰鬱がガリバルヂの心を暗くした。彼れはそれをいつものやうに彼れの胸の底に葬つてしまうことさへ出來なかつた。彼れは呟いた。

『自分の首がいつなくなるか知れないといふことを、何うかすると、耐らなく恐ろしいことのやうに思ふが……それは幸福すぎるほどの幸福なのだ。』

首が不安で、幸福なガリバルヂに別れて表に出た、首が安全で、不幸なアイスクリーム賣りの老人は、まだそこに集つてガリバルヂの歸りを待ちうけてゐる群集に『あの方』に會つた話しをして又泣いた。

今マッツィニが述べガリバルヂも述べた悲壯な乾杯の辭の中には含まれてゐる相もないこの老人――或は含まれてゐるに相違ないであらうが、たとへさうであつたところで、彼れのアイスクリームが一杯でも餘計に賣れ、一錢でも高く賣れるといふ譯ではなし、結局、入つてゐないも同然である――は一刻も早く死んで一刻も早く生れ代つて、その時まだ生きてゐるガリバルヂの偉大な事業のつゞきに參加することを考へた。さうして又年をとつたらアイスクリームを賣るであらうことは少しも考へずに。

雜誌「改造」十周年記念

懸賞創作募集

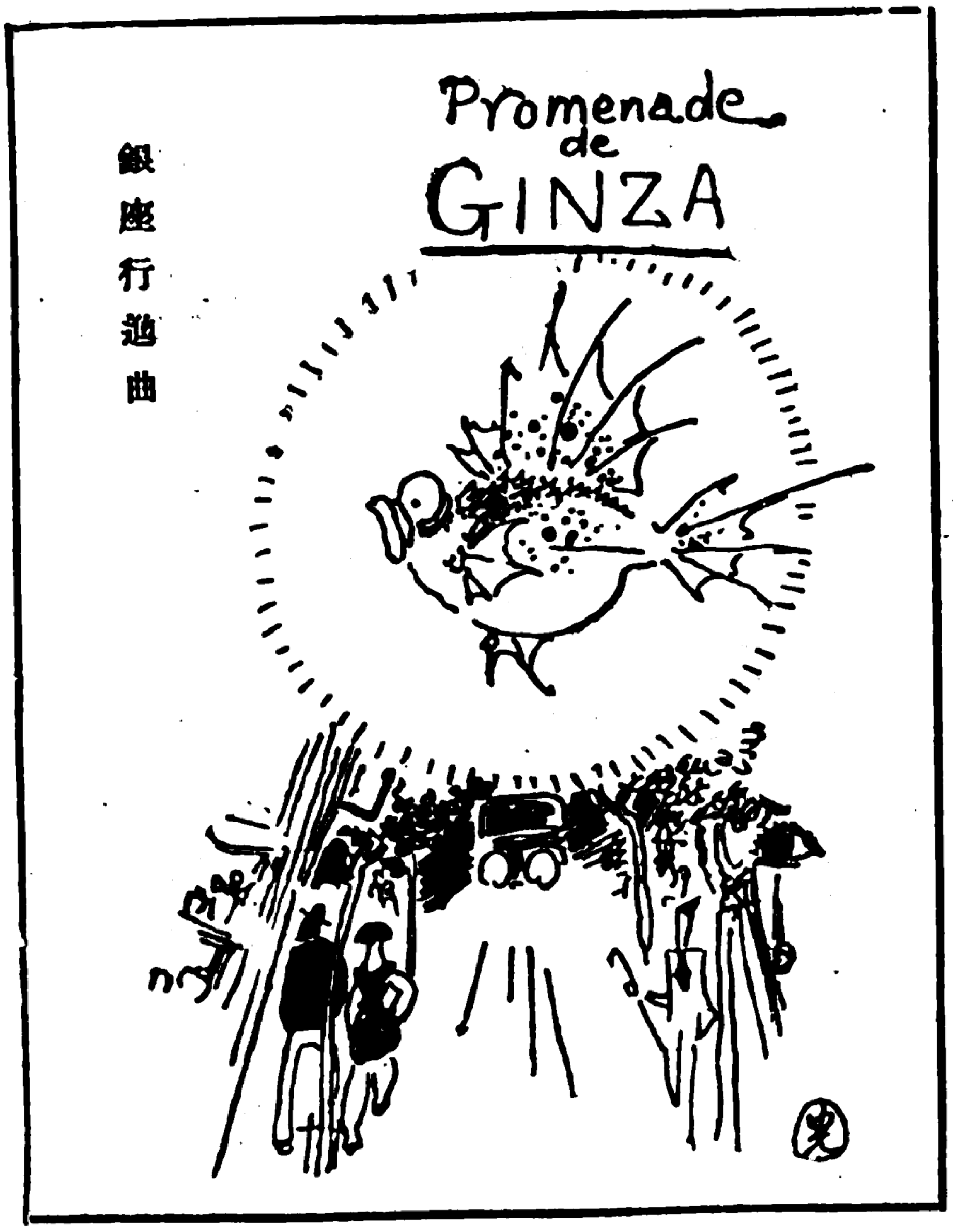
來る昭和三年四月一日は改造社の創立十周年に當ります。雜誌「改造」は十周年記念號を發行し創作論文に於て我國の代表作を網羅する以外左記の懸賞方法により小說、戲曲を募集します。

1 懸賞金は一等一名一千五百圓、二等一名七百五十圓とす。
2 應募小說戲曲は四百字詰百五十枚以內とし本年十二月卅一日を以つて〆切る。
3 當選原稿の一等は昭和三年四月號の『改造』に、二等は同五月號の『改造』に登載す。
4 應募小說戲曲は社中選のこと。
5 宛名は「懸賞創作」と封表に記載し『改造』編輯局宛てのこと。
6 紙上の匿名は許さず。賞金は發表と共に交付す。
7 應募原稿は一切還付せず。且つ應募者は略歷一葉添付ありたし。

改造社

モダーン十景

金子光晴
吉邨二郎畫



一　銀座行進曲

建物の窓といふ窓から首が深淵の臭ひを吸込んでゐた。

夕暮、窓々が招牌を斷割つた。

生魚の鱈に咲く石竹の花、夕立晴れ。雷鳴をのせていつた巨艦の電燈が點つた。

火箭鴨魚（やがら）の様に、この窓から彼女の窓へ飛び込んでゆきたいな。

Fra Fra Frararara・・・

おゝLa La口笛行進曲!!

僕の最速歩の風で南の熱苦しい葦竹の根が臭ふ。

ポケットの銅貨・・・それはタタル土人の膚の嗅覺がある!!!

夜の銀座!!!野蠻な森林の祭である。

疲れたら、僕は飾窓のなかで眠る。

二　昇降機

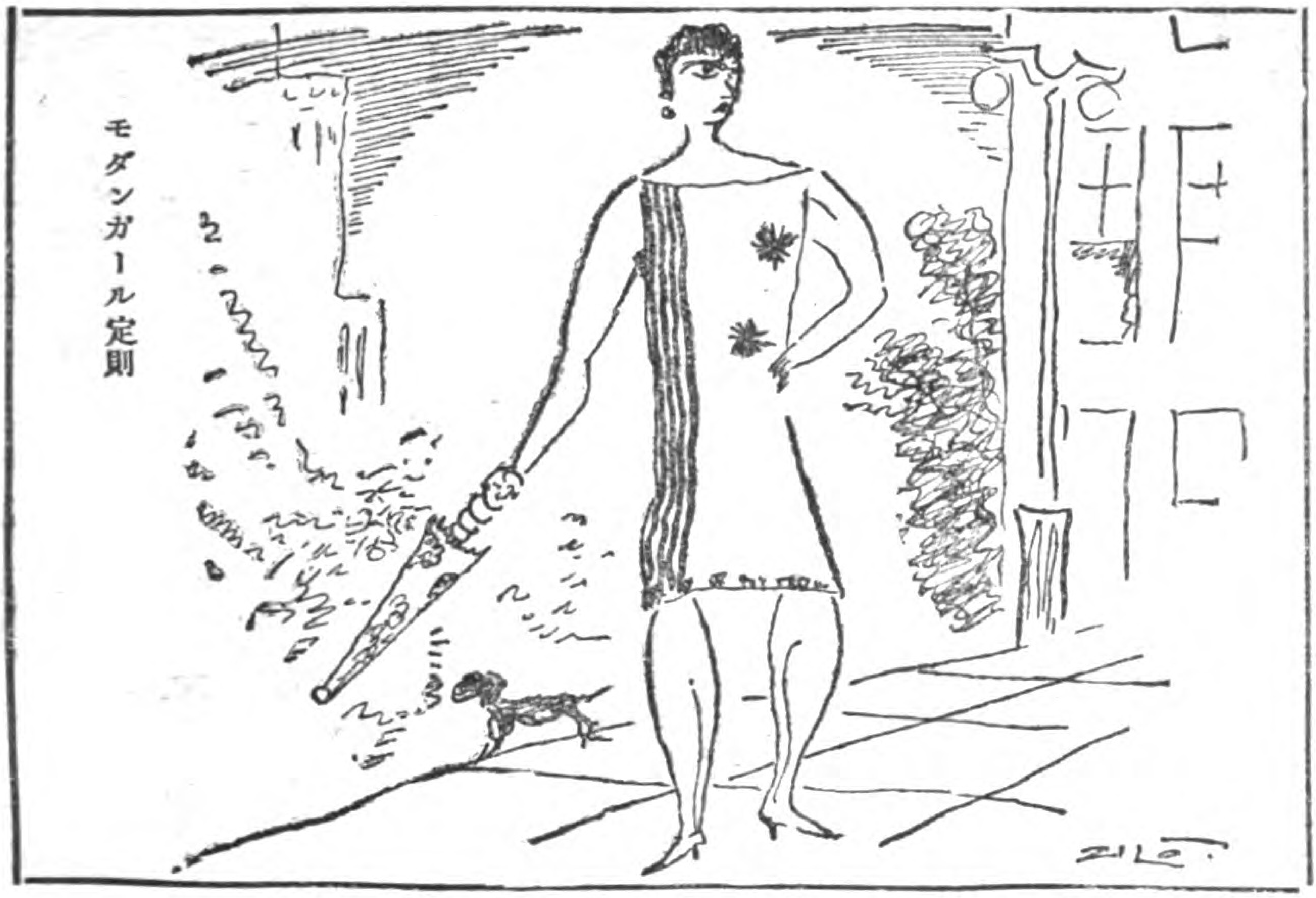
二階から五階へ宙釣りの漁色、七階から地下室迄急轉直下の失戀・・・高層建築のどてつぱらを縱に貫く昇降機は、その體溫計である。

金網の扉を閉したときの、昇降機のうちほど、親密な世界はない。階を離れる。建物の大斷層が錯誤し、づり、無數の脚を植ゑた棚が、網の外にせりあがる。

「昇降機扇風機」と稱する一味の涼風が、膚にしみる。瞬間の强い眩暈!!

そして　僕の友人のXは僕に語つた。

『むしろ僕はこの眩暈の瞬間を樂しんでゐる者だ。つとめ先の勞苦、家へ歸つてからの、猶繁はしい苦限、それら一際から漂渺として、世界からも我からも遊離し、無間の感覺のなかを——建物の骸骨のなかの自分の骸骨丈になつて、降つてゆ



それは出勤と、歸りの刻の、僕にとつて一番、高貴な瞬間なのである。』

三　モダンガール定則

單に教養のある自由な女性——新居格の所謂、モダーンガールの第一の條件である聰明であらねばならぬことは、理性的なるべからずと改めねばならない。さらに美貌なるを要せず。……殊に、胃と腓筋肉の發達著しいことが緊要である。

等、等、等…………。

（注意——胃の強靭は番茶の如くガブガブ珈琲を呑むため、脚は、朝から夜中迄ほつつき廻るため）

右、他諸條件によつて芋屋の娘と雖も、この變態術（メタモルフォーズ）を成就することができるのである。

ブルとプロの雜種と稱するそれが理由でもある。

彼女らに神經がないとか、貞操がないとかいつて否難してはならない。彼女らは、さう云つた古い女性を壞すため照準された煙硝くさい大砲の中から外をのぞいてゐる勇士達だ。

さうして彼女達と同じく、日に日に奇抜に、日に日にづんぐり短く、恰も極彩色された瘤のごとくなつてゆくものに、パラソルの流行がある。

四　二人の女學生

頬つぺたに油墨で、犬を畫いてゐた女學生ともう一人牛首を畫いてゐる女學生とが神田から須田町の方へ歩いてゐた。××創作畫會の男たちがいたづらにつかまえて畫いてやつたのだが彼女らはスッカリそれで興奮して了つてゐた。

『隨分みたわ、人が……』

『女の蝙蝠安だつて云つてたわ』

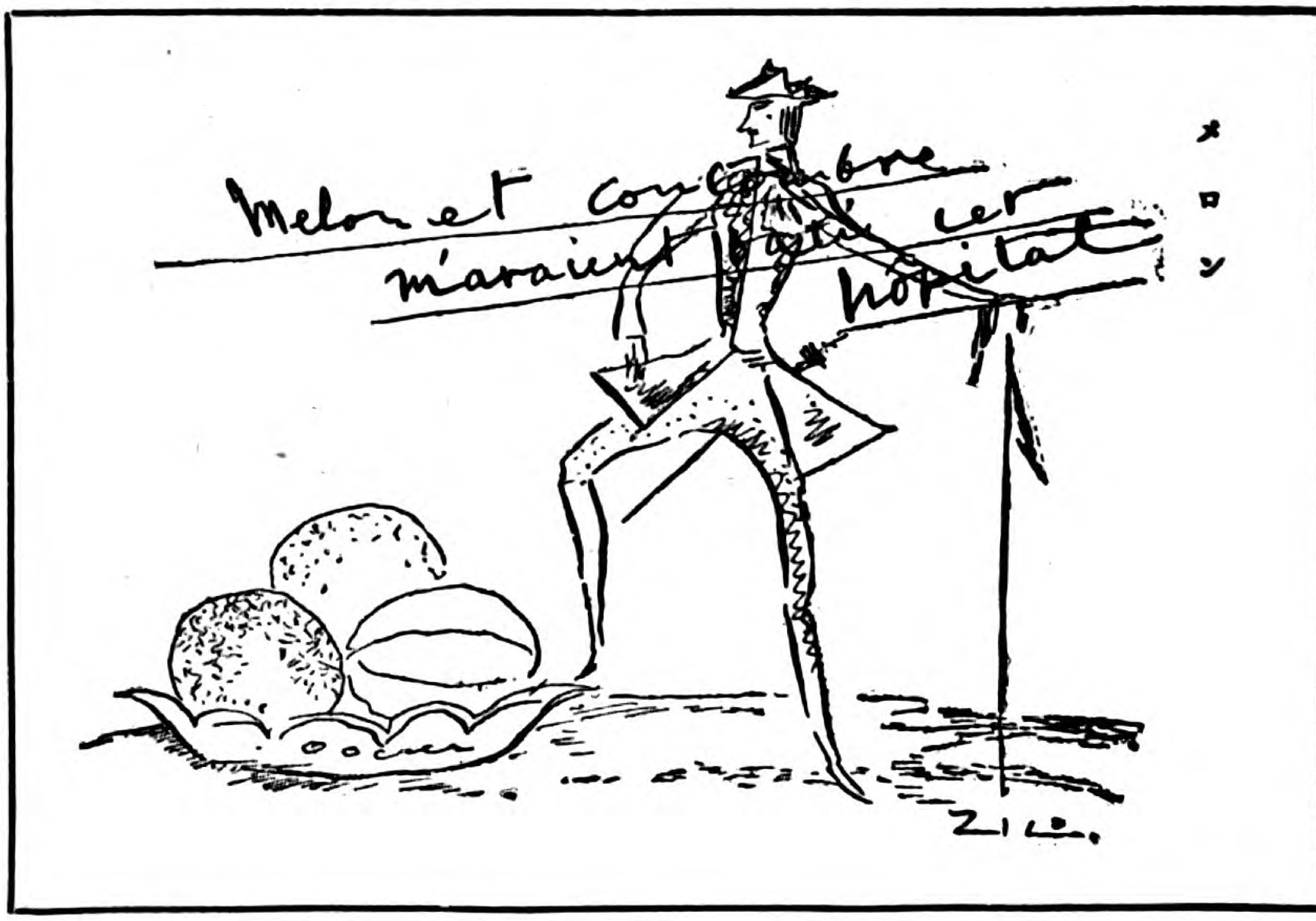
『まあ……』

…………………………

『すぐ家（うち）へかへる?』

『銀座の方へ行かない? これから』

『どこへだつていくわ、歩いてゆきませうネ。妾、今夜は一晩中でも歩いてゐたいのよ』



メロン

可憐なるアバンチユリスト。こんな臆病な氣分陶醉者の女學生を我我は、銀座の一往復に數人以上みかけることがある。

五　Melon

灰色の網をかぶつた青い小枕、高價な札をさげた季節外れのメロンが、煌々たる飾窓の電球の下で、人足を止めてゐた。

僕の頭のなかに小さな揷話が其時蘇える。

少し古めかしいが十七世紀の佛蘭西にあつた話だ。一人の非常に社會的信用をもつた醫者があつた。メロンと瓜が人體にすばらしい滋養を持つてゐる事を宣傳すると、市中の人が無茶苦茶にメロンを平げて片つ端から腹を惡くし、結局その醫者が、大もうけをして大病院を新設した。この皮肉な醫者は、病院の中庭に碑を建てて、

「melon et concombre m'avaient bâti cet hôpital」
（メロンと瓜は、此病院を建立せり）

と刻んださうだ。

melon et concombre de nos jours, que fontils? et pour qui?
（現代のメロンと瓜は誰の爲めに何を作るだらうか？）

と、僕はメロン君にきゝたい。

六　耳環と毛蟲

イギリスの耳朶で留る眞珠の鋲、獨逸製の黃色い陶器のさげ玉、ジプシーごのみ。珊瑚珠、支那の翡翠、さては埃及の婚禮用の三ケ月型の金の大ブラブラ…世界の耳環が店のかざり棚のなかで、こまかく搖れてゐた。世界の唄が、そこから唄つて來さうに思へた。

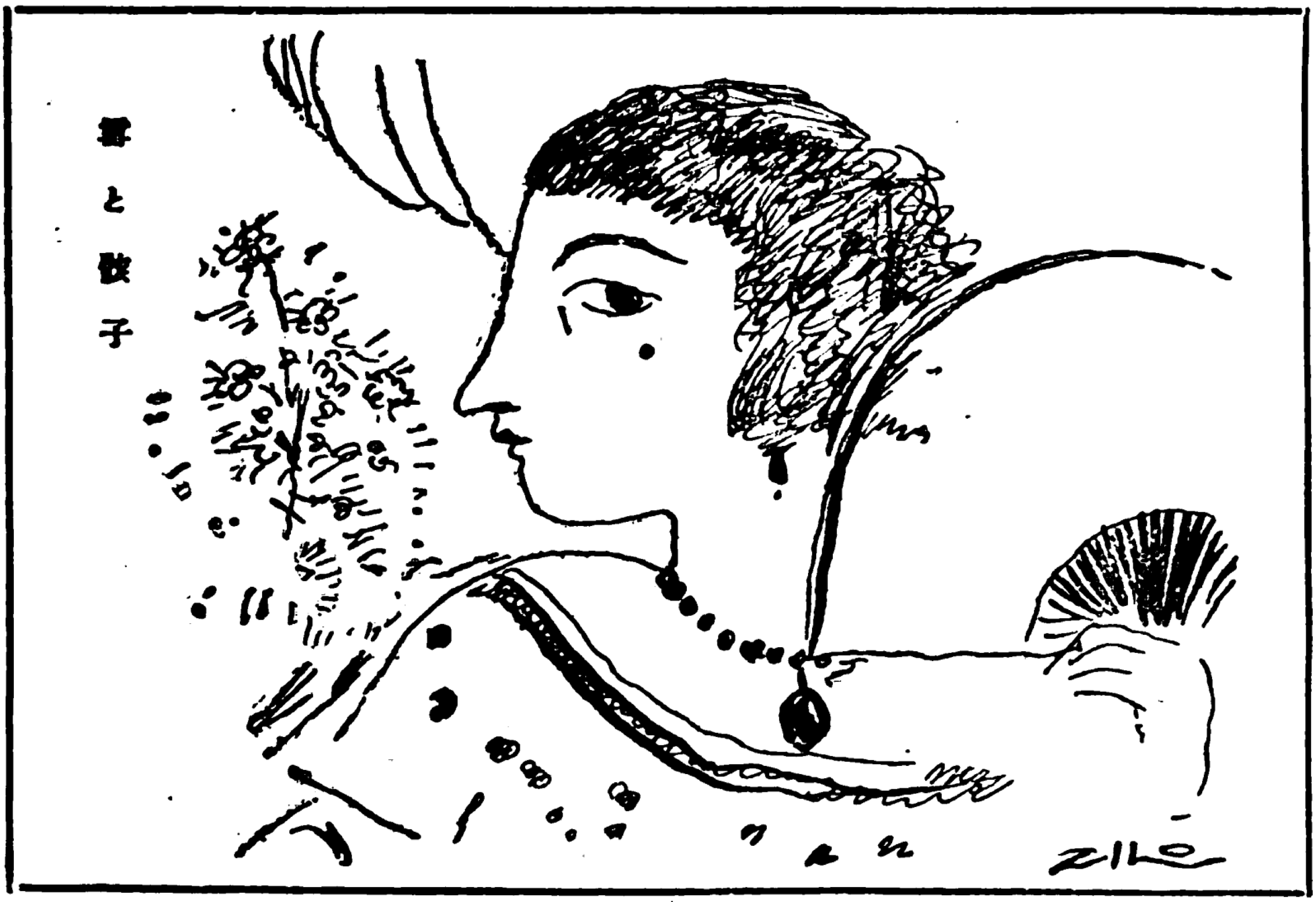
このエキゾチツクな店先で二人のインテリゲンチユアがしやべくつてゐた。

『僕はあのヂルコンの耳環の、小さな鋭い針を、あの美くしいマダムの耳朶へ留めてやりたい。

柔美な一匹の毛蟲が刺針に刺されもがいてゐる。とても謂はふか。』

一人は杖を舗石にトントンやり乍ら云つた。

『肺患の思想だよ。十九世紀の神經だよ、それは…。僕達はたゞ、此店中の耳



環にヂヤズバンドが踊つて欲しい丈なんだ。』

七　雪と骰子（さいころ）

『君の頬にある黒子（ビユーティースポツト）、それはまるで、雪のうへにころがつた一つの骰子（さいころ）のやうだ、君の顔の雪景色を眺めながらあけるリキユールはこの苦熱に於てさへ猶、私の心を涼しくするよ』

或る珈琲店（カフエ）の壁にあげた額の文字で、美くしいこの家の給仕女（ウエトレス）に贈つたものである。

諸君はそれを單なる輕佻（フリボール）と見做すか、それは間違つてゐる。このほこりくさいちよむさい人生に於て、明るさをもとめ、新しい風を欲するロマンチシズムのこゝろである。

ある時、それは英雄的でさへありうるのだ!!

新しい修辭は新しい時代の組立でさへありえやう。

八　珈琲森林（カフエシンリン）

珈琲森林の計畫者は詩人的な男であつた。

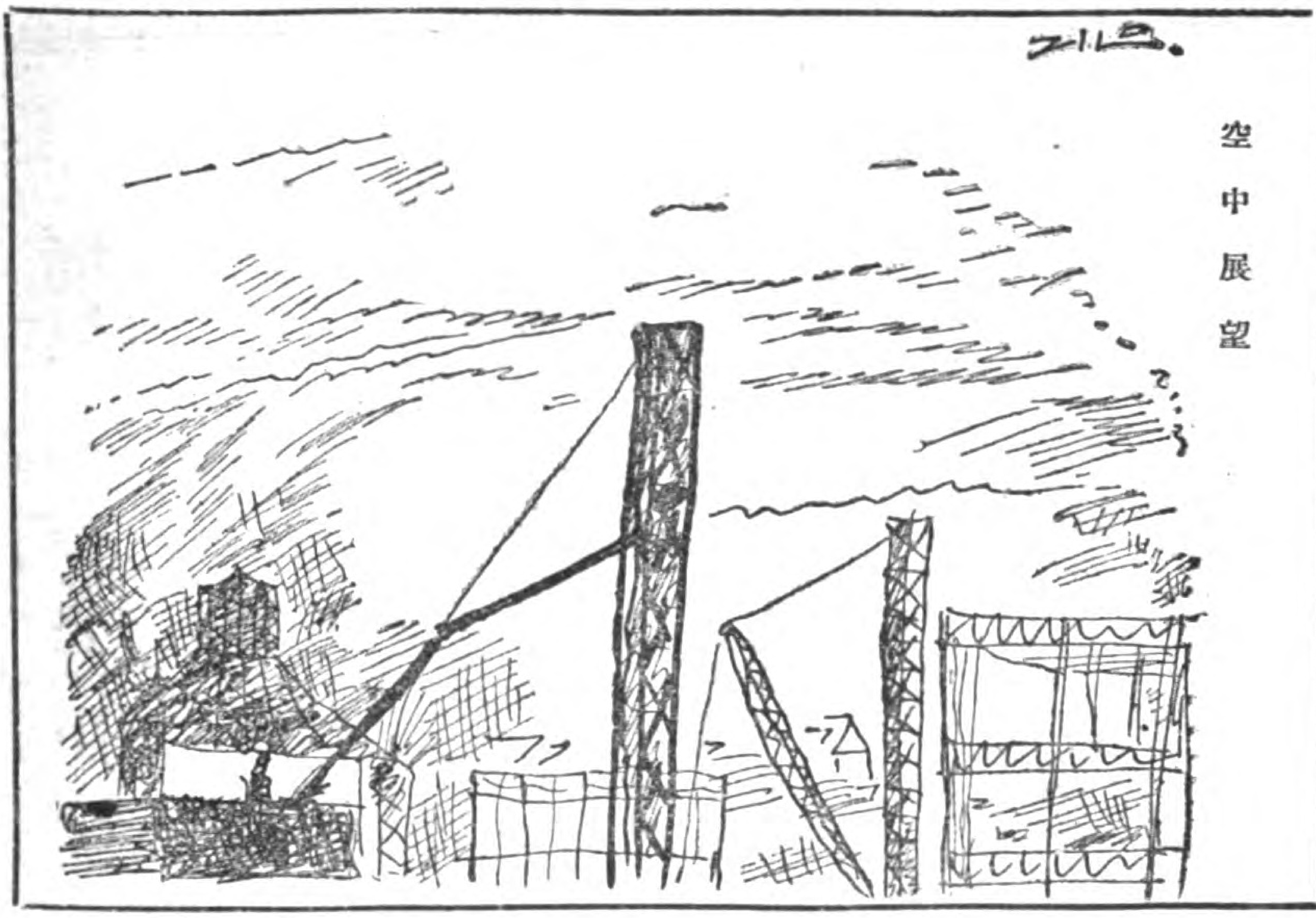
現代エキゾチシズムは、空間的には映畫趣味となり、時間的には懷古情調となる。少くとも彼は、より積極的な意味に於けるロマンチストであつた。より氣質的な文化主義者であつた。

『珈琲森林を計畫するに至るまでの、もつと大きな理想と抱負に就いてお話したい。』

彼はさう語り出した。

『それにつけても東京はあんまり殺風景な穴倉となり、ブリキ小舍となつて了つたと思ひませんかネ。水のヴエニスでもありません。玻璃（ガラス）のブルツセルでもなく、舗道のウエンナでもなく、此汚い都を美しい森林にしてしまふと僕らが計畫したのです。何故ならば、僕達は水よりもガラスよりも植物の世界程ロマンチツクなものを知らないからです。

ヒマラヤ松、樺、かやの樹等の、沈默のなかにふる高貴な針葉の光の下を、N森林町130番地に Monsieur K を訪ねる。堤柳の岸の東屋の素朴な木の卓で一緒に食事をとる。……いや、要するに僕達は雜然たる現代に靜さを與へたかつたのです。おわかりになつたでせう。珈琲森林は森林都市東京の見本なんですよ』



空中展望

九　空中展望

先施公司(しんしーす)の樓上からみた上海全市は赤黒く塵に燻つて物凄じかつたが、三越樓上からの日本橋を中心にした一帶の展望は鯖色をした虚ろな大谿谷である。

ブルッセルの繪畫館裏の展望は奇怪だつた。

ロンドンは古びた甲冑、巴里は花園であつた。しかし今、我東京は全く虚落だ。

そして、沼澤や、海湖のうへのやうななまなました、裸かな、ヒステリックな空に觸れてゐるものは猶、起重機である。鐵板打拔機である。鐵筋足場である。

その斷續する汽笛と電氣ハンマーの悲鳴である!!

それらの音響にふるへてゐる空間である。

それらの振動にふるへてゐる心臓である。

十　朝食

『朝食をどうか一緒に御招伴下さい。いやあんまりおすゝめできる御馳走でもありませんが!』

『いゝえ御心配なく、イワン・サトキッチさん、もうすぐ御暇いたしますから』

『兎も角も今朝のムニユーです一應御覽下さい』

献立

ポタージュ　ドュ　ミソ
ポアソンセック　ド　ラ　クサヤ
コンコンブル　クリュー　ア　ラ
セル　アペック　リー　キュイル
ブェル　ジャポネーズ

『ほゝう。これはお珍らさうしな立派な御料理で私など一遍も頂いたことはありませんものばかしで。』

食事は運ばれた。始終彼は眼をまるくした。彼の待つてゐた料理は一つも出なかつた。

訪問のかへり路、彼は猶、狐につまゝれたやうな氣持が解けなかつた。即ち彼はポタージュ　ドュ　ミソと味噌汁が、ポアソンセック　ド　ラ　クサヤとくさやの干魚、コンコンブル　クリユー　ア　ラ　セルと胡瓜の鹽もみ、リー　キュイルと白い飯、テー　ブエル　ジヤポネーズと番茶の出がらしとが同じものとは考へてゐなかつたからである。が、イワンサトキッチが佐藤一郎であることを想出すと始めて兩掌を打つて釋然とした。

堀切より柴又眞間へ

松瀬青々

菖蒲見の小舟間ひよる花川戸

水神の物干に干す浴衣かな

納涼の家の深さよ木下闇

むかし浪花の茶人田中鶴翁が時の文人等と舟を此流に泛べ、岸の合歡の木を折りて棚を作り茶を煮たる由を聞きゐたれば

合歡や有る名をなつかしみ綾瀬棚

堀切

菖蒲田に葭の丸みや行々子

白頭のたんぽゝあるや葭の中

けしの花汗もかゝずに肥えてあり

佗て見ゆる太閤に花の神田や

菖蒲より艸へ野へ野の浮雲へ

牀几に憩ひて

青豆をつまめば涼し花菖蒲

しづかさは菖蒲葉うごく水の垣

菖蒲見が田植女に酒飲ます

武藏野や植田の隅の花菖蒲

四つ木道小家のうらは行々子

夏艸の鄙の小家の筆師かな

或る繩のれんにて

酒の醉が黐ほしと行々子

柴又や小猿かげろふ心太

榮螺がらの茶店は暑し川を見に

柴又より小舟を借りて

鳬二つ飛ぶ裾水や國府臺

夏艸の眞間の入江と眺めけり

花の音

英美子

(A)

花には似合はない音をたてゝ
靜かな時節に、散りおちた
花の音——
もう、おまへは花ではない
雪だ！
なだれだ！
おゝ、純白な
薔薇が、崩れた

(B)

薔薇よ
私を、脅かしてはいけない
まるで頽雪のやうな音ではないか
そんな凄さましい聲をたてゝ
いまごろ、散るといふことがあるか
ばらよ——
私はおもはず
戀人のひざを離れて了つた。

(C)

一人ゐの部屋に
薔薇がちつた
くるりと卷いた波形の曲線が
忘れたキスを喫つてゐる
しかも明眸を伏せて
私から目を逸らす
同性の意地のわるさ

(D)

おまへは
過ぎた祝宴の
銀のカップにも似てゐる
それよりも、それよりも
ひとひらの 葩 のこぼれ方は
こんなにも、私の顏を
羞恥させてしまつた
イヴよ、あれは私にも
哀しい受胎の日だつた。
あゝ
純白な薔薇は
崩れた

少年少女の讀物選擇について

自然科學の興味をこそ

吉江喬松

従來少年の讀物といへば、あまり軍國的なものが多かつたやうに思はれます。でなければまつたくの空想的なものがあつたやうに見られます。少女の讀物としてはまたあまりにセンテイメンタルで、甘いものが多いやうによく感じてゐました。

このいづれも全然感服できません。「讀物の撰擇」といつて、從來あるものから撰擇するとなると、なか〳〵むづかしいでしよう。これから注意して作られる場合の參考になるやうにとならば、考へられます。

私は少年に限らず少女でも、十四五才までは、ほとんど讀物は同じであらうと思ひます。少年は特に少女物として區別してあるならば、讀まないでもありましようが、少女等の方は、少年物としてあつたところが、一向かまはずに讀むものであらうと思ひます。從つて少年少女と強いて區別をつけないで、雜誌でも書物でも、要するに十四五才までの少年が讀むものとして考へてさしつかへなからうと思ひます。

一體、日本ぐらゐ少年少女向の專門の雜誌その他の讀物の多いところは、少からうと思ふのです。それは少年少女を大切にする現象だといへば結構なことのやうに思はれますが、何故、それほどにしなければならないかと考へると、日本の少年少女の學校で教へらるゝ教科書——殊に地理だの歷史だのゝ教科書のまた面白くないことゝ來たら、これもまた、他國に類がないくらゐだらうと思ひます。

それだから勢ひ少年少女が娯樂的に雜誌その他の讀物を求めるのだらうと思ふのです。從つてその目的に適するやうにするために多くの雜誌なぞも出てゐるのでしようが、それ等の現象を離れて、假に少年少女等のために讀物の撰擇をするならば、最少し、いやむしろ最多く、自然科學的の興味を呼びさますやうな物があつてほしいと思つてゐます。

植物でも、動物でも、人間の生活でも、地理の話でも、天文の話でも、海洋山岳でも、氣象でも天候でも、更に數學的の興味でも、現在では教育者諸氏が非常にこの方に注意せられ、雜誌なぞでも、例へば、「赤い鳥」の鈴木三重吉さんなぞは、特にその點に注意を拂つて居られるので悦しく思つてゐるのですが、もつと、もつと、一般にその方面の注意が大切ではないでせうか。少年少女は何等にでも非常に好奇心を持つものですから、その好奇心を自然科學的に導くやうにすることが大事な點ではなからうかと思ふのです。

軍國的、空想的、センテイメンタルなものは、少年少女等を害はしても、何の效等を自

由に發達せしめる基とはなりません、彼等をしてたゞ偏向した、部分的な感じを強く起さしむるに過ぎません。

兒童讀物に就て

東京女高師附屬小學主事　北澤種一

一　讀物批評機關の乏しきこと

近來兒童讀物の出版が盛になつたことは種々の意味に於て慶賀すべきことであると同時に亦種々の意味に於て警戒を要することである。蓋し讀書能力を高めるの方法は多讀をさせるといふことがその一つである以上は單に教科書の文章を反復して居るに止まらず進んで多種多樣の文章に接して教科書にて收得したる讀書能力を適用し練習しなければならぬ。此の意味に於て吾人は兒童の讀物の出版が多くなつた事、從つて父兄母姉が之を兒童に與へる機會の多くなつた事を喜ぶものである。併し乍ら讀物は必ず何等かの内容を有して居るものである。若しその内容が兒童の精神生活に適合して居らぬ時には折角の讀書能力も却てその人を損ふこととなるのであるから大に警戒を加へなければならぬ。

不幸にして我が教育界には兒童讀物に對する嚴正批判の機關を缺いて居るのである。只茗溪會讀物調査會と文部省の圖書認定とがあるがこれも凡ての出版物を批判する譯には行かぬ。將來に於ては此種批判評論を主とする雜誌などが生れ出で、然るべきであると思ふ。

二　外國の保護者會

小學校兒童の讀物はその將來の發達に關し著しい影響を與へるものであるから愼重に之を選擇しなければならぬのである。單に讀物のみならず觀覽物等も亦此の注意を要するのであるが、外國に於ける小學校保護者會といふものは既に此點に着眼し、その地方々々に發行される兒童讀物を一々調査してその結果を印刷に附して之を保護者全部に頒つ組織を有して居るところがある。我が國に於ける現狀に於ては小學校教師の力を以てしては到底、盛に出版せらるゝ全部の讀物を讀み破り之を教育的見地から批判することは時間に於ても許されないのである。されば外國の例を參考として保護者有志は共同して人を頼むなり或は自らその任に當るなりして兒童讀物の批判をなし相互の利益に供したならばよいと思ふ。此の點に於て保護者會等の活動を希望するのである。

三　讀物の指導

父兄母姉として讀物に對する注意を有する人でも多くはよいものを選擇して之を與へるだけに止まる樣である。學校圖書館等に於ても良書を選定して之を備へ付ける丈で滿足して居るものが多い樣であるが、それではまだ兒童讀物に對し父兄母姉若くは教育者たるの任務を全うしたものといふことは出來ぬ。

讀物の正しき指導は只に讀物を與へるのみならずその讀物を讀みたる兒童が如何に感じ如何に理解し如何に意志したかを檢査することに迄進まなければならぬ。如何によい讀物

を與へても兒童の注意が無價値の點に向つて居つたならばそれは讀物の教育的價値を沒却したものと云ふべきである。之に反して少しは劣等なる讀物でも指導宜敷を得ればその教育的効果は非常に大なるものがある。要するに物を讀むことは如何に讀むかによつてその價値が定まるのであることを忘れてはならぬ。而して如何に讀ましむべきかの問題は何を讀ましむべきかの問題と同樣に重要なるものである。

如何に讀ましむべきかは兒童をしてその讀みたるものを發表せしめ討論又は評論せしむることによつて、教育者は自得することが出來るのである。若し單に讀み物をのみ與へて置いてその結果を檢査することを怠るときには計らざる惡影響を知らず識らずの間に受けしめて居ることがあるのであるから讀物を與ふる人はその結果の檢査を怠つてはならぬ。

四　選擇について

讀物選擇について注意すべきことは甚だ多いのであるが今その主なるものを擧げて見れば次の如し。

1、衛生上害なきを期すべきこと。文字の大さ紙質等に於て眼の衛生上害なきものたることは先づ第一に注意せなければならぬことである。彼の豆本の如きは兒童に持たしめてはならぬ。

2、內容は兒童の興味に應じたるものたるべきこと。讀み物の生命は兒童がその內容に惹き付けられるところにあるのである。併し乍ら單なる興味主義では教育的意義が甚だ乏しい。宜しく兒童として健全なる興味に應じたものでなくてはならぬ。近時の出版物には往々にして兒童の劣等なる興味に迎合したものが多い。之を判別することは父母教師の責任である。

3、個性を考慮して之に適應せるものたるべきこと。讀物に耽る兒童は動もすればセンチメンタルの傾向を表はして來るのである。多くの出版物の中には殊更にセンチメンタルに書いてあるものもある。讀物としては一般には文學的趣味に富みたるものがよいのであるが、餘りに文學的趣味に偏する時は兒童をしてセンチメンタルのものとして仕舞ふ慮があるのであるから科學的興味のものと文學的興味のものとをそれ〲適當に配合し或る意味に於ては個性の短所を補ひ或る意味に於ては個性の長所を發揮せしむるの用意がなければならぬ。

少年少女の讀物

與謝野晶子

少年少女の讀物は、一方に偏かせずに、多種多樣の物を讀ませるやうに親達が注意せねばならないと思ひます。少年には勇ましいものや自然科學風のもの、少女には優しいものや少女小說と云つた風のものと限つてしまふのは、讀み物の上に既に男女の差別を附ける事で、其れは面白くない事だと考へます。營養として雜多の混食が必要であるやうに、子供

の精神上の營養にも男女の差別を出來るだけ無視して、いろいろの書物を平等に讀ませたいものです。

　子供を大人よりも劣つたものと考へて、子供に媚びるやうな、低級な、安易な讀物を提供する事を、私は好みません。子供は案外にむづかしい讀物を欲しがり、自分の力に比べて重味の勝つたものを負擔しようとするものです。人に手を引かれて安易な道を行くやうな事を好まず、みづから苦しんで未知の世界へ冒險を試みたがつてゐるものです。

　殺伐な記事や詐術を用ひるやうな記事のあるお伽噺と少年小說が流行するのは、安價な涙を促す感傷的な少女小說と共に弊害があると思ひます。繼母小說と云ふやうなものを少女の讀物として書く人のあるのは恐らく子供を持たず、子供の愛を知らず、教育に就いて深い省察の無い人の、無思慮、無責任の賣文行爲であらうと思ひます。

　童謠、少年少女劇と云ふ物の中にも同樣の感を禁じ得ないものがあるやうに考へて居ます。其等の讀物を作る人は深い人間愛と、立派な見識と、美くしい情緒と、正しい言語文章とを備へた詩人文學者であつて欲しいと思ひます。子供が他日大人になつて後も、思ひ出して、なつかしみと尊敬とを拂ひ得る作品、子供の一生を通じて思想や感情の上に營養となる作品、さう云ふものを子供に提供して頂きたい。少し大人になると、輕蔑して振返つても見ず、記憶にも殘らないやうなものは、眞に善い少年少女の讀物で無いと思ひます。

　殊に我國の少女の讀物が低級な少女小說や幼稚な少女文學に偏してゐる事は訂正されなければなりません。とかく其等の淺薄な文學物に少女の讀物の傾くのは、我國の家庭に多方面の書物が供へられず、また親達、殊に母たる人々が讀書に由つて多方面の知識や趣味を養ふ習慣を持たないからだと思ひます。

少年少女讀物の是非

岸邊福雄

　少年少女の讀物の內雜誌は動的で單行本は靜的でありますから、兩方共讀む必要があります。さて、其の讀み物からして受ける感化は、日常學校にて講義を聽いて來るものよりも其力が強いかと迷はさる位であります。其理由は、雜誌と云ひ單行本と云ひ、いづれも教科書に比して遙に興味豐かに書かれてある點が、兒童の趣味性と相感應した結果が、感激となり模倣となり、終には性格の一部をも作成するに到るのであります。小學校で推獎してゐます課外讀本とか補助讀本とか云ひますのは、兒童趣味を參酌して情的方面をも忘れてはゐませんけれども、矢張り讀本と云ふ言葉が用ゐられてゐる丈け、雜誌や單行本に比べますと、何處かに窮屈さが存してゐます爲に、兒童は左ほど喜ばないのであります。

　さて、それでは如何なる單行本や雜誌を精選するかと云ひますと、手取早い所が、先頭見苦しいまでに競爭した、兒童文庫か小學生

全集が好いのであります。前戰は隨分猛烈を表はしましたが、其結果は終に雜と否との戰爭から實物の競爭となつた爲めに、内容のよい體裁のよいものが作られたのであります。あの競爭は讀者には有利でありました。單に内容體裁が好いのみか、書物の種類も可なり廣く列べられてありますから、いづれにても一摑へをすゝむるに躊躇しないのであります。

雜誌に到つては、露骨に批評したいのでありますが、之れが思ふに任せないので、甚だ遺憾であります。一般に紙數の多きを誇つてゐて、其内容は量に比して甚だ貧弱な憾みがあります。これは發行者の罪でありますが、それが又兒童を尊敬する氣分の乏しい日本人共通の科であります。要は、兒童ものの原稿には報ゆるものが、小說類に比して甚だ輕少過ぎると云ふ事であります。それ故に文士先生達が、兒童ものとなるとお手輕にチョコチョコと仕上げてしまつて、責塞ぎお茶にごし位になつて往くのが、現兒童雜誌の內容の貧弱な所以であります。

雜誌は動的で單行本は靜的でありますが、どうぞ内容の充實し發展した單行本が流行して、少年少女雜誌の賣り往きが惡くなつてくれるとよいと願つてゐます。さうすると、雜誌發行者もおくれながら醒めて、兒童文學者を優待して、其の苦心の作を需める事になるであらうと信じてゐます。大阪發行の某家庭雜誌の六月號に、諸名士の家庭に購讀してゐる、少年少女の雜誌を統計しますと、文學的のものが八割で、二割が科學的のものである事には、家庭教育の新らしい傾向で非常に嬉しくありました。幼兒向きでは、「コドモノクニ」が一頭地をぬいてゐるのは、定價よりも內容を尙ぶと云ふ事を說明するやうに感じられた。紙數卽ち量よりも、童心藝術の尊重されてゐるものが出版されて、早く俠客傳や仇擊ちの如き、非似武勇談が少年少女雜誌から姿をかくしてほしい。

心理學上より見たる少年少女の讀物選擇

松本亦太郎

精神的動作や、生命の度から考察すると一歲乃至六歲は一時期をなし、七歲乃至十一歲が又夫れと異れる一時期を畫する。動作や生命度が此期は著しく飛躍向上する。前の方を假りに幼稚期と稱し、後の方を兒童期と稱する。夫れから十二才乃至十九才は又心の働が兒童期より一段向上する。之は靑年期である。そこで今問題になつてゐる物を讀む事に關して少年少女と云ふのは兒童後期の十歲から靑年前期の十四歲迄の間の年齡の者を包括すると見る、若し兒童期の終までとすれば十二歲が略少年期の頂上になる。此期間にどんな讀物を選擇す可きかと云ふ事を心理的に考へると、第一は少年期の心身の働に順應する類のものを讀むのが可い、夫れから第二は靑年期、壯年期に於ける心身の正常なる發達を誘導し、充實せる生活を將來する樣なものを讀むのがいい。少年時代は強く印象さ

れ易い、而して其印象が永く後の生涯に殘つて其人の性格に比較的強い影響を及ぼすから、面白いからと云つて矢鱈のものを讀んではいかない。

少年期に最も著しく發展する機能は運動と知覺である、外部動作が急速に敏捷になり巧妙になる可能性を大に有するのは此時期であり、外界に對する視、聽、味、臭の知覺が鋭利、精細になる可能性を大に發揮するのも此時期に於てする。即ち精神の外向的方面が著しく發展し得る時であつて、思慮反省の如き内向的方面はまだ青年期程に盛でない。感情は可より強く發動するが、夫れは外部動機が主に誘發する種類の感情であつて、内部動機から潤色せらるゝ事が淺い、青年に比すれば少年の心は餘程客觀相を帶びてゐる。

如上の心理から少年は禽獸蟲魚、樹木、砂石、水流、丘陵、日月星辰の如き自然界の事物に大なる好奇心と興味とを感ずる。夫から又夫等の事物を相手にし種々の動作遊戲を試みる。夫れであるから自然の事物事變を少年の好奇心と興味に適する樣に物語り而して自然を相當に理解せしむる樣に仕組まれた讀物が少年の爲めに選擇されねばならない。イソツプ物語の類は噺が教訓に過ぎ又短きに過ぐるが或る度までは禽獸が相互話をしたり花や實が話をしたり星が物を言つたりする樣な擬人化したものも可い、が餘り荒唐無稽になつてゐるものは少年を虛僞に陷れるから不可である。又少年は活力が增進しつゝある時であるから活潑、勇敢なる動作を欲する、併し單に少年の興味を唆る爲に作つた冒險談は有害である。少年に了解される程度に於ての正義の目的に對し勇敢活潑に動作することを書いた物語の樣なものが少年の讀物として適當である。少年文藝は少年の正常なる心の欲求に糧食となるもので、其變態的非望を發動させる樣なものであつてはならない。加之其少年の將來の心を正善に導く樣なもので無ければならない。キツプリングのジヤングル、ブツクの中の物語は何れも如上の見地から見て推奬する事の出來る天容快濶の讀物である。或は鹽原多助の物語や、上田萬年君の英雄史談や、スマイルス自助談の如きは古いものであるが、兎に角是等の類型に屬する讀物が、興味もあり少年の精神に對し保健的の讀物である。

「童話」藝術の地位を理解するために

小川未明

大人の感情や、感覺は、少年時代の感情の成長である、感覺の堆積、若しくは複雜化したものであると解釋するところに、いまゝでの少年文學の誤謬が胚胎すると見做さるのであります。

成程、自分の體は、過去からの繼續であり人格を構成するに至つた、いろ〳〵の經驗や、生活上に必要なる知識等は、その長い月日の間に習得されたものにちがひないけれど、少年時代に於てあつたものでも、大人になつてしまつてから、全く失はれたものゝあることを知らなければなりません。

第一、その時代によつて、接觸する生活面が異なるものであるから、その人の境遇上からも、またその性格の強い、弱いことからも、子供の時分の感情や、夢想や、その特種的の感覺が、たとへ同一の人間だからといつて、いつまでも持續さるとは限つてゐないからであります。

それなら、何が、少年時代に於ける共通なしかも特種的な感情であり、感覺であり、そして、それを有するがために、大人の時代には見ることのできない、美しい世界すら、獨りこの時代にのみ見ることの出來たといふのは、何かといふに、――それを、普通、「童心」といふ言葉で名稱してゐます。

この童心が、大人の心を造つてゐるところの、言ひ換へれば、今日の心の要素となつてゐる、常に對社會的に敏いところの利己、競爭、妥協等のものと全く別種であつたことは、言ふまでもないが、やがて今日の大人を支配しつゝある心が、即ち童心の發達でも、また成長でもないといふことを證するに他ならないのです。

ワアズワースが、子供の時分に見た、自然には光りがあつたといつたのは、よく少年時代のシンセリテイを言ひ現はしたものと思ひます。往々、詩人の中には、この少年時代の童心を終生失はずに持つてゐたものがあつた。

彼のアンデルセンも、その一人であれば、トルストイも、また、その一人であつたと言ふことができる。なぜなら、この二作家の如き、その童話に於ける態度を見れば、明かに分るでありませう。

少年の想像、正義心、また、善と惡に對する、正しい理解心とを強く信ずるがために、是等の作家は、一生懸命になつて、美と眞とを少年に向つて叫んだのであります。童心を失はなかつた、これ等の天才の藝術は、獨り、少年の心を感動さしたばかりでなしに、また、良心を有するすべての大人の心を深く動かさずには措かなかつた。

いまゝで、童話と言はれたものは、大抵はかゝる一義的のものでなく、大人が、子供を教訓的に、己等の欲する方に、指導するために、またそれに役立つものとして扱はれてゐた。

故に、今日、正當な意味に、少年文學の地位を理解し、併せて、その作品を批評するためには、眞の童話藝術は、獨り、童心からの所産であるといふ特種性を認識するためにも、これまでの作品が、嚴選される必要を感ずるものです。(六月二十六日)

よい讀物の鑑賞法

羽仁もと子

大人の讀物に就いては最近極めて頽廢的な傾向が著しい爲、讀物の良否に就いては大分問題となつてゐるが、子供の讀物は人生觀や深刻な情緒もないし、單なる「お伽ばなし」だからとの見地から左程氣にもせず、大人の讀物ほどではないから害にはならぬと考へてゐる。之が非常に子供の育つ大切な時期を害してしまふのである。例へば繼母の事を

書いてみたり、妙に弱者に同情する誤つたセンチメンタルを誇張した讀物は害になるといはれてゐる樣だが、近頃は特に淺薄な讀物が多い。之等に對しては母親は實に無理解であつて、桃太郎の話をして聞かせる場合も、母親に何等の中心點がなく、桃太郎はたいへん強い人で惡い鬼を退治して人の爲になつたと云ふ調子一點張りで話して行くことは、子供に知らず／＼軍國主義を注入することゝなる。之は非常に母親の心すべき事であつて、桃太郎は智慧もあり、人情もある人物であり、鬼はこれまで人の物をぬすんで惡いことをしてゐたが桃太郎の德に感じてよろこんで寶物を投げ出して罪を悔いたと云ふ風な教育的なものが、母の心情の根底になければならぬ。

日本の「お伽ばなし」にもなか／＼いいものがあるが、話方がまづいと全く駄目にして仕舞ふ。飜譯に就いても、飜譯ではなくとも深く子供の心を考へないものは、見當違ひなことを教へる結果になる。こうして仕込まれて來た子供は、少年少女となつても、飛んでもない所に女王や惡魔の飛び出して來る淺薄な讀物しか興味を持たなくなる。近頃は小學校ではお話の時間を設けてゐるが、先生も生徒も只筋の面白い低級な話ばかりなのでとても聞いてはゐられない。藤村の「故郷」を此處（自由學園）の一年生に讀ませてゐるが、生徒はもつとむづかしいものをやつて來たのだけれども、その讀ませ方から非常に深いものが得られる。即ち生徒達は藤村が文豪であり、現在比肩する者がないと云はれる程の人としては、文章は普通見たり聞いたりすることであつて平凡だと云ふが、それを段々研究して行くと、其處に並ならぬ感じがあり、良き詩があり、之はよく味ふべきものであつて暗誦すべきものでないことを知るのである。そして他の波瀾重疊を極めた物語は荒唐無稽を見てゐる樣で極くつまらぬものとなる。私は生徒と一緒に「青い鳥」を讀んでゐる。之は生徒の大部分が既に讀んだことのあるものであるが、幸福の國にチルチルとミチルが這入ると、多くの幸福が彼等の面前を通る。しかしこの幸福は一々追掛けるものではなく自分が入用な幸福だけ取る樣にと光が云ふ——と云ふことに關しても各自の天分に應じて各各自分の秀れた方面を取ることが即ち自分のそばにある幸福を取ることだと云ふ風に說明すると、子供等は下らない少年少女雜誌を棄てゝ「青い鳥」を熟讀玩味することになる。それ等は皆母親が亂讀を放任して置いたからである。子供にはよい藝術品、深みのある讀物を與へなければならぬ。文藝物でもよいものはそれだけ充分考へるものがあり、そのため、活動やなにかにちよい／＼行く必要がなくなる。お祭騷ぎの讀物は心を空にするから、浮調子に次から次へと漁りたくなるのである。私自身も少年少女讀物を書き、又小さな飜譯をしたことがあるが、子供によい讀物を與へることは教育の大部分をかなり果すことと思つてゐる。よい讀物は數々ないが、數なくともそれで濟むと思ふ。

兒童の讀物

東京高師附屬小學校主事　日田權一

◇讀物は精神の糧である。身體を養ふに食物の必要なるやうに、精神を育てるには讀物がなくてはならぬ。けれども身體の要求に適した食物のみがよく身體を養ひ得るやうに、精神の要求に應ずる讀物のみがよく精神を育てることが出來る。否らざるものは常に害があつて益のないものである。だから兒童讀物の問題が起る。

◇一般に成長しつゝある兒童の身體は成長の時期によつて要求する食物を異にし、個人的には又その體質によつて食物を選ぶべきであるならば、發達しつゝある兒童の精神も亦發達の時期によつて要求する讀物を異にし、又その個性によつて讀物を定むべきであらう。

◇一體兒童精神の發達の時期から考へると、理知の未だ發達しない幼少なものは主客未分の幻想の世界に住んでゐるので、所謂神話や童話童謠の様なものが適するが、八九才頃から幻想の夢が覺め始めると男の子には英雄物語や冒險談のやうな歴史譚・事實譚が好まれ、女の子には可憐な少年少女に關するあはれつぽい話が迎へられる。次いで十二三才から性的傾向に覺ざめ始め、且つ現實の人生問題に直面するやうになると、趣味更に廣さと深さとを加へ、現代の小說や詩歌や劇のやうなものを要求するやうになる。

併しこの方面は主として感情的要求に應ずるもので所謂文藝讀物である。兎角讀物といへば只この方面のものを提供しさへすればよい様に考へてゐるものもあるが、之は兒童讀物の一部面である。そしてこの方面の讀物に耽けると動もすれば空想に走り、感傷的に傾き、精密に事物を觀察し、正確に理路を追ふて、思慮判斷することが出來難くなる。少し硬い讀物になると精確に讀み下すことがいやになる。近頃の兒童は稍この弊に陷つてゐる點があるではあるまいか。

◇この弊に對しては兒童の自然界に對する好奇心に應じて觀察力を練り、汽車汽船飛行機等に對する興味を誘ふて工夫考案力を養ふ爲めに、理科的讀物を提供するがよい。これは遲くとも八、九才頃から鮮明な繪解きによるものから始めて、尋常小學校を卒へ、高等小學校や中等學校に入れば學校の理科教育と相俟つて適當なものを與へなければならぬ。この方面は主として理智的要求に應ずるもので所謂科學讀物である。現在はこの方面のよい讀物には缺乏を感じてゐる。

◇次に大切なものは青年期に入つて彼等の内面から發展する人生觀に對するよい指導者としての讀物である。之に對して早くから注意せられてゐる一は性教育に關するものであらう。一體性的本能の發達がいかに少青年の内面的生活に一展開を來すかは申すまでもない。而しこの感情の發展が人間一生の支配するものであるから、如何に之を指導すべかき

は教育上の一大問題である。けれども之に對して理論的にはともかく、實際的には未だ確定した良案はないと云つてよからう。然るに近來この性教育に關する讀物が單に劣情をそそる丈のものとして大びらに取扱はれ、ことに近頃の婦人雜誌の編輯振と來ては誠に見るに堪えぬものがある。かゝる劣惡なる讀物が婦人物として家庭にも學校の教室や、寄宿舍にも大きな顏をして平然と這入つて來るが、親子一緒に見るに堪えぬもの、姉弟一緒に讀むに忍びないものも少くない。之れは編輯當事者の反省は勿論一般に教育に從事するものも又文教の局にあるものが、協力して相當の取締を爲すべきである。かゝる讀物がいかに少青年の風紀を紊し德操を汚す誘因となつてゐるか分らないと思ふ。

◇

次に今一つ大切なことは青年期に入り、彼等の鋭い批判的眼光が社會一般の人生問題に注がれる時に際し、人生に對する公正なる批判力を養ひ得る讀物を提供することである。一體今日の我學校教育では上下を通して人生問題に對する直接の指導が行はれてゐない。一切の學校教育は只上級學校への入學準備の爲か、卒業後の社會的位置の爲にのみ行はれてゐるの觀がある。加之、その教育の內容が面白くもない語學の諳誦や冷たい數學の演習や、總てを機械化せなければ止まない自然科學の詰込みである。されば凡ゆる人生問題を脫き人間精神の人格活動として、公正に解釋し得る素地が作られてゐない。もしゐるとすれば、それは自然科學的、唯物的に解釋し得る素地しか與へてない。そこで中等學校を卒へ、專門學校に入學する位の青年が內面的自覺によつて一度人生問題に醒め、之を批判せんとする時、彼等の眼は單に所謂、唯物史觀的社會思想に向ふより外にないのである。彼等はかゝる一面的見解を以て人生問題社會問題を根本的改造し得る最高原理でもあるが如く、盲信してゐるので、身命を賭して直接之を實行せんとするのである。所謂社會科學運動といふのがそれである。その盲目なる熱情は愛すべきであるけれども、かゝる一面觀に沒頭して馬車馬的に側目もふらず邁進する態度は寧ろ憐むべきものである。されば學校教育に於ては勿論一般の讀物として、廣い見地に立つて公正に人生を批判し得る素地と餘裕とを與へる讀物を彼等青年に與へるとが今日の急務である。それは直接倫理、哲學政治經濟及社會問題等を論述せる讀物だけでなく一般の文藝的なものゝ內に流るゝ思想に於て特にその必要を感ずる。兒童讀物としての文藝は眞に人生を公正に解するものでなくてはならぬ。

◇

最後に感ずることは外國物の輸入についてである。これは我國の現今の文化の總てに關することで獨り讀物に限つたことではないが、殊に幼少なる兒童の讀物にまで、殆んど世界各國の神話、童話が潮の如くよせて來る。それは兒童の思想を豐富にすることになるのであらうが折角大切な我國民的情操陶冶の基礎を養成せねばならぬ時に際し、かゝる雜然たるものを提供すること兒童の純粹の感情を却つて不純ならしめる嫌がある。併し我國固有のものだけで將來の國民の情操陶冶には不十分な點もあるから、輸入すべきものは大に輸入せねばならぬが。此等は適當なる國民的の選擇と國民的同化とを要する、多くのもの

の中から然るべきものを選擇し、選擇せられたものはよく日本的のものに同化し純化して與ふべきではあるまいか。この點に付いて現在の兒童讀物には大に遺憾な點が少くない。

尤も青年期に入り彼等に、相當の批判力が出來る樣になれば、その選擇、同化は彼等自身行ふべきであらうから問題は別である。

子供の讀物に就いて

楠山正雄

　子供たちのために親が代つて讀物を擇んで與へる必要のあるのは、玩具や菓子と同樣に本をほしがる八九歳前後までのことではあるまいか。小學も三年以上になり、年も十を過ぎると、ほんたうに好きで本をよむ子と、さうでもない子との區別がはつきりして來るし同じく本をよむにしても、どういふ本を好んでよむか、自ら傾向が分れて來て子供たちめい〳〵の好む方向へ赴かせる外はないので、指導者としての親の權限は著しく狹められる。この場合狹められた權限中で、親は子供のために偏見に囚はれず公明で同情のある顧問役で滿足してゐる中に、子供の內から萌えてくる個性的なものに對して鋭い洞察を怠つてはならない。春期に近い少年少女の九分九厘までが、感傷的な文藝に溺れる時代は必ず一度はある、詩人か小說家にどこの家の子供もみんな成つてしまふかと思はれる時代が一度はある、その中で詩人にも小說家にも成り得ないかまたは成らうともしない別の魂が成長を續けてゐることを認めえないでゐる親達が無用の感傷を加へるために、本來その傾向の多くない者までも文學少年たり文學少女たらしめる場合も少くないやうだ。大抵の本は——醫師ドーバンの秘書が、傳說の金瓶梅のやうに——頁と頁の間に人を殺す毒氣を藏してゐない限り、或程度までは小供たちの自由に任せておいてよいと思ふ。彼等の乏しいしかし自由な經驗と想像で解釋させ選擇させておいてよいと思ふ。その意味で古い文學の本——例へば近松とか平家物語とか太平記とかいふやうな本を、むづかしながら原作のまゝ讀ませるがよい。子供のために再話したものは再話者によほど創作家の才能がない限り原作に對する興味までも失はせてしまふ。そこへ行くと外國文學はいかに忠實なしかし言葉の魅力を缺いたまづい翻譯よりは上手にこなれた抄譯がよい。

　童話は小さい子供のための胃をいためない位チヨコだ。大きい小供にはいゝ文學を原作のまゝ與へればよい。それよりも今日日本の子供の一番欲しがつてゐるのは、詩人の心をもつたほんとうの科學者の書いた科學の本だ子供の言葉で書かれた社會常識の本だ。それよりも今の子供の讀物に何よりもわるいことは西洋の子供のバイブルのやうな、昔の日本の子供の四書五經のやうなこれ一部で小供の精神の骨組を作る本の全く無いことだ。空虛なミリタリズムでなしに、新しい自由な、いい意味で道德的な小供の心を、意欲を鼓舞するやうな本がほしい。

　一切の課外讀物を無用にするまでに、國定教科書を今日の子供たちの心に親しいものに改造してもらいたい。

人として藝術家としての有島武郎

秋田雨雀

私はこの短い旅行の間に日本の藝術殊に文學の觀念に關する驚くべき變形を見た。それは文學者自身及び文學に對する商業主義的な觀念である。大震災後の反動的傾向は文學者の生活を明かに二分して各々の領野が全く交渉を生じなくなつてゐる。そして文學の一般的主潮は文學の商業主義化を是認するやうになつて來た、よしこの商業主義化を喜ばない人々でもこれを當然の社會現象として又一つの過程としてだけは是認せざるを得ないやうな狀態に置かれてゐる。文學者の醜い小ブルジョワ的な態度が益々盛になつて來て、文學は一つの社會的娛樂機關であるといふ風な觀念を文學者自身が世間に與へてゐる。

他のあらゆる社會現象と等しく、先驅者としての藝術家の戰鬪的分野は次の時代の踏襲者等によつて放縱な享樂の原野とされてゐる。しかし近代日本文學の短い歷史を見て、その時代時代の先驅者の努力や痛苦を本當に見る者には、今日の日本の一般の文學者の安易怠惰の生活は深刻な怒りの感情を與へ、そしてそこから眞の藝術家はその何れの道を進むべきであるかといふ決心を促さずには置かないであらう。

私はこの旅行の間にも、機會のある每に日本文學の歷史を形造つてゐる先驅者の痛ましい戰鬪に就て語らうと試みた。例へば山田美妙齋、原抱一、北村透谷、國木田獨步、岩野泡鳴、島村抱月そして私は今語らうと思ふ有島武郎のやうな人々についてである。これらの人々の或る者はその當時のヂャナリズムを支配してもゐたであらうが、而も全體としてこれを見る場合に決して人間としてその短い生涯に十分に酬いられてゐたとは思はれないばかりでなく、そのあるものはその全生涯を實にあはたゞしい焦燥と血みどろな爭鬪を續けて死んで行つてゐる。そしてこれ等の人の大部分は自分の職業としてとつた藝術によつて物質的な恩惠を得ることはすくなく、あるものは貧窮と病苦の二重の苦しみの爲に生活を早めてゐた。然しそれらの人の仕事は日本の藝術及び思想生活に絕えず刺戟を與へ生活態度に豐富な養分を供給して來た。例へば北村透谷といふ一個の詩人の生活及び藝術を考へてみよう。又國木田獨步の藝術家としての生活を考へてみよう。私たちはこの二人の藝術家によつて何を敎えられるであらうか。二人はお互に異つた時代に生れ、異つた藝術觀を持つてゐながら、そこに共通な苦痛を擔はされて死んで行つてゐることを死ることが出來る。岩野泡鳴、島村抱月、有島武郎の三人の藝術家は同じく生活態度も藝術觀をも異にしてゐ乍ら何處かに一點共通した運命を擔つて死んで行つてゐはし

ないか？この三人の苦痛は何處から來てゐるであらうか、人生に於てその人等の苦しみはどれだけの意味を持つてゐるのであらうか、私等はそれらを十分に考へてみる必要はないであらうか？

○

有島武郎（一八七八――一九二三）は明治十一年の三月三日に生れて大正十二年の六月の九日に死んでゐる。この世の中にゐたことは四十五年である。

有島武郎の第五週年の記念講演會のときに、私は故人の最も特色のある印象として人間に對する態度の不變であること、即ち、「お天氣じやうごでないこと」を擧げて、この人は何時逢つても前に逢つたときとおなじ樣な新鮮さを以て人に接する、さういふ人間としてのいゝ性質は何處から來てゐるか、例へばそれは性格的なものであるか或は修養によつて得た後天的なものであるかどうかといふ意味のことをいつた。この「お天氣じやうごでない」といふやうなことは人間の性格を論ずる上に於て重大なことでないかも知れないが、有島武郎の書いた色々な感想や自傳のやうなものを見ると、彼が如何に自分の性格の缺點を自覺し如何にしてそれらの缺點と戰つて來たかといふことが理解される。有島武郎といふ人の生涯は、個性によつて自然を征服しやうとして、結局自然によつて個性が征服された一個の矛盾した存在のやうな氣がされる。これは言葉をつくしてゐないが、あの人の生活を知つてゐる人、あの人の作物を本當に讀んでゐる人は私の言葉をパラフレイズしてくれるであらう。

有島武郎の文學者としての生涯にまつたうに自分を育てゝいつた一個の青年の歴史と見ることが出來る。その最期の悲劇的であるといふことさへもあの人にとつてまつたうな生き方であるとさへ言ひ得る。

○

私は嘗て有島武郎の藝術家としての一生は日本の社會生活の三つの大きな時代によつて進んでゐると云つたことがある。三つの大きな時代といふのは日清戰爭、日露戰爭、歐洲大戰である。いふまでもなくこの三つの戰爭は日本民族が近代國家主義の體系をとつたその當然の結果として生れたものであるが、有島武郎の人間として、亦藝術家としての生ひ立ちはこの社會的事實をあらゆる時代に於て最も深く反映してゐたといふことは非常に興味のあることである。

日清戰爭以前の出來事としては、故人の自傳風の記錄によると、明治二十二年憲法發布式の朝、森文部大臣が西野文太郎の爲に刺されたといふ一つの事實が故人に政治家や軍人として立つてゆかうといふ興味を失はせて、文學的生活に、は入る間接的な動機になつてゐる。而も森文部大臣の暗殺には日本の社會生活の新しい展開に際しての急進主義と保守主義との衝突が示されてゐる。日清戰爭の終へた後、即ち二十九年に故人は學習院を了へて札幌の農學校に入學してゐる、そしてそこで始めて新渡戸博士について英文學を學んでゐる。これは故人が文學を通じて世界の思潮に觸れた最初といつていゝ。又同時に故人と日本の文學とを結びつけた最初でもあつたらう。この時代に於て日本の文學は始めて縱の傳統からはなれて横の傳統に對して窓を開いたのである。「國民の友」「文學界」「女學雜誌」が生れてローマンチシズムの最初の運動が起つてゐる。二葉亭の「浮雲」鴎外の「舞姫」露伴の「一口

劍」紅葉の「多情多恨」二葉の「たけくらべ」中西梅花の「新體梅花詩集」が生れてゐる。上田、島崎、馬場、戸川等のローマンチシズムの先驅者等の姿が現はれて來る。

この時代に北村透谷の死は故人の感じ易い性格に深い強い印象を與へてゐたことは、これも彼自身の記錄によつて明かである。そしてこの一人の詩人の死によつて得た印象があの人の悲劇的な最期の決心に潛在的な影響を與へてゐないとは斷言することは出來ないであらう。

こゝに私たちの注意しなければならないことはこのローマンチシズムの影響は日本に於ては單に文學的な運動に停つてゐたといふことである。若し社會的な性質を帶びてゐたとすれば僅かに女性解放の運動及び宗教的運動に停つてゐたであらう。

日露戰爭時代は故人は外遊中であるがこの外遊は故人の生活を全く解放して「檻の中から出た獸のやうに」したといはれてゐる。ブランデス、ツウルゲーニエフ、ホイツトマン、イブセン、トルストイ、クロポトキンが故人の思想の中に嵐の様に吹き込んで來た。故人の留守中の日本は戰爭の影響を受けて自然主義の勃興時代であつた。故人は四十年の二月にロンドン郊外の勞働者街の三軒續きの貸長屋にプリンス・クロポトキンを訪ねてゐる。この時の印象は、後でクロポトキンの印象として書かれた美しい印象記の中に記されてゐる。「厚く大きく溫かき雄々しき掌」と彼は云つてゐる。

○

有島武郎の文學的生活は嚴密に言へば明治四十三年から始まつてゐると云つていゝ。四十二年には結婚をしてゐる。四十三年から大正六年までの製作によつて彼は始めて作家として、單に作家としてではなく當時の藝術家のレベルをはるかに高く拔き出でた作家として容認された。彼の生れた時は自然主義の餘波の中から人道主義の叫びが擧げられた時であつた。しかし彼の製作の大部分を通して私等の見ることの出來る特色の一つは、彼の人生に對する科學的考察である。そこに彼が後で人道主義の大部分の人と別れを告げなければならない原因が存してゐた。「二つの道」「老船長幻覺」「反逆者」「或る女のグリンプス」「An Incident」「宣言」「サムソンとデリラ」「大洪水の前」「クロポトキンの印象」「死とその前後」「惜みなく愛は奪ふ」「カインの末裔」「平凡人の手紙」「クララの出家」「凱旋」「迷路」これ等の作物をみて私等の感ずることは故人がローマンチシズム、リアリズム、ヒウマニズムの三つの上に跨つてゐながら明瞭なリアリストの手法を持つてゐるといふことである。この手法は故人の死んだ年、即ち大正十二年頃まで續いてゐたが、その間に短い停頓の時代があつて、急轉直下驚くべき主觀的な飛躍の時代には入つてゐるといふことは注意すべきことである。

歐洲大戰後に於ける日本文學の思潮は主觀的であつたといふことは世界文學の一般の基調とほゞ同じものであつたと云つていゝ。この時代に於て注意しなければならないことはローマンチシズムの時代に於ても自然主義時代に於ても生れるべくして生れなかつた社會思想と文學との結合がこの時始めて生れて來たといふことである。社會思想と文學との交渉がマルクシイズムの影響によつてなされたと云ふ事はドイツ、ロシアに於けるものと殆んど軌を一にしてゐる。マルクシイズムによつて影響された文學的形式の主觀主義的であつたといふことは

社會形態の變革を豫想した痙攣狀態と見ることが出來るであらう。

有島武郎のこの時代に於ける生活態度は當然私たちの興味の對稱とならなければならない。故人はこの新しい階級文學の勃興に際してとつた態度は知識階級の新興階級に對する三つの態度のその一つであつたと私は信じてゐる。新興階級に對する三つの態度とは一つは眞正面から反對すること、一つは正直に自滅の道を急ぐこと、一つは指導的態度を以てそれに臨むことである。彼は言つてゐる。

（僕はブルジョワは必ず消滅して、プロレタリヤの生活、從つて文化が新に興らねばならぬと考へてゐる者だ。こゝに至つて僕は何處に立つべきであるかといふことを定める立場を選ばねばならぬ。僕は藝術家としてプロレタリヤを代表する作品を製作するに適してゐない。だから當然消滅せねばならぬブルジョワの一人として、さうした覺悟を以てブルジョワに訴へることに自分を用ひねばならぬ。）

又彼は「文化の末路」で

（現在の文化に浸つて成長した者にとつて實際に殘された道は……實は二つよりあり得ない。奧底の知れないデカダンの生活へか。極端に鈍い而して圖太い神經を以て他の文化へ移入する盲目的努力へか。）

と言つてゐる。

有島武郎のこの新興階級に對する態度は正しいか正しくないかは議論の餘地は十分にあるにしても、彼の人間としての正直さ純情さには何人も頭を下げないではゐられないであらう。この時代に彼の藝術の上に驚くべき變化が起つて來た。「或る女」「カインの末裔」「生れ出づる惱み」「死とその前後」「實驗室」などの作物に現はれてゐるあの健實なリアリズムの描寫は一變して激越な主觀的な詩の形をとるやうになつて來た。「詩への逸脫」はこの藝術的變化を十分に說明してゐると思ふ。一方彼は盛なる新興階級の勃興及びその意義を容認し作ら、自己批判の峻烈さの爲めに喜んで新興階級の運動に加はることが出來ないその惱みの中に生れた藝術はこの晩年の主觀主義的藝術と見ることが出來るであらう。

○

有島武郎の死に關しては、私は今でも語るのが腹立しい感じがする。しかしそんなことばかりは云つてゐられないであらう。私はノートを披いて見る。

私は故人の死に關して彼の死を是認させた思想的根據として「文化の末路」の中で彼が度々語つてゐたennui（倦怠）といふ言葉を思ひ出す。彼は又「底なしの空虛」といつてゐる。この「底なしの空虛」を充さうとしたものは彼の最後の戀愛であり、又彼の死滅でもあつた。「生活の高潮が愛になり、愛の高潮が死になるとは不思議な矛盾である」と言ひ又「詩への逸脫」の中では戀人との抱擁が死に達するといふことをも言つてゐる。こゝで私等は彼の用ひてゐた「愛」といふ言葉の概念について考へて見る必要が生じてきた。彼は度々この「愛」といふ言葉を用ひてゐる。そしてこの言葉は言葉としてはおなじでも彼の與へてゐる概念にかなりに大きな相異があつたやうに思ふ。

彼の用ひた「愛」といふ言葉は、最初はキリスト教風の博愛といふものと同意義に用ひられてゐたが中頃ではクロポトキン風の相互扶助の觀念と一緒になり最後には本能に類したものとして用ひられてゐる。

彼は藝術の發生は「愛」によるのだと主張してゐるけれども「愛」そのものゝ解釋は明かに異つてゐた。そして最後に彼の死を急がせたところの愛の內容はこの最後のものであつたらしい。それ故若し人は固定した道德觀念を以て最後の動作を批判したならば明かに不道德と言ひ得るかも知れない。しかし彼の哲學にはその意味での道德も不道德も最早存在しなかつたのである。極端な言葉で言へば自殺的本能を持つた一個の動物がその本能によつて自滅したといふに過ぎない。この氣持は「瞬なき眼」といふ短い詩によつて明かにされてゐる。

あからさまにいはう。
大千世界は瞬のなき眼だ
みひらいたまゝ、瞬きをしない眼だ。

恐らく文學的形式によつて現はされた虛無的思想のこれ位深刻に現はされたものは少いであらう。

「獨斷者の會話」に現はれた社會思想家と主人と思はれる人の會話を見ると、有島武郎の社會思想に對する批判を見ることは出來るが、然し主人が社會思想家の二つの態度の何れをも自らとつて進むべき意志を示してゐない。こゝは大きな斷壁の上に立つてゐる主人の悲壯な姿を見ることが出來る。

次に最も興味あるものはこのおなじ「獨斷者の會話」の第四の對話である。私はこの對話によつて有島武郎の女性觀を知ることが出來る。

一般の男性は女性をAはA、BはB、CはCとして、その一人の「女によつて女性を代表させてそれで滿足してゐるけれどもドン・ヂュアンはA、B、C、Dの各々の女からそれぞれの特質をとつて、それらによつて「永遠の女性」(完全女性)を形造らうとしてゐる。ドン・ヂュアンは一般には浮氣者といふ概念を以て取扱はれてゐるが、その實ドン・ヂュアンは驚くべき理想家であり、勇敢なる人生の闘士であるといふのである。いふまでもなくドン・ヂュアンの女性に對してとつた態度は有島武郎の女性に對する態度である。女性讃美者としての有島武郎は一面から見れば個的女性のドン・ヂュアンに對する反逆的態度によつて斃れたとも言ひ得るのである。ドン・ヂュアンは完全女性を創造しやうとして闘つてゐる間に一個の女性は自分一個によつて女性全部を代表させて長い旅程の上にある男性を私有しやうとする、そしてこの反逆が勝利を得たのである。

更に第五の對話では子供に對する虛無的思想が描き出されてゐる。恐らくこの子供に對する考はあらゆる彼の惱みの最後に殘されたものであらう。子供を教育するといふことは嚴密な意味で親には許されてはゐない、子供の所有者は親ではなく自然であるといふ考へ方である。この心境に彼が達するまでの惱みは殆ど想像に餘る程のものである。然し一般世間の幾人がこの心境を理解してくれるだらう。彼は遺書の中でその愛兒達に宛て「父は戰つてきたよ……」と書いてあつたのはその文字通りの最上の觀念で私等は受取つていゝ。私に前に有島武郎の生涯を見るとまつとうに育つた一個の青年の姿を見るといつたが、その青年は最後にこのやうな悲慘な――客觀的に――生涯を終へてゐる。然し、私はまつとうに育つた一個の青年の正統に進んだ形であるといふことを何うしても否定しやうといふ氣にはなれない。なぜであらうか?(一九二七、七、五)

文藝的な餘りに文藝的な

芥川龍之介

一　解嘲

僕は何度も繰り返して言ふやうに「筋のない小說」ばかり書けと言つてゐる訣ではない。從つて何も谷崎潤一郎氏と對蹠點に立つてゐる訣ではない。唯かう云ふ小說の價値も認めて貰ひたいと言つてゐるのである。若し全然認めない論者があるとすれば、その論者こそ眞に論敵である。僕は谷崎氏と議論を上下する上に誰にも僕の肩を持つて貰ひたくない。(同時に又谷崎氏の肩を持つて貰ひたくないことも勿論である) 僕等の議論の是非を辯ずるのでないことは僕等自身誰よりも知つてゐるつもりである。僕はこの頃雜誌の廣告などに僕の「筋のある小說」さへ「筋のない小說」と云ふ名をつけられてゐるのを見、俄かにその文章を作ることにした。「筋のない小說」とはどう云ふものかも容易に理解しては貰はれないらしい。僕は僕の辯じられるだけは辯じた。二三の僕の知人は正當に僕の說を理解してゐる。あとはもう勝手にしろと言ふ外はない。

二　ヒステリイ

僕はヒステリイの療法にその患者の思つてゐることを何でも彼でも書かせる――或は言はせると云ふことを聞き、少しも常談を交へずに文藝の誕生はヒステリイにも負つてゐるかも知れないと思ひ出した。虎頭燕頷の羅漢は暫く問はず、何びとも多少はヒステリックである。殊に詩人たちは餘人よりもはるかにヒステリックな傾向を持つてゐるであらう。このヒステリイは三千年來いつも彼等を苦しめつゞけた。彼等の或ものはその爲にとうとう發狂してしまつたであらう。が、彼等はその爲に彼等の喜びや悲しみを一生懸命にうたひ上げた。――かうも決して考へられないことはない。

若し殉教者や革命家の中に或種のマゾヒストを數へ得られるとすれば、詩人たちの中にもヒステリイの患者は必しも少くはないであらう。「書かずにはゐられぬ心もち」は、即ち樹下の穴の中へ「王樣の耳は馬の耳」と叫んだ神話中の人物の心もちである。若しこの心もちが

なかつたとしたならば、少くとも「痴人の告白」(ストリントベルイ)などは生れなかつたのに違ひない。のみならずかう云ふヒステリイは往々一時代を風靡してゐる。「ウエルテル」や「ルネ」を生んだのもやはりこの時代的ヒステリイであらう。更に又全ヨオロッパを擧げて十字軍に加はらせたのも、――しかしそれは「文藝的な、餘りに文藝的な」問題ではないかも知れない。癲癇は古來「神聖な病」と云ふ名を與へられてゐる。するとヒステリイもことによれば、「詩的な病」と呼ばれるであらう。

ヒステリイを起してゐるシエクスピイアやゲエテを想像するのは滑稽である。從つてかう云ふ想像をするのは彼等の大を傷けると思ふかも知れない。が、彼等の大を成すものはこのヒステリイの外にある彼等の表現力そのものである。彼等の何度ヒステリイを起したかは心理學者には或は問題であらう。しかし僕等の問題は表現力そのものに存してゐる。僕等はこの文章を作りながら、ふと大古の森の中に烈しいヒステリイを起してゐる無名の詩人を想像した。彼は彼の部落の人々の嘲笑の的になつたのであらう。けれどもこのヒステリイの促進した彼の表現力の産物だけは丁度地下の泉のやうに何代も流れて行つたであらう。

僕はヒステリイを尊敬してゐるのではない。ヒステリックになつたムッソリニは勿論國際的に危險である。けれども若し何びともヒステリイを起さなかつたとしたらば、僕等を喜ばせる文藝上の作品はどの位數を減じたであらう。僕は唯この爲にヒステリイを辯護したいと思つてゐる。いつか女人の特權になつた、――しかし事實上何びとにも多少の可能性のあるヒステリイを。

前世紀の末も文藝的にはヒステリイに陷つてゐた。ストリントベルイは「青い本」の中にこの時代的ヒステリイに「惡魔の所爲」の名を與へてゐる。惡魔の所爲か善神の所爲かは勿論僕の知る所ではない。しかし兎に角詩人たちはいづれもヒステリイを起してゐた。現にビルコフの傳記によれば、あの逞しいトルストイさへ半狂亂になつて家出したのはつひ近頃の新聞に出てゐた、或女人のヒステリイ患者と殆ど寸分も變つてゐない。

三 人生の從軍記者

僕は島崎藤村氏のみづから「人生の從軍記者」と呼んでゐたことを覺えてゐる。が、近頃又廣津和郎氏の同じ言葉を正宗白鳥氏にも加へてゐると云ふことを仄聞した。僕は兩氏の用ひられる「人生の從軍記者」と云ふ言葉をはつきり知つてゐない訣ではない。それは恐らくは近來の造語「生活者」に對する意味を持つてゐるのであらう。けれども若し嚴密に言へば、苟くも娑婆界に生まれたからは何びとも「人生の從軍記者」になることは出來ない。人生は僕等に嫌應なしに「生活者」たることを強いるのである。嫌應なしに生存競爭を試みさせなければ措かないのである。或人びとは自ら進んで勝利を得ようとする

であらう。それから又或人びとは冷笑や機智や詠嘆の中に防禦的態度をとるであらう。最後に或人びとはどちらも格別はつきりした意識を持たずに「世を渡る」であらう。しかしいづれも事實上はやむにやまれない「生活者」である。遺傳や境遇の支配を受けた人間喜劇の登場人物である。

彼等の或ものは勝ち誇るであらう。彼等の或ものは又敗北するであらう。但しどちらも宿命のある限りは、――僕等は皆ベエタアの言つたやうに確かに「いづれも皆執行猶豫中の死刑囚である」。この執行猶豫の間を何の爲に使ふかは僕等自身の自由である。自由である？――しかしそこにもどの位の自由のあるかは疑はしいであらう。僕等は實に種々雜多の因緣を背負つて生まれてゐる。その又雜多の因緣は必しも僕等自身さへ悉く意識するとは定まつてゐない。古人はとうにこの事實をKarmaの一語に說明した。あらゆる近代の理想主義者たちは大抵このカルマに挑戰してゐる。しかし彼等の旗や槍は單に彼等のエネルギイを示したのにとどまるばかりだつた。彼等のエネルギイを示すことはそれ自身勿論意味を持つてゐる。單に近代の理想主義者たちばかりではない。僕等はカアネギイのエネルギイにも力丈夫に感ずることは確かである。若し力丈夫に感じないとすれば、誰も實業家や政治家の立志譚に讀みたがりはしないであらう。しかしカルマはその爲に少しも權威を失つたのではない。カアネギイのエネルギイを生んだものはカアネギイの背負つて來たカルマである。僕等は皆僕等のカルマの爲に頭を下げる外はないであらう。若し僕等に、――少くとも僕に「あきらめ」の天惠の下るとすれば、それは唯ここにだけある訣である。

僕等は皆多少の「生活者」である。從つて逞ましい「生活者」にはおのづから敬意を生ずるものである。即ち僕等の永遠の偶像は戰鬪の神マルスに歸らざるを得ない。カアネギイは暫く問はず、ニイチエの「超人」も一皮剝いで見れば、實にこのマルスの轉身だつた。ニイチエのセザアル・ボルヂアに詠嘆の聲を洩らしたのは偶然ではない。正宗白鳥氏は「光秀と紹巴」の中に「生活者」中の「生活者」だつた光秀に紹巴を嘲らせてゐる。（かう云ふ正宗白鳥氏の「人生の從軍記者」と呼ばれるのは正に逆說的であると云はなければならぬ。）これは一光秀の嘲笑ではない。僕等は何も考へずにいつもかう云ふ嘲笑を放つてゐるのである。

僕等の悲劇は、――或は喜劇はこの「人生の從軍記者」にとどまり難いことに潜んでゐる。しかも僕等「生活者」のカルマを背負つてゐることに潜んでゐる。けれども藝術は人生ではない。ヴイヨンは彼の抒情詩を殘す爲に「長い敗北」の一生を必要とした。敗るる者をして敗れしめよ。彼は社會的習慣即ち道德に背くかも知れない。或は又法律に背くことであらう。況や社會的禮節には人一倍余計に背く筈である。それ等の約束に背いた罰は勿論彼自身に背負はなければならぬ。社會主義者バアナアド・ショウは彼の「醫者のディレンマ」の中に不

偉大な天才を救ふよりも平凡な醫者を救ひ上げることにした。ショオの態度は少くとも合理的であると言はなければならぬ。僕等は博物館の硝子戸の中に剝製の鷲を見ることを愛してゐる。しかし一匹の鷲を救ふよりも一匹の驢馬を救ふことに全力を盡すのに不思議はない。動物愛護會も未だ嘗猛獸毒蛇を愛護するほど寛大ではないのはこの爲であらう。がそれは人生に於ける、言はゞ Home Rule の問題である。もう一度ヴイヨンを例に引けば、彼は第一流の犯罪人だつたものの、やはり第一流の抒情詩人だつた。

或女人は「わたしの一家に天才のないことは仕合せです」と言つた。しかもその「天才」と云ふ言葉は少しも皮肉な意味を持つてゐなかつた。僕も亦僕の一家に天才のないことに安んじてゐる。(勿論僕のかう云ふのは天才の屬性に背德性を數へてゐる訣でも何でもない。)田園や市井の人々には古今の天才たちよりも生活の美德を具へてゐるものも多いであらう。紅毛人は「人として」の名のもとに度たび古今の天才たちの中にも、「生活者」の美德を數へてゐる。が、僕はこの新らしい偶像崇拜も信用してゐない。僕も「藝術家として」のヴイヨンは暫く問はず、「藝術家として」のストリントベリイは僕等の愛讀に價してゐる。しかし「人として」のストリントベリイは、——恐らくは僕の尊敬する批評家XYZ君よりもはるかにつき合ひ惡いことであらう。從つて僕等の文藝上の問題はいつも畢に「この人を見よ」ではない。寧ろ「これ等の作品を見よ」である。尤も「これ等の作品を見よ」と言つても、何世紀かは大河のやうにこれ等の作品を見る前に流れ去つてしまふであらう。しかもその又何世にかは或は一本の葦のやうにこれ等の作品を忘却の中へずんずん押し流してしまふであらう。若し藝術至上主義を信じないとすれば、(かう云ふ信仰を持つてゐることは必ずしも食ふ爲に書いてゐることと矛盾しない。少くとも食ふ爲にばかり書いてゐるは限りは)詩を作るのは古人も言つたやうに田を作るのに越したことはない。

僕は島崎藤村氏は勿論、正宗白鳥氏も「人生の從軍記者」でないことを信じてゐる。如何に兩大家の才力を以てしても、古來一人もゐなかつたものに忽ちなつてしまふ道理はない。僕等は皆僕等の中に「光秀と紹巴」とを持ち合せてゐる。少くとも僕は僕自身に關することには多少の紹巴になる代りに僕以外の人々に關することには多少の光秀になる傾向を持ち合せてゐる。從つて僕の中の光秀は必しも僕の中の紹巴を嘲笑しない。けれども幾分か嘲笑したい心もちのあることは確かである。

四　古典

「選ばれたる少數」は必しも最高の美を見ることの出來る少數かどうかは疑はしい。寧ろ或作品に現れた或作者の心もちに觸れることの出來る少數であらう。從つてどう云ふ作品も、——或は又どう云ふ作品の作者も「選ばれたる少數」以外に讀者を得ることの出來るもので

はない。が、それは「選ばれざる大數の讀者」を得ることと少しも矛盾してゐないのである。僕は「源氏物語」を褒める大勢の人々に遭遇した。が、實際讀んでゐるのは（理解し、享樂してゐるのを問はないにもせよ）僕と交つてゐる小說家の中ではたつた二人、――谷崎潤一郎氏と明石敏夫氏とばかりだつた。すると古典と呼ばれるのは或は五千萬人中滅多に讀まれない作品かも知れない。

しかし萬葉集は源氏物語よりもはるかに大勢に讀まれてゐる。それは必しも萬葉集の源氏物語を拔いてゐる所以ではない。のみならず又兩者の間に散文と韻文と云ふ堀割りの横はつてゐる所以でもない。單に萬葉集の作品は一つ一つとり離して見れば、源氏物語よりもずつと短いからである。元來東西の古典のうち、大勢の讀者を持つてゐるものは決して長いものではない。少くとも如何に長いにもせよ、事實上短いものの寄せ集めばかりである。ポオは詩の上にこの事實に依つた彼の原則を主張した。それからビイアス（Ambrose Bierce）は散文の上にもやはりこの事實に依つた彼の原則を主張した。僕等東洋人はかう云ふ點では理智よりも知慧に導かれ、おのづから彼等の先驅をなしてゐる。が、生憎彼等のやうに誰もかう云ふ事實に依つた理智的建築を築いたものはなかつた。若しこの建築を試みるとすれば、長篇源氏物語さへ少くとも評價を失はない點では丁度善い材料を與へたであらうに。（しかし東西兩洋の差はポオの詩論にも見えないことはない。彼は彼是百行の詩を丁度善い長さに數へてゐる。十七音の發句などは勿論彼には「エピグラム的」の名のもとに排斥されることであらう。）

あらゆる詩人の虛榮心は言明すると否とを問はず、後代に殘ることに存してゐる。いや、「あらゆる詩人の虛榮心」ではない。「彼等の詩を發表した、あらゆる詩人の虛榮心は」である。一行の詩も作らずに彼自身の詩人であることを知つてゐる人々もないことはない。（彼等は大小は暫く問はず、彼等の詩的生涯の上に最も平和だつた詩人たちである）。しかし性格や境遇の爲に兎に角韻文か散文かの詩を作つてしまつた人々だけに詩人の名を與へるとすれば、あらゆる詩人たちの問題は恐らくは「何を書き加へたか」よりも「何を書き加へなかつたか」にある訣であらう。それは勿論原稿料による詩人たちの生活に不便である。若し不便であるとすれば、――封建時代の詩人、石川六樹園は同時に又宿屋の主人だつた。僕等も賣文と云ふことさへなければ、何か商賣を見つけるかも知れない。僕等の經驗や見聞もその爲に或は廣まるであらう。僕は時々賣文だけでは活計の立てることの出來なかつた昔に多少の羨しさを感じてゐる。しかしかう云ふ現世も亦後代には古典を殘してゐるであらう。勿論食ふ爲に書いたものも古典にならないと限つた訣ではない。（若し或作家の姿勢として見れば、唯「食ふ爲に書いてゐる」のは最も趣味の善い姿勢である。）唯アナトオル・フランスの言つたやうに後代へ飛んで行く爲には身輕であることを條件としてゐる。すると古典と呼ばれるものは或はどう云ふ人々にも容易に

讀み通し易いものかも知れない

五 通俗小説

所謂通俗小説とは詩的性格を持つた人々の生活を比較的に通俗に書いたものであり、所謂藝術小説とは必しも詩的性格を持つてゐない人人の生活を比較的詩的に書いたものである。兩者の差別は誰でも言ふやうにはつきりしてゐないのに違ひない。けれども所謂通俗小説中の人々は確かに詩的性格の持ち主である。これは決して逆説ではない。若し逆説的であるとすれば、かう云ふ事實そのものゝ逆説的に出來てゐる爲である。唯何びとも青年時代には多少彼の性格の上に詩的陰影を落し易い。しかしそれは年をとるのにつれ、次第に失はれてしまふのである。(抒情詩人はその點では實に永遠の少年である。)從つて所謂通俗小説中の人々は老人ほど滑稽に陷り易い。(但しこの所謂通俗小説は探偵小説や大衆文藝を含んでゐない。)

追記。この文章を草し終つた後、僕は新潮座談會に出席した爲に鶴見祐輔氏の啓發を受け、所謂通俗小説と紅毛人の所謂Popular novelとの差別を考へ出した。僕は所謂通俗小説論はポピユラア・ノヴエルには通用しない。ベンネット(Arnold Bennett)は彼のポピユラア・ノヴエルにFantasiesの名を與へてゐる。それは事實上あり得ない世界を讀者の爲に廣げて見せるからであらう。かう云ふ意味は必ずしも幻怪の氣のあると云ふ意味ではない。唯人物なり事件なりの上に文藝的に何の刻印を打つてゐない世界と云ふ意味であらう。

六 獨創

現世は明治大正の藝術上の總決算をしてゐる。なぜかは僕の知る所ではない。何の爲かも僕には不可解である。しかし現代日本文學全集と云ひ、明治大正文學全集と云ふ文藝上の總決算は勿論、明治大正名作展覽會もやはり繪畫上の總決算である。僕はそれ等の總決算を見、如何に獨創と云ふことの困難であるかと云ふことを感じた。古人の糟粕を嘗めないなどとは誰でも易々と放言し易い。が、彼等の仕事を見ると、(或は仕事を見てもかも知れない。)今更のやうに獨創と云ふことの手輕に出來ないのを感じるのである。

僕等はたとひ意識しないにもせよ、いつか前人の蹤を追つてゐる。僕等の獨創と呼ぶものは僅かに前人の蹤を脱したのに過ぎない。しかもほんの一歩位、——いや、一歩でも出てゐるとすれば、度たび一時代を震はせるのである。のみならず故意に反逆すれば、愈前人の蹤を脱することは出來ない。僕は義理にも藝術上の反逆に贊成したいと思ふ一人である。が、事實上叛逆者は決して珍らしいものではない。或は前人の蹤を追つたものよりも遙かに多いことであらう。彼等は成程叛逆した。しかし何に叛逆するかをはつきりと感じてゐなかつた。大抵彼等の反逆は前人よりも前人の追從者に對する反逆である。若し前人を感じてゐたとすれば、——彼等はそれでも反叛したかも知

れない。けれどもそこには必然に前人の蹤を殘してゐるであらう。傳說學者は海彼岸の傳說の中に多數の日本の傳說のプロトタイプを發見してゐる。藝術も亦穿鑿して見れば、やはり粉本に乏しくない。(僕は前にも言つたやうに必しも作家をば彼等の粉本を用ゐてゐないことを意識してゐなかつたことを信じてゐる。)藝術の進步も――或は變化も如何に大人物を待つたにもせよ、一足飛びには面目を改めないのである。

しかしこの遲い步みの中にも多少の變化を試みたものは僕等の尊敬に價してゐる。(菱田春草はこの一人だつた)新時代の青年たちは獨創の力を信じてゐるであらう。僕はそのいやが上にも信じることを望んでゐる。多少の變化はそこ以外にどこにも生じて來るものではない。昔から世界には前人の造つた大きな花束が一つあつた。その花束に一本の花を挿し加へるだけでも大事業である。その爲には新らしい花束を造る位の意氣込みも必要であらう。この意氣込みは或は錯覺かも知れない。が、錯覺と笑つてしまへば、古來の藝術的天才たちもやはり錯覺を追つてゐたのであらう。

唯この意氣込みにもはつきりと錯覺を認めるものは不幸である。はつきりと錯覺を認めるものは?――しかし彼等も亦おのづから多少の錯覺を持つてゐるかも知れない。僕はかう云ふ問題には何とも言はれない一人である。けれども明治大正の藝術上の總決算を見、如何に獨創と云ふことの容易に出來ないかを感じずにはゐられなかつた。明治大正名作展覽會を觀た人々はいろいろの畫の可否を論じてゐる。しかし少くとも僕一人は可否を論じてゐる餘裕さへない。

七　文藝上の極北

文藝上の極北は――或は最も文藝的な文藝は僕等を靜かにするだけである。僕等はそれ等の作品に接した時には恍惚となるより外に仕かたはない。文藝は――或は藝術はそこに恐しい魅力を持つてゐる。若しあらゆる人生の實行的側面を主とするとすれば、どう云ふ藝術も根柢には多少僕等を去勢する力を持つてゐるとも言はれるであらう。

ハイネはゲイテの詩の前に正直に頭を垂れてゐる。が、圓滿具足したゲエテの僕等を行動に駆りやらないことに滿腔の不平を洩らしてゐる。これは單にハイネの氣もちと手輕に見て通ることの出來るものではない。ハイネはこの「ドイツ・ロマン主義運動」の一節の中に藝術の母胎へ肉迫してゐる。あらゆる藝術は藝術的になるほど、僕等の情熱(實行的な)を靜まらしてしまふ。この力の支配を受けたが最後、容易にマルスの子になることは出來ない。そこに安住出來るものは――純一無雜の藝術家たちは勿論、阿呆たちもやはり幸福である。しかしハイネは不幸にもかう云ふ寂光土を得られなかつた。

僕はプロレタリアの戰士諸君の藝術を武器に選んでゐるのに可也興味を持つて眺めてゐる。諸君はいつもどの武器を自由自在に揮ふであらう。(勿論ハイネの下男ほども揮ふことの出來ないものは例外であ

ろ）。しかし又この武器はいつの間にか諸君を靜かに立たせるかも知れない。ハイネはこの武器に抑へられながら、しかもこの武器を揮つた一人である。ハイネの無言の呻吟は或はそこに潛んでゐたであらう。僕はこの武器の力を僕の全身に感じてゐる。從つて諸君のこの武器を揮ふのも人ごとのやうには眺めてゐない。就中僕の尊敬してゐる一人はかう云ふ藝術の去勢力を忘れずにこの武器を揮つて貰ひたいと思つてゐた。が、それは仕合せにも僕の期待通りになつたやうである。

他人は或はかう云ふことも一笑に附してしまふであらう。それは僕も覺悟の前である。僕の見る所は淺いかも知れない。よし又淺くなかつたにしろ、十年間の經驗は一人の言葉の他人には容易にのみこまれないのを教へてゐる。しかし僕は兎も角も人並みに努力をつゞけながら、やつとこの藝術の去勢力の大きいことに氣づき出した。從つて唯これだけのことでも僕にはやはり一大事である。文藝の極北はハイネの言つたやうに古代の石人と變りはない。たとひ微笑は含んでゐても、いつも唯冷然として靜かである。

饒舌錄（感想）

谷崎潤一郎

先月の「改造」に戸川秋骨先生の「飜譯製造株式會社」なる一文が出てゐる。あの中には大分同感の議論があつた。

と云ふのは、此の頃われ〲の創作を英獨佛の諸國語に譯し、彼の地で出版したり上演したりすることが一つの流行になつてゐる。私の「愛すればこそ」なぞも、今巴里の日本大使館に居る畏友エリセーフ君の肝煎りで最初に佛蘭西語に譯され、次いで獨逸の飜譯が出來、上演もされたとか、される筈だとか云はれてゐる。それらはそれ〲飜譯者から出先きの日本大使館を通じて東京の外務省へ飜譯許可の紹介があり、外務省の情報部は更にそれを原作者たる私の許へ取り次ぐのである。ところが此の間又伊太利の大使館から、私の舊作「恐怖時代」を飜譯して彼の地で上演させたいからと云ふ紹介があつた。私は今迄さう云ふ問ひ合はせに接すると、自分の作品が西洋へまで知れるやうになれば結構だと云ふ風に、のんきに考へて、いつも快く承諾してゐたのだが、しかし今度は手紙の意味を改めて讀み直してみて、ちよつと妙な氣持がした。それは外でもないのだが、成る程日本の文壇が西洋へ紹介されることは無論結構には違ひない、けれどもそれはわれわれの中に優れた作品が澤山あつて、日本にはかう云ふ立派な小説や戲曲があると云ふ評判が自然と西洋へまで聞え、そして遂には西洋人の方から進んで日本語や日本文學を研究し、彼等の手に依つてそれらのものが彼等自身の國土へ紹介されるのでなければならない。然るに外務省の情報部から傳達された在羅馬日本大使館よりの手紙に依ると、詳しい樣子は分らないけれども、私の「恐怖時代」が飜譯されるのは、私の名前やあの戲曲の噂が遠く伊太利へまで響き渡つたと云ふやうな譯合ひからではなく、何か向うに、日本の文化を宣傳するのを目的とする特別な協會のやうなものが、在留邦人に依て組織されてゐて、實はそれらの人々の企てゞあるらしい。私はこれまでそんなことまでは氣が付かずにゐたのだが、羅馬ばかりでなく、巴里にも、伯林にも、倫敦にも、それ〲日本人がさう云ふ協會を作つてゐて、前の

「愛すればこそ」の飜譯なぞも矢張りその方面の仕事ではなかつたのだらうか。さう云へばあれを佛譯した人は巴里の大使館の書記官だか書記生だかであつた。（無論助手には佛蘭西人やエリセーフ君等を頼むのであらうが）。私はそれらの協會が外務省あたりの後援に依るものか、或ひは全く民間有志の手になるものか、その孰れであるかを知らぬが、兎に角日本人自らが無理に日本の現代文學を歐米諸國の文壇へ押し賣りするのは、御親切は忝いけれども、原作者たるわれわれ――少くとも私――に取つては可成り有り難迷惑である。いや、原作者の迷惑はなほ忍ぶべしとするも、それは彼等の目的とする日本文化の宣傳になるどころか、秋骨先生も云つてをられるやうに、却つて國辱になりはしないかと思ふ。

ぜんたい文化と云ふものを商品扱ひにして、出先きの支店で宣傳すると云ふ考へからして間違つてゐる。一國の文化が眞に燦然として他國を凌ぐ輝きをもつものならば、何も此方から賣り込みに行かずとも、招かずして諸方からそれを求めに來るであらう。又さうしなければほんたうに理解して貰へるものではない。それも繪畫とか、工藝美術品とか、比較的外人にも分り易く、且商品化され易いものならば格別、文學の如きは理想を云へば實際日本の國へ來て、親しく風俗習慣を見、原語で讀んで貰はなければ、到底完全には分らないのである。

しかしさう云つてもゐられないから、飜譯に依つて味はれることも決して一概に惡いとは云はない。ただ問題は、外人の方から進んで價値を發見するまで、われわれの方は何處までも受け身でありたい。近頃はよく、日本の文壇も隨分程度が高くなつたとか、歐羅巴の現狀に比べても遜色ないとか、亞米利加なんかよりは進んでゐるとか云ふやうなことが云はれてゐる。私も自分たちの書く物が現在の西洋の作品に比べて恥かしいやうなものであるとは信じないけれども、さればと云つて、何もわれわれは西洋人と同じ程度であることを自慢するには當らない。況んやそんなことを自分の方からエラさうに吹聽するのは滑稽である。思ふに羅馬在留の邦人が私の「恐怖時代」を選んだのは、伊太利の國民性とか趣味とか嗜好とかを顧慮し、そしてあの戲曲の持つ南國的な強い色彩、殘酷な血だらけな世界が、きつと彼等に受けるであらうと云ふやうなことを考へたのではないであらうか。もし果してさうだとすれば、ちやうど製造業者がこれは亞米利加向き、これは佛蘭西向きと云ふ風に、御得意先きの好みを考へて輸出向きの品物を造るのと全く同じ心理であり、私の作品は輸出品並みに取り扱はれた譯なのである。尤も近來は輸出品と雖も猥りに外國の趣味に迎合せず、少し氣の利いた貿易商はそんな古い手を使はないで、寧ろ本邦固有の趣味を以て外國のそれを征服しようとする。假りに「恐怖時代」の表現する血だらけな世界が伊太利人に喜ばれたとしたところで、それが結局何であらう。「日本にだつてあなた方のお好みになるやうなコッテリしたものがございます」と云ふだけのことではないのか。「この戲曲は日本で隨分讀まれました、これを以て見ても日本國民

とは甚だ性情が似通つてをります」と云ふやうな、一片の外交辭令の道具に役立つくらゐが關の山ではないのか。それにつけても往年この戲曲が初めて「中央公論」誌上に發表された時、餘り殘酷過ぎると云ふ廉で發賣禁止の厄に遭つたことを思へば、それが今更外務省のお取り次ぎで日本文學の宣傳に使はれるのが笑止でならない。

○

くれぐれも誤解を避けるために云ふ、私は決して「西洋人になんか讀んで貰はないでも澤山だ」と云ふのではない。出來るなら讀んで貰ひたいことは勿論である。私は又、折角われわれの作品を外國へ紹介しようとして努力してゐる人人に對して、その熱心と好意とには感謝こそすれ、少しでも惡意や反感があるのではない。日本人はとかく政府が肩を入れてゐる仕事だと、何の彼のとケチを附けたがる癖があるが、そんな氣は私には毫頭ない。愛國的な動機と目的から企てられた仕事であることは諒としてゐる。けれども今も云ふやうにその肝心の目的は少しも達せられないばかりか、却つて外人の輕侮を招き、引いては原作者に、迷惑を及ぼす道理であることを、痛切に彼等に悟つて貰ひたいのである。

實際秋骨先生の言の如く、何處の國に自分の國の文學を誇らぬ者でわざわざ不自由な外國語に譯し、「どうぞ此れを御覽下さいまし」と云つて觸れ歩く奴があるであらう。「さすがに國自慢のイギリス人でもシエクスピアやミルトンを日本語に譯さうとはしなかつた」のである。「私は寡聞にして、まだ自國のものを他國語に譯したといふ例を、外國の文學上で耳にした事がない。蓋しさういふ事があるかも知れないが、恐らくそれは稀有の例であらう」である。ちよつと考へれば分ることだが、我が日本の文壇にもいろいろの外國文學、——佛蘭西文學、露西亞文學、昔は支那文學などが輸入されたけれども、それらは悉く彼等から見れば外國人たるわれわれ日本人の手に依つて移植されたので、未だ嘗て佛蘭西人なり、露西亞人なり、又は支那人なりが、自ら彼等の國のものを日本語に譯して、流行らせに來たと云ふ話を聞かない。たとへそんな眞似をしたところで、日本の文壇は日本人の手に依らなければ動かされる筈のものではない。自分の娘が別嬪だからと云つて、わざわざ他人のお氣に召すやうな裝ひをさせて、呼ばれもしないのに餘所の家へ押し掛けて行つて秋波を使はせる奴があるだらうか。親の不了見は云ふまでもないとして、さう云ふ親馬鹿に引つ張り廻される娘こそいい災難である。

○

かう云ふと、或ひは說をなす者があらう、——それは成る程理屈としては通るけれども、しかし日本語は西洋人には非常に難解な言葉であるから、英佛獨等の國國の關係とは譯が違ふ。佛蘭西の文學を亞米利加に紹介するとか、獨逸のものを英吉利へ持つて行くと云ふ場合には、自分の方から押し賣りをせずとも向うからやつて來るだらうが、日本の場合はさうは行かない。向うから來るのを待つてゐた日には、

いつまで立つても來ないかも知れない。だから日本の文學に於てはさう云ふ事情を考へて、特別の計らひも已むを得ないと。これは一應尤ものやうに聞えるが、私はさう云ふ異論に對して答へるであらう、――いかに難解なものであらうと、それが眞に價値ある藝術であるならば、いつかは人に知られずに終る筈がないと。昔歌麿や北齋が浮世繪の版畫を作つてゐた時代に、誰か彼等の作品が後世斯くの如く歐米に喧傳されることを豫想しただらう。彼等はてんで外國と云ふものの存在をすら頭に置いてゐなかつただらう。彼等ばかりか、日本人全體が誰もあれを押し賣りしようとはしなかつた。彼等が世界に知れ渡つたのは、恰も草木が成長し、花を咲かせ實を結ぶやうに、全く彼等の作品が持つ輝やきが自然と外に發じたのである。斷つて置くが、彼等が有名になつた頃の日本は、今のやうな一等國でも強國でもなかつた。宣傳機關なぞは云ふまでもなく持つてゐなかつた。地球の隅に日本と云ふ一小國のあることを知つてゐる者さへ少い時代であつた。それでもそれだけの値打ちのあるものは結局知れずにはゐないのである。

○

明治以後の藝術家のうちで、一番早く歐米にその名を知られた者は九代目團十郎ではなかつたたらうか。（貞奴のやうに此方から出かけて行つた者は例外。）「團十郎はえらいもんだ、團十郎と云へば西洋へまで聞いてゐて、團十郎が風邪を引くと彼方の新聞にも出るさうだ」と、子供の時分に私はそんなことをしばしば聞かされた。果してそれほど有名であつたかどうか分らぬが、歌舞伎劇は浮世繪に比べると西洋人にはずつと取り附きにくいものであるにも拘らず、團十郎ほどの俳優になれば矢張り知れずにはゐなかつたのである。否、ひとり團十郎のみではない、私は日本の舊劇の持つ特殊の味はひと魅力とが、今や徐ろに外國のその方面から認められつつあるのを見て、隱忍自重してゐれば正しきものは遂には勝つと云ふ眞理を、今更のやうに感じるのである。日本の歌舞伎劇は決して進んで宣傳をしなかつた。それは外國人に對して鎖された門戸でないまでも、長い間殆どそれと同様な狀態にあつた。假りにも名を知られた歌舞伎役者が一座を組織して外國へ興業に行くと云ふやうなことは、實際出來なかつたのでもあるが、幸ひにして今迄に一度もなかつた。クローデル大使が斡旋して帝劇の連中を巴里へ呼ぶと云ふやうな噂もあつたが、さう云ふいらざるおせつかいが沙汰止みになつたのは結構である。ウイリアム・バトラー・イェーツは亞米利加で伊藤ミチヲ君の舞踊を見て大いに參考になつたらしいが、（"Four Plays for Dancers" by W. B. Yeats の後記參照。）何も分らない西洋人にさう云ふものと梅幸の「土蜘蛛」なぞとを一緒にされてはたまらない。外國へ出稼ぎに行くのは河合ダンスか寶塚の歌劇か天勝の奇術ぐらゐにして置いて、ほんたうにいいものは、眞に先方から辭を厚うして招聘される機運になれば格別、先づそれまではどつしりと本國に根を据ゑてゐるべきだ。

○

クローデル大使で思ひ出したが、あの先生が妙な道樂から何だか探ぐつたいやうな舞踊劇を書き下ろして、幸四郎にやらせろの、菊五郎でなければいけないのと勝手な註文を出すのに、東京の一流の大劇場が無闇にへいへいと有り難がつてゐるのなども、あんまり見つともよくない圖だ。私は上演は見なかつたが、讀んだところでは愚にもつかない作品であつた。それを第一新聞などが持て囃すのがよろしくない。太郎冠者なみに扱つたらいゝ。

幸四郎がテッド・ショウンに道成寺を教へたのなぞも、悪いことではないけれども、ちよつと考へ物だと思ふ。ショウンは亞米利加へ歸つてから、その直傳の道成寺を東洋土産として上演し、苦心談の一節に幸四郎を褒めちぎつて、「彼は立派な藝術家であり且立派な人格者である」と云つてゐるが、成る程褒めるのは當り前である。隨分親切な人もあるものだと思つたか知れない。いつぞや石井漠君に會つたら、「なんです、松本幸四郎ともあらう者が、いくら相手が西洋人だからと云つて、あの道成寺を自ら手取り足取りして教へないでもいゝぢやありませんか」と云つてゐたのには私も至極同感であつた。自分の藝を鼻にかけてお高く止まるのは良くないことに極まつてゐるが、若しテッド・ショウンがあの程度の日本人の藝人であつたら、幸四郎は果してあんなに親切に教へたゞらうか。況んやそれが亞米利加三界へ持ち廻られて、亞米利加風が加味されたところの、惡翻譯にも等しい「道成寺」がれいれいしく披露される光景を思へば、私は竦然とせざるを得ない。そんなにまでして日本の藝術を見て貰はずともよいではないか。

○

話が少し脱線した。

文學は歌舞伎劇よりも更に一層西洋人には難解であるが、それでもそれが價値のあるものである限り、私はきつと理解される時が來ることを信ずる。たしか高濱虛子氏であつたか、「俳句の境地を翻譯に依つて外國人に分らせることは不可能である。彼等自ら日本語を學んで、原作に就いて會得して貰ふより仕方がない。さうして恐らくはさう云ふ時期が案外遠からず來るであらう」と云つてをられるのを、何かの雜誌で讀んだことがある。言葉の性質が餘りに違ふから翻譯して見せると云ふのは却つて誤まつた考へで、違ひ過ぎてゐればこそ猶更うつかり翻譯なぞは出來なくなる。兎に角われわれは當分落ち着いて、先方からさう云ふ特志家の出るのを待つてゐるがいい。たとへ翻譯するにしても、彼等の手に依つて彼等の國語に譯されるのが當然である。向ふが何とも云はないのに此方から騷ぐのは不見識も甚しい。殊に宣傳機關を設けて輸出向きの翻譯を押し賣りにするなどは沙汰の限りである。

私は「恐怖時代」に就いては、前の行きがかりもあるので、承諾はしたものの、これから以後はさう云ふ企てに對してはキッパリお斷りしようと思ふ。

耶蘇（二）

アンリイ・バルビユス
武林無想庵譯

第十章

一、——一人きりでは誰もゐたゝまれない。

二、——わたしの運命のこの轉機に、或日、日光を浴びた、薔薇の茂つた棕櫚の木のそばで、世にも嬉しげな顔したプリスキラがわたしの前へ現れた。

三、——わたしはかの女を撰んだ。なぜ？ その『なぜ？』をば、わたしは世の中で尤も簡單に云へる人間だ。わたしは好きな人が好きだ。一切は自我から來たるのか？ 愛情すら？

四、——わたしはお前が好きだ。わたしはお前を美しくする。

五、——わたしの喜びの名であつた女が、わたしを愛してゐてくれたものと、わたしは思つた。物思はしげな唇で、かの女がわたしにさう云つてゐたからだ。ところが、かの女はわたしの友達だと稱するエキエルをば人知れず愛してゐたものだ。或日、二人はベテサラへ逃げて了つた。

六、——かの女は行つて了つた。が、かの女は茲にゐる。かの女はあすこにゐる。到るところにかの女がゐるのはかの女のゐない半面だ。

七——かの女は行つて了つた。さうしてわたしはもうかの女から離れることができない。

八、——わたしを裏切つた二人の者どもをば『醜惡な兩頭の妖怪』だと、わたしは憎み憤つた。

九、——さうしてわたしは山の中へ行つた。が、行つたのは、それが心ならずもベテサラの近傍であつた。

一〇、——ところが、ある日、わたしは唯ある岩上から、プリスキラとエキエルの抱合つたからだを見つけた。

一一、——二人は一緒に石上へ落ちて心中したものだ。二人はそこで永劫に冷たくなつてゐた。二人の道の行きどまりに、ピタリと釘づけにされてゐたけれど、二人にはまだ最後の接吻をかはす力はあつた。

一二、——永眠せんとする前に。

一三、——半ば開いたその眼はもはや二個の眞珠にすぎなかつたけれど、相手のからだにかく必死と縋りついてゐるところの、冷えきつた中にもまだ充分にぬくもりのあるらしいプリスキラの姿を見ることは、わたしには身を切らるゝほどつらかつた。

一四、——それが二人の赤裸々なるわたしに對する憎惡のやうに思はれた。

一五、……が、二人のそばまで降りて行つて見たところ、二人ともまだ息があつて、死んでゐなかつたことがわかつた。

一六、——と、わたしの咽喉が嬉し泣いた。『生きてゐる！』

一七、——一個の生物を愛することは、その生物が生きてゐてほしいことだ。

一八、——百媚生ずるその顔をふり向けて、よしんばゝ、の女がある他の一人のために生きるにきまりきつてゐるにしても。

一九、——一身同體となつてゐた二人を介抱しつゝあつた際、わたし自身にかく一轉化が來た。

二〇、——わたしは戀愛の事どもに大悟徹底した。今やその上に超越して了つたわけだ。

二一、——さういふ事どもはわたしにはもうない。

二二、——男と女とが事とする、あらゆるさうした半内面的の戰鬪がない。

二三、——同様にまた復讐がない。わたしにも、誰にも。苦しみはする。惱みはする。復讐はしない。さうしてたゞそれを知りぬくといふ事によつてのみ、お前はお前自身の苦悶に復讐する。

二四、——と、そこで意を決して、わたしはかの女から遠ざかりはじめる。一歩々々。

二五、——（わたしは動きたくなかつた。）

二六、——二人をそつとそのまゝにして置いて、わたしは自分の家へ歸つた。田圃の間でも、又家々の地窖の中でも、わたしは惱みつかれてゐた不幸者達を到るところに見た。

二七、——みんながみんな惱みつかれてゐたのではなかつた。たゞさうした不幸者だけをわたしが見たのだ。

二八、——さうした不幸者は今はじまつてゞはなかつた。又わざわざわたしの行く手に立ち塞つたわけでもなかつた。が、以前には、さうした人々をわたしは碌々見ずにゐたものだ。

二九、——併しわたしはわたし自身になつた。

三〇、——わたしの心が裂けたからだ。

三一、——さうして眞劍に人間達にわたしが面と向つたのだ。

三二、——富める者。氣樂な者。小ぎれいな着物に、みづ〳〵した唇に飽ける者。おのれ達の腕先へ他人の手首をとりつけて、勞働を剥りとる者。わたしをとりまいて、猫撫聲で『われ〳〵は正しい』といふ者。

三三、――わたしはかれ等を一人々々ヂラリッと見まはして云つた。『爰で裸になつても恥しくない魂はどれだ？』

三四、――それからまたそこに日光の下を歩いてゐるすべてその他の人々。

三五、――かれ等は絶叫する。が、併し又コソ〳〵とお互に話してゐる。

三六、――かれ等は泣く。併し、その涙がゆたかでない。

三七、――かれ等の悲歎は大人の腕に泣く赤児のそれと大差はない。

三八、――又、『僕等は唄ふ。君等は唄はぬ。』と云つてる町の子供等のやうだ。

三九、――土地の形を變へするために、畠中に立つてその肩を上下しつゝあるところの、疲労に苦しむ者、労働に呪はれたる者が、わたしに云つてゐた。『昔、わたしは土地に饑ゑてゐたものだけれど、今日となると、土地はわたしの不幸の種だ。土地が不正だからだ。

四〇、――また雨天晴天をきめるのに、天も正しくない。』

四一、――かれは純だ。かれは正しかつた。さうしてこの純なる者、正しき者は、カインの言葉を云ふために口を開いた。『わたしの罰はたへきれぬほど大きい。』かれは又カインのやうに云つた。『併し、わたしは否でも應でも生きて行かせられる極印つきだ。』

四二、――『だから、』とかれが云つた。『わたしは悪人がもう誰をもいぢめないお墓の中へ行きたいのだ。

四三、――が、毎朝永遠の神に罰せられてゐる、死ぬにきまつた人間といふものは何なのだ？

四四、――主なる神様、思ひきつて申します。人間の保存者であるわたくしを、あなたはどうしようといふのです？ 毎日、夕方になると、わたくしの腕はぐた〳〵です。

四五、――行く先の塞がつてゐる人間に、なんだつて燈りをくれるんです？』

四六、――又鋪道の石の上に、ひとりぼッちでゐる、もう一人が云つた。『わたしはあんまりくたびれて、パンをたべる事さへ忘れて了つた。わたしはたゞもう泣き叫びたくてたまらない。』

四七、――すると、又もうひとりが、『人は飲み食ひさへできたらと思ふだらうが、それができないのだ。又飲み食ひなンてどうでもいゝと思ふ日もあるだらうが、それができないのだ。わたしの夢は頭から腹へ落ちて了つた。』

四八、――この女乞食が、『饂飩粉がチヨッピリある。』とわたしに云つた。『それで菓子パンを二つこしらへろ。そして一つおれにくれ。』と、わたしは云つた。『ウン』と乞食が云つた。『それを食べて、わし等は死ぬんだらう。』と乞食が云つた。この女乞食はそんな事を思つて又雨のためにブル〳〵顫へてゐた。

四九、――かれ等は働いて、ヘト〳〵になつてゐる。毎日々々働い

ては、女達のやうに物を産んでゐる。毎日々々飢餓に瀕してゐる。地の軍隊には生きる時がない。動物同然だ。

五〇、――悄然としてかれ等は生から死へ立ち退いてゆく。

五一、――聖書の中で、テマン人のエリパズが悪人について云つた言葉は、的確に勞働者等にあてはまる。『恐ろしい絶叫が耳にある。『パンはどこだ？』と云ひながら、東西南北に狂奔して、パンを求める。さうしてむさくろしい町々をも破屋々々と住みあるく。トゞのつまりは悪逆無道の王の許へと志すことになる。』

五二、――他人の富には目が眩む、彼等を苦しめるものはそれだ。

五三、――そこで吉例の如く地上の亡者共にはお定りの戰爭といふものがある。

五四、――そこで成功のため富者の議決する法則と又貧者の先例とは貧者の頭上に又貧者の同志の間にまで、

五五、――戰爭を天降らす。

五六、――天降りの權力には眞理の方針がない。さう云つた事どもはこの地上ではすべて出來そこなつてゐる。

五七、――無數の小人は一個の巨人なんだから、ほとんど人類の全部であるところの貧者は卽ち地の富だ。

五八、――從つてパンは貧者のパンだ。パンは天からは降らない。地から芽をふく――貧者の手中に。

五九、――かくしてわたしは貧者の貢獻を見た。

六〇、――貧者の兩手は永遠に刑罰の苦役を受けてゐる。

六一、――突如貧者等を一個のものとして見ると、全く美しい。

六二、――その場合、貧は美だ。美でない貧が。

六三、――心あるものどもは、やがて革命のあることを知つてゐた。又その革命後、一切、、、、、、、、そこに、、、、、もなくたることを知つてゐた。さうしてかれ等の願は待つてゐた。かれ等の手が藻搔き苦しんでゐる一方でだ。

六四、――全く手當ができないために死にかゝつてゐた子供等の親が、『子供等の死なゝいうちに革命は來るでせうか？』とわたしにたづねた。畢竟そこだ。

六五、――革命は子供等を見殺しにしないために來るのだ。答へ得るのはそれだけだ。革命は一個の偶像ぢやない。人々だ。

六六、――さう云つて、自ら爭鬪の上に超越してゐたので、わたしはいつのまにか慈悲憐愍の天日になづみきつて了つた。と、わたしは物の一緒にかたまつて動く姿を見た。

六七、――貪慾と戰爭の旗竿の下にある諸物だ。

六八、――『正しき何事をかなせ。』と、われとわが心に命じた本分から遠ざかつて、わたしはなが〳〵時を空費して了つた。

六九、――月日はズン〳〵過去つてゐるのだから、ぐづ〳〵してはゐれない。

七〇、――利己主義の貪欲道を辿りつゝ、わたしは茲にまで來たも

のだ。で、自分の心にきいて見た。『どの道を通つたら、わたしはわが家へ戻れるかしらん？』どつちへ行つたらいゝものか、わたしはわからなかつたからだ。

七一、——道が二つある、宿命が二つある。各個人のそれと全人間のそれとだ。

七二、——各個人のそれはかうだ。各個人が戀のため又死のために、その心で又その肉體で、喜んだり苦しんだりする宿命だ。さうしてないものねだりが欲望の常だから、欲望は決してほしいものが得られない。各個人のうちにある無限に深い傷口はそれだ。もつて生まれた各個人の淪落はそれだ。この道の上に立つと、一切は空だ。從つて各個人に賦はれるものとては、たゞかれ自身の情慾のみだ。

七三、——生者は自身に伏在せる苦悶を殺すわけにゆかない。かれはたゞ往生ができるだけだ。

七四、——それから全人間の宿命は、上層の人々の罪惡を被ることだ。この宿命では不屈を學ばなければならぬ。さうしてこの不屈事業は連綿として續くものだ。君、孤立の人よ。君の運命は死を一切の終りとするところのそれだ。全人間の運命は死はもの〻數でないところのそれだ。

七五、——苦痛の持主なる無數の民衆は同様に不朽の持主だ。よし殺されても、彼はなほ叫ぶことができる。なほ立上ることができる。

七六、——で、物のかうした進轉にあつては、『一切は空だ。』といふわけにはゆかない。今云つた最初の宿命が、若しわれ〳〵を征服するならば、われ〳〵はわれ〳〵の一致團結によつて、第二の宿命を征服する。狂人はその身を肉の坂路にまかせて降る。狂人の心は左方にあるが、賢者の心は右方にある。

七七、——なすべき筈の事業は行はれ得べきものだ。

七八、——さうして革命は天から地へは赴かぬ。却つて、地から天へ赴くであらう。

七九、——併しながら、先驅して道を開き、衆人をして本來自然の生存を遂げしめんと志す人々は、

八〇、——その人々自身本來自然の生存は遂げてゐない。

八一、——かれ等は呪はれてゐる。

八二、——かれ等はさまよへる者に自分達の道を訊く。又布施を乞食に求める。

八三、——有るものを凝視すると同時に、無いものを希望するがゆゑに、かれ等はビッコをひく。

八四、——さうしてかれ等は自らすると稱してゐる事を自らしてゐない。

八五、——かれ等は云ふ『法律の基礎となるべきは愛でない。正義が基礎だ。何となれば愛は個人から個人への問題であつて、各個人から全人間へのそれではないからだ。』と。

八六、——併しながら、かれ等がそれを集會の規則にはなしかねて

ゐるところの、その一切人間にとつて柔味のある愛は、かれ等各自の心中にくッついてゐる。

八七、――かれ等は他人の運命をばかれ等自身の運命中に置く。狂愚の如く偉大な事だ。

八八、――千萬無量のかうした戒律をば、わたしはわたしの內面で結合する。

八九、――さうしてあらゆる未知の人々の肖像で、わたしはわたしの良心を一杯にする。さうしてわたしと關係のない事に立ちまじる。

九〇、――わたしは全人間諸君を愛する。現在の人人でも永遠にゐない人々でも。

九一、――壁と燈りとの一部の上で、わたしはポッカリ浮上るわたしの影を見た。

九二、――黑く石上に錯綜した、おどろに亂れたわたしの頭髮、又その顎や肩の先端。

九三、――貧乏な一勞働者――わたしはそれッきりのものだ。

九四、――併し勞苦や賞罰の事までも考へる一勞働者なのだ。

九五、――わたしは勞働者達の勞働者だ。

九六、――星がまだ青いろ衣を纏ふほどの夕まぐれ、都會の大厦高樓と田圃とが、同時にわたしの眼前に迫る。われ／＼の祖先の大牧人が、その範を示したとほり、わたしはこの一切民衆の重荷を擔ふであらう。さうして重すぎるとは云ふまい。

九七、――弱い人達のためを思つて、人は弱くなる。餓える人達のためを思つて、人は餓える。

九八、――醉中の醉、叫中の叫だ。

九九、――わたしだけこの戒を守らう。

一〇〇、――かれ等に守れとわたしはたのまぬ。

一〇一、――かれ等にできないことはたのまぬ。

第十一章

一、――風吹く一夜、わたしはエルサレムの或家に泊まつてゐた。

二、――隻脚がきかなかつたゝめ、ヒルキヤはわたしのそばで土下座してゐた。ゐどころのない貧民だ。

三、――卓上に燈りが一つ、暗を擁つて部屋の中央に輝いてゐた。

四、――パリサイのニコデモとよぶ猶太人の宰の一人が、その夜わたしに逢ひに來た。

五、――夜ひそかに來たものだ。勇敢な人で、風も闇路も眼中になかつたが、世人の意見を屁とも思はぬほど勇敢でもなかつた。

六、――外套をふくらがした一陣の強風と共に、開いた扉がかれのうしろで閉まつた時、又はいつて來たとたんに吹きまくられた燭臺の焰が、再びジッと納まつた時、まづかれのきり出した言葉はかうであつた。『先生、先生……

七、――！なんとしたものでせう？』

八、——わたしは答へた。『われ〳〵自身へ立還る時が來たのだ。内に籠つてゐるものを見つけだす時が來たのだ。

九、——眞理は内部のものであつて、外部のものではないからだ。

一〇、——併し乍ら、暗中に云はれる事は明中で聽かれるであらう。

一一、——が、ほんとにお前に云ふが、人間は改めて生まれないと、天國へは這入れないよ。』

一二、——ニコデモがわたしに云つた。『年寄になつてから、どうして人間が生まれるのです？ 母親の胎内へ戻らなけりやならんのですか？』

一三、——すると、ヒルキヤがわたしのそばへすり寄つて云つた。『まつたくだ。どうしてだ？』

一四、わたしが云つた。『その事は、學者もたゞ人も、銘々それを自分の身の上でつきとめたらわかる筈だ。

一五、——すなはち。靈でないものから靈を解放することだ。

一六、——聰明と正義とに基づいて。

一七、——といふのは、人は宏漠の中で不羈放縦の觀念と言語とを肆まにする結果、互に錯雜して遂に歸するところを知らぬ、あまたの想像世界をば、實相の上へ築きあげて了ふからだ。』

一八、——ニコデモが云つた。『さうすると、われ〳〵以外には本當の物はないのですか？』

一九、——『左樣。われ〳〵の内面にある。

二〇、——正義の大綱要にかゝらぬものは、すべて美でない。すべて美でない。すべて偉大でない。

二一、——エッサイの幹枝から出た永遠の靈について、イザヤが云つたことがある。さうしてそれは賢明と智能との靈であり、謀略と行動との靈であり、學問と正義との靈であると云つた。試に靈の形を見ればわかる。靈の形は深刻な大綱要で描かれてゐる。この綱要こそ森羅萬象の足場だ。さうして人間的天使の輪廓が赫灼として仰がれるのもその綱要だ。正義は四隣に獅子吼されなければならぬ。人間は正義に還らなければならぬ。

二二、——そこで實相と似而非實相とを諸物の中で截斷する必要がある。

二三、——思想が實物の奇蹟たるために必要だ。

二四、——ニコデモといふお前の全部は、擯斥する心象で一杯だ。しかもその諸心象が表面だけ和合して、實はあらゆる形で互に擯斥しあつてゐる事はわからぬまでも、お前はまだ一度もさうした諸心象のどんぞこまでつきつめて考へたことがないのだ。又それをお前自身の力で改造したこともないのだ。それだから擯斥するのだ。

二五、——假相にも實相にも、又惡魔的のものにも神的のものにも、又死物にも生物にも、お前は同程度の信賴を寄せてゐる。

二六、——だからお前は絶對絶命の諸問題をばデタラメに解決してデタラメに納つてゐる。さうして鼻先だけでお先眞暗に生きてゐる。

二七、——お前の言葉は石上に一寸生へてすぐ枯れる草の種だ。そこで、お前はぐず〳〵してゐる。ばら〳〵になつてゐる。グラついてゐる。さうして時の有力者が、『神』とか、『わが民族が』とか、『正當なる權利が』とか云ふと、お前は、『結構です。それで十分です。』と答へる。お前は憐むべきウソツキだ。

二八、——お前は烏合の徒だ。』

二九、——ニコデモは、『そんな事が？』など、云つてゐた。卓上にチラ〳〵して、このジタバタする猶太人の頰や眼を照らしてゐた燈光が、デコボコの壁へもつて行つて、黑い天使の翼のやうなその影を映してゐた。と、風の音が四壁を突拔けて來て、其上で喘いでゐた。

三〇、——かれ。『風の通るのが、きこえますね。』

三一、——わたし。『左樣。だが、どこから吹いて來るのか人にはわからない。』

三二、——そこで、わたしは聲を勵まして云つた。『靈がわれ〳〵自身の中にあると云つたのは、われ〳〵自身の中で垣をこしらへてると云つたのぢやない。われ〳〵自身の中で靈がはじまると云つたのだ。

三三、——靈を解放するためには、即ち、人間中に世間を又世間中に人間を理解するためには、一切の偶像から脱却しなければならぬ。

三四、——偶像は死物だからだ。

三五、——さうして靈は永遠の生命だ。

三六、——人々に眞理を語れば、人々は自我を離れて天に生れ、天中に物いひ、天中に歩み、さうして本來の面目を發揮する。

三七、——生きなければならん。』

三八、——彼が云つた。『世間は世間です。生きなければなりません。

三九、——のみならず、かのシラス人が云つてるぢやありませんか？『賢明は人を恐怖と憂慮に導き、又その修養によつて人を苦しむ』だなんて。』と、ニコデモが云つた。

四〇、——わたしが云つた。『惡魔には惡魔の形がない。

四一、——が、その形のない事がなほわるい。

四二、——この世では盲人が盲人の手引きすると、みんな一緒に穴の中へ落ちて了ふ。

四三、——小さな物も傍へ置くと、大きな物より大きい譯だ。

四四、——それを偶像から引ずり出して魂を救つた者は天國では大きいのだ。

四五、——お前は混亂と暗黑の中へとび込んでゐる。かためて同時に一瞥を見ないものは溺死者だ。お前は人生を見ずに人生の緣を見てゐる。お前は存命中だといふはなしだが、お前は死んでゐる。

四六、——墓の中にゐる者が天の言葉をきく日が來た。

四七、——わたしのいふ事が解るものは死から生へ通過したのだ。

四八、——可憐なヒルキヤが片腕をあげて云つた。『お前の云ふことは有難い。

四九、——ハザリヤだの、パテシバだの、ウリヤの子だのが、昔や

つて見せてくれたとほりにして、墓の中へ這入つたもの達のからだが、つまり極樂で生れ變るといふわけなんだからなア。』

五〇、──『さうぢやない。わたしはからだのことを云つてゐるのぢやない。

五一、──わたしは命のことを云つてゐるのだ。

五二、──からだの死を見ると、人はほとんど皆無だと思ふ。併し死を皆無にすることは、命を皆無にすることだ。つまり、生者を生命の外へ誘き出すことだ。』

五三、──かれはまた云つた。『わたし等の命は不朽の中の一ト筋の光線にすぎないよ。』

五四、──わたしもまた云つた。『不朽の方が命の中の一光線にすぎないのだ。』

五五、──『それでも、見なさい。光線は、あのとほり、あかりがチヨツピリあるだけで、まはりに影が澤山ある。』と、かれが云つた。

五六、──『さうぢやない。影はあるのぢやない。お前が影と云つてるのは、そりやお前に見えない光なのだ。夜が來ると、世界が變り、黑色になるといふのはまちがつてゐる。影なンてない。たゞ光が多いか少ないかだけだ。沈默といふものもない。聲の通る空間だけはチヤンとある。

五七、──又未知といふものはない。已知がすくないだけだ。

五八、──又死といふものがない。われ〳〵だけは續々とある。

五九、──わたしと共にゐて、君等の宇宙眼を開きたまへ。死者をしてその死を覺らしめよだ。』

六〇、──ニコデモが云つた。『生まれかはつたらわかりさうな事が、何もかもわかつて了ふのはこんな時のことですよ。』

六一、──かれはわたしに訊ねた。『死の死たる所以をば悉く一氣に示して、さうした偉大なるやり直しをわれ〳〵に勸めて下さるお前さんといふ方は、一體何者なんですか？』

六二、──『わたしは第一番に死人から生れた者だ。

六三、──即ち、內面の世界をつくるためにやつて來たわけだ。』

第十二章

一、──町中を歩いてゐると、青年が一人、わたしのそばへ來て質問した。

二、──『先生、わたしは眞理と實相との二つについて人がいろ〳〵に云ふのをきゝました。』

三、──わたしはかれに答へた。『われ〳〵は常にその二つの間にゐる。一つは外面にある。われ〳〵の步いてゐるこの町を見たまへ。町はわれ〳〵の行く先へ〳〵と狹くなるやうだし、家はだん〳〵小さくなるやうに見える。ところが、近づくに從つて、町は依然として廣いし、家はやつぱり大きいのだ。

四、──そこで町の姿が二タ通り眼中に映る。狹くなる町と、それ

から依然として賤い町とだ。』

五、——青年は急いで云つた。『あなたの仰つしやつた、そのあとの方の、依然として賤い方だけが本物です。』

六、——『さう。だがもう一つの方は寳物だ。

七、——君は眞理の一端にこだはつてゐはせぬか？

八、——經驗的眞と學理的眞とは、即ち見えるものと見えないものとは、異つた二つの物ぢやない。存在するもの丶兩面だ。

九、——それが一個の輪であるにも拘らず、内で見るか外で見るかに從つて、その形が異つて見えるやうなものだ。』

一〇、——恰も地上からその影を拾つては、それでその身をくるんだやうな、日光の中で眼瞼まで黑く裝つた、一老婦人の近づくのを、青年はわたしに指示しながら、一歩は一歩世にはれ〴〵とした顔つきで云つた。『あの婦人は大きくなります。あすこでは小さく、そこでは中位に、こゝでは大きいのです。つまりそれですね。

一一、——われ〳〵が歩いたからして、あの縱横のキラ〳〵する線で家と家とが戯れたのです。』

一二、——わたしはその通りだと答へた。さうして云つた。『眞理の兩端を不和と見た場合には、君はいつも思ひちがへしてゐるのだ。

一三、——眞理の兩端は離るべからざるものだからだ。

一四、——爛々たる光と正しい線とを求めたまへ。さうすればその余の一線はおのづから加はつて來る。その余の一線には心ゆく確實味のことだ。

一五、——目をつぶると、君に一個の世界のつくれる事はまことに摩訶不思議だが、それの美しいのはその世界が現實のそれであつた場合にかぎる。

一六、——從つて眞と實とを、即ち靈と生命とを引離して樂しんではいけない。

一七、——何となればいかなる場合でも唯一の實相しきやないからだ。又唯一の眞理しきやないからだ。即ち同一であつて同一でないものだ。

一八、——一小寳物なしに一小觀念は決してあつてはならぬ。

一九、——一大寳物なしに一大觀念は決してあつてはならぬ。

二〇、——實相と眞理とを引離すと、實相はめくらになる。眞理は氣ちがひになる。

二一、——頭の内部が空虚中で創作のできるといふことは恐ろしい。

二二、——いけないのは、勝手なことを人が云へる事だ。又かつて云はれてある事にまで、人は勝手なことを云はし得ることだ。

二三、——『尊むべきは善あるのみ』と、氣が向けば惡魔も云へる。さうして惡魔の口から出るので、それがウソだ。

二四、——僞善者とは美しい思想を述べ立てる人間のことぢやないか？

二五、——『狂人の言は言語の澤山あることに由來する』と聖書では云つてゐる。
二六、——言葉がおのがじしに振舞ふからだ。
二七、——が、狂人の喋る間、眞理は默つてゐる。
二八、——『默つて見なけりやいけない』と、デドチが云つた。
二九、——『よく云つた』とわたしは答へた。
三〇、——わたしは肉と骨で出來てる靈でありたい。
三一、——默つてもらひたい。
三二、——手に默つて喜んでもらひたい。
三三、——命
三四、——といふ唯一物の兩物が、即ち靈と肉だからだ。』
三五、——それから町の一隅で、わたしはきたならしい貧しげな一名の狂女に遇つた。かの女の着物は雨のふるやうにまはりへ落ちてゐた。
三六、——『正に判然とサバの女王になれたんで、わたしは嬉しい。』と狂女が云つた。
三七、——周圍の人々はひどく不愍がつて、『すきなやうにさせて置くがいゝ。』と云つてゐた。
三八、——『いや、決して氣ちがひを重んじてはいけない。
三九、——智能は白日の如く純でなけりやならない。
四〇、——頭からは直線が放射しなくてはいけない。』
四一、で、それからもつと先で、われ〳〵は働いてゐる一人の男にヒヨツコリ遇つた。恰も安息日だつたものだ。
四二、——モーゼの掟によると、そんな事をしてはたらない時に働いて（驢馬に荷物をしよはせて）ゐたこの男に、わたしは云つてやつた。『君、君は自分のしてることがわかつてゐるなら結構だが、わかつてゐなけりや呪はれた者だ。掟の違犯者だ。
四三、——まづ理解することだ。
四四、——わからずに信ずるのは阿呆の骨頂だ。』

第十三章

一、——ヒルキヤはいつも手で歩いて、ゐざりながらわたしのそばへやつて來てゐた。
二、——かれの脚は滿足なんだが、たゞ利かないだけだつた。脚が馬鹿になつてゐたのだ。
三、——だから、歩かうと思へば歩けたのだ。
四、——或日、滿座の中で、みんながピタリと默つて了つたほどの大聲で、わたしはヒルキヤに云つた。『なるほど時が來た。
五、——立つて歩け！』
六、——と、みんなは、ヒルキヤが呆れ喜んだ子供のやうな顔つきで、
七、——ヨロ〳〵立上つて歩きだすのを見た。

八、——このすばらしい珍事を目撃した者共は新人の前にひれ伏さんばかりであつた。それほど快心な驚くべき事だつたわけだ。そこでさかんな賞讃の辭をわたしにあびせかけて、『奇蹟を行はれたんですから、あなたは本當の豫言者です。

九、——だから、われ〱はあなたを信じます。』などゝ云つた。

一〇、——が、かれ等は氣がつかなかつたのだ。各自にしまひ込んである自計概に氣がつかなかつたのだ。信仰の内面の勢に氣がつかなかつたのだ『われ信ず』といふ叫びはやがて一個の武器である事に氣がつかなかつたのだ。

一一、——憐れなるヒルキヤは、その病氣のなほしてが自分自身であつた事をば、他の人々よりなほ氣がつかなかつた。

一二、——それが自分自身から來たものに外ならないのを、神様の恩がかゝつたものと信じてゐた。

一三、——かれは眞理の方向を知らなかつたのだ。

一四、——心中にある何物かゞ邪魔をして、みんなもその事を知らうとはしなかつた。

一五、——『諸君。まづ自信をもたなければいけない。卽ち、諸君自身に土臺を置くことだ。それさへ信ずれば、求むる事はなんでもできあがる。救ふのは信仰だ。

十六、——諸君がもし信仰をもつて、この山に向ひ『汝からあすこへ行け。』といふならば、山も動くにちがひない。——諸君が信仰そのものでありさへしたらだ。一心不亂に祈りたまへ。』

一七、——その日、わたしは多數の民衆に圍繞された。

一八、——世界の奇蹟はすべてみなこの民衆中にあつたものだ。

第十四章

一、——わたしのまはりへ來るほどの人々へわたくしはすでに說教をはじめてゐた。

二、——靈の福音をすゝめるために。

三、——テベリアの湖畔であつた

三、——或朝、わたしは釣する二三の仲間のものと船に乘つた。

五、——かれ等は魚や又甲螺のある小さな怪物を漁つてゐた。で、それ等を海からどし〱と釣上げてゐた。どの魚も、最後は結局、目をクワッとあいて人間の手中の冷やかな一線だ——

六、——わたしの乘船した朝、好天氣のうちに人々は船出の用意をしてゐた。岸上に林立した女達や子供等が手まねぎしたり空間を抱いたりしてゐた。恰も木々がジツとしたまゝ、微風の前でうなづく時の、微風にそよぐ庭園のやうに。

七、——ところが、岸から離れると、風が起つて、暗くなつた。われわれは嵐と崩るゝまつ黒な山岳中にあつた。

八、——洪大無邊なる混沌のたゞ中で、われ〱はまるで玩具にすぎなかつた。

九、――海はすべてひツくりかへつてゐた。

一〇、――又海は酔つ拂つてゐた。

一一、――さうして空は海であつた。

一二、――又風が大河のやうに波濤を卷いてゐた。地平線がこなごなに碎け、海岩どもや又黒瀬の下をビシ／＼と疾走するあまたの小舟の通りすぎるのが見えてゐた。

一三、――われ／＼の小舟は激浪をかぶつてゐた。仲間の者達はすでに難船者になつてゐた。

一四、――渦の包圍と渦卷とをわれ／＼に浴びせかけつゝ、ドブンドブンと泥の如くに水の入り込む小舟の船首で、わたしは平然として兩手をあげた。

一五、――さうして、互に縋りついてビショぬれになつてゐた人々に向つて、わたしは、風がひどかつたので恰も町の廣場へ立つたやうに、出來るだけ大きな聲で叫んだ。

一六、――『信仰なき人々、君等はなぜ疑ふのだ！』

一七、――一同は異口同音に叫んだ。『僕等は死にたくない！』

一八、――目に見えぬ人間の偉大の力によつて、あらぶる浪はおとなしくなつた。

一九、――わたしがみんなに勇氣と力とを振起させたので、みんなはわたしを神の魔法使ひだと信じた。

二〇、――そこで、もうしばらくの間、かれ等にさう信じさせて置いた方がよさゝうにわたしには思はれた。

二一、――かれ等には赤裸々に考へたり工夫したりする能力がないからだ。

二二、――さうしてわたしの心をかれ等に注入する事が、即ちかれ等のものである一切をかれ等に與へる事が、わたしには禁斷かと思ふと、わたしは悲しく腹立しかつた。

二三、――もつともだと思つたら、自信を鼓吹せよ。鼓吹したけりや、自信をもて。

二四、――が、わたしの心がかれ等にわかるのは果していつか？

二五、――わたしを指して、『この人だ』と云ふ時だらう。

第十五章

一、――前に云つた、かの海に沿うて、その上に荊棘の冠のあつた腰掛の上へ、

二、――その頃のある夕方、わたしは草臥れた旅人として再び行つた。さうして物蔭をのぞくと石の腰掛が呼吸してるのに氣がついた。

三、――ヨハネ・ザカリヤがそこに腰かけてゐたからだ。前述の如く、數年前かれのそばからわたしが去つて以來、かれは恰も奇蹟によつてそこを動かずにゐたもののやうに。

四、――わたしはかれのそばなるわたしの席へついた。（木下杢太郎へ捧

並んだ二人の人間は、まん中を死で仕切られた唯一個の影をつくる)

五、――が、夕方といふものは、子供の時分さうわたしが思つたとほり、顔の上にある顔のお面を、又心の上にある胸のお面まで、とりのぞいてくれる。

六、――さうして恰も夜が幼な兒ででもあつたやうに、わたし達は小聲で話した。

七、――暗いので荊棘の冠は見えなかつたが、そこにあつたことはわかるので、あるナと思つてゐた。

八、――『またやつて來たよ。

九、――仕事といふものがいかに喜びであるか、又その喜びがいかに惡戰苦鬪であるかといふ事がわかつたよ。

一〇、――それから平和は平和では成立たないものだといふ事がわかつたよ。』

一一、――『わかつてやしない。』とかれが云つた。

一二、――『今はわかつてる。

一三、――なアに、昔だつてわかつてゐたものサ。』

一四、――そこで、云ふ事を云つて了つたので、二人とも同じやうに默つて了つた。

一五、――と、ジッとしてゐたわたしにかれが云つた。

一六、――『君、どこへ行く?』

一七、――ブラさがつた恐ろしげな冠の下で、頭を下げると、わたしはわたしの影もろともに答へた。

一八、――『みんなにわたしの心がわかるのは、わたしが心を拔き出して見せる時だらうよ。

一九、――いづれ、いつか。』

第十六章

一、――『あなたは救世主でゐらつしやるんでせう?』と或女がわたしに云つた。

二、――『いや、わたしはそんなものぢやない。』

三、――その女は嘆息した。さうしてわたしの返事をほいないと思つた。

四、――それから又頭をあげて、かの女がきいた。『すると、救世主はどこにゐらつしやるんでせう?』

五、――『未來にゐる

六、――救世主は血をもつて未來を開く。

七、――さうして未來に心を與へる。

八、――さうして自動標石の如く未來を測る。

九、――救世主の來ることを信ずるのは、やがてわれ〳〵人間の突進してやまぬ慾の姿を捉へることだ。』

一〇、――ヨハネ・セベダイがわれ〳〵と一緒にゐた。かれは口を開いて云つた。『併し救世主が來たとわかつたら、イスラエル魂は向

上しなくなりにせぬか？

一一、——イスラエルの時代は終を告げはせぬか？』

一二、——で、それ以上云ふ氣になれないで、ヨハネはやめて了つた。

一三、——わたしは再び云つた。『救世主は人が考へてるやうなものぢやない。』

一四、——ヨハネがわたしに云つた。『今云つたことをもう一度云つてもらひたい。まだよく分らんから。』

一五、——わたしは答へた。『救世主とは靈のことだ。さうして靈はわれ／＼にある。

一六、——神の王國はやがて一樹をなす一粒の種にたとへられる。樹はとりも直さず種の中にあつたものだ。同樣に世界の眞理はわれ／＼の中にある。又神の國は、或人がそれを畑中の足元で拾ひ、さうして手にすると、光を放つ寶石にたとへられる。眞理の王國ではわれ／＼は決して外國人ぢやないんだが、それが常にわれ／＼にはわからない。その國をしろしめす王位はわれ／＼の中にある。神の御代はだしぬけにドンと來るものぢやない。『そら、こゝへ來た。』『そら、あすこへ來た。』と騷ぎ立てるやうなものぢやない。神の御代はこのとほり諸君のまんなかへ來てゐるんだ。白日の如く明らかぢやないか？』

一七、——すると、ヨハネが答へた。『さつき君はそれが未來にあると云つてたが、今またどうして現在にあるといふのだ？』

一八、——『君といふ神の所持人は、若し君が生きてるなら、現在で同時に未來なのだ。と云ふのは、人間は瞬間毎に二個の人間に分裂してて、一個は後へ、一個は前へ踏み込んでゐるものだからだ。君等が『きのふ』と云へば、『死』を語つてゐる。『あす』と云へば、『生』を語つてゐる。『救世主が來てゐる』といふのは、『來てゐた』ことだ。

一九、——だから、自分自身に土臺を置くには、救世主を待つ必要がある。

二〇——現在とは、はじまりのことだ。

二一、——耳あるものはきけ。心魂に徹して理解せよ。』

二二、——かれらがわたしにたづねた。『昔の豫言者達をどうお考へになります？』

二三、——『君等は君等の目前に生きてる者をすてゝ、死んだ者についてムダ口をきく。』

二四、——昔の事なンぞ澤山だ。われ／＼は今前代未聞の事を行はうとしてゐる。

二五、——『どこへ行く？』答へて曰く、『行くのだ。』

二六、——死にかぎつて形式がある。生は無形だ。が、いかにして未來に建設する？　いかにして存在せぬ物の上に土臺を置く？』

二七、——この話の最中に、種蒔にゆく者の通りすがるのが見えた。

二八、——『あれを見たまへ。あの、種をもつて行く人を？　あの

人は未來に建設してゐる。あの人は存在せぬ大收獲を確信してゐる。』

二九、——ヨハネ・ゼベダイが云つた。『さうすると、眞理はもはや見えぬものぢやないのだ？』

三〇、——かれはつッ立つたまゝ腕を拱いてゐた。その拱いた腕の方へ、その八の字をよせた額がさがるのをわたしは見た。かれは産婦の如く自分の前途も自分の内部をも考へてゐた。歩きだした眞理をかれは見つめてゐたものだ。

三一、——さうして苦痛を拂ひのけようとして呶鳴る病人のやうにかれは叫んだ。『そいつに（靈に）君が命をふき込んだら、破壞の天使ができあがる。』

三二、——で、恐ろしくなつて、かれは『さうぢやない』と首を振つた。

三三、——が、『さうぢやない』と首を振つた瞬間に、かれはわかつたのだ。

三四、——事物の前進を促す君の顔の兩眼、

三五、——そこが天國の門だ。

三六、——反抗だ。

第十七章

一、——一人は家の中に立ち、いつも同じやうに、何か運び歩いてゐる。

二、——もう一人は鏡のやうに空間を見つめながら、わたしを見つめながら、やつぱりいつも同じやうに、ジッと腰かけてゐる。

三、——わたしの身のまはりをいと懇ろに世話してくれる二人の女、即ちかのマルタとかのマリヤのことだ。

四、——マルタ。時に應じて家政婦にも、女中にも、機織女にもなる。

五、——かの女が云つてゐた。『尊いお方には、たゞ尊いだけでゐて戴き、なんにもおさせ申したくないからです。』わたしはかの女の服從するまゝになつた。

六、——かの女がわたしに云つてゐた。『もしあなたが惡い路をおいでになりましたら、わたくしもその路をまゐります。わたしにはきつとそれが善い路なんでございますから。』

七、——マリヤ、マドレーヌ。かの女はなんにもしなかつた。

八、——さうでないまでも、

九、——一度わたしのからだへ一瓶の香油をふりかけた事と、髮の毛でわたしの足を拭いた事と、そのほかにはもう一生なんにもしなかつた。それがかの女の奉公であつた。わたしはかの女の服從するまゝになつた。

一〇、——花瓶の中で死ぬ花が一もとそこにあつたわけだ。

一一、——ある夜の美しい會合を思ひ出しながら、かの女が云つた。『耳に殘つた囈語のやうだわ。』

二二、——お前達二人はパンのやうにわたしに心を割つてくれる。

第十八章

一、——ユダ・イスカリオテが一隅から出て來て、通りすがるわたしの上衣をひッぱつた。

二、——『先生、一寸お話しできませうか？　實は、』

三、——とかれはわたしをぬすみ觀て云つた。『先生に對して少しくその意を得ない事があるのです。

四、——あの女がふざけて先生のおつむりへ香油一瓶ザブリとぶッかけた一件です。

五、——わたくしは勘定方を承はつてをります。あの香油は優にわれ／＼の全生活費にあたつてゐました。内輪に見つもつて三百デナりはありました。

六、——香油一瓶殘らずザブリとぶッかけるなんて——いえ、まつたく呆れたものです。あの女はきちがひです。それから頭の毛で先生のお足を拭くなどゝは、もつての外の振舞です。それでも先生は至極御滿足の御様子でした。』

七、——犬のやうに突立つたまゝ、かれは小言を云つてゐた。

八、——ユダ・イスカリオテは親切氣のある可憐な男だが、小人だ。

九、——殊更に自分達をば、『氣ちがひぢやない』と人に思はれたがつてゐる、不愍な小人ども位われ／＼の大敵はない。

一〇、——ユダに逢ふと、わたしはいつでも立木にぶッつかつたやうだ。

一一、——その頃の話だが、かれ等はわたしのところへ何か追ひ立てゝ連れて來た。さうしてそれは見苦しくオド／＼ふるへて、顏をかくしてる一人の女であつた。

一二、——かの女は姦通罪を見つけられたのだ。『法に從つてこの女を石で打殺さなけりやならんものかどうか？　返事してもらはう。』

一三、——かれ等はわたしを困らすためにさう云つたのだ。と、その間、女は、死がジリ／＼と生身に迫りつゝあるので、顫へあがつてゐた。又群集の叫喚をきいて打殺されたも同然であつた。

一四、——『一度も罪を犯したことのない者が先づ石をぶつけたらよからう！』

一五、——論客どもは何と答へていゝか、又どうしたらいゝかわからなかつたので、てんでに大きな石をもつたまゝ、散失せて了つた。

一六、——『勞働者はすべて嚴重なものだから、義務をキチンと立てるためには、原則は嚴重でなければならぬけれど、併し人命には決して必要以上嚴重に失しないやう、くれ／＼も注意しなくてはいけない。

一七、——正義のつくられてあるのは、各人を窮屈にするためぢやなくて、出來るだけ各人を氣樂にするためだといふ事は、諸君はよく

御承知だ。正義は人を鞭打つべきものぢやない。鞭打たうとすると、却つて自分がそれで鞭打たれる。

一八、──理は平衡にある。

一九、──おとなしい者は幸福だ。かれ等は地を受繼ぐであらう。柔和は正義のまぎれもない姉妹だ。双方とも靈の子供だ。さうして双方とも心を開く前にまづ眼を開く。

二〇、──正義が、聰明になればなるほど、やさしくなり、すなほになる。』

二一、──持つた杯に未練を殘して、二三人はまだその邊に見苦しくブラついてゐたが、この前代未聞の光景から群集が立去つた時、わたしは女に云つた。『さア、行きなさい。そしてもう罪を犯しなさんな。』

二二、──女は町の方へ降りて行つた。

二三、──かの女は綠色の上着を着てゐた。

二四、──わたしの脚下には、遙かに黃塵の末も沒する町の姿があつた。

二五、──わたしは溜水の縁に腰かけてゐた。さうしてかれ等が來なかつた前にやつてゐたやうに、そこに終日わたしの一擧一動の影があつた砂の上へ、わたしは杖で字を書きはじめた。

二六、──それから、肩越しに顧向いて、うしろへ身を傾けると、なだらかな溜水の水がヒヤリとしたが、その盆のやうに黑い水面へもつて行つて、自分の影の映つてるのが目にはいつた。

二七、──やせたわたしの肩の上には灰色の布衣、亂れた頭髮、背白い顏。

二八、──一切人間の惱みが醜くして了つたといふ顏だ。

二九、──又慰められる人々のそれのやうな、すこしばかり赤くなつた眼瞼。

三〇、──又しなけりやならぬ事をいろ〳〵考へるので、

三一、──やゝ險しくなつてゐる眼。

三二、──さうしてわたしは思つた。『自分は今迄何をして來たか？』

三三、──又わたしは思つた。『わたしと同じ事をしようとして、今は影も形もなくなつてゐる他の人々が、果してどの位あつたらう？』

三四、──さうしていづれわたしもさうなるだらうが、そのとほり今日空に歸して了つた或人間が、百年前、又千年前、こゝの、この場所で、恐らくわたしとそツくりそのまゝだつたものにちがひない。戴くかれの胸の中で、かれは人間中の人間にならうと試みたものにちがひない。さうして世界を動かすべく、又絶望をもつて希望をつくるべく、わたしのやうに勇氣沮喪して、その手をグタリと垂れたものにちがひない。

現代日本文學全集會員諸君へ

本全集豫約締切に際し會員諸氏の御要求に基づき增卷を公約しましたが、愈別項の如く四十七篇を二十二册とし總計五十册として本全集の完璧を期しました。収容の大作はこれ以上に完全にするつもりです。此點本社を信じて永い目で見てゐて下さい。今回は總ての點に於て體系的のものとして遺憾なきを期しました。殊に日本文學に寄與深き小泉八雲氏を収め、少年文學を間然なく體系づけ、階級文學、新感覺派（作名人名は後にて決定）に至る新興文學集を一册とし、其他各篇に亙りて一大改革を斷行して文學史的に見て非難の餘地なからしめた苦心を御察し下さい。本社は今後も内容に於て驚くべき增加充實を計りたいと思ひます。次に發表すべき内容は又、驚くべきもののあるを期待して下さい。（私達は默々のうちに文學的に貴重な貢獻をなし何等社會にその名を留むるに至らなかつた無名の作者に對し、本全集に於て敬意を表し、その作品を收錄したいと思ひます。）

謹告

現代日本文學全集は締切後も註文殺到す。依つて今回の增册改册を機として、來る**七月末日**まで特に豫約の御申込を受付けます。

改造社

現代日本文學全集の増冊によつて増加するもの（第一回發表）

ケーベル集

（目下交渉中）

小泉八雲集

こゝろ（その他は追つて發表）

鈴木三重吉集

大伯母　紅皿　女　帶　霧の雨　蛇苺　半　病間　伯母とお濱　穴　留守　民子、赤い鳥　黒蜻蛉　その他

森田草平集

煤煙　自叙傳　初戀　その他

長田幹彦集

祇園夜話　舞妓姿　霧　旅役者　白鳥の歌　桑名心中　その他

宇野浩二集

藏の中　苦の世界　戀愛合戦　高天ケ原　人心　怪人　その他

葛西善藏集

馬糞石　子をつれて　千人風呂　遊動圓木　悪魔　仲間　馬鹿すかし　不能者　湖畔手記　醉狂者の獨白　椎の若葉　蠢く者　おせい　從弟　父の出郷　不良兒　姉　歳晩　その他

廣津和郎集

やもり　波の上　神經病時代　ひとりの部屋　哀れな女　或女の素描　隠れ家　その他

田村俊子集

あきらめ　木伊乃の口紅　誓言　お七吉三　その他

野上彌生子集
海神丸　父親と三人の娘　大石良雄
或る男の旅　小さい兄弟　その他

中條百合子集
貧しき人々の群　伸子　一太と母
伊太利亞の古陶　高臺寺　その他

山本有三集
津村教授　嬰兒殺し　生命の冠　女親
坂崎出羽守　指鬘緣起　同志の人々
海彥山彥　熊谷蓮生坊　女中の病氣
その他

吉田絃二郎集
棒　ダビデと子たち外數十篇
（次號にて詳報）

長與善郎集
項羽と劉邦
その他

ヨネ・ノグチ集
サムマア・クラウド　日本詩歌論
その他

新興文學集
（內容は昭和三年末までの代表作品を入れる、目下決定のものは近く發表）

別册の一
文學及演劇評論集
（其內容は追て發表、別册は五十卷の內にいらず希望者のみに頒つ）

別册の二
美術評論集
（同上）

以上

現代日本文學全集の改冊によつて増篇するもの（第一回發表）

廣津柳浪集

今戸心中　變目傳　非國民　松原饅頭　八幡の狂女　都の夢　雨　紫被布　二人やもめ　黒蜥蜴　目黒巷談　顔の傷　その他

川上眉山集

ふところ日記　大盃　夕だすき　うらおもて　觀音岩　酒正月　その他

小杉天外集

コブシ　はつ姿　はやり唄　寢白粉　その他

齋藤緑雨集

雨蛙　あられ酒　わすれ貝　門三味線　おぼろ夜　短文小唄類篇　新體詩見本　文學一からげ　その他

小栗風葉集

世間師　深川女房　戀ざめ　女髪結　生みの母　その他

山田美妙集

胡蝶　露子姫　その他

江見水蔭集

女房殺し　炭燒の烟　その他

巖谷小波集

いもせ貝　その他

二葉亭四迷集

浮雲　平凡　ひとり旨　めぐりあひ　椋のミハイロ　自傳　予が創作の態度　予が飜譯の標準　余が言文一致の由來　小說の題のつけかた　予が半生の懺悔　私は懷疑派だ　ロシヤ通信　俳句　その他

矢崎嵯峨舎集

初戀　その他

永井荷風集

あめりか物語　すみだ川　新橋夜話　散柳窓夕榮　腕くらべ　おかめ笹　斷腸亭雜藁　書かでもの記　小說作法　雨瀟瀟　その他

近松秋江集

別れた妻　舞鶴心中　黒髪　疑惑　續疑惑　その他

岡本綺堂集

修善寺物語　新皿屋敷　鳥邊山心中　無禮講　俳諧師　その他

岩野泡鳴集

耽溺　ぼんち　毒藥を飲む女　征服非征服　人か熊か　その他

上司小劍集

鱧の皮　生存を拒否する人　天滿宮　その他

小川未明集

雪の來る前　越後の冬　小作人の死　物言はぬ顔　密告送　血に染む夕陽　煙の動かぬ午後　戰爭　立ん坊の哲學　鐵橋　その他

高濱虛子集

俳諧師　朝鮮　風流懺法　斑鳩物語　落葉降る下に　その他

伊藤左千夫集

野菊の墓　老獸醫　春潮　隣の娘　水害雑錄　大雨の前日　その他

長塚節集

炭燒の娘　佐渡ケ島　芋掘り　隣室の客　その他

柳川春葉集

もやの里　その他

少年文學集

巖谷小波　こがね丸

幸田露伴　寶の庫

森田思軒　十五少年

若松賤子　小公子

島崎藤村　創作童話五篇

小川未明　殿様の茶碗　幸福に暮した人　金の輪　或る夜の星達の話　野薔薇　牛女　その他四篇

宇野浩二　木佛金佛石佛

久保田万太郎　童話劇　(1)北風のくれたテーブルかけ　(2)豆の煮える間

楠山正雄　アンデルセン

鈴木三重吉　古事記物語

北原白秋　赤い鳥小鳥

秋田雨雀　太陽と花園

芥川龍之介　支那童話三篇

佐藤春夫　蝗の大旅行　美しさ町

豊島與志雄　母の胸

戯曲集

河竹默阿彌　河内山と直侍　紅葉狩　高時　意中闇照瓦斯燈　その他

福地櫻痴　春日局

松居松翁　西郷と大村

岡鬼太郎　埴生村

木下杢太郎　和泉屋染物店

中村吉藏　井伊大老

秋田雨雀　國境の夜

小品及隨筆集

河東碧梧桐　鹽井雨江

寒川鼠骨　大町桂月

坂本四方太　大和田建樹

篠原温亭　武島羽衣

志賀矧川　馬場孤蝶

遲塚麗水　平田禿木

小島烏水　戸川秋骨

吉江孤雁　柳田國男

落合直文

その他

長詩集

短歌俳句集

久保田万太郎集

油でり　露深く　四月盡　心ごゝろ　短夜　ひとりむし　冬　通り雨　宵の空　その他

倉田百三集

出家とその弟子　布施太子の入山　父の心配　歌はぬ人　蓮池　その他

藤森成吉集

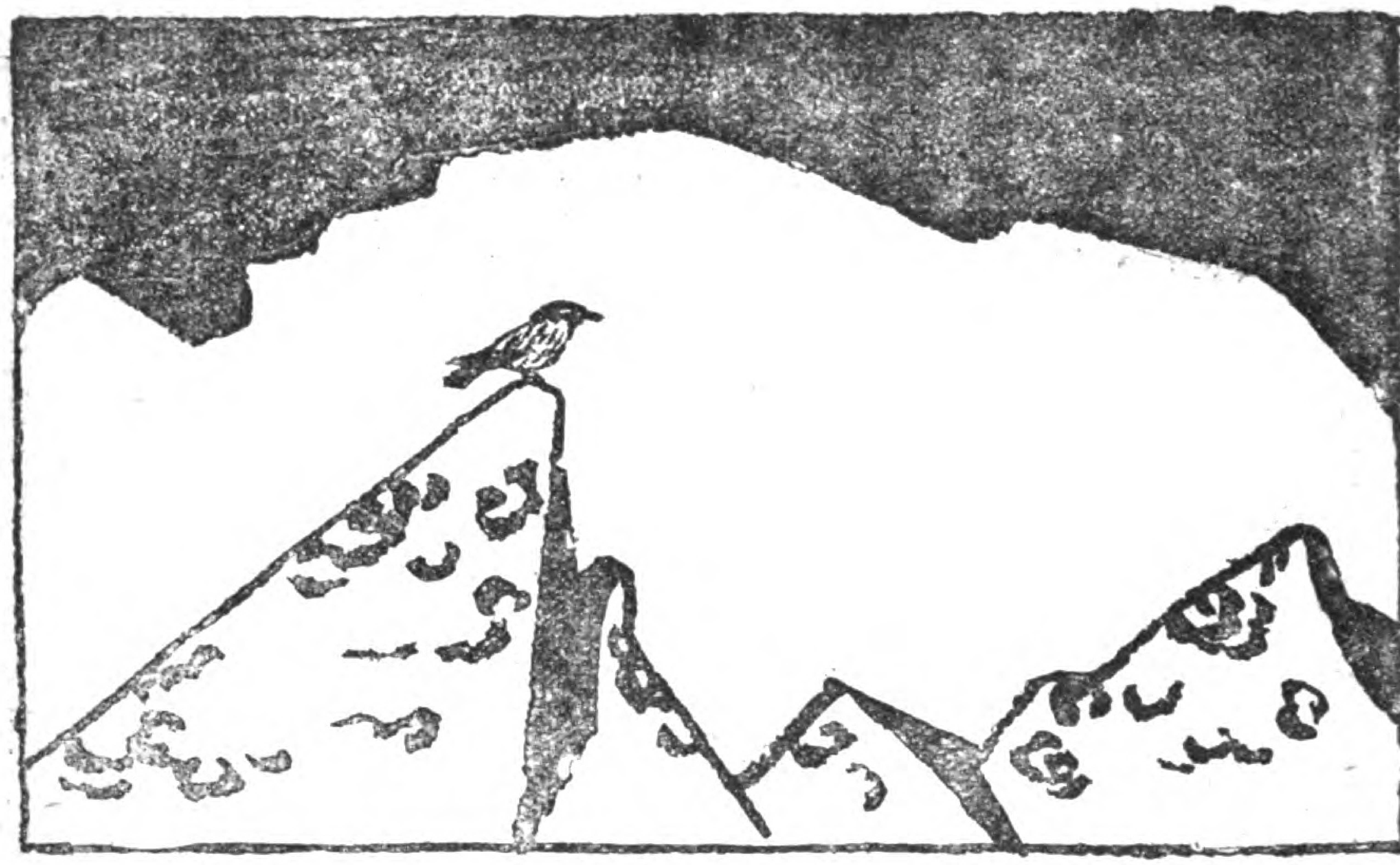
若き日の惱み　犠牲　舊先生　山雀の來る家　こほろぎ　その他

現代日本文學全集に

五重塔（露伴）山椒太夫（鷗外）わしも知らない（實篤）その妹（實篤）額の男（如是閑）目黒巷談（柳浪）おかめ笹（荷風）新橋夜話（荷風）隅田川（荷風）あめりか物語（荷風）腕くらべ（荷風）雨瀟瀟（荷風）二人妻（荷風）別れた妻（秋江）鳥邊山心中（綺堂）無禮講（綺堂）祇園夜話（幹彦）舞妓姿（幹彦）旅役者（幹彦）白鳥の歌（幹彦）桑名心中（幹彦）俳諧師（虚子）朝鮮（虚子）斑鳩物語（虚子）寶の庫（露伴）十五少年（思軒）小公子（賤子）アンデルセン（楠山正雄）古事記物語（三重吉）蝗の大旅行（春夫）紅皿（三重吉）霧の雨（三重吉）民子（三重吉）赤い鳥（三重吉）煤煙（草平）自敍傳（草平）初戀（草平）藏の中（浩二）苦の世界（浩二）戀愛合戰（浩二）馬糞

新に増加の代表作

石（善藏）子をつれて（善藏）千人風呂（善藏）遊動圓木（善藏）馬鹿すかし（善藏）不能者（善藏）ドモ又の死（武郎）湖畔手記（善藏）蠢く者（善藏）浪の上（和郎）神經病時代（和郎）あきらめ（俊子）木伊乃の口紅（俊子）お七吉三（俊子）海神丸（彌生）大石良雄（彌生）惜みなく愛は奪ふ（武郎）伸子（百合子）貧しき人々の群（百合子）油でり（万太郎）四月盡（万太郎）心ごころ（万太郎）短夜（万太郎）嬰兒殺し（有三）生命の冠（有三）坂崎出羽守（有三）父の心配（百三）歌はぬ人（百三）蓮池（百三）若き日の惱み（成吉）先生（成吉）こころ（八雲）ダビデと子たち（紘二郎）欅（紘二郎）コブシ（天外）初姿（天外）項羽と劉邦（善郎）外數十篇



のれん一重

藤森成吉

健助は當代著名の作家である。殊に感覺と表現の新鮮鋭敏な點で、彼は文壇及び一般知識階級の非常な喝采を博し、まだ三十の半ばを越さないうちに、すでに「大家」の列に組み込まれてゐた。もつとも愚かな批評家の中には、彼を「中堅作家」に指折つてゐる者がなくもなかつた。それはあまり彼の年齢が若い爲めか、それとも、取材手法に於いてその名稱にふさはしいものがある爲めか、筆者は審かにしない。が、そんな「大家」とか「中堅作家」とか、文壇以外にあまり通用しない不正確な種名の詮議はどうでもいゝ。とにかく、彼が有名な人氣作家たる事は疑ひない。

具體的一例を擧げるなら、彼の手もとには一日平均十數通の郵便物と、一ダース近くの訪問者がやつて來た。その訪問者は、記者や同業の作家批評家を初めとして、俳優、愛讀者、講演依頼者、寄附請求者、戀人等、各種の人物を網羅してゐた。恐らくその爲めであらう、彼は嘗て「出發前半時間」と云ふ泰西作家の戯曲を批評して、「此の種の機智はすでに我等の朝餐前だ。もしそれ此の種の題材に至つては、我等はかくも容易な身邊的素材を知らない。」と書いた事がある。

筆者は、これ以上彼の作家的存在を裏書きする必要を見ない。――さて、その健助の

ところへ、或る晩勘三郎の如き人物がやつて來た事に何の不思議もない。彼の如き、實に健助の大きな榮光に集まる蛾の一疋に過ぎない。從つて、普通なら當然「執筆多忙の爲め」謝絶を食はさるべきだつた。たゞ彼の特別な自己紹介が、健助に面會する機會を獲させた。「僕は、もとお國の店に奉公してゐた者です。いろ／＼昔の事を御話して見たくて、一寸今日伺つたのだ。」

もつとも、こんな紹介が、健助の如何なる作家的、人間的興味、乃至好奇心を動かしたかを、筆者は知らない。――とにかく、勘三郎は健助に會つた。それは、やや奇妙な對面でなくもなかつた。蓬々とした髮の、コックの着るやうな白い上衣を無雜作にひッかけた四十がらみの男に、健助は何の見覺えもなかつた。それは、彼が黑眼鏡を掛けてゐた爲めとは決して云へない。

勘三郎の方では室へ入るなり無遠慮に浴びせ掛けた。

「やア、あなたは昔どほりの『健さま』ですな。」

昔健助の國の家では、「家の者」は「店の者」から皆敬稱を用ゐられてゐた。たとへば健助の父は「旦那樣」、祖母は「おふくろさま」、母は「あねさま」、然して健助は「健さま」と呼ばれた。この記憶だけでも、勘三郎が店にゐた事は疑ひなかつた。健助に取つて、肝腎の彼の名前その物は、嘗て「勘」「勘」と呼び棄てたやうな氣もし、又氣もしなかつたが。――然しそんな事は、上下の地位の當然の結果だ。いつも十何人もゐ、絶えず替つた「店の者」の名前なぞ、まだ子供時分の健助がどうして一々覺えてゐやう。

「いつ頃僕の家におられたんです？」

健助はきいた。

「左樣、二十何年前、丁度僕の十四から十六、あなたの八つから十時分ですよ。」

「すると二年ばかりきりですか？」

「左樣。それが初めての奉公でね。然しその二年の經驗が、僕をして大膽今日の僕たらしめた原因です。」

「失禮ですが、何を今しておいでです？」

「放浪者です。」

勘三郎は一種不氣味な笑ひかたをした。健助はいやな氣もちになつた。かう云ふ返答、かう云ふ表情は、彼がたびたび物質強請者によつて經驗させられたところのものだつた。

「然し、僕は決して放浪費をねだらうと思つて來たわけぢやアないから、安心して下さい。」

すばやく健助の睛を讀んで、勘三郎は黑眼鏡の背後から又笑つた。健助はべつないやな氣もちになつた。然し、仕方なしの笑ひに紛らせて茶をすゝめた。

「ありがたう。」

相手は一口に茶碗の中の物を啜みおろして、

「僕のお店も、とうとうおやめになつたさうですな。」

「さうです。」

「相続人のあなたが店嫌ひぢやアね。もつとも、あなたは店のやりかたにも御不満だつたらしいが。」

「よくいろんな事を知つてますね。」

「知つてますとも。——あなたは今迄たびたび、お國や店の事をお書きになつたでせう。書けばよむのが當然でせう。」

「これは一本まゐつた。」

健助は苦笑した。

「實は、さう云ふあなたの物に興味を感じて、いつか一度伺はうと思つたんです。——大分いろんな事をあなたは御書きのやうだが、どうも僕達店の仲間の事は、あんまり御存じないやうですな。」

「知つてませんか？」

若干の皮肉を以て健助は反問した。

「ゐられるか、ゐられないか、試しに昔お店にゐた記憶を少し話して見やうかな。どうです？」

「どうぞ。」

この奇妙な客に對して、健助はかう返答した。むしろ、するより仕方なかつた。

勘三郎は相變らず黒眼鏡の底に微笑しながら、で次のやうな斷片的記憶を語り出した。

さて、何から話しますかね。……僕は、お家へ行つてまづ初めて要領ッて奴を覺えたんだ。

行つて間もない或る日の事さ。朋輩の浪公ッてのと一緒に、店の隙を覘つて二番藏の二階へあがつて、荷の上へころがつて晝寝をしてゐたんだ。と、いつの間にか「おふくろさま」がコトコトあがつて來て、見つかつちまつた。あはてて浪公に起されて眼をさましたはいいが、もう逃げ場がない。おふくろさまは構はずやつて來て、どうしたつて訊くんです。

ところが、そこが新米と故参の分れ目だね。僕より四五年前に來てゐた浪公は、訊かれても何とも返事をせずに、默つて俯いてゐるんだ。僕もさうしてゐればいいのを、そこが新米の悲しさ、「おふくろさま」に怠け者だと思はれたくないと考へて、お腹が痛くて寝てゐました、つて答へたもんだ。すると、そりやアいけないから藥でも飲んで納戸へ行つて寝てゐるがいい、つておふくろさまは云ふ。誰が納戸へたんか行つて寝てゐられるもんか。名前こそいいが、そいつア古蒲團や古道具を隅へ積み込んだ、晝間でも薄暗い濕つぽい室だ。むしろ獄だ。そんな中へ入つてゐれば、それこそほんとに痛くなる。で、ただ「へいへい」ッて云つてるんだ。

浪公の方はッて云ふと、初めから何とも云はずに神妙にしてゐるから、そんなに油を賣つちやアいけないぢやないか、ッてお叱言で、そ

のまゝ放免だ。やがて浪公が行くから僕も出て行く、ところが厠へ行くと、いろいろ用があるから仕事を云ひつけられる。厠で立つたり坐つたばかりでなく、蔵の方へも何度も立たせられる。ところが、生憎く蔵への通路が、板の間を越して奥のおふくろさま達の居間からマル見えと來てゐるんだ。さアそこを通るたんび、向ふの方からおふくろさまが、勘や、腹が痛かつたら寝てゐろ、寝てゐろ、ツて仰るんだ。その皮肉には、一日どんなに弱らせられたか知れない。それに懲りて、その後僕もすつかり浪公流にしちまつたね。

勘三郎は一息ついた。「なアんだ」と云つた顔を健助はした。そんな事が自分の知らない事なのか――勘三郎はニヤリとしながら次の話へ移つて、

要領ツて云へば、もツと痛切な經驗がある。

その時分には、まだ汽車が町まで通じなくて、東京の品物は、W峠を一つ越したO驛からみんな運送に積んで持つて來たもんさ。何しろO驛から町までは可成な道のりで、おまけに間のW峠が随分高い。だから、朝早く向ふを運送が出れば、丁度夜中の二三時頃こつちへ着くんだ。着くと、ドンドン大戸を叩くから、店から起されちまふ。さうして荷物を始末させられるんだが、何しろ丁度寝入り花の時刻だ。何がいやだといつて、これほどいやだつた事はない。

が、いくらねむたくても、受け取るだけならまだ大した事はない。やり切れないのは、そのおろした荷物を残らず――菰包みなら菰をほどき、箱詰めなら釘づけの蓋を一々あけて、中味を検査しなけりやアならない事だ。その手數と手間が堪らない。下に愚図々々してゐると、夏なんか空が白んで、そのまゝ朝飯を食つて店をあける騒ぎだ。

一體もとは、そんな馬鹿々々しい眞似はしなかつたそうです。そう云ふ餘計な骨を折らなければいけなくなつたのは、運送曳き達が盜人をするからだ。汽車でもやつてゐるか知れないが、中味が始終ひどくやつつけられるんだ。たとへば鑵詰の箱なんぞ、一箱八貫目する奴が七貫目位きりない。もつとひどいのになれば、一箱全部食つたり抜き取つたりして、石ころや土だけ詰つてる騒ぎだ。で、手數や手間暇に構はず、送つてよこした荷物は受け取る前すつかり調べる定めになつちまつたんだ。お蔭で、僕達こそ面の皮さ。もつとも、その僕達も運送曳きに負けない盜人をやつてゐた事は、あとで御話しやう。

さて、それほど嚴しく検査しても、やつぱり脱け道はなくならないんだ。たとへば酒樽だ。あの時分、お店では一方で酒類を賣つてたが、その酒樽がみんなやつぱりO驛から來る。と、運送曳き達は、うまく酒を樽へ詰んで、途中でシコタマ飲み減らすんだ。飲んだあとには

穴を注いで混ぜて、その穴へ桑の枝を挿して切つておく、さうすりやア誰が見たつて一寸わからないし、中味の洩れる心配もない。丁度又、桑の枝つて奴が柔かくしなやかで、栓にやあ持つて來いだ。その又材料なら、あの邊一帶の桑畑地だから無盡藏さ。

だが、幾らごまかしたつてわかる時にやアわかる。或る日台所の手傳ひをしながら何の氣もなく聞いてゐると、旦那と一番々頭の勝さ(註、勝さんの地方語)が、奥の居まで頻りと樽の話をしてゐるんだ。桑の枝を挿すさうだが、どうも惡智慧にやア困つたもんだ、ッてね。そいつを小耳に挾んだから、そのあと御得意先きの料理屋へ樽を屆けた時、話のついでにしやべちまつたんだ。

「桑の枝を挿してあるのは、どうかすると水が混つてるさうですから、御氣をつけなさい」つてさ。よせばよかつたのに、一ぱし物識り顏をしたかつたのと、それ以上、お得意樣に正直に親切にしなければならないつて云ふ殊勝な考へだつたんだ。

ところが生憎、その時の樽へ桑が挿さつてたんだ。無論さう云はれたから、向ふぢやあ念入りに調べて見たんだ。すると僕の言葉どほりだから、さアこの樽には水が入つてるてんで、早速送り返してよこした。店ではびつくりして、誰がそんなことを云つたかつてんで調べて見ると、無論僕さ。いや、その時勝さに呼びつけられて叱り飛ばされたの何のつて、目から火が出るとでも云ふか、僕は生れて初めての怒られかたを經驗した。その時勝さは、そんな事で商賣が出來るか? 又この後立派な商人になれるか? つて、今にもなぐるばかり拳固を振りまはして、口から泡を飛ばして怒鳴つたんだ。

この教訓は、僕の骨身にこたへたね。人間は正直でなけりやアいけないの何のつて學校で教へるのは大うそで、商賣は正直では決して出來ない、つて事を、しんから知つた。

「そりやあ面白い。」

健助は一寸感心して、然し充分の藝術的靜觀性を以てうなづいた。彼は、商人の家に生れながら、店の商品の名前さへ碌に知らずに過した。まして、そんな荷物や酒樽の機微を知つてゐる筈がなかつた。その同じ無頓着さが、然し今日彼を著名な藝術家にしてゐないとは云へなかつた。その自信が、彼に充分の靜觀性を持たせたのだ。

「面白いかね?」

黒眼鏡は不愛想に云つて、次の話へ進んだ。

ところがさう云ふ忠義な番頭が、中ぢやあ、あんまり御追從とちがはない眞似をやつてゐるんだ。もつともそいつが、勝さんの所謂立派な商人になる修業の一つかも知れないがね。たとへば同じ酒だつて、お店は、どつちかと云へば卸しの方が主だつたから、無論樽賣りもした

が、そいつを分けて瓶詰め賣りもした。手數にかかはらず、その方が儲けが多いんだ。ペーパーや封印はみんな勝手に刷つて、ベタベタ貼りつけるんだ。

その瓶詰め作業は、夜一番藏の中で莫座を敷いてやる事に定つてゐた。仕事その物は、何も骨ぢやアないが、冬の晩なんかにはこいつは隨分辛いんだ。何しろあの山國の寒さだ。下手に素手で藏の扉のカンヌキなんか握つたら、手の皮がへばりついて離れない晩さへある。ところがそんな晩でも、不用心だからつて藏の中へは一切火を入れない定めだ。それは無理もないが、ただぢやア手足がこごえて仕事が出來やアしない。で、お手の物の酒だ。瓶詰ッて云ふと、いつもきつと勝さが總大將だつたが——あの人は全く酒好きだつたね、——大きなコツプでグウーッと一杯呷りつけて、章魚のやうに向ふ鉢卷を締めて、

「さアやれッ！」てんで取りかかるんだ。

そいつを眞似て、みんなコップでガブガブやるんだ。何しろ大將自身模範を示してゐるから、勝さも怒るわけにやあ行かない。みんな大ツぴらだ。

が、そいつが習慣になつて、瓶詰めッて云やあ、春の夜でも秋の晩でも、みんな飲む事に定まッちまつたんだ。ついには激しくなつて、仕事なんかやらない時でも樽の口をあけて、飲みッくらをする騒ぎだ。中にやあ、一度に一升飲んだなんて自慢する奴まで出て來る。僕が酒を飲み覺えたのも、お店へ行つたお蔭さ。

「飛んだ罪惡を、と、僕の家では叔父に敎へたわけだね。」

「全くでさ。」

勘三郎は、彼特有の微笑を顔に浮ばせた。

「然もこんな事を、奥では誰も知らなかつたらしいから面白い。そう云ふ清酒のほか、もう一つ養命酒つて奴がある。そいつは店の瓶棚へ乘つてるんだが、これも夜なんぞみんなで飲み廻したんだ。空にした奴は、ペーパアを剝いで端から裏の空瓶の箱へ投げ込むから、犯跡は決して殘らない。

が、あんまり調子に乘つて飲むから、棚の瓶がだんだん減つて來るんだ。漱石旦那も變に思つたが、或る日棚を見ながら、

「たんと賣れもしないやうだが、この頃大分養命酒の瓶が尠くなつたな」ッて、勝さに仰るんだ。勝さは、何とかかんとか云つてその場をごまかしたが、さア店ぢやあ大恐慌だ。少し形勢が危險になつたぞ、ッてんで、それから當分養命酒には手をつけない事に申し合はせをした——。

から云ふと、店の者は酒ばかり盗み喰つてゐたやうに聞えるが、そうぢやアない。[illegible]出來る時の品物あ、何でもヤッたん

だ。たとへば罐詰なんか、一月どの位食つたか知れない。珍しい罐詰でも來ると、賣る前一度味を見て置かなけりやア、とか何とか理屈をつけて、端から引ッ切つて試食するんだ。おそらく、奥の人達が食べた事もない味まで、コッちぢやアみんな心得てゐたね。砂糖も一度拔つた事があつたが、こいつなぞはあんまり目に見えて舐め荒したもんだから奥でも感づいて、儲けにならないからッてんで間もなく御やめになッちまつた。

鐵助は苦笑した。

だが、こんな事はまだ性質のいい方の盗みさ。もつとぐッと性質の惡い奴を、故參の幾人かはやッてたんだ。どんな事かつて云へば、藏の中の物を勝手に持ち出して賣りッ拂ふんだ。無論註文物なんかにかこつけて持ち出す事もあるが、然しそいつは返つて發覺の危險がある。一番安心で儲けになるのは、分量の尠くて價の高い貴重品、——たとへばその當時ならコカインてやうな物を、こつそり懐へ忍ばせて裏口から出るんだ。

どこへ行くつて？　そう云ふ贓品買ひが、又ちやんと待つてるんだ。そいつが、素性の知れない、風來商人や何かぢや決してない。同じ町の中で、然も堂々とした店を構へてゐたから、平氣で、そう云ふ眞似をするんだ。その一番の奴は、御店と同じ商賣をしてゐた河津屋さ。無論あなたも知つてるだらう？　あいつ、未だに手廣く商賣をやつてるつてね。もつともあの主人位金があつて惡辣なら、今の世の中ぢやあ成功するに手間暇が要るもんか。彼奴、こつちの店の者がいろんな物を持つて行くと、いい加減な安價で幾らでも買ひ取るんだ。どころか、今度は何を持つて來いの、あれを持つて來たら高く買つてやるのつて、積極的にけしかけるんだ。そんな商品で、ドシドシお店と競爭するんだ。

これぢやあ、どんな競爭相手だつて堪らない。お店でも隨分河津屋にあ客を取られたもんさ。それでも暖簾を持ちこたへたのは、やつぱり老舗の信用のお蔭だつたんだ。旦那も流石時々、どうしてあそこぢやアあんなに安く賣れるかしら、なんて不思議そうに勝さにきいてゐた。「どうもわかりません」なんて勝さは勝さで云つてゐたが、無論あの人は知らなかつたんだね。前云つたとほり、酒こそ飲んだが、罐詰位こそ食つたが、勝さは持ち出しなんかする人間ぢやア決してない。もし外の者がやる事を知つてたら、きつと火のやうに腹を立てたにちがひない。同じ店の中でも人間によつて——と云ふより、上と下でそれだけの秘密と思想の違ひがあつたんだ。……面白くないかね？

「面白いね。」
健助は少々あきれながら答へた。
「こんな内情は、今までまるで知らなかつたでせう。」
勘三郎は追撃した。
「知らなかつたね。」
健助はやむを得ず承認した。この黒眼鏡の、どこか盗賊味を帯びた相手の姿から、彼は或る種の恐怖と壓迫と、同時に痛快味を感受した。
以上は大體商品泥棒の輪廓だが、金の方だつて無論抛ては置かなかつたさ。そつちは又そつちで幾らもやり方があつたんだ。たとへば夜、旦那は夕飯のあと店へ出て來て、帳場へ坐つて一日の總勘定をする。ところが、時々宴會だの用だので旦那の留守の時がある。或は家にゐても、客があつたり晩酌の飲み過しだッたりで、店へ出て來ない晩がある。すると代りに、勝さが帳場へ坐つて計算するんだ。が、勝さも、店の用や自分の家の用で不在や早歸りをすると、二番々頭の定さが代理の代理をする。
ところが、勝さの時は誰も何とも云はないが、定さはひどく人がいいから、その勘定つて云ふと店ぢう此の時とばかり要求を提出する。「定さ、一寸濟まないが五十錢ばかり貸してくれないか」とか、「小遣ひがなくッて困るから一つ」とか、「煙草代をこたかね。無論、上の者が一圓頼めば、下の者は五十錢とか三十錢つて風に、こんな場合にも自然發生的階級がある。ところが何しろ人がいゝから、それを定さはことはり切れない。「ぢやあ内密に」とか、「今度だけ」とか云つて、勘定の中から出してやるんだ。無論今の新式計算器なんかありや始末が惡いが、その時分は流石呑氣で、小賣りの金はみんなたゞ錢箱の中へ抛り込んであつたから胡麻化そうと思へば何とでも胡麻化せるんだ。
ところが或る晩、やつぱり定さが代理の代理を承つてると、どうした風の吹き廻しか店ぢうで貸してくれッて手を出したんだ。すると定さが怒り出した。
「こいつらア、人をあまく見て吐かし放題を吐かしやアがる。勝手にしやアがれッ！」
ッて怒鳴るが早いか、箱ぢうの錢をつかんで疊へ叩きつけちまッたんだ。さア、文久錢だの銅貨だの銀貨だの紙幣だのが滅茶苦茶に跳ね返つて、そこらに置いてあつた火鉢や瓶へ當つて、チヤリチヤリッ……ッてすばらしい音を立てる。その跳ねッ返りで、いやッてほど顔や手を打たれる奴もある。
みんなこれには度膽を拔かれたが、その音が奥にゐたあねさまの耳へ聞えちまッた。もつとも奥ッて云つたつて、店の仕切りの三尺暖簾を潜ればもう奥の部屋だから、その近くにゐれば聞えない筈はない。で、あねさまが暖簾から顔を出して、「今の音は、あれは何だね？」

ッてきくんだ。みんなの慌てかたッたらない。大騒ぎで、散らかつてゐる金を足や膝の下へかくして、「いえ、なに、何ともありません。」「でも、大分えらい音がしたやうだが……。」「いゝえ、音なんか致しません」で、とうとうシラを切つちまッた。あれがあねさまで大助かりさ。もし旦那だつたら、幾ら何でもそのまんまには濟まなかつたらう。

さてあねさまが行つちまふと、みんなで金を拾ひ集めて定さのところへ出した。と云へばいいが、實はすつかりは出さずに、めいめい欲しいだけ懐へねぢ込んだんだ。さうなると結局取り得さ。みんな大笑ひで、「却つて雑作なくてよかつた。これからは始終ああ云ふ工合に拋つてくれ。」なんてんで一卷の終りさ。

その調子だから、掛取りへなんか行つたッて、どれ位みんな胡麻化したかわからない。殊に例の浪公なんか、隣りの郡へ廻つて行つた時、或る晩町の藝妓を三四人も揚げて亂痴氣騒ぎをして、酒を飯へぶッかけてお茶漬け代りに食つたッて云ふんで、一時大分評判になつた事がある。――が、例の要領がいいから、とうとう奥へは知れずに濟んだ。

考へて見ると、よくまアそんなふうでお店は損をしなくて行つたもんさ。或は損の時もあつたか知れないが、とにかく身代を減らさずに、やめる時だつて町で指折りの財産家だッたさうだからね。それも、あなたの物で讀んだんだが。――商賣なんて隨分儲かるもんだなあ、と、僕はつくづく感心したもんだ。もつとも、僕達は大抵給料無しで働いてゐたんだ。(だからこそ盗みもしたんさ。)盗人だ何だつて、世間や、、はやかましい事を云ふが、、、その物が平たく云へば、、、、。むしろ、、、さ。そうでなくてどうしてそんなに儲かるもんか?だが、こんな哲學は少し古すぎますかね?

「浪が掛取りの金を費つた事は親父達もあとで發見して、暇をやつちまつた。」

健助は云つた。

「然し、そりやアあとになつてからでせう。いくら要領がよくたつて、さうさう大ッぴらに繰り返しやあ、長いうちには露顯するさ。」

「いや、君の話は面白い。――だが、どうしてそんないろんな事が、奥へ……少くも僕なぞにわからなかつたんだらう?僕は、隨分よく店の人達と一緒になつてゐたつもりなんだが。――こりやあ暖簾だね。君の今云つた、奥と店のあいだの暖簾さ。それ一重で、すつかり世界がちがッてたんだ。」

「御説どほり暖簾の罪でさ。その薄ッぺらな紺の布切れ一つで、どうしても僕達が奥の物質生活へ入つて行けなかつたやうにね。」

健助は默つた。勘三郎の一種得意な調子と同時に、何か得體の知れない寂しさに襲はれた爲めだつた

「だが、あなたのやうに順調に大きくなつた人は、から云ふ種類の事を知らないのが當然さ。僕はあなたの、小説や芝居を見て、こんな事も何かの參考になるかと思つて、今日はわざわざやッて來たんですよ。」

「どうもありがたう。」

「一概に感謝されては痛み入る。――おや、この位にして、何故僕がお店を出たか、いや、出されたかを話しませう。」

僕の二年間の結末をつけた原因は、極めて簡單さ。泥棒だ。――と云つても、骨董品を盜んだわけでもない。座敷の押し入れの上の棚へ取つてあつた柿です。あなたは今も柿好きですか？ そんなら覺えてゐるだらうが、その棚へ、毎年秋になるとおふくろさまが、もろふたつて云ふ箱見たやうな物にドッサリ澁柿を並べて乘ッけておいたもんだ。冬の最中になると、それがすつかりブヨ〱になつてあまくなる。その冷たい水ッぽい奴を、熱い炬燵へあたりながらかじるのが、あなたやおふくろさまは大好きだッたね。

そう云ふ僕も、實は大好物だッたんだ。で、或る日旦那の云ひつけで座敷の押入れへ硯か水引を出しに行つたついでに――ついでもおかしいが、そッと押入れの上へ攀ぢあがつて、もろふたの中の奴を二つぼかり失敬したんだ。ところが運惡く、丁度箪笥へ入れやうとしてゐるところを、座敷へ入つて來たおふくろさまに見つかッたんだ。生憎な時で、さアもうどうにも胡麻化しがつかない。降りて僕の柿を出させられたあげく、散々御目玉を頂戴しちまッたんだ。(可愛い孫のせいもあるが、あれは、一つはおふくろさまの好物だッたせいだね。)

その時、ウンと神妙にあやまりやアよかつたが、そうしたかつたんだ。柿の一つや二つ、何もそんなに云ふにやあ當らないぢやないか、外の仲間のやつてる事を知らないか？ そう云ふ故參どもの惡事に較べりやあ、柿盜人なんか問題にもならないぢやアないか？……そう云ふ腹があるから、馬鹿々々しくて、本氣であやまれないんだ。一つは、無論若さの修業不足のせいさ。

で問題が大きくなつて、旦那やあねさまの耳へも入る。そうなると、あねさまは、何度も裏口から饅頭を買つて來る僕の姿を見つけたと云ふ。旦那は旦那で、この頃晩の帳合ひが合はないのは勘定がちよろまかすからだらう、ッて云ふ。(饅頭なんか、いつでも番頭や故參連中の云ひつけで、僕は仕方なく近所の菓子屋へ使ひに行つてたんだ。)そこで、どうも手癖の惡い、性質のよくない小僧だッて云ふ事になつて、丁度親父の村で御祭りがあるのにかこつけて遊びに歸されて、それッきりお暇さ。

無論、體よく店ちうの犧牲になつたわけだ。キリストぢやアないが、僕一人でみんなの罪を背負つたんだ。そう思へば何の事もない

が、むしろ大いに得意でみられたわけだが、そこが若年の血氣でね。えゝ馬鹿々々しい、世の中なんてこんな算盤の合はないところか！よし、そんならウンと狡く世の中を渡つてやれ、ッて氣もちになつて、それから僕の轉々たる放浪生活が始まつたわけさ。

勘三郎は大聲で笑つた。健助は、ホスピタリテイの精神によつて一緒に笑はうとしたが、その顏面表情を、丁度新しい客の來訪を告げる女中によつて妨げられた。此の著名な人物に如何に訪問者が多いかは、前述のとほりである。むしろ、これだけの勘三郎の話のあいだに一人も客がなかつた事が、不思議だつた。

客がとほされると聞くと、勘三郎は歸る挨拶をした。

「僕の方には差し支へありませんよ。ゆつくりして下さい。」

健助は引きとめた。

「ありがたう。——が、僕の方に少し差し支へがあるんだ。商賣がらね。」

「商賣から？」

放浪もやつぱり商賣の一種だらうか、と健助は疑つた。

「左樣。」

勘三郎は落ちついた黑眼鏡の微笑を以て答へた。

「實は僕は、今も D—R—B なんだ。ただし本職の。——それに、今夜一寸遠くへ行かなければならない身體だ。いつか又緣があつたら會ひます。」

強い握手をして、彼は風のやうに去つて行つた。

健助は、心中永久の暖簾一重を感じた。

(1927、7)



長篇

夢殿

中里介山

小引

(發端) 烏佛師の描いてゐる天人の繪が蘇我の石河の郎女に酷似してゐることを秦河勝が不審とし一場の議論となつたが、歸る時、河勝は法隆學問寺の建築を深き感慨にながめる

(第二回) 聖德太子の舍人調使麿が太子の愛馬の烏の駒を太子生誕の地なる橘寺から牽き出して、飛鳥の都より斑鳩の里へ急ぐ情景

(第三回) 此處には太子夢殿に入定の夜、めいらの森に魔神が戯るゝ事、攝州難波の津から、隋朝が亡びて唐代が起らんとする重大なる報告あること、高向の學生がその報告を太子に傳へんとして斑鳩の里の夜を彷徨する事、烏佛師が自作の繪姿におびやかさるゝ事等をうつす。

第三回

だが、その夜の夢殿のあたりは別段に變つた氣色も見えなかつた。

上宮王院の燈は眞白にかゞやいて庭の砂までが常寂光の光を漂はせてゐると見れば見られるまでの事である。

烏の駒が着いたならば、その嘶きが聞えやうものを、それも聞えず、調使麿が來たな

ちに、せめて瑞垣の下にうづくまるその姿を見やうものと見られず。

この中に太子お在すしるしとしては、例によつて、夢の如き白光が、連子の窓の間から漏れて來るばかりだ。

だがまた、法隆寺學問所の燈火の光は紅々と見ゆるのに、この夢殿を漏るゝ光が、いつも白いのは如何したものだ。

日の光で見る時は、白亞に丹柱の眼のさめるほどあざやかな夢殿が、夜になると斯うして白い光がさす、光が白いのみではなく、庭も白い、庭が白いのみではない、夢殿そのものが白い光にかゞやく。

この白い建物と白い光とが、斑鳩の里の眞中を闇の夜も、夜もすがら埋み殘してゐるのみならず、吹く風も心して此處ばかりは吹かないやうだ。見給へ、斑鳩の寺の松の木の梢が塔の羽風に折々さわぐことあるに、此の夢殿のあたりは玉垣の外までもそよとの風も吹かないではないか。

風も心して吹かないやうに、此のあたりは人も心して近づかない。

『御殿に燈の見える時は上宮太子が、あれへお入りになつて夢をごらんになつてゐらつしやる時だから我々は心して殿下の御夢をさまたげないやうにせねばならぬ』

「殿下には、何の夢を御覽になるのですか、聖人には夢なしといふ諺もあるのに、殿下ほどの大聖徳が、わざ〳〵夢を御覽になりたいとは…………」

『それは、我々凡夫にはわからぬ、人の傳ふる處では、經文の中の難句にお逢ひになつた時、あれで瞑想しておゐでになると夢に金人が現はれて、殿下の爲に經文の難句を盡く釋いてお授けになるのださうだ』

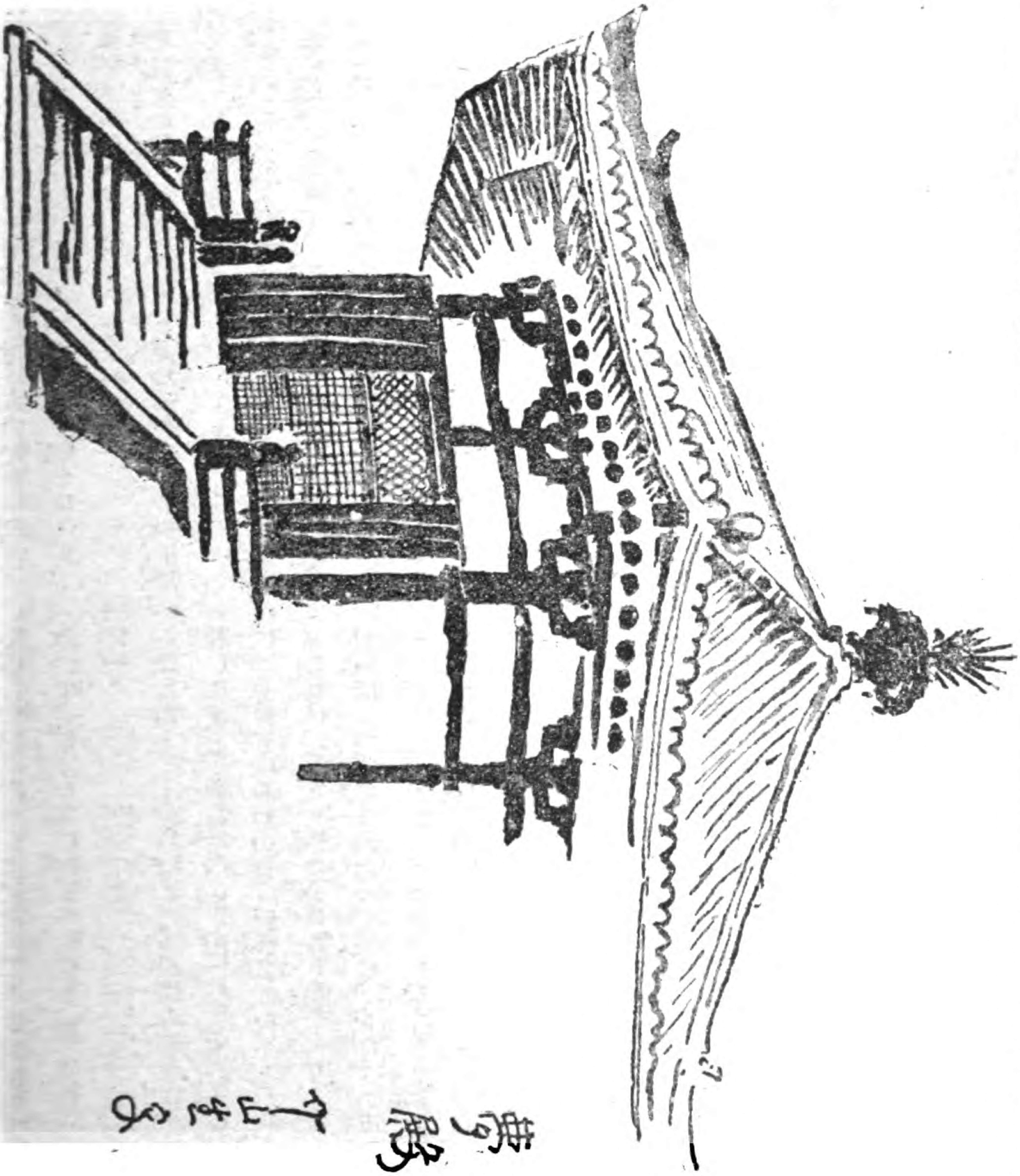
「はゝあ…………それはまた不思議の事を承はりますね、殿下の御前生に西天の大智識で、東土に於て千百年に現はれ給ふ聖人と承るに、その方にもわからない經文といふものがあるのですか」

『經文は、もと大聖の金口より出でたりと雖も、結集の時は、後世の僧俗によつて成されたるが爲に、自然そのうちには眞理をさまたぐる夾雜物があるのだ、それが爲に殿下は光明の發露を夢中の觀照によつて闢き給ふに相違ない、三經の御註疏も十七條の憲法も悉く殿下の御夢の賜物だ』

『さうして見ると、つまり殿下には夢の世界から眞理を求め出して、現實の世界に與へ給ふのだな』

『さうだとも……いつぞや學問所の學生が殿下の御筆に似せて世間虚假、唯物是眞と書いてゐると、殿下が佛の字のわきへかりに夢と記して微笑まれた事がある』

「世間虚假、唯夢是眞……我々にあつては現實の重さに堪へられない時に、夢の世界が慰安所となることもある。殿下に置かれては彼が眞實の世界で、これが虚假の現象として見ると、我等の有する煩惱とか、繫縛とか、苦痛とか、怨恨とかいふやうなものは夢幻泡沫に過ぎない、我々の重しとするものは輕く、我々のおろそかに見る處に嚴粛の



世界を認めておいでになるにもかゝはらず、此の空の空、虚假の虚假たる世界をお見捨てにならない——殿下は此の世を愛し給ふのですか、それとも、この世の未練執着を愛し給ふのですか』

飛鳥の都の御殿原が、かりそめの用向で、この斑鳩へ來て、用談が長びき、夜になつて轡を並べて、飛鳥の都へ歸らうとする時、東院の前を、はるか此方から拜しつゝ、馬上で語り合うのがこれであつた。

雲上の聲を知るのみ、我々凡夫は凡夫だけの器量で、短かい舌先を二三寸動かして見るだけの事だから、その心持が徹底でありさへすれば、何と評定を申上げても、罰も當るまい、冒瀆の罪にもなるまい、たゞ、偉大なる者に對する謙虚の心が我々に欠けた時は、他を瀆すにあらず自ら墮落の淵に立つもので、そこには救はれざる無限の墮落があるといふ事を心して居れば宜しい』

『一説によると殿下には眞理を求めんが爲に、あれにお入りになるのではなく、疲れを休め給はんが爲に、夢殿へ隠れ給うのだといふ者もある……』

『疲れを休め給はんが爲に……殿下には何事に疲れ給うか知らん』

『今の世に、殿下ほど偉大なる疲勞を經驗し給う者は無からん、身に於ても心に於かれても、國の爲に世の爲に、おんみづからの爲に、それからまた……數へ立てては際限があるまい、たゞ最も多く愛する者が多く疲れる、我々の疲勞は煩雜から起るが、偉大なる魂には偉大なる疲勞がある——そこにまた偉大なる休息が無ければならぬ。夢殿の世界は地上に於ける、殿下の唯一の休息所ではあるまいか』

『それは見やう一つである、ある者はまたいふ、夢殿は殿下が眞理の探究所でもない、慰安の隠れ家でもない、祈りの聖壇であると、現實の世では祈つても聞かれないことが、あの夢殿の中での殿下の御祈りであると……彼處に於て、有ゆる人間苦を集めたる殿下の御祈りがある。從つて有ゆる人間の受くる罪業の贖となつて天上に絶叫さるゝ聖者の聲がある——夢の甘美なる想像に耽つて、休息の安樂なる三昧を貪る輩の到底うかゞひ知ることの出來ない苦き杯を、有ゆる人類に代つて、受けては飲み飲みては祈り給ふ救世者の聖壇が彼處だ——』

斑鳩を離れて須知迦部街道の辻に出た時分に彼等は快馬に輕く鞭を當てた。

そこから云へば三井は斑鳩の裏になる。同じ夜でも表は明るい感じがして、裏は暗い色がまさるやうに見えるのは是非もない。その暗いところに息のつまるやうな聲があつて、

『夢殿の空が明るくなりました、せめてあの明るい空に近い處まで參りませう、まあ、何といふ和らかな、あの明るい空の色、定めて斑鳩の水晶が珊瑚の色に燃えてゐると思ひます、早く夢殿へ參りませう』

『可けない——』

と傍へにそれを抑へるらしい聲があつた。

『どうして、可けないのです』

『お前は光にあこがれる身ではあるまい、光は我々の身にとつて却つ

て辛い――』

『それでも、あの光はちがひます、まばゆい光ではございません、懐かしい光でございます、ごらんなさい、わたし達は知らず〳〵明るい方へ近づいてしまひました』

『やんごとなき御方は眞理の光にあこがれ給ひ、我々は火取虫の火にあこがれるやうに戀におこがれてゐるのだ』

『誰にも知られたくありません――天上にも星のないのが幸ではありませんか、地上にも人が無いやうに、誰も此處へは來ないやうに、それでも――罪の日に許された光は無いと知りながら、暗い處には、まだ、わたし達を嫉む惡魔がゐて、邪魔をするやうでなりません』

『さうだ、惡魔は我々を暗い處へ誘ふと共に、暗い處で我々を嫉む、やつぱり、明るい處がよい』

『夢殿のあたりをごらんなさい、さあ、何町四方でせうか、夢殿を眞中にして、天地が彼れだけ明るうございます、此の世に人の安靜を妨げる力が何者も無い處はあの夢殿ばかりでございます、誰にも知られない、誰も來ない、惡魔や鬼神の衆でもうかがへない、あの靜かな夢殿の光の下で、わたし達はこの苦しい、やる瀬ない息をつきませう』

『勿體ない――お前はその夢殿に御主のおわす事を忘れはすまい』

『夢殿の御主によつて、わたし達の此の苦しみが救はれるのではありますまいか、たゞ、夢殿の御主のみが…………數ある御妃のうちで、一番お生れの賤しい膳部のお妃を一番多くお愛しになる夢殿の御主が、わたし達のこの罪はおゆるしにならずともこの苦しい心はおわかりになる筈でございます』

『恐多い事だ、だが、聖徳太子の御胸臆によつて有ゆるものが裁かれ、また有ゆるものが許されるやうにも思はれる』

『裁かれやうとも許されやうとも、どちらでも宜しうございます、わたし達は夢殿へ行きたい』

『その愛は博大なれども、その處は孤絶だ、夢殿にあこがれる事は、わたし達の自由としても、その處に行くのは許されない』

『けれども、死ぬことはわたし達の自由です、何人も死を遮ることは出來ないと思ひます、その死の力で、死の自由で、わたし達は殿へ行きたい――それは許されるでせう』

『死といふものは、そんなに力の强いものではない、生きて自由の求められないものは、死して落ち行く事の許される場處は地獄あるのみだ』

『それでも、夢殿の光は、あんなに近くなりました』

『だが、夜の闇はこんなに深くなつてしまつた、どうやら霧が捲いて來たやうだ、あゝ此の足が重い――』

『そこは可けません、それはめいらの森でございます』

『こゝで暫らく休ませて下さい』

『否え……そこでは夢殿の光が見えません、その森にはめいらの神が隱れてゐます』

『死の休息は寧ろこんな處にあるのぢやないかしら』

『あゝ、とう〳〵二人はめいゝらの森へ入つてしまひました、もう夢殿の光が見えませんどこも彼處も眞暗です』

彼等二人は夢殿にあこがれて、めいゝらの森に迷ひ込んでしまつた。

めいゝらの森といつても、さう深い森ではない、たゞ此の晩は闇が深かつたのだ。それで二人が此の森に入ると共に、梢にゐためいゝらの神が眼をかがやかして喜んだ、彼等二神は、さゝやき合つて、二人の肩に飛んで降りたのを二人は知らない。

めいゝらの森には太子の修行をさまたげんとして男女二つの侏儒の形した魔神がゐて、一つは女に向つて戯れ、一つは男に向つて戯れるさうである。最初は太子の夢殿入の修行をさまたげる目的で來たのが、その目的を果すことが出來ない爲に、こゝに止まつて行人を誘惑するのださうである。さういへば此の邊は斑鳩の鬼門に當るやうだ。

その時分、斑鳩の里では、十を頭にやつと歩けるほどの子供達が、何處から集まつたともなく隊をなして辻々から流れ込んで來たが、その子供は手に手に、花形の小皿に盛つた燈火を、竿の先につけたのを持つて極めて靜肅に集つて來たが、東院に近い處へ來ると夢殿の方に向いて、合掌しながら申合せたやうに

『なんむ、なんむ』

と唱へ出した。それは何の眞似だか わからない。

合掌と、なんむが濟むと、これ等の子供が一齊に崩れ出した。燈明皿の火の子が燎亂として飛び散る。火花を散らすといふ文字通り、大規模の競合戰がはじまつたのだ。

處が、それも誰差押へるといふこともないうちに靜まつてお互に自分の火の火皿の消えたのを親火からうつしてもらひ、さうして以前のやうに一旦整列合掌してから

『なんむ、なんむ』

と唱へ出し――またも隊伍整々として歸路についたかと思うと、吸ひ込まれて闇に消えてしまつた。

子供達が靜まつてから、やゝ暫らくあつて、ある家の老爺が、物ういやうに眼を見ひらいて

『子供等、あんまり騷ぐではないぞ、聖德太子樣が飛鳥の都から、この斑鳩まで御休息にお出でになつてゐる事を知らないか、太子樣をお快くお休ませ申さなくてはいけない、お前達の父親が一軒の身上でも治めるにはなか〳〵骨だ、一國の御政治を支配しておゐでなさる御心勞をお察し申さなくてはならぬ、靜かにしてお休ませ申せ』と呟いたが、それは、もう子供等が散つてしまつた後だから誰も相手にするものが無い、老爺は再び足踏みのばして夢寐の境に入りながら、

『ほんとに、何が樂しいといつて寢るほど樂しい事はない、寢て夢を見てゐるのが此の世の極樂だ、あゝ睡い』

彼は昏々として夢路に入つてしまつた。

斑鳩の里は漸く〳〵定まつて、夢殿の連子を漏るゝ光のみが、いよい

よ冴えてかゞやくのであるが、今宵に限つて、異な事は、法隆寺學問所の外務部の一角が紅々と火をともして、懈怠のない勤務ぶりを外に示してゐるのは、何か混み入つた調べ物でもあるか、明日を急ぐ公文發布の準備にでも忙殺されてゐるのか。この頃の外務部の緊張は外目にも忙がしさうであるが、今宵のやうに徹夜までしやうといふのは珍しい。聞く處によると、此の頃は外交多難といふうちに、國際の關係よりは寧ろ彼地——支那の内地に一大變革が起りさうなので、攝津の難波の迎賓館から來るたよりを、此處の法隆寺學問所では首を長くして待ち構へてゐる。多分最近何ものかの報導に驚かされるだらうとの期待で、こゝの學問所は緊張してゐたが、それでは、いよ〳〵それが今日明日に迫つたのか。

内治外交の樞機が飛鳥の都の大宮よりも、法隆寺學問所の有司の手に知られてゐることは、聖德太子攝政の御位から申して無理の無いことである。

それと、もう一つ緊張してゐるのは並松の屯所で、こゝは非番を召集して、難波津街道筋との連絡と兼ねて、斑鳩の里を守つてゐる。いつもならば、さほどの事もないのに、右のやうな外務が緊張ぶりに對應し、それに上宮太子がこちらへお出でになる時は、何となく警衞が念入りに見えるのは、殿下御自身の仰せでも御内意でもないが、この頃は新羅の間者が絶えず此の國へ入り込んでゐる。これが爲に皇族の御身に萬一の事があつてはならぬ。新羅といふ奴は日本の國の癌だ。支那を背景にして、反覆常なき彼の去就に惱まされる事は久しい。殊に惱まされるのは彼に間者と刺客とを巧みに利用されるからだ。先年、來目の皇子が撃新羅將軍として御出征の間際に突然薨去されたのは、實は此の刺客の毒手にかゝつたのだといふ説がある。そのあとを襲いだ當麻の皇子がやはり彼地へは赴かずして筑紫から逃げるやうに都へお歸りになつたのは、やはり刺客に對する警戒の心から出でたのだといふ。

間者と刺客——この二つの者の恐怖は、すべての國交を斷絶し、苟も外人といふ外人を追放しつくさぬ限り根絶といふ事は六づかしい。文化の輸入と共に、その弊害が追從し來るのは已むを得ないといへば已むを得ないが最も同情すべきは警護の任に當るものゝ苦心だ。

そこで上宮太子が斑鳩へお出でになつて夢殿にお入りになるといふことは、此の屯所の上官にはなか〳〵の責任となる。殊に夢殿の連子の火影の夜もすがら明るいことが、彼をして恐懼戒心せしむること少くない。

若しや、新羅の間者のうちに、東漢直駒のやうな馬鹿者が現はれた日には、夢殿のあの安靜を守り奉る備へといつては何物も許されてゐないのだ。さうして、今の時に上宮太子の御地位の尊きは來目の皇子や當麻の皇子の比ではない。

先朝の時、百濟の日羅が都大路で、新羅の刺客の爲に殺されたのを目のあたり立ち合つて檢視をつとめたことのある此の上官は、その職

の神經が鋭く働かないわけには行かぬ。

夢殿の殿下には、もう少し自重されて欲しい、さうでなければ、せめて我々をして、もう少しお側近い處まで、お許しが無いことには萬萬一の時の責任が果し奉れないではないか――しかし、また如何に新羅とはいへ、さう無茶な馬鹿者が澤山ゐるわけではあるまい、有つた處でわが聖徳太子の御聖德を如何せんやだ――とその邊の信仰が焦心を和らげて警戒にも殺氣がない。

處が、夜半過ぐる頃になつて、この屯所がすわと色めき立つて來たのは、その邊の危惧から出たのではなく、蹄の音が戛々として、砂を蹴り立てゝ沿道の人の夢を驚ろかしつつ此方へ向つて來る遠音を耳にしたからである。

それは、當時國際要衝の地、津の國の難波から早馬が到着したのである。

これは外務部で待ち構へてゐた早馬である。それが到着すると法隆寺學問所の一角が一層色めき立つた。

程なく高向の學生は外へ走り出して、軒傳ひに講堂のうしろの繪所まで一散に飛んで來て、繪所の戸をホト〳〵と叩いた。

『鳥佛師、鳥佛師』

『誰だい』

夢を破られた鳥佛師の、ちよつと忌々しさうな返事が聞える。

『高向の學生でございます、お睡い處を相濟みませんが……』

『まだ夜が明けたんではあるまいに、何の用だね』

『難波の津から、たつた今、早馬が着きましてね』

『はゝあ』

『海の彼方の支那では隋の世が亡びて、唐の世が起つたと申すことです』

『いよ〳〵』

『え、ですから、取り敢へず、お知らせに來ましたが……』

『まあ、ちよつとお入りなさい』

鳥佛師は漸く身を起して扉を開きにかゝると高向の學生は、それを待ち兼ねたやうに入つて來て

『處で、鳥佛師、この事を何よりも早く殿下にお知らせを致したいものでございます』

『成程……』

といつて鳥佛師は睡い眼をこすりながら燈光を掻き立てたが、その光でパツと眼を驚かされたのは、學生の眞向きに立てられてゐる大きな額面の鮮やかな天人の繪姿であつた。それは額面ではない扉であるが、學生は一圖に額面と見てしまつたのだ。

『はゝあ、素的ですね』

支那の國家の大變をそこへ抛り出して、その繪姿に我を忘れたら

『有りさうな事だと聞いてゐたが、一國が興り一國が亡ぶるにしては餘まり呆氣ないやうだな』

『さうです、誰も早晩、煬帝の亡ぶべき事を知り、李淵の興るべき事を豫言はしてゐたやうですけれど、斯うまで急轉直下に大事が決せられやうとは豫期してゐなかつたやうです』

『上宮太子にも、定めて此の大變を聞いてはお驚きになるでせう』

『早くお知らせ申したいのです、隣國の大變を何事を置いても攝政殿下に御報告を申上げるのは、我々の第一の勤めであると心得て、難波津からの早馬の旨を聞くと、取る者も取り敢へずに飛び出しては見たが、はたと途方に暮れました。殿下には、只今、夢殿に御入定でござります』

『それだ……』

『飛鳥の都におゐでになるならば、まだしもでございます……距離からいへば、つい此の目と鼻の先の東院が千里でございます、さりとて、此の事は殿下が日頃最もお氣にかけておゐでの事でございますから、寸時も御報告を猶豫致す氣にはなれませぬ、どうしたものでせう』

『左様ですね』

『夢殿へ推參しても宜しうございませうか知ら』

『それは可けない』

『可けない事はわかつてゐますけれども、外交上の重大事ですから』

『たとへ、內治外交の如何なる大事が起るとも、殿下の夢殿の世界を侵してはならぬ、夢殿の世界は、絕對の世界だといふ事を、御同樣如何なる場合にも忘れたくない』

『それに違ひありません、では、遠慮を致して、このまゝ控えて居りませう……併し、鳥佛師、殿下には、いつ夢殿の世界からお醒め遊ばすのでございますか』

『さあ——お入りになつて今日で、たしか三日目だつたな』

『左様——三日目です』

と云ひ合せて二人ながら當惑の面を見合せた。

太子が夢殿の世界をお出ましになると云ふ時間は、ある時は三日であり、ある時は五日であり、ある時は七日であることがある。七日より多いことは極めて稀だが、三日より少ないといふ例も亦極めて乏しい。いつ三昧の境を破つて、動搖の巷へお出でになるかといふことは恐らく、殿下の御夢に現はるゝ金人とてもわかるまい』

二人は當惑の色を面に現はして、しばらく立ちつくしてゐたが、高向の學生は本意なげに言葉を改めて

『では、兎も角、拙者はこれから秦河勝殿をたづねて、この事變のお知らせを致しませう、河勝朝臣はまだ宮の井邑におゐでゝございませうな』

『あゝ秦氏の棟梁はまだ宮に居られる筈だ、夢殿の御出定を待つてから山背へ歸るといつてゐたから』

『夜中、お騷がせして濟みませんでした、お休みなさいまし』

『御苦勞様でした』

高向の學生は辭して歸らうとして、その眼がまだ、ぴつたりと彌陀佛の顔の繪から放れない。

『鳥佛師、あれは誰方の似顔ですか』

『似顔ではない、天人の姿だよ』

『天人の姿は、わかつてゐますが、あのお顔が、どうも見たやうなお顔ですから、誰かモデルがあるのかと思ひました』

『モデルなんぞは有りはしない、この頭に浮んだまゝを繪にして見たまでさ』

『でも、人のいふ處によると、鳥佛師の刻む佛像や繪姿には、皆んな一々モデルがあるんだつていひますぜ、それ〴〵の佛菩薩の御面相のいづれにか、發願供養の人々の面影がうつしてあると評判する者がありますぜ、夢殿の秘佛は誰も拜んだ者はないけれど、あれは聖徳太子御生身のお姿だと專らの評判でありますぜ……もし、さうだとすれば此の天人の繪姿は、どなたを寫してあるのですか』

『そんな評判は皆んな臆測に過ぎないよ、第一、左樣な不純な心で御佛が刻めるものか……併し、賴む人の心と賴まれる工人の誠心とが思はず藝術の上へ通ずる事はあるだらう。故らに誰をモデルにし、何を寓意して作るといふやうな事があるべきものではない』

『さうですか………』高向の學生は繪姿そのものにまだ後ろ髮を引かれるやうな足どりで外へ出て

『では、これから森氏の廬を驚かし申します、お休みなさい』

『左樣なら……まあ待ち給へ、外は暗いやうだ』

といつて鳥佛師は漢代の形を模した提げ燈籠に火をうつして高向の學生の手に持たせてやる。

學生は繪所の外へ出てしまつたが、再び燈火の明々とした學問所へは戻らないで足早に闇の中を東へ向いて歩き出した。

彼は今、宮の小川に沿うた森の中の小徑を歩いてゐる。

何に興を催したか、こゝで學生は歌をうたひ出した。

麗宇芳林は高閣に對ひ
新粧艶質は本傾城
戸に映じ嬌を凝して
乍かに進まず
帷を出で態を含んで
笑つて相迎ふ
妖姫の臉は
露を含むの花に似て
玉樹光を流して
後庭を照らす――

後庭花の情怨が此の學生の詩思を惱ますのは今に始まつた事ではなかつたのだ。

昔、中原亂れて群雄四方に割據し、晉の帝室江南に移つて東晉と稱してより、隋の世に至るまで、王者の姓變はること六たび、之を六朝

といふ。隋帝一たび中原を平定して天下を統一すると雖も、二世、今に至りて亡ぶ其の間僅に三十八年——

學生は目のあたり興亡のあとを叙し來つて、感激深く村樹の間から空を仰ぐと、いつしか空には星がきらめいてゐるのを見る。二世煬帝に至りて亡ぶ其の間僅に三十八年——そのうち煬帝の時世といつてはたゞの十三年に過ぎなかつた。十三年は短かしと雖も、あの帝王の盛事は、異なつた意味に於ての不朽である。

あゝ、帝王の事、彼の如く盛んにして、彼の如く哀れなる、煬帝は英主か愚主かは事毎に我々の間で闘はされた問題であつた。今、彼の生涯は終つたとはいへ、その疑問はまだ盡きてはゐないのだ。愚主とおとすには餘りに英邁なものがあり、英主とたゝへるには、度すべからざる放縦がある。その英明は彼の地を作つた所以であり、その放縦は自らの運命を知るの聰明から出でた大絶望によるのかも知れない。どちらにしても非凡な帝王の一生涯は非凡にして終つたとはいへる。

わが夢殿の太子は煬帝を好まれない、煬帝も亦太子を煙たがつてゐる。それは國と國との接衝で、箇人の交際から來る感情ではないが、夢殿の太子と、隋の煬帝とは性格に於て全く反が合はないのである。日出づる處の天子、書を日沒する處の皇帝にたらうといつたやうな見識がわが自信を强め、彼の自尊心には打擊を與へたのみではないが、さりとて、夢殿の太子が隋の煬帝に向つて一言の批評にも及ばれてゐないといふ事を我々は遺憾とする。恐らく煬帝の功業と心理とを洞見せらるゝこと、わが夢殿の太子の如きはあるまい、太子の一言を示れば煬帝の批評が定まるのであるが、それが無い。

だから我々の煬帝に就て教へられる處と、聞く處と、想像する處とは非倫と、怪異と、豪奢と、放從と傾覆とばかりだ、西苑を起し、北海を穿ち、十六院を造り、四十九の離宮を建て、千里の御溝を堀り、江都に遷つて迷樓を造り、遼西を征し、朝鮮を伐ち——初めは父と母とを殺して其の妻妾を奪ふに起り、最後は臣下に弑せられて家と國とを併せ喪はるゝに終る——人の語り草としてはたゞそれだけだ、もう少し他の方面から、兎も角も一代の人物としての彼を見ることは出來ないか。

高向の學生が、頻りに感慨に耽りながら森の中の小徑を歩いて行くと、その行手でバサと音がして、一羽の鳥が——足許から飛び出したものだから學生は少なからず驚かされて立ちどまつた。

その鳥が森の外へ飛んで行くのを、ぼんやりとながめてゐるうちに、奈良と三笠と、それから纒向、三輪へつゞく山々が左に遠く流れて居るを見た。そこで彼は今足許から飛び出した鳥が何鳥であらうかを考へはじめた。鴨であらうか、雉か知らん、たつた一羽だけが何の用事があつて、今頃、この邊にうろついてゐたのか、そんな事まで考へつゝ、二三歩進むと、また も……今度は、鳥ではない、栗の木の動くのを見た。木が動くのではない、木の間に、たしかに人の氣配があつて動くのを見た。

『誰だい、今時分、そんな處に何をしてゐるのだ』

とがめて見たが返事がない。

『誰だい、今時分、こんな處に』

彼は釣燈籠をさしつけて怖々に遠くから誰可するのみだ。

『どうぞ、水を一杯いたゞかせて下さい、どなたでも宜しうございます、苦しい』

木の下に人があつて、苦しいうめきの聲と共に水を要求するのは、それは女だ。

『水を、水を飲みたいのかい』

『水を一杯、いたゞきたうございます、お願ひ……』

『何、一體、お前は何をしてゐるのだ』

『夢殿へ參らうと思ひまして、道をまちがへてしまひました』

『夢殿へ……滅相もない、お前は女ではないか』

返事はない、學生はムキになつて、遠くから詰問の體で、

『夢殿は禁制の場所だ、それは女人に禁ぜられてゐるのみではない、男子にも……鬼神にも天魔にも、唯佛與佛乃能究盡の處だ、それを、お前、それを……』

『あゝ、苦しい、一口の水がいたゞきたうございます』

學生は、慌しく前後を見廻すと、當の小川が近い處に流れてゐる。そこに水を得たが器がない。

『待ち給へ』

冠をぬいで、彼はそれを小川の中へヅブリとつけた。

『さあ、水』

この時は、もう恐怖の念を忘れて、水を求むる人に近づいた。

『さあ、水だよ』

木の枝へ釣燈籠をかけて、水を求むる人に、その冠の杯をつきつけた時に、彼は今までよりも、もつと大きな驚きと怖れとを感じて、慄えた。

『あゝ、お前樣は……』

何といふ氣高い女の人、それとも、半ば失神の體で蒼白に變つた面の色が、斯うも女を美しくさうして氣高く見せるのか知ら、これは當に由緒あるべき婦人だ、粗略にはならないお方だ……と學生の恐怖は半ば以上敬畏といつたやうなもので蔽はれてしまつた。

『水をお上りなされませ』

『有難うございます』

女人はそれを飲もうとするが、昏々として飲み得ないやうである。學生は親切に介抱しながら

『一體、どうしたといふものです。あなた方にも似合はしからぬ……』

若しや、惡者に拉せられて、さうして狼藉に逢はれたのではあるまいか、

『夢殿へ參らうとして、道をまちがへてしまいました』

『それが可けない』

學生は咎めるやうな大きな聲をして

『あそこは行くべき處ではありませぬ、道を間違へたのではない、凡人の身として、あれへ參らうとする其の了見が間違ひなのだ』

『その間違が二人を、こんな苦しい事にしてしまひました』

『二人を……』

學生は不安の念に驅られて、若しやと左右をながめ渡した

『あゝ、その人が、わたしと一緒に此處にゐなければ夢殿へ參つたに相違ありませぬ』

『以ての外だ』

それでは、こゝにかどわかし來つた狼藉者が重ねて夢殿の夢を驚かし奉るべく推參したのではないか、聞き捨てがならぬ。學生は不安と畏怖とに驅られて、水を與へながら、頻りに身をゆすぶつて、森の木の下闇を見廻したが、幸か不幸か、程遠からぬ處にまた一つの屍骸がある。まさに屍骸だ。

グチヤ〳〵になつた冠を傍に押込み、釣燈籠を取り外すと共に、學生は一目散に走り出した。恐怖の餘り動顚したのか、かゝはり合ひを虞つて逃げ出したのか、……多分新たに見出した屍骸が、あまり酷たらしく見るに堪へなかつたのだらう。

森を出た時に、釣燈籠の光が消えてゐる事に氣がついた。

ホッと息をついたのは、そこが訪ぬる目的の秦の河勝の控屋敷の門前であつたからだ。

『秦の大人、河勝の朝臣』

學生は門の戸を續けざまに打ち叩いた。

『誰だこの夜中に』

『學問所から高向の學生が上つたといふことを至急御主人にお傳へ下さい、夜分、斯うしてお休み中を騷がせ申す理由はあとで申譯を致します、急ぎ朝臣にこの旨をお取次下さいまし、高向の學生でございます』

『生憎主人は不在でございます』

學生は裏へ廻つた。が早くも、その身は邸內に逃げ込んでゐた。物に追かけられるやうな恐怖が、案內より以前に勝手に此處へ導ひてしまつたものと見える。さうして、後庭をのぞき込んで

『夜中、お騷がせして濟みませぬ、實は只今、難波の津から早馬がありまして、外交上の重大な報告をもたらしました。これは外でもござりませぬ、隨が亡びて唐の世が起りましたといふ事です……』

『主人は不在でございます』

庭へ現はれた門番は叱りつけるやうな聲で二度不在を叫んだものだから學生ははじめて氣がつき

『あゝ、河勝朝臣はおゐでにならないのでしたか』

『はい、昨日の朝、山背の楓野へお立ちになりました』

『さうでしたか、それは〳〵』

學生は、こゝでも一時啞然としてしまつた、中原が亂れて六朝が起

り、東晉が隋に統一されて二世、今や唐公の李淵が令郎世民の助けにより雲を巻き風を起さんとする事態を此の門番に物語つても仕方が無いとあきらめて

「どうも失禮致しました。併しそれはそれとして、……」

低い聲で村の方を指しながら騒いたのが、集まつて來た秦家の人々を驚かした。

併し高向の學生は、そのまゝ秦氏の家を辭して、自分は再びその森の中の現場へ立ち合はうとはいはぬ。一切を秦家の人達に投げかけて知らぬ面でゐた方が自他の爲に都合がよいと思つた。そこで今の怖ろしい光景は一切見ないことにして、忘れたことにして、身輕く走り出して田疇の間を南へ抜けると、生駒の山が黒く眼の前に聳えてゐる。

さあ、これで今夜の使命は果したやうなものだ。誰に頼まれたといふわけでもないが、これだけ廻れば、効果はあつても無くても、自分の責がいくらか輕くなつたやうな氣持がする。これからは自分の世界だといつたやうな氣分にもなる。

途端に一點の火を三井の森の方に見出すと、あゝあれは太子から膳臣に賜つたお屋敷だ、あれには芹摘の妃が居られる。と思ふと、彼は事のついでに、もう一軒あれを驚かし申さうかとの思案に驅られた。けれども、それは無用ではないが、やはり無益な事だと思ひ直すと、一旦は三井の方へ向いた爪先を、またも斑鳩の里へ向け直して、やはり田疇と並木の間を歩み歩んで行くうちに早くも身は斑京の夜氣に沒入してゐるのを見た。

その時、一脈の香の流れが鼻頭を撲つのを覺えて、恍惚として南北を忘れて佇んだ。香の流れは漂渺として、立ちつくすわが身をこめて漂ふのである。彼は何ともいへない、いゝ心持になつた。あゝ、これだこれだ、先年、淡路島へ流れついた沈香木はこれだ。流木のうちに焚けば異香の薫ずる一本があつた。心なき島人もこれを珍重として朝廷に献じたものがこれだ。

香は夢殿に秘められて、太子が供佛の料とせらるゝ由承つたが、その一片を太子御手づから學問所の講堂に焚いて我等に聞かしめられた事のあるそれが正しくこれだ。おれだからそれを知つてゐる。餘人は恐らく此の名香を聞かせられても何だかわかるまい、木屑か何か恐ろしく薫の高い木があつて、いやに暗香をこのあたりに浮動させてゐるぢやないか、と聞き流して通るに定まつてゐる。

此の香は正しく夢殿から流れて來る。そこで自分の身が知らずく夢殿に近い處に置かれてあることを知つた。

今夜の使命は、そこにあつたのではないか、その方寸を忘れて、千軍の外に飛び迎へてゐるやうな自分を笑止がる心にもなつて戸惑ひしたものゝやうに呆然として立ちつくしてゐた。

一體、夢殿とは誰がいつの頃につけた名なのだ。自分は常に上宮王院と正してお呼び申上げたいつもりでゐるが、こゝへ來ると、いつか知らず衆口と共に夢殿の名でお呼び申してしまふ。

本來、この學生は氣紛れな處が多分にあつて、相當の知識と聰明が間にはさまつて、心醉家にも信仰家にもなりきれないのだ。

だから夢殿の世界を太子の御好奇の世界だとはいはないが、自分には神秘の世界に觸れるほどの眞實性を缺いてゐるのだと、高をくゝつてはゐるのである。信仰家にあらざるものは懷疑者になり易いが、この學生は目のあたり現はれた處の太子偉大性には、どう考へても、頭が上がらないから、それで輕蔑無信からは救はれてゐるのである。

だから、彼には太子が經文の難字句を解釋する爲にこれへお入りになるといふ說が受取れない、御左右に顧問となさるべき內外の名僧と學者があれほど控えてゐるではないか、參考書が欲しければ、わざわざ外國へ使臣をお遣はしになるほどの自由と力を持つておゐでになるではないか、加うるに、それ等の名僧智識を凌駕する天性の御聰明であり、日本國人としての聖經疏を自ら作つて逆に彼地の者に示し給うほどの學力がおはするのだ——それほどのお方が僅かの難字句に出會して、これへお入りになつて五日も七日も苦心慘憺遊ばさねばならぬといふ理窟は受取れない。

といつて、また世俗の一面がいふ、ひとり占ひの夢判斷をなさる爲に、わざ〳〵これへお入りになるとも思はれない。

たゞ、此の時は、夢殿から流れる香のかほりが、此の學生を理窟の人としないで陶醉の人にしてしまつた。神秘の世界には醉へないが感覺の世界には醉へる——ふら〳〵として、香の霧に漂蕩されながら夜もすがら斑鳩の巷をさまよひ歩くつもりかも知れぬ。

一方、學生の爲に半夜の夢を破られた鳥佛師は學生を送り出してから螢のやうに淡い燈火の蔭に、仰向けに寢そべりながら、ひとり言をいつてゐる

『さうか〳〵、煬帝もとう〳〵亡くなられたかね、しかも臣下の手にかゝつて非業の最期とは、さもありさうな事、さもあるべき事だ……

……本來』

と彼は煬帝についての智識を自分の追憶のうちから展げて相當の感慨に耽つてゐるうちに、自分の眼は淡い燈の光で最初から天人の刷絵を無意識にながめてゐるのに氣がついた。

感慨といつても、それは當りさわりの無い第三者の立場から輕い空想を交へた追憶なのだから、志士が盛衰興亡を感ずるやうな刺戟ではないのだ、だから、その感慨も天人の刷絵とは即かず離れず、やがてうつら〳〵と夢に入るほどの輕快な氣分ではあつた。

ふつと、その刷絵が裏がへしになると思つた途端に天人がスル〳〵と拔け出してしまつた。驚いたのは、それが自分の描いた五彩繪絹——といひたいが當時の顏料には三色しか無かつた筈——それが白一色の天人となつて刷を拔け出して來たことだ。それも好奇や氣紛れで拔けだしたのではない、その鮮麗な顏色は蒼ざめ、唇はわなゝいて、生命の瀨戸際をのがれて來たものゝ樣である。

鳥佛師が、自分が再び夢を破られたのは、その天人がその室へ逃げ

込んで、狼狽の餘りに、頭にさした金の釵を御簾の鈎にかけて落したその物音に驚かされたからだと信じてゐる。

その時、我ながら、かつと逆上して、他の一方の入口を睨みつけ

「お前は楊廣ではないか」

そこに太子楊廣が息をはづませて立つてゐた。この美人はその人に追ひ迫られて來たのだ。

鳥佛師はくら〱として、夢うつゝの世界から本當に醒めて

「何だ、馬鹿々々しい」

己れが文帝でないことも、隨の太子の楊廣がそこにゐないことも、天人の繪が早變りして陳夫人とならないことも、夢にさへ想像出來ない幻象だ。史實と夢との間際へ、うつかり釣りこまれた自分がおぞましい。この幻ろしの殘す印象は愉快なものではなかつた。殊に斯うして寢てゐる自分が、いつしか不幸なる文帝の身に置き換へられてゐたといふ事は、夢ながら、あんまりいゝ氣持はしないのだ。

扉繪が拔け出して、そのまゝ隨の後宮第一の陳夫人となつたのも、あまり氣が利き過ぎてゐる。父帝に侍して藥をすゝめてゐた陳夫人をはじめて太子の楊廣が見て心を動かして、之に迫つたから、陳夫人が逃げて、こゝへ來て金の釵を簾の鈎に引かけて落した音で自分が眼さめたのだ。不埓者、父の寵姫に父の眼前で戯れんとする。あゝ見損なつた、表面恭敬をよそはうて、内心この姦曲、欺かれて先の太子を廢して、これにその位を與へたのは一生の恨事、死んでも死にきれない恨みだ、誰か前太子楊勇を呼んで來い。改めて此の畜生の位を下して、彼を再び太子に上せよ――瀕死の床で文帝は悲憤の叫を立てられたが、もう遲い――左右には命を奉ずるものがなく、却つて惡太子楊廣の爲に文帝に毒を奉るものがあつた。

斯くて楊廣は位に即いて、これが隋の煬帝と稱せられる。陳夫人には同心の帶を贈つてわがものとした。隋太子たりし兄の楊勇はその前後の時に暴死した。

眼を閉ぢて見たが、なか〱にこの忌はしい印象は離れない。忌はしいとは思ふが誰を相手に喧嘩にもならない。

さて、明日はいよ〱此の天人の繪を仕上げて賴んだ方へ引渡し、自分は飛鳥へ歸らうと思ふ。

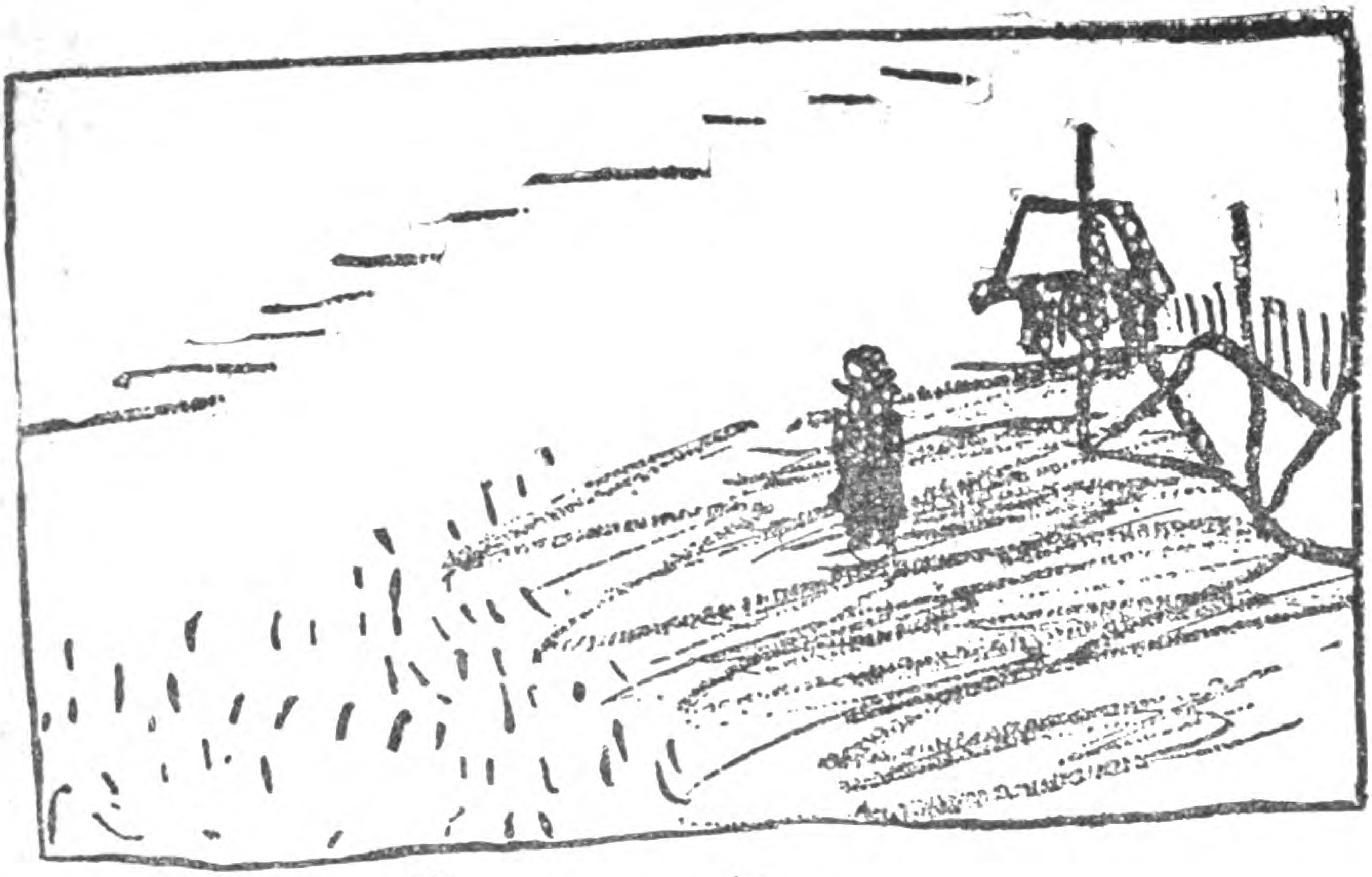
併し、この繪が公けに展開されるとまた何かといふ奴が出て來るだらう。河勝のおやぢのいふのは信じていふのだから、何といはれても癪にはなるが邪魔にはならない。わかりもしない癖に、知つたかぶりの青二才。内心怖れを抱きながら贔屓ぶりの引倒しを試みやうとする奴。また此の繪の前に立つて紹介ぶりの説明を頼まれもせぬに喋々と試みては最後に、「さて諸君、鳥佛師はこれだけに描くが、拙者はそれよりも一枚上なんだから、間違へてはいけないよ」と鼻の先にぶら下げる奴。誰それに賞めさせて誰それにおとさせようとの見え透いた膳立――惡い洒落だ。一體、人間といふ奴はナゼ斯うまで信じて物がいへないのだらう、自分の見る處を信ずる處を正直にいへない奴が批評家

面をして、人の作物を價値づけやうとするのだからやりきれない。

さういふ處へ、自分の作物を投げ出すのは忌だ。

本來、本當の藝術は自分と自分を信じて頼んだ人だけに見せればいい
置のだ——さうして後は、後世といふ深い穴の中へ投げ込んで藏つて
いけばいゝのだ。

言ふ者は知らず、知る者は言はない。自己の内奥の表現を、藝術といふ小手先の業で示さうなんぞといふのが、そも〳〵心得違ひの至なんだらう——嗚呼つまらない、もつと充實した世界と仕事は無いものかしら——鳥佛師は輕い自暴の心を抱きながら漸く熟睡の夢に落ちて行つた。



博齒になる馬車

——この一篇を女禮子の靈に捧ぐ——

中河與一

青塗りの馬車が、吾々の荷物を馭者臺に積んで待つてゐた。馬が退屈さうに鼻息を吹いては、道の上を蹄で叩いてゐる。馬は走りだしたいのに違ひない。

「旦那、お早やうございます」

キタナイ身裝をした馭者が、鞭を兩手でゆがめ乍ら私に挨拶した。

「お早やう」

私は黄色いヘルメットを頭から取つて答へた。秋近い朝の冷氣と馬糞の匂ひが健康に私の心を訪れた。鷄が車輪や馬の脚の間をうろうろして餌をあさつてゐる。

「ちいぶん、お待ちしたですよ」

「そりやすまなかつたね。發つとなると、なかなかなもんでね」

「さあ、さあ。そいぢや奥さんからずつと奥に」

さう云つて馭者は後の戸を開けた。妻に續いて四つの子供が、そして最後に私が這入つた。

馭者は馭者臺にあがつた。するとこの毀れやすい玩具のやうな馬車は、グラグラと毀

れにくい柔軟性を示した。雉が二三四羽パッと飛び立つた。

馬車が靜かに動きだした。

よくない發條が唐突な彈動を座席に時々はねあげる。窓の外から涼しい風がしつきりなしに吹き込んで來る。

間もなく道は海に沿つて走りだした。白い輝く雲が綠色の島の上にかかつてゐる。私はこの海岸の呑氣なボート遊びや、夜の散歩や、釣りや、五百燭光の明るい夜の巾着や、海水浴場の賑ひや、漁師達の凱旋や――さまざまな快樂の記憶を心に描いた。すると急にこの村を立ち去りがたい氣持が起つて來た。

「もつとゐてもよかつたね、おい」

すると何となくふさぎ込んだやうに默つてゐた妻が同時に答へた。

「さうね、これからが風情があるのね、海は。私もそんな事を考へてゐたんですの」

然し私達の子供は、風のやうに吹き變る窓外の景色にうれしさうに眼をみはつてゐた。馬車が短いトンネルに這入つて出た。海の光が一層まぶしく照つた。やがて山裾を廻る崖の上の道に出た。と子供は青い海を覗いて

「コワイ、コワイ」

と云つて私にしがみついた。小さい娘らしい動作が私に愛情を起させた。馬車の腹に白い波の飛沫が絕へず吹きかかつて來た。

「旦那」

馭者が小さい窓から私に呼びかけた。

「馬車がね、輕くつてしようがねえですが、どうでせう、拾はしてくれねえかね」

私はこの馬車を貸り切りにしてゐたのだが、今となつては、寧ろ村の空氣をうんとこの中へつめ込んでみたかつた。そこで私は快活に叫んだ。

「あゝいゝとも、いくら拾つたつていゝんだよ。」

「そいぢや二三人だけ」

馭者は馬に鞭をあてると、鼻歌を唄ひだした。馬車は海沿ひの傾斜をガタガタと、おどけた搖り方でのぼつてゆく。ガラスのない窓框がそのたびに歪む。規則正しいリズムが吾々を氣持よくゆすりつづけてゐる。と白い布島の菱形の大きい岩穴の中へ、波が時間をおいては蹴れかかつてゐるのが見えだした。馭者が指して猥褻な說明をした。

と突然馬をとめて、馭者は一人の娘を拾つた。娘は村特有の海の匂ひを持つて這入つて來た。亂すぎるやうな長い房々した髮。胸と腰が張つてその顏はやけてゐた。がそのハッキリした濃すぎる眉は、南國の強い美しさを示してゐた。齒が白かつた。娘は一言も云はなかつた。

と十分ほど走つて又馬車は一人の白髮の男を拾つた。さすがに馭者は遠慮して吾々だけを日蔭の方の座席に坐らした。

私はつぎつぎに現はれる村の登場者を、好意を持つた眼つきで見つ

めてゐた。

銅色にやけた顔の中で頬と眼がひどく落ちてゐた。顎から胸の方へかけて短劍のやうな白い毛が一杯に生えてゐる。彼は私の好みを刺戟するに充分な風貌を持つてゐた。彼は憶病さうに背をまげて這入つて來ると、

「ごめんねえ」

と云つて目をパチパチさせた。と同時に馬車が走りだした。彼は娘の上へ、身體を押しつぶすほど激しく倒れかかつた。然し娘は默つてゐた。

「おつと姉さん、かんしておくんな」

娘は一寸微笑して答へた。

「いいんね」

やがて白髪は私の方へ向くと訊ねた。

「どつちまでお歸りですか」

「沼津へ出ます。それから東京へ歸るつもりです」

「そりや、そりや、大變ですね。お子さん連れでは」

「おぢさんはお幾つですか」

妻が訊ねかけた。

「幾つ位に見えますかね。そんなでもねえですけんど、この通りの白髪でさ」

彼はバサバサバサと扇をつかつた。そして白い髯毛を平手で押へつけた。

「幾つだね」

馭者が馭者台から大聲で聞いた。

「四十八だに」

白髪が答へた。私はその意外の若さに驚いて其の顔を見つめた。

「九十八え」

馭者が仰山に聞きかへした。

「なんでえ」

「九十八かつて聞きかへしてるんですよ」

私が傳へてやつた。すると男はまた眼をパチパチさせた。そして笑ひながら呟いた。

「馬鹿云ふなえ。まだ四十八だえ。若けえずら、ハッハッハッハッ……
……」

「ハイー、シッ、シッ、シッ、シッ……」

陽氣な馭者は勢よく鞭を振つた。白く長い鞭の紐が時々稻妻のやうに空を横ぎつた。丸い馬の臀が絶へず踊りあがつてゐる。車輪がガッと石を嚙んだ。乾いた道の埃が煙のやうに舞ひあがつた。

家と家との間から白く海が限られてみえた。と、夾竹桃が眞紅に村家を塗りつぶした。

人家がきれると、遠く三保の松原が霞の奥に見え出した。すがすがしい風が窓の幕をはためかしてゐる。晴れやかな樂しい感情が吾々の心に湧きだした。

「ハイー、ドウ、ドウ、ドウ、ドウ……」

「僕は不思議に思ふんだがね、おぢさん。この村の人達は、ひと獵に何萬何千といふ金を取るのに、どうしてあんな風な暮しをしてゐるんだらう」

すると馭者が代つて大きい聲で答へた。

「けんど漁つてものは、何時でもあるもんぢやありませんからな。旦那。夏場はいゝが、これで冬にでもなると、一月も二月も無え事があるですからね、まあ平生は氣嫌よく釣でもして遊んどるよなものでさ」

風が外を見てゐる子供のオカツパを絶えず吹きあげてゐた。六人の乘客は靜かに肩を摩り合はしてゐた。と白髮の男が突然話しだした。何か樂しい記憶でもゆり動かされたとでも云ふ風に。

「平生は遊んでるんですよ。だから自然に遊びがはやるですね。わしらあ、茶碗と飲むのにかけちや、もう眼が無かつたによ。」

それを云つた時の彼の聲は本當にうれしさうだつた。そしてしきりに眼をパチパチさせた。茶碗――私は何だらうと思つた。

「女あ、どうでえ、をぢさん」

馭者が笑ひ聲で尋ねかけた。馭者は鞭を脇にはさんで煙草をくゆらしてゐる。煙がパッパッと後へ走つてゐる。

「女なんてえ、茶碗にかけちや話になんねえ」

そこで私は茶碗が女でない事だけはわかつたと思つた。

「そりや一體なんですかね、茶碗つて奴は」

私が尋ねかけた。すると白髮は得意さうに一氣に答へた。

「袁元道でさ、賭博でね。そりや天下の法令を左右するだもん、これほど面白いものは先づねえですよ」

「味を覺えたら忘れられんといふ奴だね」

馭者が口を挾んだ。

「さうってさ。忘れもしねえが、十八の歳の盆の十四日だつたつけ。わしが晩方、濱で網をこしらえとると、三津の彌平がやつて來て、沖の舟を指えて、あの舟へいて遊ばねえかと云ふです。俺や子供の時から勝負事ときた日にや、眼がなかつたもんね、彌平なんて玄人は、ちやんと見込でたらしい。事によつたら、やつてるかも知れねえ。仕度していくべえ。で俺等あ財布を褌で頭へくつゝけて、沖の舟へ泳えでいきましたよ。泳ぎついてみるとさあ大變。中では眞最中と來てやがる。例の茶碗といふ奴をやつとるです。ふせる、あける。皆が聲を出す。舌打ちをする。どうのこうのつて、その盛んな事あびつくりしましたよ。が俺のやうな子供が這入るにや少し場が大きすぎると思つ

たに、で横で見てゐたがね。見てゐるとむづむづしてきてね。ねが好きだもんな。その時や廻り盆でした。
「やつちやどうでえ」
彌平が云つてくれましたよ。
「で、やつたあけえ」馭者が又口を挾んだ。
「やんぺつてさ」
俺あいきなり「丁」と云つたあよ。丁とな、滿身に力をこめて。と丁度丁が出たぢやねえか。俺あ賭金に指も觸れずに、その全部で又丁といつただ。と又おめえ、丁が出た。三度目にも丁といた。ところがだ今度あ半が出た。俺あ頭がグラグラするやうな氣がしたによ。俺の前から紙幣がゾロゾロとさらはれてゆくだものな。が四度目にも丁。それからずつと俺あ丁でいきました。ところが出るわ、出るわ。その後は丁ばつかり。三時間位えの間に三百九十兩といふ儲けをしましただ。これがそもそもの病みつきでがんさ。その夜すつかりのぼせたやうになつて、船ん中へ立ちあがつた時、波がどんなにきれいに見えたか、十四夜の月が海の上にのぼつてる。俺あ大金を頭にくくりつけて、銀色の水ん中へ飛び込んだでさ。がこのまゝ死にやしねえかと思えましたよ。感極はまると人間はよく死ぬ事を考へるもんでね。それに俺あ敗けた連中に水ん中で押へられやしねえかと、內心おつかなくなつてね。へえ、もう、さんだ子供の癖に、なまいきだなんて云はれてゐたあからね。それからでがんさ、やるわ、やるわ、毎晩、毎晩。賭場、森ん中、船ん中。けど丁のおかげと思つて、一生丁で通ほしましたよ。一生な」
すると馭者が上から叫んだ。
「わしや、おぢさん半だで」
「さうけえ、そりやえゝ相棒だに」
老人は今にも賭場をひらきたいやうな返事をした。

「シッ、トッ、トッ、トッ、トッ………」
馭者は屋根の上で鞭の音を鳴らした。とそのまゝクルクルクルクルと鞭を手の中で廻はしだした。やがて左手で帽子を取ると彼は汗をふいた。
黄金色の果實と同時に白い花を持つてゐる柑橘類の林の中へ道が這入つた。新鮮な香料の霧が吾々の顏や胸をつつんだ。
「シッ、トッ、トッ、トッ、コリヤ、コリヤ」
牛伏の山がはるかに一枚の絨氈のやうに見えた。その麓で家が二つ、投げられた博齒のやうにじつとしてゐた。
馭者が云つた。
「わしもな、十八九の頃にや賭博をやつたが、女房の兄貴が玄人で、

懇々とさとされて二年しかやらなんだ」
　妻が尋ねた。
「そんなにしてゐたら見つかりはしないんですの」
「そりや、あんた。幾度もありましたよ。一遍は連れていかれるところだつたが、三百兩はつとつた金を捨てて其儘逃げました。巡査も大儲けでがんさ。みんな場錢をあげるんですからね。俺等にしても其方がまあまあ赤え着物を着るよりや、ましですからね」
　それから白髪の男は更らに彼の賭博の一生涯に就いて話しつづけた。
「俺がどんなに熱くなつて博打に這入つていたか、俺あ毎晩かかさずに出てゆきましたよ。そして大概勝つて歸りました。みんなは
「あいつあ今にのぼして、太けえ失敗をするに違ひねえ」
　つて云つてました。けど俺あ毎晩毎晩丁で通したです。ワラワペリつて奴でさね。俺あ二年目に到頭銅元になりましたよ。大成功でさね。近所近在の漁師が集つてくるわ、くるわ、きつう繁昌しました。ところが、あんた。或る晩、一人の若え女がやつて來ましたに。度胸の太え奴でした。初めつから大金を張りました。第一回が二百五十兩。ほかの張子は手が出えんでがんさ。で、わつしが女とさしでやりましたよ。女はね挑みかかるやうな眼付きで俺を時々見ました。膝をくずし、股を出す、あぐらをかく、足を投げだす、これが手ですね。俺あ自分の幸運を信じてゐましたが、この手にやかなはねえ。全く數度かフラフラしましたよ。女は坐つてゐて何か感てゐるやうな氣がしました。
「半」と女が云ひました。そこで
「丁」と
俺がいきました。がやられましたよ。またやられちやつた。續けて。俺の手からはもう七百兩餘りの金が消えてました。
「そいぢや八百兩でゆかう」
俺あ有金の全部をかけたあです。
「よし！」
女が答へました。
博齒を投げ込んだ。と手早くふせる。みんながもうガヤガヤ騒ぎたてる。俺あ半にしてみやうかとよつぽど迷つたが、女が又しても「半」と來たぢやねえか。仕方なしに「丁」と思ひ切つて俺あ云ひました。丁とな、やつぱり。
　と、どうです、五一の丁と出たでさ。」
「なるほど」醫者は向ふを見ながら一人悦に入つてゐるらしい。
「それからあ、ガラ勝ちでがんさ。運が順になつたですね。四六に一一。四一とヌケたが、三一に五五、四二と云ふ調子。到頭女あ、まるつきり元金を無くしてしまつて、泣きんずらして歸りましたよ。女あ、その上膝をだしたり股をだしたり、それだけのおまけもんをして行つたえわけでさ。俺あ愉快でした。おのれの幸運がどうやらゆるが

んやうな氣がしましてな。女が賭ると御シャ連中が口々に云ひましたよ。

「儲かつたね、もう彼奴も來つかあねえや。あんだけ敗けちや」

ザイザイと車輪がきしんだ。曲り道をしたのである。向ふから一台の馬車がやつて來た。

「やあ、小鳥ら買うて來たけえ、小鳥ら」

すると向ふの馭者が籠をさしあげて見せた。カーキ服のボタンが金貨のやうに光つて過ぎた。

「ふん、あいつ儲けやうと思つて、あせつてるらあ」

こちらの馭者は悟つてゐるやうにそんな事を言つた。

「ところが、翌くる晩もその女がやつて來たでさ。驚いたずら。あんまり案外でね」

「そりや、お爺さん。おめえにだいぶ、まゐつてゐたずら」

「そんな事あるもんけえ。がそりや兎に角として、女あ自信のある強い張り方をしましたよ。慣れた手つきでね。

その頃あ本式で、茶碗のかはりに壺皿を使つてました。又二尺に二間の盆蓙つて奴をな。何しろ太え勝負でした。女あそれからそれへ追つかけて張りましただ。

勝負が熱してくると、女は突然舌打をしました。

「チエッ、緣起が惡いえ」

盆蓙をはねのけました。女の癖にな。綺麗な女といふもんは、とかく太えもんです。「わしに一番振らしてもらいますべい」女がさう云ひました。俺あ心の中で思ひましたよ、イカサマをする積りかな。イカサマをするにやもつてこいの手つきだ。ふとつて肉がブタブタして。と御シャ連中が別の盆蓙をほうり込みました。

「まあ、やつてみるがいゝ」

が到頭何も手だしがならなかつたらしい。白い腕をまくつて、到頭女あ金をはたいてしめえました。わつしの前には、合計八百五十兩といふ金の柱がたちました。これで取つた金を相手に見せびらかすのが賭場の慘酷な風習でがんす。

女は悔しさうに張りのある眼を、ジロジロと私の身體の上に注いでゐました。顳顬がグツシヨリと汗にぬれてゐました。その時ばつかあ可愛想でしたよ」

「うん、なるほど。お爺さんはなかなか面白い」

馭者は馬に鞭をあてながら一人喜んでゐる。私達はすつかり話につり込まれてゐた。

「ゆかう、千兩で。わたしはからだを賭ける」

女が齒ぎしりをかみながら、さう云つたです。手をわなわなと慄は

しながら。此處まで來たら、誰れでもやめられねえとみえる。

「ようし！」

わつしあ身體を前へのりだしました。わつし達は二人共眼に血が這入つてゐましたよ。

振つた。あけた。俺が勝ちました。一一と出たもん。と女がゲラゲラと笑ひ出してね、あんた」

「コリヤ、コリヤ。シッ、トッ、トッ、トッ、トッ………」

馭者は尻尾をパサ〳〵と風の中で動かした。それが壺皿をふる壺振りの手ぎはのいゝ動作のやうに見えた。

快活な蹄の音がリズムを作つて晴れた空に響いた。みんなの身體が氣持よささうに搖れてゐた。と、さつきから老人の白い髭毛を、不思議さうに見てゐた私の子供が、眠むさうにしきりにお辭儀をしだした。で妻が手をのばして膝の上へ抱きとつてやつた。

と馬車は止つて又一人の男を拾つた。白地の着物を着て、金歯を澤山入れてゐた。

「いや不景氣ですと博打がはやりさうよ。それから博打のやうな小鳥相場や出版かね」

彼は町役場員らしい。然しこの近村の男らしく賭博の經驗だけはちやんと持つてゐるらしかつた。

「けど貧乏人が一躍金を取るにや、これに限りまさあね」

「それでどうなつたんですね」

今度は私が老人に尋ねかけた。妻が私の顏を見て笑つた。

「わつし達は逃げましたよ。その村からな。いゝ女でした。勿論亭主持ちでがんした。ふんだから匿れるのに苦心しましたよ。追つ手が來やしねえかと思つてね。女あ、金と一緒に身體ぐるみで俺んところへ來たゞから、まあ女としちや文句なしの取引でさね。それにわつしにしても、其時や若かつたし金あ持つてるときてる。幸福でしたよ。

なんでもその女の亭主といふなあ、女に食はしてもらつてたと云ふが、氣の毒と云や氣の毒でした。

わつし等あ手を取つて東京へ出ました。東京でも方々の賭場へ出ました。女は俺の見込み通りイカサマが上手でしてね。こりや東京ちやあんまり出來ねえかつたですが、東京ぢや下谷、日本橋、本所、淺草、と二三年苦勞しましたよ。これといふ手に職がねえし、博打も幾ら運のいゝ丁でもうまくばかりもいかねえ。そこで物價の高え東京からこつそりだが、それも自分の村から四里許り離れた村へけえつて、獵もしたり、博打もしたりでいきましたよ。

なんでもその村へ歸つてから、さうだ。十五六度もやりましたたかな。そのイカサマを。村の八幡さんの拜殿と奧の院の間へ夜蠟燭をつ

けて。

わつしの使つたなあ粉引といふイカサマ博歯でした。五三一の目から黒い粉が出るやうな仕掛けでね。つまり粉の出かたで丁か半かがわかる仕掛けでさ。かうやりましてな。壺皿をひつぱると、莚の上へ黒い粉の小星が一つ──こりや半です。二つ出ると丁目の丁。一つも出ねえと半目の半。こいぢや随分もうけました。けんど相手に見破られると、血の雨を降らすといふ奴でさ。なんしろ生の金をかけた勝負ですからな。

それで話は、今の拜殿にけへりますが。蠟燭のうす明りを圍んで五人、其時あ女房はゐなかつたです。そつとやつてました。そつとやつてるのがまたこつちの强味でさね。わつしがフキカへやうとしてゐた時です。スーツと拜殿の奧にある四つ目の戸が、ひとりでに開くぢやねえか。びつくりしたのなんのつて。よく見ると其處にぢつと親父が立つてゐるぢやありませんか、わつしのね。ぢつとこちらあ見つめて、實際幽靈かと思ひましたよ。わつしもこん時位え不氣味だつた事あゝりませんでした。

「止しやがれ！」

わつしやギヨツとしました。どうして居所も知られねえ筈の親父が、ヒヨツクリこの村へ現はれたのか、それもこんな夜中の賭場へ。うかうかしてると粉引博歯をみんなの前へ叩きつけられたかも知んねえ。わつしあいきなり博歯を懷中に押し込むと、忙えで立ちあがりました。惡事を責められてるやうな氣がしましてね。

親父に仔細を聞くと、何んでも商用とかでこの村へ來てわつしの事を聞きつけ。いづれこんな事だらう位に思つて來たといふ事だつたです。親父ですか、親父は始終賭打だけはよせつて、止めてました。俺あ、おやぢに睨まれたあの時の目が未だに忘れられませんや。親父の死んだ當場だけは本當にやめうと思つてましたよ。キツパリとな。が二月と心棒が出來ねかつたです。

運かね、運はいゝ一方でさ。丁でな。何しろ九半十二丁の强味で勝ち味ばつかあでさ」

風が青田から吹いて來た。

香貫山が右手に。我入道の黒い松の向ふに、千本松原の松が一味の薄い紫色に見えた。

自動車が追ひ越した。番號が丁だつた。馭者は台の上から乘つてゐる婦人をひやかした。

馬の尻に鞭をあてた。馬が後足をあげて勢よく走りだした。

「ハイー、ハイー、ドウ、ドウ……」

馭者は長い革の手綱をひいて又鞭をあげた。鞭が縮んだり、伸びたりしながら、白い幻の象眼を青い空の中へ入れた。

「カツ、カツ、カツ、カツ、カツ……」

「勿論ある男はわつしの爲めに財産全部を無くしたあよ。わつしを仇んでわつしを殺ろさうとするほどね。もつともな話でさ。けんど敗けたもんに冷膽なあ、わつし等仲間のあたり前でさ。そりや敗けたもんの不運だからね。それほど男氣がねえなら、なまじつか、しねえきやいゝです。

それにつけてもわつしの幸運――本當にあの博打嫌ひの親父に禮を云ひたいほどの幸運に逢つた事がありましたよ。矢つ張りその村にゐた時の事ですが、賭博最中に女房が眞つ青な顏して走り込んで來たあです。とりみだしてね。

「ちやあつと來ねえ。お父たんが死にさうだつて、電報が來たあから」

わつしはいそいで歸りました。がまるつきりそんな事あ狂言だつたです。

「どういふわけで、呼びに來ただあね」

「わしの眼で場をはづさせたあだ。わしは始終かげで勝負う見てゐたあもん」

其の時あ千兩近くの錢を、勝ち逃げする事が出來ましたよ。勝つたらどうかして場をはづすのが見切り上手といふんだが、人間は勝ちだすと決してやめられるもんぢやねえ。行くとこまで行くといふのが本當でさ。それに小便にでもついて來るといふのが、賭場の習慣だもんな。よくよく歸りたきあ、張つた錢う捨てにして歸るより仕方がねえ。まあ、さうすりや歸らしますがね。

いや其の時の女房の氣轉にや、そして親父といふもんを、本當にありがたく思ひましたよ。その頃わつし等あ、大名のやうな暮しをしてゐましたよ。」

老人の眼は異樣にギラギラと輝いた。それは激しい賭場の狂熱の中で輝く喜びの眼のやうだつた。

「いや博打位え面白いもんはありませんや。博打う見ると、全く腰が、たたねえからねえ」

彼は又目をパチパチさせた。そして白い胸毛を平手でひととほり撫した。

「そいぢや、お爺さん。おめえ、でえぶ錢を殘してゐるらなあ」

村役場が云つた。すると白髮の男は情けなささうに云つた。

「四十八だで、おめえ。爺さんたあ可愛想ぢやねえけえ」

「えへ、さうけえ。道理で話つぷりの元氣がいゝと思つたに」

「まだ若けえずら」

「けんど、儲けえてゐるらなあ錢う、おぢい――」

と又つい云ひかけて彼はをかしくなつたらしく下を向いた。そして「おぢさん」と云ひなほした。

沖の暗いのにヨー
　白帆が見える。ヨイショ、ヨイショ——
馭者は氣樂さうに又聲を擴めた。煙草の煙がパッパッと空の盆蓋に
あやしい紋弧だ。馬車は道の上をころがる骰子だ。愛鷹山の上に聳え
てゐる富士は、ふせられた壺皿だ。
車輪の上の金具が晝近いきつい陽の光を受けて燃えるやうに白く光つ
た。
「ガタ、ガタ、ガタ、ガタ、ガタ………」

「まあ、わつしの運のいゝ話を聞いてくんねえ、終えまでな。
　わつしの幸運を聞いて一人の男がやつて來たあね。運を闘はしたい
云うて。どつちの運がいゝか——
　わつしは喜んで迎へたあよ。色の青い男で眼と眉の間のせまい男で
したあよ。笛のやうな聲をだす奴で。脊の高え、何時も下あ向いてる
奴でした。時々ロん中の歯あ、まるつきり出して笑ひましたよ。
　蒸し暑い晩だつた。
「今日あるけえ」
　男は戸口に這入ると、手を振つてみせました。
「さあ、あがんなせえ」

　わつしは壺にあげました。
　もうそろそろ連中の集まる頃でした。
　もともとわつし達夫婦は、世を忍ぶ身柄だつたもん——表を向いて胴
元といふやうな事あしてゐなかつた。
　がその夜は都合六人で開帳しましたよ。わつしあ其頃何時でも壺振
りをしてゐました。こりや寺銭だけとつてゆくだから、悪くなかつた
です。
　中盆が
「壺！」
　と怒鳴る。私が手ぎはよく骰子を壺に投げ込む。サツとふせる。み
んながめいめいに叫ぶ。
「丁だ！」
「半だ！」
「丁！」
「半といかう！」
　左右の額が平均すると、中盆が又どなります。
「勝負！」
　わつしが壺をあける。するとどうです。あけるたびに、青い男は敗
けた事がなかつたです。火のやうに燃える銭や紙幣が、ザラザラと、
そのたびに青い男の方へ流れて行たです。やつとその何十分の一かの
寺銭が、わつしの前へ集つてきました。

兎に角その晩は、妙に青い男の方へ錢が流れて行たです。十時頃がくると、財布の空になつた男がかなりに出來ました。わつしあ煙管をはたきながら云ひましたよ。

「追つかけると出ねえど」

わつしは熱してゐる男になんべんも注意してやりました。と

「五六は半のゆきどまりと」

冷靜に見てゐた一人の男がさう呟いて

「丁！」

と云つたです。この時ばつかあ、わつしも占めたと思ひました。

「こんだあ、どうでえ」

が壺をあけると、矢張り勝は青い男の方だつたです。

「馬鹿らしいや。面白ろくでもねえ」

連中達は次ぎ次ぎになめられると、そろそろ立ちあがりかけました。

青い男の前には、もう紙幣の山が出來てゐました。わつしあ眺め乍ら、こいつ運のいゝ男だなと思ひましたよ。何か青い顏が逞ましく見えて來だしましてね。するとわつしあ壺振りだけでは我慢が出來なくなつたあです、憎つたらしくて。

「ざあ、そいぢや、さしでやるべえや」

わつしは向きなほつて青い男に云ひました。で交り番に壺を振る事にしました。

先づわつしが振つた。

「丁だ！」男が云ひました。

わつしは仕方なしに「半」と張つた。勝ちました。今度は男が振りました。

「丁だ」

わつしは博打を打ちだして以來の丁でうつたです。とあけると、さすがに俺の運はまだ續くとみえて勝ちましたよ。

男が振りました。が又わつしが勝つたあです。

男が振りました。敗けでしたね、わつしが。それ以來俺の丁はどういふわけだか、すつかり死んでしめえました。一度に澤山の金をとられました。

その翌くる夜も翌くる夜も、わつしとその男は向きあつてゐましたよ。

或る夜、わつしが金を懷中に入れて出やうとすると、女房がわつしの肩にすがつてふるへながら云ひましただ。

「どうか今夜だきや、止めておくんねえ。こんな氣味のわるい空模樣だもん。どうもあんたあ正氣ぢやねえやうだあし」

わつし達は其時はもう減る一方だつた財産も家屋敷も無くして、たつた一艘の漁師船を二日ほど前から俺等の住家にしてゐました。

わつし等の上には眞つ暗な空がかぶさりかかつてゐました。ユラユラするワタシを殘つて、其の夜わつしがどんな氣持で出かけたか。

「今夜だけやつてくよう。今夜こさ敵きう取つてくるだに」

わつしは興奮して云ひました。

「心配しねえで待つてくよう」

わつしは女房を一寸抱いてやつてからユラユラするワタシを渡りました。泣きさうな氣持でな。

ところが其の夜の勝負も又わつしの敗だつたあです。なんぼ張つてもわつしは、はづれるばつかあだつたあです。

「ようし、そいぢや船をかけた」

わつしは今度こさと思ふと、腕をまくつて叫びました。やめときあよかつたに。

青い男が七百兩の金を眼の前へ並べました。

わつしが振る番でした。と「半」が出たあです。わつしは、わつしは船まで取られてしめえました。わしは己のせいだからいゝが、女房の事を思ふと可愛想でな。と氣がつくと、外はもの凄い暴風雨になつてるぢやねえか。船あ、もう人のもんだからどうでもいゝが、女房の事が心配えになりました。

雨ん中をびしよぬれになつて、一目散に海へ出ました。白い山のやうな波が猛獸のやうに吼えたてゝゐたあです。暗い海ん中にひきあげそこねた船と船が、摩れあつてギイギイもの凄え音をたてゝゐます。

とブツリ！　何か綱がきれたやうな音がしましただ。とわつしの眼の前を矢のやうに流れ去つた黒いもの一があつたあです。女の叫び聲をのせて。

わつしはザプザプと水ん中へ這入りました。

「おい、おい、おかね、どうした」

わつしあ闇ん中を氣違ひのやうに呼びました。

「おかね、どうしたあだ」

とあつしは、波にうちのめされてしめえましたよ。わつしの女房は、舟のまゝ黒い海の中へ流されてしまつたです。

なんてえ不幸な男だらう、わつしや。わつしが賴んでも村の人は誰れ一人助けてくれる者も無かつたです。平生からわつしの稼業が、氣に入られえかつたからでがんしよ。わつし達はそれつきり生き別れでさ」

もう馭者もかけ聲をしなかつた。馬車はゴトリゴトリと淋しさうな音をたてゝ沼津の近くに來た。場末の感じのする埃つぽい街に氷屋が何軒も旗をだしてゐる。何處かで十二時の笛が鳴つた。

橋にかかつた。ひとしきり車輪の音が高くガラガラと鳴つた。橋の下の濃い水の中に赤く錆つた小蒸汽が二つとまつてゐた。

私は老人に尋ねかけた。

「今でも博打はしたいですか」

「いやもうやめてつから八年になりまさあ。女房が死にましてな、それ以來やめてまさあ」

「ぢや酒の方は」

「飲む方も駄目になつてしめえましたよ。心臓脚氣で今日も沼津の病院へ行くところでさ」

眠つてゐた子供が眼を醒ました。そして久し振りに見る都會に對して嬉しさうな聲を放つた。鐵の橋骨が目まぐるしく現はれてはチラチラと後へ走つた。馭者が喇叭を鳴らしだした。

「ステキ、ステキ」

子供は手をうつて喜んだ。

「わつしもな、若けえ時にや博打の樂しみを随分しました」

老人は何かあらたまつたやうにさう云つた。

「惡りい事もあつたが、面白かつた事あ忘れられん。ふんだから悴にも云ふです。したきやしろ、となあ。博打の出來ねえようなケチな人間ぢやしようがねえ。けんど女房をもらつたらやめろつてな、しよつちゆう云ふです。わつしや全く博打の爲めに女房を流したあからに」

「博打で取つて博打で流したといふ奴だな」

「さうでがんす。金も女もな」

「悴さんて、そんな人があつたんですか」

「ええ、そいつですかい。そりや女房にや子供は無かつたですが、えその、外で出來た子供がありましてね。そいつをひきとつてまさあ」

馬車が長い橋を渡りきつた。

「わつしもな。今日まで誰れにも讃められた事あありません。けんどたつた一遍、あの震災の時に殺された何とか云ふ社會主義者が村に來た時、わツしの一生を火のやうな云うて、讃めてくれましたよ。その人はつまらねえような顔をしとりました」

「けど、博打を惡く云ふが、人間のする事萬事が博打ぢやないですかね。世の中の出來事と云ふ出來事も、考へようによつちや、みな用心深くフル骰子の目のやうなもんだからね。」

私はそれほどの運命論者ではなかつたが、慰めるやうにさう云つて合ひ槌を打つた。

「いや、どんなに幸運でも幸運だと思ひすぎちやいけねえです」

「おりるど」

老人は怒鳴るやうに馭者の方へ向いて云つた。

馬車がとまつた。

と反動で今度は娘が老人の方へ傾きかかつた。娘は大抵の娘がどんな場合にでもよくするやうに一寸笑つてから

「すんません」と云つた。

「さようなら」

老人は一禮をすると馬車をおりた。そして道を曲つて行つた。右の腰によごれた手拭をはせてゐる。が歩きつきからしてどうも足に缺陥

があるらしく思はれた。歳に似あはず腰が曲りかけてゐた。

私はあとから病院へつけて行つて、其處でもつと話をしてみたい氣が起つた。

町役場や娘達も、それぞれ賃金を拂つて車をおりた。

馭者が馬の鼻づらにドンゴロスで作つた飼葉の袋をつりさげた。馬車の中が急に蒸し暑く思はれた。

「どうも御退屈さま。遠い道で」

やがて袋をしまふと、馭者は靜かに又鞭を廻しながら、吾々を停車場まで運んで行くと云つた。私は村を離れやうとして、最も激しい村愁を感ずる事が出來たのを面白く思つた。私も妻も暫く默つてゐた。鞍の下には馬の背中にいつぱい白い汗が石鹸水のやうにたつてゐた。

私はこの一編を殆と書きあげやうとしてゐる時、この中にほんの時々顔をだす私の小さい娘に死なれた。賭博の話を馬車の中で眠りながら聞いたこの小さい私の子供は——それから幾ケ月かの後に、下手な人生の賭博師である私の爲めに、みすみす五つを最後にしてこの世から去つてしまつた。

私はかうして私の賭博が初めから不運であつた爲めに、賭博を一つの興味としてみる事から、完全に資格を失つてしまつた。



善魔

里見弴

五の一

待合沖津で瑛龍と一緒に泊つた或る晩のこと、相變らず明るくなるまで喋りこんで了つたのだが、たまく話題が瑛龍の性分に落ちると、非難する意味ではないのだけれど、昌造は、飽くまでそこにある不自然を指摘しずにはゐられなかつた。これは、一度や二度のことではなく、既に前年の秋の末頃から、繰り返し繰り返し云つてゐた。さういふ時に、よく瑛龍が譬へられるものは、カメワオンや金庫だつた。環境次第で、どうにでも自分を變へられる、――無論それは、惡意からでないことは解り切つてゐるが、然しそんな風で行つたら、一生涯自分自身の生活といふものをもたずに了はなければならない、と云つた。また、已といふものを、金庫のなかに鎖じこめて了つて、誰にもその鍵を渡さうとしないばかりか、自分ですらそこにしまつてあるものに就いて、出來る限り忘れてゐやうとする、とんでもない間違つた話だ、とも云つた。貴方の住んでゐる心の世界は、まるでロコヽの宮殿のやうに上品で、華美壯麗、纖細の限りを盡してゐるが、それを承知で、あたしはそのモザイクの床の上に、敢て土足の足跡をつけて濶歩したいのだ。あたしは田舍から出て來た爺だ。貴方が十三の年齡に、間宮家の養女になつた時から、健氣にも生れ變つて住み馴れて來た心の世界に、ひよつこり尋ねて來た通

ひの爺だ。あたしにおぶさつて歸つて行く先は、ぶとうな太い柱や緣側が、黒光りにピカ〳〵光つてゐるやうな、貧しく暗い田舎家だ。その日當りのいゝ緣側に、あたしの背なかからおろされると、貴方は、十五年來の努れが一度に出て、へつとり腰をぬかしたやうになつて了ふだらうが、兎も角もう一度そこへ歸つて來なければ駄目だ。——こんな風に云つて聞かせたこともある。正月、初て逢つたほろ醉の瑛龍が、何かの用でそこに出てゐた筆墨からの思ひつきで、火燵櫓に腰かけ、白襟の胸元を寛けて、何か書いてくれと云ひ出した時に、つれの久保は、その頃昌造が新聞に載せてゐた長篇小說の題をそのまゝ、「××××」とやつたのに對して、下前に昌造が、拳固の横腹に墨をつけて捺し、その上の方に指先でちよい〳〵ちよいと五つ並べて點をうち、小さな足形をひとつつけてやつたのも、前の譬話に出る土足といふ言葉を記念しやうがためだつた。

そんな風に、昌造は、折さへあれば、瑛龍の心が、クル〳〵と素裸になることを望み、勸めた。さうなつても、一生、決して寒い思ひをさせない自信があるだけに、時には、熱心を通り越して、老人じみた娓さに陷ることもないではなかつた。その晩も、一體が話の娓い昌造のお談義が、およそ二三時間も續いた。「あゝ、さうね」と、すなほにひとの話を肚の底へ落しこめる瑛龍も、仕舞にはやゝひねくれた氣持になつて、

「だつて、あたしが、さういふ人なんだから仕方がないぢアありませんか」

と、反撥して來た。

「それアそんなこたアない。貴方はさういふ人ぢアないんだ。今の貴方の生活なんてものは……」

「そんなこと云つたつて、あたし、間宮に貰はれて來ない前だつて、——おッちやんにだつて……」

「いゝえ、だからさ、何も十三の年齡に、と云つたつて、その時からきつちり區切をたてゝ變つたんぢアない、前からだつてその傾向はあつたらうけれど、先刻から云ふのも、つまり大體からみての話で、貴方が、自分のほんとうの氣持といふものを、ぴたりと金庫のなかに封じこんじまつて……」

「ですからさ、さういふ風にしたのもあたしでせう？　誰に頼まれてしたわけでもないんだから、——今のあたしだつて、あたしには違ひないんだから、——さういふのがあたしなんだから、どうもこれは仕樣のないことぢやアありませんか」

「さう云つちまつたひにやア、世の中のこと、一つだつて仕樣がなくないことはなくなつちまふぢやアありませんか。人間がしたと思ふことは、みんな神樣がさせてるんだ、となると、心配もへつたくれもありやアしないが、貴方の場合なんぞ丁度その正反對で、生れたッぱなしで來てゐれアいゝんだけれど、無理に貴方が自分を曲げて……」

「でも、あたしくらゐ我儘をしてゐる人、ちよつとあるまいと思ふ

わ」

「それなんだ、貴方の我儘なんてものは、我儘をしなくつちアいけないと思つてしてゐるやうな我儘で……」

「そんな……」

「いゝえ、ちよつとお待ちなさいよ、——貴方がさうなつた動機は、いつも云ふ通り、ひとをたてよう、——といふより、ひとをかばはうとするほどの大人びた氣持で、そのまた細さと云つたら、實際驚くべきものなんだけれど、それぢア貴方が續かないつて云ふんだよ、——若死するよりほかないつて云ふんだよ」

「若死は、先から、子供の時分からしたいと思つてるんだから……」

「そんなこと云ふから駄目なんだ。人間は、生きられるだけ生きて、よくなれるだけよくならうといふ心懸を、片時も忘れないやうにしてゐなきアいけない。それほどにしたつて、いくらもよくなれるもんぢアないけれど、然しそれにしたつて、その心懸のまるでない人からみれアよつぽどましな生活が出來ると思ふんですよ。だから……」

「ですからさ、貴方の云ふことはよウく解つてるんだけれど、ひとに迷惑をかけるわけぢアないんだし、かけれアいつだつて自分なんだから、——自分とは仲よしなんだから、これでいゝのよ、ちつとも構やアしないのよ」

「だから、あたしだつて、ちつとも惡いと云つてやアしないぢやありませんか。いゝんですよ、よすぎて貴方が可哀想なんだよ。何もそんなにまでして、自分ばかり虐めてることはないと思ふんだ」

「あたし、可哀想がられるの、大嫌ひよ。可哀想がられたり褒められたりしたら、もうお仕舞だと思ふわ。さうしたらすぐ死んじまふの！……兎も角あたしは、よくつても惡くつても自分の思つた通りにしてたいわ。自分でしたことなら、あたし決してあとで悔んだりなんかしないわ。あたし、なんでも、あとから取返しのつくやうなこと大嫌ひ！　自分がだらしがないから、取返しの〃てことしとけば、すぐ取返しをつける氣になるんですもの。あたしが折角かういふわたしになつちまつたのに、今から取返しつけるのいや！　誰ンだつて道樂はあるでせう？　あたしンだつてあるわ。貴方はね、自分を虐めて可哀想だのなんだのつて同情してくださるけれど、貴方の思ふほど、自分ぢア辛かアないのよ。年が年中、そんな辛いことしてゐられるもんですか。ですから、つまりこれアあたしの道樂なのよ、趣味なのよ」

「趣味は趣味でいゝけれど、生活全體を趣味や興味でやつて行くのは亂暴ですよ。生活つてものは、もつと眞劍な、一生懸命なものでなくつちアならないんだ」

「そんな一生懸命なもんなら、なほ辛くつて、可哀想なわけぢアありませんか。黑光りのする緣側なんぞで、へつとり腰をぬかしたりしちアゐられないでせう。……兎も角、馴れないことするよりも、今のあたしが一番いゝの」

「それアね、貴方が、一番わるいことをしてゐれば、これ以上わるく

ならう筈はないと思つて安心してゐられるから、その安心の點で一番いゝと思つてるだけで、――つまり、むづかしく云へば、なんにも理想をもつまいとしてゐることなんだ。それと云ふのが、なまじ望みをもつて、却つてへんなことになつちまつた人を、貴方の周りに澤山見たり聞いたりして來たからで、ひどい言葉で云やア、つまり卑怯なんだよ。…………一體人間てものは、誰でも幸福を望んでるくせに、一方またそれを可怕がるやうなところがあると思ふんだ。身のしまるやうな冷い水ンなかだと、生々と游ぎ廻つてる魚が、微温い水にはいると、腹を上にしてプクンと浮きあがつちまふやうな具合に、不幸ではなか〳〵へこたれない人でも、幸福に住むと兎角だらけちまふ、それが可怕さに、幸福を、――嫌ふつてわけぢアないが、まア五寸なり一尺なり彼方へ、いつでも掴まうと思へば手の屆くくらゐのところに置いときたいと思ふやうな傾きがあるね。だからあたしは、不幸に堪へるより、幸福に堪へることの方が、一倍勇氣が要ると思つてるんだが、あなたなんぞ、女なんだし、さんざもうお勤はして來たんだから、いゝ加減幸福の微温湯のなかで、プクンと浮んでたつていゝんだが、もしなんなら、一休してから、今度は幸福の國でもパッチリ目をあいてゐられるやうな修行をすれア申分ないわけなんだね」

「えゝ、さうよ、あたしは卑怯よ。だから、人に見透されるやうな理想なんぞもつてないわ」

「なに？　なんのこつたかよく解らないな」

「一體、理想つてなアに？　人間、誰でもそんなものをもつてなけれア一人前ぢアないの？」

「理想つて言葉は、あたしも大嫌ひなんだけど、つまりあゝなりたい、かうなりたいつて氣持で、たゞぼんやりさう思つてるだけでなく、それについちア、かうしちアならない、あゝしなけれアいけない、といふ風な心構まで含めた意味だと思ふんだ。つまり、棚から牡丹餅みたいなことを考へてるなア理想とは云へまいね」

「棚から牡丹餅なら、あたしの理想だけど、あゝなりたいの、かうしちアいけないのつて、そんな面倒臭いの可厭だわ」

「それぢア、まるでめちやくちやだ」

「えゝ、めちやくちやが好きなの！　……はゞかり樣、ちよつとそれこつちに押して頂戴」

と、なかば起き返つて枕もとへ手を伸した。呂造も首を擡げて、

「なに？」

「その亂籠」

それを瑛龍の方へ押しやりながら、

「なにさ」

「いゝえ、時間見るの。先刻からもう電車とほつてるわね」

「さうかい？」

今更らしくあたりを見廻して、「あゝ、いつの間にかすつかり明くなつちやつたね」

亂籠のなかを搔探つて、昌造の、大きくて厚ぼつたい、舊式な銀時計を取り出し、すかすやうにして見てゐた瑛龍が、突然、
「歸らう」
「え？　歸る？」
「歸るの」
「どうしてさ。なんか用でもあるのかい」
「髪結さんに行くの」
「今時分から？　まだ早いよ、きつと、おもては」
「さうでせうね。でも、もう七時ですから」
云ひながら、さつさと布團からぬけ出して、いつもきちんとひと纏めに枕もとに置いておく着物のそばに蹲つて、まづ足袋から先に穿きだした。いかにも何氣なくはしてゐたけれど、どことなく容子に、ひどく冷々とした感じがあつた。
（怒つたな）
昌造は、始めてそこへ氣がついた。こつちが一生懸命云つて聞かせてゐるのに、故意とのやうにその眞意のあるところを避けて、たゞ言葉の上だけの戯をふつかけて來た調子でも、瑛龍に限つては、決してさう腹立たしげには響かせなかつたから、それまでは大して氣にもかけずにゐたのだが、考へてみれば、こんなに早くから髪結に行かなければならないのなら、昨夜のうちに、ひと言でもその豫告がありさうなものを、……ヒヨツとするとこれは、二度と逢はない氣で歸つて行かうとしてゐる人かも知れない、——急に昌造には、そんな風にさへ思はれて來た。
「昨日も髪結さんに行つたんぢアなかつたけかね？」
「えゝ。でも、根が痛いから……」
ちり〳〵と、昌造の肚の底からも憤がこみあげて來た。
（わからずやめ！　勝手にしろ！）
そんな呟きが、熱く胸に醸された。——默つて夜明がたの寒さと、欄間から射し込んで來る薄暗い光のなかに動く、いゝ、かぼそい瑛龍の肢體をぢツと見詰めてゐた。
手早く着物を着をはると、化粧道具や紙入をひとつ〳〵帶の間にさし込みながら、
「ぢア行つて來ますわ」
「さう。ぢアさようなら」
意地から、昌造も冷淡に答へた。「行つて來て」と云つて、もう一度こゝへ歸つて來る氣があるのか、あるとすれば何時頃になるのか、そんなことは義理にも訊けない氣持だつた。
白と黒のあらい棒縞の、手編の襟卷を首に卷きながら、それが癖の、爪立をするやうな急ぎ足で、瑛龍はさつさと出入口へ歩みよつた。
「ちよつと〳〵」
身は顫へたまゝながら、聲にはおのづと力が籠つた。「ちよつとお待ちなさい！」

默つてくるりと振り向くと、寢床からは二間ばかり、もうすぐ出入口の壁へ、ペタリと背なかで貼りついたまゝ、顏と燃卷の白さが、凝つたやうに動かなかつた。昌造もまづ怒りを鎭めやうと、ぢッと下腹に力を入れて、暫く默つて見詰めてゐるうちに、見えるともなく、目鼻だち、表情が、薄暗く冷たい空氣のなかに浮び出して來た。その、且つて憶えがないほどの崇い美しさにうたれて、昌造の心は一層ひき締つた。

「怒つちアいけない。心を鎭めて聞いてくれゝば、なんでもないことなんだ、――みんな貴方が、自分でも心の底では、ちやんと承知してゐることなんだ。たゞ、それを、ひとの口から聞かされると、ちよつと氣にさはるだけで、久振りに自分の本心と出會つて話しこんだんだと思つてくれゝアいゝんですよ。ね、さうでせう？ 貴方に對して、こんならは手な口の利きやうをする人は、あたしのほかにはないかも知れないが、あつた方がいゝんだ、一人くらゐはなくちアいけないんだ。いま云つたゞけのことに就いては、あたしは、一點心に疚しくないし、また間違つてもゐないと思ふんだ。あたしも怒りッぽいが、さうすぐ怒つちアいけない。あとで靜に考へてみて、どんな場合にも、怒るだけの理由があつたためしはないんだ。大丈夫だ！ あたしにお任せなさい！」

燃卷に顎を埋めて、瑛龍はぢつと立ちつくしてゐた。眼は近いし、光を背負つてゐる昌造の顏が、見分られやう筈はないのだけれど、それでも、瞳は、眞正面に彼の上に据えられてゐた。

「兎も角、もう一度こゝにいらつしやい！」

そのひと言で、必ず戻つて來ることを信じきつて、昌造も寢床の上に起き返つた。

瑛龍は、靜に歩みよつて、膝を突き合せて座つた。近くで瞳を合せると、昌造も、もうなんにも云ふことはなかつた。――そこには、赤むけの傷を思はせるやうな、痛々しいばかりすなほな、一糸も纏はない心が、潤ひ輝いてゐた。

兩手を握り合せて、二人は、そのまゝいつまでも互の眼を見詰めてゐた……。

五の二

前のやうなことがあつてから、また幾日かを隔てゝ、しぐれ模樣の或る寒い午後のことだつた、矢張り沖津の一室で、昌造は三平と差向ひに火燵にあたつてゐた。――すつかり氣心を嚥み込んで了つて、お民などは、夙からもう昌造を、客人らしくは扱はなくなつてゐた。都合で瑛龍の來られないやうな時には、原稿紙を持つて來て、「さア、こんな時にちつと勉強して書きためといてください」などゝ、一人ぽつちにして置くか、三平でもあてがへば尚更、客がたて込んで來ると、二三時間もうちの者が顏を見せないやうなことも珍しくはなかつた。で、その時も、もう永いこと二人きりで、さして與もない代り、大し

て窮屈もしずに、豆でも嚙むやうに、ポツリ〳〵話し續けてゐたが、そのうちどういふ機緣からだつたか、三平がいつもの冗談口調でなく、白々とした顏つきで、瑛龍との間に噂の關係があるかないかを訊くので、昌造もたゞありのまゝに、簡單に、ない、と答へた。

「ほんとですか」

「ほんとさア」

「いつかの、活動寫眞に撮られない限り、——あ、あの手ぢアないんですか」

「そんこたアないよ。大眞面目だよ」

「どうしてです」

「どうしてもかうしてもないさ。たゞ……」

「馬鹿！」

いきなりから怒鳴りつけられて、昌造も、はツと息を嚥んだ。洒落でもおどかしでもなく、芯から腹をたてゝゐることは、いつも必ず相手の顏のうへ一二尺のところを掠めて、うしろの鴨居あたりへ視線を滑らせながら話す癖の三平が、正面に、嚴しく昌造を睨め据えてゐるのでも知れた。あまりの事の意外に、昌造は、返す言葉もなく、ちツと相手の顏を見返してゐた。

「一體貴方は馬鹿ですよ」

三平は、冗談から一層早口になつて云ひ續けた。「女なんて、そんなもんぢアありませんぜ。子供ぢアあるまいし、そんなくだらない我慢をして、なんです、みつともない！ しつかりなさいよ、ほんとに！」

幇間に怒鳴りつけられた咎といふのもたんとはあるまいが、そのうへにも昌造は、ほんの僅の努力で、平靜な己を取り返すことが出來た。

「君がさう云つてくれる氣持はよく解るよ。始終一緒に、ながら、そんなことのないのを、一種の誇りにしてゐるやうな人もあるが、俺の場合はそれとは違ふんだから、決してそんな虛榮心みたいなものからぢアないんだから……」

「ぢア、貴方は、あの人とさうなりたくはなんですか」

「なりたくないんてことはないよ」

「そいぢア矢ッ張り痩我慢ぢアありませんか。さういふ相手と、しよつちう二人きりで、ゐながら……」

「それアね、最初にあの人と約束したことがあるんだ。きちんと事をきめて、俺のとこへ來られるやうになつてから來る、つてことになつてるんだ」

「ぢア、それまでは、ちやアんとお膝におてゝを載せて、……えらいなア」

「さうまア皮肉を云ふなよ。それア俺だつて、一緒に坐てゐることが辛くなる時だつてあるよ。だけどね、人間が嬉しく思ふことは、何もそれに限つたわけぢアないんだ。それ以上に嬉しいことがあれば、強

いてさうならなくつたつて、大して困りやアしないんだよ。これが、もし、それだけを目的でやつてることなら、それア馬鹿と云はれても頓馬と云はれても一言もないがね、何もかういふ場所に來てゐるからつて、そのほかの目的をもつちアならないつてわけでもないんだし、まアいゝぢアないか、さういふ時が來て、自然とさうなるまでは、齒痒からうが、暫く默つて見てゐてくれよ。どうだい、解つたかい」

「解らない！」

言下にさう答へはしたが、然し顏色は、もうよほど和いでゐた。

「解らなきア仕方がないが、然し馬鹿！ はちつと手ひどかつたな」

昌造も、笑顏ながら、一應さう云つて窘めないではゐられなかつた。考へてみれば、商賣氣を離れて、一圖に昌造を思へばこそで、見當こそはづれてゐるが、その心根は嬉しくうけなければならない場合なのだ。それを、いかに永年の間友達のやうにつき合つて來た仲とは云へ、客と幇間との間で、なんぼなんでも馬鹿はあんまりひどすぎる、といふ風な、常識的な氣持から、つい矢つ張りそんなことを云つて了つたのだ。

三平は業態に似合はない負ン氣の強い男で、「馬鹿だから馬鹿と云つたんだ」まででなくとも、「だつてあんまり馬鹿々々しいぢアありませんか」ぐらゐの口返答はしかねないのだが、有繋に自分でもいくらか行きすぎたと思つたか、赤くなつて笑ひだした。それを救つてやる氣持で、昌造も笑ひ聲を合せながら、

「どうもちつと驚いたよ」

「然し貴方も、感心に惱らなくなつたよ」

「どうだね、これなら、三平さんとこのお弟子に置いて貰へさうかね」

チクりと云つて置いて、「然し惱れるつてことも大したことだよ。年をとると、齒がぬけたり、頭の毛が薄くなつたりすると同じ理合で、碌すツぽ腹もたてられなくなるかも知れない」

「さうでもありませんよ、老人に限つて氣が短いもの」

「さうか。ぢア、俺なんぞ、當分まだ大丈夫だな」

さういふ風に、だん／＼いつもの冗口の方へ導いては來たが、三平が、まづ昌造の上に破裂させた憤りは、形を變へて、今度は玲瓏の側へ向けられたとみえて、いつになつたらそんな約束が果されるか知れたもんぢアない、といつた風なことを、さも裏の裏まで實情を知り盡してゐるやうな顏つきで空嘯きながら呟いたりした。

「然し、それア、大河内つて人の話ぢアなへんだよ。それとはまた別に、爆裂彈てものがあるんださうだ」

「なんです、その爆裂彈つてえのは」

「なんだか知らない。俺がそれにさわると、爆發して、あの人はどつかへ飛んでつちまはなけれアならないんだとさ。だから、俺は、なんにも知らないばかりでなく、知らうとするわけにも行かないんだ」

「また物騷なものを擁え込んぢまつたもんですね。……で貴方は、そ

の爆彈の始末がつくのを待つてるわけなんですね？」
「まア、さうらしいんだね」
「どうか、そいつが、一つや二つぢアなささうだからね」
　その云ひ方に毒があつた。これも、考へてみれば、昌造への好意が大きければこそ、互に秘密を隱し合ふべき筈の内輪を、强いて惡く云ふ態で、話はまるであべこべだつたのだけれど、その好意は解つてゐながらも、昌造はいゝ心持ではなかつた。いつか兄の健吉に、瑛龍などにひつかゝつてゐると、どんな目にあふかわからない、と注告された時と同じ氣持で、自分からよしないお喋りをして了つたことを悔みながらも、三平に對していゝ感じはもてなかつた。
　それからまた暫くたつてからの或る晩、その時にも瑛龍は來ないで、めつたに客の席に出て喋り込んでゐるやうなことをしない沖津の女將が、お相手のつもりか、いつになく腰を据えて、いろ〳〵世間話の末が、またもや瑛龍との間のことを持ち出して來た。
　もと〳〵大河内は、舊くからのこゝの客で、事實當人同士の間で勝手に結ばれた仲とは云ふじよう、かういふ場所の慣例で、女將は、はたからも一種仲人じみた責任は背負はされてゐたし、自分でもその感じは捨てられない立場にゐた。その點、三平などの訊問とは、全く別の意味も生じて來るわけで、よしんば大河内のことがないにしても、見て見ぬふりではすまされない人だつた。昌造は、はゝア、それで珍しく默り込んだんだな、と思つたが、幸か不幸か疚しいところはないので、平然と構えてゐた。
　女將の云ひ方は、三平とはまた別の意味で露骨だつた。
「そんなこと仰有つたつて駄目よ。無論そらさうよ。ちやんとあうつかつてゐるわよ」
　眼尻に笑皺をよせ、痩せた肩を搖りながら、昌造の云ひ分などは、てんからうけつけやうともしなかつた。
　そこへお民もはいつて來た。昌造は、お民とは大の仲よしだつたから、早速助太刀を賴む氣で、氣忙なく呼びかけて自分のそばに坐らせてから、簡單に話題を話して、
「ねえ、そんなことないねえ」
「さア……」
　無論二つ返事で證人にたつてくれると思はれたのが、相手が女將だけに、笑顏ながらもすつかり堅くなつて、「さア、どうですかねえ。あたし、さうぢアない、とも思ふんですけれど、また、さうかしら、とも思へるんでね、要するに、——生意氣な口を利いて可笑しいけれど、ほんとに、要するにあたしにはわかんないわ」
「なアんだ、たのみにならない人だなア」
　そのとき昌造がふと思ひ出したのは、いつかこのお民が、鈴香といふ若い藝者を見据えて置いて、「鈴香さん、こつちを御覽なさい、あたしの顏が見られますか」と、一つ一つ言葉尻をあげて、小供でも叱るやうに云つてゐたことがあつたが、それは、無論冷かしで、最近に何

か色ツぽいことで尻尾を捉えられてゐる鈴香への、ちよいと手を變へた厭しがらせにほかならなかつた。そばで見てゐた昌造が、その調子をひどく面白がつて、口眞似をしたのが始りで、「あたしの顏が見られますか」が、ちよつと間流行言葉になつて了つたことがある。——それを思ひ出して、

「ちよいと、お民さん、こつちを見てごらん、——これ、この通り、貴方の顏が見られますよ」

「なアに？……あ、さうか！」

お民も思ひつくと、例のほがらかな笑ひ聲をあげたが、「でも、駄目よ、貴方なんぞ……」

「なんぞはひどいな、なんぞは」

「だつて駄目よ！　貴方なんぞ、のめ〳〵學校の校長さんぢアありませんか。……わかるもんですかね」

「冗談いつちアいけないよ。俺なんぞ、一遍でもそんなことがあれア、とても、正面にあんたの顏は見られやアしないよ」

「いゝえ、さうよ」

と、女將も口を出して、「確に、それアもうそれにきまつてるんだけれど、……ねえ、加島さん、あたし知らないことよ」

「亂暴だな、知るも知らないもないぢアないか、現に……」

「いゝえね、眞面目な話がさ、あたしだつて、知つてるとすれば、いろ〳〵あつちこつち困ることがあるぢアないの。……ね、解るでせう？　ですからさ、あたしはなんにも知らない人でゐますよ。よござんすね。どういふことにならうと、貴方がたお二人の責任ですよ。あたしほんとに知りませんよ」

「うん、さういふ意味なら、女將さん、ほんとに何も心配してくれないでいゝや。今までのところは、實際そんなことありやアしないんだけれど、それア、、、、、、、、、、、、んだから、どういふことで、、、、、、、、、、、ないとは限らないんだからね。萬一さうなつたとしても、決して貴方に心配をかけるやうなことはしない、それだけは立派にうけ合つて置くよ」

「兎も角あたしは、なんにも知らないんだからいゝわ」

その晩おそくなつてから來た瑛龍に、床のなかでその話をして聞かせた。瑛龍は、考ぶかさうに、またやゝ不愉快さうに、ぢツと聞き終つてから、沈んだ聲で、

「さうお。でも、ずゐぶんへんな人たちねえ……」

と、ひと言さう呟いたばかりだつたが、やゝ暫くしてから、

「世間の人つてもの、どうしてさうなんでせうねえ。たゞ好きなだけぢアいけないのかしら」

「いけないつてことはないけれど、ほんとに好きンなれば、自然とさうなるんだよ。心と體とは別々なもんぢアないんだから」

「どうして？」

「別々といふのは、一つの考へ方なんだ。ほんとは、思つたことゝす

ることゝは一緒なんだ。例へば、熱いッと思つて飛びあがる、口惜しいッと思つて食ひつく、それを、悲しい時に噴き出したり、嬉しい時に相手をなぐつたり、そんな突飛なまねは、──それア無理にしようとして出來ないこたアないだらうけれど、それは、人間の世界にだけ嘘といふものがあるからで、猿以下、どんな動物だつて、必ず思ふことゝすることゝは一緒なんだ。大好きでゐながら、さういふことがないつていふのは、何か事情で妨げられてゐるからで、決して自然ちアないんだからね。自然にいけば、好きといふ心持と、さういふことゝは一緒なんだ。別々に離して考へればこそ、却つてをかしなことにもなるんだが……」

なんとも返事はしなかつたけれど、やゝ納得のいつた眼の色だつた。

これまで、ただ唇を接するだけだつた、、、、、、、、、、、、、、、、。さうして、あくる三月一日の晩、相見てから丁度半年目、、、、、、、、、、、、、、

そのあと、二人とも口を利かなかつた。夜のあけるのを待ちかねてゐたやうに、瑛龍は、まだ薄暗いうちに歸つて行つた。昌造は、處女を犯しでもしたやうに、寂しく恥い心持になつてゐた。

お民がはいつて來た時に、

「監督は、お民さんの監督が、正面に見られなくなつちやつた」

と、監督でもなんでもなく、正直すぎるほど正直な心を露に、實際、そつぽを向けて呟いた。暫く考へてゐてから、

「あゝ、さう！」

と頷いたお民も、ニヤリとでもすることか、何か重大事を洩された人のやうに、それきり口を噤んで了つた。

五の三

昌造も、明るい光の下では、當分瑛龍と眼を見合せにくいやうな氣持で、その日は早く沖津を出て、あちこち用達をして廻り、夕方新橋の停車場にはいつて行つたが、然し、どうもそのまゝうちへ歸へる氣になれなかつたので、鵠沼のさがみ屋に滯在してゐる筈の久保を思ひ出して、藤澤までの切符を買つた。汽車のなかでも、そわ〳〵と心うれしく、ヒヨイとこみ上げて來る思ひ出し笑ひを嚙み殺しても然るべきのが、それどころか、寂しく、靜に氣が沈んで行くばかりだつた。それは、よかれあしかれ一生の大事がきまつて了つた時に、おり〳〵と胸へのしかゝつて來る、あの重壓感だつた。裡に、それを跳返すだけの決意と勇氣とが、自然と湧き起つて來るまでは、つく息も細るばかりに、人の氣を滅入らせるやうだつた。──昌造は、見馴れた窓外の景色を、見るともなしに眼に映しながら、ぢつと考へ沈んでゐた。

思ひがけない來訪を、久保も嬉んではくれたが、そんな氣持だつたし、差迫つた仕事を持つて來てゐる人を妨げてもと、昌造は、十時すぎには自分の部屋に引きとり、ほろ醉の眠氣のさめないうちに枕につ

いた。
　翌日は、いかにも早春らしい穏た日和だつた。昌造が、新聞の仕事を一回片づけて、階下におりて行つてみると、丁度久保も、朝晝兼帶の食事を濟したところだつた。緣側に足を投げ出し、日光の直射を樂しみながら、長閑な氣持で、友達の噂話などしてゐた。
「加島さん」
　ふと言葉が杜切れて、やゝ暫く靜な沈默が續いたあとで、久保が、改めてから呼びかけると、急にもく〳〵と起き返つた。
「なんです？」
「これアね、貴方に云つた方がいゝか、知らないふりをしてゐたものか、どうも僕も、實際どつちがいゝか解らないんだけれど……」
　云ひながら、そこらに散らばつた新聞紙の、あつちを取り、こつちをひつくり返ししてゐたが、その上にこゞみかゝつた顏が、見ると、眞赤になつてゐた。――昌造も、すぐ起き直つた。
「なんです」
「例の、エイタツ（瑛龍の符諜。）の爆烈彈……。貴方、誰だか知つてるんですか」
「知りません―」
と、一旦は切つたが、すぐあとへ續けて、「誰です」
　そこまで切り出されては、瑛龍との約束を守つて、あとを聞くまいとするだけの自制はなかつた。もう、全身が耳だつた。

「僕もいろ〳〵考へてみたんだけれど、貴方がいつまでも知らずにゐて、あとで困るやうなことありやアしないかとも思ふもんだから………。て云ふのはね、……ほんとに、云つてもよござんすか？」
　久保は、そのとき始て顏をあげて昌造を見た。相手の恥しさを思ふと、その當人よりも先に、自分の方が赤くなつて了ふやうな、敏捷すぎる血行は、また昌造のものでもあつただけに、久保の赤面に對して、感謝に近い氣持を抱かずにはゐられなかつた。
「よござんす、構ひません！」
　爆烈彈といふ言葉を知つてゐるくらゐで、瑛龍との間に結ばれてゐる約束の内容も、久保は、豫て昌造から聞かされてゐた。それをも承知の上で、押して云はふとするのは、きつとよく〳〵のことだからだらうと、今度は昌造も、はつきり破約の決心をつけて答へたのだ。
「兩角ですよ」
「さうですか！」
　あれかこれかと想像を逞しふした覺えもないが、それにしても、役者とは！　而も餓鬼とは！　……あまりの意外に、昌造は、暫くぽかアんとして了つた。
「ですからさ、貴方は、例の第一回の脚本も引きうけてるんだし、これから先だん〳〵兩角との交渉が多くなつて行くと……。いつかの箱根の時だつてさうですよ、あの時には、僕もまだなんにも知らなかつたんだけれど、あとで考へてひやッとしちやつた……」

「なんでしたつけね」
「あの、ほら、梅ならどうでもして取つてみせるつて、貴方力んだぢアありませんか」
「あゝ、あゝ」
「氣のせいか知らないが、あとから思ひ出してみると、あんときの兩角、へんにむづかしい顏をしてゐたやうですよ」
「そいつアわるかつたなア！　……ふうん、成程、さうとすれア、まるで喧嘩をふつかけてるやうなもんだつたんですね」
「ですからさ、僕もちよつと迷つたんだけれど、どうも矢つ張り貴方の耳に入れといた方がいゝかと思つて……」
「えゝ。それア、さういふわけだとすれば……。然し、どうもそれア、圖らず、貴方にいろ〳〵お心遣ひをかけちまつてすみませんでしたね」
「なアに、そんなこたア……」
「だけど、どこで貴方、そんなこと聞いて來たんです」
「それがね、實際偶然なんですよ、……いつかの、熱海や箱根でパチパチ寫して來た寫眞ね、……だから、あれから歸つて間もなくなんですがね、銀座に出た序に金城商會によつて、燒附の出來てたのをうけ取つてから、カフエ・ドオトンに行つたんですよ。
(作者註。カフエ・ドオトンは、畫家の杉田が經營してゐる、文人、畫家、俳優などのよく集る店だ。)
あの時の寫眞には、雪の景色やなんかで、なか〳〵傑作があつたもんだから、誰かに逢つたら自慢しようと思つて、僕のこつたから、豫めエイタツのはいつてるのだけ別にして持つてたんですがね、だから、安心して杉山君にそつくり渡して見せてると、そのうち、なんだ、エイタツなんぞつれてつたのか、つて云ふんで、吃驚して覗き込んで見ると、撰り分けそくなつて、一枚だけ殘つてたんだ。はツと思つたけれど、仕方がないから、咄嗟にまア、うん、それア加島君の妻君だよ、なんて誤魔化しちまつたんですがね、エイタツにそつくりだね、つてやうなことから、だん〳〵あの人の若い時分の話なんかも出た揚句に、これは非常に秘密なんだけれど、つて……」
「あゝ、さうですか。……で、その時、ほかにも誰かゐたんですか」
「いゝえ、あたし一人……」
「さうですか。杉田君が云ふんなら、きつとそれア間違ないでせう。……へえ、さうですかねえ」
昌造の、感慨ふかげな調子に、久保はもう一度また顏を赤めながら、
「どうです、悲觀しやアしませんか」
「いゝえ、大丈夫！」
「ほんとですか」
「ほんとですとも」
「そんならいゝけど、うつかり聞かせてね、貴方がまた……」

「そんなこたアありませんよ」
「さうかつてね、いつまでも云はずにゐるうちに、貴方のこつたから、もしヒヨツとそんなことにでもなつちまうと……」
「もうなつちまひましたよ、昨夜」
「へーえ
「聞かないうちでよかつた。一日違ひで、聞いてからなア、あたしも、ちよつと困るからなア」
「さうですか！そんならそれで、無論構やアしないんだけれど、——構はないどころぢアない、大へん結構だけれど、今までみたいに、貴方がどつちつかずでゐると……」
「さうですよ。……然し、云つてくだすつてほんとに有難う。それアね、あの人が、それを爆彈と感じてゐる氣持はよく解るし、無理もないとは思ふけれど、なに、あたしとしちア、それくらゐのこと、大して氣にやアなりませんよ。——なんて、ひどく自惚てるやうだけれど、貴方が、悲觀しやアしないか、なつて心配なさるから……」
「然しそれア、假令一遍でもさういふことがあつたとすれア、何も僕だつて、ちつとも心配なんかしやアしませんよ」
「ところで、弱つたのは脚本ですね。知らないことゝは云ひながら、えらいものを引きうけちやつたなア」
「なに、それア貴方……。うん、矢つ張りちよつと困るかなア」
「困りますとも。その時までになんとか解決がつかないやうぢア無論のことだし、どういふ解決がついたとしても、あたしは兎に角、彼方がね……」
「どうも實に、大した自信ですなア」
「それア然し、誰だつて……、自分さへ本氣なんなら、どんな強敵だらうと、初ツから負ける氣でかゝるやつはないぢアありませんか」
「それアまアさうだけど、女にかけての貴方の自信だけは、また別ですからね」
「冗談いつちアいけない。本氣でやつてることなら、誰だつてそれくらゐな自信はもてまさアね」
この話で、實際昌造の氣持は、少しも減らなかつた。それどころか、却つて心は輕く、勇氣は百倍されてゐた。

五の四

その翌晩、十一時頃になつてから、ふと昌造は、用事で來る人を、明日の午ごろ逗子のうちで待ちうけるやう約束してあつたことに氣がつき、どうせ寢坊がしてゐられないくらゐなら、今夜のうちに歸つて置いた方が樂だと思つて、俄に自働車を頼んで貰つた。玄關まで、久保も送つて來てくれて、別れしなに、
「今度は當分うちに落ちついていらつしやいよ」
と、何氣なく戒める氣持を響かせた。それは、昌造が、一週間、十日と、始終うちをあけてばかりゐたからで、さういふ輕い皮肉の方

が、空は却つて暗かつた。

「え丶。だん／＼陽氣もよくなつて來るし、どうです、貴方もそのうち一遍出かけていらつしやいな」

女中たちの手前も、そんな風にうけて置くよりほかなかつた。

風が南に廻つて、降りみ降らずみに、どうやら日いつぱいは保つたやつが、その時分には細い、糸を引くやうな雨になつてゐた。

「ぢア、さよなら」

「さよなら。どうも失禮」

「御機嫌よろしう。どうぞまたお近いうちに」

「さよなら。お世話樣でした」

ほどよく濕つた砂の上を、音もなく動き出したのは、ビックの幌自働車で、昌造の小さな體などは、隅に片づくと、乘つてゐるのかゐないのか分らないくらいだつた。

兩側松ばかりの、暗い夜道を走つた。佗しく天井にともつてゐる豆電氣は、いゝ、うねりにでも乘るやうな、大きくゆるい動搖にも、線でも切れかゝつてゐるためのか、チラ／＼と頻に明滅した。

一昨日の汽車のなかと比べると、昌造の氣持もよほど輕くはなつてゐたが、幸福感から來る寂しさで身がしまり、つく息も、どうかするとうち顫ふ溜息になつた。——運轉手の席とは反對の側の隅ッこに、二重廻しの袖を引き合せて、別に寒くはないのだが、コチンと丸まつてゐた。

……興奮との闘ひが、どういふことになつてゐようと、昌造の心は、そんなことでは少しも不安にされはしなかつた。尙更、嫉妬の感情などは、藥にしたくもなかつた。ほんとうの瑛龍といふものを識つてゐるのは、天にも地にも自分一人だ、もう一度その、本來の瑛龍に生れ變らせることが出來るのも自分だけだ、——この氣持は、今では動かし難いものになつて、時にはそれが、天から授けられた使命のやうに、崇高な感じにまでも高められた。あとはたゞ、一生懸命成し遂げさへすればいゝのだ！

朝比奈の切通しをぬけて、鎌倉の町にはいつたが、もうどこからも灯は洩れず、人にも逢はなかつた。たゞ一軒起きてゐたとこ店のおでんやの、赤く長い提灯が、懷しく目に滲みるくらゐだつた。

これから先に、踏切が四ヶ所あつた。延命寺橋のは、氣もつかずに過ぎた。仕合の寂しさをこらえやうとして、うーんと下腹に力を罩めてゐたが、二人のほかに、世の中が消え濟れて行く寂しさは、けれども、心にしみ／＼と迫つて來た。

名越のに差しかゝつた時に、運轉手が、外套の下を掻い探つて、時計を出して見る容子だつた。それで氣がついて、昌造もひと膝のり出し、小高くなつた線路の右左を見廻した。こゝらの踏切番は、人通りのある宵の口だけで、もうその時分になると、一々通せん棒のあげおろしをしなかつた。そこまでは承知してゐても、終列車や、臨時の貨物列車などでは、時々間違ひが起つた。で、徐行にして運轉手もよく右

左を見さだめてからそこをのり越した。

……薄暗い火影に、運轉手の背なかを見詰めながら、もの思ひに沈んでゐる自分といふものが、一瞬間の後には、石鹸玉のはぢけるやうに、ぱッとこの世から消えてなくなつて了ふ、——この空想が、さして可怕くなかつたばかりでなく、ヒヤリと冷たい感じなどは、ちよつと好もしいくらゐだつた。

(やつたらやつたでいゝ)

その時には、だら〳〵阪を火葬場の方へ登つてゐた。ふと、軌道のそばに轉がつてゐる自分の屍體が目の前に浮んで來た。その傍に、瑛龍を思ひ描いてみた。——決して生き殘りはしない、と信じられた。

(やつたらやつたでいゝ)

ところが、續いてそこに、女房や子供たちが現はれて來ると、いきなり頭から水をあびせられたやうに顫えあがつて、もうそれ以上の、そのよしない空想に浸ることをやめて了つた。

正氣に返ると、すぐもう第三の踏切が眼前に迫つてゐた。それは、山間の道が左へ切れると、つい鼻の先に軌道が横たはつてゐるやうなところで、左右の見通しが利かないだけに、實事、間違も一番多かつた。——はぢき飛ばされたやうに身を起すなり、昌造は、續けざまに運轉手の肩を叩いて、

「君、君! ちよつと停めてくれ給い!」

グツ〳〵グウ、と制止が利いて停つた。

「君、すみませんがね、ちよつと降りて見てくれませんか。こゝが一番あぶないんだから」

まるで哀願するやうな調子だつた。

「よござんす。見て來ませう」

末廣がりになつた前燈の光のなかを、ピチヤ〳〵泥濘に音をたてて、運轉手は、猫背に雨をいとひながら駈けて行つた。

……とたんに、どうかした機械の狂ひで、ひとりでに自動車が動きだす、汽車が來る……そんな幻想を、毒矢のやうにあたまに射込まれたと思ふと、兩側の土手に草が動いて、ズツ、ズツ、ズ、ズウト、車輪が滑りだした……。慌てゝ扉に手をかけたが、無論それは錯覺で、胸に高鳴る動悸が苦々しかつた。

軌道の上に立つて、左右とも十分に見通してから、運轉手が駈け戻つて來た。

「大丈夫です」

手早く前進機を入れて、一氣に軌道を踏み切らうとした瞬間、もう一度また、車の後部、丁度昌造が腰かけてゐるあたりへ、崩れかゝる大波のやうに、眞黒な機關車が、ド、ゝ、ドツとうちよせて來る幻想に捉はれると、思はず知らず腰を浮かし、運轉臺の凭れに武者振りついて了つた。

「大丈夫だらうね。來やアしまいね」

てれ隱しにそんなことを呟いて、忙しく右左を見やつてから、倒れかゝるやうに倚椅に身を埋めた。

（あゝ〳〵。駄目だなア、俺は……）

すぐそのあとに續く自己嫌惡から逃れやうとして、いきなり腰かけの上にあがつて正座し、瞑目して、ひたすら無念無想の境にはいらうと努めた。

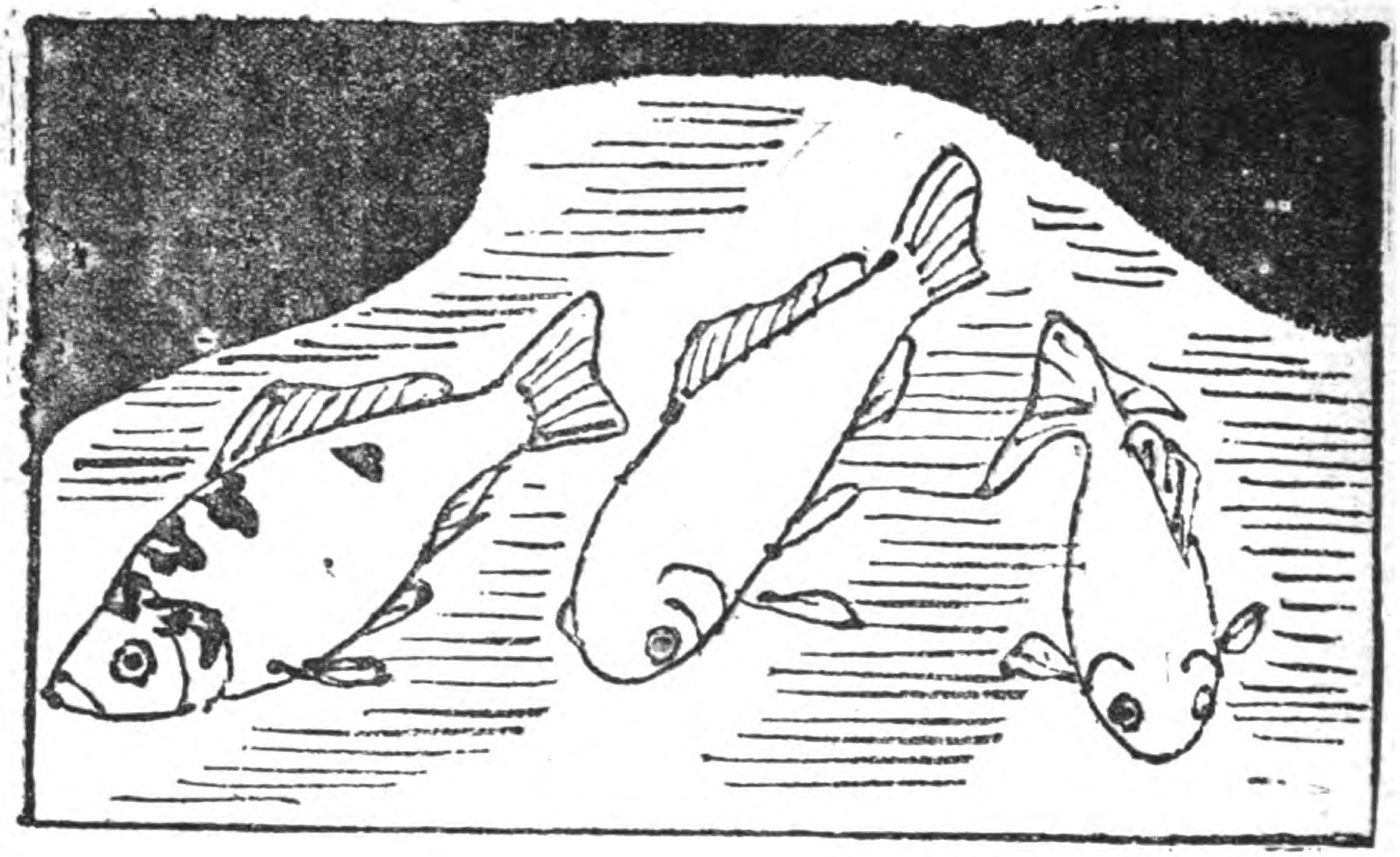
（なんだ、死ぬくらゐのこと！）

そんな虚勢を張るやうな思念ばかり群り起つて來たが、ふと、瑛龍の姿を思ひ描くと、忽ち虚勢がなくなり、實際もういつ死んでもいゝ、といふ氣になれた……。――心臟が縮まり、身うちが震ふほどの幸福感が、洪水のやうに押しよせて來た……。

瞑目端座のうちに、もうすぐ逗子の停車場に近い、最後の踏切を越えて心づかなかつた。――死よりも强いものが、肚の底に頑張つて了つたのだ。

まつたく靜まりまつた逗子の町にはいつて、間もなく昌造はわが家の玄關に立つた。戸をあけさせ、十一日ぶりの敷居を跨いではいつて行くと、思ひがけなくも、七つになる長男が、床あげのおりた寢間着の裾をづる〳〵引きずつて、妻よりも先にとんで出て來た。

……嬉しさは、すぐにも抱きしめたいばかりだつた。同時に、恐しさは、かの第三の踏切で、耳のはたで汽笛を聞いたに異らなかつた……。



償金四十萬弗

眞山青果

第二幕

時——同年閏八月七日、午後、前幕より半月ほど後。
處——江州大津宿、島津三郎の宿陣。

大津驛本陣海老屋半五郎の家。

舞臺に顯はるゝところはその書院座敷の一部と庭園。下手に廻緣、床の間つきの廣間の一隅を見せ、沓脫石、飛石あり。庭園には古雅なる雪見燈籠を置く。園内には雜木なく、淸らかに掃かれたる砂地に、物舊りたる黑松の幹數本立つ。上手に塗塀あり、中門をくゞりて出入す。正面に湖水を望む。煙波おだやかに晴れたる日。

幕明く。久光の近侍下寺源三郎、木崎篤之助、その他二三名、既に旅裝を終り或は捨石に腰掛け、或は樹下に立ちなどして發足の指令を待ちわびたる態なり。下僕二人、その主人の着衣手荷物など整理す。但し今日は京都入りの晴れの日ゆゑ、いづれも服裝をあらため、態度おのづから緊張して見ゆ。

谷山省吉、道中雙六の番付など讀みつゝ入り來る。

下寺　(草鞋を直しつゝ)何うだ。まだ御模様はないか。

谷山　まだ〳〵お鎮入りらしい。(聲を潛めて)實はな、近衞家からのお使者をお待受けになつてるのだ。

下寺　近衞家？(ビックリして、見上げる)

谷山　表面は陽明家の御使者だが、實相は畏いあたりからの御内命なのだ。道中慰勞のお言葉を賜はるさうだ。

下寺　(相手の肩をつかみ、低聲)それ、本當か。

谷山　京都の人氣は非常なもんだ。祇園の舞子どもにも、葵の縫ひある半襟などかけてゐる者があるさうだ。

下寺　嘘を云へ、こいつ——。はゝはゝ。

谷山　嘘なものか、確だ。現に昨夜、お使僧をもつて、勸修寺の宮樣から、攘夷御褒美の和歌を御上へ下されてゐるさうだ。

木崎　歌ぢやない、詩だよ。薩州の老將髮冠を衝き、天子百官危難を免る。(吟聲を發しつゝ)英氣凛々生麥の役。海邊十里……。

谷山　(東座敷を憚りて、叱る)これ、聞える！

木崎　(わざと高吟す)英氣凛々生麥の役。海邊十里月ゝ寒し。はゝはゝ。

木崎、興奮してやにはに下寺にしがみつき、その腕を引張り廻す。

下寺　(引擦られつゝ)何をする。馬鹿、馬鹿々々。

木崎　はゝはゝ。(たゞ無性に引張り廻す)

一同顔を見合はせて、譯もなく大笑する。

下寺　然うするとこりや、御所參内の噂も實現するぞ。

谷山　無論だ。天盃頂戴と來るのが順序さ。御上にも内々、その準備をなされてゐるらしい。木崎何うする、何うする。

木崎　ほツ、ほう、ほ——。

木崎、悦喜に溢れて、誰かの體に抱きつくべく、兩手を鳥の翅にのばして、體にて拍子をとる。

下寺　舍せよ、こいつ。(木崎を避けつゝ)するとおれ達も、日の御門をくゞるのだ。素袍ぐらゐ着られるかな。はゝはゝ。

谷山　はゝはゝ。沓をはいて、お公卿さまだ。

木崎　ほツ、ほう、ほ——

下寺　厭なやつだ、舍せよ。(木崎を押退け)然し、それだと、長州藩が默つてはゐまい。必ず、むくれ出して來るぞ。

谷山　もう既に、だ。高杉や久坂の過激黨は、公武合體論の長井雅樂を排斥して、尊王攘夷の藩論を主張してゐるさうだ。

下寺　久我岩倉の佐幕派の公卿はみな蟄居落飾を命ぜられる。土佐の勤王派も、武市半平太を首領に上洛する。薩摩の世界はこれからだ。關ケ原以來の鬱憤を晴らす時が來たぞ。はゝはゝ。

木崎　ほツ、ほう、ほ——。(笠を脱いで踊り出す)

下寺　馬鹿！

一同、勇み立ちてドッと笑ふ時、那珂原嘉左衛門、違棚に置き忘れたる印籠をとりに、入り來る。

谷山　來たぞ、來た〳〵。（那珂原を見て囃く）御家中一の好い男。

木崎　はゝはゝゝ、天盃々々。日本一番、天盃男！

一同、肢など突いて又笑ふ。那珂原、聞咎めて立止まる。

那珂原　何に——？（神經質に眉を顰めて）何がおかしいんだ。

下寺　みなお主の都入りをかけなるいんだよ。諸國有志が京都に集つて廣大もない評判なさうだぞ。

木崎　裸で歩いても薩摩の那珂原嘉左衛門だ。はゝはゝゝ。

那珂原　又それを云ふ。（赫として足踏み）笑つてばかりは居ないぞ。

下寺　何を怒るんだ。みな賞めてるんぢやないか。

那珂原　（目に涙を浮べ、ひとり呟くやうに）口にすべきことゝ、すべからざることがある。あまり人を……玩弄にするものぢやない。

木崎　誰が玩弄にした。

那珂原　知つてるよ。蔭で貴公等がおれを嘲つてゐるのは知つてゐる。だから、おれは一言も、自慢らしいこと齒の外へ出したことがないのだ。それを貴公等勝手に評判して、人を好い嘲弄坊にしてゐる。

下寺　貴様また、甲斐田のやつと口論したのだらう。

那珂原　おれはあの時、たゞそこに居合はせたゞけなのだ。外の者がおれば、外の者が……遣つたに相違ない。（喉をコクリと鳴らして差含む涙を嚥み）ほんの出合頭だ。功名とも、手柄とも……思つてゐはしない。それをみんなは若輩だと思つて……侮るんだ。

下寺　然し、その場合に居合はせたことが手柄だらう。

那珂原　運だ。運は手柄ぢやない。（投げ付けるやうに云つて、外方を睨みゐる）おれは仕合者にはなりたくない。

谷山　成りたくなくも、成つてるのだから仕方がないな。これまで道中の評判は何うだ。異人退治の大立者。京都はまた一層人氣が立つてゐるぞ。

那珂原　（腕組みして一箇所を睨み）おりや嫌ひだ！

谷山　可笑しな男だ。お主この頃何うかしてゐるぞ。

那珂原　嫌ひだ。嫌ひだ！（泥醉に叫んで、激しく頭を振る）

下寺　那珂原。（傍に腰掛けて）何も貴公は甲斐田に斟酌するところはない筈だ。なる程甲斐田は水戸學かぶれ東湖仕込みで、藩内勤王黨の首唱者かも知れないが、異人を斬つて攘夷事實の先鋒をなしたのは貴公だ。諸人がその實功を認めるのは素よりその筈だ。

那珂原　（齒を鋸くやうにして、相手を睨み）それを云ふなと云ふんだ。

下寺　西郷大久保の兩先輩を水戸勤王黨に結ばせたのは、彼と樺山三圓の働きなのだ。又、彼の實弟有村治左衛門は水戸浪士の櫻田

艱難に加はつて、王事のために死んでゐる。彼が功名にあせつて、始終焦燥するのも無理はないのだ。

木崎　それは、誰でも知つてることだ。それだけに、尚ほ持重するがいゝ。那珂原などに當り散らして、大人氣がなさ過ぎる。

那珂原　（俯向きて、獨語のやうに）おれは國へ歸る京着の上は、直ちにお暇を願つて、國へ歸る。

下寺　甲斐田にしてもそしられるよ。斬つたのは高で異人二人だが、斯うまで天下有志の輿論を鼓舞しやうとは思はなかつた。幕府にしても、今度こそ難關だ。英吉利公使から嚴重な談判をうけて、役人ども母衣を捲いてゐるさうだ。

谷山　東禪寺以來度々の殺傷だから、今度は異人側も強硬に出るに相違ない。下手人引渡しは無論のこと、國際公法の明文によつて必すや賠償金の請求にも及ぶだらう。

木崎　そしてその尻を薩摩に持つて來得ないのだから、徳川の權威も地に墜ちたものだ。德川將軍も、先づ十四代かな。はゝはゝゝ。

谷山　眞實だぞ。この際は暴れるだけ暴れる方が得だ。無理を云ふほど、こつちの勝利だ。

下寺　それに京都へ入つてしまへば、こつちは入王だ。天下に恐いものはないと來てゐる。

谷山　那珂原、しつかりしろ。こゝはお前に乞目が出てゐるのだ。

一同、愉快さうに聲を揃へて笑ふ。那珂原、ひとり悄然として俯向きゐる。木崎それを見て、剽輕さうにそつと那珂原の背後に廻り、羽交締めにするやうにして囁く。

木崎　しよげるな。その代り京都に行けば、おれが會はしてやる。

那珂原　（不審さうに顏を上げ）何——？

木崎　忘れたか。それ、祇園の——。はゝはゝ。

那珂原　祇園？

木崎　こいつ、恍けてゐやがるわい。はゝはゝ。

那珂原、眞赤になつて怒り、力まかせに木崎を突飛ばし、睨みゐる。一同その眞劍さを見て、又ドッと笑ふ。

甲斐田原次、入り來る。旅裝、草鞋ばき。

甲斐田　何んだ、何んだ〳〵。（胡散さうに一同を見廻し）何が可笑しい。

下寺　何んでもないよ。（煩さゝうに横を向き）木崎が那珂原をからかつてゐるのだ。

甲斐田　那珂原——。（忌々しげに凝つと見てから、縁側に來りどッかと腰掛け）そして出發は何うなるんだ。何時まで隙取るんだ。

下寺　御上次第だ。われ等の自由になるものか。

甲斐田　那珂原。聞けば御上には、近衞家のお使者をお待受けになつてゐると云ふではないか。それでも貴様、隱すのか。

那珂原　（屹と、唇を尖らし）おれが、何を隱した。

甲斐田　近衞家のお使者には、藤井良節が既にわざゝゝ熱田の宿ま

で出迎へてゐる。今日、京都入りのこの場合になつて、又々近衞家からの御使者と云ふのは、これ容易ならぬ御用向と思ふ。

那珂原　それおれに責めて何になる。おれは、お駕脇に扈従するだけの役だ。

甲斐田　強情はるな貴樣。（唇を嚙み）それなれば何故名古屋から早飛脚をたてゝ、京の奧服所へ、衣類襦袢、肌のものまで誂へたのだ。

那珂原　それはおれの勝手だ。その差圖までは受けない。

甲斐田　飽迄も貴樣……おれを疎外する氣だな。

那珂原　それほど疑はしくば、大久保どんに訊ねたらいゝだらう。われ等はたゞ、彼の人の支配に從つてゐるのだ。

甲斐田　大久保とおれとは、說が合はないのだ。彼はたゞ、辯口の才人だ。

那珂原　例へ辯口の小才子でも、掌るところの職務には責任はあるだらう。その責任者を責めないで、おれに難題をいふと云ふ法はない

甲斐田　難題？

那珂原　難題でなければ、邪推だ。

甲斐田　邪推だ——？（那珂原を睨む眼に、次第に涙浮ぶ）

那珂原　然うではないか、人が知らぬと云ふものを、何時まで、煩さく、根掘りするんだ。假りに御上に、天盃頂戴の御盛儀があるとしても、何んでわれわれ式まで、その御內談があるものだ。

甲斐田　そんなお主、なぜ晴衣裳など注文した。

那珂原　又それに絡まる。（顏を顰め）それは自用だ。

甲斐田　然し——。

那珂原　最う好いではないか。おれは國へ歸るんだ。

那珂原、煩さゝうに突ッ放して一點を見詰める。甲斐田　唇を顫はして凝つとその横顏を睨みつける。

下寺　甲斐田。貴公も少ししつこいぢやないか。君のこれまでの働きは誰でも知つてゐる。今度御上が大原三位卿のお供をして、頑冥な幕府役人の權柄を挫き、勅命遵奉の事實を天下に表明させたのは、時勢の然らしむるところとは云ひ條、これ第一には貴公等の殊勳なのだ。貴公等十餘人が決死の覺悟で、桔梗門外に閣老どもの退城を脅かしたので、幕府方は急に戰慄して薩摩藩を恐れるやうになつたのだ。

甲斐田　（那珂原を睨みたるまゝ）その時、市藏は何んと云つた。輕擧專行、大事を誤ると叱つたではないか。

谷山　君の熱情はみな認めてゐる。少し雅量かあつてもいゝと思ふな。若輩の那珂原に、功名をさせて置いてもいゝではないか。功名は一人一己のものではない、島津家全體の手柄なのだ。

甲斐田　（腮にて那珂原を示し）貴公等は、おれがこいつの手柄を嫉んでゐると思ふのか。

下寺　嫉むとは思はんが……、那珂原も困つてゐるよ。

甲斐田　然うか。然う思はれても仕方がない。(大息して那珂原より目を離しつゝ)然しことはつて置くが、若し御上の御所參內が事實となつて、萬が一にもおれがその人選に洩れるやうなことあれば、その時こそ、おれはこいつと刺違へて死ぬぞ。(決然として叫ぶ)

下寺　(驚き、見上げて)詰らないことを云ふなよ。

甲斐田　天盃頂戴の從列には、人數に制限があるのだ。おれは例へ草履取になつても、禁裡のお庭の土を踏まずにゐない。何んのために、命を投出し、弟を殺し、今日まで苦しんで來たのだ。おれの畢生の念願も信仰も、懸つてたゞこの一事にある。この名譽のためには、西郷でも、大久保でも、おれは何人をもゆるさないのだ。

那珂原、目映しげに俯向く。一同、粛然として聞く。

甲斐田　那珂原よく聞いて置けよ。おれはお主などゝ功名榮譽を爭ふこゝろは微塵もない。然し微禄な茶坊主時代から、唯一念、天子に召さるゝ天下有用の男子として生きやうと冀つて來たこの信條、この信仰だけは何人の前でも譲らないのだ。

那珂原　全く僕は大久保どんから內命など……

甲斐田　最う好い。貴公等の小細工など、分つてゐる。

甲斐田、草鞋のまゝ縁側に胡坐し、グワと腕組みして一[illegible]所を睨むうち、熱涙潸然としてその頬に流れる。

一同も言葉なく、互に顔を見合す時、前場の高崎三六(道中役)欣々然として大聲に觸れつゝ入り來る。

高崎　照明家の御使者が見えたぞ。間もなく御發足だ、御發足だぞ。みなその用意は好いか、好いか。(と中門の方へ通り過ぎんとす)

谷山　高崎、高崎。

高崎　(振り返つて)何んだ。

谷山　貴公道中を檢分して、洛中の景氣は本當に立つてるか。見ない分にや話にならんぞ。こんど橋蹴上の邊からかけて、街

高崎　道の兩側はびつしり人垣だ。殊に三條邊寺町通りの御順路などは、軒並に提灯をつるし、御行列拜見の貴賤老若が雜沓して、御駕の御通行もいかゞと危ぶまれるほどだ。御威光々々。はゝはゝ。

谷山　最前中山どのゝ話では、御道筋が何うとか云つてゐたが、御變更の御模様でもあらせらるゝか。

高崎　さ、それはまだ聞かない。然し事によれば、錦の御屋敷に入らせらる前、或は直ちに近衞家に伺候して、着到の御挨拶などあらせらるゝのではないか。只今のお使者はそのお打合せかも知れぬ。

那珂原、甲斐田、その説を聞いてドキリとする。

高崎　何しろ斯う云ふ日の道中役ほどみじめなものはない。早朝より京へ二度の往復で、體がヘト／＼になつた。はゝはゝ。然しまたその埋合せもある。御所近く今出川邊には輕い身分の官女だちが被衣姿で徘徊して、薩摩侍と見ると目引き袖引きぢや。みな下着のふくろびなどに、氣をつけて行けよ。はゝはゝゝ。

一同、勇躍してよろこぶ。那珂原と甲斐田、強いて平靜を裝ふ間にも、また互に相窺はんとするところ見ゆ。

高崎　(笑ひながら中門を出でんとして、甲斐田に心づき戻り來る)甲斐田。貴公にも困つたもんだ。何んと云ふことをするのだ。

甲斐田　何んだ。

高崎　何んだぢやない。貴公新助に、酒を盛つたと云ふではないか。又喰ひ拂つて、御陣屋前をウロ／＼してゐるぞ。

甲斐田　昨夜問屋町で見かけて、餘り氣の毒に思つたから酒を買つたのだ。

高崎　昨夜ばかりではない。道中宿々でも、貴公度々彼と一緒に醉つたと云ふではないか。そんな馬鹿な眞似をするから、彼奴増長して御供揃のなかに紛れ込んで、段々これまで跟いて來たのだ。それにこの頃は、わが身も恥ぢず行列の後になり先になり、わざと人目に立つやうな振舞をしてゐる。

甲斐田　それは大久保が、彼の顏を見るたびに、小使錢など惠んでやるためだらう。おれの知つたことではない。(空嘯きゐる)

高崎　大久保どんは持餘してゐるのだ。彼にヒヨロ／＼立ち廻られては、幕府に屆書の手前もあつて、なにかと事が面倒になるゆゑ、旅用をくれて遠國に立退かせやうとしてゐるのだ。

甲斐田　(嘲笑つて)然う思つても、なか／＼立退きはすまい。

高崎　何？

甲斐田　兎に角彼も島津家のためには重要な人間だ。これほど天下の耳目を震動させた生麥事變の發頭人だからなあ。はゝはゝゝ。

那珂原、屹と唇を嚙んで甲斐田の顏を睨む。

高崎　それに初手はたゞ先非後悔して、岡野再興の嘆願だけだつたが、この頃は次第に野太くなつて、脅迫がましい態度さへ見える。わざと酒臭くなつて、御本陣の表玄關から名乘をあげて推參するやうになつた。

甲斐田　然うなくては、金にならないからなあ、はゝはゝ。自分でも云つてゐたよ。泣いて賴む金は貸手がなく、嚇してとられる金は澁々ながらも出すから面白いと。五十三次を供について、段々路銀をかさねるうちに、自然商賣功者になつたのだらうよ。

高崎　噂には聞いてゐたが、今日初めて服裝など見ると、朱鞘の大小に白袴、鐵扇など携へて、まるで諸國有志の浪人とも云ふべき容態だ。水戸流に稗心鼻緒の高足駄など引摺つてゐた。

甲斐田　はゝはゝゝ。ありや熱田邊で用意したのだ。

那珂原　そ、それも好いが、御上が桑名に御着陣の時だ。（唇を顫はしつゝ、堪えかねて口を出す）

甲斐田　何？（鋭く那珂原を見る）

那珂原　（甲斐田の視線に辣みつゝも、強ひて反撥しつゝ）御旅館近くも憚らず、飯盛女郎を側に引きつけて、生麦の下手人はおれだと……云つたさうだ。云つて、賣女どもに威張つてゐたさうだ。（と急き込む）

甲斐田　それが何んだ。彼が斬つたと云つては可けないのか。

那珂原　う、然し――。（口に蓋されたやう相手を見る）

甲斐田　何が悪いんだ。それが新助の罪になるのか。

那珂原　おれは何も……一身のことを云ふのではない。島津家一藩の名譽を考へるだけなのだ。あんな蛆虫、蛆の虫のやうなやつが……御上のお名前までを輕々しく、賣女飯盛づれの前で……。

甲斐田　云はせるやう、その成行にはからつたのは誰だ。新助の方から好きこのんで、自分が下手人だと云ひ出した譯ではないのだ。

この時、中門の外に人聲騒く、下寺、木崎等の若侍は、門を出入して何か騒ぎゐる。發足の刻限近づけるなり。

高崎　（やゝ持餘しつゝ）甲斐田、然し貴公も然う面白づくに新助をけしかけることもあるまい。京都へあんな者を連込んで何うする氣だ。彼奴は寺田屋騒動の時、言語道斷の失態を演じてゐるのだ。

甲斐田　大久保に委せて置け。大久保は才人だ。はゝはゝゝ。

高崎　京都には諸國勤王黨の有志者が集つて、盛んにわが藩に對して歡迎の用意をしてゐるんだ。そんな間にあいつが飛び込んで、――又一藩の名譽を傷けるやうなことがあつたら何うする。彼奴は捨鉢だ、酒に醉つて何を仕出來すか分つたものではない。

甲斐田　はゝはゝゝ。大久保がゐるよ。はゝはゝゝ。

那珂原、口惜しさうに涙を湛へて甲斐田を見詰る時、門外に人聲騒がしく、拍子木の音など聞ゆる。

谷山　高崎、高崎。（と中門の外より呼ぶ）お使者に歸られたぞ。程なく御發足だ。前後に觸れてくれ。

高崎　おゝ、心得た。そして御模樣換えの御樣子はないか。

谷山　足下の云つた通りだ、直ちに陽明表御門から近衞家を御訪問なさるゝさうだ。或はその足で、御參内なさるかも知れないぞ。

高崎　何、御參内？

門外にドツと若侍等の歡聲あがる。高崎、欣喜しつゝ走り去る。舞臺には那珂原と甲斐田、たゞ二人殘る。使者の歸館とおぼしく、外には轡の音、馬の嘶き聞ゆる。拍子木の音、金棒の音。その間を兩人は互に警戒しつゝ、無言。

　やがて那珂原、そろ〳〵と立上がる。

甲斐田　（屹と見て）那珂原、何處へ行く。

那珂原　行列に隨ふのだ。

甲斐田　動くな。

那珂原　何故。

甲斐田　貴様大久保に會ふのか。卑怯な眞似をするな。

那珂原　……………

　大久保市藏、近衞家の使者を見送りに立ちたるこゝろにて、こゝに通りかゝる。紋服。

大久保　（兩人を見て、苦々しげに）甲斐田。また啀み合ひか。日が長くて結構だのう。

甲斐田　うむ、おれは隙人だ。爲る仕事がないのだ。（大久保を見て少し照れながらも、減らず口に云ふ）

大久保　京都には長州もゐるぞ、土州もゐる。みな相應な人物があるのだ。

甲斐田　それが、何んだ。

大久保　事は順路に進む時、却つて腹帶を締めなければならぬ。喋々といきれたつて、薩摩を孤立に陷れないやうにするがいゝ。

　大久保、不快さうに呟きて、奥の方に去らんとす。

甲斐田　大久保。大久保。

大久保　何んだ。

甲斐田　道路の風說に聞けば、御上には天盃頂戴の晴れの儀式があるやうに承つた。それは事實か。

大久保　或ひは、その順序になるかも知れないと思ふ。

甲斐田　或ひは、なるかも知れないと云ふのか。言葉を濁すな、はつきり云つて貰ひたい。

大久保　役人として、この以上を洩らすは機密なのだ。

甲斐田　御所のお臺所御門の門へ入るのは、用人二人近侍八名草履取一人、これが制限だと承つてゐる。その人選はもはや濟んだのか。

　那珂原も屹として、不安さうに大久保の顏色を窺ふ。

大久保　（甲斐田の氣相を見て、微笑）それを聞いて何にする。それは御上の權柄に屬することなのだ。憚り多いことを云ふな。（歩み出す）

甲斐田　待て。おれは聞いてるのだ、それを聞くのだ。（大久保を睨む）

大久保　その時になれば、分明することだ。

甲斐田　待て、大久保。（大刀を攫んで、草鞋ばきのまゝ大久保の前に立塞り、目を突固めて）用人二人、これは分つてゐる。近侍三名、奥小姓一名、これも大抵當りがつく。御供目附二名、草履取、この三名が合點ゆかぬ。誰と誰だ。その點掛けが聞きたいのだ。

大久保　それをおれが、脅かされて云ふと思ふのか。

甲斐田　云はせる。命でも、刀でも……何んでも云はせる。

大久保　甲斐田。お主はまだ勤王の舊い常式に醉つてゐるぞ。今日の朝廷はもはやお伊勢様ではない。生きた勤王が必要なのだぞ。天子様は現人神だ。やはり同じく人間に生きてござると思へ。

甲斐田　（その意味を解しかねて）それが、何んだ。

大久保　ちよッ、御用が多い。退けく。（掻き退けて去らんとす）

甲斐田　大久保！

甲斐田、大刀を投げやにはに兩手にて大久保の手頸を摑み、ぶら下がるやうにして相手を見詰める。兩眼にハラハラと熱き涙溢るゝ。

大久保　それともお主、その人選に洩れたくないのか。

甲斐田　大久保——（手頸を一つグイと引いて、涙聲を搾る）

大久保　（少しく揶揄の表情にて）貴公、頼むのか。

甲斐田　何……。（手を放す）

大久保　貴公は大久保に、その推擧を頼むのかと聞くのだ。

甲斐田　（かッとして）何時頼んだ。何時おれ、頼んだ。（と面を逸らす）

大久保　はゝはゝ。頼まなければいいのだ。おれは貴公に詰問をうける筈はないのだ。（低く笑ひつゝ、悠然として衣紋を直してゐる）

甲斐田　大久保！

大久保　兎角、御家の勤王は形式に拘泥し過ぎる。水戸學崇拜の餘弊なのだ。天皇を偶像にし奉りては相濟まぬことだ。大日本國の天皇は、上古神代の時代から、いつも政治大權の主體であらせらるゝことを忘れるな。眞の勤王とは、天子を政治的に輔佐し奉ることなのだ。

甲斐田　もう好い、分つた。頼まない。うぬが多少辯口にまかせて、その老成家ぶりは何んだ。人のことを云ふより、自分の頭の蠅でも逐へ。

大久保　大抵逐つてゐるつもりだが、やはり留つてゐるか。

甲斐田　新助のあのざまは何んだ。その始末でもしろ。

大久保　貴公また……。新助を連れて來たのか。

甲斐田　玄關前にうろついてゐる。今日はお上の京都入りゆゑ、是非とも大久保に面談して頼みたいと云つてゐる。

大久保　あいつにも手甲擦る。まだ御行列についてゐるのか。

甲斐田　貴公が責任者だ。何んとか振り方をつけたらいゝだらう。見てゐるよ、謂ゆる才人のなされ方を、われ等愚者は拜見してゐるよ。

甲斐田、足音荒らく立去る。大久保、何か考ふる。那珂原、それ迄默然として俯向きゐたるが、突と立ち上つて、表玄關の方に走り出んとす。

大久保　(顔を上げ)那珂原、待て。手荒なことしては却つて可けない。

那珂原　然し、餘りと云へば、性懲がございません

大久保　おれの失錯のひとつだ。今日は會つて、軟かに說き聞かせて見やう。彼とて眞逆に、本性を失つてゐる譯でもない。多忙にかこつけて、これまで面會を避けてゐたのが惡かつたのかも知れない。

那珂原　會へば腹が立ちます。大井河邊までは殊勝らしく、たゞ絕家再興の歎願だつたが、この頃は强迫がましい態度さへございます。それに、今日は少し醉つてもゐます。

大久保　僕一人で會はう。穩かに連れ込んでくれたまへ。

那珂原　然やうでございますか……。

大久保　それから、何うするのだ。土州長州初め諸國の有志輩が一團となつて、お主に歡迎の盃を獻じたいとて、高觀音の茶見世に待ち受けてゐるさうだ。わしのところへもその案內があつた。

那珂原　わたくしは、參りません。

大久保　然し然うもなるまい。先方は貴公の都入りを祝して、わざあざ遠路出迎へてくれるのだ。他藩の感情を害しても困るたらう。

那珂原　(俯向きて、淚含み)わたくし參りません、參りません。

那珂原、眼にて淚を拂ひつゝ、去り來る

大久保、坐る。外には供揃の拍子木の音、遠く近く聞ゆる。

やゝ間ありて、岡野新助、中門より入り來る。髮を浪人風の大髻に結ふて、麻のぶッさき羽織、白小倉の袴。科心絹の高足駄、毛皮の胴亂を下げ鐵扇を持つ。

新助、少し醉つたる步調にて、眦へ揚枝にて昂然として入り來りしが、そこに端然と坐れる大久保を見て、やゝ狼狽の態あり。左右なくは坐につきかねて、朱鞘の大小を袖にかくし、身を窄らしくして庭に立ちゐる。

大久保　(目を閉いて新助を見る)おゝ立派々々。新助、すつかり容態だけは出來たの。はゝはゝゝ。今日はゆつくり話したい、上れ。

新助　は……。

大久保　何時も御上御用で、懸違ふてゐた。今日は是非ともとのことゆゑ、時間をつくつて話すのだ。誰もゐない、上つたら何うだ。

新助　は……。(腰低く、幾度も頭を下げて躊躇ひゐる)

大久保　馬子にも衣裳と云ふか、本當だのう。然うも拵い繕つたところは、古物商人に見せても、天下の志士だ、脫藩者だっはゝはゝゝ。

新助、身をすくめて俯向いて、淚含みゐる。

大久保　岡野、何を遠慮してゐる。上れ、上れ。今日は存分貴公の中

分を聞いて、市藏も再考しやうと思ふのだ。姿にも似合はぬ、何んの躊躇だ。傀人形が、夕立にあつてゐるやうで、見つともないぞ。はゝはゝ。

新助、屹と決斷してツカ〳〵と縁側に上り、大久保と對坐してドカと胡坐を組む。

新助　（大久保を正視して）市藏どん、貴公それほど思慮のない人か。（鋭く相手を睨みつくる）

大久保　（意外の態度に驚きつゝ）出抜けに、何を云ふ。

新助　貴公はこの姿など愚嘲してゐるやうだが、事實貴公にはおかしく見えるか、おれには、新助には……悲しいことだ。（目に涙を浮べて）おれは自分の姿を思ふと……涙が出る。

大久保　ほう。

新助　今日は最後の内願に來たのだが、その前に貴公の蒙昧をひらいて置く。今、岡野新助とは何者だ。生麥街道に、外國人二名を殺傷し、それなり逐電した天下の尋ね人だぞ。その岡野新助とは誰だ。おれだ、卽ち、おれが生麥變事の下手人なのだ。

大久保　はゝはゝ。熱に浮かされては可けない。誰も貴公などを、探索してゐないではないか。

新助　分らぬ男だ、聞け。おれはその後の外國談判の模樣も聞いてゐる。外國公使からの損害賠償要求の經過も聞いてゐる。英吉利政府から日本大君への要求は、償金四十萬ドルラル、日本貨幣にして黃金三十萬兩の要求なさうだ。それを拒めば直ちに開戰に及ぶ用意があるさうだ。その評判は貴公も聞いてゐるだらう。

大久保　醉つてゐるやうだぞ、臭い。

新助　おれは幕府の探索人だから、それで、萬一召捕られる日の最後を飾るために、こんな朱鞘の……案山子のやうな眞似をすると見るなら、市藏、貴公の目はあまりに淺はか過ぎるのだ。（鋭く、一氣に叫ぶ）夜夜中、ふつと、木賃宿でもいゝ、宿場女郎の廻し部屋でもいゝ、ふつと酒が覺めて目をあいた途端に、おれは岡野新助だ、異人殺傷の下手人だと思つて見ろ、おれのための償金、おれのための戰爭、日本全國はおれのために斯くも沸騰し混亂してゐると考へて見ろ。そのおれの、岡野新助が、澁團扇のない厄病神のやうに、編笠かたむけ尾羽うち枯らして、そこに立ち、こゝに佇み、逐はれ犬のやうなわが姿を、道中の水溜に映して見られると思ふか。おれはおれと思つて、こんなものを着るのではない。生麥の下手人、岡野新助にこの姿をさせてゐるのだ。

大久保　はゝはゝなる程、それは分らないでもない。

新助　貴公笑つてゐるか、おれは苦しいのだ。岡野新助がおれだと考へる、その事に苦しんでゐるのだ。

大久保　時刻が過ぎる。そして内願と云ふのは、例の事か。

新助　最う頼まん、頼まない。貴公などに人間のこゝろの奥底などは

分らないのだ。頼まん、え丶頼まない。(兩手に膝頭を擱み、顫えゐる)

大久保　(やゝ持餘しつゝ)頼まぬとあればそれ迄だが、貴公甲斐田に向つて、今日は京都入りの大事の日ゆゑ……。

新助　(相手にかぶせて)おれはこの春、京都で身をしくじつてゐる。酒と女に大事を忘れて、一生の失策を演じてゐる。友人朋輩等のこの勇ましい御奉公を見るにつけても、おちぶれはてた自分が悲しく……今日こそこゝろを入れ替へて、生れ換つた新助にならうと思つて來たのだ。然し、然し、頼まない。もう頼まない。

大久保　身を悔むなら悔むやうに、顯はしやうもあるものだ。途中宿場々々で、飯盛女郎に溺れながら、何が改心だ。何が悔悟だ。

新助　(口惜しさうに歯を噛んで)貴様、然う云ふやつだ。おれはなる程、女に弱い、酒に弱い。然し、まだ人間のこゝろは失はない。貴公のやうな、冷刻、無情な男ではないつもりでゐる。

大久保　冷刻？ おれを云ふのか。

新助　當り前だ。おれをこの姿に、この地まで行列のあとをつけさせたのは、みな貴様の無情からだ。

大久保　(乾として)何を云ふ。聞き捨てにはならんぞ。

新助　何うせ事を頼む貴公ではない、云つて聞かせやう。

大久保　(引入られて。坐を進め)聞かう／＼、聞くぞ。

新助　最初おれは、程ケ谷宿で貴公から三兩の金を貰つた。悄然として本陣を出た。泊るところがない、話す人もない、犬が吠える、雨が落ちて來た。おれは町はづれの煮賣茶屋に腰掛けて、暫くぼんやりと腕組みしてゐた。考へてはてしのある事でもない、おれは久しぶりに身についた金を思出して、酒を二合暖めさせた。胸がむしやくしやするから、又二合飲んだ。又二合、又二合、おれは飲んだ。飲めば本性のなくなるおれだ、何時か神奈川驛に引返して、そこの女郎屋の二階に底抜け騒ぎをして遊んでゐたのだ。

大久保　新助、待て。

新助　聞け。翌朝目を覺ますと、三兩の財布は底を拂つて小錢四五十文殘つてゐるだけだ。おれはその時、部屋の砂壁を睨んで……心から泣いた。(涙聲)一門同藩に見限られ、毛虫のやうに嫌はるゝこの身になつても……まだこの病がやまぬかと、嘘でないぞ、おれは臂に食ひついて泣いた。女郎屋を出て、江戸の方へと歩き出したが、悔恨に身をせめられて、つる足もトボ／＼と歩んだ。ある並木の下に立つて、つく／＼と考へた。朋友大久保の親切に對しても、このまゝ江戸へ歸つては濟まぬ。行列のあとを追掛けて、一度大久保に面會し、心から身の不始末を詫びたいと思つた。その時貴公等は小田原泊りだ。おれは終日飲まず食はずで、たゞ貴公に身の腑甲斐なきを謝まりたさに、背

竹を杖にして、行列のあとを追駈けたのだ。貴公の宿陣伊勢屋の戸を叩いて取次を頼むと、貴公は士師を頼んで又五両の金を出し、まるで腫物にでもさはるやうな扱ひで、おれを宿屋から追出したのだ。

大久保　お主その晩も、小田原で遊興してゐるのではないか。

新助　身を悔むあまりに呷りつけた酒が……、その晩もおれを狂はせたのだ。翌朝目が覚めると、又悔恨だ。大久保に済まない、おれは悪いと……心底から泣けるのだ。

大久保　はゝはゝゝ。

新助　（屹と睨んで）貴公は、弱い者の悔恨が……いかにその心を蝕んで苦しむか、その苦しさを知らないのだ。おれはその日も又、箱根の山を越えて、三島宿まで貴公のあとを追ふたのだ。

大久保　（耳を立て、外の拍子木を聞き）御出発のやうだ。用を聞かう、用向を話せ。（立ちかける）

新助　なる程、貴公は御用繁多にもあらう。おれの悔恨を聞いてくれるのは、たゞ一時の誠意なのだ。おれは貴公に赦されなくとも、自分の悔恨を聞いて貰ひさへすれば、小田原からでも、三島からでも、必ず江戸に歸つたのだ。それを貴公はたゞ避けて、蚊蠅に追はれるやうに、おれを避けて來たのだ。

　行列ざに、人々の勇ましく立ち騒ぐ聲聞ゆる。大久保、立つ。

大久保　新助、御發足だ。立て、立て。

新助　今少しだ。話せば頼まれないでも立つのだ。

大久保　えゝ、今御行列が出るのだ。立たぬと貴様、引括らせるぞ。

新助　おれは薩摩の藩を食むものではない。貴公等の自由になるものではない。

大久保　立て、立て！

新助　喧ましい。おれは動かない！

　拍子木の音、大久保、苛立つ。新助、動せず。

　人馬の音

（幕）

西方の人

芥川龍之介

1 この人を見よ

わたしは彼是十年ばかり前に藝術的にクリスト教を——殊にカトリツク教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に殘つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種はせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはクリスト教の爲に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはやつとこの頃になつて四人の傳記作者のわたしたちに傳へたクリストと云ふ人を愛し出した。クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出來ない。それは或は紅毛人たちは勿論、今日の青年たちには笑はれるであらう。しかし十九世紀の末に生まれたわたしは彼等のもう見るのに飽きた、——寧ろ倒すことをためらはない十字架に目を注ぎ出したのである。日本に生まれた「わたしのクリスト」は必しもガリラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと實のつた柿の木の下に長崎の入江も見えてゐるのである。從つてわたしは歴史的事實や地理的事實を顧みないであらう。（それは少くともジアナリステイツクには困難を避ける爲ではない。若し眞面目に構へようとすれば、五六冊のクリスト傳は容易にこの役をはたしてくれるのである。）それからクリストの一言一行を忠實に擧げてゐる餘裕もない。わたしは唯わたしの感じた通りに「わたしのクリスト」を記すのである。嚴しい日本のクリスト教徒も賣文の徒の書いたクリストだけは恐らくは大目に見てくれるであらう。

2 マリア

マリアは唯の女人だつた。が、或夜聖靈に感じて忽ちクリストを生み落した。我々はあらゆる女人の中に多少のマリアを感じるであらう。同時に又あらゆる男子の中にも——。いや、我々は爐に燃える火や畠の野菜や素燒きの瓶や巖疊に出來た腰かけの中にも多少のマリアを感ずるであらう。マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。クリストの母、マリアの一生もやはり

「涙の谷」の中に通つてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行つた。世間智と愚と美徳とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。ニイチエの叛逆はクリストに對するよりもマリアに對する叛逆だつた。

3 聖靈

我々は風や旗の中にも多少の聖靈を感じるであらう。聖靈は必ずしも「聖なるもの」ではない。唯「永遠に超えんとするもの」である。ゲエテはいつも聖靈に Daemon の名を與へてゐた。のみならずいつもこの聖靈に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖靈の子供たちは――あらゆるクリストたちは聖靈の爲にいつか捉はれる危險を持つてゐる。聖靈は惡魔や天使ではない。勿論、神とも異るものである。我々は時々善惡の彼岸に聖靈の歩いてゐるのを見るであらう。善惡の彼岸に、――しかしロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の腦髓の上に聖靈の歩いてゐるのを發見してゐた。

4 ヨセフ

クリストの父、大工のヨセフは實はマリア自身だつた。彼のマリアほど崇まれないのはかう云ふ事實にもとづいてゐる。ヨセフはどう贔屓目に見ても、畢竟餘計ものの第一人だつた。

5 エリザベシ

マリアはエリザベツの友だちだつた。バプテズマのヨハネを生んだものはこのザカリアべの夫、エリザベツである。麥の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない。我々の一生を支配する力はやはりそこにも動かされてゐるのである。

6 羊飼ひたち

マリアの聖靈に感じて孕んだことは羊飼ひたちを騷がせるほど、醜聞だつたことは確かである。クリストの母、美しいマリアはこの時から人間苦の途に上り出した。

7 博士たち

東の國の博士たちはクリストの星の現はれたのを見、黄金や乳香や沒藥を寶の盒に入れて捧げに行つた。が、彼等は博士たちの中でも僅かに二人か三人だつた。他の博士たちはクリストの星の現はれたことに氣づかなかつた。のみならず氣づいた博士たちの一人は高い臺の上に佇みながら、（彼は誰よりも年よりだつた。）きららかにかかつた星を見上げ、はるかにクリストを憐んでゐた。

「又か！」

8 ヘロデ

ヘロデは或大きい機械だつた。かう云ふ機械は暴力により、多少の手數を省く爲にいつも我々には必要である。彼はクリストを恐れる爲にベツレヘムの幼な兒を皆殺しにした。勿論クリスト以外のクリストも彼等の中にはまじつてゐたであらう。ヘロデの兩手は彼等の血の爲にまつ赤になつてゐたかも知れない。我々は恐らくこの兩手の前に不快を感じずにはゐられないであらう。しかしそれは何世紀か前のギロテインに對する不快である。我々はヘロデを憎むことは勿論、輕蔑することも出來るものではない。いや、寧ろ彼の爲に憐みを感じるばかりである。ヘロデはいつも玉座の上に憂鬱な顏をまともにしたまま、橄欖や無花果の中にあるベツレヘムの國を見おろしてゐた。一行の詩さへ殘したこともなしに。……

9 ボヘミア的精神

幼いクリストはエヂプトへ行つたり、更に又「ガリラヤのうちに避け、ナザレと云へる邑」に止まつたりしてゐる。我々はかう云ふ幼な兒を佐世保や横須賀に轉任する海軍將校の家庭にも見出すであらう。クリストのボヘミア的精神は彼自身の性格の前にかう云ふ境遇にも潜んでゐたかも知れない。

10 父

クリストはナザレに住んだ後、ヨセフの子供でないことを知つたであらう。或は聖靈の子供であることを、――しかしそれは前者よりも決して重大な事件ではない。「人の子」クリストはこの時から正に二度目の誕生をした。「女中の子」ストリントベリイはまづ彼の家族に反叛した。それは彼の不幸であり、同時に又彼の幸福だつた。クリストも恐らくは同じことだつたであらう。彼はかう云ふ孤獨の中に仕合せにも彼の前に生まれたクリスト――バプテズマのヨハネに邂逅した。我々は我々自身の中にもヨハネに會ふ前のクリストの心の陰影を感じてゐる。ヨハネは野蜜や蝗を食ひ、荒野の中に住まつてゐた。が、彼の住まつてゐた荒野は必しも日の光のないものではなかつた。少くともクリスト自身の中にあつた。薄暗い荒野に比べて見れば……。

11 ヨハネ

バプテズマのヨハネはロマン主義を理解出來ないクリストだつた。彼の威嚴は荒金のやうにそこにかがやかに殘つてゐる。彼のクリストに及ばなかつたのも恐らくはその事實に存するであらう。クリストに洗禮を授けたヨハネは檞の木のやうに逞しかつた。しかし獄中にはいつたヨハネはもう枝や葉に繁つてゐる檞の木の力を失つてゐた。彼の最後の慟哭はクリストの最後の慟哭のやうにいつも我々を動かすので

ある。———

「クリストはお前だつたか、わたしだつたか？」

ヨハネの最後の慟哭は——いや、必しも慟哭ばかりではない。太い檞の木は枯れかかつたものの、未だに外見だけは枝を張つてゐる。若しこの氣力さへなかつたとしたならば、二十何歳かのクリストは決して冷かにかう言はなかつたであらう。

「わたしの現にしてゐることをヨハネに話して聞かせるが善い。」

12　惡魔

クリストは四十日の斷食をした後、目のあたりに惡魔と問答した。我々も惡魔と問答をする爲には何等かの斷食を必要としてゐる。我々の或ものはこの問答の中に惡魔の誘惑に負けるであらう。又或ものは誘惑に負けずに我々自身を守るであらう。しかし我々は一生を通じて惡魔と問答をしないこともあるのである。クリストは第一にパンを斥けた。が、「パンのみでは生きられない」と云ふ註釋を施すのを忘れなかつた。それから彼自身の力を恃めと云ふ惡魔の理想主義者的忠告を斥けた。しかし又「主たる汝の神を試みてはならぬ」と云ふ辯證法を用意してゐた。最後に「世界の國々とその榮華と」を斥けた。それはパンを斥けたのと或は同じことのやうに見えるであらう。しかしパンを斥けたのは現實的欲望を斥けたのに過ぎない。クリストはこの第三の答の中に我々自身の中に絶えることのない、あらゆる地上の夢を斥けたのである。この論理以上の論理的決鬪はクリストの勝利に違ひなかつた。ヤコブの天使と組み合つたのも恐らくはかう云ふ決鬪だつたであらう。惡魔は畢にクリストの前に頭を垂れるより外はなかつた。けれども彼のマリアと云ふ女人の子供であることは忘れなかつた。この惡魔との問答はいつか重大な意味を與へられてゐる。が、クリストの一生では必しも大事件と云ふことは出來ない。彼は彼の一生の中に何度も「サタンよ、退け」と言つた。現に彼の傳記作者の一人、——ルカはこの事件を記した後、「惡魔この試み皆畢りて暫く彼を離れたり」とつけ加へてゐる。

13　最初の弟子たち

クリストは僅かに十二歳の時に彼の天才を示してゐる。が、洗禮を受けた後も誰も弟子になるものはなかつた。村から村を歩いてゐた彼は定めし寂しさを感じたであらう。けれどもとうとう四人の弟子たち——しかも四人の漁師たちは彼の左右に從ふことになつた。彼等に對するクリストの愛は彼の一生を貫いてゐる。彼は彼等に圍まれながら、見る見る鋭い舌に富んだ古代のジヤアナリストになつて行つた。

14　聖靈の子供

クリストは古代のジヤアナリストになつた。同時に又古代のボヘミアンになつた。彼の天才は飛躍をつづけ、彼の生活は一時代の社會的

約束を踏みにじつた。彼を理解しない弟子たちの中に時々ヒステリイを起しながら。――しかしそれは彼自身には大歡喜に滿ち渡つてゐた。クリストは彼の詩の中にどの位情熱を感じてゐたであらう。「山上の敎へ」は二十何歲かの彼の感激に滿ちた產物である。彼はどう云ふ前人も彼に若かないのを感じてゐた。この海のやうに高まつた彼の天才的ジヤアナリズムは勿論敵を招いたであらう。が、彼等はクリストを恐れない訣には行かなかつた。それは實に彼等には――クリストよりも人生を知り、從つて又人生に對する恐怖を抱いてゐる彼等にはこの天才の量見の呑みこめない爲に外ならなかつた。

15　女人

大勢の女人たちはクリストを愛した。就中マグダラのマリアなどは一度彼に會つた爲に七つの惡鬼に攻められるのを忘れ、彼女の職業を超越した詩的戀愛さへ感じ出した。クリストの命の終つた後、彼女のまつ先に彼を見たのはかう云ふ戀愛の力である。クリストも亦大勢の女人たちを、――就中マグダラのマリアを愛した。彼等の詩的戀愛は未だに燕子花のやうに匂やかである。クリストは度たび彼女を見ることに彼の寂しさを慰めたであらう。後代は、――或は後代の男子たちは彼等の詩的戀愛に冷淡だつた。（尤も藝術的主題以外には）しかし後代の女人たちはいつもこのマリアを嫉妬してゐた。

「なぜクリスト樣は誰よりも先にお母さんのマリア樣に再生をお示しになさらなかつたのかしら？」

それは彼女等の洩らして來た、最も僞善的な歎息だつた。

16　奇蹟

クリストは時々奇蹟を行つた。が、それは彼自身には一つの比喩を作るよりも容易だつた。彼はその爲にも奇蹟に對する嫌惡の情を抱いてゐた。その爲にも――キリストの使命を感じてゐたのは彼の道を敎へることだつた。彼の奇蹟を行ふことは後代にルツソオの罵り立つた通り、彼の道を敎へるのには不便を與へるのに違ひなかつた。しかし彼の「小羊たち」はいつも奇蹟を望んでゐた。クリストも亦三度に一度はこの願に從はずにはゐられなかつた。彼の人間的な、餘りに人間的な性格はかう云ふ一面にも露はれてゐる。が、クリストは奇蹟を行ふ度に必ず責任を囘避してゐた。

「お前の信仰はお前を癒した。」

しかしそれは同時に又科學的眞理にも違ひなかつた。クリストは又或時はやむを得ず奇蹟を行つた爲に、――或長病に苦しんだ女の彼の衣にさはつた爲に彼の力の脫けるのを感じた。彼の奇蹟を行ふことにいつも多少のためらつたのはかう云ふ實感にも明らかである。クリストは後代のクリスト敎徒は勿論、彼の十二人の弟子たちよりもはるかに鋭い理智主義者だつた。

17 背徳者

クリストの母、美しいマリアはクリストには必しも母ではなかつた。彼の最も愛したものは彼の道に從ふものだつた。クリストは又情熱に燃え立つたまま、大勢の人々の集つた前に大膽にもかう云ふ彼の氣もちを言ひ放すことさへ憚らなかつた。マリアは定めし戸の外に彼の言葉を聞きながら、悄然と立つてゐたことであらう。我々は我々自身の中にマリアの苦しみを感じてゐる。たとひ我々自身の中にクリストの情熱を感じてゐるとしても、――しかしクリスト自身も亦時々はマリアを憐んだであらう。かがやかしい天國の門を見ずにありのままのイエルサレムを眺めた時には。……

18 クリスト教

クリスト教はクリスト自身も實行することの出來なかつた、逆說の多い詩的宗教である。彼は彼の天才の爲に人生さへ笑つて投げ棄ててしまつた。ワイルドの彼にロマン主義者の第一人を發見したのは當り前である。彼の敎へた所によれば、「ソロモンの榮華の極みの時にだにその裝ひ」は風に吹かれる一本の百合の花に若かなかつた。彼の道は唯詩的に――あすの日を思ひ煩はずに生活しろと云ふことに存してゐる。何の爲に？――それは勿論ユダヤ人たちの天國へはひる爲に違ひない。しかしあらゆる天國も流轉せずにはゐることは出來ない。石鹸の匂のする薔薇の花に滿ちたクリスト教の天國はいつか空中に消えてしまつた。が、我々はその代りに幾つかの天國を造り出してゐる。クリストは我々に天國に對する憧憬を呼び起した第一人だつた。更に又彼の逆說は後代に無數の神學者や神祕主義者を生じてゐる。彼等の議論はクリストを茫然とさせずには措かなかつたであらう。しかし彼等の或者はクリストよりも更にクリスト教的である。クリストは兎に角我々に現世の向うにあるものを指し示した。我々はいつもクリストの中に我々の求めてゐるものを、――我々を無限の道へ驅りやる喇叭の聲を感じるであらう。同時に又いつもクリストの中に我々を虐んでやまないものを、――近代のやつと表現した世界苦を感じずにはゐられないであらう。

19 ジヤアナリスト

我々は唯我々自身に近いものの外は見ることは出來ない。少くとも我々に迫つて來るものは我々自身に近いものだけである。クリストはあらゆるジヤアナリストのやうにこの事實を直覺してゐた。花嫁、葡萄園、驢馬、工人――彼の敎へは目のあたりにあるものを一度も利用せずにすましたことはない。「善いサマリア人」や「放蕩息子の歸宅」はかう云ふ彼の詩の傑作である。抽象的な言葉ばかり使つてゐる後代のクリスト教的ジヤアナリスト――牧師たちは一度もこのクリストのジヤアナリズムの効果を考へなかつたのであらう。彼は彼等に比べれば

勿論、後代のクリストたちに比べても、決して遜色のあるジヤアナリストではない。彼のジヤアナリズムはその爲に西方の古典と肩を並べてゐる。彼は實に古い炎に新しい薪を加へるジヤアナリストだつた。

20　エホバ

クリストの度たび說いたのは勿論天上の神である。「我々を造つたものは神ではない、神こそ我々の造つたものである。」――から云ふ唯物主義者グウルモンの言葉は我々の心を喜ばせるであらう。それは我々の腰に垂れた鎖を截りはなす言葉である。が、同時に又我々の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。のみならずこの新らしい鎖も古い鎖よりも強いかも知れない。神は大きい雲の中から細かい神經系統の中に下り出した。しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる。クリストは勿論目のあたりに度たびこの神を見たであらう(神に會はなかつたクリストの惡魔に會つたことは考へられない)。彼の神も亦あらゆる神のやうに社會的色彩の強いものである。しかし兎に角我我と共に生まれた「主なる神」だつたのに違ひない。クリストはこの神の爲に――詩的正義の爲に戰ひつづけた。あらゆる彼の逆說はそこに源を發してゐる。後代の神學はそれ等の逆說を最も詩の外に解釋しようとした。それから、――誰も讀んだことのない、退屈な無數の本を殘した。ヴオルテエルは今日では滑稽なほど「神學」の神を殺す爲に彼の劍を揮つてゐる。しかし「主なる神」は死ななかつた。同時に又クリストも死ななかつた。神はコンクリイトの壁に苔の生える限り、いつも我々の上に臨んでゐるであらう。ダンテはフランチエスカを地獄に墮した。が、いつかこの女人を炎の中から救つてゐた。一度でも悔い改めたものは――美しい一瞬間を持つたものはいつも「限りなき命」に入つてゐる。感傷主義の神と呼ばれ易いのも恐らくはから云ふ事實の爲であらう。

21　故郷

「豫言者は故郷に入れられず。」――それは或はクリストには第一の十字架だつたかも知れない。彼は畢に全ユダヤを故郷としなければならなかつた。汽車や自動車や汽船や飛行機は今日ではあらゆるクリストに世界中を故郷にしてゐる。勿論又あらゆるクリストは故郷に入れられなかつたのに違ひない。現にポオを入れたものはアメリカではないフランスだつた。

22　詩人

クリストは一本の百合の花を「ソロモンの榮華の極みの時」よりも更に美しいと感じてゐる。(尤も彼の弟子たちの中にも彼ほど百合の花の美しさに恍惚としたものはなかつたのであらう。)しかし弟子たちと話し合ふ時には會話上の禮節を破つても、野蠻なことを言ふのを憚らなかつた。――「凡そ外より人に入るものの人を汚し能はざる事を知

ちざる乎。そは心に入らず、腹に入りて廁に遺す。すなはち食ふ所のもの潔れり。」……

23 ラザロ

クリストはラザロの死を聞いた時に今までにない涙を流した。今までにない――或は今まで見せずにゐた涙を。ラザロの死から生き返つたのはかう云ふ彼の感傷主義の爲である。母のマリアを顧みなかつた彼はなぜラザロの姉妹たち、――マルタやマリアの前に涙を流したのであらう？　この矛盾を理解するものはクリストの、――或はあらゆるクリストの天才的利己主義を理解するものである。

24 カナの饗宴

クリストは女人を愛したものの、女人と交はることを顧みなかつた。それはモハメットの四人の女人たちと交はることを許したのと同じことである。彼等はいづれも一時代を、――或は社會を越えられなかつた。しかしそこには何ものよりも自由を愛する彼の心も動いてゐたことは確かである。後代の超人は犬たちの中に假面をかぶることを必要とした。しかしクリストは假面をかぶることも不自由のうちに數へてゐた。所謂「善惡の彼岸」の詩は勿論彼には明らかだつたであらう。アメリカのクリスト、――ホヰツトマンはやはりこの自由を選んだ一人である。我々は彼の詩の中に度たびクリストを感ずるであらう。クリストは未だに大笑ひをしたまま、踊り子や花束や樂器に滿ちたカナの饗宴を見おろしてゐる。しかし勿論その代りにそこには彼の贖はなければならぬ多少の寂しさはあつたことであらう。

25 天に近い山の上の問答

クリストは高い山の上に彼の前に生まれたクリストたち――モオゼやエリアと話をした。それは惡魔と戰つたのよりも更に意味の深い出來事であらう。彼はその何日か前に彼の弟子たちにイエルサレムへ行き、十字架にかかることを豫言してゐた。彼のモオゼやエリヤと會つたのは彼の或精神的危機に佇んでゐた證據である。彼の顏は「日の如く輝き其衣は白く光」つたのも必しも二人のクリストたちの彼の前に下つた爲ばかりではない。彼は彼の一生の中でも最もこの時は嚴かだつた。彼の傳記作者は彼等の間の問答を記錄に殘してゐまい。しかし彼の投げつけた問は「我等は如何に生くべき乎」である。クリストの一生は短かつたであらう。が、彼はこの時に、――やつと三十歳に及んだ時に彼の一生の總決算をしなければならない苦しみを嘗めてゐた。モオゼはナポレオンも言つたやうに戰略に長じた將軍である。エリアもまたクリストよりも政治的天才に富んでゐたであらう。のみならず今日は昨日ではない。今日ではもう紅海の波も壁のやうに立たなければ、炎の車も天上から來ないのである。クリストは彼等と問答したから、愈彼の見苦しい死の近づいたのを感じずにはゐられなかつ

た。天に近い山の上には氷のやうに澄んだ日の光の中に岩むらの聳えてゐるだけである。しかし深い谷の底には柘榴や無花果も匂つてゐたであらう。そこには又家々の煙もかすかに立ち昇つてゐたかも知れない。クリストも亦恐らくはかう云ふ下界の人生に懷しさを感じずにはゐなかつたであらう。しかし彼の道は嫌でも應でも人氣のない天に向つてゐる。彼の誕生を告げた星は——或は彼を生んだ精靈は彼に平和を與へようとしない。「山を下る時イエス彼等（ペテロ、ヤコブ、その兄弟のヨハネ）に命じて人の子の死より甦るまでは汝等の見し事を人に告ぐべからずと言へり。」——天に近い山の上にクリストの彼に先立つた「大いなる死者たち」と話をしたのは實に彼の日記にだけそつと殘したいと思ふことだつた。

26 幼な兒の如く

クリストの教へた逆説の一つは「我まことに汝等に告げん。若し改まりて幼な兒の如くならずば天國に入ることを得じ」である。この言葉は少しも感傷主義的ではない。クリストはこの言葉の中に彼自身の誰よりも幼な兒に近いことを現してゐる。同時に又精靈の子供だつた彼自身の立ち場を明らかにしてゐる。ゲエテは彼の「タツソオ」の中にやはり精靈の子供だつた彼自身の苦しみを救ひ上げた。「幼な兒の如くあること」は幼稚園時代にかへることである。クリストの言葉に從へば、誰かの保護を受けなければ、人生に堪へないものの外は貧窮の門に入ることは出來ない。そこには又世間智に對する彼の輕蔑も忍びこんでゐる。彼の弟子たちに正直に（幼な兒を前にしたクリストの圖の我々に不快を與へるのは後代の僞善的感傷主義の爲である。）彼の前に立つた幼な兒に驚かない譯には行かなかつたであらう。

27 イエルサレムへ

クリストは一代の預言者になつた。同時に又彼自身の中の預言者は、——或は彼を生んだ聖靈はおのづから彼を飜弄し出した。我々は蠟燭の火に燒かれる蛾の中にも彼を感じるであらう。蛾は唯蛾の一匹に生まれた爲に蠟燭の火に燒かれるのである。クリストも亦蛾と變ることはない。ショウは十字架に懸けられる爲にイエルサレムへ行つたクリストに雷に似た冷笑を與へてゐる。しかしクリストはイエルサレムへ驢馬を驅つてはひる前に彼の十字架を背負つてゐた。それは彼にはどうすることも出來ない運命に近いものだつたであらう。彼はそこでも天才だつたと共にやはり畢に「人の子」だつた。のみならずこの事實は數世紀を重ねた「メシア」と云ふ言葉のクリストを支配してゐたことを教へてゐる。樹の枝を敷いた道の上に「ホザナよ、ホザナよ」の聲に打たれながら、驢馬を走らせて行つたクリストは彼自身だつたと共にあらゆるイスラエルの預言者たちだつた。彼の後に生まれたクリストの一人は遠いロオマの道の上に再生したクリストに「どこへ行く？」と話られたことを傳へてゐる。クリストも亦イエルサレム

へ行かなかつたとすれば、やはり誰か豫言者たちの一人に「どこへ行く？」と詰られたことであらう。

28　イエルサレム

クリストはイエルサレムへはひつた後、彼の最後の戰ひをした。それは水々しさを缺いてゐたものの、何か烈しさに滿ちたものである。彼は道ばひの無果花を呪つた。しかもそれは無果花の彼の豫期を裏切つて一つも實をつけてゐない爲だつた。あらゆるものを慈んだ彼もここでは半ばヒステリツクに彼の破壞力を揮つてゐる。

「カイゼルのものはカイゼルに返せ。」

それはもう情熱に燃えた青年クリストの言葉ではない。彼に復讐し出した人生に對する（彼は勿論人生よりも天國を重んじた詩人だつた。）老成人クリストの言葉である。そこに潜んでゐるものは必しも彼の世間智ばかりではない。彼はモオゼの昔以來、少しも變らない人間愚に愛想を盡かしてゐたことであらう。が、彼の苛立たしさは彼にエホバの「殿に入りてその中にをる賣買する者を殿より逐出し、兌銀者の案、鴿を賣者の椅子」を倒させてゐる。

「この殿も今に壞れてしまふぞ。」

或女人はかう云ふ彼の爲に彼の額へ香油を注いだりした。クリストは彼の弟子たちにこの女人を咎めないことを命じた。それから――十字架と向かひ合つたクリストの氣もちは彼を理解しない彼等に對する、優しい言葉の中に忍びこんでゐる。彼は香油を匂はせたまま、（それは土埃りにまみれ勝ちな彼には珍らしい出來事の一つに違ひなかつた。）靜かに彼等に話しかけた。

「この女人はわたしを葬る爲にわたしに香油を注いだのだ。わたしはいつもお前たちと一しよにゐることの出來るものではない。」

ゲツセマネの橄欖はゴルゴタの十字架よりも悲壯である。クリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、――彼自身の中の精靈とも戰はうとした。ゴルゴタの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。彼はこの事實を知り悉してゐた。が、彼の弟子たちは、――ペテロさへ彼の心もちを理解することは出來なかつた。クリストの祈りは今日でも我々に迫る力を持つてゐる。――

「わが父よ、若し出來るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすつて下さい。」

あらゆるクリストは人氣のない夜中に必ずから祈つてゐる。同時に又あらゆるクリストの弟子たちは「いたく憂て死ぬばかり」な彼の心もちを理解せずに橄欖の下に眠つてゐる。………

29　ユダ

後代はいつかユダの上にも惡の圓光を輝かせてゐる。しかしユダは必しも十二人の弟子たちの中でも特に惡かつた訣ではない。ペテロ

さへ鷄鳥の聲を舉げる度に三度クリストを知らないと言つてゐる。ユダのクリストを賣つたのはやはり今日の政治家たちの彼等の首領を賣るのと同じことだつたであらう。パピニも亦ユダのクリストを賣つたのを大きい謎に數へてゐる。が、クリストは明らかに誰にでも賣られる危機に立つてゐた。祭司の長たちはユダの外にも何人かのユダを數へてゐた筈である。唯ユダはこの道具になるいろいろの條件を具へてゐた。勿論それ等の條件の外に偶然も加はつてゐたことであらう。後代はクリストを「神の子」にした。それは又同時にユダ自身の中に惡魔を發見することになつたのである。しかしユダはクリストを賣つた後、白楊の木に縊死してしまつた。彼のクリストの弟子だつたことは――神の聲を聞いたものだつたことは或はそこにも見られるかも知れない。ユダは誰よりも彼自身を憎んだ。十字架に懸つたクリストも勿論彼を責めたであらう。しかし彼を利用した祭司の長たちの冷笑もやはり彼を憤らせたであらう。

「お前のしたいことをはたすが善い。」

「かう云ふユダに對するクリストの言葉は輕蔑と憐憫とに溢れてゐる。「人の子」クリストは彼自身の中にも或ユダを感じてゐたかも知れない。しかしユダは不幸にもクリストのアイロニイを理解しなかつた。

30 ピラト

ピラトはクリストの一生には唯偶然に現れたものである。彼は畢に代名詞に過ぎない。後代も亦この官吏に傳說的色彩を與へてゐる。しかしアナトオル・フランスだけはかう云ふ色彩に欺かれなかつた。

31 クリストよりもバラバを

クリストよりもバラバを――それは今日でも同じことである。バラバは叛逆を企てたであらう。同時に又人々を殺したであらう。しかし彼等はおのづから彼の所業を理解してゐる。ニイチエは後代のバラバたちを街頭の犬に比へたりした。彼等は勿論バラバの所業に憎しみや怒りを感じてゐたであらう。が、クリストの所業には、――恐らくは何も感じなかつたであらう。若し何か感じてゐたとすれば、それは彼等の社會的に感じなければならぬと思つたものである。彼等の精神的奴隷たちは、――肉體だけ逞しい兵卒たちはクリストに荊の冠をかむらせ、紫の袍をまとはせた上、「ユダヤの王安かれ」と叫んだりした。クリストの悲劇はかう云ふ喜劇のただ中にあるだけに見じめである。クリストは正に精神的にユダヤの王だつたのに違ひない。が、天才を信じない犬たちは――いや、天才を發見することは手易いと信じてゐる犬たちはユダヤの王の名のもとに眞のユダヤの王を嘲つてゐる。「方伯のいと奇しとするまでにイエス一言も答へせざりき。」――クリストは傳記作者の記した通り、彼等の訊問や嘲笑には何の答へもしなかつたであらう。のみならず何の答へをすることも出來なかつたことは確かであ

る。しかしバラバは頭を擧げて何ごとも明らかに答へたであらう。バラバは唯彼の敵に叛逆してゐる。が、クリストは彼自身に、――彼自身の中のマリヤに叛逆してゐる。それはバラバの叛逆よりも更に根本的な叛逆だつた。同時に又「人間的な、餘りに人間的な」叛逆だつた。

32 ゴルゴタ

十字架の上のクリストは畢に「人の子」に外ならなかつた。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる？」

勿論英雄崇拜者たちは彼の言葉を冷笑するであらう。況や聖靈の子供たちでないものは唯彼の言葉の中に「自業自得」を見出すだけである。「エリ、エリ、ラマサバクタニ」は事實上クリストの悲鳴に過ぎない。しかしクリストはこの悲鳴の爲に一層我々に近づいたのである。のみならず彼の一生の悲劇を一層現實的に教へてくれたのである。

33 ピエタ

クリストの母、年をとつたマリアはクリストの死骸の前に歎いてゐる。――かう云ふ圖の「ピエタ」と呼ばれるのは必しも感傷主義的と言ふことは出來ない。唯ピエタを描かうとする畫家たちはマリア一人だけを描かなければならぬ。

31 クリストの友だち

クリストは十二人の弟子たちを持つてゐた。が、一人も友だちは持たずにゐた。若し一人でも持つてゐたとすれば、それはアリマタヤのヨセフである。「日暮るる時貴き議員なるアリマタヤのヨセフと云へる者來れり。この人は神の國を望めるものなり。彼ははばからずピラトに往きてイエスの屍を乞ひたり。」――マタイよりも古いと傳へられるマコは彼のクリストの傳記の中にかう云ふ意味の深い一節を殘した。この一節はクリストの弟子たちを「これに從ひつかへしものどもなり」と云ふ言葉と全然趣を異にしてゐる。ヨセフは恐らくはクリストよりも更に世間智に富んだクリストだつたであらう。彼は「はばからずピラトに往きイエスの屍を乞」つたことはクリストに對する彼の同情のどの位深かつたかを示してゐる。教養を積んだ議員のヨセフはこの時には率直そのものだつた。後代はピラトやユダよりもはるかに彼には冷淡である。しかし彼は十二人の弟子たちよりも或は彼を知つてゐたであらう。ヨハネの首を皿にのせたものは殘酷にも美しいサロメである。が、クリストは命を終つた後、彼を葬る人々のうちにアリマタヤのヨセフを數へてゐた。彼はそこにヨハネよりもまだしも幸福を見出してゐる。ヨセフも亦議員にならなかつたとしたらば、――それはあらゆる「若し……ならば」のやうに畢竟問はないでも善いとこかも知れない。けれども彼は無花果の下や象嵌をした杯の前に時々彼の友だちのクリストを思ひ出してゐたことであらう。

35 復活

ルナンはクリストの復活を見たのをマグダレナのマリアの想像力の爲にした。想像力の爲に、――しかし彼女の想像力に飛躍を與へたものはクリストである。彼女の子供を失つた母は度たび彼の復活を――彼の何かに生まれ變つたのを見てゐる。彼は或は大名になつたり、或は池の上の睡蓮になつたり、或は又蓮華になつたりした。けれどもクリストはマリアの外にも死後の彼自身を示してゐる。この事實はクリストを愛した人々のどの位多かつたかを現すものであらう。彼は三日の後に復活した。が、肉體を失つた彼の世界中を動かすには更に長い年月を必要とした。その爲に最も力のあつたのはクリストの天才を全身に感じたジヤアナリストのパウロである。クリストを十字架にかけた彼等は何世紀かの流れ去るのにつれ、シエクスピイアの復活を認めるやうにクリストの復活を認め出した。が、死後のクリストも流轉を閲したことは確かである。あらゆるものを支配する流行はやはりクリストも支配して行つた。クララの愛したクリストはパスカルの尊んだクリストではない。が、クリストの復活した後、犬たちの彼を偶像とすることは、――その又クリストの名のもとに横暴を振ふことは變らなかつた。クリストの後に生まれたクリストたちの彼の敵になつたのはこの爲である。しかし彼等も同じやうにダマスカスへ向ふ途の上に必ず彼等の敵の中に聖靈を見ずにはゐられなかつた。

「サウロよ、サウロよ、何の爲にわたしを苦しめるのか？　棘のある鞭を蹴ることは決して手易いものではない。」

我々は唯茫々とした人生の中に佇んでゐる。我々に平和を與へるものは眠りの外にある訣はない。あらゆる自然主義者は外科醫のやうに殘酷にこの事實を解剖してゐる。しかし聖靈の子供たちはいつもかう云ふ人生の上に何か美しいものを殘して行つた。何か「永遠に超えようとするもの」を。

36 クリストの一生

勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも父の聖靈の支配を受けてゐた。彼の十字架の上の悲劇は實にそこに存してゐる。彼の後に生まれたクリストたちの一人、――ゲエテは「徐ろに老いるよりもさつさと地獄へ行きたい」と願つたりした。が、徐ろに老いて行つた上、ストリンドベリイの言つたやうに晩年には神祕主義者になつたりした。聖靈はこの詩人の中にマリアと吊り合ひを取つて住まつてゐる。彼の「大いなる異教徒」の名は必しも當つてゐないことはない。彼は實に人生の上にはクリストよりも更に大きかつた。況や他のクリストたちよりも大きかつたことは勿論である。彼の誕生を知らせる星はクリストの誕生を知らせる星よりも圓まるとかがやいてゐたことであらう。しかし我我のゲエテを愛するのはマリアの子供だつた爲ではない。マリアの子

供たちは麥畠の中や長椅子の上にも充ち滿ちてゐる。いや、兵營や工場や監獄の中にも多いことであらう。我々のゲエテを愛するのは唯聖靈の子供だつた爲である。我々は我々の一生の中にいつかクリストと一しよにゐるであらう。ゲエテも亦彼の詩の中に度たびクリストの髯を拔いてゐる。クリストの一生は見じめだつた。が、彼の後に生まれた聖靈の子供たちの一生を象徵してゐた。(ゲエテさへも實はこの例に洩れない。)クリスト教は或は滅びるであらう。少くとも絶えず變化してゐる。けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすであらう。それは天上から地上へ登る爲に無殘にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまゝ。………

37 東方の人

ニイチエは宗教を「衞生學」と呼んだ。それは宗教ばかりではない。道德や經濟も「衞生學」である。それ等は我々におのづから死ぬまで健康を保たせるであらう。「東方の人」はこの「衞生學」を大抵涅槃の上に立てようとした。老子は時々無何有の鄕に佛陀と挨拶をかはせてゐる。しかし我々は皮膚の色のやうにはつきりと東西を分つてゐない。クリストの、——或はクリストたちの一生の我々を動かすのはこの爲である。「古來英雄の士、悉く山阿に歸す」の歌はいつも我々に傳はりつづけた。が、「天國は近づけり」の聲もやはり我々を立たせずにはゐない。老子はそこに年少の孔子と、——或は支那のクリストと問答してゐる。野蠻な人生はクリストたちをいつも多少は苦しませるであらう。太平の艸木となることを願つた「東方の人」たちもこの例に洩れない。クリストは「狐は穴あり。空の鳥は巢あり。然れども人の子は枕する所なし」と言つた。彼の言葉は恐らくは彼自身も意識しなかつた、恐しい事實を孕んでゐる。我々は狐や鳥になる外は容易に塒の見つかるものではない。(昭和二・七・十)

編輯だより

◇經濟不況、生活難はまだ可なり深い所まで行くと思ゐます。この暑中にもそれぞれ戰ひとれるだけはとつておかることが必要です。どの場合にも用意のある人にはかなはないから。

◇我誌の讀者は希くは質實であれ、剛健であれ。銀ブラの珈琲や麥酒の一杯は時にとつて多大の興趣をそそるが、チップに壹圓を奮發する虚榮とはあくまで戰つて欲しい。日本週遊も惡くはないが、無駄錢をつかつたり、物的享樂に浮身をやつして自然の恩寵を裏切るなかれ。いつの場合でも自分は一國の大黒柱となり、一家の溫良なる中堅であることを忘れぬやうに。

◇酒杜の巷より林間の默想へ、淺草、千日前の夕すずみより海濱の洗禮へ！

◇立法府であばれ法廷に引ずられて、司法政務官を彈劾するものあり。此徒數旬前までは司法權の獨立を絶叫したりき。出兵問題の次に何を豫想すべきか？　恐ろしき重大な仕返しが來らねばよいが。臺灣總督問題のゴタゴタ。農林相の血みどろの爭鬪、川崎造船のあの始末、滿鐵總裁？　地方長官の更迭、おごる平家は久しからず。大抱負、大經綸あればあるほど議論にぢみちに歩くべきだ。天下の大事を斷行するに斷じて陣笠どもに遠慮する勿れ。

◇「改造」で創作を懸賞募集します。何にしろ我誌では始めてのこととて應募者は多い見込だが、別項の規約を嚴守して戴きたい。投稿は一切返送しませぬから此事もよく御含みおき下さい。でなくばお互迷惑が多いから。

◇原稿を讀んでくれと本社山本へ宛て郵送さるる向が多い。しかし山本は今後原稿は讀まぬことにしましたから以後「出版編輯部」とか「改造編輯部」とか宛名を明記して送つて下さい。

◇八月の講演會では本社員はそれぞれ各地方に赴く。本誌の讀者とも各地でお目にかかれることをたのしんでいます。

◇社會科學八月號「理論鬪爭批判」は七月廿八日發賣、今回は左右兩翼を全部蒐集大成せる自信あるものだ。大衆運動に關心するものの必讀無二の文獻です。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	貳錢
半ヶ年	參圓	郵稅不要
壹ヶ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるるを最も便利とす

昭和二年七月十八日　印刷納本
昭和二年八月一日　發行

（價五拾錢）

東京市麴町區内幸町一ノ三幸ビルヂング
編輯兼發行兼印刷人　山本三生
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京麴町區内幸町一ノ三幸ビルヂング一階　改造社
振替東京八四〇二
電話銀座（四五五八
營業部　五〇四六
編輯部　一七三三

社會科學

七月特輯

理論鬪爭批判

第參卷・第參號

（年四回發行）

定價壹圓五拾錢

送料四錢

今や、我が理論鬪爭は實踐と理論との統一――これを中心として極度の展開を遂げつゝある。左翼右翼、折衷派と互に鎬を削り混沌として歸趨なき有樣である。だが一般大衆はこれより何を學ぶべきであるか？　編者は本誌のこの試みにより正確なる認識と果敢なる判斷を切に學徒諸君に俟つ。

執筆者

佐野學　鈴木茂三郎　河野密　坂本勝　西山武一　淺野晃

西雅雄　山川均　淡德三郎　大森義太郎　猪俣津南雄

稻村隆一　田所輝明　北浦千太郎　荒畑寒村　上田茂樹

發行所　改造社

東京麹町内幸町　幸ビルディング（振替東京八四〇二）

RICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
FFICE: KAIZOSHA, UCHISAIWAI-CHO COGIMACHI-KU, TOKIO.